小說下巻



近世文藝叢書 第五





近世文藝叢書第五 小說三

緖言

一、本編も亦元祿以後における浮世草紙中の名作九編を收む。

一、女大名丹前能八卷　元祿十五年の板行なり。作者西澤氏次郎冠者とあるは與四と同人にて、その一風なること疑ひなし。同人作『御前義經記』の姉妹作ともいふべきもの。

一、本朝藤陰比事七卷　改題桃とあるを見れば、元は『桃陰比事』といひしにや。支那小說の『棠陰比事』に擬したる作にて、西鶴の『櫻陰比事』と共に、公事裁許の話を集めたるもの。作者詳ならず。又板行年月も記さず。されど挿畫の畫風より推すに、寶永正德頃の板なるべし。

一、千尋日本織六卷　團水の序には、作者は東武の神秀法師とあり。

又書肆の跋文には、花洛の隱士湖十高散人集むる六卷とあり。いづれに從ふべきにや。但し兩者倶に其の傳未だ詳ならず。書中に載せたるは『伽婢子』に似たる奇談にして、東國に關する事特に多ければ、或は團水の言を採るべきか。寶永四年の板行なり。

一、近代長者鏡五卷　作者落月堂操巵の傳詳ならず。正德四年の板行なり。驕奢の爲に、いろ〳〵の末路を蹈む長者の話五條を収めたり。

一、難波みやげ五卷　寶永七年板。作者詳ならず『色三味線』風の草紙なり。

一、美景蒔繪松五卷　寶永四年夏の作にして同五年の板なり。作者市中軒とあるは、並木宗輔の市中庵と同號なりや否や。伊勢古市艷女(あんにや)の風俗を寫したるものなり。寶永二年より上方にて大神宮お蔭參り盛に流行せるが、恐らく其の時の產物を後に板行した

るものなるべし。

一、風流傾性野群談五巻　傾性野は撥ねてけいせんやと讀ましめたる所、全く近松の『國性爺合戰』をもぢりたるものなり。即ち竹本座における『國性爺』の興行は、正徳五年十一月より三年越二十七ヶ月續きて大評判となりたることは人の知る所なり。そを當込みて、恰も三年目の享保二年にこれを出したるものならんか。作者は八文字屋自笑なり。

一、傾城太々神樂六巻　寶永二年板。作者詳ならず。但し書中俳仙堂件自の事あり。俳仙堂は作者自身の名にや。何れにしても俳諧者流の作なるべし。

一、風流源氏物語六巻　都の錦の作にして元祿十六年の板なり。『源氏物語』を俗語もて綴りたるものにて、此編には僅に桐壺、箒木の二巻を収めたるのみ。巻末に空蟬、夕顔、若紫等六巻を跡より板行

する旨吹聴したれども、恐らく完成に至らざりしなるべし。源氏を俗語に譯したるものにては、柳亭種彦の『田舍源氏』最も有名なれども、而も元祿の時已に此の書ありしは珍とすべし。或は種彦の『田舍源氏』も、此の書より思ひ付きたるものなりやも未だ知るべからず。

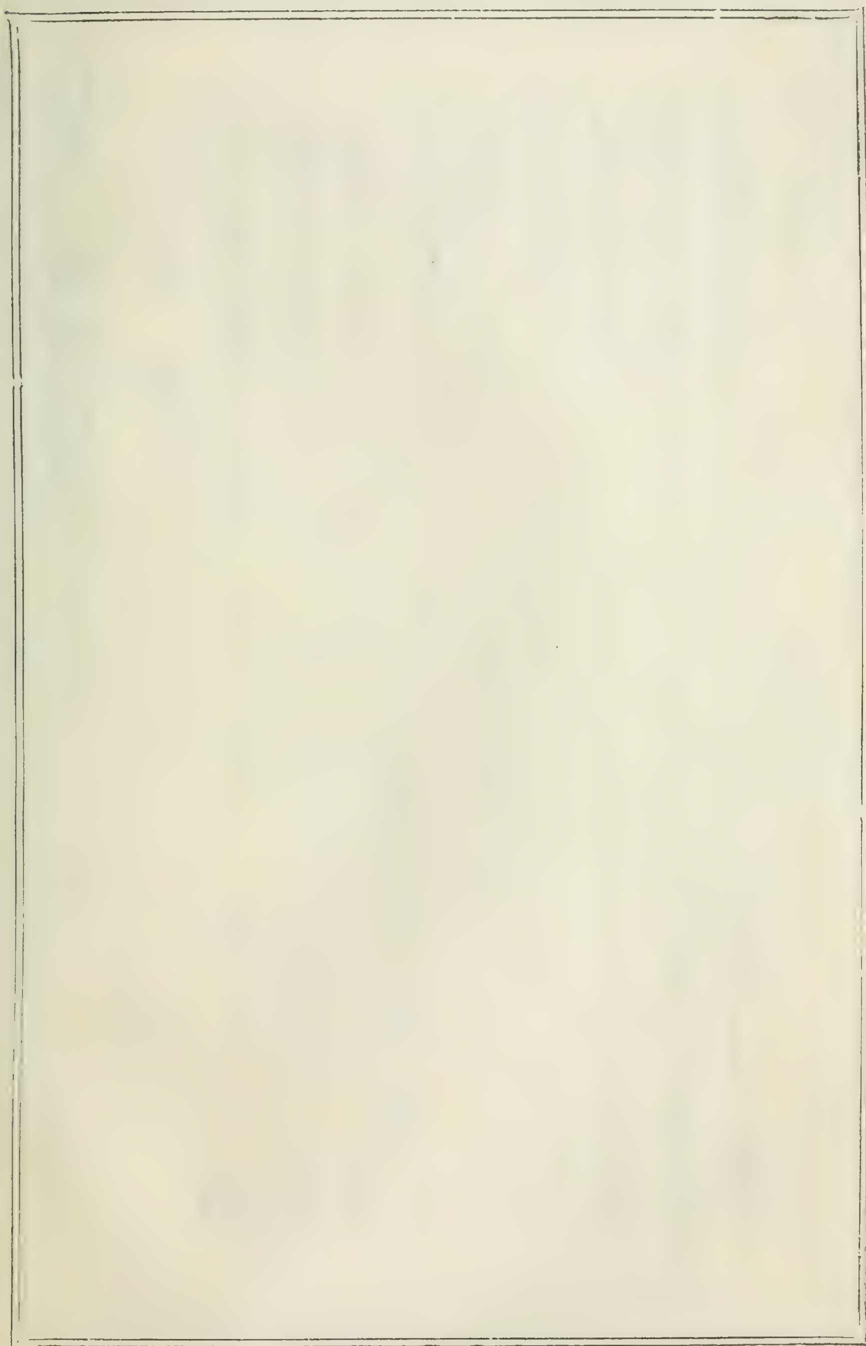
明治四十四年五月

水谷不倒識

近世文藝叢書第五　小説三

目次

目次終



近世文藝叢書第五

小說 三

女大名丹前能目錄

初卷

六之卷

七之卷

八之卷

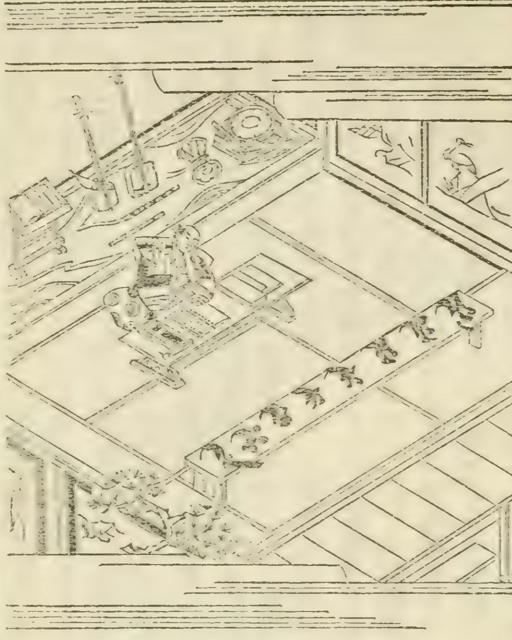
目錄終

女大名丹前能初卷

(序)殿樣の物好

罷出たる者は、去お大名樣の奥方に召つかはるゝ次郎冠者でござる、兄太郎冠者は殿樣方に勤め、晝夜隙なき身なれど、我と樂む寢やのとぼし火、反古のうらに千鳥の足跡、入亂たる言の葉を書ちらし、一名を御前義經記と題し、あづさにちりばめ世の笑草となしぬ、或つれ〴〵、其一部を御前にて讀み奉り、中々御機嫌よろしく、諸役御免の蒙り、世を宇治山の片里に草庵のむすび、山吹の盛を詠、一生遊樂の身とは成ぬ、御覽の通り、私は未長袴を着し、夕べ〳〵もいとまなく奥方の御用繁く、目の正月のみにて、いつを今日と思ふ事なし、近日殿樣奥へおなりのよし、御前樣をはじめ、付々の者ます〳〵の悅御尤なり、然れ共心得ぬ事を仰出された、子細は、いつも御近所衆斗り召つれらるゝ所に、いかゞ思召されてか、お局方腰元衆に武士の役目を仰付られ、御庭前にて、其ぎやうれつを御見物なされんとの御書付、則私に觸きかせよとの御

意もだしがたく、仰出さるゝ趣一々承り候へ、比は春なれや、四方の霞うちはらしたる月山、柳の御門ひらくより、八重櫻對のはさん箱、お腰元のくれはあやは、大鳥毛小鳥毛、びんしやんとふりつけたるお局、臺笠立笠きぬたさごろも、お歩行は三通三人ならび、此役目の女中、見立により此方より指圖を申さん、御小姓右近左近殿替り、此程召おかれし立野松木、右両



人の腰元衆、御近所なれば不作法あるまじきとの御事、別して奥様よりの仰、おさへには茶道の林齋、おとぎ役には此次郎冠者、其外御用あるべき人相應の見つくろい、よろしくはからへとの御事也、誠に人間の高下さまゞゝ成といへ共、大名たる御身は、いかなるすへ葉のしづくこりかたまりし事ぞ、何とぞ拙者も工夫をめぐらし、殿様御前様の御機嫌に入、立身すべきは此度にきはまりぬ、折節こよひは非番なり、したくに歸り思案のまゆ、分別袋の口をひらけば、丹前能といふ思ひ付、是吉相の趣向、此巻の發旦、いづれも其分こゝろへ候へ、相こゝろへられ候へや、

(凡例)御前様の笑顔

殿様おなり、はあ、しい、といふ聲の下より、御迎ひにはお局方、小腰元の篠原淺路三香野、御小姓富原折之丞、龍田あやの助、森山新作、上下の折めたゞしく、一様の振袖、前髪左右にこぼれかゝるは、しだれ柳の春風にもまるゝ風情、花やかなる男女の立居、梅と櫻にひとし、御庭前の松の並木に中腰をかゞめ、頭を地に付畏ぬ、程なく先手の女中、紫ぼうし兵庫わげのかんざし、お道具持は一やうにわきへめさせ、くろ羽二重

御紋は非げたにけんかたばみ、紅裏おもてに五六寸も吹かへさせ、大紋の大小なが〳〵しきを、獨々さしこなしたるもやさし、わざとすそ小みじかく、島じゆすのもゝひき素足にこんがう、歩行侍のうつり、八丈島の長羽織、二尺八寸の振袖、茶字の裏付、もゝ立とつて目八分、大がたといふ物にふりかけ、につこり共せぬ顔、誠によに有遊興、何か此上の樂あらん、御乘物の戸ひらけば、殿樣御機嫌と打見へ、御腰元の立野松木を左右にぞなぶらせ給ひ、迎のものに御手をさしのべ、太儀々々と大やうにうなづかせ給ふ、次郎冠者跡より腰元の袖つまひいて、先立て御前樣よりの仰、いかに殿の御意重ければとて、道すがらのたわむれ、ちと遠慮あるべしと目でおしゆれば、尤とうなづくうち御簾中間ちかくなれば、供廻りの女中お道具つきたて畏る、紅葉と云女のわらは御手にすがり、お成間に御供申せば、奥樣の御機嫌また有まじ、島臺いさぎよくかざり立たる松竹、長柄のてうしこん〳〵の盃、あなたこなたにめぐれば、茶道の林齋罷出、一調子はりあげ、千秋萬歳の千箱の玉を奉ると、謠ひ納る中塲へ、德若德才、大きなる臺に、箱八つならべたるを御前にすへ置ぬ、跡より次郎冠者、子細らしき顔して御目通に畏る、殿夫婦口を揃させ給ひ、是はなんじやと仰けるに、さん候今日の御馳走何がなと存、此次郎冠者めがない智恵を出し、御慰の爲にと思ひつめたる箱の内、一ッ〳〵のさやをはづせば、烏帽子かづら八ッならべたり、是はきやうがる物樣子はと尋させ給ふ、さん候御庭前はもろこしの八景をかたどり、江天の暮雪より漁村の夕照まで、いづれにおろかなく、作立たる並木の松、吹もらさぬ妹背の御中、千代萬代までの御祝儀に、御能を仕らんとぞんずれども、いにしへより傳たるは古し、何とぞ氣を替謠にことよせんと、此比内工夫仕、狂言能と申を思ひ付、お腰元衆を招き、其役々をわり付、笛太鼓つゞみ、晝夜に隙なく稽古を仕すまし、自ら丹前能と名付下仕組仕るを、見る人是近年のおなぐさみ、いしやうにかけて見たいなどゝ申、猶拍子に乘て大方組立ましてござります、善惡はかくべつ、かわつた思ひ付を先一番御しやう覽もやと、でかした顔なるもおかし、殿かたほにゑみして、己が智恵いはねど知た事、みる迄もなしと仰ければ、御前樣の御とりなし、尤ながら御

馳走にと心の竹、わつて中を見ぬはすげなし、是もしばしの遊興早々始よとの御意、次郎冠者少々ぶきやう顔、いかに旦那なればとてあらけなき御詞、もし御心にいらばいか成御ほうびをか給はらん、いふ迄もなし己が心まかせ、ありがたき仰を承るものかな、其段は御前様の御指圖を頼奉るといふ程こそあれ、扨今日の御能は、御庭前の八景に事寄せ、次郎冠者めが思ひ付を八段につゞり、一段々々の様子は、一部々々に其目録をみさいに印ますれば、おことはり申上るに不ㇾ及、何よしあしの言の葉も、所によりて替るは當世のならひ、首尾よくしおふせたらば、時々お聲を賴上ます、是々腰元衆、役替でござる、奴髭とつておいとま候へ、御太儀々々々、

時に今月今日御祝儀

是より丹前能の讀初　次郎冠者作本名

西澤氏與志編

（一）妻戀舟女高砂

戀路の種をまかんと、歌にかこつる玉津島、貴船や三輪の明神は、夫婦妹脊のかたらひを、守らんとのちかひに事よせ、姥腰元をそゝなかし、たらちめにかべ訴訟、心まかせと有嬉しさ、思ひ立日を吉日、態と手舟も目立ぬやうにと、彼是よしなやおもへば戀のしがらみと成、そも〳〵是は九州の何がし、自がそだてまいらせたる御方にて候、扨も此君そだちはつくしのはてなれども、御心やさしく、八歳の比より今十四歳の春迄和歌の道に心を寄られ、古今萬葉伊勢物語、さごろも源氏八代集、あまねく歌をよませ給ふといへ共、御心にかなふ歌のあらざりき、父母御てうあひの餘り、我々に御供申都に登、歌の道しるべせよとの仰にまかせ、九重の空定なく只今出舟なされ候、旅衣はる〳〵の渡海のけしき、けふ思ひ立浦の浪風しづか成けるも、春の追風見し山もはるか成跡に見殘し、すぐにみる山の姿もよこおれ、なみ木の松あなたこなたに振分髪、備後の福山備前のうしまど、播州の室津、此湊に船を繋ぎ、色町ごろうじませと申せば、わけもない事いふぞかし、女が女を見て何のたのしみかあらん、姬路も同じ國ならび、爰を急げとろ拍子の音しづかに、高砂の浦に舟のいかりをおろしぬ、誠や此高砂の松を相生と云事、ふかき妹脊の名木也とて、見ぬもろこし迄の戀ばなし、所の者の來りなばくは

しく様子を尋候へ、心得申て候、里人を相まつ所に、草かるわつぱ牛に千草數多おわせ、己れも友にのりのつな、辰巳あがりの聲おかしく、國歌うたふて來りぬ、幸と立寄是々そなた、高砂の松とはいづれの木を申ぞ、しろしめされなばおしゑ給へ、さん候あれに見へたる二本の松、玉垣きよらにゆいまはし、落葉をひろふ木の本を高砂の松とこそ申候、高砂住の江に相生といへる名有、當所と住吉とはよほど國を隔てつるを、何とて相生とは申ぞ、仰のごとく古今の序に、高砂住の江の松も相生のごとしといへり、男は遠き住吉より通ひ、女は當所に住てふかき妹脊をむすぶと也、戀は遠きが花の香にて、山川萬里を隔る共、たがひにかよふ心づかいの、妹脊の道は遠かるまじ、松は非情のものだにも、相生の木とて今に其名をのこすとかや、まして生有人として、戀しらぬ身こそ世にすめる甲斐もなし、各方も若草の盛りにちかきよそほひ、あなたの玉章こなたの文、戀慕かぎりなく思ひの淵にしづむ男、ゆび折にかぞへがたし、され共色深く、親のいさめるつまもち顏にもあらず、思ひを歌道に事よせ、色道修行と見るめはちがふまじきといわれ、此娘面に紅葉をちらし、思事の色外とはさすがに都近し、深き思ひをさとられしは、我戀のさきおれならむ、姥こひ國へもどらんと、元の舟にのり給ふを、草かりとゞめまいらせ、いやとよ左にあらず、一期つれそふ妻なればとて、はる〴〵の海上をしのぎ此浦迄來り、我詞のつれなきをうらみ歸らんなどゝは、それこそおんの田舍心、所こそあれ相生の松を便りに妻定、此所の習にて戀する人につれなくあたれば、尉と姥との罰當るぞかし、さればこそ十二より以上の男女、戀しらぬもの獨もなし、夫ゆゑ此所を妹脊の里といへり、つゝまず咄し給はゞ、身だめあしくはせまじと、此道かしこげに語る詞のはしにとりつき、誠は色このむ女ぞかし、我思ふつま有るべき方へ敎へ給へと、下部をはぢてさゝやき給ひぬ、御心指のいとほしければ、いかにも男色の里をおしゑ申さん、今夜は此湊にとまり、明なばくがぢを行給へ、殊に名所古跡多く、海づら見はらし心の樂有べし、それより難波の濱に宿求め、物見に事よせつまもとめ給へ、今日よりして形をちごに替、おもふ男にあたつて見れば、心底もおよそには知るぞかし、よしなき戀物語にあれ御

覽せよ、日もはや西にかたぶき給ひぬ、もはやおいとま申さと夕浪の、みぎはなる海士の小舟に打乘、きしの姬松幾代へぬらんと、神風にまぎれおきの方に出けるとなり、

（二）男色生田敦盛

里人の情かと思へば、いづれあやしき神の御舟、我みても久敷成ぬ住吉の、靈驗あらた成けるを悅、是より直に詣、久しき代々の神かぐら參らすなど本意なれど、神託にまかせ、一先難波の方にいそがん、幸なればとて尾上の住吉に參り、よるの鞁の拍子すゞしめ給へみやつこ立さ、心に餘る御きたう、さこそ神慮も悅給はん、其夜はそこに夢むすび、あけを待間のとけしなく、東の方もしら〳〵しき比、めのとのたそかれをまねき、神勅なればとて女の姿をさらりとやめ、今よりしては男色とかはる風俗、態ちごのごとく髮いわせ、供につれし佐内が下ばかま、大小も借てたも れ、替りは望みにまかせんと、近比むりな御所望なれ共、主命なれば是非なく佐内は丸腰になつて、腰のまはりさぐつて見る顏などおかし、まんまと若衆の形にかはればとて、名も千世之助とあらため、姿見にうつし、なんと似たかとの給ふ身ぶり、猶照まさる御すがた、此儘にしておきたひ物と、下々の者いづれか見とれざるはなかりき、態と籠にめして高砂を出る時は五つの比、皆の者かうした事を沙汰するな覺られなと、物一つ二つの給ふうち、はや明石の町の出はなれ、ほの〴〵とよまれし歌人の宮癸なり、是より磯部を右の方に見なし、左の山はと尋給へば、一の谷鐵かいが峯、山のはなに出ばりし大木こそ、鐘かけ松梶原がゑびらの梅是なり、あれ旅人のおがんでいらるゝが、平家の君達敦盛の石塔なりけると敎ゆる、籠の者まで〳〵、此石塔の前乘うちするは勿體なしと、下馬してひざまづき、一蓮托生と御ゑかうあるはやさし、石塔にむかひ念比に拜むを、旅人かと見れば左もなく、六十餘のおのこ、時ならぬ髩かと見れば髮かたち髭左右に分り、破れ紙子に朱ざやの大小、懷より掛物出し、石塔にかくるを見れば敦盛の像なり、前に線香をくゆらせ、眼をとぢて座禪をすれば、人有をしらぬはことはり、此繪に向いあら淚をながし、口惜や我色にそみてより此方、男色に迷ひ、人の若衆をむたひにね取、ねんじや顏する男にもいやといふ字を聞ず、

思ひ詰たる若衆の念力、通さぬといふ事なし、元來繪書事をたのしみ、一年むさしに下り、繪師菱川が門弟と成、好て姿繪を書く事數十年をへたり、あまたの形を書內、業平あづまくだりの面影、我身ながら一生の手柄此繪にかぎるべしと、或日師に見せければ、思はずも小手を打、かく迄筆もはたらく物か、我も是程にはと悅のあまり、此掛物を給はりぬ、嬉しさのまゝ屋形に歸り、淋敷寢やの友には此繪を詠、世にかゝる男色も有ものか、芙蓉のまなじり丹花の口びる、己とうごく風情、師も敦盛とやらんは、美くしきと斗り聞をよばれ、誠は世に有美童のすがたを、かきとめ給ふにうたがいなしと、よしなき此繪に心をまよはし、それより諸國を廻り、此圖にあはん君もがな、我一生のおもひ出、死でのほまれに、打とけ髪のみだれ心、やるせなく／＼東の山、北國の雪ふみわけ、南の島々西のはて尋ねぬといふ所もなし、心を盡す甲斐なく、かゝる姿は夢現にも見へず、さりとは衆道みやうがに盡たる此身、年のひねたるにしたがい、ぎやうぶ心のままならねば、所詮敦盛の石塔に夢結び、しばしのうたたねになり共面影を見、死出の土產に腹切てしなんと、思ひつめたる老の恥、此所に三日三夜さらし、食をとまつて死をまてど、命つれなく又一念みたざれば、我と我身が我まゝならず、今宵の夜半が限の命、望かなはずば此繪を切て最後をいそがん、情なきは此君と恥を捨てなげく、世にすめば浮事をのみ聞ものかな、品こそかはれ同じ戀、あなたは男色こなたは妻戀舟の、よるべ定ぬかり枕、いつを今日とかおもはん、暫此所に足をとゞめ樣子を尋べけれど、こなたも戀を見立る身、かなはぬといふ戀ばなし、聞たがつていらぬもの、お籠をいそぎやとすぐに通る、海士の小童が指さして云は、似る人こそあれ、今とをる若衆は、此比石塔にかけし敦盛のおもざしに其儘、たゞし幽靈にてはなきかといへば、今一人がいふは、幽靈はひたひに紙あて、白小袖を着し杖ついてあるくものなり、あのごとく成小袖をき、人あまたつれ歩く幽靈は見たる事なしと、互に是をせりあふ聲、老人聞付眼をひらき、何と此繪に似たる少人のとをり給ふと申か、神ならぬ身とて知らざる事のくやしさ、程はあるまじきに跡より追付奉り、一目見て日比の思ひをはらさんと、よろぼひながら行もせつなし、

（三）柴舟現在兼平

兵庫の湊來迎寺に籠立させ、寺中にさをり、淸盛松王の像など念比に拜、暫爰に休給ふ、老人やう〳〵此所迄追付、はるかこなたより御姿を詠、誠に敦盛のよそほひにかく迄も似たるものか、時節は爰と下部に近付樣子を詩しかど、鼻聲してそこ〳〵におしゆる、大かた聞かためて後、ゑんばなに腰かけ、また御下向のすがたを見んと待間とけしなく、此間のだんじきゆへにや五躰よはり、いつとなくうつら〳〵と夢をむすびぬ、供の者見付、是はまさしく一の谷にて座禪したる亂人、何ゆゑ爰には來りぬ、きやつがつらつき只者にあらず、此海道の盜人か、又雲助といふにてぞあらん、最前きやつがもちたる掛繪を、千世さま御覽被レ成度由、道すがら仰られしが、若懷中などせばひそかにうばい取、我々が御馳走に指上んとさり〳〵の評定、中にも佐内が智惠を出し、枕箱より金子三十兩出し、外に文一通したゝめ老人が首に打かけ、掛物とつてだまれ〳〵といふ所へ、はや〳〵御下向といふ暮方、すぐに難波にいそぎ給ひぬ、老人夢おどろかし、御歸りと聞てまた淚を流し、昔より戀する人の詞に、寢ても覺ても御事のみをわすれぬとは、よほどまへかどの戀にてぞあらん、ふして忘れぬ物ならば、御歸りをしるべきを、おもはねばこそまどろみぞする、年來の戀人を此所にて見付、二度あはぬはよく〳〵の因果ぞかし、かくてまた逢事のいつか有べし、盛の花をもがれたる風情、手も力も只淚より外はなかりき、知ぬつくしの人と斗り聞て、行く先のしれざる上は、所詮しねとのしらせ、幸所も來迎寺來、世猶來世をたすけ給へとおしはだぬぎしが、秘藏の繪なくして金子に狀一通そへたり、ふしぎに思ひ封を切てみれば、

そつじながら貴殿所持被レ成たる掛物、我々主君望み申、面談にて申請度由願候へ共、一命にも替まじきとの一言におそれ、此湊迄まいる所に、思ひもよらぬ御出、殊に前後をわすれ夢むすび給へば、幸と存斷をとげず、むたひに所望仕事、是下として上を思ふならひ、まつたく我々盜人にあらぬと申しやうこの爲、金子三十兩封のまゝ指置候、もし御待心にて下され候上は、千萬忝存可レ申候、是非御承引無レ之候はゞ、大坂北濱邊に旅宿仕候者共、御尋に預り申度候、早速返辨可レ仕候以上、

今月今日　　某

と讀、暫思案し悦の涙をながし、何がなと思ふ所に、君の御手に入事御緣つきぬと見へたり、しかし此金子は何事ぞと能見れば、敦盛の繪は其儘有て、なり平の繪すがたを取歸りぬ、とても御手にふれ給はゞ、其繪はのこし、此繪こそ御手に入度物也、色好昔男の面影、みまいらするもくやし、凡そ所も書殘し給へば、是を戀草の種とし、三十年の思ひ近日はるゝ、空の氣色、しづかに陸ぢを行べしとて生田の森、是なんこやのゝ宿、磨耶山の觀音靈驗あらたなれば、彌々此戀首尾させ給はれ、諸願成就せば、かねのを掛奉る御寶前、いばら住吉西の宮にはゑびす三郎、目出たい事を釣の糸もつれぬ樣子と、よひこしをして色にめのないす浪人、參詣のともがら口を揃、あの老人は子孫はんじやうにねがはるゝかと、思ひの外な推量なれどしらぬが佛、今時の若い者は、身持くずさぬがふしぎと、我と心に恥ても見たり、跡より戀のせめくればとて手鞁打て行先、尼が崎大物の浦より舟に乘、難波の濱に行乘合、めん〳〵口を揃、戀咄世間の噂、龜山の敵討はちかい比、吉野には、しわうといへるけだ物人をぶくし、此比退治せられたなど先目出たい事也、都眞如堂の如來、下寺町の源正寺にて御開帳、芝居はどれが時花ます、されば嵐三右衞門が、京にて座本をするはめづらしい事、荻野大和屋水木など大坂へくだる、惣じて役者は車輪のごとし、扨此比生玉の八幡にて、神原小四郎と云若衆、又天滿の神明にては、宇田小次郎と云男色、左方五格のきりやう、南北にわかつて能をすれば、まねかずして諸人見物にまかる事山をなす、いづれおろかはあらねど、宇田は年若に謠聲やさしく、身をつくろわずたんりよに見ゆる眼ざし、男色におぼるゝ人、いづれがまよわぬはなかりき、又神原は大がらに、能謠にもつたいあれども、つま〳〵としてよし、生れ付うんなりと、是もにくげはあらねど目遣にいやな所有、西國の大湊なれや、日々群集して他國にない事、各見物にござれとかたれば、老人是を聞き、して〳〵其若衆は能ばかり見する事かや、たゞし情も有事か、いや〳〵そうした沙汰はきかず、なれ共今時いづれか只はとをさじ、お年はふるけれ共衆道屋と見へたり、しかし此髮髭の白きにてはいづれか思ひつくべし、戀には身をやつす習ひぞかし、びん髭

を墨に染、若やぎ打じにあるべしとくわしくかたる、近比耳よりな咄を承り、老がうの思ひで是にすぎず、拙者めも分に過たる戀のおも荷をになひつれば、外へめをやるなど武士の本意にあらねど、男色がす面にて能をせば、獅子に牡丹花に小蝶のたわむれ、とうりうのうち、是非見物にまからんといふ内、しゞめ川にふねがつけば、めん〳〵いとま乞して、行も歸るも旅はみちづれ、

女大名丹前能初卷終

女大名丹前能二之卷

(一)風流紙子實盛

難波の里なれや、またあるまじき戀の湊、此濱に宿もとめ、二階座敷より居ながら見れば燒たつ、民の釜戸もにぎ〳〵と、かりにも國の事など思ふ事なし、つく〴〵と獨淋敷折など、此身のいたづらなるをおもへば、女の身とし男ならみのはでな風俗、國方にもれなばよい事あるまじ、されど心の駒がきゝもやらず、ぼんのふのきづなやむ事なし、此事ゆへいかなるうきめに逢とても、身より出せるさび誰にか恨のあらん、いでや此世に生れ、好殿もたねば女となりしきぼなし、心よはくては思ひ立ぬる事のよそに成行もかなし、明日はゐんぶのちり共ならば成行まゝよ、此姿其儘町々をさまよひ、尋あはずんば二度國へはもどるまじと、とつおひつの亂髮、誰とりあげて向ふ人もなく、我手枕のいつ〳〵よりも今日のさびしさ、たぞ酒もてこひと仰も果ぬに、腰元のさよ銚子盃御前にさし置、けしからぬつれ〴〵、ひとつあがりましてお氣

はらされませい、お肴は何やらん、佐内殿がいたされますと舌引いれぬうち、佐内かの繪すがたを持參し、此の掛物につゐて、大分お姫樣へおんにきせませねばならぬ事有、お氣のはりやうによつてくわしく御物語申そふずるにて候、もつたいつけずとはやうとあれば、畏り、いで其比は元祿十四春雨の、空定めなき折から、我々が主人何がし、歌道に事よせ都の方へおもむく時節、一の谷にてよしありげなる繪を御覽じ、明暮ほしやとおむづかる、あまりおいとしさのまま、我々が計略にてとり參りぬ、是々御覽あるべしと彼繪を君に奉りぬ、扨もきやうがる子細らしさ、なれども望みの繪なればとて、三度いたゞきつく〲詠、世にかゝる器量にむまるゝ人も有物か、惣じて人にはかぎり有て、五十年の間は夢のごとし、永い浮世にみぢかい命をもつてくど〲思ふは、さりとはもんもふな事也、かく思ひ付をめん〲がたのしみ、此繪に似たる殿もたんと我をわすれ給へば、おそばにつき添ふ者共、何とあそばしたると尋けるに、されば世に數多有繪を見しに、是程うつくしく書たるものなし、有し昔男の面ざし、今見る樣におもはるゝ、此繪を便につまもとめんと思ふ、され共尋ぬるしるべもあらねば、此姿を繪師にうつさせ、脇書には自が筆にて、かゝる器量あらん男のあらばこよかし、いか成大望にてもかなへ參らせんと、智惠をもつてつりよせなば、色慾に迷ひ尋こぬ事あらじ、しかれば居ながらとの目利する道理、急ぎ書せとの仰、是くつきようの御思案と、爰かしこの繪師をあつめ、うつさせてみるにさらに似る事なし、老人此よしを聞幸と悅、目見へに事よせ日比の思をはらさんと、俄にゐもんつくろい、すはだに紙子、茶宇平の下袴、そこ〲ほころびたるは是非なし、みる茶小紋の古羽織、胸ひぼ高にひきしめ、びんつきはうしろあがりつと豐に、ひげさかやきをそれば、二つ三つ若ふは見ゆれど、つゝむに餘る老の浪、よりくるしはゝどこからどこまで、是さへぬけたるなど、入齒とやらんをすれば、當分かくるゝのみ、若衆の物云ごとく、息こもりて調子聞よし、かかる時にこそと葉山が油、おくれに付てひらつかぬは第一の重寶、是一騎當千、昔の五百石はそのふにうへてもかくれなし、鏡を取て身ぶりを見れば、南無三

寳やつれはてたる我が姿、髪はゆふてもおどろのごとく、足手のつめをとらざれば、わし熊鷹にさも似たりと、ふるい小栗のせつきやう、てるての前が長がうばにりんきしられ、青松葉にてふすべられし顏、かくてはいかゞと、ちからこぶの有程みがけど、むくろじは三年とかや、所詮暮をまちてゆかば、夜の遠目笠の内にて、十や二十は若草の、こもれるうちのとぼし火のかげ、此思案がはやう出れば、是程苦勞はせまじ物をと舌鞁有程、腹をたつるは不吉、山伏も門出、茶わん酒もそれ〳〵の身祝、一つのんでは田もやろあせのはだ、よふたふりして君が中戸に、立居くるしき老の身、どうやらきみわるく、俄に上氣し、胸わぢ〳〵するなど武者ぶるひにてあらんと、我とたのしむもおかし、とやせんかくやと思案する中ば、お出入の者が見付、災なおやぢは最前から何していらるゝ、謡もうたわれず、物くれ共いわず、合點のいかぬわろじやと情なき詞をきけど、きやつが目利にあんまりちがひもないと、我と心に了簡し、謡といふに思ひ付、態と聲をはり上、謡さなきだに物のさびしき春の夜の、人めをはぢる此身とて、庭の松風さよふけて、月もかたぶく軒ばの草、わすれもやらでいにしへを、忍がほにていつ迄か、逢事なくてながらへん、げに何事も思ひ出の、人には殘る浮世かな、只何となく一筋に、賴む佛の御手の糸、道引給へとうたひければ、姫奥にて聞召、今の謡は井筒ぞかし、我業平のすがた迷ひ、思ひのあまる折から、是吉凶の音情、こなたへ召せと有にまかせ、下女とみへしが戸をひらき、お召なさるゝこなたへと手をとれば、老人よに嬉しげに通り、ふすまをへだてかしこまれば、いづれも耳に物いはせ、こよひのなぐさみ、此おやぢと井筒のシテワキしてうたひ、酒のませていなせよといふよりはや、鞁をしらべ、謡詞我此所に宿もとめ、心をすます折ふし、いとあわれなる老人、おもはず是へきたらるゝ、いかなる人にておわします、老人是は此あたりに住繪師也、御好の繪すがたは昔男と名にふれし人なり、されば其繪書人は我らが門弟にて、筆の林硯の海、ふかき妹脊を書のこせり、御所望ならば書まいらせん、女げにげに業平の御事は、世にかくれなき美男のよし、さりながら、それははるかに遠き世の、昔男のなき形、かゝる姿の人あらば、おしゑてくれとの給ひぬ、老人何故美

男の御身にて、詠させ給ふ事、いか樣子細のあるやらん、女げにもふしんはさる事也、もとは筑紫の者にて、親獨子ひとり、兄弟とてはよその花見る斗りにて、たよりなき身のすてお舟、かゝる人あらば、兄上とあがまへ奉らんと、思ひつめたる心也、老人尤仰はさる事なれ共、其なり平は色香にめで、戀にはしばしのやるせなく、きのありつねが娘と、姝脊の心淺からざりしに、又河内國たかやすの里によしみの女を求、二道かけてかよひ給ふ、それのみならず、こゝかしこにてのきを詠させ給ふは、ひつきやうお家のぬつぼう也、たとへ妾は木のはし成共、また我ごときの老人など、前後をわきまへ思案ふかく、智有て情ふかければ、萬民の心にかなひ、かならず其家繁昌すべし、よしなき事に繪がゝせ、世話なさるゝは國土のつゐへ、只々無用と拍子にのり、我をといわぬ計り、諸は外になつて此論悔やまず、御心にいらぬゆへ御機嫌そんじたる面ざし、腰元衆はらを立て、よしなき指圖申さんより、繪がゝば書てまいられ、御氣に入ば繪數も多し、そちが爲には福德大臣、よい繪がつゐたといわれ、せんかたなく〳〵、金言耳にさかふうへは是非なし、然ば仰にしたがい繪書まいらせんと、名殘おしげに歸る我宿、

(二)一念姿見の井筒

世に戀程せつなきはなし、我六十に餘り、頭に雪を頂き、ひたひに四海の浪をよせ、腰にあづさの弓はるごとく、世が世なら孫の貌數多見べき身とし、あらざる戀のちまたにまよひ、思ひをあの君にのこし、すでに一の谷の露霜ときゆべきを、佛神の加護ふかく、惜かららぬ命をまつ事、ひつきよう情有戀に極ぬれど、よしなき昔男の面影を取かへられて、我戀のさはりと成ぬ、剩なり平にまがゐる男のあらば、いかなる望をもかなゑんと有仰、是程ひろい世界なれば有まじきものにあらず、雪と墨との我すがた、いかに年々の思ひなればとて、よもかしうちなびき給はん、たとへ繪書まいらせぬればとて、祿をこそ給はるべけれ、中々情らしき詞も有まじ、然ば心をつくして書く事いらざるもの也、しかし是程の首尾になつて、思ひをはらさぬも口惜、兎角は先づ繪書まいらせ、其上にての思案有まじき事にあらずと、一間に入とぼし火かゝげ、硯

にむかいそこはかとなく書つくしぬれど、老眼定かならず、手ふるふてあやしく見ゑざりければ、いよいよ心くるはしけれ、君の御姿はいともかしこし、竹の園生の末葉迄、中々人間とはおもはれず、昔男の面影は、いかなるゑんにひかれ、物いわず笑ず、心盡しの人迄に、思ひをかけらるゝこそうらやまし、我人戀する身など、あやかり物にてぞあらん、此身のかはらるゝ物ならば、夫をたよりに戀草を結びとゞめ、兄弟分と有一言なりとも聞ば、年來の本望成べけれど、いかにしてもかうした姿、佛神をたゝきまはし、養老の瀧に千日千夜ひたしたり共、一度わかやぐべきとはおもわれず、月やあらぬ春や昔と詠しも、いつの比ぞや筒井筒、井筒にかけしまろがたけ老にけらしな、老にはれたはさながら見ゑん、昔男のすがたなつかし、女とも見へず男なりけり、業平の面影見れば腹立、我身ながらも口惜や、しぼめる姿のかはるゝものならばと、心に移り形をまなび、紙子羽織をかりぎぬによそへ、昔男に成て、あらぬことのみ口ばしるは、心くるふと見へたり、暫有て筆かみしたし、又は身をふるはし、硯の墨を障子に打かけ、眼を見つめ歯ぎりなどし、机

に身をなげうつて、餘念なく夢結と思へば、老たる形を殘し、魂おのれと若草の、見とるゝ姿あらわに、昔男の面影見まがふ風情、丹前やうのあゆみぶり、一振ふつて庭前なる、井筒のもとへゆかんとする、宿屋夫婦驚き、きやつは此所に住む狐、老人をたぶらかさんため來ると見へたり、女房共しづかにこいと、跡より見へがくれにつゐて行は、彼男つるべの繩をこだてに取、はづかしや我筒井筒の昔より、眞弓つき弓年をへて、今はなき身を業平の、姿をこほる君が戀、昔男に成て見まほし、我一念のかなはずば、此身このまゝ井の底にしづみ、妄執の惡龍と成て恨をしらさんものをとかへす詞の跡なく草を枕に伏たりぬ、夫婦手を打、畜生とはいひながら、是程よく男にばけたるもなし、にくさもにくし追うしなはんと枕にちかづき、是狐どの、もはや東もしらゝゝし、そちが樣子もくわしく見付たれば早く歸れ、長居して後日にこなたをうらむなと夢おどろかせば、はつと云聲の下より、棒ちぎりきとひしめく、何事やらんと尋る、さりとはおさめすぎたやつかな、それ見よ男にばけたはとしさいを語ば、我と我身をさすり、何樣ふしんに思へばこ

そ、某筒によりて水鏡、面を見ればこは不審、心の水もそこゐなく、うつりもうつゝたり似もにたりぬ、かのまめ男に露たがはざりければ、天にむかいて千度禮し、われ今宵此繪を寫ながら老たるをくやみ、今一度か様の姿に成もやせじと、思ふ一念の通じ二度わかやぎ、殊になり平のおもざしさらにかはらぬなど、神明の御あわれみ深し、御夫婦かならず驚く事にあらず、御心をやすめられよといふ程猶おそろしく、今日以後此所にはかなふまい、己れが住家へはやく歸れ、いぎに及ばゝ命をとらんといふ、まつたくこらうやかんにあらず、是程事をたゞすに承引なければ是非なし、成程望みにまかせん、さりながら御覧の通り丸腰、殊に大事の物をわすれたり、とり参らんといふ程こそあれ、かうへた狐はあつゐもの、風呂敷包大小はこちのお客の物也、己はにあふた様に尾を振て歸れといわれ、せんかたなく〳〵立出て、峯の白雲きゆるが如く行方なし、夫婦悦まんまとおい失ふた、我々一生の手柄ぞかし、御客の老人起しまして様子を語らん、うらの戸よくしめよと念を入て座敷に出れば、老人はともし火の眠れる如きを友とし、つくへにもたれ餘念なく伏ていらるゝ、そばへよつてゆりおこせば、兎角のいらへも非ざりき、不思議に思ひよく見れば、形はなくてもぬけがら、小袖斗をのこしたり、やれ老人のからだがないわと、大聲してわめけば、近所の者共寄合是はきめう成事、かゝる不思議を此まゝにては置かれまじ、所の代官様へ申上ん、尤といふよりはや、下袴片衣、町代の與仁平、夜番の五郎助は風呂敷つゝみ、口上書はさつとくどからぬがよしと、智惠の有御年寄を先に立、酒は一升切食どれほどゝ、人中でいわれぬ事はゆびおつて見せる、女房は腹を立、盗人に追、これぎりでしもふたら何かおもわん、老ぼれがからだは戸板にのせ、前後大事にかいてこいと、いふ下よりはや代官所の門前、我々は御手下の者ども、か様〳〵の子細によつてと一々言上申せば、取次の侍右の段申上る、いか様あるまじき事を申來りぬ、其者共是へと御前に召れ、くわしく尋させ給ひて後、老人がからだを御覧じ、いづれ狐狸のわざと見へたり、しかし善悪は重てしるべき間、たしかなる箱を拵其内ゑ入置べし、封は此方より付おかん、其上にて町人ども一日替に番を仕れ、何事によらず心得ぬ事あ

らば早速申來れどの上意、畏て御前の立私宅に歸り、仰のごとく成箱に入愛を大事と番をする事、奉行のはかりごといみじきにてぞ有ける、

（三）戀結び難波張良

思ひつめたるれんぼの一念、二度若やぎ、己と名も丹前の助とあらため、今樣の仕出し、びんあつからずうすからず、茶せん髮ゆたかに、かゝり着小袖もすこしはせんじやう、容色のぐんない島、ちやちりめんの羽織すそ小みぢかく、柄みぢかに、つば大き成は好に赤ゐぼし、はゞびろの帶すあしにわらざうり、坂田流色里がよひの風俗、是近年の仕出し、此人がはじめられ、今難波、都の若い衆、よい事がましくまなばるゝなどおかし、いかな女中も見歸らぬはなかりき、されど若衆氣やまず、女人をかたくいまるゝは、ひつきやう魂のかはらぬにや、男色とさへいへば猿がのみとり眼、さりとはしびつけないおやぢぞかし、かうしたなり平となるからは、左扇子でしてやつたもの、すぐに行道の橋、中ばに立て西の方を詠やれば、西國よりの入舟、帆はしらせて入る湊、濱に數萬の米をつめば、さながら山にひとしく、此商賣する者人替て十露盤のけた、立ながらはぢいて間なく手を打、事首尾したには極ぬ、こちが戀も　あれにあやかりたいと思ふ折ふし、千世の助下部あまた召つれ、橋の中揚わたりかゝり、丹前の助をつく〴〵詠め、此男は我戀人のすがた、かくまでも似ゐる物か、諸願成就、氏神天神さまの御かげわすれはいたしませねど、心にくいはおもはくのあるやなしや、聞ても見たしはづかしくも、在原の業平にまがゐる男なれば、性のよいかたへはつかまじ、外の惡性はゆるしもせんが、奥樣と云字さへなくばと、おもひ詰めたる心から、めのとにさゝやかせ給へば、お氣遣被レ成ますな、根心をきいて參りましやうと、丹前の助が側により、そつじながら此橋はなんと申ます、筑前殿橋といふげな、扨は他國のお衆か、先おたばこあがりませい、扨お國はととふ、身は東者、父もなく母もくたばり、兄弟とてもなき身、然れば奥樣が有ておいとしがりましやうといへば、眼に角入れ、女見たくもなし、お手前も今少し若ければ物はいわねど、おいぼれじやから返答申とにべもなくいわれ、姥おそろしく、御尤でござりますと立歸り、此よしをかたれば、それこそのぞめさりながら、さてもの

事に心底をさぐつて見んと、編笠まぶかに良かくし、行ちがふふりしてわざと守袋を川へおとし、あれ取くれとの給ふ、つき〳〵の者それ〳〵とひしめき、此ふかさにてはめん〳〵が命もあやうし、誰かれといふを丹前の助聞、お若衆様の取おとされたらんには、御心やすかれ取奉らんと、きのまゝながら橋より飛をり、守をめにかけ、浮ぬしづみぬ行鹽の、さしくる水にぬき手を入、共に流るゝ水の阿波、きゆると見ればすがたあらはれ、半町許りたゞよひ、なんなく守を取て岸にあがりぬ、下部共まちあはせいだきあげ、藥なごまいらせ、はさん箱より着物一重、先是をめしませと申に、とてもぬれたる戀衣、たぞ御とがめの召替、いやしき此身がはだつけんもおそれ有、其儘すてゝ御通あるべし、誠に一心は守に有と申をそこつにあそばし、私のなくば此川のもくずとならん、有合て御用に立此身の悦、嬉敷と申詞も色にあらわれ、近比御はづかしやと申せば、千世の助そばにより、御心指の程しう着仕りぬ、未我主なきはなれ駒、行衞もはるか西のはて、心に深い望有て、都の方へ參る身なれど、御心底のたのもしきを見まして、何とやら別れまいらするも殘多し、先立て御獨身のよし、互に同じうき草、御心にはそむまじけれど、今より後自がたよりみ草と成給はゞ何事か是に過まいらせんと、寺から里の仰、いやしき身なれど、御心に入なばいか樣共仕らん、先以うれしゝ、是より旅宿に御供申、思はく一通御物語申さん、それ〳〵と夕暮方、御迎の籠二丁ならべいざ御立と申せば、互に一禮して乘、いづれも御免あるべし、御主人の御指圖にまかせ、是より乘てまいる、何が扨といふ程こそあれ、御氣ばらしに御籠をしじめ川へまはし、色里の風景見せまいらせん、とても堤ごしに詠やるは、外の色にうつさせぬとの下心、さりとは用心ぶかし、梅田橋に籠立てさせ、かちにて行を見歸らぬはなかりき、水茶屋の亭主と打兵衞、小腰をかゞめ先に立ての案內、東の森は天滿天神、こなたは神明不動明王、西の方には野田の藤、よしや吉原の里なれや、無常の煙人界の身は、いづれかおなじ野寺の鐘、戀と無常はこの界、南側東西四町いらかをならべ、二階座敷で引三味の、音は天滿屋多田屋、思ひにしづむこひやなど、いつもかうしに花橘や、ゆかり求て御名をば菊や、それで尋に北島屋、文の數よむ紙田

屋紙屋の山衆、筆にいつわりを並べ、また御越と書まいらする心の海、ふかい男と口説の花、髪しやらどけに帶しどけなく、まゝよかまはんすな、客の五人や三人おじやらねばとて、あんまりかなしうもごあんせんといふ男を見れば、よほどかみへとりのぼされしと見へ、酒中蕩座敷をけたて、二瀨のまさがとむるをも、ふりきり歸る姿なれや、夕日うつりて紅そゝぐ顏、人見るをもいとはず、片はだぬいで堤にかけ出、わざと千世の助がこじりに當一言にも及ばず、剩此お若衆を肴に、酒一つのまんと木に竹、なんじややらそぐわぬ詞、むつとするをも酒がいわすぞかもふなと、大樣にさばけど、やからものがつれあとより又二人來り、こゝな者は何ゆへ是へは來りぬ、りんが殊の外の恨、心八まん是程な涙をながす、あれを見ては白來かたじけないこんだ、非を理にまげてこい、中なをしに今一座と、すゝめて見れどいごくものでなし、ごんな女を相手にせんより、是にござるお若衆を見よ、廣い大坂にまた有まじき御器量、是非お盃をいたゞかん、それ酒肴取てこいと、殊に詞づよく成は、友の來るにてぞあらん、誠に是はお茶がわいた、我々とても其方同前、いざ召あげられ、御心指の方へさし給へと、扨もきやうがるむりなれど、きかねば是非なく、一つうけさせ給ふを、丹前の助罷出、歷々花と御覽じての御所望むげにはなるまじ、思召はあまたにて、思はるゝ身は獨、戀に色むすぶは浮世のならひ、ゑこなき樣に私了簡いたさんと、千世の助が持たる盃川へ流し、いづれ成共君おぼしめす御方あらば、あの盃を拾ろい給はれ、取たらん方へ御望をかなへ申さんと、態と隙取ていふ、何が扨御指圖のうへはと、三人丸裸に成我おとらじと飛入ば、此程のなが雨に水まし足の流れはやく、盃の行方しれざるを詮ぬるうち、首尾は爰ぞとめくばせ、足をはやめ旅宿に歸り、またもや來らんと、門を打ておとなひせざりしとかや、

(四)草枕川舟江口

其夜旅宿のつまもとめ、戀と情が男女のちがい、丹前の助は、誠のちごと一筋に思ふ事、誰身にも有べき事也、千代と思ひ詰たる言の葉、胸打あかして語らん物をと、あなたこなたの首尾を見るに、人めの關にはめのとらしきが御側をはなれず、目に物いわすより外なく／＼、其夜はつがもなふ臥戸に入、物思ふより外

なし、明の玉がき木末をならせば、ねられぬを幸に、皆の者夢さませよと御詞に驚き、おきふしの床に名殘惜むなど、みやづかへする身の皆ぞかし、丹前の助は性根つかず、現に物いふをきけば、戀をしるべき若衆とおもひ、既に一命に替、守を取奉り、殊に歸り足のらうぜき、危き所をのがるゝも、此身の戀がなせる事也、頼たのまるゝとの詞のつやにほだされ、うかうか此所迄來るは何事ぞ、世界にまたあるまじき男色と、思ひつめしは因果のかたまり、よしなき所に長居し、かゑつて笑草とならんより、いとまを乞捨に、又行先の花見るより外なしと、まざ／＼のゝしる、千世の助聞給ひひそかにめのとを召れ、尤祝言は國のならひ、はらからの御ゆるされ、なくてはかなわぬ事ながら、はる／＼の渡海をしのぎ、男見立にのぼり、其人に逢て是迄伴ひ、伏ども同じ軒の内、國もとにて枕ならぶるとはあんまりかたい事也、爰はそちが了簡にて、ゆるしてもゑさすまじきや、あなたの御心指もいとほしければ、何と思案は有まいかと、まち兼させ給ふはさる事ぞかし、仰迄もなし、私とても左樣には存ましたれど、一旦國元へ申遣し、おぼしめしの程をも聞ませずしては私の不調法、暫の間またせ給へ、しかし同宿にては互に御心も亂申さん、今日より丹前樣を外へ旅宿させませせん、か樣に申うばを、戀しらぬ物とおぼしめすな、吉凶の便有を待かね、事をしそんじましては、いとしいのかわいゝと申も、皆僞となる世の習、首尾能くいたせば一家のぐわいぶん、御家繁昌のもとい、なんと合點が參りましたかといふに、かへす詞のあらばこそ、どう成と宜敷賴さりながら、丹前樣は若衆に心うつさるゝと見へたり、今此姿のかわらば、あなたの思ひをけすと云もの、此儘にてもてなし、國もとよりの便次第、二世の盃おさめて誠の姿をあらはし、衆道の道を思ひきらせん、今あらため外へやりますもいな物、とても都に上る身なれば、京にて別に宿とらせまし、佐内をめしろに付おかん、是とははつめいな御智恵、然ば今宵夜舟に召まし、明日は九重の里に入、先それ迄は沙汰なしと、二人ばかりがうなづきあひ、下々へ申わたせば、嬉しや都の櫻見んと、よろこぶ者多かりき、是非なく丹前の助も同舟し、暮方いそぐなにわの濱、守口しめの 佐太のみや、

ひらかたの岸根に舟をつなげば、奈良茶賣のとゝかか一二をあらそひ、爰かしこより來り、我先にとつきつけ賣、あての槌がちがふて一文もうらぬは、まだ目のさめぬゆへにや、牛房賣の仁平太あくびして、八幡牛房わかい衆の清氣散じんのまして精をおぎのふ所は爰ぞやはたのふもと、一ツはきこしめされよと、上方近き在所なれや口あいよろしく賣など、身すぎはいづれおろかもなし、こちはつまゆへ身をやつす、くらべて見れば、我々が身程天理にそむけるはなし、かくは思へどすてがたき戀の關守、姥がなくばと、かの人の方へ目をやるは尤、物賣、舟をはなれて歸る中に、廿年許りの女手あんどほのぐらく、草を枕にたぞまつ貌の風情、丹前佐内をゆりおこし、あれ見られよ女と見へしが伏てゐる、何樣子細有ものと見へたり、樣子を詩都入のはなしにせん、尤といふより、ちやうちん引さげ枕元に立寄、これ〳〵女中、人里遠き此野邊川風さむき夜もすがら、草をしきねにかり枕、ならぶる人を待つ身かと、ゆりおこされて此女、忘れて年をへし物を、また思ひそむ言の葉の、草を枕とさだむるも、かゝり染ならぬ契ぞかし、さては戀かとよく見れば、いやしからざる生付、よのつねならぬ風俗、勤した身とみへたり、何ゆへこゝにと尋しかば、何のいらへもなく淚目押のごひ、世をいとふ人としきかばかりの宿に、心とむなと思ふ計りぞと、詠ぜし人の流をくむ女ぞかし、

是より本間能謡しかるに我たま〳〵、うけがたき人身のうけたりといへ共、ざいごう深き身と生れ、殊にためしすくなき川竹の、流の身となる事、先の世のむくい迄、思ひやるこそかなしけれ、紅花の春のあした、かうきんしうの山よそほひをなすとみへしも、夕部の風にさそわれ、紅葉の秋の夕部、くわうかうけつの林色をふくむといへ共、あしたの霜にうつろふ、松風蘿月に詞をかはすひんかくも、去て來る事なし、すいちやう紅閨に枕を並べし妹背も、いつのまにか隔つらん、凡心なき草木情有る人倫、いづれあわれをのがるべき、かくは思ひ知ながら、或時は色にそみ、とんぢやくの思ひ淺からず、又或時はこゝろを開、あいしふの心いと深き、心に思ひ口にいふ、まふせつのゐんさ成物を、實る皆人は六ぢんのぎやうにまよひ、六根のつみをつくる事も、見る事聞事に迷ふ心なるべしと、

また涙を流しぬ、佐内そばに立寄、間狂言扨は君傾城でおじやるか、いにしへの名は何と申た、くわしく様子をかたられなば、我々が主人ゑ申、御身の上よろしき様にいたさん、とく〳〵咄され候へ、女やさしくもとひ給ふ物かな、か様の身となれば笑こそすれとふ人もなし、御心指の嬉しければ、身のうへを語り申さん、只今申ごとく、心にそまぬ色里の勤、名こそ君にと定、引手あまたの客の中に、此なぎさの里より日々大坂屋のしがと申もの、禿の内をすて丶、くがい十年に通ふ男あり、名を山崎といへり、御器量と申心といひ、何から何迄おいとしう存ましたは、此身に成べき下地ぞかし、剰三年の春を重、神かけて疑ばらしの起請、ゆび切り爪はなすなど一昔になり、近年は情といふ斗りにて逢ふ夜しげく、雨風の夜もいとわず、通ひ給ひし事の積りてや、去年よりして御行衛なく成給ひしとも申、又は浮世を見はて給ひぬとも云人有、聞とひとしく此身のかなしさ、くるわを出て、此所はこひしき人の里なれや、此ほとりにさまよひ御行方を尋ん、もしも世を去給はゞ、それを此世の限とし、髮そりおとし御跡成共とはん爲、此十日許りさまよひぬれど、其人の由縁とて逢たる事なし、せんかたなくなく此野を宿とし、明ればかよひくるれば伏、たのみなき身の果、あはれとおぼしめさるべし、謡浪の立居も何ゆへぞ、かり成浮世に心とむる故、心とめずばうき世もあらじ、人思ふしたわじ、まつ暮もなく、別路も嵐吹、花よ紅葉よ、月雪のふる事も、あらよしなや、思へばかりの宿に、心とむなと人をだに諫しわれなり、是迄なりや歸るとて、なぎさの方へ行空の、東の方もほの〳〵と、夜あけがらすの聲におどろき、丹前佐内は舟に乗、やれ夜があけたといふ浪の、橋本の旅寐二階座敷にとぼし火の光、八幡　山崎　寶寺、今打鐘は六ッか五ッか、四ッの比には淀の小橋、さあ舟が付ましたお籠々々、

女大名丹前能二之卷 終

女大名丹前能三之巻

(一)色里通小町

淀堤しばしのかゝりねを伏見と云は爰の事、京橋より東に人家新敷立つゞき、柹とくさ色ののうれんに、蔦の葉木香桐のとうの染紋、見世にすだれを懸、色有女のびらつけるは、是なん水茶屋によそへ情の中宿ならん、いづれ西國の湊なれば、舟のり奴のたぐひ入つどひ次第に繁昌なるべし、昨日迄は丹前の助、男色より外有まじと堅く是を守しかど、過つる夜枚方にて、川竹の夫を慕ひ、なき人の爲ならば、身を墨に染んとの心指を聞ては、衆道に増たる情ぞと、心に是を思ひかへしが、未能事にあはざる故替る氣色なかりき、なんのかのと云うち撞木町の門前に籠を立る、むかふを見れば、若い女中の色有小袖をまとひ大道をありく、何人の内儀なればと詩る、跡かたの七助、あれは撞木町の傾城なりと答ふ、丹前聞、なんと千世殿、遊女町とあれば耳より、初て上方え上る我々、ちと見物いたすまいか、くるしからずば案内申せ、畏て七助先に立、爰の見世かしこの格子に手打懸、あれ御らうじませ、つらりとならんで御座るが此所の一番筆、小大夫三吉萬世小櫻高間山の非初音朝長、御位は是程、此よこ町に揚屋と申て戀の中宿有、此所へ女郎衆が出ばりし、おてきを待請盃のつめひらき、床に入て心中不心中のいきぢを諍、てきのよは氣を見すまし、まはる物日をあてがひ、終に客の根城をおとさせ、京伏見の住居かなはず、着のまゝながらの丹波越、心がらとは申ながら、哀成身と成ためし有、又色深き男には、傾城の眞實と云軍法の秘術を以て、文玉章を通はし、おもはぬ客にかはせ透を窺ぬけがけし、さつまの守で逢ていなしてまた逢たがるなど、ひつきやう戀のあたぼれする女郎の事、是根指事にあらず、其時の心は互に千萬年と思へばこそ也、なれ其末とげぬと云に段々口傳の有る事、子細はそれ程のあひさつなれば、針が棒に見へ、いわいでも大事なひことが口說に成、其くせ男は曾我殿、一口買て其分間事もならぬ身躰、二日立三日とをかざり、朝良の日影に萎む如く、つゐ忘草と成ぞかし、元より浮氣の戀なれば、互にはりあい友立にあひ、隣の女郎に逢て昔の戀を忘行ちがふても、しやばで見た彌次郎顔する所の習、雨だれ

拍子にしと〳〵逢客まれ也、大かたかみづりに成て深入すると、うは氣の山を重いひすごしての心中、いやはや腹のかはな今様の勤、こちとらがわかい時とは黒白の違、傾城の末に成ましたと遠慮なく語、格子の内より霧野といゐる女郎が聞て、是こなたはいかゐわけ知さふな、少しおしゐて貰ひませう、易事じやが是が御座らぬといへば、其はわしがさはいしましやう、よこ町の笹屋へいかんせと云、夫はうすからきねじや、追付かねもふけしてといひさして出る、千世の助聞給ひ、我此身にてあらずばかねをさらし、かはせて様子を見たひ物じやと、姥にさゝやかせ給へば、與とひ顔して何事おつしやる、よしない事にお金を捨らるゝは世のつゐゐ、殊に女儀といわんとするを口に手を當、いらざるそちが異見、都のぼりもかゝる慰せんためといわれ、今のいゝそこなひに氣を取れ、いか様成共御心まかせと申、丹前ともに進み心、今日の遊興拙者がさはい、お氣遣あられなと七助を呼、女郎にとめられ後を見するは卑怯、我々居ながら歸られもせず、望に任せ一夜買てみんが、左もあらば一座につらなり傾城の所作などご見たし、なんといやかさい

へば、下地はすきなり御意はよし、御指圖に任せ、三年ぶりで女郎と盃するは此男がまんなをり、御はづみの上は隨分しまつをいたさん、お時宜申は不調法、先々是へと笹屋がもへと案内し、是々亭主西國方の御客、何にても御馳走申さるべし、殊に女中もあれば座敷も二階にしてと、わらぢはきながらのあいさつ、亭主くわしや悦、お若衆様の色遊、是近年の仕出しと奥へ供なひ、籠の衆は表の部屋へ御座れと云、七助かぶり振て、それは地客京客をのせて廻る籠の事、今日の大臣は拙者、あひがたの六兵衛彦介など、勝手におつて酒のんだがまし、然ばお女郎様はどなたか、先霧野殿へよんでおじや、心得ましたと夕食まへ、奥座敷には丹前千世の助、めのと 佐内、腰元がおしやくにて盃の數まはる中は、霧野が明せうばわれし姿、内八文字にゆりかけ、小づまを取て座敷に出、七助がそばに居なをり、殿立は左もなけれど、女中方に此勤見せます事の、お恥かしやとしとやか成るあいさつ、誰が返答する者なし、此盃は私がひろいましてと、一つ請て七助にさす、珍い盃をいたゞき、もどしておいて是からが詰ひらき、御覽の通り賤身、日々におも荷のか

た替るなど、女郎衆におとらぬ我々が勤、乗よと見れば飛鳥川の淵、瀬なかのはげぬもふしぎぞかし、お若衆様をいさめのため、與風此町へ入染、出るまゝのたは言、そなた樣にとがめられ、既に後を見せん所を、旦那のお氣をはられたる故かゝる仕合、先程申た詞が、なんぞ御氣に懸りましたかと云、いや〳〵そうした事にあらず、かた樣の御噂は兼て聞及ました、折も有ばお目にかゝり、御身のうへを尋ませんと、思ふ所にかうした首尾、見た所がいやしからざる御方、色里がよひに身をうち、世のまゝならぬを恨、かゝる手わざを遊ばすや、くるしからずばお咄被レ成ますまいか、是はあての槌が ちがふていな事を尋る、いかさまきやつはすれ物、儘よ語てきかさんと思ひ、あつぱれこなたは日高ぞかし、何程に問人有共云まじきと、心のせいもんはたつた今迄立ぬれど、一言にほだされしからば身をあら增申さん、はづかしながら我、なぎさの里にかくれなき山崎と申者のなれのはて、難波の濱にかよひ、米商賣の悪性友立新町に入込み、大坂屋の志賀といへるくせものに逢初、日々に九軒の井筒屋にかよひぬ、されば志賀と云傾城は餘り色ぶかく、あなたの玉章こなたの文、書くれて空定なきしぐれ心を、此男が逢かゝつて外の戀をやめさし、一夜あはざれば山樣戀しと現にも待と聞、親のいさめ世のそしりをもいとわず、なぎさの森の暗き夜も、我通路に關は有共、中々とまるまじきと、羽織など打かづいで人目しのぶの通路、月にも行闇にも行、雨風の夜も木の葉の時雨雪深く、軒の玉水とく〳〵と、行ては歸り歸りては行、一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、十宛十は百夜の數、度重ればあらわれ、親兄弟の機嫌を損じ、明るをまたず追出され、あてどなく〳〵其夜は八幡堤にてあかし、難面なぎさの方を詠、しるべを便にかゝる手はざを習、昔に替る月日を暮しぬ、是に付ても志賀が事、思ふは誠の戀ぞかし、黄金のはだへこまやか成女郎衆が逢てくれても、よしみ有女程にはおもはじと、いわれぬ事を扨も云たり、霧野もとんと腰をぬかし、さればこそ常ならぬ方と見しはちがはじ、御心指のいとほしければ、今より後我身を儘にさせませふが、なんと逢てくだんすまいかといへば、御心底嬉しけれ共、未志賀とのわけ不明なり、女郎は互、其段は御免と云程猶かはゆらしく、然ば今宵と取つ

けば、それこそ浮氣と云もの也、男の心をも知ず、あたまからびつたりとくるはきらゐぞかし、御所存見付たらばいか樣共仕らん、先私は、籠部屋へまいつてふせりませうとたゝんとするを、丹前とゞめ、物語を聞て段々語る事あれど、霧野殿のおもはくうわきと見ていとしく、志賀手前のいゝ分は我々が請合申、然ば御ゆるされますかといへば、霧野腹を立、くどひ男が有ぞかし、あのごとく箸取てくゝめさんすと、すゑる膳喰ぬは水ほどもなし、皆さん風ひかぬ樣にしてお休被レ成ませい、明日おめに懸りましやうと、二階座敷へ連立て行、姥おかしがり、傾城は面の皮の厚いものじや、千世樣あんな事みずとぎよしんなれと、爰にてもそばをはなれず、物一ッ二ッいふうち、さらばさらばの聲聞ゆるは何時じやしらぬまで、

(二)千話文淚の陽谷

いかに慰なればとて、身にもつかざる戀の中立、夜番太鼓が六ッうてば、鷄の時を作るは此里のおき別、今此時と寐姿しどなく、身拵してりんと待はいわねどしれた人々、床ばなれうちつくはあんまりじや、たしなめと惡口云に驚、目押のぐひ庭におり、わらぢしめはいていざ御立と申は、しばしも旦那のしるしにや、霧野もつゞゐて座敷を立、是山樣、御歸には必と袖の內へ手を入、脇の下をつめられ、人めしげきにたしなみ給へ、又わかいのといわれ、堪忍してとの返答、なんでしこなしたやら合點のいかぬ事也、諸分は佐內が承り、亭主が悦程きなる物をやつてくれば、欲に目のない習の里、門迄送り御逗留の內必お出を賴上ます、其段は七樣のお取なし、心得たりと云別顏、さらばと招く霧野が淚、はてしなく〳〵門のひぢまがりより籠にめせば、丹前佐內口を揃、七助殿をのせます所を、近比慮外御免なれといわるゝ時のせつなさ、我銀つかわぬから聞とむなふても聞ねばならず、是も命じやおもしろや、唯たのめ賴母き春もちやの花盛と、かたかゆる間なく、稻荷の前に籠を立れば、大坂屋といゑる座敷にあがり、ひそかに七助をよび、夜前申はづなれ共、霧野が手前をはゞかり態と扣ぬ、御自分の義先立て承りぬ、御物語には、大坂屋の志賀とやらんに逢、その身と成給ふよし、それには慥成證據ばし有や、左も有ばよい事喃申さんといわれ、七助淚ぐみ、情なき御詞、尤淺ましく成ぬれど、二人が中の取

やりぶみ、若相果なば冥土黄せんの土產にもと、一つものこさず肌の守にとつて置ぬ、僞ならぬ證據ぞかし、是御覽ぜと取出せば、傾城の手跡見た事なし、我讀ん人よまんと、てんぐ〳〵に取て是を見れど誰か讀者なかりき、何も口を揃、尤能書とは見へながら、びらしやらと書ながしたる筆の跡、讀つけざれば埒あかず、とてもの事にそれにて讀で聞され候へ、成程御尤、色里にぎらぬ人かうした文讀かぬるはことはり、しからば志賀と私がふみの打ごめ、よんできかせ申さん、尤傾國の文ていさま〴〵なれど、互にむつまじくなればつやなく、只思ふ言の葉をかくとなん、それよりは程ふり候へ共、御出のよすがもあらず、また文のおとづれもなければ、心ならずも秋の夜の、獨詠る寢やの月、おはりなきにしもあらず、末世一代教主の如來も、生死のおきてはのがれ給はず、過々し申せしごとく、何とやらん此間は御心もうき〳〵となく、ことし計りの花をだに待まじきとの御顏ばせ、推勞ながら見ましてより、こなたの物思ひ大方ならず、また御越とある別の言の葉をたのしみ、明暮となく待身のつらさ、老の鶯逢迄は只淚にむせぶ計りに候、何とぞ首尾も有ば、今一度御げん成ましたくこそ候へ、常ならぬ中なれば、いかなるうき身とならば成迄そひ給はれかし、只たんきなる御心のませぬ樣にと佛神にきせいを掛、またの御げん迄は夜もねられぬ思ひ、ぜひ〳〵御こしをまつに候かしこ、とよみもおわらず只泪より外はなかりき、丹前聞うたがひもなき山崎殿よ、か樣〳〵の緣により、枚方にて志賀殿に逢、御身のうへを聞しに露たがはねど、根心聞ぬ内はと念の爲文迄も披見す、志賀殿の心指いかにしても哀成き、是よりいとまを參らす間早々彼の所に急ぎ、行衞を尋給へ、不思議といふもあんまり誠しからねど、前後いやといわれぬ御物語、我故左樣の身とは成ぬ、承ては中々心ならず、是より尋に參らんと暇乞そこ〳〵立出けるを、千世の助とゞめさせ給ひ、志賀にあふ心のうれしさ尤なれど、又逢事も有まじければ門出の盃せん、御詞を返すはいかゞなれど、方々樣の旅宿も承ぬ、御念比の段今に限るべからず、是はあだ成玉のをの永き別と成もやせん、只御暇と申、いや〳〵其ごさく心よはき身にては心許なし、是非にと請てさし給ひぬ、御情の盃といたゞく折か

ら春雨のしきりに降ば、請たる盃下に置心なの村雨、降は涙かゆかんとするをとゞむる事か、旦那に名殘おしけれど、なれし女の行末いかゞと、たまちる如くの涙を流しぬ、實に道理なり哀なりき、もはやいとまを參らすぞ、とく／＼なぎさへ急給へ、あら嬉しや有がたや、是わけしりの御影也、長居はおそれまたもや御意のかはるべし、只此まゝにお暇と夕づけの鳥もろ共、志賀を尋に行道の、頓て御目に懸べしと、はや行籠の跡見へて、あなたは都我は又、なぎさに歸る名殘成けり、

（三）嗤でまぎらかす道成寺

愛も情の門出よし、所は何あふ稲荷山、そも／＼御社は、和銅年中の比、弘法大師東寺の門前を通らせ給ふとて、稲を荷ゑる老人に逢給ひ、立ながらの物語、一ッ二ッし給ふうち、翁の姿みへず成にき、太師不思議に思召、是をまつりて東寺の鎮守となし給へり、稲を荷ゑる故稲荷大明神と申ぞかし、されば末世に至り、此宮日々に繁昌す、殊毎年二月初午には老若群集し、願を掛ざるはなかりき、近年宮御ざうくうより此かた、鳥居の前には軒をならべすだれを懸、うつくしき女、面に白粉をぬり、男見る度に鼠なき、あやしや狐のわざかと籠のおのこにとへば、いや／＼あれは此所の茶立女、のぞめば奥に伴なひ、戀の瀨ぶみを渡くらべて、花代が月酒をのめば外に分入事成と語る、月分とはいか成事ぞ、旦那衆はいかいぐわちかな、月は一夕分は五分といふ古い詞を御存ないは、いづれの國ぞと笑ながら行先、東福寺の南門聖一國師の開基、七堂がらんの地也、秋は照る通天の紅葉かくれなき名木、盛の比有合せなば見るべき物と、殘多き詞をのこし、大佛三十三間堂に籠立させあゆむ姿なれや、東は養源院知積院、あづまの諸家此寺に山をなし、晝夜學文いとなまれて、つれ／＼の樂には男色增鏡の三冊を詠、又は歌舞妓芝居の番附など見てうきを晴し、思ひあまれば、高野六十にも前髮あれば無禮の所望、かた樣ごときの色みせたら、久米の仙人もいその神、撞木はなきといふ、かる／＼しくつく事のならざるにや、せめては石打てなりを聞んと面々立よる、佐内押とめ近比そつじ、惣じて女たる身は、しゆろう堂のほとりへよる事かたくきんせいなり、千世樣とても

御遠慮有るべし、其子細はと尋ぬる、ごんご同斷かゝる六ヶ敷事を御尋候物哉、くわしく様子はぞんせね共、有増御物語申さんと、子細らしくはさん箱に腰打懸、扨も紀州日高郡にまなごの庄司と云者有、彼者一人の息女をもつ、其比奥より熊野へ年參する山伏有しが、庄司が元を宿坊と定、いつも彼の所に來りぬ、庄司娘を寵愛の餘、あの客僧こそ女が妻よ夫よなんどゝ戯れしを、稚心に誠と思ひ、年月を送る、或時客僧庄司が元に來りしに彼娘夜更人しづまつて後、客僧の一間に忍び、いつまで自を此所に置給ふぞ、急ぎ迎給へと申せしかば、客僧驚、只何となきていにもてなし、夜にまぎれ忍出道成寺に來り、ひらに頼よし申しかば、かくすべき所のあらざりしも、つき鐘をおろし客僧を其内に隱しぬ、程なく女山伏の跡を慕ひ追かけ來る、折節日高川の水まさり渡べき様あらざりしかば、あなたこなたへ走りまはり、一念の毒蛇と成て、川をやす〳〵とおよぎ越、彼寺に懸込、爰かしこを尋しが鐘のおりたるをあやしみ、龍頭をくはへ七まとひまとひ、焔を出し尾をもつてたゝけば、鐘は即時に湯と成、つゐに山伏をとり殺しおわんぬ、なんぼうおそろしき物語にて候、かゝる例より女たる者、しゆろう堂にいれば、釣鐘落るよしいひならわせり、猿が尻はまつかいなと物語ぬ、丹前聞召、姥腰元はさる事なれど、千世殿に於て何事かあらん、某御供申鐘のうち御目にかけんと、手を取時はいない難く、爰にてはあかしもやせんと、色外にあらわれけるを佐内さとり、いや〳〵其お子は幼少よりきやうふの虫つよければ見せます事ならず、是よりごろうじましても同じ事、鐘のうち見たればとて何事かあらん、其替に大佛のお釋迦をお目にかけんと無理に手を引、是もかうじやとすゝむる功德、友に其氣に成て行道柴、誠に女程つみ深きものなし、かまゑていゝすごしめさるなと、面々口をとぢるは尤、男女にかぎらず、詞たがへるなどみれんなる心から也、たしなむべきは此道、獨の花をよそにせば、いづれ焔(ほむら)は同じ事、丹前様とてもよそに聞給ふなと、どうやらもつれの有詞、いづれ女も面白し、遊女さへ思ふ夫はしとふならひ、一期つれ添ふ妻なんどさぞ睦じからん、女の大蛇となるも夫故也、拙者も男色に身をやつしぬれど、少しは女も望ぞかし、それこそこちが望所と、跡に成前になり手

引あふて行事、釋迦もゆるし給へ、此大きさにては何かこせつく事も有べし、あれつまはちきしてましますは、悪性な男はそちへゆけと、指のさきにて追出し給ふ風情、左の手のくみ座は只一筋に思ひきや、我もよそにはせまじ、ろくな心をもてとのしめし、あの如く殊勝らしくは見ゆれど、根が戀故の佛ぞかし、いかに迷の道をさとり給へばとて、明暮あしては御心もつまらん、折ふしは遊山物見などもし給ふにや、佐内おかしがり、あだなや親の懐子、佛も今は身持惡敷、あのはしごをのぼれば、此上に二階座敷有、月に三度づゝの氣ばらし、仁王殿を相手とし、うでおし枕引足押などなさるゝ、おそろしい顔なれど、仁王殿がまけらるゝかして、くわたいに門番してござる、駒犬は酒錢出しの買物づかい、立つゞくさうめん屋など、お釋迦様のかげですぎるぞかし、わけもない事いやるなとお姥女郎のしやら聲、仁王門の石段をさがれば、中間若黨提、我々は御家來御迎の爲參よし、迎ひとは心得ず、定めし門違ひならん、御不審は御尤、御伯父花車浪之助様、先日の御状に付御上りなされ、大坂にて御待候得ば京都に御上りのよし、それ故是迄伺公仕りぬ、扨はそうかといづれも悦、さんざめかして行旅ねのやど、

(四)友禪繪今咸陽宮

旅宿は東山樂阿彌、御祝言は今宵と、上下の男女よろこばざるはなかりき、花車浪の介は袴の折めたゞしく、座敷正面にて頬ひげぬいての下知、先床の掛物は墨繪の山ばと、花びんにむぎあはを作らせ、額には花に嵐の二字、稻荷燒のかんなべ盃、白木にての重箱、是を組肴と名付、目錄にあはし時分の指圖をすれば、千世の助若衆髮にわざと打かけ、めのとは置綿帽子、腰元はそれ〴〵の小袖、きりやう自慢の丹前之助、身の上とはしらず、佐内が世話になつて淺ぎ小紋の上下、兩人同じごとくに出立、お次の間にひかへぬ、取次の侍奧よりのお召、御家の吉禮に腰物をあづかり奉らんと云、何心なく丸腰にて出る、浪之助つく〴〵詠、あなたは千世が戀男か、先立て承りぬ、拙者は此者が伯父花車浪之助、親は磯重野右衞門と申て九州はかたの者、筋目正き牢人なれ共、子細有て民家にくだり、世を歡樂に暮、都の花も國にてはとぼしからず、鹽竈の名所も居ながら見る、西海の浪は手をとゞ

かし、月花に不自由ならず、なれ共まゝならぬは人界の習、重野右衛門に家繼べき男子なく、此娘只獨のみにて子孫の絶ゆべき事をなげく、殊に此女色好ゆへ定まる夫なし、花の都なれや、物見に事よせ此所にのぼり、貴殿と緣を結よしめのと方より申下しぬ、重野右衛門は公用に付延引す、一家なれば某罷上り、對面の上祝言し、目出度國に御同道申さん爲はる〴〵のぼりぬ、然ば御自分の實名代々、御系圖の樣子を見承らんと、みつ指にてのあひさつ、丹前樣子を聞屆、一座〻見廻しおきれたる顏、さりとはきつい はまり、尤道すがらの素振、女めけるとは思ひながら、なんのゑきにか姿をかゑんと、思ひつめたる心からうか〳〵此所迄來りぬ、今あらためてはいな物、女もいやきにあらねば幸と悦、誠にはる〴〵の海上何事なく御上京、殊に私躰に御家督をくださるゝ趣有難仕合、我人一家を取結には、其品慥ならねば先祖の恥、身とても以前は武士、親は下總の國さくらと申に住居仕て、光尾孫之丞と申者、其世悴親左衛門實名を替、只今は丹前之助と申き、自今以後御引まはし賴奉るとのあいさつ、御口上之趣承りぬ、いざ御勘定書を拜見仕たしといわれ、丹前之助とうわくし、我筋目有身なれど、身すがら斗り來りぬ、先祖をあらためらるゝは尤、大事をわすれたなど〻云は不調法、隨分詞にてのみこむならばと段々ことを述る、浪之助氣色替りめのとを召よせ、おのれを付のぼしたるは何故、いかに千世がすく男なればとて、ゆゑなき者を聟にせん事、國への聞へかたがたもつて思案に及ばず、今つきはなすもいなもの、祝言は重て先酒一つのまん、千世取あげ某にさゝれよと、指圖もだしがたく浪之助にさしければ、いたゞいて後丹前にさし、先今日よりは身が家來同前に思はるべし、主從の盃一つのまれよと、扨もおかしき座敷とは成ぬ、聟成べきを手のうらかへす此酒、いかにしても飮こまぬ事、重て頂戴仕らんといふ、いやならば心まかせ、然ば佐内のんで家來どもにのませと、どこやら眞綿に針のあいさつ、私はいぎもあらず一つ請て順にまはせば、めでたい〳〵三國一じやむこに成すましたと、寢耳に石もうつべきざよみ、どうやら此座敷はどか〳〵と、合點のいかぬ面かまへ、樣子こそ有べしと胸をしづめ見る所に、浪之介床ぶちにも

たれ、家來共ちかふまいれ、何と此掛繪の鷄はよく書たるとは思はぬか、さて又くわびん、眞に松見こしに竹、ながしに櫻、前置には種々の草花、是たしなみの一ッ也、殊に朱塗のとさん盃、高蒔繪の重箱又あるまじき細工、重て見る事ならぬ道具ぞと、佐渡と對馬程ちがふた事を、辯のもつていゝまはすは眞鳥が惡逆そこのけ也、暫返答なくて、丹前佐内詞を揃、我ごとき佛生をゑたる眼からは、からすをさぎと云世話の如し、か樣の座敷はけがらはしおいとま申と立所を、兩人共にいましめ、すい量の如く心有て心底を引見るため也、己は上方に時花人買に極ぬ、其盜人と一身する佐内のがれぬ有まい覺悟すべし、浪之介が思案にて大事の娘にきづつけず、國許へもどする事、なんと智惠ではあるまじきや、詮議は明日、今宵は庭前の松にからめ置べしと、目玉の有程ひつくりかへし奥なる一間に入ぬ、千世めのとなど、當座の道理に返答なく、只なくより外はなかりき、いとほしきは丹前樣にてとゞめぬ、誠の戀なればこそ此所迄付添ひ給ひぬ、かくてはいか成憂身とか成給はん、今宵いかなる方へもおとしまいらせんと、ひそかに忍出爰かしこ

を詠給へば、うたてや春雨のしきりなるをもいとわず、淺ましき身となるも何からなれば戀ぞかし、たぞとがむる聲嬉しく、自は千世也、よしなき此身ゆへ思ひもよらぬ御難義、さこそ恨に思召さん、申譯は重ての事、先此所を立のき佐内と心を合、命ながらへ都のうちにおはしませ、浪之介殿の心底心得がたければ、みづからは一先筑紫に下り、父上に對面し近日むかいにまいらん、我も供にと思ひぬれど、左もあらば彌人買の惡名つかん、命が物だね追付花さかせ申さん、よしなき戀路にもとづき、思ひの上に思ひを重、また逢迄のかなしさ、時うつりてはあしからんとて繩をとゝ、とかれて兩人悅の涙、御心指忘るゝことなし、然ば立のき申さん、此うへながら御緣次第と詞に涙をふくませ、松の木末にのぼり高塀に取付、旣におちんとせしをしばしと止め、自が心指をわすれました、何ぞととへば是成といふ、路金なくてはすまぬ物、おりんもいかゞと佐内が智惠、帶とひて是へくゝり付てさがりをおろしぬ、扨もすかさぬ人かな、さあひきやと、聲をあいづに引あげ見れば金子三百兩、是が命の親じやもの、隨分御ぶじでござりませい、た

のむぞ佐内、心得ましたと立わかれ行、

女大名丹前能三之卷終

女大名丹前能四之卷

(一)思ひの山當世班女

明方つぐる知恩院の鐘、浪之助が下部目をさまし、丹前佐内見へざるに驚、爰かしこを尋るに行方なし、此由を申あぐれば花車けでんしたる顔、鳥の空音ははかる共世に相坂の關とやら、此方が油斷故とりにがせし事、かゑつて此身の爲能事ぞかし、されど佐内は國者、もし筑紫に下らんかと心にはかゝりぬ、しかし何程の事かあらん、此上思案といふは、年月の思ひを千世に語、心の下ひぼとくより外なし、如何いわんと思ふ所に、めのとあわたゞしく來り、千世樣もつての外の御氣色、なにとやらん狂亂の樣に見へさせ給ひぬ、お醫者殿へと涙ぐみたる風情、是はとさわぎ近藤周伯へ人をつかへば、六枚がたにてはしらせ、一間にとをり御手を取、シンカンジンハイヒメイモンいづれかたがはせ給ふ事なし、御氣のふさがりにてはか樣の事多し、藥二三帖にては御快氣有べしと、四物湯を調合し歸りぬ、其儘煎じまいらせければ少はしづまり給ひぬ、浪之介そばに寄心はいかゞ有ぞ、此ごと

く世話やくといふは外の事にあらず、我内々そちに戀慕し、思ひは富士の煙、くゆるをしらせんにいとまなく〳〵今迄は待ぬ、めのと方より聟定の狀下るに付、重野右衛門殿の指圖にまかせ、登ての思案、是はごな首尾唐にもなし、丹前佐内はなく成ぬ、そちだにのみこめば、ざつと祝言の仕初、明日國へ同舟し、蔵の家を立るはさん知、他人まぜずの妹脊事、此方の相談下々共に一身同心、どこからどこまでいごかれぬ樣に仕くんで置ぬ、いやかと云に返答なく、うなづゐて斗りおはします、なぜ物仰られぬ、たゞしお氣にまいらぬかと尋ぬる、此時はかぶりをふり口をしへ給ふ、めのとおろ〳〵涙、いなせなきは口こもらせ給ふと見へたり、御心はと尋しかば嬉しげにうなづかせ給ひ、物書まねをし給ふ、腰元硯紙をまいらせければ、にこ〳〵笑ひながら筆取て、

一筆申まいらせ候、この程は思ひもよらぬ御心づかひにあづかり、忝ぞんし候、過つる夕部より心地あしく、いかゞとおもふ折から、御藥にて氣分はすぐれ候へ共、また物いわれず、かなしやおし鳥のごとく成まいらせ候、それ故しかぐ〳〵御返事も不ㇾ申候、御心指の程嬉しけれ共、いかなる神のとがめにて、かゝるうきめを見る事ぞ、とても御世話のうへは、今すこし療治をもあそばし、何とぞ國許へ下り申度こそ候へ、左もあらば御恩はわすれまじく候、やうやう筆を賴かくまで、

浪之介樣　　千世より

扨は藥ちがいと又周伯を召れ、此よしをかたれば、醫師暫思案し何共のみこまぬ病人、私の智惠には及ず、外へも御相談有べしとて歸りぬ、彌難病に極ぬ、何と物いふて見られんかと尋しかば、おそろしや白目してくるしき有樣、うたてやあの顏見ては三年の戀もさむるぞと、祇園林夢樂坊が草庵をかり、めのと腰元付置かたの如くの養生、其身は茶や歌舞妓子にたはむれ、あてなき戀をかせぐもうたでし、或つれ〴〵成ける夜千世、めのと腰元をまねき、皆の者あんじてくれな、かうした事は自がたくみ、花車殿にあかれ首尾能此所を立のき、是非國へ下らんと思ひ詰たる作病、なんとうつたかと夢に小判拾ふた心地、未だ年もいかではつめいな事、浪之介樣も此比のそぶりを御らうじ、戀のさめたは尤、御氣色にまぎれ丹前樣佐内殿

の事を忘れぬ、それも自が才覺にて胸の内にかくしぬ、さりながら素振も見する事ならず、月に雲花に嵐とはかゝる事をかいふならん、折からなれや春の日の、雲間をわけてよしなき戀を求めしくやしさ、月日の立に夢なれど、秋の比ならでは逢事有まじ、夕暮の物思ひ只うはの空にのみあこがれ、身を徒になす事神や佛はしろしめされずや、心だに誠の道にかなひなば、いのらずとても神や守らん、見そめしは此繪姿、せめては手にふれあふ心地せんと、らんかんに掛置、いづくにかましますそなたの方よと詠むれど、物いわず笑はず、おきふしの獨寢は、軒もる月を見るより外なし、夕部のあらし今朝の雲、いづれの人か我思とは成ぬ、ねられぬ夜半の鐘を恨、枕一ッを友とする我が獨寢ぞ淋き、繪に懸る姿の物いわず何かおもわん、逢までのたのしみ、是なくば思ひもつみも有まじと狂氣の如く成ける所へ、浪之介が下部御使に來り、御病氣御本腹なきよし御難義に思召、明日國へ御同道あそばすに極候、御用意有べしと申上て歸りぬ、國へもどるは嬉しけれど、永々しき舟の内物いわではすまぬ事、何とぞふづくり、我々ばかりくだらん分別有まいかと、女心の智恵くらべ、といつおゐつの思案まち〳〵、

（二）法界客氣盛久

人事いはゞめしろとやら、使の男歸り、御病氣いつわりの旨申ければ、暫しもまたぬ浪之介、其夜姫が庵へ立越、むたひに引立籠にのせ、北野の七本松に急ぬ、姫涙の下より、かくおそろしき所につれ給ふは、命をめされんとの下心か、左もあらば暫のいとまを得させ、天滿宮の方へ籠を立させ給はれ、浪之介聞、一家のよしみ許して參らすべし、難レ有御ほうし南無天滿大自在天神、さしもかしこきちかいの末、自は筑紫に於て、さい府天神の申子にて、晝夜自在天神經をどくじゆ仕ぬ、けちゑんむなしからんや、いつかまた逢に北野の櫻花、歸る春なき名殘かな、見わたせば柳櫻を植まぜ、にしきと見ゆる故郷の空、心筑紫の甲斐もなく、一度あわで此露霜ときゑなん事のかなし、我なまじゐ形を人なみに生れ、色好事世にかくれなく、はるばるの海上をしのぎ花の都にのぼり、思ふ男に行あひ、あはで別るゝのみ、又古郷に歸りもせず身を徒になす事、誠に十六年の榮花は塵中の夢、一寸の光陰は

沙裏の金、實や故郷は雲井のよそ、戀しき人に逢はでぞはつる浮世なれ、我獨九重の雲霞となるべき約束にてぞあらん、いかに下部とてもなき身ぞかし、早とくうてとの給ふ時、草履取の佐渡内能出、あまり御いたわしく存命の義を申候へば、旦那と御祝言のうへは、助申さんよし仰られ候間、能々御思案あろふずるにて候、もし御承引なくば、拙者に太刀取仕れとの御諚、誠にみやづかへ程、世にかなしき物はごはりませぬと涙を流す、さりとはやさしゐ男、顔に心とやら、そちが心指中々忘れがたし、相果なば一遍の念佛なりと申て得させよ、尤我定まる夫はあらねど、伯父めい夫婦は昔の事、まして親の心をもしらず、それはともあれ、あした男はきらいぞかし、おそかれとかれ死ぬるは世上の習、我常に天神様を信じ、御經讀む事たじなし、暫のいとまをゐさせよ、安き間の御事、佐渡内めもちらさばい聽聞申さふずるにて候、難レ有や如是我聞一時佛在順菩大王八萬四千寶相金剛般若波羅蜜、きうせんにかゝる自を助たまへ、もし今生の利益かけなば、後生前生をも誰か頼ん、南無自在天神と、一心のこらし讀誦の聲、聞度もなしはやうてと、佐渡内うしろにまはり、さあ只今が御最期、命なくては何か浮世のおもしろからん、私次第に先お盃なりとあそばしませい、と云程なほいやらしく、唯御經を讀給ひぬ、力およばず既にうたんとせし所に、不思議やいづくともなくはたひろの大蛇あらはれ、くれなひの舌を振、日月の如く成ける眼の光、浪之介を目がけ飛かゝり、命有てこそ、かゝるおそろしきもの見た事なしと、跡をも見ずにげ歸りぬ、一町許り追かけ立歸るを見て、また自をやぶくせんかと、かしこの松に木隱さしのぞき給へば、大蛇と見へしは二十許りの男、もも色のもゝひききやはん、四方に眼をくばり、おのおの大儀、こちが思案の如く、まんまと惡人めを追失ないぬ、是見られよ刀脇指巾着鼻紙迄捨て逃るは、餘程おそろしく見へたり、扨娘子はと尋ぬる所へ、めのと腰元來り、首尾わさとへばきつい當り、何じやしらぬがくもの子を散すが如くなりしが、お姫様が見へぬと云、其お子故にこそ皆様を頼ましたれ、但しつれにげなどはせぬかと云聲に、千世はしり出、姥爰に居るとの給ふ、嬉しやそれにござりますか、おれはおれじやがあなた方は何人ぞ、御ふしんは御尤、是にこそ

様子あれ、まづ〳〵是へと水茶屋おこして奥に通る、其時夢樂坊罷出、子細といつば、定めし聞もおよばれん、こなたは歌舞妓芝居の立役、生島新五郎樣と申御方、今晩拙僧が奥庵にて酒のんでござりました、幸と存頼ましたれば、人をたすくるは菩薩の行、さあこいと云聲を揃、程なく駈付あやうき命を助給ふは生島樣の御働、扨は左樣か、御心指は嬉けれども、御物語につまらぬ事有、最前はおそろしゐ形成しが、俄に替姿なれや、姥といふも合點ゆかず、御ふしんは尤、是は龍もんの瀧と申狂言に拵たる大蛇也、我々ごときが眞釼にての働、ひつきやう怪我のもとひ、然ば上ゐのおそれ何事なく命を助くるは智恵ながら、一つは此蛇あればこそなれ、是御らうじませと見せけるにぞ、胸のくもりもはれ、今と云今心の魂が元のすみかに落付ぬ、私ゆへにいかゐ御苦勞、扨生島樣とやらんは江戸丹前の役者、殊に武道の達者、其外亂舞堪能のよし、國許迄もかくれなし、來年は東に御下りのよし、又御上りもしらぬつくしのもの、お暇乞がてら一さしと望給ふ、御心指うれしく、我たま〳〵都に登り、貴賤の詞にかゝる事、世もつてためしあるべからず、一天四海浪國も治る日の本の、くもらぬ日影長閑にて、君の命は千代迄と舞ひ納、たちまち白狐の姿をあらはし、社のうしろへ飛さりぬ、扨は自在天神の御かごゆへと彌〻信心のこらし、夜をこめて伏見の里、晝舟かりて本國筑紫にくだり給ひぬ、

(三)柴や町初音頼政

虎の尾のふみそこなひ、毒蛇の口をのがれし丹前佐内、いかにたすかればとて是迄にげ來るは、我身ながらたのもしからず、なれども浪之介が一言にて、人質の惡名を取、世を見はつるにはあらねど、系圖なければせんかたなし、尾張の名古屋にしるべ有をたよりに下り、證據をもつて會稽の恥をすゝがん、我故佐内も難儀此上ながら賴よし、何か扨情に隔なき戀路のならひ、互にすかせ給ふが御縁ぞかし、千世樣御下りあらば秋はむかひに參らん、それ迄のたくわへ餘る程有此金子、都の內なれや、傾城買て見たいものじやと云詞のしづく、ぬれ道急ぐ大津の追分、爰にて伊勢道中記といへるを求、所々の名所を見れば、京より此所迄三里柴や町といへる傾城町、志賀が心指霧野が情、思へば色道の元祖、女郎程やさしきものなし、物

語の種にもならん、せめては柴や町の傾城なりと買て見ん、いざといふ聲を揃てかの町の風景、實や國許にて聞及たる柴や町、遊女の姿かぶろのふり、いづれおとらぬ色所、あはれ此里知人の來れかし、のふ〳〵愛な殿立は何事をいわんす、此里初ての者此所の案内不レ殘おしへ給へ、所には住ますれどまだ里なれぬ初禿、諸分といふは白浪の水と月とは有ながら、知ぬを水の名とやせん、尤左樣には聞ぬれど、勸學院の雀は蒙求をさゑづるよし、禿とあれば心にくし、先位有女郎はいづくにか候、さればこそ大事の事を尋さんす、高位とは格子女郎樣がたをいふなり、あれに見へたる家作を、揚屋共また女郎の中宿共申ぞかし、是に見へたる小家に青のれんのかけたるなど、端女郎の住給ふ局とやらんにて有か、なふ旅人は水かな〳〵、月は一ッ影は二ッにみつ鹽の、わけは二ッになる光哉、げにや相坂の關の東の色里なれや、聞しにまさる繁昌、又此里の入口に塚の如くしつらゐ、松一本うへたるは何の爲候、さればあの松につゐていかい事咄有、とてもの事に語て聞せ申さん、去年九文屋の初音樣と申女郎、あれにて心中して果給ひぬ、其執心今に殘り、よな〳〵此所へ出給ふとて、みな人おそれ夜ふけて通るものなし、さればこそ初音が塚といへり、いとしや、さしも口きける女郎なれ共名のみ殘り、跡は草露の道野邊と成、行人征馬の行衛の如し、思へばおいとしい事かなと歎きぬ、兩人口を揃、今日は人明日は我身の上ぞかし、南無幽靈とんせう菩提と廻向あれば、げに能御とむらゐ候ものかな、しかも其御最期の月日も今日に當ぬ、何とあげやゑござんすまいか、か樣に申せば我ながら、よそに思はぬ旅の客、草の枕の一夜成と、せめて契をもとめ給へ、私が仲人して山路樣にあはしません、殊に初音樣の妹女郎、くわしゐ事をも聞給へ、夢の浮世にすみながら、くすんだ事はむかし流、如何にも參らんと先に進みて中宿の、萬代屋が二階の箱ばしご、ありやそりやお客がとれたはと、聲の有程どよめくに、禿は耳に手あてあんまりじやかましい、初ての客樣へ、先盃といひさし表の方へ出たりぬ、扨は禿が發明にてすべなき事をにつこらしく、我々をはまらす手立と見へたり、迚もかう成かゝつたうへは、きやつが望にまかせ、山路とやらんを呼であそばん、佐内には誰かれ隨分美しきをと

指圖し、思もよらぬ慰、女郎には今が始の旅の悪性、此間のうさ忘れ所は山路の水な女郎、生八丈に淺黄うら、ふせん蝶の三所紋、通路とても廿の花、結城つむぎを空色にひつかへし、戀といへる小文字を五色の糸にてぬいわけさせ、揚屋入の道中、くるよと見れば奥二階、皆様やうござんしたと、云よりはや盃のもんだん、よやしらぶるとのつめひらき、此酒のあがらねは、肴に初音塚の物語聞たいと望まれ、禿二人は大盃を手々に持、座敷のまん中に居なをり、抑〻過つるいつの比、よしなき太皷にすゝめられ、名もいや高き西六、ほの〴〵明に京を出、時をきはめて近江路や此柴屋町に通ひぬ、去程になじみをかけし初音には、膳所よりかよふ器量よし、色にうつりて逢と聞、西六むつとわき心、是はりあいと夕暮より、四枚がたに打のり、山科の里ちかきこわたの關もよそめして、今宵は外の女郎に相坂の、關にせいたる籠の者すは三度迄ころびぬ、是はいかに、夜をふせらざるゆへかとあらけなく怒り、札の辻に籠を立かちにて急、揚屋をもさらりと替、丸やの小櫻に逢て様々のむつごと、もし初音方へ聞へなば、義理にもこゞにはおるまじきと、下座敷には太皷あまた、是見よがしの遊興、あんまり出來た事にあらず、がくと聞より初音、丸やの座敷に亂入る、亭主驚、大臣の座敷へはかなふまじきと立ふさがる、さすが女郎とて殿立に隔られ、さうのふあがるべき様なかりし所に、姉女郎の萬作と名乘、二階の先陣我なり、あらりやといふて小づまを揃、箱ばしごをふみ鳴し座敷に居なをり、傾城は互ぞかし、逢度はあわせんに、なぜ付屆はしやらぬと、小櫻がむなづくしを取、恨あらば折こそと互に是をいひつのる、西六下知していわく、下手に入ば胸ぐらさるべし、よは手に見せなばつよきと知るべし、ながれは立ても初音はつよし、互に刀を出すべしと、彼大臣のうつけによつて、こさなき事をいひつのり、互にざんげを現しぬ、朋輩の女郎我ながらふみもためず、追々にかけ付こぶしを握ひかへたり、去程に入亂れ我も〱といさかへば、大臣がたのみたる太皷ふたりもにげたりぬ、今は何をかこすべきと只一人、夜をこめ都の空へ歸る跡、初音小櫻死にめに成、座敷の床に座をしめ、さすが名を得し此身とて、よしなき事に死出の山、是女郎の習ぞと既にあやふかりしを、大勢立ふさがりめ

ん〳〵の親方へもどしぬ、初音は是を氣病にし、遂にむなしく成給ひし事、なんぼふほいなき物語と、さも面白く語るにぞ、さあお咄かみてました、お床〳〵とよんで廻ぬ、

(四)情を寫す自然居士

しめやかなりし床の內、ぐわちと見てぐわちの挨拶、水な事いへば返答なく、まだ戀なれぬ丹前佐內、山路通路にほだされ、行べき方を忘れ、一日暮て二日立、暫此里にかり寢をすれば、次第にむつまじき中とは成ぬ、され共丹前、形は美男にかはれど、元來六十のひね男、姿にかはる床の內、かなはぬ戀に焔、首尾とぐる迄いぐさりといわぬ計りの氣色、今様の女郎はふる事なくて、あわぬおのこはかゑてうらむ習ぞかし、かく迄山路を思ふ身の、誠の契埒あかぬは、男色のばちにてやあらん、斯る所に長居し金銀つかふはいらぬものと、思案の替て旅姿、杖わらぢとひしめくに、山路はまた色にほだされ、よしなき人になれ染思ひ切瀨を忘れ、此間の心づかい犬骨おつてせんなき勤、あながち振共見へぬ男、我七年の勤して、かく珍しき客に逢たる事なし、あわですぐるは習の里、思ふは戀路、いつ迄逢てもせんなき事、止むるは勤詞、名殘はいつも同じ事、御のぼりにはかならずと、門送りして出るや名殘なるらん、山田矢橋の渡し舟、此客にては危うしと佐內が目利、まはれば三里膳所の御城、あはづか原木曾義仲の最後所、勢田の長橋打渡りはや近江路、草津の宿には姥が餅の名物、ゑんまの帳の宿には梅の木村の和中散、石部とは堅い人の集りけるにや、戀の水口とはどうやらすいた所の名、未日高ければ土山にて一夜あかさんと、道中記を見ればうつたへと、いづれの旅人も稱美せぬはなかりき、次二里半八町、なんのその急げと脇目ふらずに行道柴、一里手前の松原にて人顏さらに見へず、もはやならぬと、松の根に腰打懸け煙草くゆらせ、此いきほひにとふむ足の、はや土山に宿もとめ中の間をかりのやどり、奥の座敷には、何物ともしれずさゝやくに氣をつけ、襖のすきよりさしのぞけば、あしゆらの如き男三人鼻つき合て相談、一人が云は、兎角はない草津より籠にのせ、すぐに伏見迄急、難波の色里に賣なば慥に十五兩はとるぞ、三ッに割て五兩づゝはくださる、隨分さとられな、合點じやと、舌引いれぬ所へ、十

四五成ける娘の風呂あがり、皆様おそなわりました、ごなた成とお入なさりませいと云、ゆるりと入はめされいで、先ので助入と丸はだかになるを見れば、かいなには明所なき入ぼくろ、胸の毛左右にわかりつめたに强さうなやつばら、きやつは人賣といふにぞあらん、あの娘が湯あがりの顏を見よ、柴屋町の山路に其まゝ、あんまりにたが不思議なれや、殊に旅なれぬをかごはし賣てやるには極ぬ、餘りふびんなれば、知らしてやりたい物じやと分別すれご、此くたびれには智恵の出ぬもことはり、爰は拙者に任せよと銚子盃とゝのへ、襖をたゝゐて是ので助、今日は見事な繪がつゐた、酒はこちらがもとめにて夜も共のみ明さん、おきよと云に驚三人一度に目を覺し、きやつらも我々同前、しかしめつたに返答するなと、ので助寢間をそろりと出、誰なれば酒のませんと云、ので助それは手がわるい、たとへ顏は見しらずと商賣は同じ事、見付てからの同宿一樹のかげも他生の緣、ちとあやからしてくれよと星をあてられ、三人ながらのみこんで商人は互、打こんでのめやうたへと襖をあくれば、丹前佐内はとぼけた顏、我々は濱松より東海道にて、護摩のはいをやつて見たれご、此沙汰露顯し今は天狗たのもし、又は文字ぬめなごにて渡世をくらせご、此間の不仕合、そちたちが中間へ入てくれまいかと片はだぬゐで語、わずかの勝負する心から、中間入せんとは、近比やさしい胴生骨、此うへからはあかすぞかし、あの女を京大坂へまはしたら何程の金にならふ、なんと買てくれぬかとなぶつて見る、賣らば買べし一口づけに三兩二歩、まけたといふて手を打てば、かための盃のんでさす、是まだるしと茶わん酒、みだれぬ先にと金子を出せば、三人けでんした顏付、うそと思ふてまけたりぬ、眞實ならば十四五兩の口一もんかけてもならぬといふ、其はなるまい娘をわたせと、互に是をいひつのる、娘驚き目をさまし、是やごの衆、わしは伊勢の者大津の柴屋町の女郎、山路樣といふは姉樣じや、母樣御氣色あしき故、今一度あわしませんと、ひそかに柴や町へ尋に行者、道しらぬ故かゝるうきめを見ますと、語程よめて丹前彌々はりつよく、いゝかゝつたが百年目買ねばおかぬ、亭主さはぐな我々は旅人、きやつらが此娘をかごはかして行と見て、たばかつて此仕合、うらねば金子いら

ずに買て見せん手立、所の代官へ訴へ海道の置目にせん、返答次第と太刀に手かくる、ゆするな旅人其手はくわぬ、命を捨ての商買、手なみを見せんと腰のまはりをさぐる、佐内おかしがつて、己らが腰の物は、最前此方へかくして置ぬ、手振ではたらけと笑けるに、今は力なくぼうせんとあぐんたる風情、丹前爰が思案と詞をやわらげ、兎角は娘がふびんからなり、幸是に路金の遣殘五兩有、是にて女をくれるか一ッ、爰が大事の分別ぞかし、何がさて御了簡能、命をたすかるのみ金子迄給はる段難レ有仕合、さあ爰はすんだ、是から亭主に賴事有、明なば此者を籠にのせ柴や町へおくり、姉山路にわたすべしと添文して娘に渡し、籠代萬事と金一兩なげ出せば、亭主悦ほの〴〵明に拵、籠の外におのこ一人相添、慥に渡して歸る迄、やから者を相手にし、酒のんで居る丹前佐内が心のうち、人皆感じけると也、

女大名丹前能四之巻終

女大名丹前能五之巻

(一)面影わたる角田川

戀のゆかりを求、思ひもよらぬ土山の旅寢、おくり籠慥に屆、請取がてら山路通路よりの禮文、殘る方なき文がら見るに付ての物思、又も逢たき心の駒、ひかへ止むるくるし屋の女、此宿の名物土產にめしませいといふに心付、過つるかふとの節句、此所にてのけんくわかくれなし、此あたりにてはなきかと尋しかば、馬方聞、しづかに〳〵此十一やといへるなり、語ればながいはなし、聞ば難波の書林より、土山龜山それ是取集、武道國土產と題し、櫻にきざめひろむよし、それ御らうじませばなぞがとけます、知れた事ぬかすと大笑、よねんなきもろ手綱、乘心能二寶荒神、かたみづら津に、坂はてる〳〵鈴鹿の明神、馬上の禮拜神もよそめやし給はん、ふりさけ見れば伊勢の海、あ野の松原村立來て、鬼神鐵火をふらせしは此所、田村堂も爰に有、くだれば坂の下、急心が關の御地藏、宿はづれ右へ行ば伊勢道、次手がてらの參宮、いざといふ

て伊勢路へむくもど◎ゝ、野わけの松原参り、下向の諸我おとらじと、御祓すげ笠に引しめ一様の染ゆかた、足をいためて参る人、お伊勢参りの歌をうたゑば、籠に乗人は地聲の謠、きやつは手前自慢かして茶辨當、戀の重荷は傾城と打見へ、わたぼうしのうへを淺黄ちりめんにて包、下に白むく、上着は茶ちりめんにもみうら一つ前にあはし、黑繻子の帶むつくりとした仕出し、大盡殿が鼻うたはるゝはもつ共、十二三のこめろと見へしが、煙草のみ〳〵錢かけ松とはどこぞいなといへば、籠の男が指さしあの松をこそ云也、昔より中比迄の同者、大神宮へ奉る參錢一文二文掛置、いつとなく千貫つもればとて、今は千貫松といゑり、いづれ海道の名木、是より津までは今少、左の方に一向宗の寺見ゆるは隱なき高田門派、へたといへる在所にて、籠の内を見れば柴屋町の山路なり、はつと氣もこたへ、すげ笠かたむけ隱るゝ風情、山路もそれとは知ながら態とそしらぬ顔、いわねどそれは合點じやと餘程水には成ぬ、きやつを跡に殘し先へ行んと、隨分急道の程、たうせい川に着て渡しまつ内、山路追着岸根に籠をおろし、尻目でにらむふた皮目、まねかねどさす舟の棹、舟長と見へしは五十ばかりの老人、川邊に舟をよせいざめし給へといふ聲の、我先にと乘渡し舟、折からの春雨にて水まさりぬれば、いづれも足を揃給へと、棹さしのべてこがれ行、丹前舟長に近付、むかふの森のあばら家に念佛の聲きこゆるは、如何なる故と尋しかば、さん候あれに付哀なる物語有、此舟の着内かたつて聞せ申さん、あの庵に母獨娘一人、手業には五色のあみを拵、伊勢參りの土產物、賣と織とにいとまなく、母に孝を盡し娘が足にてはごくみぬ、然共よる年の老木の風になやまされ、此十日許りの煩今を限りなりける時、娘母が枕に近寄、姉樣は我々ゆへ、大津の柴屋町とやらんに、ならぬ勤し給へば、逢給はんも不定なりき、暫いとまを給はれかし、姉樣を迎に參り、今生の暇乞させませんよし度々願ひぬれど、そちならで誰か我をかいほうせん、かみ方へ行人あまたなれば文かいて知らせよと、中々承引あらざりき、片便にては心ならずと近所の衆を賴、竊かに柴や町へ急ぎぬ、母此事を聞きつらぬく淚を流し、只二人有子だに、一人は傾城奉公とやらんに出れば、二度あはぬ習の里、妹獨を花共月共思ひしに、

如何に姉を思へばこて、今をもしらぬ母を捨、つゐに知らざる道筋、歸らん迄の思ひとは成ぬ、長生は恥の種、我なくば子共が行末めでたからんと思ひ定、おのれと食をとまり最後の時を待といへ共、ナウ時刻きたらねば中々息はひかぬ物、今に何事なくわたり給へど、病後の上に食をとまれば、命は有間敷と近所の衆が集、現世といゝ後世の爲、さいはい光の阿彌陀は是天照大神宮の御作にて靈現あらたなれば、村中願をこめ毎夜百萬遍を申さるゝ、若此内に年比十四五の娘、着類は花色に薬菊のもやう付たるなど逢給はざるかと、さほさす手も力なく〳〵語ぬ、舟中同音に扨哀なる物語、我も見ず我もあはずといふ内舟むかいの岡につけば、各詠てとをる、殘るは丹前佐内、山路は身の上なれや、聞とひとしく小づまを取、我しらず走り行ば、大臣と見へしがとゞめ、今の咄を聞かけ出るは心得ず、樣子有やと尋られ、今は何をかつゝまん、舟長が語しは自が母也、我苦界十年の内、出る事かなはぬ勤の里、此間夢見あしく古郷なつかしき折から、獨の妹はる〴〵尋來り、母さま今を限りと聞より勤もそまつに成、親方へ隙を願ゑど、傾城やの作法にてかなはぬよし、是非なく妹を替に立、夜に日につゐで急ぐ道、かたさまの情らしき御詞にあまへ、是迄御厄介に成まして來りぬ、もはや御暇申ぞかし、御そくもじにて追付御下向ましませと、につこり共せぬあいさつ、此男腹を立、扨はおのれは身をふづくつたり、道すがらぬがすには、とても行ぬけ參り、道連に賴といふを誠と思ひ、草津より是迄土もふませず、籠代ばかりか何から何迄氣をはらし、今に成て隙くれとはいかな事ならぬぞかし、我も花の都で傾城の一つ買もした男、己れ如きのやす傾城に、つもられては一分立ず、詞やはらかなうちいくまいかとさん〳〵に打擲す、丹前中に入、珍らしの山路、最前そなたとは見たれど、あなたの御世話に成てかうした事か、左もあらば不首尾にもと思の外な道連、爰は御了簡にて是よりお隙をつかわさるべし、親子といふに僞なし、是非つれて參らんとの給ふ程心得ず、御自躰にこそよるべし、疾いそぎやとつきはなせば、扨は曲輪にはやる密夫男、其手はくわぬとひしめく所へ、若者四五人かけ付、大盡と見へしを取て押へ、おのれ故に我我が難儀、勘定の風くらうて欠落すると見へたり、歸

て旦那へ白狀し、すみやかに籠者(ろうしゃ)せよ、一定の馬がくるへば我々迄も疑はれ、いたまぬ腹をさぐらるゝ、先此着物がおごり、丸はだかにして木綿わんぼを着せれば、たちまち下郎の姿と成ぬ、きやつさへとらゑば浪風しづまるぞかし、籠の者にまし錢とらす、油斷なくいそげと取まはして歸るなど、目前の恥是にすぎず、我人たしなむべきは此道、初めの程はにくかりしが、心がらとていかなるうきめや見んと思ふはよしなき人事、こちとらは何事なく此所にて逢たる嬉しさ、太神宮の御引合にて、思ひもよらぬかた樣にいろいろの御世話、私ならず妹迄何から御禮申ましやうやら、わけもない者と道連に成、思ひもよらぬ日を暮ぬ、見苦しけれど今宵はわしが古郷にて、一夜あかして旅の休足、母樣御氣色よくばお禮はわしが懷の內、さあござんせとつれ立て行、

(二)妻紅畧女熊坂

丹前が情にてあやふきを免れ、我古里に行ぞ嬉しき、母たる人の枕に近付久々にての對面、妹が事もあんごさせまし樣々の看病、殊に光の阿彌陀の利益により、病氣次第にげんきをゑ、元の如く本腹すれば、山路を始丹前佐內近所の者、悅事かぎりなし、是ひとへに太神宮の御哀み深きゆゑなり、せめての身祝または親への爲と、山路が茶を立、隣のおかたむかいの姉、彥作のばゝ太郎介がとゝ市松がおば、打まじりての茶のみ語、お松といふた時はわるさしたが、都の水なれや此ごとくみめよう、つまはづれ迄尋常に果報な事、其上色々の土產にあづかりし嬉しさ、何をしたればとて骨おしむ事なし、かまへてお袋の事あんせずと奉公を大事にかけ、よい殿もつてやしない給へ、我人もつべきは子也、皆の衆隨分をだてゝおきめされと、小半酒に田もやろあせ道、千鳥足にてめん〳〵が軒に歸りぬ、世間の義理をすまして後母にむかい、か樣に本復し給ふは、光の阿彌陀太神宮の御加護、殊に御近所衆のかいほうつよき故なり、いつ迄付そひまいらせてもあかぬは親子なれど、自とても勤の身妹が事も氣にかゝりぬ、先あみだ如來へ禮參り、それより太神宮への心ざし、何が扨心まかせ丹前樣へあづけます、けがなく下向めされと、門おくりして神にあゆみをはこぶ心、我里はなれての道草、露のゑにしをむすび、かりの旅寢にあさましき親里を見せまして、

はづかしながら勤する身は同じ事、丹前とても不思議の綠、樣子有て我名古屋ゑ行道筋、兼て御參宮の心指、若もあやしき事あらば、兩宮ゑの願むなしからんに、何事なきはめん〳〵が仕合、彌〻行末めでたからんとむつまじく語る内、はや光のあみだ佛前にひざまづき、かんたん肝にめいじ、逆も壽命長者に守せ給へ、追付鐘のを五色のきぬにて掛奉り、又々御禮參り仕らんと心程なる願をかけ、下向にいそぐ〳〵もづ松坂明星が茶屋、是ほど嬉しき參り唐にもあるまじ、伊勢のくし田のまん中程には五智の如來、かゝるたつとき佛さまを、こちが里のぞめき歌、賤しき我々が口にかゝるはもんもうな事、ゆるさせ給へと夕暮方、宮川にてこりを取、山田の町のにぎわひ他國に及なき繁昌、心もいその神外宮のほとりに町宿とり、小座敷一間かり切、旅くたびれの肱枕、御參宮にてあらずば揚錢いらずに山路は忠度、あつたらかねを獨寢させる事と、佐内は舌皷打て夢をむすびぬ、其折から二十許りの女、形すぐれていやしからぬ風俗、長範頭巾に舞扇子、枕もとに提、はづかしながら私の夫此廿日餘りの頬、はたらく事のまゝならず、獨うつ皷のなれのはて、かなわずぶしの女舞、習置たるをたよりに宿々に立入、つきも拍子もなき一かなで、御參詣の方々樣ゑ恥をすてゝの袖乞、情は人の爲ならず、福貴延命子孫繁昌目前の道理、御ぶじにての御參宮、御祝儀迄に一さしと調子はりあげ、是ぞ熊坂の謡「爰に三條の吉次信高とて、毎年數多の寶をあつめ、たか荷をつめて奥ゑくだる、あつぱれ是をとらばやと思ひ、より騎の人數は誰々ぞ、扨國々より集りし、中にとりても江州には、河内のかくせうすりはり太郎兄弟は、日本一の功の者面打には並なし、扨又都の其内にあふき中にもたが有しぞ、三條の衞門みぶの小猿、火とぼしの上手分切には、是等に上はよもあらじ、扨北國には越前のあそふの松若三國の九郎、加賀の國には熊坂の、此長範をはじめとし、くつきやうの盜人七十餘人與力して、吉次が通る道すがら、野にも山にも宿とまりに、目付を置て是を見す、此赤坂の宿に着、爰ぞくつきやうの所なれ、引場も四方に道多し、見れば宵より遊君するゑ、酒はくのあそびに時を移す、夜はたかけれど三人前後しらず臥たりぬ、うたでや女か出來心、よしなき所に心をつけ、丹前が枕箱是を取んと目をくばれ、

時分はよきぞはやいれと、わざと謡にまぎらかしまんまと取て出んとす、折ふし山路目をさまし、にぐる小褄をしかと取れば、おそれてどうとまろびしを、すかさず上に乘かゝり、扱ふてきなる女、もはややらぬとしめつけられ、女と思ひ油斷し、手ごめにあいしは何事ぞと、身をもがけ共天命の、運のきはめぞあはれなる、聲に驚丹前佐內、何事なると立寄樣子聞て、お手柄々々、先つら見んと、ともし火かきたてよく見れば、枚方にて逢たる傾城志賀なり、是はとあきれ、そちは何故かゝる手はざをする、樣子こそあらめと尋しかば、此女淚ぐみ、誠に不思議の御ゐんにて又も御めにかゝる事、嬉敷共又は面目もなき次第ながら、樣子を語りませねばすまぬ事、おの〳〵樣の情にて戀しき山崎殿に逢まし、互にむつまじくは有ながら、いとなみにせまり此所に下り、ぬしを相手にはづかしながら、辻能をして渡世を暮ぬ、然るに山崎殿此二十日あまりの大病、醫師殿の申さるゝは、人參いらずてはげんきはかどらぬよし、いかに思ふ男なればとて、金といふ字に疎まれしわれ〳〵、何をしろなし與へんに力なく、こよひは我と思案の定、たとへいかなるうきめに逢共、人參にて留まる命ならば、ぬすみも耻ならずと皆樣の座敷へ參り、樣子を見れば餘念なき躰、首尾は爰ぞとおもひつめたる盗ぞかし、是程耻はさらせ共、まだわしが身は死にとむなし、山崎殿の命のあらんうち、助給へといふ詞に哀をまし、山崎とは互にかはしたる一言もだし難し、幸なれば對面し、ともに養生させ參らせん、外にてならば危ふきに、つきせぬ緣かして、また御目にかゝるはふしぎと山路にも引合、同ながれのすいと〳〵、女郞にはせんじてのませ度心中、わしにもあやからして下さんせとは、人にいやがらす御あいさつ、どうした緣やら山崎殿のいとしさは、語るもいふもはづかしや、お前とても其通、さればこそ陰陽の二柱ゐ夫婦づれの御參宮、さりとはあやかり物といふ、丹前聞、是には入くんだはなし有、樣子は重てかたらん、先めでたい盃々、

（三）神樂舞宮雀の三輪

久かたのめぐみつきせず、殊に天照國津にて逢事、山崎なつかしければとむかひの籠、夢のさめたる顏あをざめ、誠にせつなき病後の躰、やう〳〵與にとをり丹前佐內に對面し、命あればくらげも骨といふ世話、

おの〳〵の情にて逢て嬉敷志賀が事、先立て承り面目もなき次第、是ひんと病がなせる事、甲斐なき女の智恵ながら、おつる所の罪此身より外しるものなし、然ば先祖の名をくたし、淺間敷死をさげん事口惜、しらねばとて人誠とは思ふまじ、外にてか樣の事あらば、何とくやめばとて其甲斐あるまじ、氣も心も御ぞんじあればとて此云譯たゝんや、女に恨有ながら恨が戀のしがらみ、ひんの盜みにうたでやよしなき病に取つき、とてもなき我命ながらへてゐきなし、段々の御情死してわするゝ事なし、さらばといふて佐内が脇指、既に自害と見へしを人々押とめ、我々は參宮人それとしつての無分別、そこつに血などあやしめなば、願むなしきのみ神の咎とをかるまじ、御自分よびに遣す事、久々逢ぬなつかしさ、殊に女の身の、一度ならず二度迄、男思はるゝ心をかんじ、とも〴〵養生させん爲なりき、其心底をむ（◎なしカ）そくし死なんとは不心得、夫侍は主君の爲おしからぬ命を存へ、夜盜辻切などし身命をつなぎ、二度くわいけいの耻をすゝぐ、色こそかはれ品々の夫を思ふ心指、いづれの人が聞きたればとて何程の事かあらん、兎角を振捨今一度本復すべき思案こそあらまほしけれ、幸是に人參有、ゐん慮なく心まかせにのまるべし、善はいそげ今宵からして、のんで見られと力をそへられ、山崎夫婦涙をながし、いか成縁にて度々のかうおん、何としてか報じ申さん、おしからぬ命なれど、御いさめにまかせ兎も角もと、藥取寄せ自ら煎て是をのめば、不思議や其夜半より元氣あらはれ、むかしにかはらぬ風情、誠に神風や伊勢兩宮の御めぐみ、悦の心指何かもてなし度夫婦が望、幸今日は吉日御宮めぐりしかるべし、伊勢路の案内、神主より上まいさる程、慥に覺たるが御馳走、いざ御立とすゝめられ、山崎夫婦はゐぼしのひも引しめたる白裝束、中平の扇子子細らしく御先に立、宮雀より小まやかに、ゆふしでちらす神風、伊勢の宮立物ふり、殊に兩宮はしん〳〵と神さびたる御すまひ、是こそいざなぎいざなみの御尊、御國ゆづり給ひし天照御神、事もおろかや御本社は餘の御社にかはり、丸木柱にかやの御屋根、ぐもつはみきねきねが神樂をまいらすぞかし、古の木の丸殿をなぞらへ、どかい三尺ぼうしきらずと聞へしを、宮に移させ給ふ事、民を憐み玉ぼこの、道の道たる御恵み、世界

國土を守らせ給ふ、末社は八十末社なりき、扨又外宮の御社は此神の第一王子、あいにあいどの太神宮、末社は四十末社なり、雨の宮風の宮月よみ日よみ、あまの岩戸のくらき夜の、迷ひをてらせひのひかり、とても神代の物語、くはしく語奉らんと、山崎夫婦扇子をひらき、まづは岩戸の其はじめ、かくれし神を出さんと、八百萬代の神あそび、是ぞ神樂のはじめなるとかなでければ、丹前佐内拍子にのり調子はりあげ、千早振岩戸を引立て、神は跡なく入り給へば、とこやみの夜とはやなりぬ、八百萬の神たち岩戸の前にて是をなげき、神樂を奏し舞ひ給へば、天照太神其時岩戸をすこし開き給へば、又とこ闇の雲はれて、日月光かゝやけば、人の面しろ／＼と見ゆる、おもしろやと神の御聲の、たゑなるはじめの物語、思へば伊勢と三輪の神一躰分身の御事、いづれも諸願成就なさしめ給へ、かたの如くの亂拜、すぐに淺間山福一萬こくう藏坂を登れば、びくにあやおり色道女が前後につどひ、まきせんを願へばひにん同前、あの姿なれど、いにしゑより傳へ來る所の習ひ、是非もないうき世ぞかし、ふた見ゑくだる追分の茶屋、參り下向を見て、大坂の誰樣江戸の權七さまへ心得て、京のどなた、河内はりま長崎のと、國々をさしてちがへぬは、どこに目じるし有やと大笑してくだり坂、ふた見の浦に急ぐ夕暮、

(四)旅寢の夢衆道忠度

神代のふしぎ二見の立石、御鹽殿はほらの如くしつらゐ、御酒御前を奉るは天照太神此所に御座のよし、心指の蜑まづ二見にもふで、鹽ごり取て兩宮へ參り、宮めぐりする事本意ぞかし、海おもて眺やればはや暮かゝる山のは、二見の宿に夜をあかし、思ひよらざる山崎に逢て、ためしなき宮廻り、名殘をしき下向の道、津迄は同道すべきが、子細有て我尾張の名古屋へ行ぞかし、追付京都へ登りゆる／＼かたらん、扨山崎夫婦は一先京、祇園夢樂坊方へ此狀たよりに尋、心底を語り頼給へ、此法師たのもしき者なればいやとは云まじ、別て千世之助事は、先立て咄通り筑紫に於て名有息女、色香にそみ夫婦とは成しかど、樣子有て本國に下り給ひぬれど、追付御のぼりは夢樂坊が御宿なり、其時分右の段を語り、我々のぼる迄付まとわるべしと、前後の手はづをきはめ、扨品玉もたねなくてはと金五兩、次手なれば山路を柴や町へ廻、妹に人を

そゑお袋方へもどさるべしと、是にも相應の心づけ、山崎夫婦嬉し涙、とすれば情かくすればの御恩、生々世々忘がたき品々、扨山路樣の御事少も御氣遣あるまじ、我々夫婦御供申うへは、憶にわたして後むらく坊樣ゑおちつくからは、千世樣の御事早速御しらせ申さん、夜も更ぬれば御やすみと、夜明がらすを合圖に立出て道の津、丹前佐内は上野とやらんを其夜のとまり、是より別れまいらすと互に名殘を惜み、涙片手にさらばく\の聲、すがたは見へずなりにき、山崎夫婦は山路が里に一宿、それより柴屋町ゑ憶に屆、妹は姉が世話にて母方へもどしぬ、山崎夫婦の者は夢樂坊がのみこんで、祇園町に小見世を出し、志賀が手づまの作花して、月日の關守を重ねしと也、津より別れし丹前佐内、上野を過て四方の空、白子神戸を跡になし、四日市より桑名迄三里八町、わたしをまつに程なく乘合舟、とまをしきねのかぢ枕、七里の內は夢結び、尾張の名古屋に入相の鐘、町宿とつて尋る人は城下の片里、光尾助太夫とて父方の伯父なりきを、漸尋出し、樣子をとへば八年以前に果給ひ、只今は子息助之丞殿、跡目つゝがなく先月十八日江戶へ御下り、當年中はあの地に御座のよし、出入の人の身の上をかたれど、誰がしる者あらねば不首尾にして宿に歸り、是より武藏へほどもなし、つゐでがてらの見物佐內も同心かさいはれ、とても乘出したる旅の空、五日十日に目利は有まじ、いざといふて急ぐ道、八つの鐘を七つとかぞへ、是より先は野道しばらく此軒にやすみ、明なばゆかんとわらはやがゑんにきの字なり、殊更に咲櫻の香、行暮て木の下かげをやどゝせば、花やこよひの主なるらんとの古歌をつらね、隨分ねる合點なれど、春風の吹につけて目もあはず、寢たりおきたりく\、是を題とし發句して明さんと互に思案中ばへ、白き物がちらりとをる、あやしや狐ならんと星月夜にてすかし見れば、十四五の若衆小袖に玉だすき、はちまきしめたて、すぐに目くぎあなの用意、つばくつろげてしやんと打込む音、柴に腰かけたぞ待顏の風情、佐內見られよとおしゆる所へ、廿あまりの男是も白むく、す鑓ひつさげかけ付、千太郞殿さぞまちかね給はん、誠に侍のいぢ、ぬし有る御自分に心をかけ、思ひきられぬ男色の道、こがれ死なんより打果し、冥途かうせんにてはらきらんと、最後を今日只今

さす、いざと詞をかくる時、千太郎打笑ひ、仰の如く前髮の役、兄分折之介殿と、三とせを重いとしさのみなり、是程思ふを外になし、いかに御心底嬉しければとて、御心にはしたがはれじ、折之介が知る事にあらねば、ひそかに打果し、ほまれを此國にのこさば何事かあらん、くど〳〵いふがつゐへ、さあといふて切てかゝる、牛藏はすし鑓、もつてひらゐてめつたづき、堤の岸根につきこめ、ぬかんとせしをふんごみ、右のかいなを討落せば、左の手にて刀をぬき、若年者とあなどり深入せし事の口惜、とてもかなわぬ上すみやかにうたれん、はや首とれと刀を捨ていなをれば、心得たりとよる所を、片手にて引よせ膝の下におつぶせ、日比の無念せめての腹いせ、刀なくともくらゐ付我も死なんと、既にあやうかりし所へ、丹前佐内かけ付、牛藏をけたおし千太郎をかこゐば、扨は助太刀有と見へたり、一人ものがさじと思ひきりたる死に物狂、左の手にて佐内を取て投しかど、深てなれば次第によわり、西の方に向ひ南無阿彌陀佛の一聲、其夜の露ときへたりぬ、すかさずとゞめをさし、かへす太刀にて腹きらんとせしを丹前とゞめ、我々は旅人なれど、御自分たすけん計りに罷出たり、是程よき首尾あるまじ、末夜も有内いづ方へも落給へ、幸武藏へくだる者共、見へがくれに御供申さん、はや御立とすゝめられ、近比難レ有一言なれど私も侍、人を討て立退などみれんぞかし、そこのき給へとふりきれば、いやとよ、私の意趣にて一命をすつるは不忠、命をまつとう主君のせんごを見とゞけ給ふを、誠の武士とは申ぞかしと、諫められて返答なく、然ば御指圖にまかせ一先立退申さんと、兼てしたゝめ置たる書置、くゝり付んと牛藏が死害を見れば、幾年ふるともしらぬ古だぬき、人々驚立さはげば、千太郎つく〴〵詠、誠に思當りし事有、三年以前四月十八日、犬山におゐて女狸を射殺しぬ、其いこん忘れがたく牛藏とさまを替、衆道に事よせ我をうたんとせし所に、さすが畜生の淺ましさ、却て打れし事過去生々の約束ならん、もはや立退に及ばずと、丹前佐内に一禮のべ立歸らんとせし所へ、兄分折之介尋來り、樣子聞てめでたい〳〵此段上ゐ申上あげんと、打つれ立て歸るあけがた、

女大名丹前能五之卷終

女大名丹前能六之卷

（一）女郎花が作る杜若

はかどらぬ旅、爰かしこの難義見捨がたく、出るくいのうたでや、武藏迄は脇目ふらずに急ぐ道、三州岡崎の町はづれ、日たけぬれば今宵は爰にと、佐内は宿の目利、相客なきをとのぞゐてまはる右手の方、長のをれんに杜若屋の小紫としるし、風流なる見世作り水打の作花、所がらとて杜若の一色、かけねなしに一枝を一匁、色は買手が心まかせ、あるじと見えしは三十許りの女、髮は後家風に折わげ、十二三とおぼしき小女を相手にやさしき手わざ、往來爰に山をなし、京土產江戶みやげ、二枝三枝籠につらせ、行も歸るも花よりあれをと、穴のあくほど詠やるは、どこからどこ迄色にうつらぬ人もなかりき、丹前も花もとめんといふに、かの女ふりあをのき、やつはし花しんぜませいといへば、あいといふて色々を御目にかくる、あれか是かと心の花にうつり氣や、つくればこそ時ならぬ花の色、かほよ花とも申らん、あらうつくしの杜若やと暫詠けるにぞ、八橋小ざかしげに是旅人、花はめさずし、なんぞ御用ばし有てやみすませ給ふか、お望なくば御通とあたらぬ樣にいはれ、されはこそ我々は武藏の方へくだるもの、今宵は藤川にてあかさんと、思ひもよらぬ此見世の花に心をうばわれ、思はず時をうつしぬ、して先爰はと尋しかば、さん候、此所は三河の國八橋とて、杜若の名所なり、御覽の如く時ならぬ、盛の花を作りなせば、おのづからまがゑる花のおもざし、みづからが賴しかたは、色も一しほ小紫とて、ゆゑある人のゆかりぞかし、我が名も所によそゑて八橋とは、なんときつゐ思ひ入かと、しほらしき詞のはし、扨こそ只ものならずと猶ゆかしく、爰は我にいわせと丹前すゝみ出、此八橋の杜若は、いにしゑの歌人、よまれし人は何人ぞ、さればこそ伊勢物語に、八橋といゑるは水行川のくもでなれば、橋を八つわたせるとなり、殊に澤邊に杜若の咲亂けるを、或人杜若の五文字を句の上に置、旅の心をよめといひければ、唐衣きつゝなれにしつましあれば、はるはる來りぬる旅をしぞ思ふと、讀給ひしは在原の業平、みちのくに下り給ひし時の御歌也、げに思ひあたりし八橋の、澤邊に盛る杜若、はるばるきぬる旅人の、日に行暮れ

て軒もあるまじ、見ぐるしくは候得共、白が庵にて一夜御あかしあるまじきやと、情らしくとひければ、うれしや爰にとまれとは、思ひの外なる旅の宿、御詞にすがり、一夜の情かり衣、きつゝなれにし妻もなければ、心ばかりの松折くべ、澤邊の水の淺からぬもてなし、契し人は一昔、人のおつとを羨み、明暮物や思はるゝ、か様に御宿仕るも、過去の約束にてぞありけん、御不自由は旅の習、御心安くふしどは奥座敷、御支度よくば御休と、物語の片手には花作りてもてなし、丹前佐内くたびれは外になり目もさゑ行月、さぼし火のひかりに床の間を見れば、ひごんすの長羽織、金つばの中脇指、立髪鬘かけ置たり、ふしぎやかゝる片里に役者のきるべき鬘など、如何なる人のゆかりぞと尋られ、此女涙ぐみ、忘れて年をへし物を、思ひあへぬ御尋に預かる物かな、よしある人と見る上はあらまし御物語申さん、恥かしながら私は、江戸吉原三浦屋の松の位小紫がなれのはて、我々が身の勤くがい十年と定、禿の間はすたるぞかし、つき出しより思ひよる浪樣と云ふ御客に、逢ふ逢たりあしかけ六つの春を重、死なば一所もふるめかしく、六年目の秋の暮、根引迄の御厄介、目黒の不動のほとりに小座敷かり、晝夜御通ひことに身うけの沙汰あしく、浪樣の首尾散々にて、剰阿房拂と成給ひぬ、其後御出もなく、あかぬ別の鳥を恨、いかなる方にましますと、御行方のみあんせしうさのやまひとは成ぬ、其時の我心御推量有べし、誠に思ひ切のつよきはものゝふぞかし、あれこそ御形見の品々、迚もの事に姿を替御物語申さん、先此立髪は人目しのぶの玉かづら、打かづきて長羽織さすや一腰くまがへ笠、なんと男に似ましたかといへば、兩人口を揃、世界は自由忍女が男となる世の中のさかしさ、扨其後はと尋しかば、さればいなかうした姿して、はるばる來ぬるから衣、きつゝなれにし妻ゆゑと、別にのこし給ふ言の葉、思の露の忍ぶ山、忍びて通ふ道柴の、露もいとはぬ中ぞかし、されば此鬘を業平の初冠にたとへたり、然共世中の人界の有樣、一度は榮一度はおとろふる習、誠なりける身の行衞、私ゆゑに浮名を流し、さしも美々しき其身なれど、よるべさだめぬ身と成給ひぬ、せめて尋もやせんと東の方に行雲の、伊勢や尾張の海づらに、立浪を見ていとゞしく、過にし事を思ひつゝ、浦山しくも歸

る浪かなと、打詠行ば信濃のなる、淺間の嶽に立煙、遠近人のみやはとがめそと口ずさみ、猶はる〴〵の旅の空、爰かしこを詩しかど戀しき人に逢事なく、せんかたつきはて、此三河の國にしるべをもとめ、渡世の爲澤邊ににほふ杜若、幸我名も小紫のゆかり、つまし有やと思ひぞ出るあづま人、かゝる物語は其品ゐまた有ながら、取分此八橋や三河の水の底ゐなく、契し人の面影を、現に成と見まほしく、色を替品を替、つまゝつ女といはれしは自が事なり、月やあらぬ春や昔のはるならぬ、我身一つは元の身にして、本覺眞如の身をうけ、傾國諸分の水とよばれしも、是浪さまのかげぞかし、か樣に申を必ずしもうたがはせ給ふな、誠は我つまの行衛しれざるを歎き、こがれ〳〵ていつとなく、此八橋の澤邊に身をなげ、杜若の根にしがらみ、遂にもくづとなりし妄執の姿ぞかし、旅人あまた有ながら、戀しらぬやぼのみ多く、是ぞと思ふ男に逢ず、おの〳〵方は情らしく、戀に色有殿と見て、かりのやどりをこなたよりまいらせ、恥しながら身の上を、さんげする事餘の義にあらず、こがるゝ男牢人のいとなみに迫り、武士をやめ、今は堺町の役者中村七三郎と名を替、昔にまさる色男、狂言師に身をなし給ふ事、神ならぬ身とて我存命のうち露しらず、身を此河に沈め、戀しと思ふ一念にて妻の行衛をしりぬ、さすがの浪といわるゝ侍、役者と成給はん事釋迦も御存知あるまじ、歸らぬ事ながら取かはしたる起請の罪遁れず、未三津に迷ひぬ、是を七三郎樣にわたし、わし方よりつかはしたるせいしを取かゑ、御のぼりに此澤邊に流し給はらば、まさに成佛うたがいなし、くれ〳〵頼まいらすと守袋をたわし、つくれる杜若の宿、色計こそ誠なれ、昔男の名をとめ、花たち花の玉かづら、是ももどして給はれと、いふかと思へば姿もなく、さらばの聲木末に聞へ、夜はほの〴〵と明るしのゝめ、朝紫の色もなく、澤邊の枕に目をさまし、あたりを見れば守に鬟、夢現とは思へども、いやといわれぬ形見の品々、又々世話をもとめながら、たのまれたが因果ぞかし、心やすかれ届まいらせんと念比に回向し、夜に日につゐで急ぐ武藏野、

(三)老ぼれ戀慕山姥

箱根の御番所打過、音に聞ゑしかしの木坂、歩にて行さゑ餘程の難所、小田原の町に入時は七つの比、つく

づく此所の名物を見るに、情がましき男色我おごらじと出立、めん／＼が見世に獨ふたり、海道一の名物、小田原外郞めしませいと詞のはしに氣を付、爰もさながらやさしき商賣、たとへば重之丞折之介小源太龍之介とて風流なる名をつけ、花やかなる商内我人土產にめしますはことはり、丹前之介も相撲屋の小源太といふにて、二朱が外郞もとめ、小人がおもざしつく／＼詠、我かゝる旅に赴は元來敦盛の繪姿よりおこり、老の浪よりくる年も若やぎ、かわれる女の面影にうつり、互に夫婦のかたらひをなし、夫故の耻辱一家面目をうしなひ、武士のいぢをはつて無念のはらさん爲、しらぬ東にくだりぬ、されば樣々のうき事を見聞も此身のしゆぎやう、急がぬ旅ならば此所に逗留し、小源太が情に預り度物ながら、佐内が思はん所もはづかし、人はたゞ色にほだされ浮名をながし、替なき身を捨つる者多し、戀のおもにの埒明ぬうち、いらざる事よと我と心に了簡し、町はづれに宿もとめ、明を待間のとけしなく、寢られぬまゝの口ずさみ、手皷うつて夜るの友、佐內は口笛の名人、松風ともろとも聲すみわたる谷川に、手まづさゑぎる曲水の、月に聲すむみ山かな、あらものすごの深谷や寒林に骨をうつ、靈鬼なく／＼前生の業をうらむ、深野に花を友とする天人、かへす／＼も幾世の善をよろこぶ、いや善惡は不二、何をか恨何をかよろこばんやとうたひければ、奥の一間にあるじの老女此聲に夢おどろかし、障子のすきよりさしのぞき、丹前を一目見、我此年月、いくたりか男ゑらみに日を重、漸七十年の春秋を暮、つれし夫は二年あと、はかなく成し面影のちりほこりも殘ず、ちかい後家の獨ずみ、男の子供にやしなはれ、寺道塲の庭にまいれど、つらゐ嫁子のさいそく髮をもおろし、明暮稱名となへとは、我子ながらも不孝の一言なれ共是非なき世渡り、恨みは愚智ぞと思ひかへ、おもしろからぬ寺參り、心に染ぬ念佛の聲、うとましながら申ぞかし、迚も色より出たる此身、色にて死するは誠ぞかし、殊に今宵のとまり客、近年通る旅人には、花めずらしきやさ男、是非にくどいて姥玉の、夜るのふしどをかさねなば、何の思ひか有明のともし火かき立、おはぐろつぼかねくろ／＼と、つくも髮雪の如きに油を付當世の折島田、鏡にむかひ見るに付我寄年を恨、かゝる姿にてなか／＼お

おとはいふまじ、何とぞ形を替枕に近付、くどきおとしてあとは我もの、如何と思案出來分別、幸孫がもてあそぶお山のめん、是をかづゐて頭の雪、綿帽子にてかくしなば、若木に歸る花盛、少しは殘る昔の面影、幸とぼし火吹けし、爰かしこもてあそび箱さがし、まごがわるさして、角おとしたる鬼の面、手にあたるを嬉しくうちかづき、かゞみし腰をのしきつて、閨はあやなしさぐり足、兩人一十を聞すまし、うたてや老ぼれが仕業、どうもたまらぬ程おかし、なぶつてあそばん尤とうなづき、そりやこそくるはと空寢入、夢にもしらで老女漸枕により、迚もはやほにあらはれし我が思ひ、ひなにも戀はあるぞかし、都の人と添寢せば、未來は佛果の緣にひかれ、佛に成ん事何のうたがいかあらん、是旅のお客とゆりおこせば、丹前態とらぬ顏、姥玉のくらがりまぎれの忍び妻、門ちがへかと存ずれば、はや〱歸給へといふ、姥玉とはよその事、我身は未十六夜のまだ宵月のまゆずみ、振袖きぬは所がら、腰の少しかゞみたるは、親達のわざぞかし、其外何のふそくかあらん、所は宵より見て置ぬ、かた樣がいやならば、こちらの殿でも自は、くるしからぬと手をとられ、佐内ふり切おそろしや〱、眼の光は星の如く、面は死の鬼一口、こよひはじめて見る時は、露とこたへて消たき思ひ、ゆるさせ給へと跡ずさり、時に老女ふしぎをなし、何自が姿を鬼と仰候はうらめしき御詞、何をか見付さはの給ふ、鬼といふが不思議ならば、庭前の水鏡にて見給ふべし、仰迄もあらずと手水鉢をさしのぞけば、うたがひもなき鬼の顏、なふ情なやうつくしき、お山の面と取ちがゑ是をきたるは何事ぞ、旅人のおそれ給ふ事かへす〴〵もことはりなり、もはや望のかなはぬうへ誰をか恨ん、よしあし引の山姥が姿かくこそあらめ、我身ながらもおそろしやと、面をとらんとするに離がたく、生れ付たる如く成き、そも何の因果にて、生ながらかゝる姿と成、いかでか人にまじわらん、抑昔の山姥は、生所もしらず宿もなく、只雲水を賴にて、いたらぬ山の奧もなし、然ば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかゑ、かりに自性をへんげし、一念化生の鬼女と成て目前に來れ共、邪正一如と見る時は、色則是空其儘に、佛法あれば世法有、煩惱あれば菩提有、佛あれば衆生有、衆生あればこそ此姥も戀をすれ、柳はみどり花は

紅の、色と云曲者ゆゑ、かくはづかしき姿を見せまいらすぞかし、さなきだに山姥も情と云をしればこそ、或時は山賤の樵路にかよふ花の影、休むおもにゝかたをかし、月もろ共に山を出、里迄おくる由もがな、われはそれには引替、善のすゝむる嫁子をそしり、剩此年迄色男にほだしをうたれ、煩惱のきづなやゝむ事なし、今迄の因果つもりてよしなき耻をあらはし、明なば何とかいふべし、天道の罰とをからずして目前のくるしみ、只今迄の惡をさつて善にもとづき、後世をもねがい嫁子にもしたがはん、何とぞ此面こよひのうちにおとし給はれ、南無箱根三社權現と身を打てなげきしかば、一家此聲に驚、何事やらんと立出しを、丹前押とめあらまし樣子を語、親子なれどこよひの對面は御無用と、利にせめられて子共嫁、あら涙を流し本のふしどにいれば、兩人も氣味わるく、夜もすがら目もあはず、光明眞言のどくじゆの內、明方つぐる鐘のこへ、現なき老女が枕に近付、心は如何にと尋しかば、はつと答ておきさま、ふしぎや面おち元の如くの姿となれば、老女は夢のさめたる心地、人々を千度拜し、かく迄佛緣ふかき方々をとめまいらせ、此姥が惡心をさるのみ、心の鬼の角もをれ、昨日に替る心の闇、今と云今はれわたり、佛にかしづく心指、此よし嫁子にもしらぬ人にも咄給はゞ、女なるものゝ手本共なるべしと、今こそ誠のあいさつ、其心からは一念ほつき、菩提の道に入給はん、今より後はたのもしの心、もはや歸ると暇乞、御のぼりに必と、老女は姿の有程見おくり、立歸つて自ら髮をおろしぬ、惡につよき者善心にもとづくとは、かゝる事をや夕暮の露、

（三）尋來て見る柏崎

先の宿には大磯小磯、平塚には美男石、是なん虎が石共いへり、藤澤には小栗の古跡、とつかばとして行ばほどがや、かたい所かして金川、此河崎は心やすし、渡らずして品川、入口のゑんま堂十王十躰眼をひらき、善惡人のつみとがをあらため、手帳にしるし給ふ、此像四方にみち〳〵なれどとりわけおそろしく、日本橋を渡る時ひるの比なり、此はとりに知る人有をたよりに宿をとめ、先心あての光尾助之丞屋敷をたづね、下部に近付樣子を尋ければ、今日は御遊山にて御歸は夜に入べし、明日御出しかるべしと申ければ、先は首尾よし、宿に歸りてはねるより外なし、是より

すぐに中村七三方へ行、小紫が形見をわたし起請をも取替、女の思ひをはらさせんと堺町を尋しかば、未芝居みてぬよし、然ばまち申さんと云所へ七三郎歸り、如何なる御用と尋ければ、さん候我々は上方者、みつ〳〵御物語申事有、苦しからずばお座敷へ先御とをり、お茶たばこ盆、いざおらくにと互に居なをり、御尋申事餘の義にあらず、御自分の義以前は武士にて、御全盛の時吉原の小紫になじみ、それ故御牢人あそばし、行衛なく成給ふと聞、此女跡をしたひ方々と尋、御行方のしれざるを恨み、三河國八橋に身をなげしとかや、なれども取かはしたるせいしのつみ深、未三津にまよひ佛くわにいたらぬとて、紫が靈魂我々を頼、貴公に逢起請を取替給はゞ、成佛うたがひ有間敷との一言、もだしがたく是迄參りぬ、御心に覺あらば、此形見を御覽あれと、かづら起請を取出せば、七三郎淚を流し、誠に不思議なる事を承る物かな、是には段々樣子有、くわしく御物語申さん、元來私の藝の師匠を中村七三郎と申き、此仁以前はぶしなれど、御咄の小紫ゆへ牢人と成、渡世の爲歌舞妓役者と成給ひぬ、元よりはつめいにて丹前風の狂言、やつし武道も所作事も、二人共なき名人なれど、當世とかはり見物もてはやさぬ時代、其時私とは師弟の約束、兄分やら弟分やら何やらかやら、わけもなくむつまじき中成しが、人の命は限あり、折からの風になやまされ、今を限なりける時私を枕によせ、歷々の一門有ながら、此身となれば通路なりがたく、そちを杖柱共思ふぞかし、死してまよひに成事一つ有と、小紫があいさつ殘らず語、もし尋來りなばせいしを返し跡弔ふてと、くれ〴〵仰おかれし也、最後に名迄ゆづられ今名人といわるゝ事、先七三郎殿の影なれば中々そりやくには思はず、おもひよるべの中なれば、きつゝなれにし玉かづら、なき人に逢ふ心地、形見こそ今はあだなれ是なくば、わするゝ隙もあらまし物をと、よみしも思ひしられたり、是を如來の前に置いよ〳〵御ゑかう申さん、扨小紫のせいし是也と丹前にわたしければ、兩人請取、現に告し言の葉の露たがはざりけり、尋來ればこそ不思議もはれたり、御緣有ば重て先おいとまと立所を、しばしとゞめ、せめての心指何なくとも御酒一つと、手打のそば切所がらとて武藏野の大盃、一つのんで給はれと亭主方よりさしめのあい、

おさへられたる此酒、肴なくてはあがらぬと云ふ、きこゑた〳〵、舞臺勤る私、肴せよとの御事か、何なり共御望次第、さりながらおの〳〵の御詩、殊に小紫の形見、先七三郎の玉かづら、御持參あるはひつきやう柏崎の謠に似たり、此座の肴、一つは追善の爲、柏崎のクセを舞ておめにかけん、たゞしうき世事かといへば、いや〳〵當世事は猫に小判、しつた能こそ面白からん、しかし林方、地謠なくてはすまぬもの、それこそこちが手下に山、誰かれよべといふ所へ、役者五七人座敷になをり、笛大小の皷役、地うたひむかふにかしこまれば、七三郎は勝手ばやく、女かづらに本裝束、篠のはにしでを切右に形見のかづら、障子をひらひて座敷に出、是より柏崎のくせ本能、かなしみのなんだまなこにさへぎり、思ひの煙むねにみつ、つら〳〵是をあんずるに、三がいにるてんして、なを人間まうしうの、はれがたき雲のはの、月のみかげやあきらけき、しんによ平等のうてなに、いたらむとだにもなげかずして、ぼんなふのきづなに、むすぼれぬるぞかなしき、ざいしやうの山高く、しやうじの海ふかし、いかにとしてか此しやうに此身をうかべんと、げになげくとも人間の、しんみくしいの十の道おほかりき、されば始めの御法にも、三界一心也、心外無別法、心佛及衆生と開時は、是さん無差別何疑ひのあるべき、こしんのみだゆいしんの淨土なるべくば尋ぬべからず、此寺のみ池の蓮のゑんことをなどかしらざらん、只願くはかげ頼む聲を力のたすけ舟、こがねの岸にいたるべし、抑樂みを極むなる、敎へあまたにうまれ行、道さま〴〵のしなゝれや、寶の池の水くどくちの濱の眞砂數々の玉のとこ、臺も品々の樂みをきはめ、はかりなき命の佛なるべしや、にやくが成佛十方世界なるべし、本願あやまり給はずば、今の我等が願はしき、妻の行衞を白雲の、たなびく山や西の空の、かの國にむかへつゝ、一つ淨土の緣となし、望みを叶ゑ給ふべしと、稱名もかねの音も、曉かけてとぼし火の、よき光ぞと仰ぐなる、南無きめう阿彌陀尊、紫夫婦の人々を成佛せさせ給へと、よにおもしろく舞ければ、丹前佐内きやうにぢやうじ、かたのごとくの一禮さらばさらばと立別れ、おのがしたくに歸る夕暮、

女大名丹前能六之卷終

女大名丹前能七之卷

（一）間狂言青葉の笛

物もふ、どなたでござります、昨日御尋申したる者、御けみやうは何と申ました、我々生國は下總の佐倉、光尾孫之丞が世忰同名靱左衛門、本名を替只今は丹前之介、直々申上度子細有、暫それにさうかゞいしかば、助之丞立出、先御通と一間にしやうじ、つゐに御意ゑねど、御物語をうけ給はれば私とはいとこ也き、父助太夫存命の内御噂のみ申たり、なれ共御詞に心得ぬ事有、貴殿と某とは同年たるべきに、殊の外若年のてい、いかにしてものみこまずと目の内かはれば、御ふしんは御尤某若く成りし事、箇様々々と大坂にての不思議、系圖をとめられしゆへ、祝言の座にて人賣の惡名をとれば一門の耻、何とぞ助太夫殿に對面し勘定を申請、筑紫に下り事をたゞし、會稽の耻をすすがんと、御住名古屋之御尋申所に、御當地御用に付御下りのよし、直に此地に罷り下り久々にて對面、殊に御堅固の體、千萬目出度候と一十を語れば、助之丞もくねんとうなづき、御咄一つ〳〵拙者が胸にあたり、慥に覺有上疑ひ申にあらねど、昔が今にいたり、老人の若やぐ事ふしぎといふもあまり成き、只今系圖を遣し度物ながら、かりそめながら大事の物、さればとてとをからぬ一家世に出べき所に、勘定たしかならぬゆへ、人賣の惡名を取事口惜きは御同前、御心底あかさるゝ上疑ひはれたり、光尾の一家と申ては貴殿私、ぞんずる胸あれば、近日御同道仕り難波に上り、御せんど見とゞけ申さんと頼もしきあいさつ、誠に身はなきより、其上種々の御馳走、この上はよろしく御はからい、近日御左右を奉レ待と子細らしく一禮し、げんくわ前にて立わかれける、丹前思ひけるは我たま〳〵此地に下り、傾國芝居見ぬなどあんまりかたし、もし筑紫に下らば又見る事も不定なりき、先中村七三郎が狂言見んと、足をはやめて堺町、芝居の前に人山をなし、ゑいや〳〵の聲やかましく、狂言の外題を見れば、一の谷青葉の笛、誠にこのあつもりの面影ゆへ、かゝるうき身と成ぬ、せめて思ひを見てはらさんと、芝居の内にいれば番付さへ十二錢、京大坂にくらべて大分たかし、是だけ江戸の繁昌、暦にひとし

きをくりかへし見れば、熊谷に中村七三郎、敦盛に岩井左源太、名人共がよつての仕組、すは續の二番め敦盛駒に打乘り、しかるに平家世を取て二十四年、誠にひと昔のすぐるは夢の內なれや、壽永の秋の葉の、四方の嵐にさそわれ皆ちり〴〵と成ぬ、我も乘りおくれじと、浪打ぎはに出しかば、御座舟も兵船もはるかにへだゝりぬ、せんかた浪に駒をひかへ、あきれはてたる風情、ふやうのまなじりたんくわの口びる、またも有間敷すがたぞかし、然る所へ武藏國の住人、しのとうの旗がしら熊谷次郞直實と名乘、あつぱれよき敵打てとらんと、扇子をひらきかへせ〳〵と呼はりぬ、敦盛馬を引かへし、浪の打物ぬいて二打三打うつぞと見へしが、馬の上にて引くみ、浪打ぎはに落重なり、首をとらんとうちかぶとを見れば、十六七の女ぞかし、かなたさすがの熊谷、手もちあしくのかんとす、是熊谷相手に不足はあるまじきに、何とて首はとらざるぞ、とくうてと居なをるにぞ、直實程の侍が、女を打ては一分立ず、そこのかれよとにげんとす、うしろより抱き止め、誠は我、敦盛樣につかはれし靑葉といへる女、およばぬ戀に君をしたひ、度々情にあづかりし御恩はうじ難く、せめては今日の軍に成と思身替に立、君の命をたすけたく、思ひさだめて此姿、かた樣の御事情有る武士と聞、自らが首とつて誠の君を見逃し給へ、是おがみますと淚のしづく、熊谷もともにこぼるゝ鎧の袖、尤哀はさる事ながら、いかに思へばとて戰場にて、直實が女を打てば末代の耻辱、人見ぬうちに早くかへれ、いやかへらじと取つく所に、むかふの磯邊に若武者の、駒をはやめ行を見て、是ぞ誠の敵ぞと振切ておつかくる、つれなしかへせとひれふす中場へ、見物の中より、あみ笠着たる男舞臺にあがり、是左源太殿今日初てのげんざんに御執心の山、およばぬ戀としりながら、思ひ初しがゐんくわぞかし、御心底はともあれ私の所存是迄と、左の指を切所へ、同年比なる男あはて舞臺にあがり、さまざまのかいほう、見物我も〳〵と立さはぎ、さは指切りよ獨ならずふたりまでと、上を下へとかゑす、左源太何の返答なく指をひろいていたゞく、林方五七人、男をいたわりがくやにいれば、狂言もそこ〳〵にはて太鼓打たつる、馬鹿にあつたら狂言見さしぬると、めん〳〵わる口いふて歸るは尤、がく屋にて七三郞指

切男を見付、御自分は丹前殿の家來、佐内にてあらずやとあきれたる顔、丹前も面目失ひ、今日初て見物にまかり右之仕合、是佐内樣子こそあらん、所存をあかすべしといわれ、さん候好色の義は、堅戒むる心底なれど、今日左源太殿の姿を見、世にかゝる男色も有物かと、思ひつめたるしるし、せめて指切て成と參らせんとあわれなる一言、我人有るまじきことならず、しらぬ人さへ捨おかぬ野州の習、まして存たるおの〳〵、心指を左源太に語、盃なりとさせまいられせん、此所に足をとめ、よしなき評判聞て氣の毒、先御歸りと丹前共に籠にのせ、うら道より歸しけると也、

(二)方便に情の羅生門

明の夜、樽肴扇子車の紋付たる小袖一重、下男一やうのこん染、前後美をつくし丹前が旅宿に來り、左源太よりの口上つまびらかにのべて歸る、つゞゐて七三左源太同道にて奥にとをれば、佐内は寢耳にかみなり、うれしさとはづかしさとわけもなき風情、下袴をも前後に著し、ふすまの片角にかくれ、小指をくはゑ座敷に出るけしきなかりき、丹前は氣の毒顔、ていしゆが耳にさゝやき、とりあへず銚子盃、宿の内儀はそれしやのはて、取肴いろ〳〵からくみ、どうやらにつこらしき座敷、首尾つくろいて酒中場、岩井がもちたる盃佐内樣にさしたいと、いへどもあつといふ者なし、内儀もどかしく佐内がそばにより、おもはく樣のお盃、でゝいたゞかしやんせと手をとれば、いかにしてもはづかしく、わしが代にこなたのんでくだされと云、ぬしのちがふた盃がいたゞかるゝものか、盃さへはづかしく まさかの時はなんと、それは其時の思案こそと、にげんとするを引とめ、むりに座敷に伴なゐば、左源太七三おかしく、其心底猶外ならずと思ふぞかし、御心のせつなるまゝ今宵お尋申たり、うけ給はれば近日かみがたへの御上り、私とても都の者顆度事も有、先お盃あげませんと、一つほしてさしければ、夢にいたゞく心地、わな〳〵ふるひながらずつとのみ、胸をたゝゐて誠にかたじけなき心底、旅の情とは箇樣の事をか申さん、御覽のごとくいやしき身に御情の盃、殊にはる〴〵の道御出のみ、種々の御進物申請たる御同前、皆々返辨申と手のうら返す返答、是はと人々佐内が顔を詠、心指は木の葉といふに、近頃不調法なるあいさつ、それが爰へ出る事かと、いへ共

佐内かぶりをふり、いや〱左様でござらぬ、指一つ切事さ程大切なる事にあらず、あなたがたは男色ながら勤の身、義理といふが捨がたく、箇樣の御心づかいにあづかる、是をとめなば左源太樣は立べけれど、佐内めが一分たゝず、其子細は、かみずりな若い衆世に多し、箇樣の噂をきゝなばよい事がましく、指切事のしやうばいとならん、然者色慾の二つ、御盃を頂戴すれば心にかゝる山のはもなし、御心指は是より外あるまじければ、返辨申があやまりかと、此一言におの〱舌をまきぬ、左源太も返答なく此うへは心まかせ、然者其盃是へと、あなたこなたにめぐる酒、誠有まじわり、頼有中の酒ゑんかなと諷ひおさめ、いざくつろいで物語、まはりに成て色咄のかる口、七三が番にあたれば何をかはなさん、げにおもひ當るはなし有、新橋には夜ふけ人しづまり、小野山宇治右衛門が執心よな〱出、おそろしゐ目して役者さへ見ればおどすと云、なんと誠しからぬ事ながら、今宵の歸り足是非かの橋をわたらんが、思ひなしか氣味わるし、我々が狂言にも、一念死靈たび〱いたせどこゝろよからず、殊に小野山がゆふれい さこそ恐ろしからん、此なぞとひて見られといふ、佐内手を打さすがの中村殿とも覺ぬはなし、土も木も我が大君といふは外になし、四海浪しづかに、弓は袋劔は箱におさまり、誠に堯の御代とても今ほどには有まじ、あの世から、小野山風が吹ばとて何事あらん、惣じておくびやう者の目からは、薄のほを見ても狐狸の尾と見るぞかし、左様の咄は御無用只外のうはさをし給へと、すこしはきよくるあいさつ、七三郎むつとしたる顏、論はむやく、誠かうそか彼橋に立越、樣子を御覽あるべしと云、扨はおくびやう者にてまいるまじきと思召か、御指圖にまかせ是非の一つを見屆歸らん、何にてもしやうこをつかはさるべし、左源太中に入互によしなき諍ひ、只今七三郎樣の咄のごとく、役者にあらねばかまわぬよし、幸進上申たる小袖は、方樣の召替と思ひ私の定紋を付けたり、是をめして御出あらば、定めし役者と思はん、印には是を立置歸り給へ、我々歸る道なればしやうこ迄にと、もちたる扇子わたせば、佐内は是を請取、かくは申世の中に、生靈死靈も有ならひ、此いこんの恨小野山が執念にひかれ、もし歸らざる時は二度御目にかゝるまじ、首尾よくば其

幽靈、手取にしておめにかけん、先ずそれ迄はさらばさらばと、かゝり著小袖は役者の風、はちまきしめてしりからげ、腰にさいたは關の孫六、六尺の棒引さげ、九つの鐘もろとも、くゞりをあけて四方を見れば、目ざすもしれぬくらき夜、ゆかでかなはぬ男のいぢ、新橋迄は町つゞき、しや何事のあらんと心靜にあゆみしが、橋のこなたにて氣味あしく、少しは身ぶるいも出たり、こはげのくるは心からと、力足をふんで橋の中ばにさしかゝり、眼をくばつて見る所に、何者共しらず立髮さばき長脇指、眼の光はあかねさす、佐内一目見てきへたき心、なれども國への聞へ、土産にせんと思ひ出し、南無さいふの天神、我一生の手柄此時に極ぬ、力をそへさせ給へと一心にきせいし、二尺三寸するりとぬけば、かの男きもにこたへ、命を助給へとひれふす所を取ておさへ、して先おのれは何者ぞ、さん候私は、前役宇治右衛門がゆうれい、過つる顔見世前、大坂片岡仁左衛門よりかゝへに參り、十月の末上方へ上る所に風の心地にさそはれ、道中にてはて武藏野の土と成ぬ、なれ共難波の妻子なつかしく、もし御當地の役者、いづれにても京大坂の芝居に有付、のぼらるゝ人あらば、せめて形見をおくらん爲、毎夜此所に出るぞかし、助給へと涙ながらのいゝわけ、何共心得ぬゆうれい、當年の芝居、江戸より上る役者あれば、八月九月に極る事我々迄もしるぞかし、役者の身として、しらぬといふには樣子こそあらめと、能々見れば立髮かづらにしんちうの作目、どうでろくなやつにあらずと　むなぐら取て引立、さあこいといふて宿に歸り、すぐに座敷に引すへ、小野山がしやうたいいけ取て來りぬ、いづれもよつて御らんじませと　あせをぬぐへば、左源太七三は笑出し、　あつぱれ御手柄、此うゑは樣子をあかさん、　きやつは私の家來鬼團六と申者、御自分私へ御執心にて、指迄切てくだされしかど、御心のしれざる內靡かぬ事、　我々が習ぞかし、進上申たる物は、かたじけなき一禮の印なるを、はづかしき一言うけ給はる上、　御心底引見るにはおよばねど、下地仕組置たる事無にならんと、よしなき口論させ、思ひもよらぬ骨折しました、其段は御免あるべしと目はぢきすれば、內儀は勝手に床の用意、夜もふけぬれば御休、宵よりの氣あつかひ、是からは又わしが心中、おめにかゝるははづかしけれど、まあござん

せとつれ立てゆく、

（三）高尾が寫す白樂天

借屋かしておもやとやら、丹前が思ひそめしを、佐內が指一つで、むまい事して明方のわかれ、すこしは法界りんき、兎角乘道に縁なき身を恨、よしや吉原に立越女郎など買て、過し夜の無念をはらさばやと、ていしゆふたりうなづきあい、出しぬきにして佐內に鼻あかせよと、忍びて急ぐ通路、此里を吉原といふはいかなるゆへにや、亭主答て云、さればこれより東にあたり、またなき好色の本地、昔はするがの國吉原といへるに、遊女有て旅人をとゞめ、一夜切の情をかけしが、いつしか江戸にうつし堺町のあたりに有しを、去る明暦大火の後三谷にうつしぬ、いせんの山谷といふは、野原露ふかく、こらうやかんの住家成しが、今は引替傾國の里と成、智有も愚なるもほだしをうたれぬはなかりき、されば女郎の髮筋には、いかなる奴もつながれ、わかれに思をのこさせ、行ては歸り歸りては行く、先入口の大門は東側に有て、八つの町をよこ切、いわゆる大夫格子山茶局にこそ直段の高下有り、君に大門口をみては、おのれ〳〵がゑもん坂をつくろい、思ふ中の町にさしかゝり、揚屋町にいそぐ人あり、いづれも樣のごとき、いまだ見ぬ京町を過て新町にうつりかはる、女郎の角町に行ては、戀と思ひの堺町に心指、一目見て腰をぬかす花の顏、三筋の糸にひかれては、色々のわるじやれをつくし、日々に通ひてもあかぬは此里の戀ぞかし、およそ太夫職が三人、格子と云が六十七人、局が三百六十五人、山茶は六百六十九人、是には香車(やりて)なく、牛(ぎう)と名付し男棒をつき、中戸の腰掛にうづくまいてのさはい、あの女郎しまへといへばかしこまり、すぐにくつわが內に入りて、とかくの諸分心やすきがゆへ、中より下いづれも山茶をもてはやすとなり、其次の女郎千百四人女郎數合二千四人と名寄帳にしるし置ぬ、女郎屋が二百五十三軒、揚屋と申すが十九軒、茶屋が十八軒、なんとおびたゞしい事ではござりませぬかと、土手の間の長物語、吉原の里に入り爰かしこを詠やるに、三ヶの津の一の筆日本の入込、女郎もすこしははでに見えて、すそ小みぢかく、髮は昔のひやうごわげ、詞になまりの有は、聞なれねどもおも白く、丹前もづにのり、とても買て見る氣ざしなれぱと、丸屋といふ揚屋に入、

あたまから松の位、高尾の君にあはんと夕暮、先御酒一つと種々のもてなし、亭主くわしやがあいさつ、いづくもおなじ秋ながら、詞のはし面白き遊興、我々は西國者、はる〴〵の波遠をしのぎ、御當地のお傾城に逢事、ためしなき世の笑草となる合點、そこらはおのおの額中塲へ、高尾の紅葉時ならねども色有る姿、ゆりかけてあゆむ道中、小づまの取様ぬき足のひろい、脇目ふらずに座敷の正面になをり、花めづらしき殿ぶり、みなさんはかみがたかゑと、あたまからきつゐあいさつ、丹前おどろきふしぎといふもあんまり、お江戸の女郎衆はお目利、かみがたとはどこをか見てのあいさつ、御ふしんは御尤、惣じて都のとの立は、うしろあがりの髮つき、みじかい羽織にこく餅の紋、胸ひぼ高に引しめ、さながら大内そだちのごとく、何から何までにくからぬ風俗、逢心よきは都人にきはまりぬ、付まして京大坂の女郎衆、客のもてなしに、いかなるわざをして なぐさめ給ふ、されば島原の格子は大和歌に心をよせ、つれ〴〵古今伊勢物語、萬葉集八雲など詠やるにいとまなし、 其外は折句俳諧貝合歌がるた、いづれかやさしき手わざ、また難波津は品替り、琴三味線に氣をうつし、めん〳〵四季のしやうがを身のうへに作り、 自らふしを付ていろ〳〵にうたひなし、四方の人にまなばせ、是をはやり歌と名付て色里のさはぎとす、或時は發句笠附段々歌仙、勤にはさかしく、 難波の宗匠西丸來山、一禮牛自、園女といへる女點者も、筆をふるふ程の名人、されど心ばせにうはきといふ雲かゝり、よしなき男にほだされ、時に心中して、うき名をながす事有、扨此里は何をかしてたのしみ給ふ、もはや京大坂の業を聞ましては、かたるもはづかしけれど、世にでんぶなるを東人のごとしといへば、さのみはぢにもなるまじ、所々の習ながら、爰もやさしき歌のさま、こしおれはみやこにもおとるまじ、三味線はながれのもてあそび、是も難波におなじ事、御覧のごとく殿立のすがた、くまがへ笠に長脇指、見た所は戀も情もあるまじき風俗なれど、心ばせやさしく思ひを筆にとはせ、情は硯の海の如く、 玉づさ千づかにあまれば、おのづから我々迄、候べく候のかなづかい、手跡は都にまされりと、水なお客がほうびしておかんした、其外小舞など、誰おしへねどあんまり耻はかきませぬと、 かたりさして盃

の文段肴にかたさまの手跡、また逢迄の形見ともならん、是非にとのぞまれせんかたなく、禿の花野に墨すらせ、金色紙とりよせ、

こけ衣きたる岩ほはさもなくて
きぬ〳〵山のおびをする哉

此歌を書まいらす事、當世の女郎衆、さもしゐ所にころをうつし、やさしき事さらになし、されば歌をよむ事、高きいやしきにかぎらず、三十一文字をつらぬれば、心すなをに情うちにこもり、立居もしほらしきものぞかし、殊に我朝は、花に鳴く鶯水にすむかわず迄、歌の心をよむとなり、むかし孝謙天皇の御代、大和國高天寺に住人有、其比は春なれや、軒端の梅に鶯とまりさへづるを聞ばと、また筆を取て色紙に、

初陽毎朝來不相還本栖

となく聲、文字に寫て見れば歌なり、

はつはるのあしたごとには來れども
あはでぞかへるもとのすみかに

とよむ鶯の聲、其外鳥類畜類だに、歌の心をたのしむ也、迚も和國の風俗なれば、すこしにてもまなぶをよしとすべし、箇樣に申せばなんとやら、物しり顔に思召さんが、さら〳〵そうした心にあらず、やさしきを見てのもてなし、初對面はすげなく、互に心を兼るの戀は世のつゐへぞかし、それとても人によるべの浪枕、いかなる人にもあはねばならぬ我々が勤、おもへばこそ逢もすれ、それをそまつにする人、かならず其身をせむるぞかし、目にこそ見へね末の松山心元なし、又わしが樣におもへばとて、玉のこしにのふにはあらねど、生れつゐた心なれば是非に及ませぬ、年を重て逢ふ客も、たまさかに逢ふ殿立も、あいさつにかはりはなけれど、なじみだけ諸事ゑんりよせぬぞかし、なんとうそかと、扨も氣さんじな女郎、三箇の津に又有まじきあいさつ、かた樣をつくられし親立が聞たいといへば、重て申ましやうが、女郎の里聞たがるはふるい客のあいさつ、殊によりあかします客もあれど、聞ていらぬもの、ななしでおかしからねばおかしやんせといゝさし、次の間に立てとめ木のかほり、禿は床の案内、丹前もおくれ心ふたり寢の長枕、顔つきあわしてゐめるばかり、語事の山をわすれ、たばこの煙くゆるおもひ、つべ〳〵いわぬほど猶かはゆらしく、是ごうじやいのといふ所へ、佐内ゐはたゞ

しく來り、床のこなたに畏、只今助之丞様より御使の趣、明日御同道にて御上り有べき旨、御用意しかるべくば、今宵からして御出のよし、早々御歸りといふに驚き、いつその事と思ひしに事急に成ぬ、暫まつべし同道せんと、おきふしの身ごしらへ、御ゑんもあらば重てと、涙もる目をかゝゑ、はなれがたき床のうち、高尾も同じかこち草、逢てくやしき物おもひ、あわぬさきこそましならめ、もし御とをりうもあらば、かならずお出のくれをまつとて、つきぬ名殘をおしみなき、

女大名丹前能七之卷終

女大名丹前能八之卷

(一)觀音出現の瀧坪

きのふに替今日の旅、親仁方の助之丞を先に立、前後美をつくし明方つぐる鐘の比、立出て四方の白雲、私ゆへ思もよらぬ御上り、何とぞ世に出御恩をほうじ申さんと、誠成あいさつ、日本橋をほのぼの明、程なく小田原にさしかゝり、老女がもとに立寄ば、有しに替る黒染の袖、明暮念佛怠らぬはおのおの様のお影、しばしも忘るゝ事なし、寄る年の露命をしらねば、是ぞ限のいとま乞、さらばさらばと立別れ、箱根三島の明神などおがみ、沼津はら吉原ときくにさへ、高尾はいかゞ暮しけると、心に思ひ口にては、爰かしこの名所咄、神原ゆゐおきつ島、江尻府中まりこ川、岡部藤枝、島田の宿にはかうがいわげの出女、そこらゑ目をやるなどいかな事かたい金屋、につ坂のわらび餅、むけんの鐘、夜なきの松も今はなかりき、爰の茶屋に暫腰をかけ川、袋井より見付て濱松の城、前坂をのぼれば荒井の御番所白すかふた川、よしや吉田の宿はづれ、ごゆ赤坂には色有女、さし合くらずに聲の有程、御の

ぼりにはとまらんとの、約束へんがへ當の習、重ての下りにとねぢ富士川の渡し舟、海道一の早川心岡崎に着ば、暫くそれにと助之丞をまたせ、丹前佐内は八橋の澤邊にむかい、夢にあづかりし形見櫃にわたし、せいしをも取來ぬ、請取給へと水に流し、南無小紫聖靈、とんしやう菩提うかみ給へと回向し、立歸り御供し、ちりふ なるみ あつ田の宮に詣、是ゟ本國名古屋に越、家來共に申置有と夕暮がた、其夜は助之丞が屋鋪に夢結び、あくるしのゝめ心静に、美濃國本巣郡養老の瀧をも見物せんと急ぐ中道、程なく瀧のもとに着たりぬ、おの〳〵立寄、誠に我朝の名水、昔はふしぎも有しが、今人間の心ひすかなれば、きずいもなくて只養老の瀧とのみいふぞかし、さればいさぎよき水の流しん〳〵と、落くる瀧の音すさまじく、また殊勝也き、おの〳〵爰にて休足あれと、茶辨當の口をひらき炭火をこし、山林を詠て一つのまば、誠に興有たのしみ、松の葉の風になびきたるを、山賤共がひろいまはるを見れば、十二三のわらはめん〳〵籠を荷なひ、一つれに成て木の葉かきよせ、かよひなれたる道柴、露をもいとはぬ風情、里の一ふしをかなで重荷につかれて、瀧の流をすくひのみ、いざといふて雁金の一つふるすに歸るを止め、汝等は此里の者か、左もあらば問度事有、此瀧を養老と名付しいわれを語らば酒のません、里の子供うなづきあい、如何にも咄申さん、酒の替に祿を給はるべしと、荷ひし籠を下に置、むかし〳〵此山にぢいとばゞとすめり、一人の男子有、深山に分入り薪を取て親を養ふ、或時重荷につかれ、息もたへ〴〵成しかば、瀧のもとに近付此水をすくひのめば、忽心地すゞしく成ぬ、不思議に思ひ我と山家の薬水と名付け、毎日家路にくみはこび、父母に是を與へしかば、老の心も打わすれ、立居も心やすく、夜るの寢覺も寂しからで、いさむ心はまし水の、たゑずも老を養ふゆへ、養老の瀧とは申なり、兎角たのしむ藥の水、のめやうたへや旅の人、猶も不思議をあらはさんと、いふ聲計り瀧壺のみな底に飛入しが、水中より光さし、いきやう四方にくんじ花ふりぬ、是唯事にあらずと皆々かうべを地に付、有難や治まる御代の習、山河草木おだやかに、五日の風雨が下照日の、光みち〳〵浪まきあげて、いくわんたゞしき童子忽然とあらはれ、よきかな〳〵如何に丹前、汝が前生

は狩野氏應といふものなりしが、東國下總國、光尾孫之進が一子と再來し、幼少にて父母におくれ、みなし子の誰おそるゝ者なく我儘に世を暮、男色とさへ見ればは心をうつし、夫も秋風の吹に付ては、野良影間にたはむれ、たくわへたる金銀のすいとられ、代々目出度光尾の家も家質方へながし、物好に拵たる諸道具も夜市にふられ、飛さや綸子鈍子縮綿のしとね若替も、古手やの又助に賣、やう／＼す紙子一つで方々と流浪し、人には雲助の如くいわれ、爰かしこにさまよひしも、人こそしらね元が戀なり、夫程かなしき身となれど、武士の道をわすれず、二日三日くはねど高楊枝、人に無心がましき事をいはず、時々は野にふし山を家とし、不自由成事度々なれど、淺間敷非人を見ては、我腹のけて慈悲の心、それほどせつなき身ながらも、敦盛の面影に戀慕し、既に一の谷の露霜とならんを、佛神のめぐみにより、老の姿を若やがせ、筑紫の何某が聟に成べきに、伯父が悪心にて様々流浪の身となれど、本心誠有ゆへ助之丞がのみこんで、二度世に立んと此所迄來りぬ、しかれども難波に誠の形、光尾の系圖をとめ置たり、急ぎかの地に下り、願を立て取かへし、また老人の姿と成べし、其時佛力にて二度わかやがせ、本の丹前の介にして妹背の契深からぬ様に守、家をも立てとらせん、次に此瀧の水をくませ難波に持參し、老人と成て後身を此水にひたしなば、おのづから若やぐ藥の水、つきせぬ不思議今こそはるゝ西の空、誠は楊柳觀音なり、汝も我も本一つ、唯是すいはの隔にて衆生濟度の方便、猶行末をまもらんと、消て跡なき水のおと、丹前を始めおの／＼かんるい肝に銘じ、御跡千度拜し佛勅にまかせ所の者をまねぎ、俄に坪の用意水なん／＼と汲こませ、人夫をあつめ是を擔わせ、樽井より宿替、はやく難波に關が原、今津柏原にそひ寢して、明方の夢をさめがい、ばんば鳥本、高宮の先は越川、むさの宿にて暫やすみ、守山のはづれは草津、膳所大津は二度のかけ、柴や町をよそめして、追付千世にあはた口、白川を南づたへ、知恩院の櫻ばゝがたうふ、祇園林、夢樂坊が草庵に入あひのかね、

（二）若木に歸る二度の養老

夢樂坊よこ手うつゝなき顔、扨も久しの丹前様、先々奥に御供し、いつぞやは山崎殿御夫婦に御念比の御

狀、貴方樣の仰なればこそ、此法師がうでをまくつて取持祇園町に見世はらせ、二人口はゆるりくわん樂な暮、只今是へといふ所へ、山崎夫婦來り嬉し淚の一禮、扨千世樣今日難波に御着とて、先立て夢樂坊樣へ御狀來りぬ、法師是に心付、それよ〳〵かんじんの事を忘れぬと、千世樣よりの文、是程割符のあふ事天の哀みふかし、先助之丞樣へ御馳走申てくれよ、夫は仰までもなしと、俄にまな板のおとさはがしきは山崎、かつほかくは志賀、亭主はこい茶の役、手もと子細らしきかた手に、料理のかげん大事にかけよとそこ〳〵に心を付、長の旅路、ゆるりと御休足有べし、何にても御遠慮御無用と、殘るかたなきもてなし、馳走ぶりよきに行先をわすれぬ、善は急げ思ひ立日を吉日、いづれも難波下りの用意、花やかに出立べしとおの〳〵衣紋つくろい、もし筑紫にもくだらば、都のぼりも不定なりき、夢樂 山崎夫婦も同道にてくだらん、いよ〳〵有難き仰我々も御先度見とゝけずして、一分たゝずと身拵、朝ぼらけ門出の祝儀、伏見迄は立籠、夫より早舟かり、ろびやうしの音しづかに、晝にかたむく比 難波の濱に舟をつなぎ、筑前屋といへるに宿もとめ、助之丞が思案にて千代やしきゑの使者、口上にて申べきはおの〳〵着のよし京都に承り、丹前之介も只今此地にくだりぬ、然共一兩日御げんざん申まじく候、御上京御無用、近日御屋鋪へ罷越御目にかゝり申べき旨、くわしく佐内にいひ含、其後丹前之介と鼻つきあはし、代官所へ罷出系圖の願申あげんと、袴着ながら口書したゝめ、供まはり召つれすぐに屋敷に出、取次をもつて御前にかしこまる、時に近所衆一通をひらき讀何々、

乍レ恐御願之趣

私生國は關東の者、もと六十二歲に罷成候老人、當二月初て御當地に罷越、何某方に旅宿仕候內、乍レ耻色欲の一念にて老の姿をのこし、一心か樣に若やぎ候所に、宿の何某、こらうやかんの業と申かけ、所持仕候家代々の系圖大小迄をとめ、むたいに追出候段、尤千萬に奉レ存候、此度立身仕候に付、右之系圖無レ之、家相續難レ成、迷惑仕候御事、此段聞召わけられ、何某を召出され、系圖大小ともに相渡し申候樣に、被二仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候、

年號月日　　光尾 親左衛門
　　　　　　　　 助之丞

代官聞召、誠に當春其沙汰有、心得ぬ姿を持參せしゆゑ、ふしぎに思ひ箱にしたゝめ封を付、町人共に預け置ぬ、か樣の事申來らんとて、夜前あらたなる靈夢を蒙ぬ、たとへ何にもせよ、其ぬし出てのぞむに何事かあらん、殊に助之丞儀は聞及たる仁、現在一家とあれば別儀なし、いそぎ箱を持參せよとの仰、役人うけ給はり、宿屋夫婦を召つれ御前に出、丹前之助を見てあきれたる顏、箱を御前にすへける時、丹前立寄あけてくやしき箱なれど、おの〳〵の御うたがひをはらす爲と立寄封をきれば、今迄若き丹前忽昔の老人と成ぬ、其時仰出さるゝは、町人ども別儀なしと、勘定書を助之丞にくだされ、重て御意得申さんと御座を立せ給ひぬ、丹前之助あしよわ車の力なく、供人にかいほうせられ、御門前より籠に乘おのが旅宿に立歸り、奥の一間に小がくれ、我身ながら我姿人に見せなばはづかしの、もりて人こそしるらんと、自ら水をたゝゑ、有難き瀧の水、底すみわたるさゞれ石、岩ほと成てこけのむすまで、千代萬代のためし、目前きどくを見る藥水、誠に老を養ふのみ、藥とならばいつ迄も壽命長音なるべし、水にうつる老躰、また見る事もなき此姿、うつるも由なし、いさぎよき水にうかべ、只獨のみむすばん、もたひのちゝえうは影やみどりをあらはさん、其外まがきのてきくわは、りんえうの秋をくむなり、しんの七けんがたのしみ、りうはくりんがもてあそびたゞ此水に殘れり、くめやくめ藥の水に身をひたす、山路の奥の水にては何れの人か養なひし、ほうそが菊の水、したゞる露のやしなひにせん、とくをうけしより七百歳をふる事も、藥の水のいとくぞかし、げに菊水のやしなひは露の間に千とせをふる、雨土ひらき草木まで花咲實のる理り、只是雨露のめぐみにて則花の父母とす、我も此水になれ衣、袖ひぢてむすぶ雁さへ見ゆる山の井、げにも藥と思ふより次第々々に若やぎ、又丹前之助とうつり替るぞふしきなりき、助之丞をはじめ、山崎夫婦夢樂坊きやさかゑんずいそう、君は舟臣は水、よく舟をうかべば臣よく君につかふ、上すめば下にごらぬは此水のごとし、是を守る輩は子孫繁昌すべしと助之丞が金言、今宵を祝言の吉日と定め、籠樂物の用意、夢樂坊は法躰の身、明日の御出と是にも氣を付、上下いみじく取

つくろい、ざんざめかして心うき立浪枕、今宵妹脊の新枕久かたの思ひ寝、偕老のかたらゐ、ゑんわうのふすまの契、おうらやましい事かなと山崎夫婦がわる口、夢樂坊はあたまをなで、御せんど見屆ん計りにはる〴〵來り、御供せぬは殘多しと、俄に髮鬢とゝのへ、まんまと男に樣を替上下着し是も御供、

(三)御祝言の鶴龜

月日の關守を重、めのとは姫の御供し、北野の難儀よりすぐに筑紫に下り、父重野右衛門に對面し、浪之助が惡逆不レ殘かたりしかば、重野右衛門おどろき、花車が惡逆みさいにしるし、所の代官所へうつたへ、上意を以て追々人をのぼし、見付次第からめ、鬼界が島へ流罪と仰付られ、くつきやうの若者數十人、はや舟かりて都にいそぎぬ、其後娘を伴なひ難波に登り、戀聟丹前之介が行衛尋に、都のぼりとひしめく所ゑ佐内歸り、くわしく樣子を申あぐれば、一家悦の色なをし、聟君の御入と上を下へもてかゑし、門前には對の立ちやうちん、御迎には佐内、上下に大小、供まはり花やかにお出の幕を待所に、又丹前之介よりは山崎、はかまのすそゆたかに、案内の役を請取道にて佐内に行逢、互に途中の三つ指、俄に子細らしきつめびらき、山崎申けるは、主人丹前儀は未若年者、殊に初ての國入、諸事不調法ながら、貴殿の御引廻しに預り、幾久しく磯野家、增々繁昌仕候樣に願奉る、さて此系圖の儀は、光尾の家代々所持仕卷物、御祝言の印迄と請取りわたし、佐内頂戴し誠に御緣ほどふしぎなる物はなし、東のはての光尾の家、又西に入日の筑紫方磯野家との御緣組、いよ〳〵末賴もしくなるなり、子細は、日は東より出て西に入山のは、天地陰陽の御夫婦とは我々が御主人ぞかし、兩家共に隔なきうへは、おろそかにはぞんぜず、其段御心やすかるべし、いざお手をあげられよと互に笑、先つめびらきは是迄、さあ御通りと奧に入、座敷の正面に系圖をなをし、只今是へと申時、爰をはれと姫のいで立、ひぢりめんにほうらいの形を、色々の糸にてぬわせたる打かけ、下着は西がい浪の惣鹿子、常盤の松に腰おれ竹、連理の枝にひよくの鳥をぬわせ、白むくきむくの下着、さげ髮に金もとゆい、待女郎は一色の染小袖、島臺のせうと姥、組肴長柄の銚子、重野右衛門は淺黃小紋の上下、今やおそしのまち顏、すは御出二丁の乘物戸をひら

けば、佐內先に立御案內の長らうか、助之丞は年役すぐに座敷の上座、次は丹前引わたしは夢樂坊、親子妹脊のあいさつおはりこん〳〵の盃、丹前千世は久かたの目遣、互にしり目をやりながす、酒泉はつきぬ兩家のはんじやう、今此時と山崎佐內罷出、一調子張あげ、池のみぎわの鶴龜は、ほうらい山もよそならず、君のめぐみぞありがたき、いかに佐內、かくまで目出度御ざしき、此島臺の鶴龜を御夫婦にまいらせ、今一こんすゝめ奉らん、しかるべしと同音に、龜は萬年のよはひをへ、鶴も八千世を重ぬらん、千代のはじめのかず〳〵に、何をひかまし姬小松、みどりの龜もまひおさめば、たんちやうの鶴も、一千年のよはひを君に奉るとかなでける、おの〳〵ゑつぼに入給ひ、舞樂の曲は面白や、夫婦妹脊の共白髮、さか行末の花の袖、秋は時雨に紅葉の袖、冬はさへ行雪の袂、かへす衣もうす紫の、雲の上人にもおとるまじき秘曲、山河草木國土ゆたかに、千代萬代と舞おさめ、盃もおはりければ、助之丞はいとま乞ひ東國名古屋に歸りぬ、其後夢樂坊に金子五百兩、山崎夫婦には、中の島にて十五軒四方の屋鋪をとらせ、前後の首尾をさゝのへ、佐內は國に召連千兩の分わしり、當分丹前之介がうしろ見に、親重野右衞門は五町わきに隱居、四方四面の藏を立よと指圖し、先立て飛脚を立、大吉日にやかた舟、順風心にまかせ、帆は十分におのれといそぐ海上、本國筑紫に着けると、次郎冠者局腰元衆、裝いしやうをぬぎ殿の御前に畏、丹前能のおわり是迄、不調法仕ました、さあお盃〳〵、

大名、でかした〳〵、是程の長物語をよく仕組、早速目通にて仕事、殊に祝言仕舞身にとつて滿足、己れが智惠には及ぶまじと思ひの外なもてなし、此上は侍分に召上身が近所にてつかはん、當座の褒美として、永代五百石とらすぞかし、何にても替りし事のあらばおもひ付べし、さて此物語を書留、あづさにちりばめ四方にひろめ、人の心をなぐさめよと殿中に入給へば、次郎冠者獨悅、扇子をひらき千秋樂は民をなで、萬歲樂には命をのぶ、相生の松風さつ〳〵の聲ぞたのしむ〳〵、

跋

仰もたしがたく、誰をか頼み此物語を書とめんと、おの〳〵指圖のうへにて、御前義經記の作者西澤氏に思ひ付、ひたすら頼といへ共、元來愚蒙のやつがれ、御免有べしと辭退するにゆるさず、是非なくしげき事業の片手に、筆を力に書ながす硯の水のあさき智惠、文も前後のみにて見る人の笑草、笑はゞ笑ゑと江戸役者、あつゐ所を御賞翫にと、外題も女大名丹前能としるるし、全部八冊にしてひろむる事あゝおかし、

難波津

作者　西澤氏次郎冠者

元祿十五歳初春大吉日

京押小路通ふや町

金屋市兵衛板

女大名丹前能巻之八終

本朝藤陰比事目錄

目録終

本朝藤陰比事卷之一

○失ひたる金子再手に入大工

代々賢き政に筆の林にとゞまりて、今目の前の鑑となり、邪のくもりを拂ふたねぞかし、國ゆたかに民安らかなる春をむかへ、蔽芾たる木陰をのこし、翦ことなかれ拜ことなかれと、正しきを慕ふ唐土の書の名に劣らじと、倭國の櫻に事を比べしより、それに似たる卷々を閲すれば、猶勝れたる事の漏たるを本意なく思ひ、古き翁の物語、松が枝の常盤にかゝる藤なみの宮、こき陰の品々を聞度ごとに、忘れもやせんとあやしき筆に書とめぬ、爰に山城のかた邊り鷺坂村に、彦六といふ大工あり、近き比は出入の方に普請もなく朝暮隙にて、わづか夫婦の口過さへすべきやうなく、仲間の者をたのみ五年以前より關東へ稼に下り、方々と身の油を絞り働きしが、天運の至る所か存の外作料を延し、去極月宿賃幷に諸拂を仕廻、金子百兩三分儲ければ、最早在所へ歸り女房にも悦ばせ、家を小奇麗に建直して田畠を何程買てのと胸算用して、當正月十一日關東を發足し、金子百兩を能々包み肌

につけ、先年金三分を路銭にして下りし時は、道中何の心もなかりしが、今度の登りは道すがらも、宿々にても氣遣絶る事なく、扨々金持ほど窮屈成物はなしと、始て思ひ知られけり、然るところに宮の渡しよりあやしき男二人、大脇指をよこたへ詭聲して、御自分は上方へ登り給ふと見へたり、獨り旅さぞ淋しからん、身どもも京都へ罷越なり、同道して語り申さんといへば、彦六一圓呑込ず、此風俗たしか護摩の灰といふねだり者と推し、そこ〳〵に挨拶して道をはづさん〳〵とすれども、彼二人の者兎角に跡になり先になりて離れざれば、氣の毒千萬に思ひ色々とすかし、日の暮ぬ先に旅店に泊り朝もおそく出立るに、又二人道に待うけ是非に同道すれば、彦六も心の内何とぞ金も命も安穏に、古郷へ返し給はれと佛神に祈誓し、兎角して水口の宿に着ぬ、爰には伊勢講参りに度度泊りたる宿あれば、此所に一夜を明しつく〴〵思案しけるは、最早明日は在所へ歸り着べし、是までは二人の胡亂者をすかし別條はなけれども、今一日の道中わけて心許なし、所詮此金子を此所に陰し置、身輕にして立歸り、かさねてこゝまで取に來るべし、是こそ上分別と、其夜の内に裏の藪の傍、隨分人の氣の付かざる所に百兩の金を埋め、上に古き箸を目印にさし込置、今は心安しと翌日宿を立出れば、あんのごとく町はづれの松原より二人の者つゝと出、やにはに彦六を捕へ、其方我々を道連に嫌ふ事大方心に合點ならん、いそぎ肌に付たる金を渡すべしと、顔色を變眼をいらゝげて云ければ、彦六とぼけたる顔して、扨は是まで同道被レ成しは、我等金銀を持し者かと思しめしての事か、それは近比御はまり也、我等は田舎にて身上潰し關東の親類を頼みに下りしに、かつて取敢ず少も合力とてせざれば、致すべきやうなく、又すご〳〵と古郷へ歸り、在所の憐を受ん心當、夫も叶はず候はゞ乞食に成より外はなく候、此分野を見給へと丸裸に成風呂敷包も開き、袷と古布子の着更一つより外遣ひ銭只三十文ばかり也、不便と思し召下されませと涙をながして云ければ、二人の者大に惘れはて、是は此商賣初つての目利違ひ、かやうのあさましき男に二三日骨を折し事の悔しさよ、其方申分相違あるまじ、僅成着更を差出す心入神妙なり、無事に古郷へ歸し遣すべし、此間同道のなじみあれば不

便に思ふなり、隨分乞食にもならぬやうにかせぐべしと、腰より錢二百文合力と投出し、去にても汝おそろしや一生に覺へぬはまり者、拾ても懷に金子百兩とは目付したり、此以後汝道中を致さば我々が仲間を必々だますべからずと、大笑してぞ立別れける、彥六仕濟したりと嬉しく、足を早めて在所へ歸り、女房に右の次第を委く語り、此度こそ運の開き時來れり、盜人にさへ錢二百文取たる事古今稀なる仕合、今宵ははやく休み明日水口の伊勢講宿へ行、金子を取て歸り、百兩のうつくしい顏を見せん、先此錢で酒かふておじやと女房に酒を買にやり、何か草臥はするいつ酒かふて戾つたも知らず、悅び寢入に其夜も明る、早々水口の宿へ行、目印の所を掘て、見れども古箸は其まゝ有ながら金子は壹兩もなし、是はと驚き其邊を搜し見れども小判らしき物はなし、宿にも隱して埋め置たる金なれば外に知る人はない筈、せんさくすべき相手もなし、是はいかなる因果ぞと足ずりして泣どもかひなし、すぐに在所へ歸り女房にかくと聞せ、夢見たるやうな金をもふけ、能々のつたなき運誰を恨ん事もなし、自害して死なんと獨り狂へば、隣の亭主駈付來り、こは何事ぞと尋るに、日比のよしみつゝむべきやうなく、有し次第を語りければ、扨々不仕合成義、しかしながら此所の御地頭は、御慈悲ふかくましませば、此のごとく雲をつかむやう成事なれども、又御發明の御捌にて、金子の行衞知まじき物にてもなし、ひらに御願あるべしと勸るにより、俄に訴狀認め御前へ罷出る、

乍レ恐言上仕候、鷺坂村大工彥六と申者にて御座候、私義所にて働少く候故、五年以前關東へ罷越かせぎ申候處、去冬迄に金子百兩儲悅ばしく、當正月罷登候道中にて、胡亂成者道連に成何とも迷惑に存、懷中の金子百兩江州水口江戶屋佐次兵衞方に一宿仕、夜更人靜て後、家の後の藪に古き汗手拭に包埋置、又明日取に參候處、目印致し置候下に金子無レ之、あきれはて無二是非一罷歸申候、私不調法故失申候金子にて御座候へ共、貧成者漸と儲出し今又失ひ申候ては、此後渴命に及び難儀仕候、御慈悲の上此金子之行衞相知れ申候樣に御詮議被レ成候はゞ、忝可レ奉レ存候以上、

月　日　　　　鷺坂村　大工彥六判

地頭聞し召上られ、是證跡なき願なり、何にても詮議

の種に可ㇾ成事ならば可ㇾ申、先汝家内幾人暮候哉、私女房と只二人の外女房飼置候猫壹疋ばかりにて御座候と申上れば、其猫有こそ幸なれ、是を詮議の種にすべし、汝歸りていそぎ酒を調へ村中の者どもを呼寄饗應(ふるま)ふべし、村の者ども聚りたる中へ其猫を出し、猫の膝へのぼり候者有ㇾ之候はゞ、其者の名を申出べしとの御意、一切合點ゆかねども何かは知らず有難しと罷歸り、其晩に村中殘らず呼あつめ酒をすゝめ彼猫を出しけれど膝へ上る客もなし、跡より日傭の與五八といふ男來り、今晩は御造作と座になをると其まゝ、猫走寄り膝にのぼり咽を鳴し嬉しさうにすれば、彦六扨こそと心に悦びあくる日早々地頭へ罷出、日傭與五八と申ものゝ膝へ猫のぼり候と申上れば、其與五八家内幾人暮候哉と御尋、老母と只二人貧く暮し氣儘成者には候得共、母親とは中よく仕候と申上れば、急ぎ與五八親子を庄屋召連出べしと御呼寄、先老母壹人御前に召され、其方悴汝に孝行の由、此間何にても與五八に貰ひ不ㇾ申哉と御尋、成程私悴貧しき身にて孝行に致くれ、此中は少仕合致したる初尾とて錢五百文寺參りの散錢にとてくれ申候、我子ながら二十四孝の内にもあるまじと存候と申上る、委細聞届けたり猶尋る事も有、門前に扣へ可ㇾ申、一時許りありて彦六與五八庄屋を白洲へ御呼出し、扨彦六汝が失ふたる金子吟味之上出たる間渡し遣す也と古き汗手拭に土の付たるに包ながら彦六に被ㇾ下、百兩の内一兩不足有ㇾ之、此一兩は拾ひたる者早遣ひたりと思ふたり、彦六漸と儲ためたる金子なれば、一兩の不足も不便なり、此間村中の者共彦六方にて酒をふるまひたるよし、其禮として村の者共より金子一兩出し遣すべし、此旨庄屋より村中へ申渡すべし、扨彦六が女房は思案の上にて離別いたし成とも勝手次第たるべし、扨與五八は老母に孝行なる由、此後も懈ず母を大切にし、其孝行の志を以て、他人に難義を懸る樣成非道の心を改むべしと仰付られけると也、是先に彦六も與五八も庄屋も門前に待たせ置、其間に役人衆を與五八方へ遣はされ、家内の諸道具を改めさせ給ふに、古長持の底に金子一包を古き汗手拭に土の付たるに包みながら有ㇾ之しを、役人衆とりて歸り差上給ひしと也、地頭の頓智御發明の程凡慮の及ぶ所にあらずと、人々感じあへりけるとなん、

○藤太夫が願ひを遂る囑託

恐ながら言上仕候、私儀は市橋村藤太夫と申ものにて御座候、夜前丑の刻ばかりに、盗賊十七八人押入、わたくし妻子家來共しばり付、あるひは胡椒頭巾をかぶせ、衣類諸道具には手をつけず、金子千二百兩銀二十貫目餘うばひ取、下男一人切ころし一人は手を負はせ、十死一生にまかりあり候、かの盗人共つらに墨をぬり、かたちは色々に出立候へば、一人も見しりも御座なく、行方しらず逃ちり候、御慈悲に御詮議被レ成下され候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　市橋村　藤　太　夫　判

地頭よりいろ〳〵御穿鑿あれども、三十日あまりしれざりければ、やがて囑託の札をたてさせられける、此たびの盗賊を訴人に出るにおいては、たとへ同類たりとも、その科をゆるし褒美として黄金五十枚下さるべき旨、高札にしるし置れけれども、たれしりたるさたもなく、二十日にあまり訴人も出ざる故に、又御思案ありて、かの囑託の札を取入、此たびの盗人を訴人いたすもの褒美として黄金十五枚下さるべしと高札をたてかへさせられければ、世の人不審して、黄金五十枚にてさへ出ぬ訴人、十五枚に減少して、何として出べきと取沙汰しけるが、ある夜かの高札にはり紙せしものあり、みれば、其前仰出させられし通金五十枚下され候はゞ、早速訴人仕候べしとぞしるしける、さては此比の盗賊の中より訴人のもの出るといふ、取さたかくれなかりしが、ふしぎや近所の百姓三人商人二人行がたなくかけ落したりけるを、東西南北の海道筋へ追手をかけてとらへきたり、立退たる子細拷問におよびつゐに白状し、他村の同類をもさしづして、以上十七八人あきらかにしれ嚴科におこなはれける、右の金子のうち、はや百三十兩の不足はあれども、殘金ありがたく取かへしける、訴人に出んとはり紙せしは地頭の御智惠袋より出しはかり事なりとかや、

○自身の證據は隱家なき盗賊

恐ながら言上仕候、舟居町の北裏水本明神の森、大破に及たる舞臺火燒屋御座候、緣日祭禮の外常に參詣もなく、境内に社司も住居は仕らず、森々たる林にて御座候所、何もの共しれず、夜に入り候へば宮の木葉を掻、枯枝をおろし、火燒屋に五人十人づゝ食事を調

候事折ふしにて御座候へども、此比はそろ〳〵大勢に成、晝夜住家といたし罷在候を、神主名主吟味いたし候へば、毎日四條河原東山、暮かたには伏見の舟着場など徘徊いたし候巾着切共に相きはまり候故、此宮の境内を追立申候へば、村中を黑土につかまつらんなどと惡口いたし候ゆへ、氣遣しく奉レ存、もはやわれらぶんざいにて急に追立申事難レ成御座候、若御年貢米の藏の屋尻、又は押入などこゝろもとなく奉レ存候間、御威光をもつて立のき申やうに仰付られ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　名主村中

地頭聞しめし屆けられ、右訴訟人のうちよりつら見しりたる者目あかしに相そへてさしつかはされ、近目の權藏小猿の彌五六といふ二人を召捕、御吟味のうへ數年の惡事此たび斬罪に仰らるべけれ共、御慈悲のうへ一往は御たすけなさるゝなり、此うへは汝兩人のものを巾着切中間のかしらに申付るあいだ、たゞ今まで當所へあつまる人數生國實名明細に書付をもつてさしあぐべし、其外は他國より入來るやつばら一人も置べからず、扨領內他領は申に及ばず、夜陰のはたらき一切停止なり、白晝にぬかりたる男の巾着切ほどの事は、おのれらが手づまをもつてはたらくは各別、其外は追剝辻切等仕るにおいては、兩人のものを始め手下の者まで御仕置仰付らるべしと、一手かはりたる御捌に、命たすかり死出の山よりよみがへりたる心地にてよろこび罷歸り、翌日同類吟味して五十三人生國實名委細に書付をもつてさしあげ、しばらく安堵のおもひをなしける、十日餘り過て兩人のもの俄に召れ、此たび御求めの鎗長刀刀脇ざし御ためしなさるゝ間、其方手下のうちより七人、明後二十九日からめとりてまいるべし、兩人は前かたに土壇こしらへいたせと仰つけられけるを、かしこまりて罷歸り五十三人を俄に呼あつめ、此事を披露するに、いづれも肝をひやし、誰七人のうちに入べきといふもの一人もなし、とかく鬮どりにしてさだめられしかるべしと、はかどらぬ談合、明日又よりあふ約束してみな退出しけるが、その夜五十三人いづくともなく迯ちりぬ、かくては權藏彌五六もたまりがたしとて、失せてんげり、これぞ深き御計策とて感じける、

○非に似たる理を云立の浪人

「當十七日の夜觀音町にて金子拾ひ申候、落し主候はば御出可レ有候、員數包の品相改可レ申候以上、
　拾ひ主櫻町小間物屋與六借屋村賀惣太左衛門と御尋あるべく候」、

恐ながら言上仕候、私儀は黒非町鷺澤屋四郎八と申者にて御座候、當十七日の夜金子三百兩落し、方々相尋ね申候得共無ニ御座一難義仕候所、此金拾ひたる者、所々に張紙を出し置き、天のあたへと奉レ存、すなわち櫻町村賀惣太左衛門と申人相尋ね候へば、諸色念の爲にあらため申さるゝに付、財布は奥島に淺黄裏、紐はまがひ糸、色は相傳茶、さて金子三百兩山本屋勘八郎包み封印判形書付の次第、少も相違なく落し主に相究り候故、少分の禮金をも仕る合點にて、右の金子申請度段々申入候へば、一度拾ひたるうへは、其方落し主に相究り候得共、返し申儀はまかりならずとて、相渡し申されず候、御慈悲のうへ右惣太左衛門召出され、返し申やうに仰せ付られ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　鷺澤屋四郎八判

地頭聞し召分られ、村賀惣太左衛門鷺澤屋四郎八を召出され、其方金子拾ひ申に付、その主へ返さぬ覺悟ならば、何として張紙をいたしけるぞと御尋ねある時、惣太左衛門申上けるは、私儀已前は小知をも取能在候處、十五年以前不慮に浪人仕り、緣類古傍輩共の合力も永々の儀故申請がたく、暮行年々の借金店賃六七年このかた一錢も拂ひ申さず、朝夕の煙たてかね候所、此度存じよらざる金子を拾申儀、いまだ其理にもつきざること奉レ存、右の借金貸かゝり等はらひ可レ申覺悟に御座候得共、きのふけふまでかくれなきすりきり浪人の儀、俄に大分の金銀とりあつかひ致し候はゞ、家主を始め金銀ひろいたることは申さず、盜賊いたすか又博奕などの非道なる儀にても仕りたる金銀かなどゝ噂仕られ候ては一分捨り申すとぞんじ、たしかに拾ひたる儀を諸人に披露仕度、さて落し主を吟味仕候までに御座候、それ故はり紙にも落し主へ相渡し申べきとは書付申さずと申あぐれば、地頭漸しばらく御思案ありて、四郎八に仰付られしは、尤其方落したる金子にまがひなき事なれども、惣太左衛門隱密にいたしおけば、其方損にいたすべきより

外なし、兎角これは拾ひ主しれぬむかしと存じあきらめて立ませい、四郎八是非なく涙を流して退出したりけり、その丶ちひそかにかの浪人の筋目、古主の首尾御聞とゞけの上御詞そへられ、本知五百石にて西國へ身上相濟、その丶ちみとせあまりありて、四郎八方へ金三百兩樽肴、女房方へ金子百兩絹綿相そへてつかはしける、拾ひ金よりふた丶び立身の種、四郎八かたへも生出(はへいで)けり、地頭の賢慮淺からずとぞ、

○質物は當の違ふ槌右衛門

恐ながら言上仕候、私は大工桁右衛門と申者にて、樫屋槌右衛門借屋に六七年まかりあり候所に、去年の春より諸色高直に付、妻子共六人口渡世いたしかね候、其うへ屋賃とゞこほり候とて家主方へ私道具箱を押へ取置れ候へば、細工に出べき手便も御座なく、屋賃は申におよばず、當分妻子共渇命に及び難儀仕候、右家主召出され道具箱返しくれ申やうに仰付られ被レ下候はゞ、忝可レ奉レ存候以上、

月　日　　大工桁右衛門判

地頭兩人のものを召出され、屋賃はいかほど滯りたるぞと仰けるに、家主罷出七拾目と申す、大工が道具箱をば今日まで幾日ほどおさへ置たるぞとあれば、五十日と申す、桁右衛門に御尋ねありけるは、其方一日の作料はいかほど取とあるに、一日貳匁づ丶と申す、しからば家主かたより、その道具箱に銀三拾目相そへ、急度桁右衛門に返辨仕れと仰せわたされける、

○不審を肩に知る木割の木工平

恐ながら言上仕候、私はとひ坂村角藏と申者にて、毎日外へ日用はたらきに參るものにて御座候、然る所今日わたくし留主の內に、何者のしわざにて候やらん女房共のくびをきりむくろ斗り、內のつねに居申候所にすて置申候、くれに及罷歸り見付申候て、何共せん方無二御座一候、慈悲に御せん議なされ被レ下候はば、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　とひ坂村角藏判

恐ながら言上仕候、わたくし儀は鳥井村可左衛門と申者にて御座候、たつと申娘壹人これあり候を、去年隣村とひ坂の角藏と申すものに、嫁入いたさせ申候所、昨日角藏外へまかり出暮がたに宿へ歸り見候へば、何ものかたつが首を切、むくろばかりこれあり、しかもそのくびの行衛も見へ申さず候よし、私かた

へ申來り候、段々何ども合點まいらず候、推量いたすに、外に金子の少しも持參仕候女房を約束仕か、又はかくし妻をこしらへ、たつにははや秋風たち申候ゆへ、自身手にかけて首をきり、他人のいたし候やうにたくみたるものと奉レ存候、しかれば科もなき娘を理不盡に殺し候へば、急度かたきを御取被レ下候はゞ忝可レ奉レ存候以上、

月　日　　からす井村可右衛門判

地頭しばらく思案ありて、可左衛門疑ふ所も少し理有といへども、妻たるもの丶事たとへ不縁にして外に心うつる共、離別するに子細あるまじきを、みづから手にかけて殺すほどの儀はあるまじ、此たびの殺し手は外の者なるべしと、おぼしつけ給ひけるにや、村中へ御觸ありて、惣じて日傭はたらきいたすほどのもの共を殘らずめしあつめられ、きのふおと丶ひよりこのかた、何にても不審なる事にやとはれたる覺へあらば、只今まつすぐに申上ぐべし、つ丶み置後日にあらはる丶においては、罪科輕からずと仰られければ、木割の木工平と申者まかり出、おと丶いの夜半過に戸杉屋半七と申もの丶譜代の下女、頓死仕りたるよしにて桶に入、野墓に埋めくれ候やうにたのまれ、振かたげまいり埋め申候、此下女常に見及びたる肥肉とは相違いたし死骸ことの外かろく、二三歳許成子供の死人との樣におぼへ候、此外に不審なる事御座なく候と申す、しからばその桶をほり出し持參申せと仰付られけるにまかせ、やがてほり出し地頭の前にて桶の蓋とりてみれば、女の首ひとつあり、早速かの可左衛門をめして、これ其方が娘の首かと御尋あり可左衛門取まはしうちながめて、わたくし娘のつらには左の目の上に黶（ほくろ）、耳の下に蓮根の跡の目じるしあり、此首すこしも似たる所これなきと申す、地頭も不審におぼしめし、戸杉屋半七を召れ、其方が下女頓死したるとて野墓に埋みけるよし、まづくび斗りそうれいする事ふしん也、その女の骸（なきがら）はいづくにあるぞと詮議あるに、半七到惑し返答遲々したる躰を御覽ありて、きびしく拷問ありければ、内々角藏が女房と密通いたし、何とぞ女を取出し、かくし置てちぎるべしとしめし合せ、内々ひまをうかゞひけるが、折節下女頓死したるをさいわひに、そのくびを切、むくろに角藏が女房の衣類帶をいたさせ、留守

のうちに人の殺したるやうにいたし置、さて角藏が女房はひそかに手前にかくし置たるよし白狀まぎれなく、おたつ半七木のそらへのぼりけるとなり、

〇命の算用は恩ある科人

恐ながら言上仕候、私儀は弦掛屋升右衞門と申米屋にて御座候、昨十六日の夜わたくし見世さきに火の札を張申候を、今朝町内のもの共見つけおどろき候、その札に道有判とたしかにこれあり候、此道有と申すものはわたくし古主にて、すなはち隣町に借宅仕罷あり候、則はり札も持參仕候、御せんぎ被ㇾ下候はば難ㇾ有可ㇾ奉ㇾ存候以上、

月　日　　つるかけ屋升右衞門判

地頭開しめし、名判をすえて火の札をはるはめづらしき儀なりと、即刻道有を召れ、火の札はりしは其方かと御たづねある、かしこまりて申上げるは、わたくし事親代より米商賣いたし候所、年罷寄その上病身につき、商賣の世話いたしがたく、もとより妻子も御座なく、家を賣拂ひ候樣子にて、一人貧樂の崩し喰にて一生終り申べき覺悟を極め、十六ねん以前に法躰仕り小借屋をかり引こもり、當年七十五歲に罷成候、此外升右衞門と申ものは十一歲より召つかひ、三十五歲にまかりなり候時、搗米賣買の得意から臼升かけまで相そへ、仕似せの見世をゆづり置候へば、段々かせぎ出し、只今は家屋敷をも求め、一家八九人の渡世ゆるりと仕罷在候、然る所にわたくし三年前に盜賊にあひ、餘慶なき金銀衣類迄不ㇾ殘とられ、飢に及候へ共、外に賴むべき親類一門とても無ㇾ御座ㇾ候故、升右衞門折々合力を賴み申候所、たびたびの無心まかりならずと惡口仕、あまつさへ打擲に及び申す仕合に付、不屆に存じ、せめての無念はらしに火の札を張、胸をはらし申までに御座候、眞實に火をつけ申す心底にては御座なく候ゆへ、私名をかきつけ候よし申上ける、地頭開し召し上られ、まづもつて升右衞門儀不忠不義のもの也、幼少より飼たてられ、今大勢の妻子眷屬を養ふ事、ひとへに道有が恩なれば、主と親とのめぐみをかうぶりながら、七十五歲の身、あすをもしらぬ道有一人の渴命を世話にせまじきとて、火あぶりの訴人に出るは非道千萬なり、十一歲より卅五歲まで廿五年の厚恩あれば、道有を今日より二十五年養ふべし、さりながら道有事は火つけ同前の科

人なれば、宥免なりがたし、廿五年過て急度火あぶりに申付るあいだ、町の者さやうに心得候へ、たて〳〵、

○冥途の勘略は小細工屋が願

恐ながら言上仕候、私儀は白石町に罷在候小細工屋平内と申ものにて御座候、むかしよりの諺に一日一國に千人生れ千人死ぬると申ならはし候、まことに毎日鳥邊野舟岡山をはじめ、在々所々の墓所三昧に送葬のたへまなき事、數かぎりも御座なく相見へ申候、これにつき土葬火葬によらず、棺桶に六道錢と申て鳥目六文づゝ入て送り候へば、此錢は灰土になり、一日の中にもよほどづゝのついへ、積りてはおびただしき事に御座候、向後　鉛か土か古ぎせるの火皿にて錢の形を仕り、六道錢はわづか二三文に相さだめ、世上へ賣ひろめ申たく候あいだ、聞しめし上られ候うへ、國中へこれをもとめ申やうに御觸仰つけられ、わたくしを六道錢賣所に仰付られ被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　小細工屋平内判

地頭ヶ召、成程其方が申通り、大切のたからを土に埋火にやきすて候、國土のついへなり、さりながら六道は地藏の支配ときく、その上ゑんま王合點いたされべきや心許なし、汝先早々冥途へ參り地藏ばさつに相對いたし、その上ゑんま大王へそせうすべし、早早娑婆のいとまをとらすべしと仰られければ、殊外におそれふるいわなゝいて、足ばやににげて歸りけり、内へ歸り女房見ればあたまのてつへいより血ながれたり、餘りのおそろしさ、御門のくゞりにてかしらを打當候をおぼへずとなり、

本朝藤陰比事卷之一終

本朝藤陰比事卷之二

○念佛に湎く內井戸の錢

乍レ恐言上仕候、わたくしは井戸ほり水右衞門と申者のつまにて御座候、水右衞門儀きのふ竹田町新兵衞と申人に雇れ、掘ぬき井戸をほり候所に、側崩れ落申候て土にうたれ、即時に相果申候とて、ほり出したる死骸をもたせ越れ候得ども、元來一日暮しの貧者にて御座候へば、早速葬禮のいとなみいたしがたく候に付、新兵衞にせめて輿桶調申ほどの合力をいたされ給り候へとなげき申候得共、一日の雇賃さへくれ申されず候故是非なく古き葛籠に入、旦那寺へ土葬にいたし候、明日ははや三日にて候へ共香花そなへ申すちからも御ざなく候、さだまり事とは申ながら、家こそおほく候に新兵衞方にて、かやうに不慮の災難にあひ果候へば、何とぞ少のとぶらひ料をくれられ候やうに、仰付られ被レ下候はゞ、有がたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　　水右衞門後家判

地頭きこしめし上られ、一日のやとひ賃をきはめてほらせたる井戸を、ほりおほせずして相果たる者に、作料をわたせとは申つけがたし、萬一新兵衞料簡して不便とおもひて、こゝろ付いたすは各別の事たるべしとて、御とりあげなきによつて、後家是非なく御前をまかり立けるを、呼かへさせ給ひて、新兵衞宗旨は何ぞと御たづねありけるに、法華の屋札これあり、水右衞門は淨土宗と申す、しからば寺へ參るほどのちからなくば、水右衞門が相果たる井のもとを墓所と存じ、線類をかりもよふし、一七日が間參詣して、念佛を申べしと仰られけるにまかせ、翌日早朝より新兵衞が內井戸の前に線類あつまり、こゝこそ夫の最期所よと泣わめき、子供まじりに高聲に念佛を申し、鉦たゝきたて、每日參ければ法華の新兵衞あきれはて、此家にて念佛申たる事代々これなき處に、これはいまくしき次第なりとて、錢五百文よりあつかひかゝりて、七日めに八貫文にて念佛をやめけり、これ地頭御慈悲の流れ、鰥寡孤獨にうるほひける御捌とて感じけるとなり、

○籠舍の修行は兄弟の德

乍レ恐言上仕候、私共は菊井町の年寄五人組にて御座

候、町内にて杉板屋太郎兵衛と申者有レ之候所に、去る七月下旬に卒中風にて何の遺言も申置ず、即時に相果申候、妻も三年以前に相果、世悴貳人御座候、兄は太郎市、弟は太郎次と申候、しかるに兄太郎市は四五年病身に罷有候て、見世商の働のかけ引は弟の太郎次仕候、しかるに家屋敷本宅共に二箇所在金貳千兩御座候を、此比兄弟跡式をあらそひ申すに付、町内より異見仕り、世間大法のごとく、何事も惣領こゝろ次第しかるべきと申候へば、弟太郎次申候は、兄は數年病者に付 此家内商賣の儀、一切我等かせぎ出し申候うへは、家財屋敷、外に妨げ申者無レ之由申つのり、兄は又弟を追出し可レ申と、たがひに口論やみ不レ申候、親太郎兵衛書置も遺言も無二御座一候に付、何共町内の者の手にあまり候間、御慈悲のうへ如何樣共被二仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　菊井町　年　寄　判

同　　五　人　組　判

地頭聞しめし上られ、兄弟の者を召出され、兩人共に禮も儀もなき非道ものなり、もろこしには父死して兄弟田畠をゆづりあひて、たがひに取ざる例さへあるに、さやうの道をばしらず共、兄は弟をめぐみ弟は兄を敬まふ事を忘れて、父の遺跡を我まゝに奪とらんとあらそふ事は、言語道斷の非義なりとて、兩人共に籠舍仰付られ、屋敷家財は封印にて町中へ御預けになりぬ、兄弟は一所に籠獄の身となり、百日あまり何の御沙汰もなかりけるが、ある夕暮兄太郎市涙ぐみて弟に申けるは、親となり子となり兄となり弟となるも、前世の宿縁あさからざる故なりと聞及びしに、たがひに意趣遺恨もなき事に、兄弟かやうに敵のごとくなるのみにあらず、此うきめにあひ、そのうへ親の命日の香花をもそなへず、不孝なる世の取さたにおよび、現世後生の冥罰のほどもおそろしき次第にあらずや、そも／＼此公事のをこりは、家二ヶ所金子二千兩を一人して取べき大欲より出たり、しかるに此躰にて永々籠舍せば、老少不定の世界に何時相果べきもしりがたし、しかるうへはむなしく親の跡は、他人の手にわたるべし、いざ家も一ヶ所宛、金子も千兩宛わけ取にせんに、誰異亂いふものにあらん、そのうへ我等病身なれば妻女持べき願ひもなし、極つて其方よりさきだつ身なり、なきあとをとぶらふ

ものなければ、發心入道の身ともなりて、此後はひとへに、到來のつとめをはげむべき思案におもひつきたるうへは、先非を悔むなりとしほ〳〵とかたりければ、さすが血肉をわけたる弟も落涙して、はじめて和談し、御訴訟申上たきねがひをいたしければ、御前へめし出されぬるに、兄弟心を合せ、親の名跡相談仕り度よし、御ねがひ申上ければ、今合點おそしと町の者共召出され仰られけるは　惣じて少欲知足とて、少分にて足たる事をしるをもつて福者と名づく、千萬の金銀を持ても、足事をしらざるを以て貧者と名づく、此兩人の者共百日籠舍の修行によつて、此道理をさとりたると見へたり、いよ〳〵此度兄弟孝行の道を守り、心を合せて親の名跡を相續仕れと仰付られけるとなり、

○秀句を知らぬ町内の喧嘩

乍レ恐言上仕候、私儀は梅谷町鉑屋宅兵衛と申す家持にて御座候、石松と申す當年九歳に罷成候世悴一人御座候處に、町内の夜番戸右衛門世悴岩吉と申す十歳に罷成候者、私世悴石松を狸の子と申す異名を付慮外をはたらき申候故、親戸右衛門を町ばらひにいたし給はゞ候へと、宿老へ申候得共取あひ申されず候間、御威光にて戸右衛門めを町拂ひに被二仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　月　　鉑屋宅兵衛判

地頭兩人の世悴共を召出され、何とて家持の子を狸とは申たるぞと仰られければ、岩吉申上けるは鉑屋の子私を狐の子と申候故、その返答に狸と答候と申ければ、鉑屋の石松は、何とて夜番の子を狐とは申たるぞと御たづねある時、あの者の親、夜に入候へば火をともし候故狐の子と申候と申す、岩吉が返答にも子細あるかと御たづねの時、岩吉かしこまつて、親は鉑屋にてきんをのばし候故、狸の子と答申すと申上ければ、地頭笑はせ給ひ、いづれも理窟なる秀句を申たり、がやうの面白き事を、親共文盲にて公事に取むすび、隙を費して家職を怠り、公儀をかろしめて申きたる事不屆なり、惣じて若輩なる者共のたはぶれいさかひを、親共とりあげるによりて、町内に物いひたへず、向後はよしなき子供の喧嘩を取あつかひて、かろ〲しく申きたるにおいては、親子共に籠舍申付べしとぞ仰ける、

○鼻は二つなき貞女の證文

乍レ恐言上仕候、私儀は梅原町玉澤屋幸右衛門と申もののゝ女房にて御座候、幸右衛門事三年已前相煩ひ、十死一生にて臨終を相まち申節に及び、くるしげに申され候は、一子とてもなければ別に申置事なし、此跡式は其方後家をたてゝ、なき跡の菩提を問くれ候へ、さりながらいまだ三十にもたらざる身なれば、後家をたてがたかるべしとおもへば、執着の闇路に冥途おぼつかなし、髪は切ても半年か一年のうちにも延るものなり、ねがはくは息のかよふうちに、貞女の道をたつべき誓ひを立、その方が鼻を扮で棺桶に入なば、千部萬部のとぶらひよりも滿足たるべしと申されけるにより、もとより兩夫にまみゆべき心底にあらね共、後世のまよひとなり給はゞ望みにまかせ申さんとて、剃刀にて鼻を扮でみせければ、幸右衛門こころよげにうちうなづき、今はおもひ殘す事なし、念佛十ぺんばかりとなへて、往生こゝろよくとげらるるとぞんじ候處に、思ひの外氣色たてなをし、病氣次第に本腹仕申され、只今は鬼とも組申さるゝやうに達者になり候に付、わたくし鼻のなき顏みぐるしくおもはれ、始の思案とは引かへ、けふ此比はよしなき事を口舌がましく申たてられ、急にいとまをつかはすとて、去狀を書てなげつけ追出され候、かやうに鼻までそぎたる心底を反故にいたされ、只今になりさられ候ては、もはやいづかたへよめ入いたし候事もなりがたく難儀仕り候間、たとへあたらしき女房を呼むかへられ候共、わたくしをば養ひ殺しにいたしくれられ候やうに、御慈悲に仰付られ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　幸右衛門妻

地頭聞しめしとゞけられ、夫幸右衛門をめし出され仰られけるは、もろこしには釵を望しものにつかはすべき約束したりけるが、かの望みしもの不慮に相果たりければ釵の主一言をたがえじと、死したるものゝ塚のうへに、かの釵を掛置て歸りける事さへあり、汝すでに死期におよび、年比相馴し女に家屋敷をゆづりあたふべき約束のうへ、貞女の道をたつべき證據に二つとなき鼻をそぎて遣はしけるは、手形證文取かはしたるよりたしかなる證文なり、一たびもらひたる跡は家屋敷は女の物に極りたり、その後離

生けるは、水をはなれて逢開き、破たる石のふたゝびあひぬるより稀なるためしなれば、家財汝が物にはあらず、急いで女に渡してまいりかゝりたる地獄へなりとも、極樂へなりとも、勝手次第に早々まいるべしと仰付られければ、幸右衞門道理に伏して、何とぞ今一たび頓死の往生とげ候迄は、後家にめんどうを見て與申やうに、御慈悲に仰付られ被レ下候へと、御佗申して立にけり、

○詮議動かぬ石佛の番

乍レ恐言上仕候、私儀は木綿荷ひ賣の河内屋羽右衞門と申ものにて御座候、昨二十一日いつものごとく所所荷ひめぐり候處に、草臥申に付坂見町の裏町に荷をおろし、しばし休みふら／＼居ねふり仕候うち、一荷の木綿をぬすまれ申候に付、おどろき近邊かけまはり吟味仕候得共、行衞しれ申さず難儀仕候、私一世帶此木綿一荷に打込、妻子五人かつ／＼口過ぎ仕事に御座候得ば、最早今日より家内飢に及び申候間、御慈悲に御穿議被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　河内屋　羽右衞門判

地頭仰られしは、身上ありたけを荷ひ出で、諸人往還の海道にて晝寢するほどの不屆きものなれば、盜まれたるは尤なり、屏を越壁を穿ちてさへ盜む世の中に、おのれが油斷よりかゝる不調法を何とぞして詮議の手がゝりあるべし、たゞし其木綿の荷をおろしたるあたりに胡亂なるものなかりしかと、御たづねあれば、塵塚の側に石地藏これありと申す、地頭おかしがらせ給ひ、しからばその石地藏がぬすみたるべし、惣じて其坂見町の裏店には、商賣たしかならざる者共の住家ときけば、石佛まで行跡よろしからずとて、町の者を召出され、町内に盜したる石地藏あり、晝三人夜五人づゝ急度番を仕れと、仰つけられけるにより、是非なくお請を申して歸り、晝夜八人づゝ番をしたりけるが、四五日ありて町中寄合をして、此たびの仰付られ何とも難儀なる事なり、人々相應にいそがしき家職を止、迯はしりもせぬ石佛に、はり番して日をくらし夜をあかし、いつまでのかぎりもなき費なり、此上は木綿賣がぬすまれし高をつもり、町中よりこれをわきまへて、一日もはやく埒を明る談合、いづれも同心して、家持借屋おしなべ　もめん一疋づゝ割

つけて、家數ほど買進め內證にて扱けるに、木綿屋了簡したりければ此段申上ける時、その買あつめたる木綿を羽右衛門を召出され、此うちに其方が目じるしの符帳にてもつけ置たる木綿はなきかと仰られければ、羽右衛門かたはしより吟味したりけるに、目じるしの木綿二疋選出し、これ私の盜まれしにて候と申す、これによつてその賣主を御吟味ありければ、町內にぬす人ありて御仕置に仰付られ、外の木綿は町中へ返し、ぬすまれし分殘らずとりかへしけると也、

○百兩の敷金は命引替

乍レ恐言上仕候、私儀は藤澤町七郎兵衛と申者にて御座候、娘一人有レ之候を舊冬玉井町衛門八と申ものゝ方へ、金子百兩つけ候て嫁入いたさせ候所に、當正月養父入に參候て、いかなる樣子にやふたゝび衛門八方へ歸り申す間敷と申に付、いろ〳〵異見を仕り候へば、ふら〳〵わづらひ出し、そのうへ是非かへり申せと折檻これあらば、首をも縊り身をもなげんと申候に付、一人の娘の儀にて候へば不便に存じ、兎角不緣なるものと奉レ存、衛門八方へ暇たまはり候へと、たび〳〵申つかはし候へども承引仕らず候ゆへ、歷の長老和尙達迄賴み申候得共、所存これあるよしにて埒明け申さず候へば、一人の娘の命を失ひ申處、御慈悲に御救ひ被レ遊、衛門八に暇くれ申やうに被ニ仰付ニ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　藤澤町　七郎兵衛判

地頭不便におぼしめされけるにや、衛門八を召出され、其方が女房不緣に付たび〳〵暇をもらふ事、歷々の知識上人迄をたのみけれども承引せざるよし、此等の儀は公儀より急度申付る、子細にはあらねども、一命をいひたてに親共訴訟仕るによりて、樣子を尋ぬるぞと仰られければ、衛門八申上けるは夫に暇をくれと申程の不屆なる女に、執心遺恨をさしはさみて暇をつかはし申さぬにては、まつたく御座なく候得共、敷金百兩持參申したるを、當座入用につかひはたし候へば、これをさいかくの後埒を明け申べくとぞんじ、御あつかひの御方へも無ニ返事ニにまかりなり候、外に子細御座なく候と申す、地頭御褒美ありけるは、常躰の町人ならば女の方よりいとまを取からは、敷金などはその通りにおしなぐり申べきを、さもしからず暇に相添かへすべしとは律義なる所存也、

聞とゞけたりとて歸し給ひ、翌日女の親を召出され、衞門八方のいとまを取には金子百兩入る事あり、出すべきかと御尋ありければ、一人の娘の命にはかへがたく奉ㇾ存候間、家財を賣たて候てなり共さいかく可ㇾ仕と申す、しからば敷金百兩の請取仕れとあるにより一札いたしけるを、衞門八を召出され、敷金才覺苦勞たるべしいとまの狀もしたゝむべしとて、百兩うけ取の證文と引かへに仰付られけると也、

〇科は何ぞと白玉の神主

乍ㇾ恐言上申上候、私儀白玉明神の神主惣太夫と申者にて御座候、中古より此宮の境内に社僧出來仕候て、兩部習合の神道執行仕罷在候て、神事祭禮尤兩人にて相勤申候、しかるに只今の社僧第一欲ふかく、其上女犯肉食を仕り、淸淨の宮地を汚し申候に付、早々寺をあけて渡され候へと申候へども、我まゝを申取あへ申さず候間、早々追院仕り候やうに被ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下候はゞ、有がたく可ㇾ奉ㇾ存候以上、

月　日　　神主　惣太夫判

地頭聞し召され、來十一日に双方對決あるべきよしにてまかり出けり、社僧聞つけて早速訴狀をさしあげける、

乍ㇾ恐上言仕候、私儀白玉明神の社僧にて、四五年宮寺に住持職仕罷在候所に、氏子の祈禱八卦あまた申來前々より宮寺繁昌申やうに取さたこれあり候を、神主惣太夫妬み申にや、いろ〳〵無躰なる儀を申かけ、氏子旦方にて私を賣僧など取さた仕候よし承り候、沙門の儀ゆへ境界かろく、いづかたへなり共立退申儀もくるしからず候へども、無實の難題を申かけられては師匠法眷の手前、不行跡まかりなり候うへは、一身の立所御座なく難儀におよび候間、御慈悲に神主難題の品々糺明とげられ被ㇾ下候はゞ、有がたく可ㇾ奉ㇾ存候以上、

月　日　　社僧　眞了判

兩人呼出され對決に及びけるに、神主の訴狀に女犯肉食にて宮地を汚すよし、それはたしかに見とゞけたる證據あるかと仰られければ、神主まかり出、女をば晝夜眠藏にかくし置、人音いたし候へば深くかくれ候ゆへ、見つけたる儀は御座なく候、魚鳥の料理も夜ふけ候て ひそかに煮燒いたし候故、にほひばかりを嗅申候と申す、地頭仰られしは、それは推量の分に

てたしかならぬ申たてなり、たゞし女犯肉食は明神のおきらひならば、まづ神主が妻子共を引つれ早々境内をまかり出べし、社僧の儀はたしかに女犯肉食仕る證據をみとゞけるまでは、相かはらず宮寺をまもるべしとぞ仰られける、

○身の上知らぬ五助が呼聲

乍レ恐言上仕候、私儀は北村の重兵衛と申者にて御座候、南村の七九郎と申ものと當月毎年申合せ、河内へ木綿買に罷越候に付、此度も申合せ同道仕筈に前夜約束仕り、今朝小瀬川と申す舟渡し場にて、出會申す時取いだし候故、早天にかのわたし場へ參り相待申し、はや明六つになり候へ共七九郎見へ申さず候に付、あまりふしぎにぞんじ、わたし守り五助をやとひ七九郎かたへさそひにつかはし候へば、約束の通り今朝七つまへに宿を出申候よし、女房返事仕りこし候故、不審に存じ候處、七八町川下の井關に死人ながれかゝり、これあるよし風聞仕り候に付、はせ參り見申候へば、七九郎丸はだかにて相果これあり候故、早速七九郎女房かたへまいり告しらせ候へば、女房かへつて私をうたがひ、木綿買申すもとで金二十兩銀五百目持參申候へば、これを取らんとて殺したるものとねだり、男のかたきとのゝしり申候、私毛頭おぼえ御座なく候間、御吟味被レ遊下され候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　北村重兵衛判

地頭聞しめし屆けられ、七九郎が女房を召出され、夫は何時に宿を出しぞ、七つまへと申す、わたし守が七九郎をさそひにまいりたるは何時ぞ、明ケ六つと申す渡し守は何と申してきたりしぞ、お内儀〱と申ておもての戸をたゝきたると申す、地頭おぼしめすは、七九郎が名をこそよびて起すべきに、女房を呼おこす事ふしぎとおぼしめし、急いでそのわたし守をめしよせられ、拷問仰付られければ、金銀はいまだ一分も取申さずそのまゝこれあり候、ひよつと夜ぶかに候故出來心にて仕り候、命の儀はおたすけと白狀申すにつき、盜賊人殺しの重罪たる御仕置仰つけられけるとなり、

○文字新しき家主の暖(あつかひ)

乍レ恐言上仕候、私儀は芦屋町庄左衛門と申者にて御座候、私借屋をあみ笠屋宮右衛門と申ものに、二三ケ

月已前より七八疊敷の小店をかし置候所に、背戸町の彌介と申者、昨日私方へ參り相ことはり候は、其方借屋あみ笠屋笘右衛門に、銀子三貫目かし置き候故、返辨申やうにと度々催促いたし候得共、横道ばかり申候て埒明け不レ申候に付、地頭へ御訴訟可レ申由急度付屆致され候故、町中へも難儀かけ申事氣の毒に奉レ存內證にて取持候得共、笘右衛門たゞ今の身上にては銀十匁の才覺も成がたき躰に相見へ、かれこれ笑止に奉レ存、是非なく私方より右の銀四分にてあつかひ銀一貫目餘わきまへ、佗事仕べくと申候得共、堪忍いたされず候、何とぞ料簡いたされるやうに、彌介召出され被二仰付一被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　芦屋町家主　庄左衛門判

地頭聞しめし兩人の者共をも呼出され、笘右衛門は何年已前よりあみ笠屋を仕るぞ、又家內は幾人くらすぞ、此三貫目の銀かりたるは、何年になるぞとの御たづねなり、笘右衛門申上けるは、あみ笠屋仕る事十五六年にまかりなり候、家內は夫婦と世忰壹人已上三人、その日その日のやう〳〵口過仕り候、此銀かり申たるは四五年前と申す、則かり手形さしあげゝるを御覽ありて、これは自筆かと御たづねなり、無筆ゆゑ彌介かしたゝめ候と申す、地頭しばらくあつて仰られしは、數年仕似世たる家職のうへに、銀三貫目入て下直なる藺草を買込、三人の渡世いたしかぬる事、これ不審の一つなり、借金の證文をかし手のしたゝめつかはす事、これ不審の二つ也、およそ金をかすものは家質をはじめ、代物か商賣に目あてありてかしかり致す事世の常なり、わづか七八疊の小店かりて、夫婦忰三人、一日ぐらしに口過するほどの者に、何を目あてに三貫目の銀子はかしけるぞ、これ不審の三つなり、もし合力するほどのこゝろざしにてかしたるにおゐては、證文を取て公儀へ訴へ申事前後相違の不二賴母敷一儀也、これ不審の四つなり、其うへ此手形の墨色、歲經たる筆跡にあらず、書したゝめて十日には過ざる筆紙に相見ゆる、これ不審の五つなり、水に入てためすにおよばず、段々不都合なる儀なり、しかるに家主庄左衛門律儀千萬にして、すでに七八疊の小店の宿代いまだ貳三ヶ月にも及ばざる馴染なき者の難義を思ひやり、壹貫目餘の銀子を由緒なき店

かりの者に合力してあつかはんといふ程の、こゝろよわき分限者を見たてゝ借宅を仕り、相手の彌介と密談して、からざる銀の手形をしたゝめ、公儀仕らんと急度つけさゞけせば下にてあつかはんをつよくうつたへ申上、町中出入の物入りを算用して、とかく相手すますやうにて取持人をこしらへ、元來かしもかりもせぬ銀をあつかはせ、兩人してわけ取にすべきたくみ近代はやるよし、罪人たゞ今あらはれ出たり、手はじめに仕置申付べけれ共、一往御慈悲のうへ御たすけなされ、五ヶ國御はらひに仰付られけるとや、

本朝藤陰比事卷之二終

本朝藤陰比事卷之三

○明て悔しき家の重寶

乍レ恐言上仕候、私儀は壺井町辰巳屋藤六と申者にて御座候、親藤兵衞去六月下旬に病死仕候得共、兼て町内へ申置候通、家督相違なく私相續仕候處に、三十七歳に罷成候繼母御座候て手代と一所になり、私行跡惡敷候間、此家相續成まじく存れば、其身修行功學の爲一先江戸長崎へも罷下り、かせぎ申せとてわづかなる路銭を出し、急に存じ立候へと申候得共、私何共こゝろへがたく、只今迄親藤兵衞數年絹布商賣仕來り、四五百兩の振まはしにて、上下六七人ゆるりと渡世仕り、表五間口裏行拾四間の家屋敷に住居仕候へば、私儀見習ひたる家業可レ仕覺悟に御座候所、親相果間も無二御座一候に、繼母かやうの儀を申付候に付、其意得がたく、右の談合に取合ひ申さず候へば、母の命を背く不孝者なれば、地頭へ訴訟申上勘當可仕と、母方の縁類共晝夜寄合相談仕候、始終私をうるさがり候樣子に相見え候へば、毒飼致すべくも存せず候間、後家を召出され御聞屆あそばされ、親の名跡その

まゝ相勤申やうに、被ニ仰付一被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日

辰巳屋藤　六判

伯父花屋　杢左衛門判

地頭双方を召出され、後家に仰付られしは、藤兵衛相果しうへは、一子藤六に名跡を繼せ、家業油斷なく申つけ、もし不行跡の儀あらば異見をくわへ、其方後見をかたくして、家を相續すべき所に、さはなくして、藤六に他國を致させんとたくみ、不同心ならば勘當せんなどゝ沙汰あるよし、第一死したる夫に不義なる仕かたなり、ことさら相應の家業あるをさしおき、藤六に流浪をすゝむに似たり、向後さやうの心底をあらため、親子むつまじく愛禮を致し、跡職相續仕れと仰渡されければ、町中も後家も道理に納得して一言の事をも申上ず、お請を申て御前を立ければ、違亂なく相濟みぬるやうにて、藤六他國を仕る事も沙汰なく、十日ばかり過て後家思案しかへけるは、此跡職に心をかけ、一生繼子と白眼あひて、みじかき浮世に苦しきめを見んより、此家屋敷に念を切て、死人つねづね持佛堂にむかひ、看經のたびごとに朝夕いたゞき、此の鋏い威徳によりてこそ今七十までの命をたもち、ゆるりと後世をも祈り奉れど、馳走答拜せられし錦の袋に入たる脇指あり、これ此家第一の寳物と覺ゆれば、よもや百兩か貳百兩の直のせぬ事は有まじければ、此一腰を取ておとなしく此家を立退、さらりと賣はらひて敷金にし、あたらしき男を持て今一たび花をやる分別極め、追て訴訟申上けるは、○先日仰付られし通り、若きものゝ後見をも仕るべくと奉レ存候得共、繼子繼母の間たがひに心よからず、かへつて修羅の種、さきだゝれし靈魂も氣の毒なるべしと存じ候上は、欲心をふり捨、髮をおろし衣を墨に染、なき跡を心しづかにとぶらひ申べき覺悟におもひ定め候、しかれば死人朝夕秘藏の脇ざし御座候、これを長き形見と存じ、身をはなさず一蓮托生の印に仕りたく候間、藤六に此一腰相渡し申やうに、御慈悲に仰付られ被レ下候へとねがひければ、地頭早速藤六を召出され、後家が望のうへは脇指をつかはし、いづかたへ成共罷出、坊主になりとも尼になりとも勝手次第たるべしとて、證文はとらねども、親子の義絶を地頭の前にて致せしやうにて、跡職は藤六壹人に極り、後家

かしこげにありふれし衣類取あつめ、一腰を持てかし座敷かり、さて此脇ざしをあなたこなたへ見せて賣んといへば、惡錢百が物もなしといふにちからを落し、是非なく衣類賣喰に後悔千萬の涙嫁入のこゝろあて大きに違ひける、しかるに此わきざしを、藤兵衛存生のうち朝夕いたゞき、大切にしたる子細は、若き時分稲荷祭見物に行、酒の醉まぎれに口論せしに、兎角いひつのり、此脇ざしにて相手をたゞ一打にと切つけしが、おどりあがりてしぶり皮もむけず、そのうち扱入て双方疵つかぬ喧嘩相濟て後、藤兵衛酒の醉さめてつく〴〵おもひめぐらすに、もしきれ物ならば人の命をあやまり、我身は今までの齡たもちがたかるべきに、なまくら物ゆへに我人怪我なく、これ壽命の守り神なりとて、一生のうち朝夕いたゞきたるを、後家欲心よりよき物とおもひて望みければ、貞女の道をうしなひ、その身のたゝずみ所もなくさまよひけるとなり、

〇欲を離れし博奕の御免

乍レ恐言上仕候、私儀は長町十九丁目深田屋吉郎太夫手代市兵衛と申者にて御座候、昨日薬たばこ問屋へ相渡し候銀子三貫七百目持參仕る道にて、存じたる者に出逢候へば、面白き所へ是非同道可レ仕よしにてうちつれ參候へば、かるたの三枚と申なぐさみより、賽と申す博奕にすゝめられ、右持參の銀子殘らず負申候に付、主人方へも歸り申されず、先様へまいりても申わけも御座なく、自害をも可レ仕と奉レ存候得共、七十五歳になり候母一人御座候て、私奉公の年季のあき候を待うけ、ゆる〳〵寺まいりをもいたし可レ申と、つね〴〵たのしみ存居申候處に、私只今不慮に相果候はゞ嘆なげき可レ申所かなしく奉レ存、おしからぬ命ながらへたく存候に付、右の銀子勝たる者に、手形仕り借用致し、主人の手前を首尾つくろひ申たく、かしくれ候やうに申候へ共、承引不レ仕候、御慈悲のうへ右勝たるものをめし出され、借用手形にてかしくれ申やうに被二仰付一被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　吉郎太夫手代市兵衛判

地頭御覽あつて、おのれ主人大切の金銀を持參いたしながら、存じたるもの同道いたせばとて、使をおそなはり、そのうへ御法度の博奕を仕り、おまつさへ訴

人に出て、其金銀を取かへしくれよと役所へまかり出る段、重々の横道ふてきなる仕形なり、急度御仕置に仰つけらるべけれども、主人問屋兩方損銀仕る所不便なれは、しばらく宥免いたし置なり、さてその勝たる者の名と宿とを御聞届けありて、夜前勝たる銀高の內三貫七百目急度さし出すべしとて、糺明のうへ訴訟人市兵衞につかはされ、さて又此一たび座の博奕打共御帳面にしるし置れ、此たびは命を御たすけありて、國中へ御觸ありけるは、自今以後ばくちにて負たる者あらば申きたるべし、取かへして取すべしと仰出されければ、負たる者度々訴訟に出るごとに一錢ものこらず首代に取かへし給はりければ、ばくちは勝ん爲にこそうて、勝ても取かへさるれば面白からずとて、領內に勝負はやみてんげり、

〇隱家を知る道角が耳

當二十七日よりこのかた、手負の療治仕りたる外科本道の醫者これあるにおゐては、早々申來るべし、隱密に致し置、後日にあらはるゝにおいては曲事に可二申付一者也、

地頭御在判

乍レ恐言上仕候、私儀は礒木村に住宅仕候若田道角と申外科にて御座候、一昨二十七日の夜、無僕にて庚申參詣仕り下向の節、松井橋を渡り候所に、向ふより虛駕籠を舁來り候者、若田道角とさへたづね申さばまぎれあるまじと物がたりいたし通り候故、まさしく私をはじめて尋ねまいる者と存じ、道角は某事なり、いづかたよりの使とうけ給り候へば、黑雲町澤田屋松右衞門方に急病人これあるよしにて、むかひ駕籠つかはし申すの口上ゆへ、しかと近付とは覺へず候へ共、私失念を致したるか、又醫家のならはしにて承りおよびて參候ものもあまた御座候へば、直にかの駕籠に打のり罷越候所に、手負三人御座候ゆへ、外治內藥餘慶の望みにて、又駕籠にて送られ、私宅へ罷歸り藥をつかはし候へば、程なく夜も明候てつくづく思案仕るに、闇の夜大雨ふり駕籠にて拾四五町まいるほどの間とは存じ候へども、方角東西のわかちも覺へず、そのうへ今日三日何の沙汰も申きたらず不審に存じ、黑雲町澤田屋方相尋ねさせ候所、黑雲町と申所も澤田屋と申者も、當地には御座なく候よしにて、兎角方角しれ不レ申、始終こゝろもとなく奉レ存候

處御觸のおもむき拜見仕候ておどろき入、御斷申上候、麁忽なる儀を仕り後悔不念千萬に奉レ存候故、一札さし上候以上、

月　日　　　　　　　　礒木村　若田道角判

地頭仰られしは、手負の療治は此方より指圖なくては致さぬ筈を、卒爾に仕そのみならず、その病家も覺へざるとは段々不屆なり、右の手負の宿所よく見とゞけずしては、こゝろ覺へになる儀はなきかと御たづねあるに、つり鐘の聲ちかく聞へ候と申す、寺町ちかき所にはいづかたも同前にちかう聞ゆれば、證據には成がたし、其外には琴三味線尺八の音仕りたると申す、それも家々に慰みに仕るか、瞽女座頭は常に指南仕る所あまたあれば、それらを證跡に所はしれがたしと仰せあるに、道角又おもひ出し、瀧の音手ぢかく聞え候と申す、しからば山よせの家たるべしと、すでに瀧ぢかき寺社民家御詮議に極る時、公事役の老躰まかり出、これもたしかに所はさゝれ申まじく、大雨の夜なれば築山の谷あひ、泉水などに落込音、時ならぬ瀧に相きこゆる事あるべし、其外にしかといたしたる手がゝりの儀をおもひ出さねば、其方の難義なりとあるに、道角眉をひそめ、しばらくありて申上けるは、私むかしある國の守の側ちかく奉公仕り候所に、古主能藝好申せしが、大事に仕るほどの音曲うけ給り覺へ候、しかるに此手負の合壁に、石橋の獅子の笛をひそかに吹すさむ音相聞へ候と申上る、地頭役人これ詮議の種なり、しかれ共一儀相濟までは道角は町内へ御預けにて、扨此石橋の笛のゆるしを得たる者吟味あるに、二人のうち一人は關東にくだり、今一人の住宅せし町内の名主五人組をめしよせられ、町中に裏座敷か隱居がまへの借屋もちたる者の屋敷を微細に詮議あるに、笛吹甚四郎が北隣のうら座敷に月切にかりたる者共、手負てしのび居たりけるが、盜賊におし入ける高家方にて、見合されて切たてられし者共にてめしとられけるとなり、

〇借銀の正直を守る社

乍レ恐言上仕候、私義花崎町梅津屋市五郎と申ものにて御座候、三年以前櫻木明神の社修覆銀不足の由にて神主杉太夫より申上るは、成程此者より銀子一貫五百目借用申度候、御地頭樣より修覆料百石御附被レ成候社之義に候へば、何時にても返辨可レ申旨賴申

候故、則證文取銀子預け申候、其後度々催促いたし候へ共一圓取敢不レ申、此銀子は明神ノ御用に遣候間、此方より濟し可レ申謂無レ之、明神に催促可レ被レ致などと我儘を申迷惑仕候、御慈悲の上杉太夫被二召出一、右之銀子返辨申候樣に被二仰付一被レ下候はゞ、有難く可レ奉レ存候以上、

月　日　　花崎町　梅津屋市五郎判

地頭聞しめされ、來る二十三日双方對決あるべきよしにてまかり出けり、其日になれば兩人呼出され、八五郎訴狀之通に社修覆之銀子借りたるかと御尋、杉太夫申上るは、成程此者より銀壹貫五百目明神より御借被レ成、則證文にも櫻木明神社と斗書、私名も無レ之候を私へ度々催促いたし迷惑仕候、且銀子は明神より御了簡之上定て御濟し可レ被レ成と申せば、地頭御聞被レ成、市五郎義神主が申通に今日より明神へ參り、銀子返辨被レ成候樣に願をかけ七日參詣すべし、神は正直の頭に宿らせ給ふといへば、七日が中には極めて其靈驗あるべし、若七日が中に其しるし無レ之時は、銀子を借取にする非道の邪神なれば、此方より附置たる百石の知行取上べし、兩人共に此旨急度相心得べしと仰出されけり、八五郎其日より櫻木社へ參詣し、壹貫五百目御返進、諸願成就と大音に唱へて歸り、又明日も早々に參詣すれば、神主今は堪へかね銀五百目より扱ひ出し、八五郎參詣の度々に詫けれども、いや〳〵今は神主殿に申分はなし、只明神の御心次第と更に聞入る氣色なし、なむ三ぼう早六日迄參詣したり、今一日過たらば明神の利生なしとて知行を御取上有べしと、親類知付を賴み銀壹貫五百目才覺して、八五郎方へ返辨しければ、御慈悲成仰付られに付明神へ七日參り仕靈驗揭焉、銀子無二相違一受取有難奉レ存候旨、濟狀差上げけるとなり、

○仙術を賣る志津村の百姓

乍レ恐言上仕候、私儀は志津由村の百姓良太夫と申者にて御座候、しかるに此志津山の麓の水海に、いつ頃よりか艜舟を浮べ、白髮なる老翁これに乘、平生釣を垂れ詩歌をうたひたのしみ候躰、さながら范蠡が五湖に竿さし風月に嘯きたるも、斯やと奉レ存候、たゞ人ならぬありさまに、こゝろある百姓舟のほとりに近づき候へば、舟をはるかにしりぞけ、物いひかはすもむづかしき風情に相見へ候ゆへ、何人と名を尋ぬ

るものなく候、推崇仕るに仙人か神ほとけの變化かと存ずるばかりにうち過候所に、當村の百姓太郎兵衞と申者、ある時酒をたづさへすゝめ候へば、こゝろよく酌かはし、雜談常の人間にかはる事なく、それより折々かの舟にのりうつり、酒宴をもよふし、うちわけてかたり申され候は、某は大和かつらぎ金峯山よし野大峯に年久しくこもり、神佛仙道一致のさとりを開き、近年此湖水に逍遙す、されば此志津山の奥に楠の大木の小影に禿倉一つあり、これ此國の守淺江備前守先祖靈屋なり、一亂の後その子孫といへども しる者なし、過ぬる夜此靈神形をあらはして某に告られしは、近き頃百五拾年忌にあたれり、上天の果ありといへども鬪諍の餘執にひかれて、いまだ三熱のくるしみをまぬかれず、此たび神社を再興し、一宇の精舍を建立し、百石の田畠を寄進し、永代法燈斷絶なく、すなはち某を開基の導師にたのむ由、子孫淺江備前に勸化すべきよし、まのあたり告げられしなり、國の守もし違背あらば、淺江の家滅亡ちかきにありとかたり申され候を、右太郎兵衞承たるよし申候故、右の神社佛閣寺領等御寄進御建立被仰付候はゞ、御國長久の瑞相と奉存候故、乍恐御注申上候以上、

月　日　　　　　　　　　　　　志津村　十郎太夫判

淺江大守樣

御近習御披露

大守聞しめし上られ、注進の所存神妙なり、しかればその老人と太郎兵衞を召つれまいるべきよし、かしこまつて兩人を同道しけるに、老翁の躰相いと殊勝に、八字の眉霜ふり、縞衣に錫杖、かしらに雪つもり、役の優婆塞の木像いきてはたらくがごとく、寬々と敷臺に安座す、大守仰出されけるは、其方は此淺江の家にいかなる筋目ある人ぞと御たづねあれば、老人こたへて、お家に所緣はあらずと申す、時に大守、然れば先祖の靈神、まさしく國の滅亡子孫斷絶せん事を告んとならば、ゆかりある某を始め、譜代忠臣の者が、血脈相續の者にはいかなれば遠慮して、ゆかりなき其方に神社建立の望みをたのむべきや、さらに承引するにおぼつかなし、まづその方佛者ならば玄々微妙の道理を說べし、もし正法は文字によらずといはゞ半話の一句を聞ん、若又仙人ならば雲に乘り地をくゞる通力を一見すべし、もし又神道不測の奥義

に達せばその玄談を聞べし、さなくば形をつくり、愚者をたぶらかすの僞者たるべし、まつすぐに白狀せざるにおいては、水火の呵責にかけて問べしと仰られければ、老翁俄にふるひ出し、夢物がたりをあれる太郎兵衞に、ちよつといたし候ばかりにて御座候、もとより夢の事なれば、何かやくたい御座あるべし、わたくしは新言秘密護摩の灰のかしらなれば、首の儀は御たすけと申せば、太郎兵衞も取持たる同罪に、五ヶ國追放せられけるとなり、

○神器は算用違の質屋

乍レ恐言上仕候、私儀は松川町質屋六内と申者にて御座候、浮田村歌潟明神の祭禮の時、神輿のさきにわたり候鼻高殿と申す作の面御座候、右明神の社大破に及び候故、破損修復のため金銀入用に付、此鼻高の面を質物に取、金子三十兩かし申候、一年に一度の祭禮にはかならず先だちの神にて候へば、祭まへには質請かへし申約束仕候て金子かし申候所に、當年三年になり日限きれ申候ゆへ、外へ賣拂ひ可レ申と奉レ存、あなたこなたへ見せ申候へども、かくれもなき神事の道具なればとて、一錢にて直段つけ申さず候、右の神主召出され、せめて元銀にて取かへし申やうに被二仰付一可レ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　質屋六内判

地頭、神主をめし出され、祭禮にわたる作の面を質物に入置、神事には何を用ひらるゝぞと御たづねありしに、神主申上けるは、社頭修復の爲しばらく質物に入置、奉加帳幷祭禮の散錢かれこれ取あつめ、請かへし可レ申とぞんじ奉り候處、近年氏子不作に痛み寄進こゝろあて相違仕候に付、去年祭禮の前に、六内にことはり申入候は、當分金拾兩相わたし可レ申候間、祭の日たゞ一日かし給り候へ、兩三度には元利共に算用相立可レ申段申候得共、一度に三拾兩の元利相渡されぬうちは、片時も手ばなし申事成まじきよし申候に付ちからに及ばず、鼻高き面を反故にて手細工にはりぬきに仕り候へば、わづか糊代繪レ具代、烏目拾七八錢にて祭の間に合せ候て、當年もその通りに相つとめ候と申上ければ、地頭聞とゞけさせられ、六内に仰られしは、歳に一たびなくてかなはぬ神具なるゆへに、神主一日のかり賃内あけとして祭り每に拾兩づゝ相濟せば、三年に元銀はねがひの通りに相濟

なり、利銀は少分の儀なれば云に及ざる所なり、然ば當年は皆濟になる事勿論なり、此段を三年已前に神主より申入たるを料簡せざるは、今の訴訟の分別より見れば無思案の第一也、扨又質物は、古來より定めの通り三年切なれば、切過ては質屋の道具なれば如何樣共賣拂ふか、損徳は萬の商賣の習ひなる上は、置主のしる所にあらず、但し德のつく質物をば沙汰なくして、損のゆく質物をば、流れたる後迄も置主より辨まゆる法ありや、是第二の無理也、扨又只今訴訟に出るは、末神主を相手に致すからは、鼻高は神主の主に極りたるを、訴訟の如くあなたこなたへ質に遣したるとは、神器を我儘に致すの横道にあらずや、是前後相違の非義の第三也、但もとより商賣に拘らず、神主が取返すべきとの一言を賴に貸たる金子ならば、損徳の外の義理なれば訴訟には及ぶまじ、向後は質物に念を入て取遣すべしと仰付られければ、六內道理に詰りけるにや、損銀に眼くらみ候てさやうの理窟には心づき申さずとて、御前を罷立けると也、

本朝藤陰比事卷之三終

本朝藤陰比事卷之四

腕は工夫の茨木町

乍ㇾ恐言上仕候、私儀はいばらき町わたなべや源六と申者にて御座候、夜前九つ時分土藏の屋尻を切候音相聞へ候故、ひそかに戶前を明け、內よりやうすをうかゞひ候へば、はや六七寸切あけ片手さし入、金銀入置候革袋を、ひたとかきよせ候手をとらへ申候へ共、中々强力にて振はなし可ㇾ申躰に仕候故、相口にて其手を臂より切はなし候所に、片手きられながら迯行、隣屋敷の塀を乘こへたると覺え候故、おもてへまはり血をしたひ候へども行方しれ申さず候に付、立歸り土藏の中吟味仕候へば、年貢の上納銀壹箱相見へ申さず候、さだめて殘る片手にてかゝへ候て迯たるものか、又は同類にわたし候か、うたがはしく存せられ候、右の片腕持參仕候て御ことはり申上候、乍ㇾ恐御吟味被ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下候はゞ、ありがたく可ㇾ奉ㇾ存候以上、

月　日　　いばらき町 渡邊屋　源六　判

地頭右の片腕を御覽あるに、右の手にてあらばたら

きいたすもの丶さまなり、指ごとに痏あり、さし矢前を射る者か、船頭か、平生鍬がまちを握るもの丶手にまがひなしと見ゆれ共、詮議すべき手がかりなし、日頃其方が家に出入するものに、存じあたりはなきかと御たづねなれ共、さしあたり誰とさすべきものなし、しからばかさねてめし出さる丶までは、此腕はなんぢにあづくる間、石のからうどに入置べし、もし津の國の伯母じやなど丶申して、腕を見物にのぼるどいふとも、かならず門戸をとぢて入べからずと仰付られ御前を立けるが、或時地頭より國中へ御觸ありけるは、大鼓の指南仕るもの、弟子の名壹人も殘らず書つけきたるべし、已前よりの弟子にてあるひは他國仕るか、病氣にて引込まかり在ものか、何月幾日よりいづくへまかりくだり、病氣はいつ時分より何やまひを仕り、醫者は何某と申者療治仕る段々、微細に書つけまいるべし、壹人にても隱し置、後日にあらはる丶においては、曲事に仰付らるべき段かしこまり、大鼓の師、銘々弟子中をまはり見分するに、弟子數貳百九十七人の内、他國いたしたる者六十九人、當分病氣に引こもりあるもの拾壹人、つぶさに書付を持參申けるに、右拾壹人相わづらひ申もの療治仕る醫者、殘らずめしよせられ、壹人づ丶ひそかに病性を尋ねさせ給ふに、柄崎伴碩と申す外科の療治いたすものに、片手なき疵を申上るによつて、此病人の事を內證御たづねあれば、傾城野良狂ひに身のほどをしらず、親の金銀を盜み出し、放埒すくなからざるにより、勘當すべき內談のうち、かくのごとく夜盜に入、此疵をかうふりたる段白狀のうへ、御仕置に仰つけられけるとなり、

○一夫兩妻の妹脊山

乍レ恐言上仕候、私はいづみの國姫村辰右衛門と申者の妻にて御座候、辰右衛門事昨日暮六つ時分に頓死仕候故、二十四時は見合せ候うち、夜半の頃蘇生一家よろこび申候所に、行衛もしらざる女房五歲ばかりの世忰の手を引まいり、戶をた丶きあけ、何の遠慮もなくはいり候へば、辰右衛門そのま丶おきあがり、女共か三之助かとたがひに手と手を取て、此たびは定業にあらずとて不慮によみがへり、ふた丶び妻子に對面する事、なげきの中のよろこびと、啼つ笑ふつはたされ候に興さめ、さては年ごろの隱し女房、子まで

ある中、此たびあらはれたりと存じ候へども、わたくし手まへもはゞからず、ふみつけたる仕かたあまりににくき所存、瞋恚しづまりがたく、かの女を引ずり出し候へば、夫をはなれていづくへ行べきとてにじり込候へば、辰右衞門もわたくしをあらけなく打擲いたし候、尤辰右衞門一人にて御座候はゞ病におかされたは言を申とも存べく候へども、まさしく相手をとりてかやうのしかた、わたくし十七年の馴染をふりすて、仕度まゝなるいたしやうに御ざ候まゝ、かの女を、親共のかたへ早々歸り申やうに仰つけられ下され候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　　　　　　辰右衞　妻

地頭仰られしは、男子に生れては天子に十二人の御局あり、公卿大夫士民五人三人これある事なり、平人にも本妻の外、妾一人づゝはこれむかしよりさだまりし事なれば、さもしく恨み腹たつる儀は道にそむく所なり、家に嫉妬の女あれば、その家かならず傾くと古語にも顯然たり、しかるにねたみて口舌絶ざる時は、かへつて二世のちぎりながくはなれて、其身を失ふ媒となれば、かの女もよく〳〵なだめておのが家にかへすべしとの仰なり、かさねて申上げんは辰右衞門も一所になり、かへつてわたくしを打擲仕り候へば、何とも難儀仕り候間、おそれながら夫に御異見を仰つけられ下され候へとねがひければ、下役人衆をさしつかはされ、樣子を問せられければ、辰右衞門おき直り、わたくし儀は、比田村角左衞門と申す百姓にて御座候、一昨日頓病にて相果冥途におもむき、閻魔大王の前にひざまづき候所に、倶生神見るめかぐ鼻など申す役人衆、娑婆善惡の業を手帳に引合せ、罪の輕重を秤にかけて吟味のうへ、此たびの頓死はいまだ定業にあらず、急ぎよみがへり申べきに極り候へども、私死骸ははや火葬つかまつり、魂魄のやどるべきたよりなく候折ふし、同時に相果て候隣村の辰右衞門が死骸、いまだ二十四時あひまちまかりあるさいへども、辰右衞門は定業に相きわまりたれば相かなはず、此辰右衞門が骸に私の魂魄を入替、よみがへれと仰つけられ、ふたゞび此世に歸りまいり候うち、魂とんで比田村の妻に告しらせ候ゆへ、此所にたづねきたり候、しかれば夢のさめたるやうにて、漸たゞ今正氣づきて存じめぐらし候、此屋の女房が立

腹も尤の事にて御座候へ共、骸はもとより地水火風のかり物の事にて候へば、借用仕り私在所へまかり歸りたく存るよし申けるに、役人衆も不思議の手を打て、さてはやうすはしれたりと、いひもはてぬに辰右衛門が女房、さやうのことはりはさもあれ、とし比なじみたる男の五躰なれば、外へはやるまじといふ、角左衛門が女房は、あの世この世の御捌にまかせつれて歸らんと、たがひにつかみあふばかりなれば、かくては下にてはからひがたし、今一度御前へ出よと双方めし出され、地頭段々聞しめされ、世にはめづらしき事こそあれ、二人の女愚なる所存よりは、たがひに尤なり、しからば姫村比田村兩所のうち、勝手よき所に住居をさだめ、夫一人を女房二人、一所に相住み中よくして、かたみ恨なきやうに女房の氣に入て、渡世仕るべしと仰付られけるとなり、

○山葵に黄金の吸口

乍レ恐言上仕候、私は和田町絹布屋金右衛門と申者にて御座候、一昨七日炭山町より出火につき、すでに上の町まで燒來り候故、手代共に申つけ穴藏にあまり候葛籠の分は見世店へ出し置、日比出入候者に申付、風上へのけさせ可レ申と存候内に火しづまり、さて右の葛籠共を取入候所に、いつのまにか、つゞら七つのうち三つ相見へ申さず、其あたりに俵三俵これあり候、此俵の中には山葵これあり候、右のつゞらと取ちがへ參りたる物かと今日まで相まち候へ共、その主もしれ申さず、此方のつゞらも持參不レ申候故、御ことはり申上候以上、

月　日　　絹布屋　金右衛門判

地頭聞しめされ、青物屋おのが商賣物を持ち立退候とて、呉服店にあるつゞらなれば直打ある物と存じ、すりかへて迯たるか、又は盜賊の仕業か、急なる節三人の同類と見へたり、さてその葛籠には何を入置たるぞとおたづねなり、絹布類は殘らず穴藏へつめ置、右のつゞらには、京大坂長崎の萬相場づけ書狀反古共、下男の着替共ばかり入置、しかと直打これある物は無二御座一候と申上ければ、さては盜人共はまりたると見えたり、何とぞ取ちがへたるいひわけをたくみて、取かへに來る事あるべし、かさねての爲なれば參り次第告きたるべし、急度申つけやうあり、今一兩日相まちかの盜人共きたらざるにおゐては、此方へ

ことはり申におよばず、右の山葵賣拂、其方が所得に仕るべしと仰わたされて歸りけるが、二三日過ても沙汰なければ、かの山葵を賣けるに、青物町燒たる比なれば、麪類はやる城下にて、ことの外わさびの直段あがり、一つ二分三分づゝ相場になり、三俵を金子九拾八兩三歩に賣はらひ、牛のつゞらを今の山葵に乘かへけると也、

○喰合を知る西入が註進

乍レ恐言上仕候、拙僧儀は、道の端村道陸神のかたはらに草庵をむすび、二三年居住仕る貧僧にて御座候、平生托鉢仕身命送り候へども、雨風雪の日には所存の外の斷食いたし候處、去る極月ことに寒く、ひとえの着がへも御座なく、明がらの香の物桶一つこれあるを幸に、藁を敷此桶にはいりみづから蓋を仕り、寒夜をふせぎ候所、丑の刻ばかりに、庵の編戸をおしやぶり、十人程の音づれ聞え候故、桶の蓋すこしつきあけのぞき候所、夜盗の躰にて、角々をさがし候へども米一錢も元來御座なく、舌皷うつて、こよひの仕合しれたり、あたゝかなる喰物の才覺せよと、私隱れ候桶の蓋を無理に引あげ、こゝに死人あり、刀ためしして



慰んと引ずり出し候に、こらえかね、さらに亡者にあらず、此庵のあるじにて、寒さにかやうの躰たらく命の儀は御たすけと手を合せ詫候へば、しからば宥免仕るべし、喰物の才覺仕れと申すに、一枚敷ほどつくり置きたる大根を、風呂吹にしてふるまひ候へば、米をかふてまいれ、酒をとゝのへ來れと鳥目を出し、其外料理の具ども僕小者同前にめしつかひ、無念には存じ候へども、おもひの外あたゝまり、よき相伴いたし、近年の活計、向後は御心やすくたび〳〵御出たのみ入と申せば、よき亭主ぶりと讃候て、そのゝちさいさい參り、魚類を買てまいれ、鴨の毛をひけなどゝ殺生同前の儀につかひ、何とも迷惑仕り候、おもへば一たび佛道に入 衣を染候かひもなく、盗賊の被官におなじく、あまつさへ魚鳥の汁をすゝり、現世後生怖しく辭退仕候へば、首をもはね申べきやうにあひしらひ申候、とかくみじかき浮世と奉レ存、一念ひるがへし訴人に罷出候、 さだまりて參りあつまる日限はしれ申さず候へば、かさねて參り候はゞ、 御註進可ニ申上一候間、諸人の爲御めし取被レ遊可レ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　道陸庵　西　入　判

地頭聞しめし届けられ、尤狼藉なる仕かたとは聞ゆれ共、しかと盗賊とはおとしつけがたし、しかと盗みたる物を見しるか、何にても證據になるべき儀あらば申きたるべしとて、訴狀は御留置なされ、西入は御前をまかりたちけり、それより十二三日過て、地頭役鐵炮八拾丁の內、五丁夜の間に失たる事あり、いろいろ御詮議あれ共しれがたく、此西入をひそかにめしよせられ、何にても近き比預りたる物はなきかと御尋あるに、今朝あけがたに何か薦につゝみたる物を、庵のかた角の簀垣を引まくり入置、これを人に沙汰するなと申置たり、と申すは不思議なりとて、役人衆さしそえられ、かのあづかり物を吟味あるに、例の役鐵炮にまがひなく、此後何時にても右の者どもまいり次第に告きたるべしと、仰つけられけるによつて相待所に、ある夜いつもの手組にてきたりしに、人のしらざる喰合せ杏子に砂糖をつけて服すれば、手足麋(すくむ)と聞及び、これを調へて饗應(もてなし)ければ、めづらしき亭主が馳走と、何の用心なく喰けるに、吐血して悩む者六人、絕入するもの四人正氣なかりし隙に、地頭へ注

進申ければ、おの〳〵からめとられ、糺明のうへ御仕置に仰付られけると也、

○形見の水鉢は清き訴

乍レ恐言上仕候、私儀は當町はづれに引こもり罷在候江見才安と申者にて御座候、亡父常々茶の湯好物につき、小道具共少々これあり候得共、私不數寄ゆへ賣拂、生涯の糧にこゝろあて仕り、石の水鉢ひとつ殘し置、是を形見と存、朝夕水を改め回向仕候所、今朝あけぼのにあばらなる垣をふみこえ、見なれざる男貳人此水鉢をさし荷ひ、いづくともなくまいり候故、不思議に存じ跡をしたひ參り候、尤狼藉者なんど聲をかけ候はゞ、定めておどろき打捨まいらば、可レ惜石鉢碎け申べき事氣の毒にそんじ、こゝろしづかに十二三町つけてまいり候へば、笠松町の裏かし屋へ荷ひ込、仕合つかまつりたりとつぶやき、おのが住家の庭におろし候故、兩人の者共に相ことはり申候は、執心なればこそ此石とり申され候事、花あれば先門に入、主人とがむる事なかれと申す古語のこゝろばへ艶しく候へば、此まゝしん上申たくは存ずれ共、亡父が魂これにとゞまる程秘藏せし石なれば、朝夕對面の心いたしたる物に、うちはなれ申す事かなしく存ずれば、始の所へ持參たのみ入と申候所、もつての外氣色を損じ、此方買求たる主なり、その方は何ものやらん存ぜずとて取あひ申さず候間、右ことはり聞とどけ持歸り候やうに、御慈悲に被二仰付一被レ下候はゞありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　江見才庵判

地頭訴狀御らんありて、まさしくこれ盗人にまがひなきを、やはらかなる訴訟のおもむき、めづらしくおぼしめし、町役人を才庵にさしそへられ、町内家主へ御つけとゞけあり、かの石主へ早速歸し申べきよし、仰つけられければ、兩人の者肝をひやし、さし荷ひてはじめの所に石を居て歸りける段申上けるに、人の屋敷に理不盡に踏込み、ことはりなしに石鉢を奪取申すは盗賊にまぎれなしとて、家主へ御あづけありしに、才庵又訴訟に出て御宥免をねがひければ、相手の願ひにまかせ、廿日ばかりありて御免をかうぶり、さて才庵は温和なる賢者なりとて、御出入を仰付られけると也、

○利に迷ふ半九郎が猿智恵

乍レ恐言上仕候、私儀は天甫町半九郎と申者にて御座候が、前々は手廣く商ひをも仕候得共、近年病身につき引込罷在候、就レ夫御家中のわたり歩行の衆より草履取衆鑓挾箱馬屋迠まはし衆、不レ殘私壹人請に相立申度奉レ存候間、聞召上られ候うへ町々へも仰渡され可レ被レ下候、尤只今迄は緣を求め、手より〳〵に請人をたのみ申候故、諸商人諸職人共相立候得共、自然取迯欠落仕候節は、いそがしき家業をやめ尋出し、其上取迯の者 請人かたよりわきまへ候へば、わづか壹人の請にたち申者も身上をつぶし、妻子共迄路頭にたたずみ難儀仕候ものあまた相見へ申候、向後は御家中の奉公人衆何百人御座候共、私壹人にて請合申度候、左候はゞ請人屋と申す看板を出し申度候間、被二仰付一候はゞありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　天甫町　半九郎判

地頭半九郎を召出され、只今まで世上一統の請人の樣子は其奉公人の淵底を能存じて相立か、又はその行跡を存ぜざるものには、下請といふものを取て請合はいたす事と見へたり、しかるに其方請人屋の簡板を出して、親疎をかまはず、生國在所もしらざる無緣法界の請人間屋ならば、たとへば他國より人を殺し、あるひは盜みを仕りてかけ落したるものゝ類、おしなべて請あひ申す事は、こゝろもとなき事なるべし、たゞしさやうのたぐひ吟味を遂るかとの仰なり、されば私儀幼少より、京大坂長崎までかけまはり候へば、大かたの躰相を見て、律義と橫道なるものを目利仕るに、相違ある事なしと申上る、地頭仰らるゝには、人を見るは昔しより、明眼靈鼻の名師にあらざればしる事かたしと聞傳へたり、蛇は鱗を見て大小をしり、金は火をもつてこゝろみ、一を擧て三つを明すは上智の器なり、ちかくは子の善惡をしるは親にしかずといへ共、これをしる者も天下に鮮しと孔子も說給ふ、これ愛欲に溺るゝをもつて明らかならざるが故なり、しかるに其方ははじめて相逢ものゝ腹中を見ぬくとは明哲達人なるか、過言を申か此地頭職仕る愚なる眼には、汝一人の器量さへうかゞひがたくおもふには拔群の智者なり、しかしながら汝が訴狀に書つけし通、淵底よく存じたるもの一人二人の請にたちてさへ、取迯欠落の節は、尋ね出す雜用わきまへ銀等に身上を潰すといへば、いはんや數百人の

請合の內には、見そこないたる奉公人もあるべければ、五人三人欠落取迯あるべき時は、その失墜をつくなうべき金銀は所持いたしたるかとあれば、其儀も分別仕置候は、もし取迯仕り失却かくる時分は、請をたのみ候もの四五百人にも及び候へば、相たがひの儀ゆへ、ふたま役に金一歩づヽ取あつめ申候ても、五十兩七十兩は早速あつまり候と申す、かさねて仰出されしは、いまだ十八二十人にも請にたヽざる以前、二人三人のうちの者、百兩二百兩取迯いたしたる時は、人別の給金を皆あつめても不足すべし、その時は何をもつて大分の儀をわきまふべきぞと仰られければ、返答いたしかね、かさねて請人屋の金本を才覺仕り候うへにて御訴訟申上べしとて、尾もなく御前を罷立けるとなり、

〇藪に功なき醫師が自慢

乍レ恐言上仕候、私儀は今町津の國屋喜七と申者にて御座候、當年六歲に罷成候、花のやうなる世倅たゞ一人有レ之候所、天性利根發明に生れつき、ならはぬ經をよみ、大文字をひねりすなはち氏神天神に掛奉り、千萬人にすぐれ候故、近所の人に、此子はさだめて聖人と申す位にもいたるべきなどヽ申すにたがはず、終に夢を見たる事なしと其身も申候ゆへ、行末たのもしく秘藏仕り育申候處に、此程腹中を相煩ひ晝夜なやみ申に付、醫者衆賴み申べき相談仕候へば、町內に大藪玄鶯と申醫師常々手柄ばなしをいたされ、今の世の耆婆扁鵲とは某が儀と、たしかに自慢申さるるにつき、世倅が療治たのみ候へば、煎藥を給はり候につき用ひ申候へば、そのまヽたてくだりにくだり、ことの外草臥正躰なく候段申候へば、さらは留て見せ申さんとて、藥を給はり候へば早速とまり、それより腹はり申候て三日のうちに少も快氣の色なく、今朝相果申候、跡にてうけ給り候へば、此醫者はかくれもなき臨終の加減醫者とて、一人も病を直せる事なし、あたら一子の命かなと人々にとぶらはれ申候、さやうの身にて、諸人大切のいのちをうけあひ申す事、釼にてさし殺し候同前の科人と奉レ存候、私世倅のかたきさしあたりて堪忍いたしがたく候間、御慈悲にかたきを御取可レ被レ下候はヾ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　喜七郎判

地頭聞しめされ、醫療のちからによつて命をたすかるとのみおもふは愚癡なり、かの耆婆も大聖釋迦如來の御命をすくふ事かたし、いはんや末代の醫者といひ凡人といひ、醫を恨むはいたつて愚なる儀なり、され共近年の世間を見るに、醫學をいたさずして醫の名をつき、大事の人の命を請取事横道なる儀なり、これらの者共は、親に勘當にあふか、おのれが家業に懈怠り流浪の身となりて、いたすべきやうなくて、かりに醫の名を汚すは、經をしらずして袈裟をかけ、佛道にうとくして形をあきなふ賣僧同前なり、渡世の道は草の種花を賣ても口過すべきを、見分身ざまよき方にこゝろうつりて、著類をかざりて醫の眞似を仕り、大切の命根を斷つは税を費す碩鼠なり、しかしながら たくみて人を殺さんとするにはあらず、一人にてもたま〳〵驗氣あれば、これを耽らして自慢の山を賣る元手とすれば、更に意趣ありて汝が世悴を殺したるにあらねば、敵を取といふ子細はなし、さりながら玄鷟をめし出され、配劑御たづねありければ、かしこまつて申上けるは、まづ始めに腹中くだるとかれば又腹がはると申きたり候ゆへ、巴豆を用ひて早速くだし候へば、又くだりすぎると申候ゆへ、私智惠を出し、罌粟殼と巴豆と二味調合仕り用ひ候へば、例の巴豆はくだらん〳〵といたし、罌粟殼はとめんとめんと互ひに藥力の威勢をあらそひ、腹中にてねぢあひ組あひ上を下へとかへし候處へ、甘草をあつかひにいれて、和睦いたさせ申べくと存ずるうちに、病人温氣の時分、三日三夜絶食仕り、さん〳〵草臥まいり、病の外の往生を遂候うへは、此方へのうらみはなき筈にて候と申上る、地頭笑はせ給ひ、かやうのめづらしき療治聞及ばざる所なり、向後は世上の者眼をあきて醫療をたのむべし、自然、藥不相應なりとて醫者かたきに仕らば、今時庸醫の首はあるまじきなり、佛經の道理をきけば非業といふ死はなしとかや、汝が悴も定業とそんじおもひあきらめて、遺恨をふくむ事あるべからず、たて〳〵、

本朝藤陰比事卷之四終

本朝藤陰比事卷之五

一、大赦に漏る自業の訴訟

乍レ恐言上仕候、私儀は山科より伏見へ毎日のぼりくだりの歩荷物を渡世に仕り候久助と申ものにて御座候、當月二十一日大津の問屋、北國より上り候干鱈干鮭蒸鰈の荷物、ふし見へ持まいれのよし、不斷出入仕候へば、大分の金銀にても、請取申ほど數年顏見しられ、右の荷物をも相認て猿谷の茶屋にかたを休め罷在候うち、一荷ゆく衞なくとられ申候につき、みちすじ追かけ、ぎんみ仕候へば、いなりまへにて右の荷物を荷ひ行候ものをとらへ、奪ひかへし申べくと存候所、此盜人竹田髭六と申す強力の雲助にて、かへつて橫道を申懸かへし申さず候を、ねぢあひたゝきあひ申すにより、近所の者共出合、右の段々を申ことはり町中へ預け置罷歸り候間、召出され急度荷物を返し候上、如何樣共被ニ仰付ニ可レ被レ下候はゞ、忝可レ奉レ存候以上、

月　日　　小あげ　久　助　判

地頭聞召しあげられ、大津の問屋ならびに、かの髭六を預け置たるいなり町の者共まで召出され、御穿鑿ありければ、髭六ちんじて私盜みたるにて御座なく候、面相にて荷物取ちがへたるなど、申上けれ共、糺明のうへ、越度極まり籠舍仰つけられける、二十日あまり過て天下に大赦行なはれぬるにより、諸國私領公領の罪人のこらずたすかりけれ共、此髭六と小罪の者二人そのまゝ籠に殘されしかば、此者共訴訟申上けるは、此たびの大赦には、極惡死罪の人數さへ出籠仰せつけられ候うへは、我等事少分の御咎の者共にて御座候へば、早速御たすけ可レ被レ下所、そのまゝこれあり苦しみ候間、急に出籠仰付られ下され候はば、有がたかるべきだん申上ければ、目代、これは御前へ申上るに及ばざる儀なり、其子細は、最前籠舍御ゆるされありしもの共は、大罪の者共にて、かならず死罪に極りたる故に、早速御免ありしなり、其方共はいまだ、御仕置の品さだまりがたき程の小罪の故に、相殘りたり、直訴申上たりともかなひがたかるべしと申聞せければ、扨は大罪の者はかへつてたすかるならば、我々も人しらぬ大科を申立御免をかふるべしとて、舊惡をおもひ出して願ひ申上ける、一人は西

樂寺の什物を盗み出し、金子百二十兩に賣博奕を打、五百兩勝て町遊女をかゝへて、ゆるりと渡世したりけるが、此科しる人なし、此たび籠に入しは、少の事をいひつのり、相手のあたまをたゝき破たりといへども、死ぬる程の深手にあらず、され共さきさまおびたゞしく訴へし故に、當分の籠舍と覺へ候なり、大罪右白狀に相違なしと申す、一人は東國がたの者なりしが、十三年已前に生國にて人を切殺し、上方へにげのぼり似せ銀を吹て渡世仕り候へども、人しる事なし、此たびの籠舍はかけ落者の羽織をひとつ預りたる小科として、入籠仰付られけると申す、さて髭六は九年已前に盜賊に入、家內の者を柱にしばりつけ、金銀を取り、その家に火をかけ、首尾よくその場をのがるといへども、その翌年より七年の間楊梅瘡を煩ひ、腰ぬけのごとく、大分の藥代等にかの金銀をのこりなく漸命たすかり、手と身にてかちにもち、前の惡事人夢にもしらざりけるが、此たびの荷物わづかなる事にて此仕合と白狀申けるに、大赦の日限ははや過て、籠舍御免なりがたく、右二人は礫にかけられ、髭六は火あぶりになりけるとなり、

○町に角なき油や訴狀

恐ながら言上仕候、私儀は深田町油屋嘉助と申ものにて御座候、當夏までは他町に店借仕油商いたし罷在候處に、只今の家町中得心の上買求め、當五月に引越申候、其當分は兩隣其外の衆中も念比に被レ致候處に、次第に不興貌に相見へ、私方より言葉をかけ候へどもしか〳〵返答も無レ之、寄合等の座にても一人除者の樣に被レ致氣之毒に奉レ存、樣子外より承候へば、私元來氣質堅く諸事しさいらしき故との義、尤年寄町中へ對し不屆成義毛頭仕不レ申候へ共、町の衆中と參會にも睦く無二御座一候ては、難儀千萬に奉レ存候、漸家求め三四ケ月に罷成又賣拂立退候も、外聞旁々迷惑に奉レ存候に付御願申上候、御慈悲之上町中除者に致不レ申候樣に被二仰付一被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　深田町　油屋嘉助判

地頭きこして、此義町中よびよせて申付ることにはあらず、以後なんぢ物ごとあまりかたすぎぬやうにいたさば、町のものども挨拶よろしかるべし、願のとをり除者にならざるやうに、追てりやうけんし遣は

さるべき旨、難レ有と御前を立出けり、其後密に油屋嘉助が心底かた〴〵町内にて御きかせ候得ば、訴狀の通に違ひなく、氣質あまり堅くむづかしき故、つきあひもせざるよし御聞とゞけ被レ成、油屋嘉助方へ樽一つ持せ被レ遣、此酒を町の者共へふるまひ可レ申よし仰下されければ、忝しと頓て年寄へ右の段を申、地頭樣より被レ下候御酒町の御衆へ披露申度といへば、皆々袴着て油屋へ來り、是は結構成御酒被レ下冥加至極有がたく候、いづれも家業に取紛れ御見まいも不レ申迷惑に存候、町内の義も何角御差圖御遠慮なく御申聞せ被レ下候へと俄に追從たら〳〵、夫より町中別心なく出會けるとなり、

○情に浮ぶ楫浦の遊女

乍レ恐言上仕候、私儀は十六夜(いざよひ)町丸菊屋喜惣兵衛と申者の一子、喜四郎と申者にて御座候、父母六十歳に近く罷成候に付娘をやしなひ、私と行末は夫婦に仕るべきとて、十一歳に成申ものを、七年已前に養ひ候處、不身上に付、私かせぎの爲長崎へ下り、當年迄五年の間さま〴〵働き、少づゝの見つぎをも仕り候、辛苦の中にも指を折てかぞふれば、かの養ひ娘今は十七歳のさかり、枕は並べぬ夜の花、ね覺〳〵の嵐に夢もむすびがたく、行末のたのしみに身を碎き、契りを目當に晝夜かせぎ候へば、折々合力仕り候外に、金二十五兩三歩、わづかなる儀ながら、これを手元に兩親を養ひの種に仕るべくと存、まかり上り久しぶりの對面仕り候處、かの女相見へ申さず、やうす尋ね候へば、不勝手につき大名衆へ茶小姓といふ宮づかへにつかはしたる由、それさへちからを落候處に、近所の者申候は、楫の浦と申す遊女町へ賣たると取沙汰うけ給り、これは口おしき次第人しらぬ胸をさすり、親に無興の顏をつゝみ、商賣に事よせかの楫の浦へまかり越、やう〳〵として、たづねあたり候へば、今はおさな名のおせんをあらため、あけぼのとてかくれなく、日の出の大夫職にそなはり、揚屋入の道中にて行あひ候へば、かれも人めを耻ぢず落涙仕り、親の仰せそむきがたく、かやうのつとめとはなりまいらすれ共、貞女の道たちがたく、今一たびめぐりあひ、手にかゝりて相果申までの、せめての命をこそながらへさふらへと袖にすがりつき、たゞ最後をすゝめ申候躰に、曲輪のものども見とがめ、さては深き男と心

中するはとさはぎたち、騒動仕る所へ、あけぼのが親かたかけつけ候故、段々のやうすをかたり、それがしが妻に極りたる儀を申候へ共、もとより親の判形をとりて買取たるうへは、その方たとへまことの夫なればとて、我等無念にあらずとあけぼのを追込、公儀なりとも宮なりとも、勝手次第と申すに付、かねてかせぎ出し候金子二十五兩三歩抛出し、これにて料簡して給り候へ、故郷へ同道申たきねがひ申入候へども、親方承引仕らず候間、御慈悲に右の金子にて堪忍いたし、女のいとまくれ申やうに、仰付られ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　丸菊屋　喜四郎判

地頭聞しめし上られ、かの親かたを召出され、法のごとく買取たるうへは、定めの通つとめ致させ申すに、別條あるべからずとはいへ共、行末夫婦共なるべきものを、留守のうちに、兩親夫に談合もなくて遊女となしたる事、口おしかるべき段尤なり、これは法を破る理にはあらね共、料簡して返取すべしと仰られけるに、親かた畏まりがたしと申上けるに、地頭御氣色かはりて、右の證文を召上られ御覽あるに、公界十年のさだめにて金三十兩に買取たり、何年いたさせしと仰られけるに、三年やうく相つとめ候と申す、しからば一年金三兩づゝにあたれば、三年つとめぬれば九兩は相濟たり、殘て二十一兩なり、かの二十五兩三歩の金を、四兩三歩は路錢につかまつり、二十一兩相渡し早々女をつれて國元へ歸るべし、親方は都合三十兩の金に損銀まいらねば、申分はこれなき筈なり、これほど明白なる儀に、欲心より異儀を申すにおいて曲事に仰せつけらるべしとあるに、道理に閉口して御前をたちけるとなり、

○看板に僞ある梶原屋

乍レ恐言上仕候、私儀は近江町三上屋志賀右衛門と申す、饅頭餅類を商賣に仕り三代當町に住宅いたし、則簡板には蜈の作り物、暖簾にもむかでを染入れ、在々所々國々まで、店を見しられ罷在候處に、三年已前より、南隣へ店がりの者參り、饅頭餅類を私見世同前に仕り、その上蜈のつくり物、暖簾にもむかでを染入、剰根元本家と申す大簡板を出し、赤前垂の女をおきならべ商申候へば、前がたより私方存じたる者も一家と存じ、ことに根元本家の四字にも目をつけ候や

らん、私見世は年々月々に衰微仕り、隣の蜈屋はんじやう仕り候故、外へ宿がへいたしくれ候やうにたのみ候へ共、商は仕勝なればとて、取あひ申さず候、此後もかやうに不勝手に成行候はゞ、大勢の妻子眷屬渇命に及候間、他町へ立退候やうに仰付被レ下候はゞありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　近江町三上屋志賀右衛門判

地頭聞し召れ、かの隣の新むかで屋召出され、志賀右衛門まんぢう見世、三代已前より百年餘賣きたる所なれば、世間にこれを存じ買ひに來る所に、まぎらはしき隣に根元本家と箇板を出し、蜈のつくり物、暖簾まで似せをいたし、せり落しあきなひ致す段不屆きなり、せめて家名を替るか、店の樣躰をもかえて、別家のしるしを出して商賣いたすは、各別の儀たるべしと仰られければ、新むかで屋申上けるは、私かたのつくり物、のうれん家名共に、さらにむかでを似せ申すにては御座なく候、則のうれん箇板共に持參仕り候、御覽の通むかでにて御座なく、蚰にて各別なる生類、急度御ぎんみ被レ下候へと差出しければ、地頭御披見に及ばず、おのれがたくみの段々、まさしくむかでを似せたるよりは大罪なり、今時世上にかやうのまぎらはしき横道を工夫して、似せたるもの大分の利德を得る類すくなからず、向後は改むべき儀なり、げぢ〳〵屋を相止め、今より梶原屋と名乘り、早々他町へ店がへ仕るべしと仰られけるとなり、

○拾ひ物は借錢の基

乍レ恐言上仕候、私儀は守田町次郎左衛門と申者にて御座候、今日雨替町を罷通り候へば、革袋に大の字の紋これあるが海道に落て御ざ候を、拾ひあげんと致し候へば、これも道通りの者にて、横あひより飛かゝり奪ひとらんと仕り、引あひねぢあひ、此方こそはやく見つけたれ、拾ひ主は此方に極りたりと論じあひ候へども、前後の證據なく一度に手をかけ候うへは、此袋の內の金銀いかほどありとも、半分づゝわけ取にいたせと、近所の衆もあつかい申され候を、兎角聞いれず、是非一人して主づき申さんと無理を申候間、聞し召わけられ、いかやう共被二仰付一被レ下候はゞ、忝可レ奉レ存候以上、

月　日　　次郎左衛門判

地頭兩人の者に仰付られしは、これはさだめし落し主訴訟に出べし、此儀封をつけて留置なり、三日のうちは相まちそのゝち來るべしとて、御前をまかり歸り、半分づゝわけ取にしても高十貫目餘のおもみなれば、五六貫は手に入たるおもひをなし、長範があて飲、まづお造酒を氏神へさゝげ、妻子が正月きる物の模樣、このみ次第に雛形をとりよせ、魚屋を呼つけ、毎日の肩に棒をも置ず、三日過れば五六貫目はたしかに金銀の貌を、見事なる節季仕廻と、あらばたらきの毛臑を按摩にひねらせ、果報は寢て待宵、あくれば三日めも何のさたなく、四五日過て右兩人の者めし出されけるに、寶の山にのぼるこゝろうれしく、御前へまかり出ぬるに、仰ありけるは、きのふ落したる者訴訟申たれば、封のまゝ内なる諸色書つけをもつて申させ、相違なくば相渡すべしとて、かの落しぬしを召出されければ、兩人の前にて申上けるは、私儀は大かた國中の衆中、御存じせられし石臼の目きりにてこれあり、いつもの豆腐屋の臼をきり直し、酒をふるまはれ歸る路にて、目きりの道具入置し革袋を落し候、これ三盃機嫌のいたす所なり、袋のしるし大の字まで相似たるうへは、内の道具まがひなきにおいては、申請べしとて封を切て見れば、目きり道具寸法員數相違なきによつて、異儀なく相わたし申べきよし仰付られ、請取つかまつりさしあげ退出したりけり、兩人のもの妻子をかゝへて、毎日かせぎてさへ不足がちなる身上、四五日ゑようぐひして遊びければ、おもひの外の借錢仕出し、難儀におよびけるとなり、

○惡名の垢を去乞子屋が勇氣

乍レ恐言上仕候、私儀は松枝町重五郎と申者にて御座候、去十九日祖父年忌にあたり候故、縁類共あつまり待夜に念佛を申候、翌日吟味いたし候へば、宵までこれあり候金子百兩包一つ見へ申さず候、外に盜み申ものこゝろあて御座なく候、常々出入仕候牢人近所借宅仕罷在候、此もの勝手取持居申候、大形此盜人にまぎれ御座あるまじく奉レ存候間、浪人を召出され御穿鑿被レ下候はゞ、ありがたく奉レ存候以上、

月　日　　　重五郎　判

地頭聞しめされ、たしかに盜みたる證據もなきに、牢人を盜人におとしつけて、詮議いたす儀は無念の事なり、すこしにても手がゝりになるべき儀あらばか

さねて申きたるべしとて、御取あげなくて歸りけるが、其節かの牢人田舍の縁者かたより衣類合力金などもらひければ、紙子のひとへものを脱でかはりたる紋つきのきる物を着し、平生買かゝりたる錢銀のさし引をさつぱりと仕りけるを、重五郎一家ども見及びいよ〳〵それに極りぬるは、俄に衣類借錢ばらひの躰、此方の金子百兩の威勢を見よやとて、ゆびさして嘲りぬ、重五郎したしき者に半七とて辯舌なるきづよき男、それを見のがしにはなるまじ、牢人なればとて遠慮するも事による儀なり、皆までつかひはたさぬうちに、竊に智恵をもつて取かへして見せんとて、かの牢人が宿にたづね、御めにかゝること別儀にあらず、先日重五郎祖父年忌の夜、御ことはりなしに取てお歸りなされたる金子百兩、たとへ五兩三兩御つかひなされ不足あつても、日比念比なればくるしからぬ事也、殘金は私に御渡したのみ入候、毛頭も他人に取さた仕る儀にはあらず、その段御氣づかひあるべからず、もし牢人なれば、侍のさやうの不屆なる事はいたさぬなどゝ、御あらそひなさるゝと、公儀へ申上惡名露顯のうへにて御返しあれば、世間へちじよくを御ひろめあるといふ物なり、そろりと私に御わたしあれば、誰も存せぬうちに埒明候なり、異儀仰らるゝと御こしらへのきる物も、はおりも急度はいで御めにかけると嘲りけるを、牢人しばらく返答もなくて居たりしが、さてはそれがし葉をからしたる者なれば、盗みしたりと目利にあひたる、此いひわけいたすも中々口おしき次第なれば、返事は申まじとて枕引よせ臥たりける、盗みたりともぬすまぬともいはぬは、半七もすべきやうなく、兎角此ことはりを聞入ず、金子返されぬからは公儀へ申上るとて立歸り、談合して地頭へ又訴訟に出、我々共問候へども白狀仕らず候間、御權威をもつて御糺明被レ下候へと願ひけれども、右仰付られし通り手を見とゞけぬうちは詮議なりがたし、すこしにても存じよりあらば申きたれとあるに、ちからおよばず皆々かへりて、おもひ忘れもあるかと帳箇器物吟味するに、かけ硯のうしろにころりと百兩づゝみ落てこれあるに、人々おどろき、よしなき人をうたがひたり、早々公儀へ注進申せと、右金子のあり所を申上て歸り、さて牢人殿へ無實をいひかけたれば、心底こゝろもとなしとて、

此やうすありやうに告しらせけるに、浪人返事もせず、死裝束にてかけ込、亭主のがさぬと刀に手をかけし所を、段々無調法いくへにもお詫と、緣類町内の者共大勢かけへだゝり、危相申入たる儀は御慈悲にと手を合せければ、しからば卒爾申かけたりと一札仕るかといふに、千枚にてもお望み次第と申す、無實の儀申たる一札取て宿へ歸り、外に一通の書置を認め切腹仕りけるに、町中又さはぎ地頭へ申上、檢使きたりて書置を見れば、

乍レ憚御役人中まで申置候、某儀先達て重五郎訴訟申上候ごとく、盜賊仕りたりと無實申かけ候時分、早速討果し申べくと奉レ存候得共、いまだ盜人の惡名かうぶりながら相果候ては、緣類共の顏をよごし候と存じ、一兩日さまゞ思案仕るうち、かの金子家内にこれあり候よし地頭へも申上、自分かたへもそのことはりたて候うへば、もはや盜賊の名をば遁れ候段、生前死後の本望大慶これに過ず奉レ存候、しかれば望みなき身の長生仕候ゆへ、かやうの存じよらざる惡名をもたてられ候、身不肖に御座得候共、遠境近在御當地にも遠き緣類これあり候へば、同名のつらよごしは私存命ゆへと述懷を存じ、兎角浮世の暇を申うけ自害に及び、かの重五郎かたの畜類同前の者共に意趣殘り申さず候に付、相ことはりに及ばざる儀を書つけ御披露奉二賴上一候以上、

小杉源太左衛門事

月　日　　耳かきや小兵衛判

御役人衆中

地頭へ披露申されければ、此源太左衛門儀は子細ありて逼足せしよき侍のと聞及びぬ、たとへ此男にあらずして同輩の町人なり共、盜人となき名をよばれては堪忍なりがたき所を、さすがの武士なるが故にその金子ひとり出るまでは、忍をこらせる勇猛の器量おしみてもあまりあり、まさしく卒爾をいひかけたる者下輩なれば、相手にはせずして腹を切てさしたれ共、猶意趣のこらざるとは見事なる仕かたなり、これは是武士のいきごをり一遍にて相濟ぬれ共、町人のうへはさにはあらず、相手すでに相果たれば理非共に同罪たるのみならず、無理を申かけて人に自害させし科のがれがたし、長袖なれば切腹おぼつかなくおもはゞ、しばりくびなりとも立袈裟成とも、望

みにまかすべしとて家財沒收せられ、その身は十日ばかり籠舍して死罪に仰つけられけるとなり、

○非道に冥む化物屋鋪

乍レ恐言上仕候、私共は榎木町の名主五人組にて御座候町に表三間半に、裏行十五間の家屋敷御座候處、此家主七年已前に相果候節、妻子緣類も無二御座一、半季居の女男二三人これあり、書置に兩替屋次郎右衞門取替銀有レ之候間、古劵の通屋敷御賣拂ひ御濟可レ被レ下候、殘銀は町内の會所銀の借用へ返進申度候、其外は家來三人の者共に被レ遣可レ被レ下候、此度病中に殊の外働き候褒美にくれ申度候、此屋敷元銀三貫七百目に求め、其後普請井筒などに金三十兩入候へば、元直に御拂下され候ても、右賣劵の格にて相濟申つもり仕置候、諸道具は扇一本にても、寺へ御上げ可レ被レ下候、此等の儀町内へ賴申段書付相果候故、其節御ことはり申上、屋敷賣はらひ借屋に仕直候て、町儀相勤候所に、此屋敷に化物住と申出し、店がりの者二三年の内七八人立退、住つき申もの無二御座一間傳へ候て、其後はかり申談合いたすものもなく、あやしき化物やしきと申ふらし、四年の間よな〳〵月ならでは影もさゝず、秋の虫の外に音づるゝものもあらし吹つより候へば、やねいたをとばし町並も見苦しく候所、此比店がりの者これあるにつき、破損を修理いたしかし申候にも、化物の取沙汰かくれなきは合點にてかり候へば、少しもおどろく儀これなしと廣言申し、一兩月罷在候へ共あやしき事も無二御座一候處、夜前丑の刻ばかりに、西隣の裏の塀のうへを、白き裝束にて髮をさばき、まなこは丸く光り、女の幽靈など申す躰相の者東隣へあゆみ行き候、折ふし起合せ候て見つけ、かねてこゝろがけたる手鎚を持てはしりかゝつてつき落し、とゞめ迄さし、化物仕とめたりと名主町内へことはり申來り候故、町中立合見物仕候に、うつくしき女の形、としは二十八九、兩眼には錢を貳文くゝりつけ、みだれ髮にゆかたを着し、朱になつて突ふせられ候躰、常の人間の死したるに相違なく、狐狸のばけたるとは相見へ申さず候間、御吟味仰付られ被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　榎木町年寄　五人組

地頭聞しめされ、すなはち檢使をつかはされ、かの女を御吟味あるに懷に封じたる物あり、披見あるに、男

の筆跡にて密通の艶請文あり、男の名藤市郎とあり
て、おすてどのまいるとあるを、町の者共に此手跡見
しりはなきかとあるに。此屋しきの西隣にすめる小
間物屋藤市郎が手にまぎれなく、女は東隣の若後家
のおすてに極り、まづ藤市郎を召つれられ地頭へ歸
り給ひ、密通の次第をひそかに問せられければ、若後
家いまだ夫あるうちより念比してまかりあるよし申
す、かの夫の病死の躰を御尋ねありければ、町内の者
吐血して相果たりと申す、藤市郎に病死の儀を御尋
ねあるに、女房鰒の蝶と申すものをひそかにあつめ
て、平生の調藥に入れて夫にあたへて、私と行末なが
く契るべき心底ゆへと申たるよし白狀す、これによ
つて重罪たる故、女の死骸、もつとも藤市郎も密夫の
御仕置にあひ、突ころしたる者は町内を拂はれける
となり、因果歷然の車めぐる事はやかりけん、

本朝藤陰比事卷之五終

本朝藤陰比事卷之六

○好色は世界の貸物屋

万づ借物屋、白無垢淺黄上下、每日無常野に送らぬ絕
間なく、此二色のかし賃取て五人口、身過は草の種草
末の露の後れさきだつ世、一度は消ぬ人なく、中より
下の諸商賣人、皆かり物にて埒のあく世は廣きとぞ
かし、近代これより思ひつきて、まはり遠き金かし、
借屋賃の埒あかぬ世話を止て、火間のよき藏ひとつ
にあらゆるかし物を積置て、婬者の目見へ衣裝、たと
へ唐織紗綾縮緬當世模樣の帶、給湯具、にほひの玉ま
でそえて、一日限に何匁何分、貧僧にかし衣袈裟、お
布施をはねてさし引、信心は莊嚴にあり、錢ほど光る
脊負佛一日に何分、粟島の雛箱、鐘鑄の紙簡板、開帳
にかし佛、肩入侍にかし刀、揃羽織踊浴衣、花見幕か
し毛氈、辨當被衣一夜がしの夜著蒲團、蚊屋くゝり枕
寢覺のたばこ盆まで、かりの世界は人間の五大も、地
水火風空のかり物、我物はひとつもなし、丸裸にて生
れ、死ぬれば經帷子ひとつの利あり、我人損といふ事
はなき道理、おろかなるから生死の往來、手振なる事

をしらず、爰にかくれなきかし物屋諸色有右衛門といふおとこ、ある時訴訟にまかり出ける、

乍レ恐言上仕候、私儀はかし物屋有右衛門と申者にて御座候、浮世町鴨兵衛と申す者に、當二十一日にふり袖の白無垢、黒小袖茶繻子の帯、緋の脚布、玳瑁のさし櫛、以上五色かし申候所に、今日五日になり候得共、損賃も右の諸色も返し不レ申候、元來一夜切にかし候約束の物、かやうに延引仕り候故、急度近所へも相ことはり可レ申と申候得ば、そのかはりとして、古き男の木綿布子、口縄のやうなる破れ帶一色取出し、これにて堪忍いたしくれ候やうに詫申候、右白無垢代五匁、黒小袖代三匁、帶の損料一匁二分、湯具六分、さし櫛代三分、〆十匁餘のかし賃はどにもあたらざる物にて、三百目餘入候着物諸色代をあつかひ申す不敵者にて御座候間、召出され急度返辨仕り候やうに、御慈悲に仰付られ被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　かし物屋　有右衛門判

地頭御取あげありて、浮世町鴨兵衛を召出され、段々不屆の事無類なる横道なり、右の諸色早々返辨申べしと仰付られければ、鴨兵衛かしこまりて申上ぬるは、此かり物理不盡にさし置申にあらず、存じよらざる儀につき、横著者に御耳にたち申儀、不運のいたす所に御座候、その子細は私一人の娘これあり候處、當年十九歲まで似あいの緣邊も御座なく、其身も成人いたすにつき、氣の毒に存じ、あなたこなたをたのみ似合の奉公仕りたきねがひ、さいわゐよき宮づかへの口これあり、目見へにまかりこし候にも、つね〲貧しく衣類のたくはへなきにより、此有右衛門かしきる物をかり、四五日已前目見にまいり、大かた身上もきはまり申べき談合にて歸り候道すがら、兼々執心かけし男なりとて口説より候へば、さかりたちぬる女ごゝろ、ふと同心仕り、親の目をかすめ、其夜相圖をいたして忍びこませ、平生ひとりふせり候閨にともなひ、形づくろひし、借衣裝もそこにぬぎ捨、千夜を一夜のかたらひもかぎりある鳥の聲、鐘のをとづれにおどろき、あけての首尾に名殘おしききぬぎぬも、又のあふ瀬をたのみに、こゝろの闇のくらがりまぎれに起別れ、ほどなくあけわたる日かげに見れば、かのかりたる衣類はなくて、ふるきおとこのぬの

孔子の仰られし、今の孝は養ふ事をいふ、犬馬にいたる迄養ふ、敬せずば何をもつてわかたんや、養ふはこれ孝道の下なり、たゞよくこゝろざしを盡すべし、ここに玉島屋八郎次といふ者、一人の母に孝行厚く、古稀のよはひはるかに過ぎて、今年九十三歳の老母、玄冬の寒にいたみ、空さだめなき時雨ふり行、いたはりなぐさめがたき歳の暮、よろづ心にまかせぬ貧賤の中にも、其天極りなきこゝろばせを運びぬれども、金銀のたくはえちからにまかせず、何事につけても甲斐なく、ある時おもひつけたる事ありて、日比出入せし家に雪舟の山水の繪あるを、老母なぐさめの爲に、たゞ一日の約束にてかり出し、其比かくれなき繪圖の妙手、程月といふ繪師にたのみて取まがふ程にうつさせ、右かり出せし繪を見山といふ繪所に持參して、極め札を望みければ、もとより正眞の雪舟なれば札を出し、金三十五枚の添狀まで申うけ、直に平門屋與市といふ有德人が方に持參し、此雪舟の似せ繪賣物のよし申す、與市も少し目利なれば、つく〴〵と見るにさらに似せとはみへず、そのうへ見山が極札添狀疑ひもなき筆跡なれば、求めたき一念きざしけるこ細帶を殘し置、着替て出ぬるにまがひなく、つゝむにつゝみ難き此首尾かたらねば、まさしく親の横道に極る事のかなしく、白狀仕り候と申す、その娘を同道仕り候、科人は此者にて御座候、いかようとも越度に仰付られ被レ下候へと申上る地頭御思案あるに、これたがひに科をゆづりあひし例、子は親の爲に隱し、親は子の爲にかくすの類にはあるまじければ、かの男盜賊には極りたり、男の方より女を釣にはあらで、女につらるゝ貌にて、盜みたると見へたり、しかれば此娘は遊里の外の町遊女と御推量ありて、鴫兵衞は何を商賣仕るぞとあるに、虫喰齒の妙藥を賣候て、家內妻子四五人九疊敷の借宅仕候と申す、妙藥もはやり次第に高利あるまじきにはあらず、されども僅なる住居にて娘外より男を引入て、一宿いたすを知らざる事不思議なり、先規より申わたすごとく、たとへ緣類たりとも、ことはりなしに一夜の宿を仕る義も法度なり、況やその行衞しれざる者の宿を仕りたる越度輕からず、家財を賣立て急度かし物屋方へ算用相立候うへ、追放に仰付られけるとなり、

○慾にまがふ程月がうつし繪

が、猶も念を入たく、やがて見山が方へもたせつかはしてうかゞひぬるに、正眞に極り、先達て其札をも添たるよし申きたるに、與市今は落つき、八郎次に買取申すべき談合の上、いふても似せの事なれば、卅五枚には望みなし、され共あまりよき出來なれば、十五枚までには求むべしと申せば、八郎次しからば持主へ相談申べしとて、先此繪を持て歸り、すぐに右の繪主へかたじけなく御禮申して返辨し、扨此比あつらへし程月がうつし繪に、見山が極札添狀をつけ平門屋へ持參し、此節內證差つまりぬれば、是非なく賣べきよし申す、與市よろこび相改るに、上手に似せたる物なれば、最前の正眞と墨色紙の時代微塵もわるき所見へず、すなはち十五枚相渡し、念の爲八郎次が一札を取ける、その文言に雪舟の似せ繪賣渡し申すとかかせける、八郎次たくみすまして存じよらざる金子手に入、老母をいたはり、その身も見事なる正月近年になき仕廻、世はしれぬ事ぞかし、明る二月平門屋心やすき客四五人に馳走の上、かの雪舟を耽らかしけるを、目の黒き客ありて、これは墨紙若きやうに見ゆるといふに吟味するほどよろしからず、しかれ共見山に見せたる上極め札までありし物なれば、今さらあしかるべきやうなしとはおぼゆれ共、評判心もとなく、念のため今一度見せにつかはしければ、似せ物のよし申きたりぬるに、與市おどろき、さては八郎次我をたばかり、金十五枚あたゝかに取たる仕形にくしとて、やがて訴狀をしたゝめて罷出ける、

乍レ恐言上仕候、玉島屋八郎次と申者似せ繪の雪舟を持參仕り、金十五枚に賣申候、かやうの似せ事いたし金銀をかたり取候間、八郎次召出され、右の金子返し申やうに被二仰付一被レ下候はゞ忝可レ奉レ存候、世間にかたりおほく候て、廉直なるものをだまし申候へば、諸人の見せしめに急度被二仰付一可レ被レ下候以上、

月　日　　平門屋　與　市　判

地頭聞しめしあげられ、かの八郎次を召出され、似せ物を正眞といつはり大分の金銀を取事、盜賊同前の科なりと仰られけるに、八郎次私左樣の覺え御座なきよし申上る時に、平門屋まかり出、それがしにかゞけたる雪舟の繪はいかにと申す、されば正眞と申て賣たらばこそ、最前より似せと申ての上の賣買にあらずや、たがひに證文これありとて、取かはしたる一

札をさしあぐるに、雪舟の似せ繪一幅と書し買賣の文言なり、地頭平門屋に似せと申す證文まで取かはし、今になりて八郎次にだまされたりとはいかにと仰られけれ共、與市倒惑して一言にも及ばず閉口す、重て仰られしは、これはおのれが心に、正眞と目明しながら、似せといひかすめて、直段安う買んと思ふ欲心にくらまされ、をのれと己をあやまりたれば、人の存じたる事にあらず、さて又八郎次がたくみ、與市が大欲にまさりたる横道ありと雖も、今の證文の上に詮議いたす道なければ、其通りに致し置なり、重てかやうのたくみこれあるに於て、急度御仕置に仰付らるべしとて、兩人薄氷を踏みてすごすごと御前を立けるとなり、

〇買人の知れぬ魚屋が注文

乍レ恐言上仕候、私儀は魚の店鯛屋鰭右衛門と申者にて御座候、數年寺町へ出入仕り商ひいたし候得共、代金とゞこほりなく拂ひ申され候所に、去る極月より不勝手のよしにて一錢も算用いたされず、難儀仕候、すなはち別紙に書付を以て申上候通、天蓋の代五十九匁八分、花幔の代四十七匁三分、手巾の代八十六匁九分、獨鈷代九十三匁六分、合て銀三百目、わづかなる儀に御座候得共、私細元手にて何共致しがたく候間、右の住持方へ相濟申され候やうに、被二仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　魚の店鯛屋　鰭右衛門判

地頭御取ありて仰出されしは、寺町の住持とばかり書て、何と申す寺とも知れず、其上其方肴屋にて、衣屋同前に佛具を取あつかふ儀も、心得がたしとある時、鰭右衛門申上けるは、天蓋と申すは鮹のから詞にて御座候、花幔は鯣、手巾は鰻、獨鈷は鰹節の異名にて、寺がたへ出入申候時ならひ候と申す、さて又しかと寺號を書付申さぬ儀も、遠慮に奉レ存候故にて御座候と申せば、地頭暫くありて、かさねて罷出べしとて御前をまかり出けるが、寺町へ御觸ありけるは、鯛屋鰭右衛門方より買候佛具代、早々相濟し申さるべし、身上つぶれ候由訴訟仕るによつて、申觸候者也、住持の御坊衆中地頭判とあるにおどろき、買とりたる衆より早速算用致されけるとかや、

〇石瓦磨けば世繼の寶

龜田町三倉屋彦九郎惣領梅之介、次男竹之丞、三男松

之介とて、三人つゞけて男子を持り、北町大川屋徳左衛門、ことし四十三歳まで一子もなきにより、三倉屋の三男松之介を養子に望みしかば、早速同心して金子百兩乳母一人相添て遣しける所に、此松之介十一歳の時、徳左衛門女房二十年の馴染に、思ひがけなく懐胎して男子を産り、終殘の初物なりとて、夫婦寵愛かぎりなかりしに、女房常々思ふに、養子松之介なくば、今出生の子惣領たるべきに、はやまりて家の嫡子次男になしぬる事ほいなしと、悔しき色外にあらはるゝに付ては、自然と松之介に疎遠になり、衣食につけても、此頃は目だつばかりなるを、乳母も口おしく實父三倉屋彦九郎に、育あげし此乳母が鼻もいつの頃よりか高からずと、告口たび〲に及びしかば、彦九郎夫婦内談して、我人の情欲かはる事あるまじき世界のならひ、いかさま養子と實子とならべては、いつくしみ實子にはまさるべからず、これ無理にはあらず、それにつけては代々の家督を、實子をさし置養子にゆづる事心よかるまじ、義理を思へば今松之介をかへさんとはいひ難かるべし、取かへしたる上は相應の事あるまじき物にあらずと、大川屋徳左衛門にひそかに取戻し申べき相談いたしかけぬるに、徳左衛門大きに立腹して、一たび養子に貰ひ惣領に立し上は、たとへ實子十人二十人出生したればとて、不深切の儀毛頭これなし、今實子あれば、それがし思案もかはるべきと思はれしと見へたりとて、無興せしかば、さほどの御心底の上に是非取かへすべきやうなしとてその通りに過、行年の二とせあまりありて、徳左衛門肺癰を煩ひける最中に、養子親彦九郎を密にまねき、只兩人内藏に伴ひ入て、金子二千兩を箱より取出し、彦九郎に相渡し、それがし此たびの病氣千に一つも本復致しがたし、松之介十五歳に及び候時、よき手代を見たて仕似せの綿商ひ、それも變化ある世なれば、何にても見合せ御相談たのみ入なり、死後たとへ松之介事母と不和に成候共、十五歳まで御介抱ありて此家相續給はらば、生前沒後の大願本望と手を合せて頼むに、病人の氣に背かず、請取りて歸りし、三ケ月ばかり過て徳左衛門相果ければ、今は後家かねて思ひしまゝの世になりて、百ケ日はやくたちて後、身上見分とは内證相違あれば、此家死人の跡立がたしとて、右の百兩つけて松之介を彦九郎に返

し、出生の實子を世にたつべきたくみ、藏のうち穿鑿すれば、二千兩入の箱たしかにあり、金買置の寶物千兩、已上三千兩、心のまゝの世になり、愛別離苦の悲も當座よりは思ひきりよく、後家すがたを目だゝぬうす化粧、毎日寺詣りの次でと見せて、狂言づくしの芝居に、小奇麗なる子飼の手代を召連れ、實子德太郎は乳母にまかせ置、今の世の樂後室と指をさゝれしに、二人の手代一人は傾城狂ひに買置の綿代三百兩行衞なくかけ落し、一人は米のはたあきなひに五百兩雲を相手に消行、長崎へ夜ぬけしたりともいふ、筥根の峠にて逢たりとも、沙汰のかぎりなる始末になりて、後家もたのみきりたる手代は離れぬれども、二千兩の箱入に胴つよく、ある年の土用干に、此箱の蓋をあけ、小判の黴を取べしとて包みたる封をきれば、皆石瓦の破を念比につゝみ置けるにあきれはて、後家絶入するばかりにつぶせし膽を、やう〳〵取なをし、家久しき手代の禪門を呼よせ、此箱のありさまをかたり、不思議はれぬ物がたり、殘る所もなく探しても、外に金銀の入べき器もなく、幾度か石瓦の金箱おしつ入れつせしが、箱の底に一通の書置と見えて、みづからの筆にまがひなく、其文に曰く、始め實子なき故に松之介を養子致す處に、ほどなく一子出生せしによりて、今は養ひ子うるさく思ふ心ざし、其方が顏色にあらはれし上は、我死後にいたりては、必ず松之介を彥九郞方へ返し申さん所、草葉のかげにても本意なく存ずるなり、然らば蓄へ置たる二千兩の金忽石瓦と變じ、此家の滅亡掌をさすがごとし、若し心を取直し再び松之介を惣領にたてるに於ては、石瓦もとの小判になるべき事疑ひあるべからずと書きたりけり、後家落淚して、誠に推量にちがはず、養子を返し其上金子の石になりたる事見通しなる書置、亡靈のおもはれん所耻かしき事に思ひければ、持佛堂に香花をそなへ罪障懺悔して、松之介を呼かへす談合する折ふし、松之介實父彥九郞地頭へ訴狀を指上けるは、

乍レ恐言上仕候、私儀は龜田町三倉屋彥九郞と申者にて御座候、然るに北町大門屋德左衞門四十餘歲まで實子御座なく候に付、私三番目の悴松之介を養子に望み申に付、十三年已前に遣し候處、二三年之內に德左衞門實子出生仕候故、右松之介を取返し申べき段

申入候得ば、德左衞門承引不レ仕、一度貰ひ候上は、幾人實子出生申候共惣領に相立申べきとて、かへつて腹立仕候故、世悴松之介共通に致置候所、德左衞門程なく病氣づき相果候二三ヶ月前、私をひそかに呼よせ、金子二千兩預け申度由申に付預り置き候、其節たとへ死後にいたり松之介養母と不和に罷成候共、此金子沙汰なしに致し置、松之介十五歲になり候時、商賣如何樣共見たて、家相續致し吳樣やうにと賴み申候て程なく相果申候得ば、德左衞門推量にたがはず不身上のよしにて、後家方より松之介を返し申候得共、德左衞門生前の一言これあり候故、右金二千兩預り置候段、御ことはり申上候以上、

月　日　　　　三倉屋　彥九郎　判

地頭聞し召とゞけられ大川屋後家を召出され、夫德左衞門相果て後、紛失の金銀出入の儀はなきかと御尋ねありしに、後家申上けるは、たのみきりたる手代大分金銀をあけ行衞なく、商賣の代物にもはなれ、藏のうちの金二千兩の箱には石瓦殘り、始めの養子を呼かへさば石も黃金となるべしと書置の次第、今は手も力も御座なく、殘る物とては本宅の外に三間口の家裏に小借屋これあり、一ヶ月に五十匁づゝの屋賃取候、二ヶ所の家を賣候べき始末になり行候よしつぶさに申上ける時、地頭仰出されしは、實子出生したる故に始めの約束を變じ、養子をうるさくなしたる罪によつて金は石と變じ、夫にはなれて身を放埒に持たる天災によりて、手代盜てかけ落したり、これみな汝が胸より出たる罪科にして、汝を苦しむる所なり、向後は心を改め、養子の惣領に本宅を渡し、彥九郎に後見をたのみて家を相續し、後家は別宅の三間口を己が糧として次男を養育すべし、町内の者共も此旨を相守らすべし、これ德左衞門が直なる覺悟と彥九郎が律儀によつて、大川屋の家の流たへず、すめる御代の御捌きとて感じける、今に四代の綿問屋相續の糸、ながき世の咄しに聞へたる事なり、

○思案を招く龜松が雨の手

乍レ恐言上仕候、私儀は扇町に店借仕、絹布の中買を渡世に仕候　交野屋八九郎と申者にて御座候、去月十五日大瀧町長崎問屋水倉屋喜三兵衞と申人、私商賣の京織の絹帶地、其外小間物共銀高九百卅七匁五分の諸色賣申候て、內金一兩取置、殘銀は同十六日に請

取申等に相究注文に書加へ、喜三兵衛判形仕候故、同十六日に右之銀請取に參候へば、喜三兵衛卒中風にて、十六日の晝時分相果申候よしいづれも申に付、右の銀の儀を申ことはり、取込の事ながら相渡し給り候やうに申入候へば、其長崎の客は十五日の晩に出舟申され、其上何申ても此愁の中に取あひ申難く、中陰も過て參るべしと申に付、三七日相待右の段々申達候得ば、家内の衆中口を揃へ、死人の妄語なれば、麁忽なる儀は申來られまじくは存ずれ共、その代銀相濟申たるやらん、いまだまいらざるやらん、證據なき事なれば、死人再び出申さるゝ迄は、埒明申まじく候よし申に付、右注文の端に内上げ金子一兩相渡し、殘て銀八百七十匁三分明十六日に相渡し申べしと自筆に、喜三兵衛印判これある注文をみせ申候へ共、何共心得がたきよしにて取あへ申さず、迷惑千萬に奉レ存、町内年寄五人組へも相ことはり申候へ共、これも死人の妄語、我人いそがしき家業を、胡亂なる事に取あつかひ致し難きよし申さるゝにつき、右の喜三兵衛自筆判形見せ候得共、取あひ申されず候、私儀少分の手元にて中買仕候得ば、右の諸色のわづかなる利にて口過候處に、此銀不埒なる儀さき様へ聞え候ては、重て絹布の中買致し候事まかり成不レ申、その上私横道にても致したると存ぜられ候段、難儀に奉レ存候間、喜三兵衛跡式存じ候者召出され、御尋の上銀子相濟申すやうに被ニ仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　扇町交野屋　八九郎判

地頭聞しめし、喜三兵衛手代並町中召出され、此殘銀の請取八九郎方より參りたる儀はなきか、反故共詮議して證文出るに於ては、重て持參申べしと仰付られ、双方罷歸り四五日ありて請取證文これなきよし申上るに、八九郎をも召出され、右金子一兩の内上けの手跡判形、町儀宗門帳の印判と相違はなきかとの御尋ねなり、町中見分仕り、手跡印判は喜三兵衛にまぎれ御座なきよし申上る、旣に八九郎方にはこれほどたしかなる證跡あり、しかるを死人にかこつけて家内の者取あはず、其上町中年寄もかやうの事をよそに聞て公儀の出入にいたす事、上をかろしむる所なり、長崎の客をば八九郎はしらず、喜三兵衛とまさしく相對なれば、今さら外國の者におほせる事はそ

れこそ死人の妄語たるべし、喜三兵衛世悴はなきとの御たづねなり、當年三歳に罷成龜松と申す男子これあるよし申す、急ぎ召出され、親證文これある銀子を相濟し申さずして、横道仕る段不屆なり、急度手鎖をうつて、町内へ預るものなり、晝夜五人三人宛の番を致し申すべしとて、その〳〵退出したりけるが、町中難儀なることながら、是非なく番をつとめけるに、此龜松が母祖父祖母涙をながし、いまだ三歳にこそなる子に、かやうの仰つけ不便といふもあまりあり、元來此銀子長崎の客より請取たる物ならば、相濟すとても此方の損と云物にはあらず、もし此たび客より請取ぬとても、此代銀にかぎらず此方より拂ひ、重てさし引する事めづらしからぬ事なり、いづれにても相渡すべき銀ならば、たとへ家を賣てなりとて相濟し、いとけなきもの丶罪をたすけてとらすべし、世には詞ひとつにて、百兩二百兩のみす〳〵の損をするもうき世のならひぞかしと、詢きたて丶なきわめきけるに、これは尤にいづれも聞屆けて、十七八日過て訴訟申けるは、死人請合て判形仕りたる上は、長崎のものとかさねて指引仕るとても、當分は相濟し申筈の銀子、八九郎方へ相渡し、龜松手鎖の御免かうぶりたき願ひ申上けるに、證文印判ある上は遁れざる事に、町内の者共まで取あはざる儀不屆きなり、さりながら八九郎が望み次第とあるに、銀子さへ請取申す上に、子細御座なきよし濟狀あげて、手鎖御ゆるされあけ丶るとかや、めづらしき御捌きに申あへりけり、

本朝藤陰比事卷之六終

本朝藤陰比事卷之七

○怨は消る無邊の辯舌

乍レ恐言上仕候、私儀は丹後村與介と申す者にて御座候、當年七歳に罷成候悴、蔦の森と申す林に遊び居候を、同村の百姓勘吉と申すもの、今朝鐵炮にて打殺し申候間、御慈悲にかたきを御取被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　丹後村　與　介

地頭勘吉を召出され、大切なる人の子を何として殺せしぞと御尋ねありしに、勘吉申上けるは、意趣意恨ありて殺し申すには御座なく候、今朝六つより兎狩に罷出、手飼の犬、兎をおひ出し候所、見失ひ、かなたこなたの森の下道をわけてたづねめぐり候處に、東の尾崎の篠原に、此與介世悴、黄茸を拾ひ候とて草むらにわけ入り候よし、さやうの事も存せず、草葉のそよぎ候を目あてに鐵炮持合たるに付放し候へば、世悴にあたり相果候に、おどろき候へども致すべきやう御座なく、あやまりたる申わけを仕り、いくたび詫候へども堪忍いたされず、御前の沙汰になり迷惑仕り候、此うへは是非なき仕合、後悔いたすべきやうも御座なく候間、いかやうとも親共の存分に仰付られ下され候へと申上ければ、地頭聞しめし、尤意趣なきとても理非共に人を殺せしうへは、汝も死罪は遁れがたしとて、名主に御預けなされ、與介ねがひの通りかたきを取りて下さるべしとて、おの〳〵御前を退出申けるが、五十日七十日たつといへども、成敗仰つけらるゝ沙汰もなかりければ、與介怺へず又訴訟に出、一日もはやくかたきを御殺し下され候へと申上ければ、近日に仰付らるべきよしにて歸りける、翌日地頭より名主を召れ、此たび幼きものを打殺せし勘吉は高かいかほどの百姓ぞ、與介は田畠何ほど作るものぞと御たづねありしに、勘吉は高五六町　與介は漸七八反の小百姓と申上る、其頃此丹後村のかたかげに　無邊和尚とて顯密詞宗の名僧ありけるが、ある時地頭より與介を召れ、汝が世悴のかたき、一日もはやく殺し度願あらば、無邊といふ坊主に頼めと仰つけられけるに、いかなる子細は存ぜねども、御意なれば默止がたく、無邊和尚に逢て此やうすをかたりければ、和尚はじめは不審にて、當所に二三年隱遁し

て、いまだ地頭にも相見えず、今成敗人の儀を頼めと仰付られしは、殺生戒を破る加人(かたうど)なりぬべきにやと思はれけるが、さすが智道兼備の僧なりければ、頓て地頭の底意をや察し給ひけん、與介をいとこゝろよくもてなし、善惡因果經を開き、世上の貴賤貧福壽命長短の事、現當の根なし事にあらず、過去より宿因による事、乃にかゝり矢にあたりて命を失ふ事はいふにおよばず、石に跪き礫に怪我する事まで、因緣由來なき事あたはず、大聖釋尊一代の說經、此因果の二つを演(のべ)給ひて、三世を立一切の有情を引接し給ふ、世間においては春耕し種をおろすは因なり、秋稻を見るは果なり、旦暮の產業にいたるまで因果の離るゝといふ物なし、況や此愛子鐵炮に命を終る事、定業因果のいたす理なり、されば此のごときの三世を見通す事、羅漢果を得て、六神通のうち宿明通を得れば、過去未來八萬刧の間の事をことごとくしるなり、末代の凡夫沙門これをしらずといへども、物の理をもつて觀ずるにおいては、あたらずといふ共遠からざる義なり、すでに過去の讎敵、今勘吉と生れ來て、宿習の恨を散じたれば、差引相濟たる所を、又勘吉をかたきと存じ殺害の願を遂たらば、又遺恨の因を萠はじめ、又怨敵の果を取て、うつたりうたれたり、切たり切られたり、未來永刧の苦患止事なく、たとへば車のめぐるが如く、地獄餓鬼修羅道の三惡に墮在して、浮む世さらにあるべからず、しかれば親となり子となるは、猶宿緣ありて來りしものを、その方が瞋恚をもつて敵を取ば、先立し世悴が爲には石を負せて阿鼻焦熱に落すに同じ、たゞ因果の定りし業とおもひ捨て、念佛誦經し、佛祖に法施をなし、修羅の苦しみをたすけてとらすべし、勘吉に恨をむすぶにおいて、幽靈かへつて親戚を恨むべしと、法譬緣の三說に辯舌を振て法談ありければ、與介木石にあらざれば落涙して、向後勘吉に恨みなし、かやうの有難き御法をうけ給候も、ひとへに世悴さきだつて、寔にあだなる世のことはりを親にしめしたること、佛菩薩の化身と存じ候へとて、百拜して直に地頭へまはり、もはやかたき取申す所存ひるがへし、佛道に入候うへは、御預けの勘吉をも御たすけ被レ下候へと、一礼をさし上て願ひ申上るにまかせ、勘吉を免し出され、おやの願ひにまかせ一命をたすくるなり、たゞし子生れて七年

の雜用、一年に二百二十三匁七分五厘宛也、隨分始末して入事、古來の算者唐より積りこし、我朝大かた違ふ事なし、成長の後百倍にしてかへすは子の道也、しかるに汝が手にかけて、あやまつて七年の雜用を費す、算用をば急度相立べしとて、銀一貫五百六十五匁五分五厘也、勘吉かたより與介に相渡させ、料簡かたじけなき手形して送りけるをも、請まじと申せば御意をそむくとて、頂戴して相濟けるよし、地頭のはかりごといみじき事に沙汰ありけるとなり、

○万八が自害は借錢の皆濟

乍レ恐言上仕候、私儀は坂本町米屋太郎八美濃部町薪屋甚六と申者にて御座候、榎並町万八と申者に、我々米薪代銀五百三十四匁五分賣がけ御座候所に、四五年不勝手のよし申候て、兩人方へ右之銀子相濟し申さず候故、去辰の極月、急に取つめ申べくと催促つけ候へば迷惑がり、兩人の目の前にて自害仕り相果申候へば、万八が女房我々共にしがみつき、世に百兩二百兩の借錢負候もこれあり候へども、自害いたすほどに、手ひどく乞申事は聞及ばざる事なり、わづか十兩に足らざる賣かけにて、夫を殺され候間、御公儀へことはり、妻のかたきをとり申べくと、我々兩人の者共にねだりかゝり候に付、今は何申ても手に入ざる銀子の事に、公界へ呼出され、いかやうに仰付らるべきも不レ存、とかく此うへながら女房に詫事いたし、下にて料簡いたし、沙汰なしにめされ給はり候へと申候へば、しからば右の負ひ銀の帳をも消、請取をも仕くれ候やうに申候に付、請取仕り漸詫候て、損をいたし罷歸り候所に、當夏京都祇園會に、右の萬八成ほど息災なる體にて、祭禮を見物いたし、さる方の簾の内にて、素麪をたべ申候て居申候、これは死したる者ふたゝび蘇生り候やと肝をつぶしながら、祭の濟候まで相待、萬八が歸るさをつけて見申候へば、只今は最前の居所をかへ、菱松町に罷在候間、右萬八をめし出され、御詮議被レ遊、借銀返辨申やうに仰付られくだされ候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日

坂本町　米屋　太郎八　判
美濃部町木屋　甚　六　判

地頭訴訟を御覽ありて、死したる者のふたゝび此世に來る事あるべき事ならず、たゞし似たる人がらあるまじきものにあらねば、しかとその萬八に對面と

げ、相違なきにおいては召連きたるべしとの仰をうけ給り、太郎八甚六すぐに萬八が宿にたづねて挨拶するに、前かどにたがふ事なきにより、負せ銀の事を申出せば、それは去年相濟せしと申す、請取らぬと論義干がたく、その上その方は相果たる體、今いきて對面いたす事こゝろへがたしといへば、蘇生たりと申す、兎にも角にも銀はうけ取らざれば急度返されよといふ、濟せしと、こゝで論じて止まず、先達て地頭へ言上申置たれば同道すべしと、萬八を引ずりて御前に出ければ、永々の借銀の義なれば、異議なく濟すべきよし仰らるゝ時、萬八右の請取を出し、證文までいたし置、二度相濟すべきとはお受申がたしとあるに、請取の判形兩人の印にまがひなく、かやうのたしかなるうへに又請取ぬと申かけるは、兩人の奴が横道に極りたりとて、籠舍の儀は御免ありて町ばらひになりけるとなり、これは去年急に取つめんとさいそくせし時、女房とこゝろを合せ、蘇芳を口にふくみ空腹きりて、かけ乞をおどろかしければ、太郎八甚六肝を消、人殺し同前の罪科になるべきかと、女房にはかられて請取の證文してわたしけるとなり、證文にて相さばく事なれば、地頭不念ともいひがたし、兩人の者たわけたるにてあるべきと、取沙汰致しけるとかや、

○女の不貞は世界の拂物

乍レ恐言上仕候、私儀手島町生田屋鹿右衛門と申者にて御座候、元來梅原町出生の者にて御座候、當時生田屋虎右衛門方へ、九年以前養子聟として銀五貫目持參仕り、名跡相續仕候、しかるに養父虎右衛門七年前より相煩、三年めに相果、同養母その翌年より又病氣づき、去年相果候、其内八歳と五歳とに罷成娘二人出生仕候處に、一兩年此方女房我儘なる事のみ申出し、夫婦いさかひの度ごとには、夫に暇をくれ候得共、離別仕候へば、私儀家を出候より外無二御座一、無念ながら月日を送り候、右持參の銀五貫目も、二人の養父養母永々相煩候に付、乘物醫者六人に藥代十二枚、人參代金五兩二分針立按摩に金三歩、終に相果候て兩人葬禮輿乘物、引導布施弔料金九兩三歩、一周忌第三年七年忌町中長老衆齋非時の入用、布施銀等、四百八十目、古借九百目、高二貫九百九十目、目に見えぬ物入、殘て二貫目にて、上下七人の口過に荒物商ひ仕候得

共、買損共有レ之、唯今にては五貫目の銀子わづか百七八十匁、しろ物二百目あまりの雜物利にては、月々に喰込、中々口過もいたし難く、妻子に盆正月も洗濯物にて 漸外聞をつくろい申す段に罷成、女房に追出され候ては 實父方へも歸りがたく候に付、一日々々暮候へども頻に女房かたより暇をくれ候故、首をも縊り井戸へも身を抛申べくと存じ極め申ながら、いまだ實父實母達者にて 八十前後の齡まで、兄弟七人ひとりもかけず罷有候に、愁を見せ申こと不孝と奉レ存、捨身をしばしおもひとゞまり候、何とぞ御慈悲に御料簡遊され、被二仰付一被レ下候はゞ、ありがたく可レ奉レ存候以上、

月　日　　　　　　生田屋　鹿右衛門判

地頭御披見ありて、かさねて町の者共同道して罷出べき由にて、四五日過て召出され仰られしは、これ程の內證づくの儀に、公儀の料簡を借に及ばざる事なり、鹿右衛門無調法者と見へたれば、町の者共に申付るなり、惣じて養子の金銀持參するは、養父の方に、家屋敷か落著きたる家督を的にして、敷銀持參すると見へたり、養父虎右衛門、外にたくはへたる金銀家職なきゆへに、鹿右衛門五貫目の銀を一切の所帶に打入、不仕合によつて元銀も減少し、不勝手になればとて、女房貞心を守らず我まゝを申す事、世間におほく類ある事なり、一たびは榮一たびは衰ふる事、めづらしからぬうき世のありさまなれば、名跡を繼うへは、家屋敷我物なり、まづ家を賣て借宅すべし、名主五人組、早々家を賣すべしと仰つけられ退出し、二三日過て鹿右衛門思ふや目に賣拂早速借宅して、四貫七百目の銀を持て實父かたに歸り、女に暇の狀を書てつかはしけるに、女房あきれはて、地頭へかけ込、私家屋敷賣候銀を、實父のかたへ持歸り、妻子三人をうち捨置候、夫婦の緣はうすく候とも女子二人は夫のかたへ引取申やうに、仰付られ被レ下候へと願ければ、地頭仰られしは、十年に及び妻子舅姑眷屬養ひたるは、男の作法なればいふに及ばず、算用なしの世間儀なり、たゞし其方が兩親病中の藥代葬禮弔料は、家を質物に入ても仕らねばかなはざる儀也、其外鹿右衛門が聟とならざる前の 古借料迄の取かへをも急に相濟すにおいては、家賣たる銀を取

かへし遣すべし、扨又二人の女子は離別する時、男子は夫、女子は妻の方へつく事古來よりの法なりとて、御取あげなかりければ、女常々不貞心より我儘に身を持そこなひ、諸人にうしろ指さゝれ、水の淺き智恵にて、夫に不禮せし現當のむくひを見よと、取さたせられける、禮は夫婦にはじまると聖語に見へけるとなり、

○菩提の宥免に我を捨る鑓持

乍レ恐言上仕候、拙僧儀は背戸町一念寺の住寺にて御座候、當家中玉川伴左衛門殿鑓持我左衛門と申者頓死仕候由、伴左衛門殿當寺の旦方にて御座候由緒をもつて、此我左衛門を土葬に仕くれ候やうに申來り、夜前葬禮仕候得共傍輩衆二兩人の外、緣類がましき者も見へ申さず、佛前へ棺桶を直し、すでに引導仕りかゝり候得ば、此棺しきりに動き出て、めき〳〵と桶おしくだき、我左衛門入道飛出大音をあげて、死きらざる者を、何の意趣ありて無理に土に埋んとはしたりけるぞと、二王の如く立さはぎ候に付、寺中の坊主共拙僧を始めおどろき、屋敷より見へ候衆も行衛なく歸り申され候所に、寺内の老僧申候は、一たび棺に入たる者は、いけて歸さぬ法にて候へば、たゝき殺してなり共埋め申べしとて、坊主共二三人棒を以てたたきかゝり候へば、此我左衛門竹緣の丸太柱を引はなし、一打に五人十人も打殺し申べき體相におそれて、近づく者一人も御座なく、裏表の門をかため、方丈塔中の扉を閉ぢ、人死のなきやうに靜まりかへり罷有候へども、いつまでかやうに引籠り、諸人參詣の邪魔にて御座候得ば、むかしより法にまかせ、打ころし土葬仕たく候間、手利の力者を被レ下候はゞ可レ忝候以上、

月　日　　　　　　一念寺　住　持　判

地頭聞しめし、棺に入て再び蘇生たる者をば、是非たたき殺すと申事、此方の政道にはあらざる儀なり、さやうに申ならはし候ばかりにて、寺にも人の命を殺害する事、釋迦の敎にもあるべき儀には存ぜず、頓死はかならず二十四時をまたずして、葬送いたす事なし、今此者も親しき者なく、早速葬送せられし故に蘇生したるを、何のとがありて殺すべしとて、かの我左衛門を召よせられ、一たび棺に入て寺へ請取たる上は、いかやう共寺中の捌なれば殺すとても是非なき

一命を、宥免いたさるゝ筈に申渡せしなり、みれば五十にちかきよはひ、さいわゐに法體せし上は發心、逆緣ながら衣を染 佛道に入べきよし仰られければ、我左衞門もかたじけなくもはや大事の髮剃落され、世に申たてもなき身、道心者とまかりなり候時節到來と奉レ存候とて、我入と法名を改め、一生念佛して毛佛の素懷をとげゝるとなり、

〇無理を知て下男が無法

乍レ恐言上仕候、私儀は菊井村又八と申百姓にて御座候、同村松兵衞と申者の田地五段六畝賣申し度よし常々申候故、私買度存じ、兼て直段を付置申候得共、其後返事をも致さず、剩舊冬麥蒔より當夏早苗植つけの分、隣村半九郎につくらせ候、右の返事相待居申す內に、外より申來り候賣田地共をも買損じ、其上用意の下男に給分をかしかゝへ置、只養ひ仕り候故、萬事不勝手に成行候事、ひとへに松兵衞不屆故にて御座候間、松兵衞めし出され私方へあてさく仕り候か、賣渡し候やうに急度被レ仰付一被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　菊井村　又　八　判

地頭仰られしは、田地望みに依て直段をつけ、田主も合點仕り、手つけの銀子をもわたし、證文にてもいたし置ながら、沙汰なしに外へつくらせたらば、松兵衞不屆とも申べきに、直段をつけたるばかりにて、しかと約束せざる儀ならば不念とはいひがたし、しかるを松兵衞ゆへに不勝手になりたるとは、理不盡なる申分なり、此上は相手呼出すに及ばず、其方無體を申すしれものなりとて、大きに無首尾にて這々まかりたちけるが、其夜北里の名主太左衞門同村八助同市藏といふもの狼藉ものを二三人からめて、早朝地頭へ引て申上けるは、衣前我々共作り候田の稻を、此者共いたづらに中刈(ちうがり)に刈捨候あばれものゆへ、召捕まかり出候、盜賊にまがひ御座なく相見へ申候に付、御注進申上候と申す、地頭かの狼藉もの共を引出させ、をのれらは大事の御年貢の地の稻を何として盜刈けるぞ、いづれの支配下の奴原ぞ、まつすぐに申上べしとあれば、かしこまつて申しけるは、私共は菊井村又八がめしつかひの者にて御座候、昨日松兵衞が田地の儀に付御前へまかり出候所に、散々御前の首尾あしきとて立腹仕り、公事にはまけたりとも、元來約束

したる田地の稻なれば、何ものがつくり置くとも、中刈に渏とりてまいれと申つけ候故、我々共主の申付にて御座候へども、道理なき人の田を無法に刈取申事、當惑仕りながら違背はいたしがたく、鎌とぎ立て打たち、とても松兵衞が稻も無理刈に渏からば、いづれの田を刈も道理なき事なれば、先道々の稻より刈捨て通らんと存じ、さては刈申候、盜みとるべき思案にては全く御座なく候と申上る、地頭笑はせ給ひ、をのれらが理窟は聞えたるに似たれども、法立がたしとてすなはち、主人又八に急度御預けなされければ、又八段々難儀して、あやまりたる御詫言を貴僧法印を頼みて御願申上ければ、かの無體に人の稻からせたるかはりに、六反七畝の田地をつくのひの爲、此里の太左衞門八助市藏に、詫ごと仕る一札の上に相渡し御免をかうぶりけるとなり、

○迷ひを照す國津神の惠み

乍レ恐言上仕候、わたくし儀は江戸小網町下野屋七左衞門手代六三郎と申ものにて御座候、此度主人代參として伊勢參宮仕候て、夜前當町津屋勘八と申ものの方に一宿仕候、路錢の外御師へ持參仕る金子十兩懷中仕候所、ひとり旅の儀にて御座候得ば、相宿の者に用心の爲旅功者なるもの丶指南にまかせ、十兩の金子は私ふせり候疊のしたに入置候て、今朝罷立候節失念いたし、四五里も出候て存出し立歸り、右の疊をあげ候て見申候に、右の金子相見え申さず、二三疊あげ候へば、覺候置所は違ひながらこれあり、員數吟味仕候所、十兩のうち三兩不足いたし、七兩これあり候に付、亭主穿鑿仕候得共、元來存せざる事をねだり言いひかけ候やうに立腹仕り、三兩の不足金に取あひ申さず候間、召出され御詮議被レ下候はゞ、難レ有可レ奉レ存候以上、

月　日　　　　下野屋七左衞門手代六三郎判

地頭仰出されしは、亭主もしその金子を盜みとらば、三兩ばかり取て七兩を殘し置べきやうなし、これにはやうすあるべし、亭主まつすぐ申上べしとあるに、夜前京より江戸へ罷下り候獨旅人、これも今朝失念いたしたる物ありとて、道より取に歸りたる者これあり候、これより外に覺へ御座なきよし申上けれ共、これ三兩の不足金の證據になるべきにあらず、行衞もしらざる一夜泊りの旅人、何をもつて申たてがた

く、兎角三兩り不足金は亭主方よりつくのひ申せども申がたきは、根元（こんげん）の高十兩の金といふ證據もなしと、しばし御思案ある所へ、今朝津屋へ忘れたる物取にかへりたる男、又立歸り、此たび江戶へ下り候に付、ある浪人へ合力金七兩つかはすをたのまれ、大事にかけて夜々の泊には疊の下へ入、朝々懷中して出候處、今朝二三里出ておもひ出せば、忘れ置て出たりと立歸り、疊の下をみれば包ながらこれあり嬉しく懷中してよく〳〵見るに、伊勢松木太夫への書付あり、これは不思儀に存じつけて、思案すれば取に歸りたる時、外の包みをそれと取違へたるにまがひなしと存じながら七兩に三兩が增ある事、これよき利なれば、沙汰なくおさむべしとは存ずれ共、まさしく天照太神宮への御初尾金とあるを見ながら、一旦の依怙なりと雖も、日月の御罰いかゞすべしと、一日路を費にして又立歸りたりとて、宿屋に相渡すべしといふを、直に地頭へ同道しきたりけるにて露顯に及び、七兩の金の書付には浪人の名、橫松源太左衛門方への合力金、口上と相違なく取かへて相濟みけるとなり、地頭短慮ならばいかに仰つけらるべきに、穩なるより事なくおさまりぬる國津神、天照正直のひかりあきらかなる世に相生の松風萬々歲、

本朝藤陰比事卷之七終

千尋日本織序

三代の至寶も翰墨に過ず、閑然志を養ふも詩書に過ず、されば秋まさに長き夜雨のうち、昔をおもふ草の庵、呉竹の窓の下に繙ば、うれしくおかしくおそろしくやさしく、哀によろこばしき慰種の數つもりぬるを集て、此全篇となすものは東武の神秀法師なりとぞ、書肆某が序を請に點頭す、

寶永よつの葉月　東洞院滑稽堂團粹書

千尋日本織目錄

(三)地主祭のみだれ拍子　仕かた舞の道行草臥鑓にうらみは條文の錫杖」

(四)草庵に不斷の袖時雨　かぞへんかたなくおそろしさは壺包に籠る執心の大豆の數々」

(五)好色須彌仙遊行　未兵法さは金子にて取し拂子、持たも名斗下部の分限」

(六)都の八百屋木屋町の夢　身を焦木屋町のうらさしき惜きは未開紅の立枯」

(七)舎那王殿の歩行荷姿　聞ばきく程不思議能鹽の堪忍、鱸を釣て見するも儘」

(八)兄弟借用の金輪物狂　廻因果は釣瓶のかけ繩、和田新發意が此頃の面かげ」

卷之三

(一)聞に淚通矢のほとゝぎす　仕込鎗のいなづま、長刀町にて念方岩をくだく働き」

(二)裸身に七八寸の執心　晝れの夢覺るより日本修行懐中道成寺おそろし」

(三)嵯峨は同じ野の露　踏込て無二是非一單股引、髭にしれて取る事ならぬ書出し」

(四)異見仕兼て尾を出す幽靈　思ひの外なる男鍋かつぎ重てふかき孝行の狩人」

(五)打切て亭主劒の舞　迷惑の相伴四人詰、跡はやみになる風前の燈」

(六)照姫が情に乘る鬼鹿毛　權現堂の酒盛、熱湯を呑十人の殿原が夢」

(七)落し穴へ嫁入の諸道具　沙汰なしの相談今更せんぎもならず、あたら新枕歎て叶はぬ醫者ぼん」

(八)旅人も汲事かたき麻邑の水　彌勒茶屋に燒付らるゝ燃杭今宵盜人の終初もの」

卷之四

(一)舟山に布を上る女熊坂　雨夜の疱ふるひ落大事は御寺樣の前が見」

(二)恨の炎木部屋の大入道　箱ながら廻る醫者のくすり鳥新迄似たかへの繼母おしらい」

(三)湯廻は人しらぬ地獄　おもはく違ひのみだれすがた、酒に身を忘るゝ瓦灯の消がた」

(四)祝言は命の請取渡し
男といふ字が六ヶ敷つめびらき、花も紅葉も一七日のあらし」

(五)頼かけて八橋の太刀風
一つ松に古狐を化し旅人骨折て二度びくり」

(六)たゞ一服ですがたの摺替
鳥の埋喰己を嚙嘴、浮名は二度にながれ行河崎屋」

(七)合せたり極樂門の寶印
走るは毎度からの合點、ふだらくじだらくどちらも金がなふてはならぬもの」

(八)戀慕の闇に眞劔の中り
さけて情なき下紐の恨みくり返す柳幽靈」

卷之五

(一)恨あらはるゝ時宗石
遊山舟の踊くずれ奥方の御秘藏猫懸り綱にひかるゝ」

(二)聞ておどろく御嶽の鐘
針一本で棒ほどの因果、めぐりて同じ無間の車」

(三)欲に身を卷く藤の青籠
祈念しても叶はぬは江戸堺町の評判、おそろしき神罰」

(四)大小をぬかせぬ間の文作
芝居の太鼓さながら工夫して置た喧嘩相手の仕かた大でけ」

(五)遊女を抱く手に地藏菩薩
夜泣するより聞出す沈水香枝葉榮る菩提樹のこゑ」

(六)欲心は燒殘る刀
誰目にも双と文字項にあらはるゝ丸屋が只ひとり子」

(七)龍宮へ相十念の紫雲貝
惡魚の口に仕合の甘露、南部油煙のかほり名號」

(八)及ばぬ戀は叶ふが百年め
わづらふ子より母の草臥斷り過て覺へぬ事を問つめらるゝ」

卷之六

(一)終に身を袖香爐の一燒
思ひもれ初て行衞しられぬ戾子の戸の關越かぬるも斷り」

(二)延引ならぬ仲人闇からぬ牛
行當りて迷惑の念比ぶり分別所を帥(すい)はまりの比丘尼

(三)袖の山陰たゝみ團(うちは)の月
宵のうちさ後はまかるゝをも知ず、內證の仕組調ひて先は日出たし」

目錄終

千尋日本織巻之一

(一)忠臣打出の小槌

江戸芝増上寺門前町に、磯島主計といふ浪人此三年已前より借宅して、夫婦居喰に根薬打からし、物いひさえ段々よはり、哀れ昔と寝言のやうにいわるゝを兩隣にも聞あき、火のとりかわしもうとく、足腰こゝろの儘ならねば、一向往生をまつより外なし、おなじ門前に米搗の久五郎とて天性律義なる達者男、雇はるゝ日は未明から行、灯を見ねば仕舞はず、粉米もあらためて渡し、糟ねぶる犬もあらけなくは叩かず、働賃も其まゝ預置て、用々に請取むさとはなしもせず、まして人をそしらず、只勤を大切に出入方にも可愛がられ、見ごものなぶるも腹をたゝず、いか様心の中床敷、不断にこ〳〵笑へば大黒五郎と呼ける、或時かの浪人の住うら屋に用ありて來り、五年ぶりにて此長屋を見るはと物語りし、隣の窓ぶたに切翁の紋てうちんの當たるを見とがめ、何人ぞと尋しに永々の浪人衆なるよし、此あさましき中にも過れて哀を見けるとぞ、久五郎聞、我等しりたる人幡州にありし大

身にて、出頭立並ぶ人なく威勢一國にみちたりき、されば紋はその人とおなじ切菊の花ながら各別なる衰へ、いたわしさよといひけるを、主計の內儀ふしぎやと覗見るに、まさしく以前不慮のことにていとまをとらせたる笹野傳藏なり、此よし主計にも語給へば、さすが床敷くさしのぞけるに、久五郎もうかゞひ見る迚、兩方鼻々しておどろき、是は杉原織部樣か、そちは笹野かといひさし、敷襖をうちかづき、はづかしさもゆかしさも、たがいに淚をとゞめゑず、漸有りてかずへの給ひしは、其いぜん折惡敷異見せし間腹立の餘り勘氣せしなり、則その報なるべし、我若旦那へ再三御異見申上しに御用ひなし、兎角いさめかね御暇を願ひて七年いぜんより如レ此也、今その方が心底をさつし知りたり、うきに寄て勘當をゆるすにあらず、御いとま申上る日より與共此物語をせしぞと、袖に袂をしぼりあへず、久五郎夢の心地にて有がたく覺へ、中々申出す言葉もなく、久々にての目見へを悅び、當分は世間へ沙汰なしの約束にて、大躰知る人のごとく、每日行かもどりに一度づゝはかゝさず音信、與の手づから朝夕のいとなみ、への字なりも間の合事よと思遣るにかなしく、骨にしみておぼえし、いかがしたりけるにや、久五郎一兩日見えざりしかば、わづらふこともやと案じられしに、或夕かた久五郎來り、ひそかに渡すものを見るに、此程絕たる金子五拾兩、是はどうして才覺せしぞ、其方も貧しきに、たとえ借用いさすとも皆迄はと申されけるを、久五郎承り御ふしん御尤、しかし此年月達者に働、賃銀朝夕の外一錢もつゐやさず、預け置て利足重りて如レ此し、國元へ遣すよし先へ斷り請取申たり、御氣遣ひなくおぼしめせ、久々ぶさたの大家へも算用さつぱりと悅せ、相應に物を調へ、いかにしても與の痛敷、當分やとひの小女一人、其うち年季をおく筈に極め、隨分御身大切に、押付御歸參目出度御供可レ仕と、獨いさみて欠廻るにぞ、夫婦の人々悅び泪一間を海なし、何とぞ世に出此恩を報べしと、久五郎が貌を見るたびに淚の雨の止事なし、されば世に橫難といふものうたてく、此六七間表隣に兩替屋七左衞門といふ有、十日ばかりさきの夜塀合の壁に穴ありて掛硯一つ見えず、金銀合て五拾兩餘とられ、何ほどせんぎしても知れず、大分の損金なれば沙汰なしにもならず、御奉行

所へ御願申上る、町内打寄吟昧のうへ申あぐべしと被レ仰付、家内不レ殘あつめて神水をのませ、鐵火を掴するに別て印なし、いかゞすべしと宿老町衆毎日のよりあひにたれか申出しける、岡崎屋の借屋にうさんなる浪人有しが、此ほど俄に身上見なをし竈のけぶりも各別賑なるよし、ひとりふたりいふ程こそあれ、下女も置家ちんも濟すよし、がてんが行ぬと此さた大方それと極りぬ、しかれども町中入札にせんと集て見る、のこらずかの浪人に落たり、此うへはと御前へ出て右の通申上る間、しからば浪人主計召出され御尋有けるに、主計心に思われしは、定て久五郎我等がまづしきを見かねて、右の仕合成べし、金子高もあひたり、何としても才覺成間敷思ひしに違はず、よしよしかれが心ざしに替り、當人に成べしと覺悟をきはめ、いかにも私のしかた面目次第もなきよし、白狀のうへ夜盗に極り、則揚舍におゐて同類御せんぎのよし、久五郎聞きつけ、搗杵を捨て御奉行所へ罷出、右の浪人さやうのものにて是なく、樣子ありて金子五十兩私方より用立申よし、則門前町の者ども召出され、籠より主計も出して引合す、主計久五郎を叱り、無調法者、我等の惡事あらはれ自の罪に沈むを、無用の申分罷立べしとて取合ず、久五郎淚ぐみ其分にてする無實の難に逢給わんや、恐ながら一通り申上る、則浪人は私主人、十ヶ年以前より勘氣を請し所に、此度不思議に對面致しての悦び、殊さら浪々の躰目も當られぬ間、私一人の娘十三に罷成を女見宗林をたのみ、吉原近江の善吉方へ五十兩に賣、則其金子を用だち、才覺の筋はしらせ申さず、然るに折惡敷隣家に夜盗の沙汰ありて、金子高も合たるうへ、主人主計さては私のしわざとさつして、みづから夜盗と名乘申に紛なし、吉原の者ども御せんぎ下さるべしと申上る、依てあふみや善吉をめし出さるゝ、則買取し娘おまつ召つれ申上るに少しも相違なし、上一人より諸役人末々にいたる迄も、久五郎が忠義を感じ、何も淚をもよふされける、扨門前町の者ども無調法の訴訟、急度あふせ付らるべきを御免さるゝ間、町中として金子五十兩辨出し、あふみや方を埒明、久五郎が娘を浪人主計方へわびて遣すべし、次に主計事、自分の白狀に依て右の仕合、志至極にぞんずる、能家人をもたれ浦山敷思召よし仰いだされ、面目かたぐ滿足して打

つれ宿にかへりける、此さた世上にひろく、則播州より歸參申來り、先地一倍の加増目出たく御目見えも相濟ける、大黑五郎が搗杵を以主人を世に打出しける事、誠に忠孝無双の至り有難き時代なりとぞ、

（二）佛法僧は三途の川越

相州佐川に橋有事は、霜月十日より明る三月十日迄也、此日土ばしを引崩して歩行わたりするなり、その河上にわづか成る村あり、米とぼしく病人ある時は藥に用ゆ、名づけて佛法といふ、されはぶつぽうをもちひても叶はぬといひける、いにしへのことにやあるもの夫婦母一人以上みたり住しが、男は河に出て人を渡し、女房は柴かりなんどして朝夕かすかにくらしぬ、或時母も隣家へ行て人氣なし、もとより貧家のしづか成に晝ともいわず鼠のあれ行、數なき器ものを打落し欠損などしてうたてきに、一定の鼠いかにしてか知りけん、かの佛法を二三合大切にたしなみ、紙の袋に入て軒の妻にかけ置しをさまぐねらひ、後には數多來りてまもりしが、一つの古鼠是を見てはしりのもとへ行水にひたり、かの紙袋へ飛つきける、殘る鼠どもいづれもかくのごとくしける間、たちまち袋破て、米二三合はらくと殘らず、ゑたりとも鼠ども、袋迄引て行所へ女房歸り、これはと追打どもかへらず、なげき思ひしうち母もかへり夫も出來る、右の通りかたりければ、母聞て用ず殊更腹立うたがひ、鼠のわざに成べき事ならず、留守を幸と鼠にあふせ、親夫のめをくろふすることよとわめきたて、元來夫もいやしき者なれば、一言のいひわけも聞ばこそ、佛法を辨いだせと打擲す、母くどきて、我大切に煩ふことありとも、是を用ひて壽命たすかるべしと賴母しく思ひしぞや、よしく年寄まづしく何にいのちをおしむべき、さりながら嫁がつねぐ我にそふそふいへどうらみとも思わざりし、此佛法をうしなひ、わづらひてもたすけじとの心ならん、今さらしかる事なかれといゝしかば、男いよくたまりかね、千代もと契し女房無實の事に追され、中々なげくに言葉なく、折ふしの出水を末期ぞと、前なる佐川へ身をなげゝり、海程近き河なみの音のみ、殘る淡ときえし、其後見なれぬ鳥秋の莇穗を運ては鳴きける、扨はかの女房の鳥となつたるよとはしられけり、母も夫も後悔すといへどもかへらず、女房の一周忌にあたる

月日、親ともに髪をそりて墨染の袖とはなり行ける、
夫木集 慈圓 我國は御のりの道のひろければ
鳥もとなふる佛法僧かな
と聞く時は、其鳥もし此たぐひかと思ひあはする物がたり、哀なりしことゞもなり、されば鼠穴を出て外に物を盗み、入ては家を損ず、今君の近臣鼠の如く、君の威をかりて民を貪り、君の傍に有りて害をまぬかる、これ鼠を憂ふるにあらずやと、晏子景公に答しも斷り過て覺べし、

（三）太夫恨の手裏劔

哀とは夕こえて行人も見よ待乳の山と、かくれ家の茂睡が筆のあと、夕日ものこる松かげに、棚なし小舟羽あるかと、かたみにあらそふ浮世人、日本堤の細道を、月にもたどる蔦屋の客、それを松屋の首尾も能、近江屋くるまやめぐり來る、番所の拍子木迎のてうちん、晝夜をわかたぬ繁昌は、三都に過れておびたゞし、中にも越前屋の和國、たか尾、よしのゝ詠めに過れ、外の者には逢ふことかたき石町の其そこに竹平といふ男、かりに逢より此三年、行平以來と宿へもかへらず、つれていんでは物なしと、中居腰元それ〴〵に與さまじたての色狂ひ、付べき藥もないはづなり、ならぬを慕ふうき座主、せめてわこくが盃をと、名ある大臣こゝろざしをつくすに甲斐なし、のちは世間から憎みだて恥をかゝせて慰と、番町筋の御れきれきに谷といふ大臣、かねて思案のめぐらさる、ある日越前屋の門口に年比五十七八の親父、彌兵衛小紋のうそよごれたるに一尺許りのはみ出しを捻くり、うろ〳〵とたゝずむ男ども、何ぞこちに用かと尋しに、我等は幸手のもの、けふ淺草參りせしに、安左衛門といふ所へこれを屆くるやうにと賴れ、いやともいわれず尋申、こゝらにあらば渡したいといふ、それは則爰じや請取てやろと見れば、和國どのとあり、いそぎ太夫に見するに、紙包の中に貨錢一文ゑちせんやわこくどの諸願成就とあり、是はどれからの使じやと問に、たれかぞんせず、行逹に賴まれ無二是非一參りしが、五十年來見ざりしけいせい町を見ることのくちおしやと、かけ出すを漸とゞめ、幸けふは午の日此方のいわいと、金子一角とらすれば大きに腹を立、日用とりではござらぬと投返し出て行を、和國みづか



ら出て、せめて酒をと盃をさす、さすがに太夫の威德、幸手のおやぢしづまり、間のもどすの押るとたらふ酔せてかへしける、その夕べより吉原中此さたありて、ゑちぜんやの和こく日比は人に出てもあわず、盃なんどは思ひも寄ざりし、けふといふ今日仇し野の墓もる親父年來心をかけゝるよし、太夫が欲ふかきを知りて、六道錢の中から拾出しける錢をとらせ、心能さかづきをかわし、後には亂もんたいなく、おやぢかへさの千鳥あし、太夫が肌はよいはだ、此世の思ひで南むあみだと、ころびつ起つかへりしとや、さてさて欲とはいひながら淺間敷ことなりと、此さたばつと聞えてゐられぬ次第也、和國涙にくれ、扨は人のはかりごとに乘けるよ、死てなりともこの意趣かへさでおくべきかと骨にしみ込、其後さらになげかず、折からの夕ぐれひとしほ暑かりければ、中の町生の松本屋といふ茶屋にたちより、これにも螢を待てかとさし入しに、谷〻つ〳〵と笑だし、ほたるよりげに墓もりの思ひは燃るとうけ給はる、もし古錢の御用ならば是へ〳〵と扇をあげ、どつといふて笑ける、和こく聞、扨はかたさまの御しかた、いよ〳〵まぎれなき所と、かりそめに持たる隱し楊枝手裏劒にうちけるが、うらみの矢坪かんじんの眼に打込ぬ、人々あわて立重り、目醫しや本道かけ付うへ下をかへすに、和國すこしもさわがず、御あい手はみづから夜の間に消ん露の身となげぶし、聲もふるはず、だまつてゐられぬことながら、谷もおれき〳〵、遊女を相手にならず、とかく此事當座のけがと兩方へ引わくる竹ひら

も此儘にはおかれず、大夫を根引に松風の跡ざゝんざとまぎれかくれぬ、あまりに興あらんとて鼎をかぶりて身をそこなふと、徒然ぐさの筆のあと遠からずとぞおぼへし、

（四）二張の弓返りは博多

筑紫はかたの露左衛門がゆかり、町人となりて柏屋新七とてあり、有徳の數に入り、商賣の事に付播州に行通ひぬ、新七女房の親里はほどちかき門徒寺寶池軒の主にて子ども四人有、惣領は去る御家中弓組に行しが、室の遊女小むらさきに相馴、その後は年毎に入、其次は又鐵炮ぐみにあり、妹は柏屋が妻なり、末子新二郎則姉が子分にして新七世つぎの約束、年十六御屋敷の名代も勤、よろこぶうちにも新七内儀播州のむらさきが事を聞て明くれうらみくどきしが、此春よりはかたへ請出し、遊び所に隱し置よしいよいよりんき募り、あさゆふ夫婦いさかひ不レ絶、ある朝寢間より此ことい ひ出し、新七は聞ずてにたち出る、女房追かけてとりつくをふりはなつとてあやまつて濡椽より落たり、おりふし懷姙して月かさなり、只さえ身もち大切なるに右の仕合、二言ともいはずおどろきさわいで幾くすりかあたへし、灸針の賴も切て春月妙光となき名のみ殘りぬ、人々なげきかなしむといへども、歸らぬ日數三十五日も過行ぬ、大身躰かくては埒明じとて、則隱し置たる小紫をおさきと呼入後妻とす、養子新二郎に申含、けふより母とい ふべしといへども、新二郎是を用ひず、おさき殿とし給へ、かくし給へとのみいひける、さき心よからずなげきて折々はいとまをのぞみしかば、新七腹立し、すなはち新二郎に屋敷一ヶ所と金子百兩つけて、實父寶池軒へ斷りかへしぬ、ほうちけんこれを請ず、一たん養子につかわす上、無調法あらば如何樣ともその方にてはからひ給へ、少もうらみ申さじ、姉先だちていまだ心ならず御了簡もあるべしとの返事、柏屋方にも仕かゝりて味惡敷、とかく誰かれあつかひて新二郎は漸々實父へかへしぬ、寶池軒つくづく思案し、姉といひ弟といひ、新七しかたかんにんなりがたし、さればとて出家のすべきはさなし、我死て娘が遺恨もはらし得さすべしと、ひそかに自害してみづからむすぶ夢とはなり行ぬ、新二郎兩人の兄に此こと告しらす、そうそう欠つけ初終を聞て齒がみをなし、親

のかたき妹が怨みひとかたならず、今宵柏屋新七方へ押込寸切々にして本望をとぐべし、用意せよとひしめく、惣領三十八次男三十三新二郎十六歳合て百年いきぬほど、三人笑ふて暮がたより柏屋に案内し、戸を開より切て入る、新七かたには中をかため男女泣きさけぶ、兄弟のもの共中戸を蹴破り亂入、殘る隈なく尋ぬれども新七終に見へず、いかりをなし、おのれ何國へ迯たりとも後日の參會ほどあらじと、無ニ是非ニその夜はたちかへる、新七はうらの高塀を越すぐに御奉行所へ右の通訴る、仍て御せんぎの間新七は町内へ御預け、兄弟の者も頭々へ御預け被レ成、しばらく有て惣方召出され、新七無調法の致かたといへども、相對にて濟したるうへは、兎角申つぐべき分なし、又兄弟の者共尤至極ながら、寶池軒は事落着の後自滅したれば其心も知りがたし、殊更新二郎事實父へかへすといへども、新七が讓を得たり、双方無調法あり又其利あり、しかるうへは以後意恨をのこすべからずと明らか成御仕置、有難しと兩方へ立別しが、武士小路より町人町へ行違ふ所に大木戸あり、ここに兄弟三人待ぶせして扣たり、柏屋方々へ御禮等勤何心なく爰に來る時に、三人あらはれ出、意趣は述に不レ及、寶池軒が悴川橋傳左衛門弟半内おなじく新二郎うらみの劒心みよと打より、三つに成行ぬ、三人の者心よしと打笑ひ寶池軒へ立かへり、いさぎよく腹切て親子五人の夢物語、年々生ずる草の露哀成しことどもなり

(五) 文正もどきの廻國三人

武州淺草金龍山淺草寺の觀世音は靈驗あらたにましまし、參詣正朔のかすみをわけ、花にむれたち涼舟の折からは、神鳴門に指よせて風雨を祈り、秋は金龍の松かぜにうそぶき、あさぢが原の虫の音にあこがれ、角田川の暮雪をしたひ、いほ崎瓦の煙繩引もきらず、貴賤老若あゆみをはこび、大和權之助が辻能、猿の籠ぬけ、靈善が笑談義、茶臼ぐすり百萬遍、とり集たる見物の中に、五筆和尚とて色青ざめたる出家、言語ひかすかに聞るが、筆を鼻に入、あるは耳曲池に挾て望事を書出す筆勢、約かにして七字の名目悉いたれり、手足にて書事はさらなり、神妙に練磨したる物かへ、弘法大師また此ごろ日本廻國し給ふよし、これ等も心もとなきものなり、寶永二年の末信州輕井澤のほ

さり、所がらなる雪を催し空　途砥をかけたるがごとく、殊さら冱えわたる夕ぐれに廻國の修行者三人爰にいたる、ひとりは十六許りの少年、殘る二人は二十四五三十二三に見えて、何れも姿うるはしく後へ撫て山伏にもあらず、萬目だちてあやしく、言葉此處の女郎よりも花車に當まいさまをやろかしなのと諷ひしも、此ものどもの事なるべし、萬屋の次郎兵衛方に宿を借、腰かくるよりかの少人を大切にあつかひ、草鞋もぬがせ湯をもらひて豆を洗ひ、安村ざらしの足ふきの露をとり、わらじ摺をかぞへて兩人涙をながし、漸して座敷へともなひ、次の間に畏りて機嫌をうかゞひ、笈を開くを見るに島桐の春慶ぬりに七返めつきの金物、色繪ながしのからくさ　桐菊ぼたんなどをちらし、家中かゞやくばかりえならぬ薫みちては鼻をもぐかとあやしく、白ぬめに紅うらの廣袖を出し着せかえ、宿の女にも給仕をさせず、二人のもの粉に成てくたびれをいとはず、膳のうへをあらため　切火をうちかけ、幾度か毒味をし、とかくがてん行ず、宿から氣を付てうかゞへども了簡に落ず、明日はかの少人いたわる事あるよし、宿中の醫者を吟味して脉を窺せ罷歸れば、金子百疋御見舞の禮とてつかわし、いしやもおどろくばかりの仕合、諸人ふしんをたつる折ふし、所の氏神を詣ね願書を籠けるを、宿老ひそかに披見する、其文にいわく、存任親王天下泰平民安全の爲又は御發心有べき御前行として、此たび忍び／＼日本廻國御順禮思召たゝせ給ひ、尊躰を俗塵にまじゑ給ふ者也、いそぎ此處の小神末社の靈主御旅宿を守護し奉るべしと有り、與迄は讀にも不レ及、此ぶんにて置奉らば後日の難義恐ありとて、宿中さわぎたち、極樂寺といふ庵地此ほど普請有りて　まだ新壁成所へ、かの人々を入奉り、晝夜御馳走人入替り樣々に饗應、御用とあれば調ずといふことなく、所の代官とて御見舞に來れども大平にあしらひ、數ならぬ順禮御たづねに不レ及といひて取合ず、かく五三日も過ぎて、近日御たちのよし披露すれば、所の者共名殘を惜み、笈を隱して大塔の宮を熊野にて留奉りし如く、扨兩人のもの宿老を呼、此ほどの御馳走たゞごとならず、御禮申つくしがたし、今は何をか隱し申べき、かの少人はよしある御かたにて渡らせ給ふ、かく此處に御座を居らるゝ事　所の冥加、いづれも天道に

叶給ふ成べし、則上にも御禮の御志にて、在所繁昌衆人愛敬の爲、愛染明王の護摩御執行有べしと仰出され、明後十八日に定り、十九日は此處を御立有べき御機嫌なり、人々肌に付もの何成とも護摩に合せたく思はゞ持參可レ被レ致、諸願成就うたがひ有べからずと申渡しける間、ありがたき御事と、宿々の遊女どもをはじめ我も〳〵と衣類を持かけ、嫁入前の小袖をはこび、未したてぬ絹木綿、あさまがだけより猶たかく、極樂寺に積上ヶ、明十八日の午の刻御祈禱に逢べしとよろこび何も立かへる、其夜あらしのいづちとなく、衣類反物一尺も殘らず、三人の者共菅笠さへもわすれず、よい手廻しの盜とは知れても、何所へうらみのいひぶんもなく、近在隣村あきれ果しも尤の事なりしか、

(六八)藥より利の早い種が島

いにしへ因幡の國に、雨杉武左衛門とてれき〳〵有、家門の立身打續き殊さら一子をもふけ、上下悦のこゑ不レ絶、うらやまぬ者もなかりし、然るにかの一子夜々おびえて煩しく、父母かなしみふかく、諸寺の祈禱諸山のいのり、醫術國中をからして其印なし、武左衛門さしもの武勇たりしが此事に思ひ朽折れ、出仕おこたり默然と引籠り世の中おもしろからず、月にさしむかひ坐しても只一子煩方に心行て部屋のかたを見出したるに、其色赤はげし狐の窓よりのぞく有、扨は此程の病鬼きやつがわざ成べし、いでもの見せんと、たねが島に二つ玉こめて火ぶた切より狐は庭上に落たり、源三位賴政鵺を射、有廣が化鳥をおどろかしゝも今の思ひ成べしと悦び、則吸物にさせて我も喰下々にも喰せける、それより一子の夜泣しづまりぬ、武左衛門今は心もいさみ明日より出仕すべしとて、萬ひきつくろひける折ふし、門に物まふ有りて傍輩吉川伊兵衛、谷口百助御使者のよし、上座へ通し趣を承るに、兩人まづなみだを流す、心もとなく思ふ所に、文箱より一紙を出し、無二是非一仕合せとて讀上る、其方此間私用を構へ出仕不參の事、其上付とゞけ無レ之夜中に鐵炮を放つ段、右の二ヶ條御腹立もつての外なり、仍て切腹被二仰付一、御使扨々迷惑仕ると打しほるゝも尤なり、武左衛門つゝしみ承り、一言可二申上一分なし、一子相煩に付て、これに迷ひて前後をうしなひ、畜生におかされ口惜さのあまり、鐵炮を發

し本望をとげたれども、無念の至り運命是まで也、いさぎよく切腹可レ仕しばらく御待可レ給とて、勝手に入妻へも此旨語聞せ、一子千太郎をいだき上げて此世の名殘を惜みける、奥がたは夢の心地にて泣まどひ、局腰もと末々にいたる迄いかに成行御事ぞと、皆一同にこゑをおします、武左衛門涙を押へ、なげきて叶ぬ仕合、跡のこと萬事賴置なり、名殘千代ふるともつきじと身を淸め、書院を開かせ座をかため、兩使へ禮義ことおわりすでに切腹とみゑし、隣家敷は物頭樋口代兵衛、庭に出て月を詠けるが、男女のこゑ打まじえて泣事おびたゞし、不思儀やとはじめより堺塀にのぼり、木隱よりこれを見居たりしが、此時たまりかねて飛下り書院にかけあがり、しばらくとゞめ、様子を聞代兵衛申けるは、何共がてんまいらず、我等御用に付御前へ出初夜過て宿へ罷歸る所に、此沙汰嘗て不レ承、大身の武左衛門殿切腹と被二仰付一は、御せんぎ隨分ありての上成べし、それに少しもさたをうけ給わらぬは心もとなし、某一先家老衆迄様子をうかゞふべし、もし無調法に罷成ば一所に切腹いたすまでよと申ける、兩人の使者此よしを聞いかにも代兵衛殿の御念御尤なり、然らば明日にも御うかがひ被レ成べし、我々は罷歸るといふを、代兵衛膝を直し、これ伊兵衛百助其方達の心底をさつするに、此御使は僞なるべし、いかにといふに切腹せよとの大切なる御使に來り、其儀落着なきにおめ〳〵と歸らんとは心得ず、元來此事上に沙汰なし、兩人の衆武左衛門に意趣ありて此仕合と見る、此代兵衛が眼は違ふまじとつめかくれば、伊兵衛百助ひらりと庭へ飛下り、こん〳〵くわい〳〵と鳴てうせにける、代兵衛拳を握りもらしぬる事の口惜や、扨もあやうき次第、武左衛門武運長久盡る期有べからずと悦ぶ、武左衛門とかふ一言なく切腹と見へしを漸とゞめ、不所存の有様私の恥に身を捨公の御用を闕事やあるとの異見に寄り、武左衛門妻子打寄て夢のみ見たる有様なり、かの殺されし狐の類うらみを殘せし故成べし、

千尋日本織卷之一終

千尋日本織卷之二

(一)關所手形に無二相違一主人

江戸本町二町目井筒屋といふ呉服屋の手代、郡内に島を調へ糸綿もそれ〴〵に役目極り、傍輩三人朝霧拂ふ袖の露、玉川や遠の礁にならす也、はやさらしける手作の布、それもなふてはかなはぬと、商賣がらに氣を付て、炭つけ馬のほこりなを、白き物にはいとはるゝ、糸ならなくに日野うどん、府中のそば切さらさらと、しやんと辛味の氣をつけよ、一夜も旅の人心、早ふ泊るが手廻しと、八王子の中町に能宿とつて水風呂有、明日は山道わらぢを打、駒木根の手形はと蔦にぬけめのないもの共、支度揃ふて火繩の火、たばこの道具玉薬猥出ても氣づかひなく、山路にかゝりて程もなく、はや駒木根の關所に着き通り手形を指出す、時に番所の衆中目を見合、ばら〴〵ととり廻し、三人ともに戒る、手代共肝をつぶし、いかやうのことありてか樣にはなさるゝ、さら〴〵覺なしといふ、番の衆中、いかにも樣子をしらすべし、其方共の主人とて先達て來れり、それ〴〵と呼出すを見れば、主人ならびに傍輩一兩人立付股引かひ〴〵敷、對面するより白眼つけ、御番所へ御禮申引たてゝ旅宿へ行、三人の者さりとてはがてん行ず、委細をうけ給りたしといふ、主人聞、其方ども此たび見世の金子をとり欠落する天命のかれずしてとらへられ、それでも覺へがないかとはぢしめ、まづ〳〵取し金子をあらためよと、財布腰付うばひとり、數を合せて請取、明日江戸へ召連急度せんぎすべしとて、宿の柱にしばりつけ、奥の間に入休ける、三人の者ども面を合、扨々口惜次第かんにんなりがたし、旅がけの商事誰とても迷惑ながら、眼がねにていひつけらるゝうへ、無二是非一毎年の道中難儀ならずや、然るに此度の無實、さだめて跡にて惡樣にいふものありての事成べし、さればとて此姿にて江戸まで引るゝ事生たる甲斐あるべからず、何とぞ此繩をのがれ奥の間へかけ込、一人も不レ殘さし殺し、其後ともかくも成べきなりと、三人心を合せ、たがひに口にて繩を喰切、さあ心やすし、しかれども刄ものをとり上られたればせんかたなし、いかゞすべしとせんぎの内一人思ひつき、我等のしばられし繩にて一々戒め脇指をばいとり、心の儘にはからふ

べし、是よい處に氣をつけしと右の繩を尋に、あるひは藤の蔓あるはひ蘂すべなんど有り、ふしぎやと見れば夜はほの〴〵と明渡り、いまだ江戸より七八里にたらぬ日野といふ原に、三人ながらたゝずみたり、あきれ果て目を見合せ、扨は狐にばかされしや、此ぶんにては郡内に行事も不レ叶、しほ〳〵と打つれて江戸へかへり、主人へ段々物語しける、亭主聞、狐のわざ左樣のとも有べし、しかし人を化し金子をとりたる類をきかず、何ともがてんまいらずと、則手代どもの請人に斷り給金に引直し、旅かけ商 金銀請取の方へは無用ときびしく召遣ひける、無念千萬ながら是非もなきことゞもなり、いにしへ天竺冠者といふものあり、樣々の獸をつかひ、異形にばけさせ、其身馬に乘りて雲中をかけり、人を迷す術を行ひ、金銀をとりけるよし古今著聞に見へたり、

(二)落て思當りし死の占

曆の中段に、紙帳は秋冬ともに勝手次第たるべし、少片すみを揭て風を入れば、思ふやうにふくるゝとあり、又生絹紋紗の蚊帳純子縮緬のどん帳も、寢入ては替る夢なし、はやふ起たがとかく藥と、茶のみ一人二人が中に我等此程不慮のことに合たりといふ、心もとなし いか成事ぞと尋しに、されば先日東山に遊ぶ事ありし白鬚の開帳も過て、髮そりの跡さびしく、眞葛がはらも靜なるに 聲高に人音聞ゆ、何事ぞと立寄見るに 一方はすくやかなる侍二人、又かたへは十六七少年、ひらき初たる花よりも猶うるはしきが、刀にそり打てつめひらく、お供と覺しきは五十計の男、病人と見へて 足もと不定にありながら、嚙をなし拳を握て扣へたり、かの若衆聲をかけ、いかに山上平藏年來付ねらふ甲斐ありて 今日の對面、大願成就の時至れり、それがしは其方に打れし櫻井治太夫が悴 同名主膳なり、逃さじと打てかゝる、平藏、心得たりやさしきもの有樣、親と一所に此刀にかゝれと打合す、双方助太刀一人づゝ四人亂て切合しが、勇の者二人手しげく切まくるに、一人は若輩一人は病人也、稍ともすれば請太刀になりけるが、無念と打太刀はづるゝより、左の肩さきふかくと打込れ、たぢ〳〵と足ながれ、刀を杖つき踏とゞまり、やれ主膳妻手の水溝弓手の木の根に心を付よ、後には同名玄蕃有、孝行の劔のかげ諸天應護の勢ひ有、賴母敷〳〵と心ばかりはい

さめども大事の手なれば働ゑず、大兵二人が打太刀に少人あやうく見へしかば、後日の難義それ迄と扱合せ助太刀して平藏を打ふせ、殘る一人は逃のびたり、我等も三ヶ所深手を負、少人にとゞめをさゝせ、あせ押ぬぐひ扨夢はさめたり、有べきとかと語りける、友是を聞、其方人をたらすと思ふべし、それは正しき凶事也、近々喧嘩のおそれあらん、其氣ざす所なり、魏の文帝周宣にとひたまわく、屋上の瓦落て鴛となると夢見たり、吉凶如何、周宣答て、宮中俄に死するとあらん、帝の給はく、汝を試んと僞たるなり實事にあらずとの給ふ、周宣、いやとよ夢は唯心なり、言語に出すをもつて占ふ、違ふ事有べからずとの給ひし、果して宮中喧嘩出來、宮人餘多死たるよし事文に見へたり、

(三)地主祭のみだれ拍子

京中へ地主の櫻は胡蝶とちりて後、今一きわの見物は卯月九日の練物拍子方、手を替て娘小子息の丹前しほらしく、心まかせの遊び祭、此日八坂三年坂五條筋の大物日おやま内儀の分もなく、亭主は新部屋に臥て前後を知ず、座敷から手を打ても返事なく、女郎は三味せんを枕に御開帳をしらず、客も舌の根不自由になつて襖障子をうちかへし、燗鍋座中に白浪をたて取肴は猫が心の儘に思ひ出をするやう埒なく、いづかたとてもおなじさわぎの中に、裏座敷より安井を見おろす藤丸やといふ茶屋、優れて大一座田舍ものなる由、はじめから直段をせんぎし、膳部の品を好み、酒はのみ次第と約束かため、盃出すより花車に一角はずみ、娘が出れば只はかへさず、男女呼出し細銀をとらせ、亭主は氣がつまる是で出すなと二角打かけ、近年の大臣以上六人、どれが旦那やら知れず、奴酒の後におどりぐの藝づくし、いづれも一こぶしづゝは仕てのき、女郎衆助六の道行かたり給へ、しかた舞 是はしよ望とあげ卷になる男、おやまだちの小袖かし給へと支度する、持自慢の女郎おとらじととり出す、花車もこゝらをりきみ、娘が花見小袖の大ふりそで、御客の肌をふれさせましたいと漸舌を廻し、命にもかへぬ勝手の鎰を祭文の錫杖にかし、亭主の物好、はら筋なる噺しを獨しやべり出すを、無理に勝手へ入て休ませ、振藥のせわする娘 花車より先に餠をかき、下々に得たりと此隙に茶碗酒自身につぶ

れ、六人のおやま呑たおれて尾頭をしらず、家内一人も人心地有ものなく、鬼毒酒にいばら鬼が舞たるも此通り成べし、夜もいたく更て亭主餘所より歸りけるが、端の戸も開き臺所に燈火消、座敷靜過て心元なく、花車をしかりてはたくさと埋火を尋、その光に見れば家中取亂して埒なく、棒を振廻してかたばしから起し、客を改座敷を見るに、おやまども脚布斗りにて淺瓜を轉がごとく、內證は長持を明て小袖簞笥に塵も殘らず、亭主亂氣のごとく花車十方を失ひ、女郎どもゝあきれて顏を見合するに、一筆野良作鬚へマムシ入道を書たり、此中にて笑はれもせず、にがり切て扨々笑止千萬、何も御用心〳〵、

（四）草庵に不斷の袖時雨

下總の本庄といふ所は、隱逸の人道心比丘尼なんどの餘多住處なり、六時不斷の鉦の音いさ殊勝に聞る中にも、勤おこたらず朝に鉢をひらき、夕べに戶ざすより行かふ人もなく、出るともまれなる道心有、いやしからぬ生つきながら、鼻落て念佛のこゑもそれと知るゝおかしさなりし、或時そのほとりに隱ましますす智識の許に參りてさんげしけるは、我俗にて御座候時は、小身の武家に勤侍りし、主人の娘過れて美敷く、十五歲のころよりいたわる事侍りて緣にもつけず、兩親いとおしみふかくもてなし給ふ、我勤といひながらすこし所緣なるものなれば、內外ゆるされ行通ふに、かの娘いつとなくわれらに心をよせ、埋火の下にこがるゝなどほこりかに聞へ、文を袂に投入なんどせしかど、當時主人とあふぐうへ人めのほどおそろしく、よそごとに打まぎらかし過しぬ、とかく月日かさなり病氣重く、くすりのわざも叶ず祈しるしもなくて、おしきは十七の秋の霜と消うせぬ、たらちねのなげき中に言葉もつゞかず、戀したふよそ人はともに死んとのみなげきあへり、漸人々をいさめ、野邊の送りも明日と定り、今宵ばかりの名殘だに物いひかはすことなく、たれかれとつどひしも皆泣寢入に夜も更ぬ、されば我思ひの切なるも、此度ぞと猶も死人の一間に入て　あくるを待てまもりいたりしが、さすが此世の別、又あるまじき面影のせめてかわれるを見て思ひ切ばやと、うす衣を引のけてうかゞふに、顏かたち世に美しく生る時にかわらず、所々の温りいまだ有りて、いよ〳〵思ひを增りて、此時わりな

き一念おこり、むなしき人に肌をふれて世にも稀成契りをぞむすびし、我ながらあさましくはづかしき有様なり、明れば野邊に送り、秋夕妙月と聞ておどろく無名のみ殘り、人々の歎きも我一人の心に忘もやらず、ふらり〳〵と病出せしが、死人の肌をふれて息冷の氣を請ける故にや、惣身崩鼻落て見苦敷なり行ぬ、今は是までよ、なき人のためあさましかりける煩惱の罪をもまぬかればやと、道心いたし侍ふとて涙袖行玉なして漸に語ぬ、上人聞給ひ、不便の事どもや一念ひるがへせば道遠きにあらず、殊更懺悔神妙なりとて衣の袖をしぼり給ふ、道心又申けるは、かの娘死てよりこのかた夜毎に來り、諸共に念佛して明ればすがた見へずと申、上人さもあるべし、これを見せずして品を尋ね數をとへとて、折ふし菓子に出ける煎大豆を十五粒給ひけり、悦び庵にかへり、其夜又かの女來りていはく、上人より大豆十五りうをもらひ來り我等にたづね給はんとや、つれなき御事にこそ候へ、人にもらさせ給ふは御心もかわりけるやと恨くどきけるを、漸まぎらかし明して、上人へ參り右の通り申上る、此たびは何やらん紙に包て給ひしを、次の夜かの女に尋しかば何やらん得こそしりまいらせぬとてうせにける、それより幽靈來ることなかりしとぞ有がたき御事也、

（五）好色須彌山遊行

藤市が魂は一生十露盤の二十五間に遊び、さる寺の大和尙は小判をかぞへて百八をわすれ、いづれも死て迷途にいたり、勘略城に入て今一人おそしと待は誰ぞ、新町御池を下る所に靑順といふもの　分限にして、金をもふける工夫の外　浮世の樂初物の味をしらず、或日一條の草堂邊を通りし所に、四十餘の禪門立むかひ、汝好色不通の人間生るかひなし、我跡に付て來るべし、面白き見物させんといふ、心ならずもその跡にしたがふに、道すがら語ていわく、登徒子が好色の賦、魏の文帝繁欽にあたへし書にも、今の妙舞は絳樹に優れたるはなしとほめ給ふ、是艶者の辯落して獸頭べき戀語なり、抑花洛は好色の須彌山にして、四州に遊樂の所を備たり、先東は三條の大橋を右りへ遊行して、忍ぶ繩手の晝夜をわかたず色狂に扣上ればまず、太皷矢藏の拍子に乘りて手替の踊出し、祇園町のざわつき藪の下裏徹の峠を降りに、茶店の小娘見知

りて呼かくるも悪からず、楊弓半弓の中隣にしからるゝをしらず、仇口きゝちらし高臺寺前のはな、八坂さか中餘所目めさるななる顔つきと、籭あほつは颯颯の、人待風の賑過て、轉ながてんじや三年坂、左は清水はるかに見あげ、鼻の先なる鳥邊野も、しらぬが佛と五條筋の鼠鳴に猫共のたらし込れ、浮座主のだんだばしりに、夕貌の宿の軒端をあらし、松原通の河原か、右に宮川町雨石垣を見渡せば、遊谷地を帯び煙霞泉石分明にして、眞に妙に絶たり、西は田の畷浮から氣もなく、駕籠の夢助魂は先だつて四つ門の斷るなど、曙はいふべきにもあらず、來よ還るよ五月闇と嵐雪が諷しも前後忘じ候や、さもあらんかし待暮は、出口の藤屋に濡つゝぞ花のと並居、夫よかれよと指ざされ、まねかれ行人足を定かね、日ぐらしの門は爰かと問しももつともなり、堂筋を奥までの練供養、後目遣の踊場へすたる幾千といふ數をしらず、日がらかさのさし績は、紅葉の橋を君ぐゝるかと綾なり、見物の人勢をうしなひ、しほたるゝは濡の根元大湊なればなるべし、手を打て蒸籠の山に樹神し、酒泉漲り舟して渡るばかり、太夫來臨あれば天職空に舞、鹿戀は花の雪吹とふる末社どもは、文さくに恥をわすれ、揚屋の輕白やり手が追從は無理酒の數かさなり、手足の舞をしらず、太皷女郎引舟が輦して諸客床入の門にいたらしめ、有がたくも太夫さまの黄金の肌をふるゝ事、大かたならぬ樂ぞかし、夏の大臣妹嬉を揚詰にし、般の旦那妲己をかわゆがられしも是には過じとおぼへ侍る、金銀瓦石のごとく、此處につかこと、金臺白色の西兌澤のかね同氣相求る所以也、されば寶を此淵に身躰も投込、朝に異見の聞、夕にしからるゝとも用ゆべからずと書にも見へたれ、然を四十にして無理死をすゝめ、名酒美食を不レ好、大箸成世の中に未來の借屋を約束し、見もせぬ所帶を經んことを願はせ、多の人を迷はすると、一休も氣の毒がり給ひし、又西行法師かりの一座をおしむ君と、太夫江口をくどきて約束の日は卸せ、白雲が駕籠に乘りて行給ふ西とは今の廓なり、北は名護屋山三が浮名にたちし七本松の色茶屋たえず、落葉かくてふ籠の賑、二十五日の夜とさらに、貴賤の色人ぬさとりあへず、馬場の木の間の重きたわぶれ、其晝は數萬の山寶言葉に花うゐろうをかづけ、朝鮮扇の四季を嫌ず、雨に

も揷頭油引ひかぬたばこの割貫、妻は葉卷に思羽の、見世なびく習ひのけぶりと呼たて、小結び大むすび親子の角力見るも苦敷聞くに、丹藏が島原記編笠うたひ耄ぐすり、雲病の妙藥喜悅丸、一粒金丹を卒婆河と平野の社へ裸參り、八九間空に雨ふる柳屋が軒端長暖簾のみそかに、誰を待やらくるみ綿の和か物、裏珍敷紅の裙へり見せかけゝる、是もかりなる邯鄲男、二十五廻りの肘枕一睡の夢見るぞかし、南方は無垢の木綿すがた、初午桃の花のさかりを心がけ、鍵屋玉屋と稻荷殿をひけらかし、頻に鳥井の色をあらそひ、梟松桂の連理とたはぶれ、狐亂酒の葷に醉ては野の宮の秋と諷ひ、通天の紅葉をへし折三聖寺の仁王を動し、荒行まゝに法成寺の露路笠も骨ばなれし、猶末の撞木町の歸駕籠の足音まぎれに廻り〳〵てあの僧に逢たてまつるも鉢扣、爰は三條が釜の座の賑、けぶりとのぼり雲と消たかの禪門を見うしなひしが、それより色道に入けるとぞ、ありがたきことどもなり、

(六)都の八百屋木屋町の夢

都の町の木戸毎に人集りて見るもの有、一昨夜鼻紙袋落申候、おもては白鼠の七々子裏はおなじ色の金入、いなづまに梅のもやう、銀のかなもの、中に金子三兩二分銀二十許り蠟丸二つ鉛の香箱入、茶屋の羽書堂屋が質札五六通これらはおしみ申さず、松原七枚ほどに、心をこめたる女ぶみ一通なふてかなはず、御拾ひなされし御方はこれ斗御返し可レ被レ下、所は宮川町にて㋑如レ此の目印ある茶屋、つかわされ下され候はゞ忝きよし、たれか拾たりとてやるべき、押付行着和人成べしと笑ひて傍を見るに、白狐通の占萬人にひとりも違ずとあり、何をしてか人をたぶらかす、鳩の貝めと思ひしに横手を打て違ぬ有り、ふや町押小路さがる所に唐島屋德十郎といふ男、かの白狐通が宿に行一占賴むよし、通見るより曰、御自分は女房のことにつき御出と見ゆるがいかにといふ、德十郎肝をつぶしぬ、しばらく考て本卦天雷無妄なり、六爻へんじ澤雷隨となり、互卦風山漸となる、いづれも躰を剋し緣組なりがたし、押て夫婦になり給ふならば家ほろび兩人の命有べからず、かならず無用にし給ふべしといふ、德十郎氣味悪敷禮いふて、そうそう立歸り女のもとに行、うらなひのやうすを語り、身

躰の一日も續ぬほども、跡へも先へも行ぬはと溜息をつくばかり、おんな鬪力をおとし給ふな、幸のことは久世とやらんに富をもると聞から、漸に銀三匁拵ました、一に當れば五十兩とるといの、わざ〳〵とし て行給へ、まあ此髮はとなでつける、德十郎すこし胸の明たる心地し、いかにも五十兩あればどふもなる、心いわゐし待ていやと とつかわと久世に行に、はや方々の札ども集りて三千五百枚有よし、押付はじめるといふうちに金元寄銀を集め欠落したるといふ程こそあれ、寄の者ども二千人ばかり思ひ〳〵に亂入、鍋の釜の戸障子のと引はづし、持佛壘のたぐひ はたらき次第にとつて行、殘る者どもこらへず、壁をこぼち礫をうち、扱ふものをとらへて五人三人立かゝり、大盜人めと踏つけ半死半生のもの多し、德十郎うろうろとせしが、人違ひにてさん〳〵のめに合、蝙蝠羽織も行方しらず、いまは身に着たものばかり、それも所々引さかれ 片息に成て漸のがれ、生たるかひはなけれども、誰をひとに相手もなし、無二是非一夜に入たちかへり、松原どをり建仁寺町女の元に行、待うけてこれを見、五十兩は思ひも寄ず、立居さへ心のまゝならず、面を合せて泣ばかり、女もこれ迄と思ひ切り、德十郎を肩にかけ、日頃出合し木屋町四條下る裏座敷に遊よしにて名殘を惜み、けふまでも苦勞にし給はんとかくせしが、此身もたゞならずもはや四月になりぬ、それをも是をもしらぬ親たち、緣につける約束極しと今朝聞ておどろき、せめてはけふの首尾をと待しもいたづらになりし、こりやどふした因果ぞ、とても花咲春あらじ、ふたり死んと泣しづむ、德十郎漸心をとりなをし、かねてよりいひかわせし如く、未來にて心やすく契るべし、うれしき人の志と泣つくどけばしのゝめも、はや日の匂ひほど近し、なむあみだ佛とふたりのころ刄の下に消行て、おしきは娘十九の春、未開紅の盛なるをとおしまぬ人もなかりし、

（七）舍那王殿の步行荷姿

紀州若山の邊に、木綿わた賣の長藏といふ有、屋敷方の門札なしに出入ゆるされ、商賣に高利をとらず、よろづ律義にして人も憎からず、年五十餘にて女房ももたず、魚喰道心者なみにくらしぬ、或時綿荷をもち細道を行にむかふより雲彤野兵衞といふ侍、家來少少めしつれ行ちがふとて、刀の鞘かの長藏がわた荷

に當りしを、野兵衛虫ばやなる男にてしたゝかにしかりける、長藏見かへり、細道と申、ことさら重荷持のこゝに候へば、御免なるべしとて行過る、野兵衛腹を立、詫言ならば荷をおろし畏て申べきに、やりばなしのしかた慮外千萬、爰へうせぬかと惡口する、長藏すこしもさわがず、御侍それは人狂へといふものじや、しかし用があらばこちへおじやれ、おなじくならば無言で行き給へと、にこ〳〵と笑ふ、野兵衛堪忍ならずと、二尺三寸五分打捨のためし者と手をかけしに、鍔もとすこしもくつろがず、むねんと齒がしみをなせども拔けず、供の者共心得たりと刀に手をかけたるばかり埒明ず、野兵衛せいて刀のさやながらうたんとするに、立處をすこしも動かれず、汗をながし拳を握るばかりせんかたなし、長藏打笑、はじめよりおき給へといへども腹をたて、待せて是はどうするぞ、此方は閑敷間行なり それにゆるりとゐ給へと、荷をかづき行むとする、野兵衛こゑをかけて、おのれ迯行かやらぬといふても動れぬ處へ、侍一人通りかゝり此躰を見、初の樣子はぞんぜねども、御侍御かんにんなされつかわさるべし、又長藏とやらんも見知たる男なり、其方もしづまるべし、人も見とがむれば氣の毒なり、下拙あつかひ申といふ、野兵衛聞、近比忝仕合、貴人に逢侍のかやうに耻をかき生たるかひなし、御志は過分ながら御ゆるし下さるべし、やい長藏爰うせぬかと血眼になりあせれどもせんかたなし、扨侍重て申やう、腹立もつともにぞんずる、しかし長藏ことを御ぞんじなき故、國中かくれなき男、かりそめにも非道をせず、神變ふしぎの者なり、すこしも耻に罷成申まじ、只御勘忍なされしかるべしと申ける、野兵衛も能折しほと思ひ、とも角も御了簡のうへはとしづまる、長藏もよろこび、たがひに遺恨なしと立別るゝに、何も身躰心のまゝなり、此ときに野兵衛いよいよおそろしく、あつかひし侍と打連物語を聞ける、かの長藏行くれて野に一宿するに風雨の難なく、獣を使ひて人のごとく、河水のうへをもはしり、たばこのけぶりに神鳴をとばせ、鼻息に龍蛇を吹出し、其身を隱せば方寸の間に入、手をのべて日月を握り星を撫よせ、空をまねけば饅頭をふらせ、地をうがてば提重あらわれ、見んと思へば前巾着から富士山筑波やまを出し、鼠に乗りて大こく殿を供につれ、世界にあ

らゆること心にまかせずといふことなし、さりながら身を奢事ならず、欲ふかきことをせず、非道に人をいためぬれば、立處に我身を引さかるゝよし、神變ふしぎの者、それ故國中にゆるしてかれが氣をそむかず、ひそかに聞しは、神立木礪磁の油五穀肯此三色を具として、神呪あまた有て術を行ふ由虎の卷に有とぞ、これは舍那王殿大天狗より傳受の書なりし、魏の曹公客を得し時、珍物そろひし中に呉江の鱸ばかりなかりしを無念に思ひ給ふよし、左慈といふもの銅のたらいに水を入、釣棹を拵へたちまち一つの鱸をつり出す、呉江のすゞきにまぎれなし、人々奇特の見物をしけるよし、列仙傳後漢書等に見えたり、

（八）兄弟借用の金輪物狂

寶永のはじめ、八坂の邊りに櫻木屋與次兵衞とて、小間ものなど商賣して有ける、その弟は出家にて惠順といふ、又關東より傳春といふ弟子兄弟のぼり學文しておける、萬事與次兵衞方を頼み、金銀も預けおき入用に請とり親類のごとく心易せしに、傳春かり初の病出し、段々おもり起臥も心のまゝならず、醫者あれ是替てもかわる事なく、此世のたのみすくなくおぼへしかば、無用の諸道具衣類もあらかた賣て、心の儘に養生せんと思ひしに、右の金子與次兵衞方より思ふ樣に復さず、人をたのみ度々斷遣しけれども埒明ねば、せんかたなく、日用の肩にかゝり、漸與次兵衞かたに來り、金子高八兩二分三匁五分の內一分一貫五百文、米味噌その外むねざん用して二十目許、しめて五十二三匁ならでは請取申さず、此たびの事なれば少々はとり替ても給るべきに、さりとは迷惑いたすとくれぐ\なげき斷りける、與次兵衞聞、尤さやうに思ひ給はんが、しかし惠順のかたへさん用有よし、此度の江戶下りに金子七兩二分遣す間、殘りとても少々のことなりといふ、傳春おどろき、曾ておぼへこれなし、惠順をよび給へ、面談にせんぎいたすべしと申ける、與次兵衞、いやとよ內證のわけはしらず、算用は濟てさし引なし、殊さら惠順江戶へ下りたれば聞事もならず、やがてのぼるべし、その時面談し給へと塵も灰もつかぬいひぶん、さては惠じゆんが留主を幸に金子を返す間敷心根しれたり、さればとて今病ほうけ一紙半錢のたくはえなし、死るはがてんの病氣ながら、あまりむごき仕かたなり、おのれ思ひ

しらするやうありとて、涙のうちに與次兵衛を白眼(にらみ)つけ、井のもとへ歩むと見えし、縄にとりつきすつとんとその音ばかりぞ殘りける、與次兵衛もおどろき、たれかれ寄てとり揚けれども、長病の上なれば灸針のわざも不レ叶、水を汲とて不慮の仕合と世間むきその通りに濟て、無縁塚のあわれとは成行ぬ、與次兵衛心の鬼にて井の元をかへ改め、手の内の鉢を出し、茶とうを運びて申は、其方死病を引請て金子を遣ひ捨こと無用なり、末々とぶらふために殘し置給へと巽見せしものなり、金ほしくば今にてもやるべし、されどむなしき跡なれば無二是非一、折ふしはとぶらひ申べしうらみを殘し給ふなと、茶碗のうちを見たりしに、傳春坊が怒れる顔ありありと白眼つくる、これはと投すて女房を見れば、顔ざしそのまゝ傳春なり、はつと思ひうつぶくに猶疊に見え、空より頭へかみつくばかりにやるせなくもだへ狂ひて、忽亂心となりける、女房もてあつかひ、江戸へ狀を下し弟坊主を呼びよする、惠順急ぎのぼり此樣子を聞、先々祈禱をすべしと、井のもとにて水をかゝり、湯衣を着ながらけけらけらと笑出し、歯にかねをふくみ、皃に白粉をぬり、らうそくに火をともし頭にたて、うつゝなやうつの山の、夢うつゝともわかざるうき世に、今さらさこそくやしかるらめ、さてこりよ思ひしれと、兄の與次兵衛を金輪あしらいの打擲、與次兵衛も飛起、三十番太郎爰にありと、兄弟終日つかみあひ、狂ひ死にあさましき有さまなりし、その女房比丘尼して粟田口に住みはべるよし、

千尋日本織卷之二終

千尋日本織卷之三

（一）聞に涙通矢の郭公

卯の花の夕ぐれを定めかね、山ほとゝぎすのとやおそしと、五條の橋筋を人多くはしり行、何ごとかと聞耳に矢ごゑすさまじく、あわや天下は此人の矢先にと近年のとりざた、扨こそと急ぎたち越見物せしに、射手は藤本左門とかや、年比二十八九に見えて爪はづれやさしく、幡安仁が若衆ざかりもいかな〳〵、むかし今の男にくらべて似たるものなく、大美男の分しり、しら綾の鉢卷して白く淸らかなる肌一皮、したに紅葉を包しさますこしたよわく見えながら、矢續ばやの手だれ、ゐ出すよりあだ矢は稀にて見物をおどろかし、明がたまでに四千二百筋、たしかに金の麾と見えてくたびれたる氣色なく、五つに六千の印をいだし、貴賤ごよみをなして八つ迄はかゝらじ、射たりや〳〵と天地もひゞくばかり、物ごとも聞ぬうちにしれぬは人のいのち、力粥を一口すゝりけるが、胸に當りやれ藥よといふうちに息たえ、惣身冷わたる、針灸の術もとゞかず、二十九さいを一期と身よりの人々は矢聲にかわるうれひの涙、見物の萬人色をうしなひ、東山もかたむき涅槃もこれほどにはあらじ、その中に五十あまりの侍、山伏を一人ともなひ、初より矢行を難じ、通ればしらぬ㒵にて餘所見をし、それ矢にこゑをかけ、法印情をいだせと齒がみをなしゝが、左門死たるを聞、横手をうち千秋樂と扇を揚、かの山伏をあふぎたて〳〵、諸願成就めでたしとうちつれてかへりける、扨々惡いやつかな、萬人こぞつて哀をもよほす中に只今の有樣、さだめて遺恨有もの成べしと口々にそしりて、おのがさま〳〵立別、あとは矢かずのこゑたへて、おかせの音のみ淋しく成行ける、かの侍は長刀町といふ所に、澁川源之右衞門といふ浪人なるが、左門に衆道の恨ありて、山伏を賴み命をとりたるよし、大腰ぬけのさた京中にひろくその隱なし、或日源之右衞門が門口に鉢を乞比丘尼ふたり、しやくじやうの音かすかにたゝずみしを、源之右衞門見かへりもせず、やりたいにも手がおじやらぬ、門口はかすべし、勝手によくば晩迄も居めされといわせもはてず、二人の比丘尼その方は手なきものと兼てしりたり、藤本左門が大願をねたみ、さらば仕

かたも有べきを、山伏に呪咀させて又なき花をちらすと、さぶらひのしかたか、元來人とは思わねども、餘り無念はれやらず此姿となり來るなり、左門殿と夫婦のかため人こそしらね神は御ぞんじ、かたき約束ながら此たびの大願成就の後にこそと、いまだ枕もかわさぬ中を、さりとわざうよく成るしかた、夫のかたきなればのがさぬと、錫杖の仕込鑓雨方よりつきかけ、手廻しいなづまのごとく、二筋づゝ四筋にてとめ、藤本左門が女房つねめのとさち、敵をうつて手向る由かねて認し一紙を門口に張付、去て御所へかけ込、勤おこたらぬ發心をとげける、無二比類一心中語りつたへて今最中、

（二）裸身に七八寸の執心

久仙が股の白きに迷ひ、一角仙が美女に落されし類すくなからず、誠に簪の音を聞てだにその志を動すとの金言、僧俗及生としいけるもの、ゐんよくの道にのみかたぶき易く身をほろぼしぬ、國家をうしなふためし數ふるにいとまあらず、貧しくてぬすみ戀慕にしづみて腰折のもじつゞきになやみぬ、近比みやこ岡崎に、塗師や九郎助とかや云ておかしき好（すき）の男あり、一日に三十首の歌を讀よしたまきのはしたなき言葉もまじへて、おのれが心の行まゝに三十字一二もじあまりてたらぬも、その姿にてひとりなぐさむことわざとなしける間、人名づけてくろぬしとよぶ、祇園の梶を小野の小かじといふも、思ひあわせてなつかしく、黒谷門前にしれる道心あるを尋て、九郎塗師が物語など閑侍し、その隣に念故坊といふ道心有、比しも水無月の半過れてあつかりければ、障子明はなち日よけにして、その身越中ばかりになり、たれ見るべくもあらねば、庵一ぱいにひろがりふしける、折からつねに來りもの洗ひなどせし女、用ありて尋しが、念故坊がふしたるあり樣を見るに、肌あらはしてあふのけに足を踏そらし、下帶しどけなく引やられてうるわしくすぐやかに、わけもなき畫ねすがたを彼女見るに恥しく、これやとおどろかさんも遠慮ありて、貌うちあかめ口に手あてゝうちまもりしが、とかくするわざなくてたち歸りしが、ふりかへり〳〵心をこめけるを、となりから見ゐたるおかしさ笑われもせず過せしが、あまり見ぐるしきありさまなれば、おこさばやと立寄ところに、一尺ばかりなる蛇有

りて、念故ぼうが越中のなかにて、もや〳〵とまどひておそろしかりければ、しばらくひかへて見るに念故ぼうすこしうめき出、手をのべて人を懷くごとくせしが、もだへて精をもらしぬ、此時おどろかし起すに我もめをさまして、あさましき夢を見事かは、いかにつねに來り通ふ女わりなく、くどきかたらふ間、色色いなみなだむるにとゞまらず、無躰にふところに入、とかくせしほどに、おぼえず心みだるゝと見て夢さめたりとて、なみだをおとしぬ、淨念ぼう聞さも有るべし、ねすがた見ぐるしかりし折ふし、かの女の來りしが、心をこめてやかへりけん、一つの蛇肌をまとひし樣子くわしうみたり、おそろしき女の一念やと、世をのがるゝ心ざしいよ〳〵ふかく、樹下石上にも三宿すべからずと打つれ、それよりもとまりさだめぬ道に出ける、

(三)嵯峨土器はおなじ野の露

西の京永德院に泉龍坊といふ有、內外をまかなひよろづ約にして、寺主の心をたすけ、お大黑はいざしらず、此僧白鼠の名をとり、其身奢らず生つき靜にしてめしつかふ者をもふびんがりし中にも、ぞうりとり七之丞、十六歲の氣量いひたつるほどにはあらねど、しかりても腹をたてぬに思ひつき、殊更寺院のものたらぬにまかせ、泉龍坊夜々は三布ぶとんの半座をわけて、木綿夜着のなじみをかさねける、七之丞親は嵯峨にありて、土器細工の小廻りなる身躰、又しては七之丞をせがみ、物前の御見舞めいわくながら、泉龍心をつけてとかく年月を送りぬ、あるとしの暮ちかく、かのおやぢ來り七之丞を呼出し、其方久々御寺に預置といへども、別て切米をとるともなく折ふしの心づけに逢てかへるもめいわくなれば、江戶棚持し方へ賴み奉公につかわす、十五年のすへためもよろしく、當分金子一兩二分請取はづ成、御寺樣へ此通り可二申入一ため來ると云、七之丞おどろき、此こと泉龍に語る、坊肝をつぶし、今苦勞して勤るもそのほうを人にして見ばやと思ふゆへなり、一夜もはなしてやらるべきか、何とぞ了簡有べし、先々おやぢをかへすべしとて出合、遠方大義にぞんずる、しかし院主留主にて殊更歸りもしりがたし、二三日中に參らるべし、七之丞物語にて樣子も聞置きたりといふ、おやぢ聞、しからは一兩日中に參るべし、御とりなし賴むよ

し申置てさがへかへる、七之丞涙にくれ、しばらく別れ申だにかなしうおぼへさふらふに、はる〴〵の江戸へ下らんこと中々思ひもよらず、おやぢせひと申さば死るがてん、此世の名殘もほどなしとてひれふしける、泉龍十方にくれ袖して七がなみだを留、たとへ火の中水の底成とも、その方獨りいなすべきか、能名案出したり、すこしも氣づかひすべからずと、下男久助ひそかにまねき、そのほうかねてよりのぞみしふる脇ざしは、何ほどにうるべきや、久助五匁五分にまけ申候へ共、ゐ買申ずといふ、泉龍聞、されば我等のたのむことあり、それをかなへば成程買てとらすべし、又單股引それもやすき事なり、たのまるべきやといふ、久助それは誠でござりますか、なに成ともあふせつけられいといふ、泉龍悦び、何にやらさゝやきしに、久助思案貞にてしばらく返事せず、泉龍そば切包丁とり直し、さあいやか、大切のこといわせがてんせずば是じやがとつめかくる、久助さわがず、いやとも申ばこそ、なるほどのみ込ましたといふ、泉龍打わらひ、扨は心安し、かならず賴むと言葉をかため、おやぢおそしと待ゐたり、これをばしらず七之丞おやぢ來り、此ほど申上候通り御隙下され候やうにと申ける、泉龍いかにももつとものことながら、いまだ若輩もの遠國へはふびんのことなり、金子調てらち明ことならばと、院主申付金子二分わたされたり、殘る壹兩は五三日中に參らるべしとのことなり、いかゞ其方の首尾はと申ける、おやぢはじめより此がてん、思ふ所に當りながら、何とも先様返替も氣の毒ながら、久々の御世話殊更かやうになされ下さるゝうへは、殘る一兩の違ひさへなくば、よろしく埒明可レ申といふ、泉龍悦び七之丞も笑しゐ出て、茶の酒のと馳走するほどに、日もくれ〴〵に成、おいとま申立かへる、泉龍見送り首尾よしと、久助を呼出し約束は今なり、隨分めはしをきかせよとさゝやく、久助御氣遣なされなと、尻からげして鼻捻をさし、跡に續てうかゞひ行、おやぢは金子二分してやり、酒はたらふく呑たり、小うた機嫌に足もとみだれ、ふらりしやらりと廣さわのほとり近くなる所に、うしろより肩をおさへ腰骨折よとしたゝかに蹴られ、何の手もなくあふのけにたをれぬ、久助ゐたりと拍子に乘り、むねの當りを五六十つゞけさまに踏つけ、はなねぢりにて眉間

をくわせ、六十餘のおやぢ酒過てたわいなきをあら男の大ぢから、あせ水流して打擲せし間、ころだに立ず絆切たり、鼻息に心をつけ、吭をひしぎ羣をふみ、例の金子をさがし、着物までははぎとつていたゞきいたゞきかへりける、折ふし極月二十五日の夜、くらさは暗し野中のこと、たれしる人もあらばこそ、久助心のまゝに仕舞寺にかへり、泉龍に悦せ、をのれも德つきよろこびて、さあらぬ躰にもてなしける、明ければ嵯峨野に死人あり、憎に追はぎのわざと見えて丸裸にしたる由、所のものども立合せんぎすれども何の手がゝりもなく、無二是非一さたにならんとせしが、天命のがれぬ、即死人のかたはらに反古のやう成ものの有、改見るに木綿一丈五尺代四匁五分、永德院樣内久助殿と有、これより惡事顯れ久助御奉行へ召出され、御せん議のうへ泉龍坊に賴まれしだん白狀す、則泉龍もめし出され、兩人一所に嵯峨野に梟木にかゝり、世の見せしめと成行きける、人を殺せる惡逆いかでのがるべき、淺間敷者どもの身の果類ひすくなきことゞもなり、

(四)異見しかねて尾を出す幽靈

近江なる筑摩の祭とくせなん、つれなき人の鍋の數見ん、此神の神事其所の女房、夫にしたがひしかずほどなべをかづき、拍子(はやし)ものにつきて御輿の供をするなり、歲六十にあまる老女も只一つかづき、未だ二十たらぬ女の三つ四つ被くもありて、其數をいつわれば立所に神のとがめを請るとぞ、おそろしくはづかしき祭なりき、それにはあらで、或侍編笠を二かい重て被き、山野を廻るあやしのおどけ者と見るに、瓜田を過ず李下に休ず、ものいふこともなく、身をおさめ人をよけて其性靜なり、不思議はれやらず、立よりてこれを尋るに、先なみだをながし、我心願有て如レ此し、せめて物語り申さん、去夏殊更暑氣はなはだしかりし日、我親母をともなひ河邊にあそび、水くさのいさぎよきに心をうつし、暮かゝる比はたる猶なつかしく詠居たりしに、たちまちはゝ二人に成りて、なすことといふこと少も違す、父これをあらため見るに、それとしることを得ず、正しく狐狸のわざ成べしと、すこし心惡きかたを拔打してこれを見るに、實の母をあやまつて殺す、無念やと今ひとりを打に一つの狸となりて飛さる、父刀をふりのがさじと追かくるに、

暗き夜なれば終に見うしなひ、無二是非一たちかへり、母が死骸を納宿に引籠り、悲悼の餘り其夜人しれず切腹す、我兩親を狸にとられ、無念骨髓に通り、山野に出て目にさへぎれば、深谷河水の中ともいわず、狸をうち殺こと數十疋、されどもそれといふことをしらず、いまだ本望をとげず、兩親の敵を打迄と笠を重ねかづきたるはとて落涙し、それより立わかれ、猶々のすへに行所に、風氣味わるく心たゆみ、耳に太鼓のごろ〳〵とがつてん行ず、見廻せばゑんしよう嗅き火もえたつ、さればこそとうかゞふに、一村すゝきの邊に父母の幽靈忽然とあらわれ、その方は浦浪助六か、則父の助九郎母諸ともに此すがたを見よと、なみだを流す、助六おどろき、さてあさましき御有樣、とても此世は此とほり、御夫婦一所に極樂へと朝夕弔ひまいらするに、それもかなわで迷ひ給ふか、南無阿みだぶつと手を合す、ふたりのゆふれい口をそろへ、いや〳〵念佛で埒あかず、汝われらがためぞと思ひ違てあまたの狸を殺すこと、一だんもつともながら其罪かへつて我々が身にうけ、晝夜の苦患ひまなし、けふよりふつ〳〵殺生をとまりつゝ、その後われらが跡をとぶらふべし、此こと つげしらせんためにあらはれたり、かまへて〳〵つゝしむべし、助六聞てこれはあふせともおぼへず、兩親さやうにまよひ給ふも狸のわざによりてなり、子としてかたきをうたで人倫のまじはり成べきや、中々おもひとまるまじ、母のゆふれいの給ふは、正五九月はいつとても、御酒奉り氏神へ、そなたのぶじをいのりしぞ、いとしさかわゆさ今とても、むかしにかわることなきに、言葉をかへすはなにごとぞ、是非ともおもひとまるべし、助六又申は、たとへならくの底迄も、ふたり手に手をとり行給へ、敵をとらずしては侍の分立ず、子孫面目をうしなふによつて、すこしも御意を用ず、おいとま申とたたんとする、親父の幽靈立かゝり、ふびんあまりかくいふぞ、汝さやうに身を勞しかけ廻りなば、今の間に智惠も氣量も身躰も皆あわ雪と消行ん、勘當するがとまらぬか、助六頭をふり、中々ぞんじもよらぬといふ、此時幽靈なみだをながし、扨は力なし、いまは何をか包むべき、我々は御兩親を化したる狸なり、あまたの親族殺さるゝ故、殘るともがらいかりをなし、我等二疋を責さいなむ、なにとぞ君の殺生を、たばかり

とゞめ申さんと、さま〴〵申にそのかひなし、逃んとすれど所なしと、幽靈たちまち尾を出しひれふしぬ、助六おどり上りよろこび、さも有べし、諸天の惠み念力の太刀、只今思ひしるべしと、寸々に打切て大望滿ぞくしたりとぞ、

(五)打切て亭主劔の舞

物のあやめも見ぬあたりの、小家がちなる軒のつまに咲かゝりたる花の名といふ所、一字あまりて合のあわぬのと藝古場に弟子三人、松山武兵衛 岡崎助之進 玉江主馬 師匠森木勘助、それよかれよと指南のうちに、ともし火に丁子がしらの大に見えければ、主馬いそぎかゝげ入て、あるじの御仕合 御吉相見ゆると申されしを、松山武兵衛聞もあへず、扨々主馬殿は貴人じみたる御しかた、なんでう武士などの さやうにわらべらしき事あるべき、かさねては御用捨有べし、外の者見ねばこそあれ、下男めき給ふ御事とにがにが敷あざける、主馬聞、御異見先以忝し、しかし貴人じみたるよし口惜くおぼえ候、此事いにしへより承つたへ候、樊噲陸賈にとふていわく、帝王人君世に出るに奇瑞有りや、陸賈こたへて、其人俄に目まぢすれば酒食を得、灯火に花咲ば錢財いたる、烏鳴ば行人かへる、蜘蛛あつまれば喜來る、小事猶かくのごとし、況んや帝王人君は天下の寶、奇瑞などかなからんと西京雜記に見えたり、よつて師匠をいわい申たり、御侍の御一言 以後は御つゝしみ有べしと、いわせもはてず、いやさ此武兵衛そこつは申さず、殊さら御若衆の物よろこび、下心もおかしく候、仕合よくば貴人になり給んや、いつそましかと打わらふ、もはやかんにんならず、いで〳〵おのれが首とつて もとでにせんと、拔打に眉間をかすりて打つくる、武兵衛も心得たりとぬき合せ、たがいに數ヶ所ふか手を負、刺違てぞふしたりける、傍輩の助之進師匠勘介見物していたりしが、勘介がいわく、すけのしんどのさぞ〳〵不慮の仕合、さりながら申てもかへらず、いかゞおぼしめす、此ぶんにては兩人殘りてぶんたゝず、御自分とわれら同心なしといへどものがれぬ所なり、貴殿傍輩の果すを見ては立のかれじ、我等も眼前に弟子を殺す、刺違て死より外の了簡なし、御ふしやうながらと詰かくる、助之進おどろき、あひてあつて兩人死たるうへは、ふかせんぎいらざるものとかけ出るを、勘介

立かゝり、腰ぬけめいづくへ行と大袈裟に打はなし、扨惣方の宿々へ此事つげしらせ、心しづかに腹切て、無二是非一次第と聞及びぬ、後世つゝしむべきは一言なりとぞ、

(十八)照姫が情に乗たり鬼鹿毛

世に小栗の判官兼氏物語の草紙ありて、そのおこり知がたし、たま〳〵見及まゝ書うつし侍る、應永卅年癸卯の春の比より、常陸の住人小栗孫五郎平の滿重といふもの謀叛を起し、かまくらの下知を背ける間、將軍源の持氏公、御退治あるべしとて御動座なされ、結城まで御出まし〳〵、同八月二日より小栗の城をせめらるゝ、小栗かねてより しろの外へ軍兵を出しふせぎたゝかふ、かまくら勢に一色左近の將監 木戸内匠助 先手の大將として、吉見伊與守上杉四郎あら手にかわり、雨方より攻ければ終に小ぐりのしろ落たり、大將孫五郎滿重行方しれず落うせ、後には忍びて三州に住けるよし、其子小ぐり小次郎はひそかに關東に忍び居たりしが、三州へ立かへるとて、相州權現堂といふ所にいたり、遊女照姫にあひなれ、その名殘をおしみしばらく逗留す、宿のあるじ 近國の盜人の大將たりしが、折ふし同類多く入來る、幸とよろこび打寄相談する、此ほどの客は常州浪人にて福者のよし、隨身の財寶有るべし打殺さらんといふ、何れも目出度とよろこぶ、しかし家人あまたなり、いかゞすべしといふ、一人思案して 酒に毒を入呑せて殺すべし、此義しかるべしと相談堅め、小栗をちそうの躰にもてなし、近き宿々の遊女をあつめ、今樣を謡はせ酒をすゝめ踊たわぶれ舞遊ぶ、小栗元よりてるひめをともなひ、家人のこらずさゞめきわたり、誠に興有酒宴なり、てるひめ座敷をたつとありしが、漸有て立かへる顏色かわりて身をふるふ、小ぐり心得ずいかにととふ、てるひめあたりをはゞかり、「わすれても汲やしつらんたび人の、といひさしあらためいだせる銚子のかたへ眼をかよわす、小栗心はやく毒酒にかへたることをさとり、てるひめと兩人呑とはすれどもこれを呑ず、かりそめに出る躰にて後の林に入る、てるひめその心をしりて來りぬ、小ぐりがいわく御なさけにてあやうき所をのがれたり、いざや諸とも落行んといふ、てるひめ聞、そのこと有べからず、ふたり座敷に見えずば、落たりとしりて追かけ申べし、

われらはさあらぬ良にたちかへるべし、此林の奧に馬有、大名馬なるを海道にて盜しがあら馬にて乘る人なし、よつてつなぎ捨たり、それに乘給ひはや〳〵落させ給ふべしといふ、小栗淚をながし、君の情はいつの世にわするべき、かまへて大切に忍び給へと、手をとつてなく〳〵別、おしへし馬に打乘鞭に鐙をあわせて、片時に藤澤の道場に入、上人をたのみ奉る、上人憐れみ給ひ、時衆二人つけて三州へ送り給ふ、扨てるひめはことなき良にて座にかへりて見るに、のこらず醉臥たり、我もおなじく醉たる躰にて打ふしぬ、盜人ども時はよしと入來り、小栗を尋に見えず、無㆓是非㆒家人遊女以上二十人ばかり、いづれも河水へながし入、財寶をばひとり、其夜にぬす人ども分散す、てるひめ一人死ざりければ、河下よりのがれ上り二たび生たる有様なり、其後永享年中に小栗小二郎三州より來り、盜人を尋求のこらず誅伐し、てるひめをともなひ立かへりけるよし、小栗が子孫代々三州に居住したりとぞ、鎌倉大草子に見えたり、

（七）落穴へ嫁入の諸道具

波屋が餅は人心かなど、大和屋高竹が文作せしも誠一時の花の都、男は文七島のすゝ竹に小格子うしろ高の頭つき、丸まげ引出して預かるものゝ如く、我首ながら心まゝにはふり廻されず、中よりしたの風俗かくのごとし、女は宇源治染の八たびがへし、燈灯ほどの紋所懇するほどの數をもらさず、八つも七つもつけてねるから起るまで、外の心がけみぢんもなく、親が死でも子をおろしてもなんとも思わず、所躰持て三十日をこらへず、それより晝はねて、夕暮より夫を供につれてどこへ行やらしらず、嚙つき犬のある所をおぼへ、石の枕も馴てはおもしろいと、何やらわけのしれぬものとなり行ぬ、ある日さみだれ若葉をうがち、ほとゝぎす人のはらわたをくだき、まだふらふかといふ聲魂をとらかすかと、被(かつぎ)のうちゆかしく、松の雫も我からかさに請し男は、三條高倉邊花崎宇庵といふ醫者の家來、下がゝりの手だれ揚屋の彌四郎といふ者也、術をつくしてねらひ寄女は、さる御所かたの艶もの、物めづらなる内甲を見すかされ、手くだ茶屋に入て被をとり降參の一義をすまし、餅でんがくの肌と〳〵に、其串してかため印いのちをかけ、一人の下女にも相應の思ひ出させて口をかため、彌

四郎かたへの通路ひきもきらず、ひたすら宿這入のそうだん枕をわらす、折ふし主人の局に御町どのとて部屋子の有を緣づけたきとの心がけ、ほう〴〵へたのまるゝを幸と、かの彌四郎を肝入の人とていで入させ、どうぞ分別をといふ時思案して宿にかへり、旦那宇庵へ此事聞せける、元來宇庵もんさく第一の男にて、弟子三伯を子分にし嫁にとるくめん、彌四郎のみ込女の方へ申ふくめ、ずいぶん大醫のよし、先居屋敷十八間口裏行後町へぬけて兩面家土藏三つ、人數は大旦那若旦那女五人家老、さぶらい三人小ぼうず二人、六尺四人下男ふたり、每日やとひの出入二人づゝ、上下二十人ばかり、又四條御旅の前に十間口の家有、其外かし銀の利そく一月に八貫目の餘入、置所は土藏のねだ落て家中金臭く胸がわるいと、めつたに結構づくしを書立て遣す、もとより女中の寄合、かの女ぼう身に引うけて切て廻りける間、すら〳〵とすみて、世間へ沙汰なし內證づゝと堅め、六入の祝儀ひそかに引越も日に立ぬやうにと、夜から長持を運び、諸道具合て三十二荷に遣銀一ヶ月三匁づゝ、手箱の實とて金子二百兩相渡し、卯月十一日に見ごとなる嫁入、なにが御所そだちの花やかなる姿すこしもいひぶんなく、ことし十六歲、あまり仕合過て弟子ぼん冥加のほどもおそろし、扨彌四郎とかの女夫婦の取組此次にいひ出し、後見がてら所躰をもつがてんの所に、右の宇庵借金買がへり、一日ぐらしもけぶり絕々にて、弟子坊付髮して夜はざうりをとり、彌四郎只一人飯たき水くみ、上下三人餲々の仕合成に、此ことと首尾して夢のやうにおぼへ、五三日は前後をしらぬ間に、ほう〴〵へ賴、預置し諸道具不レ殘賣拂、手箱の二百匁〆五百兩許腰につけ、宇庵は夜にまぎれて逹の身ぬけ何方へやしらず、嫁は里がへりよりもどらず、彌四郎も大にはまり、かの女も主人の前不首尾になり、迷惑にも逢べきやうすなれば、彌四郎と一所にともかくもと尋るに行方しれず、弟子三伯ひとりうろ〳〵と殘りしを、借かたのものども亂入、殘諸道具手々に提行き、三伯も丸裸にされて跡先をしらず、無二是非一今は盲が目と、となりあわせにくわんおんきやうを覺へしは、せめての事なりし、

（八）旅人も汲ことかたき廁島の水

月やあらぬ春やむかしの面かげ迚は、傳九郎鬟のも

みあげ殘り、友善が紫竹杖もから尻馬に打折、雨に時
雨にぬれすごし、あさぢが宿なし同斷になりて、せん
かたなく 京都に少のしるべあるを心がけ、日やり夜
やりに行々て、駿州あべ川の見ろく茶屋にいたりぬ、
しばらく休みて鞠子へ一里半、明いうちにゆかるべ
しやと餅つく姥に尋ねしに、此ほどは用心惡敷 殊更
雨氣づきたれば、はやうとまりて明日いそぎ給へ、島
といふ名所を過 通には情なしとかたる、そのしまと
はいづくぞ、道は何ほどあるかと問ふ、姥わらひて御
存じなきことは有まじ、東海道第一の色町、それはそ
れはにぎやかなことゝいふ、例の燃杭火のつき安く、
せめて見物し 旅のうさをはらさんと、わらぢぬぎす
て柄(つか)袋引はだも懷におさめ、もとよりから身の道中、
行さきとても當なければ、せかぬ心に大臣をわすれ
ず、あわれむかしの一ふしをと、髮すき曾我を一調子
下げて かのしまに入ぬ、いなかめきたるありさまな
がら、見世のかゝり江戸をうつし、おなじくすへ〴〵
の局もありて、太夫はさんちやにかわらず、横筋に揚
屋二軒あり、それにたりて酒一つおもしろがらせよ
と 今の身をわすれ、伏見屋の岩崎といふ女郎をとり

よせ、見ぬ人の京物語、餘情八百いひつくし、明るも
かへらず、其夜酒に當られ思ひの外に三日も逗留し
ぬ、岩崎もよき大臣と心ざしをつくし、かぶろがごま
の油くさきなげしまだをふりたて、やがて御下りを
待よし、揚屋も見送して立別しが、わづかの路銀一錢
ものこらず、跡へも先へもうごかれぬ仕合、ちとゆる
さしやれと腰をかくれば、所がらくも助の吟味つよ
く、軒下にたゝずませず、人もめを付てきみわるく、
何とぞ思案もあるべしとうか〳〵と行程に、府中よ
り五里東麻畠といふ所に出ぬ、此村の人不レ殘片足ふ
とく、樣子を聞に、外より來りても此所にしばらく住
ば、たちまちあしふとく成よし、仍て聟嫁も餘村より
くれず、流るゝ水を下にて呑ず、麻畠の肥發(こえばち)とてかく
れなしと語る、さては水さへのまれず、乞食をするも
さすが口惜、貧の盗はいにしへよりのおきてと、則そ
れに成て、今宵はじめてのやつしと我ながらおぼつ
かなく、漸人の椽のしたへ這入夜のふくるを待しに、
窓のかたよりばつとあかりさし、目鏡のごとくにつ
らなりたる星、臺所をかなたこなたと廻り、水桶の中
に落入、是はふしぎとのぞきて見るに、大きなる蛇の

頭一つ、眉間尺のめぐるがごとし、ほしかと見しはかれが眼なり、おそろしくぬすみもわきになり、さりとはふしんはれず、かゝる折ふし 主殊の外にうめきいで、しばらくありて足音きこゑ庭に來りて、茶碗が見へぬといふは 慥に水をのむと見へたり、笑止千萬や此水を呑ば毒ありて、かならず死すべし、しらせんにも身ためおそろしゝ、いかゞせんと思案するに、はや汲あげて呑んとする、此時こらへかねて飛出、その水に毒ありかならずのみ給ふなといふ、亭主はおどろき、先おのれは何ものぞ、さだめて盜人なるべし出合さわぐ間、家中おきてとらへたり、かの者申は成程ぬすみ入たるにまがひなし、しかしその水に毒入しを見たるにより、あまりしやうしさこらへがたく、右の仕合なり、改見給へといふ、何をぬかす大ちやく者めと、灯にこれを見れば、水色變りむらさきのごとく人々肝をつぶし、水桶を見るに、一つの蛇の頭ありてくるり／＼とめぐりぬ、ていしゆ横手をうちて、けふ畠に出鋤にてかれを殺す、その首飛んで見えざりし、夜中おかされくるしみ、 夢さめて水呑んと出たるなり、これを呑まばたちまち死すべし、盜人が情にて命をひろひたりと悅び、とかくして夜も明けゝれば、ていしゆかの者にむかひ、かほど心ざしある身の 盜するはいかにと尋られて、かのものかたりけるは、江戸白銀町に小川屋五郎兵衛と申兩替の悴なりし、色狂ひつのり勘當のうきたび、 京都へのぼる處に命もしらぬしあわせ、一夜の慰にと島にたちより 不慮に煩出し、無二是非一次第と淚をながす、亭主哀に思ひ、金子などつかわし念比にして出しぬ、誠に人をすくふ心ざしかへつて身に報ひ、心やすく京都にのぼりて、さんげ物がたりに此こと聞はべりし、

千尋日本織卷之三終

千尋日本織卷之四

(一)舟山に帆を上る女熊坂

甲州東郡邊は繁花の所にて、神社の瑞籬あさ日にかがやき、寺々の夕部のかねしづかにひゞき、出振舞も花洛のごとく諷舞こゑたへず、にぎやか成處なり、一日雨のそぼふる夕つかた、としのほど二十七八の女房、田舍にてはめづらしき生つき、十人並に過れたるが、小女に風呂敷包をもたせ、本堂に雨やどりしてゐたりしが、暮に及寺門をしむる番の男見とがめ、小降のうちに出行給へ、門をしめるはといふ、おんなきゝこれは蔦力へんへ參るものなるが、殊の外にむしをいたみさふろふ、今すこしお慈悲にといふ聲もかすかに成行あいだ、おとこおどろき寺へしらする、同宿小僧、いかゞすべき長老は留主なり、さればとて病人そのまゝにはおかれじ、まづ臺所へ入くすりにてもあたへてこそと、手を引腰を押て座敷へあげ、樣々いたわり、長老近所へ出られしを呼につかわし、夜も更いかゞすべしとせんぎする、長老の給ふは、供の者あれば別して氣遣なし、しかし所を聞人をつかわし、亭主そう〳〵迎に來るべしといひつけ、さて病人心もちはいかゞと尋しに、動くに目舞物中に氣遠く、中々一足もひかれ申まじ、不慮に御苦勞をかけめいわくながら此まゝに御すて置下され候へかし、あゝたまらぬとそりかへる、ともの女子泣出し、もてあつかひしことどもなり、長老も無是非、使のかへるまで小僧ども大切にいたはりとらすべしと、安虫丸を手づからのませ、心おきなく養生いたすべしとて、眠藏に入て休み給ふ、同宿小僧おもひもよらぬ夜とぎ、あちらへころりこちらへころりとうちふして、すでに此夜も明てけり、しかるに門をあらけなくたゝく、扨はむかひのものなるべしと、同宿おきいで戸をひらく、男共二三人臺所へかけ上るを見て、かの女房ひらりと飛おき、眠藏へはしり行、長老の臥給ふ夜着のうちへ無躰に入、長老これはとの給ふ所に、男どもつゞひてかけ込、女房をいましめ長老を引たて、日本一の不屆もの、國中の見せしめ御奉行所へつれ行、長老十方にくれいまだ人心もつき給はず、同宿小僧おどろき、近き旦那衆へ此事しらす、いそぎかけつけ樣子を聞、男中は此女四五日さきより家出をいたす、よつてほ

う／＼尋る處、今朝此寺にて下女を見つけ、則寢所からふたりともにひき出す、旦那衆いひわけがござるか、あらばいふてお見やれ、時もうつるに引たてよとにが／＼敷しだひなり、長老漸く給ふは、その女病人のよし、とも丶一人召つれたればくるしからじ、宿より迎の來るうちと弟子どもをつけおきて休たり、ほかの事は佛相かけてしらず、何とぞ了簡たのむとの給ふ、女をとらへて聞ば、やうすは死るともいわじ、長老樣と一しよに、とまれかくまれなり行んとひれふし、何とやらん下心しりがたく、旦那もあつかひかかりめいわくして、三人の者どもを客殿へ同道して、御腹立至極いたし候、さりながら一寺の疵と申 旦那ども面目をうしなふ、此寺の諸道具賣拂兩人の首代として金子十兩出させ可レ申、利をまげて御かんにんと申ければ、男はらをたち、いよ／＼あほうにめさるるかと立上、それ引たてよとさわぐ間、漸くとり集て金子十五兩にておがみたをしに埒をあけ、扨々若氣とも申されぬお長老のなされかたと、旦那衆にかり切て歸りける、長老は忘然と立給ひしが、何ともいひわけたちがたく、構難にあひ給ひ、無二是非一寺をひらかれける、その後方々に此るゐ出來、ぬす人に沙汰極り、果して召とられ禁獄に合ける、此女は別田といふ所の百姓の娘なりしが、不孝のものにて親の家を出、舟山といふ岩穴有るを家として、心に逢たる男を二三人夫に持、又家來の如く使ひ、其身大力にて、或時は道に出て旅人をたぶらかし、衣類をはぎ取なんどせし程に、此邊を夕方行通人たへ、それならぬ女に行合ても、かれかと肝をつぶしける、東邊の御中居とておそれぬものもなかりし、國風にて人の妻をお中居といふ故なり、終には天の網にかゝり、同類四人おなじうきめにあひけるとぞ、

(二)恨は薪部屋の大入道

西の京に實相院といふ有、三代以前此寺に弟子貳人ありし、鐵道義閑とて何れも氣量秀たりしが、師匠いかゞ思ひ給ひしか、弟の弟子義閑に寺をゆづりける、鐵道是を憤り、背戸の大椋にのぼり、逆樣におち頭をくだきて死たり、扨有べきならねば、義閑坊無二相違一住寺せしが、忽病氣付て寺中の交かなわず、かの鐵道則あらはれ出、物もいわず一向いかりたる躰にて 義閑を白眼て失にけるが、それより折ふし右のごとし、

召つかふ者ども三十日をこらへず、或時新參の男薪部屋に行しに、一人の大入道坐したり、男したゝかものにて、たれなれば爰に居るぞ出ぬかと申ける、法師むく〳〵と立て かの男を蹴たをしてうせぬ、あつといふ聲に人々たち寄、口に水を入、とかくして息をふきいだす、それより無言になりて打臥間、ねん比のかたへ申つかわし、醫者をむかへ藥を乞、いしや豚をかんがへ、立さるとて後を見れば、今指て來りしから笠おのれとひらけ庭のうちを廻りありく、是はふしぎと見るに、くすり箱這て行く漸おさへければ、鼻をとらへて捻付る、たれがしわざといふことをしらず、竹庵たまりかねいとま乞なしに迯出、秦桂宮院の門前に知る人あるをさいわいにかけ込、ため息の下にこれを語る、あるじいかにもかねて聞置しながら、さやうに憶には けふ初てなりとておどろきぬ、しばらく心をしづめて立かへる、門前に人集て見るものあり、何ぞとといひにしいつも來るつばめありしが、雌燕は此ほど死たり、その子どもをのこせしゆへにや、又一つのめつばめをつれ來る、のちのめつばめ何むしかあたへし、子どものこらず死たり、雄燕かなしむ氣色ありてたゝず、めつばめはよろこぶ羽はごありて舞遊ぶ、竹庵けふはいろ〳〵のことを見るものかな、此寺いにしへは蜂岡寺といひける、聖德太子秦の川勝をともなひ 爰に來りたまひ蜂を見る、太子の目には羅漢と見給ふ、よつて一寺を建立してはちおかでらと名づけ給ふ、太子爰に住給ふ、故に桂の宮とも名づけたり、その蜂は羅漢と見へ、今の燕は繼子を殺す、所はおなじ靈地にしてあさましきこと共なり、もろこしの王祥は後母につかへて孝行なり、母つれなくあたるをもうらみず、庭に李樹あり、はじめて實なりしに、母王祥を番につけて晝は雀を追せ、夜は鼠を狩せける、ある夜雨のいたくふりてせんかたなく、木を抱て明るまで泣たりしとかや、和漢ともにかゝるあさましきことはありける、親として慈なく 子として孝なきは、今のつばめにかわることなきもの也、此事晉書に見えたり、

（三）湯廻りは人しらぬ地獄

相州箱根の山に温泉七か所あり、湯本塔の澤堂が島宮の下底倉木賀芦の湯なり、孰もその能ありて 春秋のはんじやう大かたならず、宿をあらそひ幕を引て

込入ぬ、むら雨音すごき夜、宮の下の藥師堂にこもりける折ふし、これも通夜する人と見へて、年比三十ばかり成べし、氣量過れて、菊田ずりの八條にくろ羽ぶたへのおとなしく、腰まわりの道具揃て美々敷、はなし伽と見えて同じ年榮成が、鬢のかつかう聲のかれやう、ワキ師などゝ見たてゝ憎からず、小ぼうず一人中間男肘をはつて畏り、何れもものいはず ひそ〳〵と十二燈をかぞへるのみ也、始めよりおこもれる僧珠數おしもみ、衆病悉除身心安樂とふし拜けるに、かの男そゞろになみだを落しければ、つぎ〳〵の者ども皆袖をぞしぼりける、僧もあわれに思ひて、夜もすがら御物語も申すべし、たがひに心やすくなどゝ言葉をかけしに、かの男なみだ押ぬぐひ、あふせのごとくふしぎの結緣なれば懺悔申べしとこたへける、落涙のありさま またざんげすべしとの一言 心もとなく、御病氣はいかにおわするぞ、湯も相應に御入候やとたづねしに、さればとよ、初の御つとめに病氣をのぞき安樂との文、それにもれたる身のうへなれば、さんげとは申さふらふ、 それがしは江戶吳服町尾川右平次と申ものなり、去年の秋伯父方にて月待せしに、

珍客ありて亭主殊更よろこび、 夜ふくるにしたがひ亂酒に成て、あるじの名代をつとめ、大さかづきの數をしらず、舌の根もたゝざりければ、伯父手を引ておのが部屋に休ませ、物など着せて出けるよし、前後をしらず、それより亭主座敷に出て呑かけ、盃をかづきてふせば、 客はさきほどより大いびきをかきてさんのみだす、勝手にもくたびれ、角々に目をふさぎ、ともし火もおのれと消てやく躰なし、 かゝる折ふし我をすこし押うごかし、踏みぬぎたる夜着を引かけ、肌をあわせてもや〳〵とせしほどに、 目もさめ□□の窓もるひかりに見れば、伯父の內義と添ふしたり、これはとおどろき起出んとせしに、內義いだきとめ、殊のほかなる醉やう 足もともしりがたし、用あらばわれら參るべし、又此うへに酒などまいりてはと はなたず、さりとは了簡におよばず、むねをおさへ氣をしづめて見るに、內義はていしゆかと心得、そのあいしらひすこしも心をおかず、 たばこのむとて其ひかりにわれを見つけ、以ての外におどろき、ふたり見合あきれいたり、われら申は、大酒したるとばかりおぼへて、その後いかゞして爰に來りけるかしらず、此あ

りさま、さだめて人も見とがめ伯父もしり給ふらん、心の外なることとながらいひわけたゝじ、是までなりと自害せんとせしを、內義是非とゞめ、心をしづめてそこつをし給ふべからず、此亂酒たれひとり正氣なる人なし、座敷も勝手も寢入ていまだ音なし、ひそかに出て居給ふべし、少もしるもの有べからず、いま死給ふならば われとあらわす成べし、もし人もしりたる樣子ならば、ともかふもふたり一所に成行なん、やわりなき前世のちぎりにこそといさめて出しぬ、やう〳〵小座敷へ這行て打ふしゝかど、目もあわず心ときめきければ、しのゝめまだきに下々をおこし、客のかへるをあいさつして、ていしゆをやすませ、ふるひ〳〵立かへりし、その後おぢにあひても心の魂にて氣味あしく、めいわく千萬なるに、內義これをすてず、折ふしはなつかしきとのつけとゞけ、いよ〳〵難義して、その折からは酒に醉てぜんごをしらず、執心にて忍申たるにてはゆめ〳〵なしと、いひきかせてもがてんせず、命にかけておもひ給へばこそ、ふしぎ成枕をかわす、此心ざし八百年もわすれじ、こなたはふるき思になりたりと、だん〳〵もち重りしてくるしく、遠ざかれば死なんとうらみ、われらに女房の相談あれば、鬼になるど白眼つけ、とかくもてあつかひ病氣となり、養生のためとて鎌倉に遊び、それより湯治して 去ねんの秋より宿へかへらず、しかるにかの內義の面影朝夕目にさへぎり、夜もすがらくどきてはいかり 一時やすき隙なし、是を申せば伯父に恥をかゝせ其人をうしなふ、 けふ迄は人に語り申さず、一日々々とおとろへ行ほど 遠からぬ最後なれば、御物語いたすとてなみだを落しぬ、僧もうちなきて經經の要文などさづけ、夜すがらいさめて立わかれし、のち〳〵やうすを尋しに、江戶へかへり 終に生靈のために殺されしとかや、

（四）祝言は命の請取渡

下野の國原宿といふ所、此邊武を好みて筋目を正し、藤柄の脇指も心みねばさゝず、身上にしたがひ長道具馬鞍の心がけたのもしく、一命を塵よりかろく言葉とがめのむつかしき所なり、爰に白井九郎助といふ有德の百姓あり、娘兩人ありて、氣量すぐれ身上よろしければ、方々より緣組のそうだんそれかれと選、心をつけて諸道具拵へ、娘も近々の嫁入、今一しほの

色をそへて　霜月十五日吉日なればと、樽肴それ〴〵の祝儀釣臺の數つゞき、言入のよろこび、すでに九郎助家近く、此方にも請取の役人、麻上下の音ふれ聲作りして待かけしに、上梅澤ゐ方より若き男共五人、いづれも白小袖に南無阿みだ佛と筆ぶとに見せかけ、素鑓半弓小長刀、しら木白柄にばさらを付、門前十間ばかり脇にひかへ、　相方覺悟して請取渡いたさるべしと　にがり切て立ならぶ、人々おどろきむざと近よらず、時に聟方の面使はかまの裾をとり上、いづれもりやうじなされなど言葉をかけ、扨舅殿方へ申、これは何ともがてん參らず、大切の使を承る程の拙者、數ならず共、御馳走ならば劔の舞見物つかまつるべし、只今はじめ給へ、　又は御家の嘉例か樣子うけ給りたく候と、兩方へ目をくばるは尤のことなりし、舅方の役人まゆをひそめ、御ふしんの段至極にぞんずる、此方にもがてんまいらずせんぎの間、　先此祝儀御自身御預り下さるべし、これより御案內申べし、私ことは日當十郎兵衛と申者とねん比に申合す、　聟の使立岸與吉委細聞とゞけ、押付御吉左右待入さて、釣臺いたづらにもたせて歸りける、　扨十郎兵衛は五人の者共にむかひ樣子を聞く、其時男一人素鑓をふせ、拙子は藤山庄七と申、先達九郎殿へ御娘子の義申入置處に、一とをりの御返事もなく、　今日言入の御よろこび御ざるよし、何共踏つけてのなされかた、數ならねば一しほ勘忍いたしがたし、御了簡にあづかるべしと、ゐんぎんにねぢかゝるが、思切たる體におどろき、急ぎ九郎助へ此事聞する、九郎助手を打、男の憤りさもあるべし、隨分方々へ付屆せし所に、此方へ失念したるもの成べし、されば迚今さらいかゞ返事もならず、指あたり難義のよし、十郎兵衛分別して、自身出て先今日を延給へと九郎助を伴なひ出、　だん〳〵此方の不調法あやまりいる、御返事明日申入べし、今日と御引給はるやうにと達て斷る、　庄七も無二是非一しからば委細明日承るべしと、いかれる面をやわらげ、式だいしてたちかえる、　其ほどりにかの庄七兄隱居して居たるへ九郎助立越え、ひたすらにたのみ、迷惑仕るとなげきける、　兄庄藏笑止に思ひ、氣づかひなされな、庄七に異見いたすべしと、則庄七に面談し、無用成所存、　ことさら詫言のうへなれば堪忍いたすやうにと申ける、庄七、御意そむきがたくぞんずれども御免下

され、ぞんぶんにいたし度との願ひ、庄藏ぶきげんして、人わびてくるに猶かつに乘る事未練なり、我等たのまれしかひなく、そのほうはぞんねんをはらし、兄に耻をかゝするがてんなれば是非もなしとて、隱居へ歸る、庄七つく〴〵思案するに、兄をそむかじとすれば男中間の交ならず、助太刀の者どもへいひわけも立がたし、切腹するより外なしと、心底のこらず書置して年三十二歲、短氣の劔に夢とは見のこす哀なりし、兄庄藏かき置を見てから〳〵とわらひける、何を書しやしらず、扨九郎助方ゐ祝言御濟なさるべし、弟庄七事いけんいたし留申よし文通せしかば、聟舅よろこび嫁入の首尾殘る所なしと、則禮使を請庄藏も滿足し、弟庄七一七日に當る日、友を集め酒もりして語けるは、庄七若氣にて橫死せり、いづれも能き鏡なり、かの者書置を見るに兄の身として助太刀も打べきを見はなち給ふとかきたり、これ了簡違なり、人手をつかねわびるうへは相手にならず、さだめて迷路にてうらみ申らん、追付對面しよく〳〵異見いたさんとぞんずるはと、機嫌よく物がたりせしが、其夜のうちに腹かき切て朝の霜をまたず、いさぎよきことにこそ聞見し、

(五)賴かけられて八橋の太刀風

三州池鯉鮒と岡崎の間に、名にしおふ八橋あり、海道より十五町ほど、行々てむかしの跡のなつかしさ、心なき身もあわれはそひて、から衣の五もじ折もあへぬに空かきくもり、雨一とをりしてひとりの小女來るが、たづねざるにかたりけるは、あれなる松は內田中の一つ松と申、いにしへ此所は海にて海人のつりするわざありしが、ひとりの海士繼子を惡み、かねて殺さんことをたくみ、ある時入江にはまぐりとるべしとて入たり、腰に籠をつけのこる繩に石をむすびて置たり、何心なくかなたこなたはまぐりふみ廻りける、折ふし汐みち來る間、おどろき礒にかへらんとせしかど、石につなぎ置ければのがるゝことかなわで、つゐにむなしくなり行ぬ、その後ほどなく礒山となり、此松生出たり、かのおさなきものゝ印の木なりとて、一つまつといふ、われは松の精なり、今に小神と成り此處にすむ、其方を賴たきことありたのまるべきやといふ、旅人ふしぎに思ひて、何ごとを賴み給ふや、神のいわく、人を妬むものありて夜な〳〵此松

に釘を打、うたれて我くるしむとはなはだし、かれ今宵又來るべし、殺して得させよ、もし承引なくば、その方立處に思ひしらすやう有と、かつはいかり又はくどきてたのみける間、心得ぬことながら請合てやうすを見るに、神よろこび、われも又あらわれ力をあわすべしとてうせぬ、夜ふけ丑みつと思ふ比、あやしきものたどり來る、ねらひよつてこれを切に、手ごたへしてばた〳〵とするを、飛かゝり引ふせ指とゞめ打、あをのきて見ればいまだ晝の八つ時にはすぎず、殺所のものは一つの狐なり、こはそもいかにとあきれたる處に、初の神來り、君が情にて本望を遂たり、われ今の狐に夫を寢とられたり、何とぞ遺恨をはらさんと思ひしに、今日かたらひ出し、君を化さんとすすめてつかわしたり、此後御身のうへにあやしきことあらば、いつ國にてもつげしらせ奉るべしとて、一つの狐となりて飛さりける、ふしぎ成ことなりき、

(六八)只一服で摺替の姿

石川や　ほたる火にたく釜が淵と、聞くも遠からぬ丹州の府中に、河崎屋の治太夫といふもの、何商賣するともなく分限の數に入、上下十四五人樂々とくらし、年中京に出て東西の遊び、あるひは何國さすともなく五三日づゝの旅がけ、樂人さまと人も浦山敷さたせしが、福田寺開帳の後、夜盗亂入し住寺を殺し、寄金のこらぬ御せんぎつよく、少々うさんなる者どもとらへられ、此筋よりだん〳〵同類しれ、ひとり二人毎日とらるゝ風聞とり〴〵なりしに、かのかわさきや治太夫家來ども、いつの間にか分散し、おのれは國を立のくより　盗人の大將成事あらわれ、御せんぎつよくかゝり方々と詩られけるに、　京海道堅木原にて死たる骸をさがし出す、改見るに毒を呑たると見ゑて惣身色かわり、則是を初として同類共十八人、國ざかいにて梟木にかけらるゝあさましきありさまなりき、しかるに半年許過て非人の頭河崎屋治太夫を召とり罷出る、是はいかにと御せんぎのうへ白狀申ける、いつぞや國を立のく時節、一人の乞食私ゝ姿に少もかわらぬ有し、かねてより情をかけ其と見知るばかりになつけ置、則かの乞食を招、此度京都にて遊ぶうち、遊女に遺恨出來たり、もとよりなんぢ我かたちによく似たる間、我とすりかへ恥をかゝす思案、かまへて仕そんずるなと申ふくめ、衣類をぬぎてとら

せ、懷中道具其外のこらず脇指もさゝせ、仕たての通りはのこらずさらするやくそくしてよろこばせ、さて門出ぞと毒酒をのませしかば、たちまちもがきてむなしくなる、扨は心やすしとかれが姿にかわり、一まづ近江邊に立忍びしが、もはや時分よしとぞんじ京に出てさたを聞ば、ぬす人の大將治太夫御法度に逢けるよし承るあいだ、よもや人の氣もつかじと、明神の林に埋置し錢二千五百貫、これをとらんと國に立かへり、非人をかたらひし處に、ぞんじの外氣をつけられ、天の網にかゝり、ふたゝびかやうの仕合と申上る、重々の大惡人國中三十ヶ所に三日づゝさらし、無量の責終て此たびは誠の罪にあひける、おそろしきものゝたくみ、前代未聞のことゞもなりし、

（七）合せたり極樂門の寶印

補陀落や岸うつ浪の音に聞しは、紀州熊野のうらにふだらくばしりといふことありて、よい年の後生中間、極樂まいりの相談かため、孫子にもがてんさせ、風を待小舟に帆をあげ、五人三人生ながら海上にはなたれ行き往生をとぐるよし、むかしよりし來り、近年迄右のわざをなしける、去ころ磯村に茂兵衛といふ男、六十圖に二三年廻りすぎ、手足たつしやにて若いものにもからかひ、無佛世界にくらし、指當りたる親るいもなく、大口をきゝそれを思ひ出の樂とせしが、俄に法身おこし、相手いらずの百萬遍をしだし、家の棟から小き車をさげ、井のもとにて水を汲がごとく、左の手にて珠數を引き、右にては鉦をうちならし、晝夜のつとめおこたらず、近所にも鬼味噌の思ひをなし、ともにちからをあわす、御むかひの風來るとて小舟に帆を引、磯にも念佛の力をそへ、日比に替りて名殘をおしみ、まねぐ羽袖の一しほ追手となりてはしり、行末は雲浪たちへだて、思ひなしにや沖のかた音樂きこえ紫雲たなびく氣色、あり〳〵と磯のかたにも見とがめ、感涙をながし大往生のとりさた、三十日にもならぬに磯村にふしぎ有り、走の左助といふて律義成おとこ、夫婦かすかにくらし、網引藻とりにやとわれ、それをいとなみとせしもの、此程女房平産せしが、その赤子二七夜まで手を握りてひらかず、とかくして開けるが、木にてもなく金にてもなく、飯櫃成のものをもちたり、あらためて見るに印判などの二つに割たるやうなり、ふしぎのことにぞ云ふらし

て、大せつにおさめ置ける、あるあさ沖もしづかに日のひかりもほがらかなりけるに、あまたの入ふね眞帆かた帆に、疊のうへを行がごとく磯によりくる中に、さる比ふだらくはしりせし茂兵衛、衣服美々敷顔色つや／＼として小舟より上り、何やらん手にさゝげ、見しりし人にも言葉をかけず、いそ村を東の方へ歩行、これは奇妙と所の男女あとにしたがひうかゞふ處に、はしりの左助が内にあんなひもなく入て、身をあらため、寶冠をいたゞき、此間むまれたる赤子を數百たび拜し、よろこび入たるありさまなり、左助ふうふおどろき、そのほうは茂兵衛かと見る、正しく先月ふだらくへ參り、大往生のさた今もつぱら也、しかるにかゝるありさまは、さだめて何ぞに執心のこり、まよひて來るものなるべし、ふびんの次第と申ける、茂兵衛きゝ、もつともさやうに思ふべし、我すなわちふだらくに行き、往生をとげたり、然るに諸佛ぼさつくわんせおんへ仰せありて、則磯村にいたり猶も結緣のなすべし、なんぢは所の案內のためにふたゝび立かへり、いよ／＼ふだらくへ引導いたせとの あらたに佛勅をうけ、則くわんおんは先だつて此所にいたり給ふ、いづれにましますやと見るに、此家に紫うんおふひ靈香鼻をはぢくあいだ、かくのごとく立入たれ、此子正しきくわんぜおんにてわたらせ給と、いよ／＼ひれふしありがたがる、左助肝をつぶして、はじめかやうの事有りと、かの手より出したる物を見するに、茂兵衛寶冠のうちよりそのわれをいだし、くわんぜ音と、二つにわりて持參せし印と合せて見るに、少も無相違、此時門背戶にのぞき居たる者ども一度に感淚をながし、左助が日比正直の心根あらはれ、かくもあるべき御ことゝて、それよりさんけいおびたゞしく、かの寶印をいたゞかせ、茂兵衛出てはまぢなひをし、腰ぬけ立て飛行、座頭は火の見番をつとめ、奴とうがらしをとまり、車大八おのれと荷物を運ぶ由、尾に紐をつけていゝちらし、まだ五十日にもならぬうちに、おびたゞしき散錢さゝげもの、大福長者の日の出になり、茂兵衛おやぢ左助ふうふは、かのくわんおん殿をいだき、財寶を舟につみふだらくへ歸るとて、便よき風に帆を上て、此浦分限の金銀をしてやり、千秋樂入の望をとげ、萬歲の出處三河の國へ引越て、中山といふ處に住けるよし、是くわんおんの御

りしやう也、是までに今はふだらくはしり御停止なりとぞ、

（八）戀慕の闇に眞鍬の中

武州目白の邊に、竹川四五右衛門とて、小身ながら筋目正しく、鍬術の師ありて、眼流の中興と弟子もあまたしたがひ、家來女子わらべ迄、目に角を入れ、肘に勢ひかんせける、人の運命はしれぬものなり、此家にひさしくつとめ、請太刀の妙をおぼへ、よろづに心得たるおとこ、水筋勘九郎といふおとこ買物遣にてありしが、いつの比よりか四五右の内義と密通して、たねんたれしるものもなくて、奥方第一の御用の者にて過しぬ、四五右衛門夜ばなしに出られ、よき首尾ありておくへ忍び、いつよりもしみ〲と物がたりして、おかへりといふ聲をあいづに、ぬけ穴あれば何心なくかたらひしに、惣領竹松殿の御乳の人、ねまどひてかのふたりねの床に來る間、勘九郎おどろき、うろうろせしかば、お乳の人見咎め、おそろしやたれ人ぞ夜ふけておとこすがたはとあらためられ、いや御ようのことありてふと參りたるよし、摺違て出んとせしに、内義今日をさましたる躰にて、枕かたなをおつとり、御留主といひ男の爰に來ることさだめてぬす人なるべしと、いひもはてずぬき打に勘九郎が背筋一尺あまりふか〲と切さげられ、あつといふてたをるゝ所を、かさね打に頬さきより耳へかけ二刀によわり、こゑもたてず、此さわぎに家來どもかけ付、まづ〲かの者を表庭へいだし改見るに、お氣に入の勘九郎なり、これわとおどろきさわぐ間に、四五右衛門よばなしよりかへり、此よしを聞奥にけがなく悅び、男まさりのはたらき外聞ともに滿足し、勘九郎こと盜人に落着し、表庭柳の下にてためしものになり行、漸宿請人が切々なる骸をもらひて歸ける、此沙汰ひろく、天晴武士の妻甲斐々々しきしかた、夫の身にしてはさぞ自慢成べし、火事太鞁にも泣出す樣なる内義たちの能き鏡といひふらしける、内證をしらぬがほとけ、おそろしき内義の心底にこそありけれ、勘九郎切れし夜よりも、かの柳の下にあらはれいで、苦しげなる聲して、口惜やぬすみはしれたぬすみながら、相手ありてのことなるに、我ひとりかやうになり行こと、世々をふるとも此うらみつきじ、女めがしかたかへす〲にくし、思ひもよらぬおのれが手に

かゝりしとよ、今に思ひしらすべしとて齒がみをなし、夜な〳〵切られし刻限に出ける間、何とやらん世間のさたやうすあしく、抑幽靈がてんが行ぬと、氣のどくさせんかたなく、かの柳を切て水風呂のけぶりとなしても、猶執心のこりて出ける間、柳の根のほとり四五間四方の池にしたりしかば、池の幽靈底意しられぬと、世間にいよ〳〵いひやまざりし、かのつれづれ草に 榎の僧正のこと思ひあわせける、はかなき所にのみ心をつけて、御内義の心中をしらざりしは、はかなかりしことどもなり、

千尋日本織巻之四終

千尋日本織巻之五

(一)恨あらはるゝ時宗右

むさしの國と下總の中に流るゝうたかたの、あわれむかしの戀しざき 今もよし原の遊女ども、親方の内義とつれて河逍遥のひさ日はゆるしける、上野の櫻ちりてより、遊山舟木の葉をみだすがごとく、かぜありても氣づかひなく、連舟(ちやひぶね)に橋をわたし、厚だゝみ敷つめ、舞臺をしつらひ笛鼓の音すみわたり、龍のみやこの耳をおどろかし、龍神湖上に出現して、かの稀人には三番目の松かぜむらさめと聞しも、となりのふねに琵琶を彈じ、面黒(もくろ)忠兵衛が鹿島踊、歌吹(かすい)が永閑ぶし、扇計語齋頭をふりて 駒王の道行思ひいれをつくし、いまだ日中に花火をともし、五段すがゞき獅子おどり、尺八一節切にこれをあわす、見物の船とりまわし、いま一つと聞たがれば、あばれ者どもが仕出しぶねより、走拍子(しやぎり)を打てうちつぶし、不二筑波もうごき出て、八百里のむさし野に此さわぎ滿々たり、まことに天下の町人、江戸なればこそおそるゝ事なく、九十月の末迄此つゐゐ、一日を十萬両でもまかなわれじ、

御れき〳〵の奥がた女中、五十人七十人一對の出立、その中にまぎれて どれがそれやらしれぬ事也、牛の御前のこなたに舟をつけ、 その數二十艘ばかりとりまわし、八橋りうの琴過て名香薫 仕合なる鼻にふれて、三廻のいなり穴を出でおどり給ふかと、すこしへだてゝ町おどりこ三四人、思ひ〳〵の好みすがた、十五六をかしらにして一とをりづゝしのきの藝、 天人くだりて布をさらすかと、御ふねより御目とまり、此よし申て御座にいり、それより御座敷へ御ともし、すぐづけの御奉公、殿様へ御遊山みやげと 御機嫌そろふて奥おもての御使、外に人なき御出頭、その中に小らん氣量すぐれて殿の御意に入、 御ふびんあさからざりしに、いつとなく殿を我ものにし奥様をねたみ、折にふれては悪ざまにさゝへける、 殿これをもちひ給はず、その後は奥へつかわされて おもてへめす事まれ〳〵なり、小らんいよ〳〵悪事つのり、ひそかに剃刀を懐中し、奥さまをねらひけるが、天命いかでかのがるべき、 御給仕の折からあやまつてふところよりおとす、見つけられたりとや思ひけん、通ひ盃をなげつけ飛かゝらんとせし所を、 つぼね岩ふねをはじめ女中あまた立かゝり、とらへておもてへ引いだす、殿聞しめし御立腹あさからず、 御下屋敷へつかわされ、さたなしの夢とはなり行ける、此ものゝ親さる浪人にてありしが、呼よせ右のとをりあふせ渡さるゝ、おどろきまかりかへりしが、 子を殺され無念に思ひそれより及なき御かたを、 是非一太刀と心がけゝるもおそろし、明るはる御發足の御供さだまり 西國へ趣給ふ、小田原より一里半、湯本といふ所に御駕籠居わり御供廻休足のあいだ、そのほとりに辻堂有り、前に一つの石あり、日五六分くぼみて 曾我の五郎時宗が足跡なるよしいゝつたへたり、 人々たちより是を見るに、六十あまりの男やとはれて香箱を持けるが、此石を拜して涙をながす、いかにととふに、願有者は祈て本望をとぐるよし、よつてかくのごとしといふ、人々 あさましきおやぢ何の願ぞとて笑ける、おやぢはらをたて、我もむかしはとつぶやき、御乗物のかたへ近よる、御近衆つきのけ、無調法ものどこへ行としかりつくるに、まだうろ〳〵とあゆみよる、御乗物のうちより御らんじとがめ、 その者此方へ目をつくること大かたならず、せんぎすべしと仰出さるゝより、

ひし〳〵と彼ものをとらへきびしくいましめせんさくするに、懐中より一尺許り成刄の氷のごとくなるをさがし出す、さてこそしれものと責めてとふに、のがるゝ處なきことをしりて白狀す、我は去年殺されたる小らんが親岡舟治部右衛門なり、むすめの敵是非一太刀と思ひしに むねんなりといふ、これまたさたなしと湯本の河原につれ行、若手の衆中思ひ〳〵に腰の者をためしぬ、東鑑十二巻に、建久三年正月二十一日新御堂におゐて土運人夫の中より、あやしき者をめしとり、梶原景時尋ぬとへども不二分明一、すなはち御前にして佐貫四郎太夫責とひしに、上總の五郎兵衛忠光也、懐中に一尺餘りの刄をかくし持、眼には魚の魚鱗を入て 片眼盲たる體に見せたり、和田の義盛にあふせて、同二月二十四日六連(むつら)の海邊にて誅伏す、日來漿水を斷けるとぞ、かの浪人に思ひあわせて哀なりしことどもなり、

(二)聞ておどろく御嶽の鐘

甲斐の善光寺に一つの灯籠あり、善人はわらべもかろくひつさげ、心あしきものは大力なれどもあぐることかなわず、不思義の靈灯なり、時ありて參りはべるに、貴賤步行をはこび、いづれもかのとうろかろく上りたるにこそ、今ひとしほの信心もましてよろこびあひし中に、年のほど四十あまり、役も仕舞けん四方髮の大男、妻とおぼしきをともなひ參詣せしが、何心なくや かの灯籠に手をかけ、聲を出して赤面すれどもあがらず、諸人めをとめあさましきにこそ、おのれもはぢたる躰にてこそ〳〵とたちのきける、妻とおぼしきものなみだをおさへかね、われにいとまを給はれ尼に成てと、誠に思ひ入たる有さまなり、おとこもつての外なるていにて白眼つくる、おんなかさねて、此とし月心ならず夫婦のかたらひ、今さら申におよばず、今日のありさまを見るに、罪のほどあまりにおそろし、爰よりひたすらいとまを給れとくどきぬ、かの侍氣色かわり、十目十指の物わらひ、男にはぢをかゝすよと さん〴〵に打擲す、おんなすがりて御嶽の鐘はこれなりと、佛前の鰐口を打ならし、今よりながく縁をきりたりとかけ出すを、男許さず小腕をとりて引たて行、貴賤の參詣目をおどろかし、これざたになりて もろ人御寺を出さりける、それより十日ばかり過て又甲府に立かへり、柳町といふ所に宿

かりて此さたを聞しに、あるじかたりしは、かの浪人は釜なしといふ所に針たてして、年久敷出入する方の妻に密通し、男の病氣を幸に、只一本にて禁穴の夢となし、今はかの女房をわがものにして、ほど遠からぬ鍵の手町といふ所に住ける、先日善光寺よりかへりて女房亂氣し口ばしりけるは、我は本いせ屋の利兵衞が妻なりしを、今の男にたぶらかされ本の男を殺し、かなしきさまにそら泣し跡式をくろめ、世間を見合隱男と一所になり、けふ迄はしる人もなかりしが、善光寺にて餘りに罪ふかき有さまを見たりしゆへ、御たけのかねを誓いさまを乞、あまにならんとなげゝども、ゆるさず、うきながらくらせしが、佛神のせめをうけて此むね今くだくるはと、海道へ駈出々々くるしやかなしやと人ごとにとりつき、もだへ死にうき名を殘しぬ、此さた捨おかれず、彼侍は所拂はれしなり、まことにおのれがつみみづから責といひながら、ふびん成しありさまなりき、

(三)欲に身を卷く藤の青龍

ある武士がたけふ芝居ある處を通りしかば、人もや見んと編笠ふかぐとかづき、馬をはやめたるよし物がたりせしを、かたはらにてそしりけるは、道具にもかさを着せけるや、上下の紋にても大かたそれとはしらるゝにと、笑ひしはもつとものことなりし、此ほど奥州より出たるとて、堺町に見せける大ていなる男、惣身にひしとうろこありて、ところぐに色々の貝どもとりつき目鼻も見へず、編木にてなづればからくと音あり、磯良とよぶもたいなき名をつける、あまり見ぐるしき故、その比兒わらべの誓言に入て、いそらの身になることもあれなどいひあへり、あさましき事にこそ、そのものゝはじめを聞けるは、本庄龜井戸といふ所に宰府をうつして、天神宮居し給ふ、玉垣廻廊美々敷三つの橋あり、はじめとすへは虹のごとくにそりて渡りがたく、中は直にして疊のうへを行ごとし、池は方一町許ありて、青浪たちて淵のごとく、そのうへに藤の棚あり、左右にわかれ五十間あまり池をおゝひ、龍蛇のごとし、花のさかりは野田安井の思ひをなし、諸人むれて此所に遊ぶ、西南に連歌座敷あり、本社の左に神樂大拍子の音たへず、みどりなる松かぜ、梅が香を吹つたへ、一かたならぬ景地なり、惣門をめぐりて神子おふく、神託をのぶるよ

し、夫(をつと)は山伏にて當座の占諸願の祈禱、死たる人も生るがごとし、その中にまづしきものありて、かの神前の池にのぞみ、鯉鮒泥龜のへだてなく盜とりしをしる人なく、夜ごとに池におもむきける、ある時池中つねよりつめたく浪たちて海のごとし、かの者おどろきいそいで出んとひしめく所に、十丈ばかりの靑龍げんじ、紅の舌をふり牙を合せて雷のごとく、眼の光天地にかゞやき晝のごとし、見るより肝消あしたゝず、やう〳〵岸根にとりつく所を、龍蛇追つめくるくるとまとひ、一しめしめられて息たへたり、此震動におどろき、宮人寺僧松ともしあらため見るに、大の男御池の藤にまとわれ死す、夜更て入べき所ならねばぬす人に極り、いかゞすべきとせんぎのうちに息を吹かへす、よく〳〵見れば門前の法印なり、裸身を幸にそう〳〵所を追拂ふ、神罰を立所にかうぶり、一七日の間にかゝる姿となりけるとぞ、おそろしき報なりし、

（四）大小を拔せぬ間の文作

おもしろの花の都や、東がしらめばとうからとうからと、矢藏太鼓の河原けんぶつ、座をふらそひ袖をつらぬ、爪もたゝぬありさま、中村千彌が非人のやつしめもあてられず、坂田藤十夫(をつと)の身にしてめいわくの顏つき思ひ入をつくし、大和山甚左衞門が紙子すがた、座本幸十郎四百兩のもがり、いづれも大あたり、ことさら甚左衞門男ぶりすぐれ、手に入たるぬれごと、見物の女中身にあてゝ是をまもり、心そらになつてうつゝをぬかし、外にいふこと耳にいらぬ折ふし、舞臺よりあふぎをあげ、笹屋權七さま御宿に急御用有よし、御かへりなされいとこゑ〴〵によぶ、西の橋がゝりのもとより、爰にと返事していそぎ出るとて、そば成侍の膝にすこしあたりしよし、御かんにん下され候へと斷りいづるを、かの侍もみ上ひげをなで白眼つけ、うろたへもの旨ならば手引をつれよ、かゝる見ぶつの座に來ること慮外なり、蹴たる膈はこれかと片足ちぎるばかりにしめつけ、跡へも先へもやらず、權七めいわくし、いろ〳〵詫てもがてんせず、行たくばかた足をいて行といふ、あたりからはしたに居よ、跡が見へぬとしかりたて、宿へはかへりたし難儀爰に極る處、そのかたはらに二十三四に見ゆるわか男あまり見かね、これもし御さぶらい、所もあし

く殊さらいそぐとての不調法なれば御ゆるしつかわさるべし、ひらに〳〵とあつかふ、侍これを聞、おもしろひそのほうは鞘もちか、ひとりでは手ごたへなし、二人一所に丸うなつてこいと權七をつきたをす、あつかう男せいて、權七どのとやらんいそいでかへり給へ、むづかしくいふものあらば、此小男御相手いやとはいわせぬ、さあおかへりやれといふ、權七ちか比御くろうかけめいわくながら、主人をもちたれば一たん罷歸り、おしつけかけつけ可レ申とむねをおさへ禮をのべて出ける、かのさぶらい彌はらにすへかね、こりや男今の相手を迯すからは、おのれやらぬとたちあがるを腰骨とらへて引居、此中にては人もさせず同道いたし、河原でなりともぞん分に御相手いたすべしととらゆるより、すこしもうごかせず、侍これに氣をとられ、いやさかんにんならぬとひしめけども、ふり切ほどにははたらかず、とかくする間に追出しの太鼓をうつ、たがひまぎれぬさるなど言葉をかわしたちいづる、侍は大和橋の北の詰に待かくる、かの男もしづ〳〵と寄行より、あわや大事と見る所にいかゞしたりけん、此男地にかしこまり、段々慮外申上る、御めん下され候やうにといふ、諸人立かゝり笑へどもかまわず、くちおしきしだい也、侍いよ〳〵勝に乘り、下男めさぶらいを出しぬかんとや、おのれ一打にとすでにあやうく見へし所に、かのおとこ一腰をさやながらぬきいだし、とかく御あいてにならず、町人の義御打なされて御手柄になるまじと、猶々ひれふしける、さぶらひあざわらひ、さもあるべし諸人のみるめもあればゆるしゑさする、たちされといふ、男よろこび、此邊に私ぞんじのかたあり、御たちより下され候へかし、御酒一つといふ、さぶらい心ざしのことなれば、いかにもと打つれてはしの西福島屋といふ茶屋に入、いろ〳〵もてなし、色も出かけてみだれざけ、大座敷かりきりのやくそく、一人もきやくをよせなと餘情八百いひちらし、銚子ぞいと手をうちながらかの男はかつてへ行、さぶらいも近年の遊山ゑんはおかしきものじやとおやまにしなだれ、ざつと一夢見ようかとくだを卷、ねの時過て男はと尋ぬるに、酒すごしたればかへるよし、ずいぶん御ちそういたせとて、とういなしやりましたといふ、そのはづではない、それはていしゆじや、たゞしこれのち

かづきか、いやついにおめにかゝりませぬ、ようござんすゆるりとお遊びなされといふ、さぶらい肝をつぶし、なか／＼遊び氣げんでないとさん用をきくに、お二人五座ぶりのやくそく十七匁五分といふ、八幡かたられたり、遊さじと出るをくわしや出てお首尾はぞんせず、はたご代をと押て巾着をはたかせ、かさねて御出とつきいだす、さぶらいはがみをなし、武運つきたるせんさくと鬼の目に涙川、うとましの河原やとつぶやき／＼かへりける、かの若男の狂言大でけのとりざた、ちかいことにて腹筋をよりし、

（五）遊女を抱く手に地藏菩薩

津の國の三島江、いにしへは海船爰にいかりをおろして繁昌の地なりし、「思ふぞよ芦のほのかに聞しより、三しまがくれは汀まさりて」など聞へしも、此所の名にしおふ江口の君のゆかりある、色の藤本權の守といふもの、遊女あまたもちてその家富さかへし、中にも糸君とてすぐれたるやさものあり、全盛時を得髮の結やう小袖のもやう、いづれもかれが風流にならひけり、しかるにかの糸君が部屋にして、夜な／＼おさなきものゝ聲してなくことあり、はじめは聞とがむる物もなく、我もふしぎにのみ思ひしが、此さたかくれなく、權の守腹立し、おさなきものを忍びてそだつるならんと、部屋のうちのこるくまなくたづねれ共させるわざなし、されども夜毎になくこゑたへず、のち／＼はうぶめなどいふものゝ入來るにやと、遊ぶ人もまれ／＼になりて、糸君が全盛おとろへ、權守いよ／＼いかりて、つれなくのみあたりし、その比南都の春乘法師、檜の小笠に鉢の子の最中にて此邊に至り給ふ、幸と請じて作善供養をせしに、その夜ことさら泣たりしかば、春乘糸君が一間に入給ひ、思ひあたることもやあるとたづねとひ給ふ、糸君なみだをながし、露ほども覺さふらはず、いかにもして此難儀すくひて給はれとなげきしづみぬ、法師あはれにおぼしめし、代々に報し物がたりなどし給ひしに、ことさらなきたちける、そなたを見給ふに小袖など入たる櫃の方にてありしかば、立よりひらき見給ふに、光明かくやくとして異香ひとまに薫ず、こはいかにとたづね給ふに、糸君懺悔しけるは、今おもひ出しさふらふ、則地藏ぼさつにてましま す、年ひさしく持佛としたてまつりし、しかるに匂ひははなはだよし、折ふ

しは燒て身にとめたるなり、かゝるふしぎを見るうへは、罪のほどおそろしくさふらふとて、春乘師にまひらする、大德いそぎ出し奉り、あるじ權の守にも拜せ給ふに、御丈一尺ほどまし〳〵、御眼より淚たれておそろしくもありがたき御ことなり、春乘よろこび給ひ、いそぎ大佛の地藏ぼさつを作り、御腹ごもりにし給ひ、すなはち南都の念佛堂に入奉る、今の夜なきの地藏これ也、世に太子とてもてはやす沈水香にて作りし尊像なり、たぐひすくなき御ことにこそ、又うづまさ十輪院にうめきの地藏とてまします、かの寺前に菩提樹ありしが、此木夜ごとにうめきけるあいだ、寺中あつまり打くだきこれを見るに、御たけ一尺二寸餘の地藏出給ふ、すなはちもり奉り本堂に入せ給ひ、靈驗あらたにていまもかの寺に渴仰たてまつる、ぼだいじゆその後うへかへて今にあり、いづれも不思議の靈像なり、

（六八）欲心は燒のこる刀

常陸の國土浦といふ所、人家軒をあらそひ、六日市といふありて賑なる宿なり、さる比不慮に出火ありて、數多の民屋一日の風塵となり行ぬ、此所にある浪人故ありてかくれ住しが、折惡他行して右の類火に逢けり、妻もなく只ひとりむすめを持たり、火事の折から前後にまよひしが、父の大切にせし刀一腰櫃の底より漸とりいだして、隣の藏へこれを入てとたのみけるに、日比心易きあいさつ、氣づかひなせそといひければ、よろこびたちかへるに　はや我家も燒たをれぬ、父のことも心もとなく、なみだながらに野邊にのがれて、とかくせしほどに父にめぐり逢、たがひに無事をよろこびのうちにも、かの一腰のことをくやみぬ、むすめ、それこそとり出して隣の藏にたのみ入たるよし、父大によろこび、さすがに我子なりけるよ、類火のこと露ほどもいとわず、しかしその刀は古朋翟瀧川三太夫が刀なり、身上をかせぐたよりにせんあいだ、見あはせ賣てくるゝやうにと、かほど貧敷われながら心底を見極、あづけ置て京都にのぼりしなり、萬一燒失せば死たりとも分たゝず、運命いまだつきざるよと　うれしさあまりて落淚す、扨あるべきならねば、一まづむすめをつれて武州淺草のするゑ、いほざきといふ所にしるべありてたちこゑける、時日程ありければ、土浦に行右の隣家丸屋與兵衞かたに行、

類火の時節はと一禮のべ、さて娘が御無心申置たる刀御むづかしながら、御渡下され候やうにと申ける、與兵衞かつてとりあはず、いやはや道具も大かたにたすかり、我々も無事にてよろこぶよしいひまぎらかす、浪人さてはとりこみにて忘れたるべしと思ひ、かさねて、あづけし刀を御返し下され候へと申ける、與兵衞おどろきたるていにて、さやうの事おぼえなし、ことさら火事などの折ふしは、人のかたより中々物をあづからず、御さぶらいの刀をくらへ預けしとは、近頃珍敷くぞんずるとうしろからも笑ひ出す、面目うしなふ計なり、浪人赤面し、口惜きことや無實のやうにいひなし返さじとの心なるべし、よし〳〵此者を指殺し腹切て死と思ひつめしが、かくても刀のわけ立ず、ひとりの娘もふびんなれば、まづたちかへりむすめをかたづけ、その後了簡もあるべしと、無念ながらいほ崎にかへりて見るに、門には錠かけて娘も見えず、とかくして戸をひらき一間を見れば、一通のふみあり、むすめの筆におどろきいそぎ見るに、此ほどの御ありさま、中々御いたわしく忍がたし、けふは御留主をさいわいと人をかたらひ此身を代なし、すなはち金子拾五兩を差上る、いかにもして御世に出給ひ、目出度御むかひ下さるべし、處はかさねて知せたてまつらん、御名殘おしやとよみもはてず、八幡そのむすめ千兩にも賣ず、死する場をのがれ歸るもかれがためなりき、かへさぬかともだへかけ出んとすれども、いづかたへ行かもしれず、立て見居て見氣もみだれ、身をくだくばかりせんかたなし、此夜あけなばいのちにかへ尋んものをと獨り言、恩愛父子の別の袖、なみだの海の梶まくら、さだめもあへぬに物音して、蔀を蹴やぶり五六人扳つれて打てかゝる、こはそもいかにとおつとり太刀、いさいしらねど切結び、手いたくはたらき追出す、一人垣根をこえかねしを、とつてひらきててうとうつ、うたれて外面に落けるが片股此方にとゞまりぬ、さては一人とゞめたり、せんぎは明日と座敷にかへれば、例の金拾五兩これを付込ぬす人と、いまこそ思ひとられたり、次の日盗人を見るに首なし、せんさくすべきたよりもなく、金子なければ娘をたづぬる方便もたえ、つく〴〵と思案するに、此世ならぬ罪なるべし、かへす〴〵も丸屋與兵衞が非義なるしかたにこそおこりぬ、我死て此

恨を報せんと、腹かき切て無レ故夢とは成行ける、年月過て土浦の丸屋一子をまふけゝるが、惣躰人にして腮ながく、耳たれて泣こゑ狗のごとし、成人の後面に白く瘢有、及といふ文字の如し、貪欲のいたす處、横道にして人を失しむくひとぞしらせける、もろこしに戴文といふ者有、貧て富けるが、死て隣家の牛となる、その脇の下にたいぶんといふもじくろき身に白く毛生出たりとかや、事文に見えたり、

（七）龍宮へ相十念の紫雲貝

都鳥いざことゝはんと聞えしも、あさくさ河の水かみなり、きそのほとりに牛島といふ有り、祐天大和尚しばらく隱れて住せ給ふ、貴賤參りつどひて六字の名號をうけ奉る、忍ばせ給ふといへども諸國にそのかくれなく、奇瑞あげてかぞふるにいとまなし、ある夜月明かなるに御心をすまし佛名となへ、漸ふくるまで詠め給ひて、

うたがはぬ心につみもつきゆみの
　ゐるかたにしのそらとしらずや

とおぼしつゞけ、元來日月淸明の御心、あまねく草木國土もらさじの名號をあそばしけるに、庭のかたよりかすかなるこゑして、

西へ行こゝろはわれもあるものを
　ひとりないりそ山のはのつき

と西行法師の詠じ給ひしを口づさみける、ふしぎやと御らんじけるに、美女一人忽然とあらはれ、御まへ近くかしこまる、いかなる者ぞととわせ給ふ、なみだのみながしていらへたてまつらず、漸ありて申けるは、我はまことの女にて候はず、上總浦の沖にすむ鮑なり、ある時下總へわたる舟ありしが、浪風あらくして陸によるべきやうなし、水主のいわく、旅人のうちに大切の守なんどかけ給はゞ海に入給へ、さやうのものあるときはかならず風波かくのごとしとせんぎせしに、一人大德の名號を肌にかけたり、悲みおしむといへども大勢のいのち救ふわざなれば、なく〳〵海に入しに浪しづかにおさまり、船つゝがなく人々よろこび下總に着候、おとし入し名號すなはち私の貝の中に請とゞまる、それより海人の鑿にあたらず、惡魚龍蛇のみちをひらき、海中の通路心のまゝなりし、しかるに龍王此ことをきこしめし、かの名號をいそぎもらひとり給ふ、かなしきことこのうへなし、何と

ぞ今一度おがみたてまつらんことを、あけくれ願ふところに、おもほえず人間のすがたを得たり、うれしくもありがたくて、御まへにいたりぬとてひれふして泣居たり、大德も御手を合せ給ひ、善哉々々いままた汝に名號をあたふべしとて、日月淸明天下和順のひかりある御筆跡をとらさせ給ふ、かのおんな手を延ていたゞきたてまつるかと見えしが、紫雲たな引姿見えずなりにけり、この跡に一つの貝殼のこりし、見るに三尊來迎ましく、二十五のぼさつありくとして、いまも御佛前のひだりに有てそのあとたえず、（此次に原本一枚落丁あり脫文約五百二三十字、）……………室町通に隱れなき分限、下立賣に常盤屋四郞三郞とて母一人の秘藏男子、氣𨛗すぐれ天性內氣の生れつき、小座敷をかまへ文机に硯紙　小皷うつゝなの世中とや、寢ぬに明ぬ一節切、雁爬むしの鳴ねならで、友とするもの外になしと、手足達者の病人なり、お袋いろくいさめて淸水參り、月に一度の役のやうにおぼえ水茶屋へも立よらず、梶は男やらしらず無色千萬本意をそむきし若者なりしが、此ほどの淸水がへり　ふらりくわづらひ出し、打臥までのことならねどだんくにおとろへ、晦は蝿追ふ閨のうらにとさし、さまざまお袋よりせがみたて、出入の醫者へ手紙をとゝつめられ、無ニ是非ー書てわたしぬ、いへにひさしき右助といふお氣に入　請取ていでけるが、がてんの行ぬわづらひと、人々のひそめくも心元なく、手紙を道すがらひらひて見るに、

病　錄

一夕ぐれの雲のはたてに物思ひ候事

一待ばこそ更行かねもつらからめ、ひとり臥猪の床ずれ痛候事

一曉ばかりと聞え候へども、人にしられぬおもひにて候へば、憂とは晝夜をわかたず候、しかし此まゝにて身のあかつきを待つけ候はゞ、いかに悲しう候はんと、由良の戶渡る舟人の厭もたえ候事

右のとをりに御座候、母人の御心づかひつみおそろしく、われら此世を夢となり行候はゞ、御身もあられぬほどの御なげき思ひやられ、一かたならぬ胸のくるしさにて候、これらのさかい能々御加減なされ下さるべく候以上、

月　日

右助おどろき、人々の重ひ病氣と申されたももつともでござる、陸奥の千引の石とわが戀と、荷負はゞ拐中やたえなん、などゝもうけ給はる、又江戸挾箱と申も重ひものときゝはべると、つぶやき〳〵いそぐに、もはやこれさうな、たのみましよ、ときはや四郎三郎からと手紙をわたす、これ〳〵御使御手紙を松庵へ見せましてござる、押付それへ御見舞もうそうでござるみぎすけ「しからばさやうにもうしましよ、右助かへりました、松庵押付これへ御出なされまする、はゝ「さて〳〵はやかつた右助「はあはゝ「休め右助「はあ、

千尋日本織巻之五終

千尋日本織巻之六

（一）終に身を袖香爐の一燒

さらば沈はてずして、魂は身をせむる心の鬼と成かわり、なを戀ぐさのことしげき邪淫の思ひにこがれ行と、手鼓かすかに臥ともなく、閉こもりてなみだがちなるありさま、母の身にしてはいとをしく　さぞかなしかるべし、ほど有て藤浪松庵御見まひと申せば、母出むかひ、四郎三郎氣色大かたならぬ物おもひとぞんじ候が、そこもとさまとは山の井の淺からぬ御ねんごろ、さのみはつゝみ申まじ、ひそかに心底御聞下さるべしとたのまれける、松庵點頭て　御さつしちがひ候はじ、今朝の樣躰書かれ是かてんまいらず、よ〳〵うかゞひ見候はんと　四郎三郎の一間に入る、四郎三起なをり、御出かたじけなし、私の病氣とても本復いたすべしともぞんぜず、月も入さの山の端つらし、たえぬひかりを見んよしの覺悟にて候と、すこしはぢらひたる眼の内に、涙をもよほしたるありさま　又あるまじき男ぶり、これにつれなきおんなもあるやと　ともになみだを落しける、漸ありて松庵申さ

れけるは、今朝のやうす書にて御病氣はしりさふらふ、夫につき御うらみ申に參り侍る、先きこしめせ、御親父四郞左殿、われらの親松庵より御懇意、相談内外うち明て申うけ給はり、味噌もこれと一所に燒、無盡も相合にしてかけ、御袋さまの珠數入の切をわれら紙子の火打にもらひ、丹後鰤も片身づゝわけてとり、猫が子うめば狗とかへ、御寄講にも同道致し、貴所たばこぎらひなればわれらも好ず、何がひとつ心いきの違ふたことなきに、この春よりのぶらつき心ふかく隱させ給ふ、いかゞおぼしめして御隔ぞ、御袋様の御心なにほどゝおぼしめす、天命のほども御わすれか　返す〴〵も御心づよき次第、二度とない若ざかり、戀の利さいちう、人にもいわずうか〴〵とおもひ死のがつてんか、さりとはきこえぬ御事といさめてはうらみ、男泣に眞實のなみだ斷すぎてたのもしき、四郞三郞貞をもたげ、仰のだん〴〵至極のうへは露ほどもかくし申まじ、さりながら何よりはかなきもの思ひ、我ながらおぼつかなく、もりくる月の朧氣に、雲ゐの人を戀るとは、云ひいでがたき春の色、ひがしに人のむれつゝぞ、花見る頃の音羽山、地主のさくらのちりもせず、咲きものこらぬ久かたの、あまぎる雪のおしなべて、木の間の花のみやこ人、それよかれよと品さだめ、行衞しられぬ戀衣、被のひまは心して、吹なかへしそ吹とぢよ、花にはつらきはる風も、しばしとゞめて詠んと、やすらふ折から御所すがた、しどけなりふりそのまゝに、愛らしき女房の小わらはつれて何やらん、たづぬるけはひにたち迷ふが、人をはぢたる面ざしは、かのしら玉の艷ものゝ、見よと咲たる梅のはな、それといふとも惡からじと、おぼえずながらとひよりしに、かのおんな　御主のおともにさふらふが、御乘ものはあの木陰にたち靡く、不二の煙のそれならで、御香爐の火の消ぬれば、それをもとむるなつむしと、花のものいふけしきなり、我からとや申べき、けぶりも浪もたゝぬ日なく、行衞白鷺芝艜の、小島の海士のたきさしの、數にもあらぬ袖香爐、もろこし人も寄らなくにと、取出し途中の御用、ことにまた貴賤へだてぬ情をば、はるの習に御ゆるしと、かの女房にまいらせしに、淺からぬ御心ざし、其方は袖に包ませ給ふ、此方は身にもあまりてかたじけなく、御なごりもおしけれど、お使のことなればと、言

薬をのこしたちわかれしが、後めだくもうかれいづる、わが玉の緒も瀧のいと、あとをしたひてうかゝひしに、まことによしある御かたと見えて、御供人の数あれども、忍やかなる物語で、裏ぞゆかしき乗物の、戻子の戸それと見入しに、なにか紛れ給ひけん、御眺の我かたに、めぐる光にものおぼえず、露ぞおくなる天の河、心も空になり行ば、慕ひし人はむかしにて、御側にたちそひしも、月ある夜半の星のかげ、それかとだにもおもはれず、只忘然と立たりしに、たれよかれよと人めして、御かへりのいそぐとや、跡たちかくすはるがすみ、花を見すつるかりがねの、雲の何國もしらざれば、闇にまよへる心ちして、鬼一口に喰へかしと、今のつらさに惜からず、惜きはありし御面影と、泣々かへりし道芝の、迷ひそめたる思ひぞと、語るうちより色變じ、床はなみだの海なして、梶をたえたる舟人の、死を極しもことはりなり、

(二)延引ならぬ仲人闇からぬ牛

松庵つく〲と聞、よしなきうらみ申たり、行衛も知ぬうきふねの、聞てもまよふことどもや、何とぞりやうけんあるべしと、いそぎお袋へ 此こと語つたへしに、母もおどろきたれどしらでは方便もなし、よしよし此うへはいのちにかへていのらんと、子をおもふおや心、その日からの清水参り、鰐口もくだくるばかり、念珠をもみ切涙をふらせ、我子の戀ひ人をたれとしらせて給はれと、感歎くだきいのりしは、ためしすくなきあはれなりし、抑〻當寺清水寺は酒のうへの樽等丸草所二間の雜作にて、瀧は三筋の糸による、一三二の音羽山、ふもとに數千のいろ茶屋あり、ながれにしづむあはれをすくひ、産寧子安の借椅子に坐し給ひ、四郎三が母につげさせ給ふは、そのほうがせがれ因縁ありて、およびなき人にれんぼす、本意をとげばかならず身をほろぼすべし、ふたつどりにはいらぬものじやとおもへども、わするゝひまもないそふなを、ふりすてよともいひがたし、まづはしらせゑさするなり、四辻殿のひそうむすめ、近年の戀しり、戀慕するもにくからず、北邊にたよりあるべし、寂は雨じやほどに われをうらむるなと、あらたなる御こゝろにて、よしやなげかじあひべつりくの、とうたひて内陣にいらせ給ふ、母よろこび宿にかへり、手を廻してたづぬるに、北野のかたかげに、妙壽とてかの姫君の御

乳の人、御威光にていまわ閑々と比丘尼をつとめてゐるよし聞すまし、その身北野參りにしかけ、供まわりきら〳〵しく、妙壽がいほりちかく乘ものをとゞめ、いたわることあるよし、素湯のむしんに腰元をつかわしける、めやうじゆ聞ていたはしのことや、この日ざかりに門にては見るも中々にくるし、住あらしたる庵ながら、しばらくはこれへ入て、養生をも心おかずにといひこしけるを さいわいにつけこみ、御心ざしのかたじけなければと、べた〳〵いひつゞけ、心ありてすみなせる庭には、小松ひめ篠のあいらしきに、かの姫君の御こと聞まほしけれども、とかくおさへ心をしづめ、持せたる辨當をひらき あるじにすゝめ、名酒のかず〳〵くみかはし、ふしぎの緣をいひたてにして、此すゑかわらず御ねんごろに、一夜どまりはわたくしかたへ、かならずとやくそくし、たがひに一萬年もなじみしごとく、言葉をつくし立かへり、明の日そう〳〵禮使に色縮緬三卷、下女へ金子五百疋送り、一兩日のうちぜひ御出をまつよし、妙壽あさからずよろこび、此うつりに何がなともとめし、去年まで御所にて用ひられし暦一卷、湯みやげのやうじ一包、霞といふあらひ粉一袋とりいでつかひへわたし、ひと日ふたひのうちに御禮申にまいらんと返事しける、使かへればときはやにもよろこび、その日を待て外のことなし、妙壽も後生の友より物くるゝ友と尻がるに出て行しに、馳走たら〳〵四郎三を引あわす、さて〳〵御氣量よしや 公家衆にもまれなり、あはれまゝならば、われらの養君とならべて見ばやと申されける、四郎三肝にこたへて絶入ぬ、こわいかにと妙壽もおどろき、家中さわいで面に水そゝぎ、藥をあたへて息出ぬ、母これを見るにたへばこそ、ひとへに狂人のごとく、めやうじゆが手をとり、我子殺し給わんや生給はんや、御心ひとつにはべれとくどきぬ、しばらくしづめてやうすをきくに、はじめよりの心づくしをくわしくかたりぬ、妙壽もいとあはれに思ひ、またはおやこのものゝありさま、姫君の御ためにもおそろしく、とかくなぐさめ おもひきらせばやとりやうけんし、さて〳〵切なる心ざし見過しがたし、しかしおよびなきことなれば、本意とぐるまでのことはかたかるべし、四郎三どの心入のほどをかきてわたし給へ、なにとぞ御めにかけて とまれかくまれ御返

事を見給はゞ、かならず思ひきり給ふべし、それまでの仲人をばいたすべしと申ける、母もよろこび 四郎三も此うへやあるべき、ひたすらたのみまいらするとて、何くれとなく筆をはこび、薄やう一かさねめやうじゆにわたす、心安くうけとり、折ふしを見あはせかさねて御さう申さんと、さま〴〵いさめたちかへる、妙壽ふりよのなかだちをうけあひ、人の痛氣を頭痛散粉になるほどのめいわくも、こひなり慈悲なりおためなりと、それより御所にあがり、御きげんのうかゞふ心のうち、そらおそろしき日のひかり、明ぬくれぬと日かずへて、人めの關をこえなやみける、

(三)袖の山かげたゝみ圍(うちは)の月

雁がねや文七とも 元結のたよりにふれて、うへ〴〵までそのさたあり、 琵琶琴もつねなれぱなにぞめづらしき一ふしをと、 上ろう衆つどひて衣裳人形の十六むさし、あひらしき遊びのうちに、妙壽が袖より圍をまいらせんと用意する 人々をめざましう、いかにしてかもれ出ん、ふところに 月をいだくのたわれにやとせめて見るに、小扇のいまだちいさきをいだし、初はそりばしなどのごとくたゆみしが、 袖の山かげはなるゝより、まどかなる圍をいだしてまいらする、姫ぎみいと興ぜさせ給ひ、人々もめでまどひて、望月のあまとや申べきときこえて、 夜ふくるまで遊ばせ給ひ、御いとま給わり人々はつぼねにおりぬ、月をいだせる尼がそではなちがたし、 いましばしとゞめさせ給へば、めやうじゆもかたじけなきに 御きげんよき折からと思ひて、 四郎三が心をつくせし薄やうをさゝげ、御うしろを守て、かゝるわざはせいしとゞめまいらする此身ながら、 あまりにおそろしき人の思ひなりしかば、御ためもかなしく なぐさめておもひとまらせばやの心にて、 あからさまにも御めにかけはべるとて、うち涙ぐみける、ひめぎみもおどろかせ給ひ、其方よりかゝるわざはいとめざましけれど、手にだにとらぬとうらみんがふびんなればと、 かひ御袖におし入させ給ふ、めやうじゆよろこびて、局にさがりぬ、鳥なき御格子まひらするまゝ、めやうじゆもおまへに出ぬ、人なき折ふし あはれなる一ふしをも見つるとあふせられしかば、 御返事をといわまほしけれど、さすがにてひかへぬ、宿にかへり此よし四郎三かたへしらせてよろこばせ、 いかにもして御返事

をとりて、めでたきおとづれせんときこえければ、のちのたよりをいのちにて、四郎三かたにもまちわびける、されば丹全かつ山がふみは、妹脊の中となるとうたひしもまことなりけり、四郎三いかにふんでもはこびしや、また淺からぬゐにしありてか、姫君かの玉章を御らんじてより、またなきあはれにおぼしめしつかせ給ひしかども、めやうじゆにかくとはゞかりおぼしめし、花ぞめごのとておなじ御としの上ろう、御そばさらぬをひそかにあふせふくめて、御返事のかずかず、四郎三かたへ人しらずつかはされける、はなぞめごのいさいにうけ給はり、下だち賣にいたりかくとあんないせしに、おやこの人もおどろくばかりによろこび、此ことふかくかくし忍び、四郎三を御所へともなふやくそくかため、めやうじゆにかたくかくすよしよろづいひあはせ、やくそくの日になりしかば、四郎三を女房にしたて、被のうちにまぎれ行に足もさだめかね、われかのけしきに物もおぼへず、雲ふむ心地に御門を入、たれ見とがむるものもなく、花ぞめごのゝつぼねに忍びくるを待て居たりし、花ぞめごの御まへにいでかくとしらせたてまつる、こなたもめづらかなる御ことのたゞおそろしくおぼしめすよし、いろいろなぶりまいらせて、あいづの比も今なりと四郎三をともなひ、つぼねつぼねを忍びこえ、御次の間にいたり、あれに見えたる御簾のあなたこそとおしへて、うら山しげに立わかる、それより四郎三たゞひとり、たつぎもしらぬ山中に、よぶこ鳥さへ音をたへて、膝をふるひ身をもだへ、御簾のかたはらに這よりて、出入る息もまゝならで、忘然として時をうつしぬ、

(四)一生一夜の枕夢さめて夢

一刻千金の春宵千夜をひとよの今なれども、たがいにいひ出んことのはづかしく、人の身じろき給ふもほのかにきこへ、ゐならぬかほりほどちかく、いとゞ心もみだれける、四郎三ふるひふるひ、闇の中に花ひらいて人をさくるやさいひ入しに、いと愛なる御こゑにて、閨中に面子かへりて出んことをはづる、ときこえ給ふ、折ふし追風に御簾のさとなびきけるにまぎれ入り、許愼が花のしとねにうつり、くれなひの衫を脫、みどりの衾に脚をまじえ、一たび動ては八たび心を傷め、假頃の中に數たび相接をたれかしらん、可レ借

の寡鵲や、夜半々々に人をおどろかし、薄媚うかれ鳥の、いまだあけざるに曉ぬと鳴ぞやと、衣をかづき對坐て打泣涙ぬ、まことにわかれやすく會がたし、ひめぎみ涙のうちに、相識らましかば　かゝる名殘はあらじ、むかしはものを思わぬとよみしも、今の身にこそとうちふし給ふ、四郎三なみだに哽咽て、仰ひで見ることあたはず、及びなき身のかゝる御情に逢こと、さらに生る身とおもわず、窮鬼の人を悩すかとのみ、後會のちぎり思ひよらず、　時うつりなば御ためもかなしくたち出るに、きみはたゞにうちふし給ひ、

あり明のつらきためしに誰なりて

　わかれの袖をゆるしそめけん

ときこえさせ給ひ、衣ひきかつぎ給ふ、四郎三もせんごに迷ひ立わづらひしが、　御格子のひま〳〵も白くなり行におどろき、壺の間の切戸おしあけて、には山にたちかくれしが、朝日かげ山の端をはなれて　もれいでんやうなし、築山のうしろに塵づかのありけるをさいわいとしのび入、木の葉をかつぎて臥ゐたり、花ぞめいちはやく御まへにいでゝ、　かの人の行衛心もとなけれども、とひたてまつらんよしもなく、人々はや參りつどひたり、　たがひに心の中にねんじておしはかり給ふ折もこそあらめ、此ゆふべ母ぎみいらせ給はんよし御殿のそうぢすとて、下部ども御庭に入たち、かのちりづかの落葉をはこびいづるとてかくれふしたる四郎三を見とがめ、役人へかくとしらす、人々おどろき、ひそかに引いだしさま〳〵せんぎすれども、四郎三郎一言のいらへなく、さしうつむきたるばかりなれば、ふかせんぎもいがゝ、姫君の御所にかゝるわざとはひろふもなりがたく、とかくぬす人とことさだまり、　ひそかにさし殺し御ぼだい所へつかわし、あだなる夢となり行ける、たれしる人もなかりしが、花ぞめどのかくときゝ　ひめぎみへしらせたてまつる、かぎりなくなげかせ給ひ、ともに消行んとのみ思召つめ給へども、　ちゝはゝの御ためもおそろしく、漸御心をとりなをさせ給ひ、それより御發心の御心ふかく、尼法師のすがたを願はせ給へども、御ゆるしなかりし、扨四郎三郎母、けふは〳〵とまちあかせどもかへらず、ほどありてかくと聞、たちまち心みだれ、いかにとゞむれどもとまらず、四郎三郎がひそうせし鼓をうちて洛中をくるひめぐりぬ、家はあ

るじなくあれて、家人どもはおのがさまぐ\わかれ行、あはれなることゞもなり、此ことひめぎみきこしめし、今はこれまでとみづから翠の髪を切て、さる御所に入らせ給ふ、花ぞめどのも御ともにて、かの人のぼたいをふかくとひ給ふ、父は丶の御なげきあさからず、言の葉いかゞはのべん、誠に清水のくわんぜおんせいしとゞめ給ひしも遠からぬ御ことなるを、及なき戀にしづみてかゝるあはれを世に殘しぬ、

（五）作れる獅子に毒の思ひ入

ある寺に遊ぶことありし、花ぞちるといふ夕暮のかねつくことなし、鐘樓美々敷見え渡る、翁にとひしかば、されば高欄の四處に、龍蟠るいきほひすさまじく、隣村の雨はこれよりふりそめ、おそろしきかずかずあれば 絕てかねつくものなし、則左甚五郎が作なりとかたる、げにかれがつくれる草木鳥獸、ふしぎなることおほき中にも、優れたる御ひそうの弟子に甚平といふものその骨を得て作、細工の道しれる人だに、師弟子の間をわかちかねける、しかるに甚平惡念おこり、今天下に立ならぶ細工なし、師甚五郎をうしなふものならば、名人はわれひとりにとゞまるべしと、無二是非一殺さんことをのみ思ひたち、心をつくして一つの獅子を作り、師甚五郎をむかへてこれを見せける、誠に勢みちてほゆるがごとし、甚五郎がいわく、眼の中に一刀を加へば 我つくれるにかわる所あるべからずといふ、甚平これをのぞむ間、甚五郎臥てはおきいかりてはあたりをはらひ、その心をうつすこと他念なく見えたり、折からよしと毒を入たる茶をすゝむる、則一刀をくわへてかの茶請もち、すでに呑んとせしに、かの獅子飛かゝりて茶器を蹶おとし、甚五郎を守護するありさま、弟子甚平、ことあらはれしそんじたりと、無ねんとおもひ 獅子をとりひしがんとせし所を、獅子飛ちがひ甚平をふたつに引さき捨てけり、甚五郎おどろき、あらため見るに惡事かくれなし、師恩をわするゝ惡逆天命いかでのがるべき、もろこしに紀昌といふ者、飛衛といふ師につきて弓をならふ、敎ていわく、かすかなるものあきらかに、ちいさきもの大きく見えん時我につげよと、紀昌やがてほそき毛に虱をつらぬき的にかけ、南にむかつてこれる見る、十月ばかりにして漸大に見え、三年の後かのしらみ車の輪のごとし、則燕角の弓 朔蓬の簳

をもつてしらみの眞中を射たり、此よし師飛衛にかたりてこと〳〵く術をつたへたり、されば天下に敵たるものなし、師の飛衛を殺してわれ一人の名を取べしと、師恩をわすれ殺さんとはかりし、あるとき野中にて行あひ、たがひに矢をはなつ、ふたつの矢ちうにて行あたり落ける、しかるに飛衛矢だねつきてせんかたなし、紀昌は矢一すぢもちたりしかば、願かなひしとよろこび、よつ引て放つ飛衛かたはらなる荊棘をとつてその矢を打おとす、紀昌かなわざることをしりて非を悔み、父子の約をなしけるよし、列子に見えたり、

（七 鐵炮鳥は押賣の的

江戸大傳馬町ふともの問屋、數萬軒の中に人のゆるしたる男、鎌田又八とて勇力すぐれたるありし、いつもあきなひのことにつき、上州へ年ごとにかよひける、此みち筋忍くまがへとてぬす人のおほくむれたつ處なり、ひとり旅人は晝ともいわず難儀にあひ、十人に九人は金子のみかいのちまでうしなひ、あはれなることかぞふるにいとまなし、しかるに又八つねにひとり行かよひて此なんにあわず、江戸の軒續を行よりも心やすげなり、外よりの金銀もあづかり、一たびも紛失なく、また此たび上州へおもむきける、くまがへにほどちかく、爪さき上りの芝はらにしれものふたり、大小つかみざしに華立つけ、おなじ頭巾をかづき、血すぢはりたる眼を見いだし、たゞ今うちたりと見えて山どり一羽てつほうを脇によせかけ物がたりしてゐたり、又八是を見ぬかほにて鼻うたうたふて行過るを、ふたりの者どもことばをかけ、これ旅人、此山鳥いらずともかふておくりやれ、宿まではいづるも太儀じやと道中へなげ出す、又八きゝ、やすきことながら當分錢の持あひなし、かけにめさるか しからば取て行べしといふ、かの者どものさ〳〵とたち出、わか衆そりや出口がちがふた、いやでもおゝでも買はずば、さあ返事をせよと 例の鐵炮中ためにして近よる、鎌田はやわざの大力といへども、あいだ五間とない所から ふたつ玉をうけては、とかくせんかたもあらばこそ、大切此時に極るところ也、しばらくしあんじて申けるは、さだめていづれも見しり給ふらん、かまだ又八といふきぬ買、毎年此みちをかよひ、そのてつほうのおとをも聞たり、よく〳〵がてんし

てのひとりたび、おもしろく遊びたけれども、此たびは急ぐ用あれば、かへるさの樂にのこすべし、今あり合の金子のこらず渡しおく、その方たち仕合よき折から、利をそへておかへしやれ、此むねがてんかといふ、ふたりのぬす人どもくわん〳〵とうなづき、おも白くのべられた、あつぱれ男なり、大小の神祇組百廿人、町男達三十八人、白山傳兵衞、棹竹十兵衞、でくろく六兵衞、はつはうは兵三、てちびんの七藏、發心五郎兵衞、小五郎八、なりひら孫三、くまたか三左衞門、椀箱左兵衞、ほつと淸十郎、つりがね彌三、腕の源六、蛇ばらてうちん、理圭の味噌、いづれも一わたりづゝ逢てきて、今此道中にて押賣商賣、ふといことよと思ふに、又八がいひぶん人を生で呑たるありさま、これはりやうけんせん、しかし物をとつてふたゝびかへす例なし、りやうけんして半分とつてかんにんすべし、そう〳〵出せといふ、又八さいふをいだし、金子五十兩道中へなげちらし、かぞへて渡せと手をふところに納てすこしもわるびれず、ぬす人もさすが鬼みそにて心にゆみ、鐵炮もちたる肘も下り、機嫌よく見ゆる所を、又八飛かと見えし、一人の男をあをのけに蹴たをし、鐵炮をうばひ取、殺すはやすきことながら、それはゆるすべし、頭巾を脱 面を見せ行べしと、火ぶた切よけにかまへたれば、ぬす人あきれあちらこちらの首尾になり、跡も見ずして迯のびける、又八から〳〵とわらひ、さもあるべしと廣言し、金子をおさめ、鐵炮一丁山どり一羽御ちそうとうちかたげ、無事に上州へいたり、下新田に逗留す、此所に物見といふことあり、年越の夜山にのぼり來り、年中の日和をかんがえ、宿をめぐりて互に吉凶を見る、又八も所のものとつれて見にいでける、中宿の池田屋といふ酒屋の門口、すこしあきてあるをのぞきしに、人あまたあつまり泣きさけぶかたはらには、葬のようい白小袖をしたて、棺の諸道具桶たらいのたぐひまで、それぞれにうへ下へかへす、いづれも心やすきものどもなればおどろき立入しに、年越の日まちするよし、上下へだてなく、かるた寶引碁双六うちまじりて酒もりさいちう、つれのものどもおどろきながら、さあらぬていに盃そう〳〵まわし、いとまこひて立いで、とかくふしんはれず、さだめて來年はうれひのことあるべしとつぶやきしが、はたして明る三月、池田屋の

あるじ身まかりける、およそ田舍にてその夜大豆を月の數ならべ、遠火にやきて風雨晴晦をしる事あり、此下新田にかぎりかゝる不思儀もある事よと、江戶にかへりて語りし、風學雨聲露色の占、東方朔が置文に見えたるよし、

（八）情はひろし大師河原の若衆

武州河崎大師がはらに、瀨山隼人とて住ける、身躰よろしく上下數十人ぐらし、三代浪人に身上もかせがず、大石借の利そくおびたゞしく、隣郷に田地あまた持、何にふそくなく、花をかざれる娘二人寵愛あさからず、後妻又なき美人にて榮花心の枝ごとにひらき、朝茶の湯暮の鞠、夜は人魚のともし火をかゝげ、小鳥を好みて數をあつめける、ある時池上の沼にて鷭をもとめしが、雌はのがれて雄ばかりをとり持て宿へかへり、さし籠に入てめをよろこばしめ、秘藏の小姓袖笠有門、鍵をあづかり、摺餌水かふ折ふしは奥がたへ出入せしに、中居こしもとおかりんきして、おくさまの御心よく、さあらぬていにあそばすを、わがもの顏に殿樣をまわしおる、どこが御氣に入ことぞと、塵をはきかけ手水をふりかけ、耳をこすつてたまられず、後妻梅いで給ひ、有門かへらばこなたへ申せ、たづぬることありとの給ふ、あとさきしらずの女ども、そりやこそおくさまに囁るゝはと、有門をつきすへたちかゝり、殿さまへいふごとく、つべ／＼といふて見よと、くち／＼にわめきてかたはらに入ける、うもんめいわくしてなみだをうかめ、差うつぶきてゐたりし、お梅ちか／＼とより給ひ、髮をなで貞をあげよとなみだを手に請、たれがそなたをしかるぞ、殿の御ひそうももつともなり、此うつくしきすがたに、わが心は此ふところのうちにと手を入給ふ、うもん何心もつかず、御前をはゞかり、旦那の御意もたび／＼そむきさふらへども、御きげんもいかゞと、心の外なることとも折ふしなりし、かさねては御うけ申まじ、只今までの所は御ゆるしとたゝんとする、お梅いよいよよりそひ、うもんが手をとり、そのことをあらたむるにてなし、隨分との御氣に入、わらはがおもひをかなへてくれよとじつとしめ給ふ、うもんおどろき、わたくしに御しうしんとの御ことか、どふやらがてんまいらずと、すこしづゝ跡じさりにするを、いだきとめ、とかく返事せよ、もしなさけなきことのみなら

ば刺殺して ともに死んで思ひしらせんと、面のいろもかわりければ、おんな二人きたりていわく、此たび袖笠うもん無調法ありて 閉門のよしうけ給わる、まつたく粗忽のいたりにさふらはず、忠義よりいでゝみづからつみにあたりて死んとの心なり、いさい申あぐべし、此ほど御留主の折から、小鳥に水飼ふ爲とて奥へめしける、うもん何の心もなく參りしに、お梅さまふかき御しう心のよし、ひたすらにくどかせ給ふ、うもんさま〲御異見申ければ、さてはなびくまじき心にや、こがれてひとり死なんより、いざもろともにとの給ひ、御命もあやうかりしかば、うもんおどろき御心にしたがわんとおうけ申、此こそかくとももうしあげんはなさけなし、さればさて御心にしたがひては、御目かすむるつみおそろし、無調法にことよせて死なば、奥にもはぢさせ給ひ、此のちの御つゝしみになるべし、然ばさたなしにおさまる、これ忠のいたりと思ひつめ、湯水をたちてもはや遠からぬうもんがいのち、あまりにかなしうさふらふと、われらよりおこりたる御はらたちなれば、夫婦まいり、うもんがいのちにかわりたき御願と、なみだをながして申ける、隼人落着せず、そも二人はなにものぞ、われわれはうもんにはなされたる鴛鴦なり、彼人の情にてふたゝびふうふめぐりあひぬ、しかれども此たびのなんぎ見すごしがたし、ひたすら御願申上ると見て夢さめ、ふしぎに思ひ有門がやうすを聞に、このほど湯水も斷よし、又庭の泉水に鴛鴦つがひありて とらゆれどもうごかず、隼人おどろき、うもんを呼出しひそかに語り、忠義のほどを感じ、おしどりの心ざしを思ひやり なみだをながし、有門もかたじけなく御前なをり、扨ほかにもれざることなれば、不縁のよしにて お梅どのをさとへ返し、すなはちうもんに惣領のむすめをあはせ、家督を相續しいまに繁昌なり、誠に天道明らかに忠臣の惠み給ふ、ありがたき時代なりけり、

寶永四丁亥歳初秋吉辰

花洛書林　井筒屋治兵衛
柏屋勘右衛門　開板

千尋日本織卷之六終

いにしへより、日本書の梓にちりばむる事繁き中に、紫が源氏物語、少納言が枕草子、衞門が榮花、宇治殿の拾遺、是等の書は婦人翫びの書にして、たやすくゑとくかたからんかは、爰に花洛の隱士湖十高散人集むる六卷は、其品淺香山の淺より深き千尋のそこひなく、このもかの藻を分て、終六つの卷とせり、誠に勸善懲惡の一助とならむかと、强て櫻木を求て世に廣むる事しかり、

寶永四丁亥年　　書肆　起　牛　跋

近代長者鑑序

孔丘の道を守られしも予が嗜慾にはしかず、故に周公の夢なきを愁ふ、貧家一滴の酒に眠りて、福人四五人の盛衰を枕上一炊の覺口、目をする〳〵筆を執て記し留しばかり、其人は皆誰やら知らずかし、

正徳四甲午稔七夕の夜

落月堂操巵

近代長者鑑目録

水だてなして涙にさらろゝ水色の帷子
仕合はにはかにこけてきた山の百しやう
三兩の小判は世界にはびころ入替の大盡

寶の山うへのしれぬ分限者
金假粧の御座舟のつて來ろ大じん
太鼓のせいぞろへ鳴りこんだ葭原の揚屋
亭主は笑ひ中風病出しから見事なさばき

日本廻國好色修行の男
遠い江戸まで付てきつれの執しん
淺くさ河のだぶにはめられし色狂
千五百兩かりがれの鳴てくろしい身の上

根引の金山ほり出しな女郎
今榀久紙子のやぶれ立たろ身袋
引あげられてにはかになりのよい樣太鼓
持こむ銀箱の底から浮てくろ大さわぎ

卷之第三

七十五日の長旅是ぞ都の初物
人の子を賣ら博奕わざはりの強ひしかた
乘物五丁かいてきたあづまの小判
葛籠馬切のない華麗はあざやかな飾り

注文にあひ生松のくらゐの女郎
分別袋の底からういて來た色ぐろひ
悟りに逢ふては墨繪の淸磨もすまぬ顏つき
八百兩は耳をそろへた金綱の紋を目じろし

後の名月は二千里の外千兩の光
智惠がかたまつて石となろ女くすの木
灰吹をかけにしてのみこみのよい末社
一子の世繼二代長者もさんぐの仕合

利生をあらたに三室戸の觀音
本心はようずに逢ふて腐鯛ほど腐た男
世を宇治川へ身をすてゝも捨られぬ命
其日の商ひはうつたりや旅籠屋の親仁

卷之第四

隱居屋敷は金銀の山科仕合せの峠
紫檀の井筒は奢の只中滅多黑檀の忍車
侘た座敷は數奇の道から心のしやれ壁
ごくらくへ引揚屋町西側の西川屋

水晶の障子見え透ても底のしれぬ身袋(しんだい)
彌左衛門裁の袴はかみしものそろふ風儀
枝珊瑚珠の杖ついてはなれぬ果報
振舞はざつさ炭火の煉りかげん

上氣の色狂ひは女著(によじやく)二道の隔夜詣

目録終

近代長者鑑卷之第一

○親の威勢は二言つがせぬ三件(くだり)

ござつた〳〵、當年のゑほうより、四の寶をさきに立て、ゑびす殿のござつた、ゑびすどのと申すは、とつとむかし神代の夫婦、いもせのはじめにひよつと生れ出たまひ、西の宮の海邊に、はじめてあとをたれ給ひ、末世の一切衆生の水なふりをまもらんと、誓願(やほつ)をたて給ふ、太夫天職かこひより、呂州白人茶屋夜發、もろ〳〵の色ぐるひ、別しては釣ものにひみつの妙をさづけて、あひたい見たいそひたいと、心におもふねんぐわんを、かなへたまはん其ために、釣り釣つて身(しん)めで鯛(だい)、大盡はたい氣に、女郎は客をたいせつに、身袋は大きに、尾をひれつけてまもらん、我をねんずるともがらは、腎水もいやましに、大海はいそならん、いつまでも若ゑびす、ゑびすまいはこれまでと、古き風折に紙細工の面をかづき、ゆかたをうすかきに染て、七寸ばかりの桔梗の紋に、張付のこもち筋、觀世よりを玉だすきにかけて、立島のたちつけ、二尺ばかりの張ぬきの鯛を、丹にてあかく色どり、葉つきの笹の枝をつり棹にして、照手のひめの出ぞこないともいひそふななりして、細谷道の人氣まれなる所を、ただひとりゑびす舞して來るもおかし、此男は下京にて、馴染屋の與惣とて、かくれもなき性わる、西島にかよひて、和州がいろになづみ、親の身袋をあきがらになして、藏はねずみから屋ちんをとり、撞木町にかよふて、又そのうへをたゝぎあげ、祇園八坂にぬめり、宿の寢道具には蜘蛛の巣をはらせて、一夜も内にゐず、ことさらあたりちかき、小しゆんといへるこむすめに打こみ、くびだけのねんごろ、とかくかくすがひみつと、人めしのぶのうら借屋、家嫁(か)どもの口がましく、茶のみばなしのいひ草に、これの家主のむすめ子と、馴染やのむすこ殿とは、いかふあぢな事があるげな、どふやら思ひなしか、ちゝに色がつゐたの、いやあのお腹(なか)は、ふとりではあるまいのと、さりとは口がましくいひたてしほどに、近所のわかひ者共がききつけて、これは八幡かんにんならぬ、先手(せんて)うつたが腹がたつと、めつた無性にもざくりかけ、もみあげし程に、事がいかふむづかしふなつて、世間へばつとしれぬ、與惣が親たちきゝ付て、さま〳〵と手をすり、

やう〳〵と埓をあけ、さて〳〵段々にくひやつ、たゞひとりの子にさへかゝらずして、結句細目にかゝり、難儀におよぶものでもないと、こしゆんにいとまをやらせ、押つけて三くだり半に、鍋のふたほどなしるしをせさせ、釜の座のこしゆんが二親にわたして、與惣をば追出しぬ、これより勘當の身となり、母かたの伯父の、山科にありしかば、此かたにかけこみ、近年は伯父のやつかいとなつて、年月をくらせるなり、時にむかふより菅大臣、島のうそよごれし布子、をちよぼつまげにわら草履、長刀町の喜八ではないかといへば、おれは物もらひに近づきはもたぬ、なにものじやといふを、はておれじや見わすれたか、ヱヽまことに道理々々と面をぬげば、これは與惣か、さても久しい、此やつしすがたはどうしたことじや、けふもあすもさめたせんさく、我等も此ごろ勘當うけ、にはかに天竺浪人となつて、心もそらに有頂天の仕合、もち合もあらば、すこしなり共とおもへども、今いふ通のわけ、荷なはゞほうとあぐんだせんさく、なりはてたではないかと笑へば、いや〳〵われらは、流浪の身となりぬれど、山科の伯父貴がせわで、辻にたつほどの事はない、こふしたやつしすがたには、いかふ様子あつての事、以前我等がねんごろせし釜の座のこしゆん、此ごろきけば都の福人、深川屋庄吉が手かけとなり、その下屋敷松原の新地にゐて、寛濶なるくらしのよし、そちがしる通り、親の命もだしがたく、あかぬわかれをして、みくだり半はやつたれども、これは當分のこと、長く縁をきるこゝろでなし、こしゆんが心もさぞあらん、されども是も親のはからひ、是非なく手かけものとなつて、めづらしいつとめをするとみえた、さりながら慾の世の中、俄かにふきあげられて、心のかはりしもしらず、何とぞよそながら其家に立入り、一目みたいとおもへども、それは今あの身になつての全盛、中々おもひもよるまじ、せめては内のやうす、にぎ〳〵しきほどをもみたいとおもへど、さながら此かほでは行かれず、思案をめぐらし顔をかくしてとおもへど、風の神もさながらあんまりなり、大こく舞も、六月に火をけを賣るこゝち、されば氣をかへて、浮世ゑびす舞とは、なんとあたらしい仕出しではないかと、ほろりとなみだをながす、喜八手を打、さりとは心中男、ならぬやつし、さりながら皃はどこ

じやとおもふぞ、音羽の瀧よりしる谷へのかよひ路、苦集滅道とて深山のがけ道、人跡もない所で、其ゑびす舞をまふてゐたは、どふしたことじや、さればく\人のないを幸に、稽古してゐたりしなり、何とやらわれらひとりはきみわろし、そちも來てくれまいかといへば、それはやすいことながら、此すがたではゆかれまいが、まて〱そこらは我等が智恵じやと、玉章の地藏堂にはしりゆき、在所の子供の死んで上げたる、小町をどりの太鼓を、ぬすみ出して走りかへり、藤かづらをもぎ折、鼻紙を刻て四手につけ、これを鉢卷にしてかほをかくし、尻ひつつまげて、肩さきすこしまくりあげ、さあ〱いそげといひしな、與惣があとにつゐて、めつたに太鼓をたゝきたて、ござつたござつた、ゑびすどのゝござつた、

○書初は萬手かけおぼえ帳

あしたに緑岸にとび、ゆふべに丹嶼に歸る、落日をかへりみてともに吟じ、淸風を追ふて雙びあがるとは、梁の簡文帝のことば、鴛鴦のいもせは戀路の手本、妻夫首をまじへ寢て、さりとはふかひ心中、雄雌相離れず、人其一つを獲たるときは、一つは相思ふて死す、かるがゆへにこれを匹鳥といふと、崔豹も注せしとかや、これに見くらべては、人間ははるかにおとり、にはかに内藏い數をたてそへ、見世のかまちに鐵をふせ、鐵城のごとくにみせかけ、爐路の溝橋にも海石をかけて、敷銀の潤澤なる女房をよびむかへ、それにてゆきつきそふなしんだいを、たてなをすつもり、又はしつかりと、内證に物のある後家とみれば、すがたは趁跛がんち、三本足鵜むね、徃生こしにもせよ、齊の鍾離春さへ、指ざししそふな女にても、一つの所をみこみに、さま〲といひより、二世の三世のとのかねごと、心にもおこらぬ起請を書て、死せし男の溜をきたる、大分のかねをすいとりぬ、それよりは親かたの目をかすめ、年比ねんごろせし女、いつの間にやら底が入て、水風呂桶に帶せしごとく、もはや人目にたちてあるにもあられず、此世はわづか、ながい來世でゆるりとそわんと、心中しに出でゆきしも、女をまんまと死なしをきて、そろりと其場をはづすなど、大切なるいのちを女ひとりのかづき、さりとはむごきしかた、鳥類にもおとりしぞかし、是をおもへば、金銀澤山にもちて、我心にかなひしをんなをとりすへ、親

一門もうかみあがるほど、大事の物をまきちらし、こしもとおものし中居下男、それ〴〵にをきならべて、其をんなを歡樂にくらさせ、喜見城のたのしみをさせて、おもふ事なふたはむれくらすは、是れぞ上品常是、極印の銀のひかりぞかし、其人は今の花のみやこをはじめ、世界一番の福人、なさけも深き河屋庄吉とて、榮花のはるに花咲がさかりを引きぬき、大名もどりの美形をかゝへ、手のゐらぬこむすめを賞翫し、色といふ色のしなをつくしてかゝへ、千兩二千兩の屋敷を幾十軒か買ひとり、此うつきしき色どもを、それぞれに入れをきて、正月五日嘉例の帳の上書きにも、萬手かけ覺帳、これを一番にかゝせて、先年德神にそなゆる男、わきてふかふなづまれしは、松原新地の下屋敷に入れをかれしこしゆん、此ごろは晝夜こゝにとまり舟、河筋の浪をとも、二つ枕のもとにひゞき、高瀨の綱ひきがわめくこゑも、風が耳もとに來てこれ一興と、こしゆんに三味せんひかせ、こしもとのぎんに、鉢たゝきかたらせて、くめにしやくとらせ、しつぽりとせしたのしみ、さかづきの數もめぐり、こしゆんがうすかはなる面躰も、秋のもみぢとみなせしとき、六尺あまりなる男共、色くろく骨ふとく、二王のあらけづりをみるやうなるが、みな頭を殘切にして、十人あまりもやあるらん、かいほどな大小をさしこわらせ、庄吉殿にお目にかゝらふと、案内なしにつか〳〵と奥にとをり、つらりと一面に居ながれ、居合ぬきのやうなる膝つきして、われ〳〵は關東がたの山伏、此たびはじめて都にのぼり、遠國とは各別遊興の自由なるを、めづらしくぞんじ、所々の色ぐるひ、熊野權現の御罰でござるか、風呂屋がよひにうかされ、路銀をふつとつかひきり、只今は熊野山、かけをちの山ぶしとなり、尾羽を打からしてござる、御身上のほどをぞんじて、これまですいさんいたした、すこし御合力をうけ申さんと、いかつらしきかほつき、庄吉さはがず、いかにも樣子はきゝとゞけ申した、さりながら案內もなく、奥座敷までふみこまるゝは、近頃狼藉のいたり、無下にさしをく所ならず、しかれ共血氣さかんの山伏達、色ぐるひにうかれ、困窮めさるゝとあれば、尤そふにぞんずるなり、少々の合力なれども、これを取てかへられよと、小判百兩出さるゝ、中にも山ぶしのかしららしき大男、こはかたじけない

とをしいたゞきそふなものが、さはなくして、むつと氣なるかほつき、百兩のかねをとつてなげ、百兩や二百兩のことに、合力のぞみにまいるべしや、せめて千兩は、合力にあづからんといふ、さしもの庄吉も、興をさまされしかども、とかく沙汰なしにかへすが秘密と思案し、いかにものぞみの通りに、合力しかぬる男にあらず、しかれどもそれは、あまりのぞみがすぎ申す、五百兩つかはし申さん、これにていひぶんあるまじと、又四百兩出さるれば、かのふとい男、五百兩を懷中し、これさ庄吉千兩出す事がかなはずば、そのかはりには此をんなをと、こしゆんをひつたてとびゆかんとす、庄吉をはじめ、まかないの親仁料理人草履とり下男出入りの魚屋八百屋など、やれ狼藉ものゝがすな、棒よ鳶口よとひしめけば、こしもと以下のをなご共は、のふかなしやとなきさけんで、上をしたへとごつさくさ、

○風呂に入てみがき立たる若蛭子

お出入の魚屋ひれの傳助は、よほど手に覺えのあるをとこ、こゝ一はたらきと、かの山伏がこしゆんをよこだきにしてにげゆかんとするを、うしろよりなげたをす、同類どもはこれにおどろき、蛛の子をちらすがごとく十方ににげちりぬ、家内の者ども立かゝつて、蹈づたゝきつ大かた片いきにして、おのれ何ものなるぞ、まつすぐに申せ、さなくばしばつて、上へうつたへんとひしめけば、まつぴら御免なされ、沙汰なしに、御ゆるし下さるべし、わたくしは木乃伊の六兵衛と申して、腕だてつかまつる男にて候が、此中萬太夫芝居へ、あなたの御こし候ひしを、よそながら見うけ、およばぬ戀を仕り、よしなきたくみ、友達共をかたらひ、役者衆のかづらをかり、すがたをかへて一生のいたしぞこなひ、今から指もさしますまいと、さてもにはかに引かへたる口上、庄吉きゝとゞけて戀ゆへとあれば、すこしはにくからぬ所あり、世間沙汰なしに、追かへせよとあれば、男ども立かゝり、ふところのうちなる、五百兩を引とり、おのれいけをくやつならねど、旦那のおゆるしありがたいとおもへ、かさねて又此あだを、するかせぬかといへば、何がさてさて、此身がどろ〳〵癩になり、地獄の釜底へはまる法もござりましよ、是にこりよ道西坊、かたじけなしと手をあはせ、ふきちるごとくににげゆきぬ、庄吉大に

よろこび、傳助をまねき、最前の五百兩は、まづ當座の褒美、すぐにそちにとらするぞ、なを〳〵いはひをまつべしとあれば、傳助は寢耳へ新小判が入て、よろこぶ事かぎりなし、まづおいはひのお料理と、又にはかにいそがしふなり、なににつけても傳助ひとりが、金もふけとぞ見えし、下女のすぎは、さても〳〵いかい騷動、風呂をしかくる時分がつゐをそふなつて、晩の仕舞がめいわくじやと、ひとりごといふて、襷かた手にはしりゆき、脊戸なる風呂の戸をあくれば、六十ばかりと見えて、さくら色に天神ひげ、折ゑぼしに玉だすき、二尺あまりな鯛に、釣竿をもちそへ、今一人は、あたまに七五三かざりせし躰相、風呂のうちに見えしかば、すぎははつとおどろき、のふこはやととびしさる、いや〳〵おそろしきものにてなし、われは西の宮のゑびす三郎、此家のこしゆんに福徳如意の寶の玉をさづけんため、これまでようがうせしぞといへば、すぎは何のわかちもなく、こけるやらはしるやら、おぼえず臺所へにげかへり、なふ風呂のうちには、いきたゑびすさまが、天からやらどこからやら、あまくだりとやらなされました、も一人の神さまは、大こくさまではなさそふなが、お供の神さまかしりませぬといへば、これはけふがるせんさく、ゆめではないかおそわれはせぬかと、家内の者どもゆきみれば、いひしにすこしもたがはず、おのれらは風の神か大こくまいか赤つらか、何にしても非人のざま、いかがはしてこゝへはしのび入りたるぞ、いかさま此ごろはやる火つけの同類か ぬす人のひき入れならん、出おれ出されと腕をもちて、二人ながら引出す、なるほどあやしみは御尤、さら〳〵ぬす人火つけにても、乞食にてもござらぬ、くはしき儀は、こしゆんどのにあひましてと、色々させごせども、かつて合手にならざれば、是非なく旦那の耳に入る、庄吉不審に思ひ、まづ何ものにもせよ、坪のうちへまはせよとて、こしゆんと共に椽際まで立出らる、家來共かしこまつて、二人のゑびす舞を、坪のうちに引すゆれば、庄吉つくづくみて、そちはなにものなれば、こしゆんにはあはんといふぞ、推量するに、最前ふみこみしあばれものどもの同類ならん、まつすぐに申せ、おのれらいはずば、いふべき所へひかせ行て、いはすべしといからるる、與惣きいて、仰御尤にて候へ共、かつて左樣のわ

けならずと、かけたる面をはづして、こしゆんが顔をみるよりも泪をながし、それがしは馴染やの與惣とて、こしゆんとは二世かけて深き中にて候ひしか共、親の折檻はなはだしく、是非なくもいとまの狀をすくめ往生にかゝされ、勘當までをかうぶり、生ながら此世の地獄へ、今は落切た身とまかりなりぬ、こしゆんも二親のはからひにて、それより貴公樣へまいられしよし餘所ながら承り、かく榮耀の身となり申されぬれば、かげながらも馬の耳を風のやうには存じませず、せめて繁昌のよそほひを、餘所ながらなり共ながめ、もし仕合せにて、うしろかげなりともちらとも見候はゞ、今生のいとまごひにもと存じ、たよりません手だてなく、數年の朋友と二人ゑびす舞にさまをやつし、御門内まで參り候所に、なに事にござりましたか、お座敷騷動仕り、庭には人ぎれもなき其すきを幸と、ふと風呂のうちにかくれ、あたゝかさふに、もしあひみる事もやと、あまひ思案を仕り、今此仕合にて候といふ、こしゆんは椽よりとびおり、つか〳〵とはしりよりて、それより後は何とかとおもひましたに、まづそくさいでいさんして、わたしもうれしふござんす、是非なくいとまは下さんしたれど、たがいにかはせし起請はさだめて持てござんしよ、かた時とても、わするゝ事はござんせね共、かふなつた身、これとてもまゝならぬ浮世、うらみとおもふて下さんすなといへば、與惣ふところより、こしゆんが起請をとり出し、これもそちへもどします、此方の起請もかへして、今よりわが事を思ひきり、庄吉樣のお氣に入るやうにせらるべし、よもやこれほどに結構なゐていではあらふと存ぜなんだ、かうした躰をみましては、何ほどかうれしふござる、われらはとても世になき身、ふつゝりとおもひさりましたと、たもとは泪にしぼりぬ、庄吉殿段々のやうすをきゝ、扨々ふたり共に神妙なる心入れ、こしゆんはおさななじみなれば、今それがしが手に入て、かうした身となつてゐても、與惣をわすれぬ心底なを以てたのもしく、みがき立たる心中、女のかゞみ共なりそふな事、それを心なくかゝへ置は、なさけをしらぬに似たり、此うへはこしゆんを其方へまいらする、つれてかへられよとあれば、與惣きいてこは見事なる御さばき、さりながらそれがしが宿の妻となし申さんは、玉を淵になぐるが

ごとし、こしゆんためにて候へば、ふつ〳〵と存じ切る、此うへながら、それがしかくて候はゞ、なを餘所心あるにやと、こしゆんを御うたがひも候はん、これまでにて候と、あいくちを引きぬき自害せんとせしを、庄吉おどろき、やれとゞめよとて自害をせいし、それほどまでに、こしゆん身のうへをかなしみ給ふをきゝ、是非かへさんと申すもわけをしらぬに似たり、この上はこしゆんも與惣事をおもひきり、其かはりには、われを大切にせらるべし、與惣も今よりはこしゆんことを思ひきり、うは氣をやめて身上をかせがるべし、是をもとでにせられよとて、小判三百兩出さるゝ、與惣かしらを振て、かたじけなふはござりますれど、此金は得うけますまいと、四五度も押かへせしを、それはかたい言分、其方安樂にくらされなば、一つはこしゆんが心やすめ、是非々々としゐらるれば、此うへはとてをしいたゞき、又あい口を取て、もとゞりをふつときる、こはいかにとおどろけば、いやいや御おどろき候な、わたくし身貧にござる故、こしゆんどのにうき難儀をさせん事のめいわくさに、かたふ縁をきりましてござる、今此おかねをもらひますれば、何に不足もないくらし、しかれば縁をきりましたわけ、何共たちませぬ所あり、それ故辭退申しますれど、達て下さるゝ御心ざし、かたふいなむも又無禮、此うへは發心とげ、ながくうき世をすてゝ、一生おかげにより、樂々とくらし候はんと、たがひに起請をとりもどし、火中に入れてけむりとなしぬ、庄吉手をうち、扨々見事なるさばき、此うへはこしゆんとながく兄弟のけいやくして、一家のむすびをなしてたべと、さま〲のもてなし、つれの喜八は思ひもよらぬ料理をたべ、馳走にはあひしか共、これでは何やらたらぬかほつき、後には大酒もりとなつて、引やらうたふやら、さても取ませしうき世、

○乘物のくだけてものをおもふをんな

敦洽倭傀(とんかふいくわい)は、すがたの見にくさ目もあてられぬ女なれども、其德をのこし、西施驪姫は、其美質、玉のこしを打ぬきしか共、わざわひをおこす、さればこしゆんは器量無類といふのみにあらず、此たびの意氣地、さりとは見事なる仕方と、庄吉いよ〳〵思ひこみ、わが本宅に取むかへをく様と仰がせんと、表むきより祝言の用意、手道具着類、かねにあかせてのこしらへ、

すでに吉日をゑらみ式章の祝言、夜晝三日が間荷をはこばせて、婚禮は晝の八つ、乘物に金銀をちりばめ、六尺十二人、二町こなたより指あげたり、座敷には一門の待女郎、今日をはれとかざられたれば、さながら極樂の躰相、まんだらの繪をみる心地、その式法善つくし美つくせる事、お大名がたの御婚禮といふ共、是ほどにはあるまじとの評判、爰に木乃伊の六兵衛は、いつぞや庄吉下屋敷にて打擲にあひ、辱をかきしこと無念今にはれず、例の腕だて中間、火へ入るもかまはぬ氣なあぶれ者共をもよほしあつめ、日の暮るをまちて庄吉居宅へ寄あつまり、まづおさだまりの飛石（つぶて）にせよと、鮓の重石にもしそふな石を、五つ六つ門の扉になげつくる、これぞ初段、それでは門はやぶれまいぞと、溝のかづら石をもつて、やがて門をうちくだけば、かたはしからは、臺塀をこぼつやら、腰板をはなつやら、こはあんまりなあれやうと、内より出る者共の、疵つけられぬはひとりもなく、こゝかしこへにげこむてい、十番ぎりのおもかげをうつしぬ、此乘物は、こしゆんが乘てうせたのか、あたいまく〵しいと、みぢんこはいにふみくだき、玄關よりをくにこみ入り、脇指をぬいて疊を寸々にきるもあれば、小便たごを引きさげ座敷へ持來つて、たちまち河となせば、臭波しま臺をながす、庄吉こしゆんをはじめ、皆々方々へかくれしのび、からき命をたすかりぬ、此事其在所の御代官所へきこえしかば、あぶれ者共の御詮議あり、且又庄吉事手前の有德にほこり、大名高家にもまさりし奢り、上をかろしむる所なりとて、日比の榮耀はみな其身のあだとなりで、かたびら一重より外、身につけたる者もなく、ゆくゑもしらぬ漂泊流浪の身となられぬ、こしゆんはたゞ夢のこゝちして、なくより外はなかりしが、庄吉樣のかゝるうき身と成給ひしも、思へばみなみづから故、たれをかこち誰にかはうらむべきと、あるにもあられず只ひとりしのび出、嵯峨のかたへさすらへて、大井河のふかき淵に、つゐに身をしづめぬ、富と貴きとは人のほつする所なれ共、財寶はわざわいのもといなり、其身安閑として、一生無異をたのしまんには、まづしきこそましならんと去人のいはれし、

近代長者鑑卷之第一終

近代長者鑑卷之第二

○河狩の魚とつてもつかぬ買物

人間の貧富は、天よりなしあたへ給ふ所にして、人力のおよぶべきにあらず、冬は繻絆ひとつ、夏は丸はだかになつて、是よりは、ごふもうすぎの仕様もなしと足手をさかさまにして、ばら〳〵鳥と同道、暮には星をいたゞいて、あたまがちなるすぎわひ、人の金もふけは、中にてかちをとし、こけた所では雪踏のかねをつかみ、道におちたる芥わらを、もとで入らずに錢ざしになひて、道をも只はあるかず、女房は夫の肌着の腰だけなるに、すそはふる前垂をして、はだへをかくし、ちいさき子をせなかに負て、ゆぶり〳〵奈良苧をうみ、木綿糸をくつて、せめては世帯のたしにもと心をくだき、あひ借屋に鋸末ふすぶれば、背戸の入口にたち涼むふりをして、けむりをやぶれうちはにて我内へあふぎこみ、これを手前の蚊ふすべとなす、これほどぬけ目なくかせぎても、すぎにくきは浮世、釼の刄をわたるやうなさかなしみて、わづか女夫の身すぎさへ仕かぬる者多かるべし、これをおもへばそれぞれに、召つかひ者をあまたかゝへ、家居美々しく、身には結構なる小袖の、ゑりかず五つ六つそろへ、遊山遊里の酒にうかれ、したい事してあそびながら、しかも大分の金銀をのばし、一足とびに千里ひとはね、世界の指折にのせらるゝは、人間のちからならず、天理にかなひて、佛神の應護あるゆへぞかし、されば田方新内といふ男、あつさもたへがたき夏の日の、草もゆるがぬ築山の氣色、今日は氣をかへて河逍遙と、おく樣をはじめ、家内大かた引きつれ、糺のもりに幕うたせて、其すゞしさ千金にもかへがたく、蟬のもろごゑに耳をすふなして、醴酒の作左といへるたいこ、醫者の隙田元酒まじりにのみかけ、引くやらうたふやら無性世界、天へもあがる氣な者共、いざ河へひたつて、諸子すくふて水なぶり、これ我等が好物と、めつたぞゝりにむらがりたち、石川や瀬見の小川といふ清きながれをにごらして、あれ〳〵あそこのしぐろふだる一むれ、諸子中間の惣よりあひ、これ面白い、一疋ものがすなと、作左がぬれたる水淺黄のかたびら、引脫でもつてまはり、裾には小石を重石にをき、水の細みをせきゝり、サアそちから追こめと、手ぐす

みして待しも、皆あての槌がちがい、打てもみやしやいでも取れる物にはあらず、一つものこらず迯うせて、素矢をひくのみか、帷子を水にとられて、やれ出合〳〵、盗人よ追はぎよとて、追かけしもおかし、此大せいがよつて、何にも得とらぬとは無念千萬、せめては談義坊一疋なり共と、こゝかしこをさがすほどに、醫者の元酒が、こゝに何やらあるはと、手をさし入れて、やれ〳〵ちなはじや、是はゆるせと迯てのく、一つも魚をとらでさへ、つみもむくひも後の世も、わすれはてゝおもしろや、みなぎる水のよどならば、いけすの鯉をさしみにつくらせ、手ぬらさずにくふ事、それは金子のおかげ、わるふつかふなと大わらひして、事がな笛とおもふ折から、松が崎花園邊の者共とみえて東へ木柴のかよひ、其かへりがけらしきが、どこからやら背中のはげたる古狐を追出し、こゝかしこへ追ひまはし、なんなく生捕にして、これはよいもの、京へもちゆきはなしぎつねにして、賣て酒にせまいかといへば、いや〳〵これは聞及んだふる狐。たゝきころせよといふ程に、口々にわめく所へ、新内はしり來り、それを此方へ賣まじきや、金子一兩に買んといふ、百姓どもこれをきゝ、當代みやこにての大盡らしき風俗、はや足本をみて、いや〳〵其やうに、やすふ賣物ではござりませぬ、みせ物に賣ても、大方直段のしれた物といへば、作左きゝて、是をおもとめなされて、おはなしなされんとの慈悲心にや、又お飼なされんためかといへば、いや〳〵ずんどかわりしおもはく、きやつを買て、おのれ此方の望みの通り、化てみするか、ばけねば打ころすがとせごしをかけて、こちの望みのとをり、色々に化させなば、よき一興であらふがといへば、これは旦那のおぼしめしつき、又ない圖じやとそゝるほどに、よいは二兩に買んといふ、時に中浦熊之助といふ男、これも今日のあつさ、涼みをもよほしてこゝに出かけ、最前よりきゝゐられしが、賣物ならば我等買ひ申さん、こりや三兩じやが賣らぬかと、つと手をあげらるれば、此者共大によろこび、おまけ申しませふと、さらり〳〵と一同に手をうち、夢ではないか消てくれなと、三兩の小判を湯になるほどににぎりすくめ、水あびたほど大汗ながし、在所をさしてとぶがごとし、新内はよこどりせられて、今日はなんにも縁のない日じや、とかく幕へ入

て、酒ごとにせよとてかへりぬ、熊之助は、草履とりの出來平にかの狐をひかせ、さても世には、情をしらぬ男あり、こいつに化よといふたればとて、手詰にしては、ばける事もかなふまじ、それをさいなみ慰んとは、さりとはむごき所存、あれは何者にやといへば、出來平承り、あなたを御存じござりませぬか、田方新内と申しまして、今西島にてのはきゝの大盡様でといふ、大盡にもせよ末社にもせよ、誠の戀は得知るまじとて、それより糺の森ふかく、そろ〳〵とわけ入り、人氣まれなる所にて、かの狐の繩をとかせ、われ今日見合さずは、なぶりころされてのくべきに、汝が仕合、はやくにげよとはなさるゝ、かの狐はとびあがる許り、五間程はしりしが、くるりとこちらむきて、さながらよろこぶかほつき、手を合せて三度までおがみ、くわい〳〵とのこゑと共に、木の間にかくれて迯うせしは、人間ものをしらぬなりと、世繼曾我の道行も、心にうかんでおぼえぬ、されば熊之助は、誠ある心から天理にやかなひつらん、又きつねを助けし功徳にやよりけん、是より物事心にかなはずといふ事なく、順風に帆をあげて沖こいだ仕合せ、夜にまし日にまし、金藏にうめきが出て、家には朝夕湯けむりの、立賣とかやいふ所に金銀をちりばめ、貴人高家にも立ちまじりて、おもてに乘馬をつながせ、釣臺のたゆる間もなく、今の世の大福長者と人にうらやましがらるゝは、善根のたねをまきをかれしゆへなるべし、

〇寶の山うへのしれぬ分限者

武藏野やお江戸の繁昌、京大坂とは又かはりて、大名小路の花麗さ朝日のつやをまして、數百町たちつゞき、見付々々の御門は雲にそびえてかゞやきわたる、本町石町の呉服見世、日本橋筋のあまだな、一切の賣物、何にことかく物なく、風呂も一町に五六軒ほど、蕎麥切屋も十軒ほどづゝあれど、いづれか隙そふなる所もなく、葭原三野のさわぎ、又都とは各別世界かねの生る木のはゆるといふは、今のお江戸の事なるべし、中浦熊之助は福徳の三年目、金が友よぶ村千鳥の、あとから湧いてくる身袋、寶の字のものが藏に何んばいかみちて、世界の珍器珍物なにゝ事をかくものなく、漢の武帝の反魂香のたきさし、楊貴妃のげいしやういの舞扇、孝謙天皇の二丈五尺の大夜着、

これはぬいめなしの錦なるに、道中五十三つぎ、宿々の出女、馬奴のたはむれまで、ありくと見るやうにあらたに素縫にぬはせぬ、七珍萬寶とはこれなるべし、され共身の榮耀にふけらず、世の人のごとくに氣隨意ばかりをもとゝせず、此程は公用につき、江戶おもてに下向して、お屋敷がたにつとめ、御機嫌をうかがひ、大かた用事も仕舞ひあげしかば、久々のお氣ばらし、ちと葭原へんへ、旦那の出かけすがたが拜み申したしと、末社の菊田六之助、めつたにそゝりをかくれば、われ大盡とよばれながら、此度よしわらへ、足ぶみせぬもいかゞなり、都の小判のひかりを、あづまのはてにかゞやかして、こがねの花をふらすべしとの給ふやいなや、末社どもがさはぎ出し、はや御ふねの用意、飛紗綾の地紫、秋の野を友禪のほそ染にしたる舟幕、御座の間には、茶段子に源氏繪を繡縫ひにぬはせし、幕柱はゐんぎんにてつゝませ、長さ九番まなかの猩々皮を氈にしき、靑黄赤白黑の五つがさねの蒲團のうへに、鷹揚に坐し給へば、菊田六之助、蟻俣長角、南無藥師の直庵、鉛の四郎兵衞、鉦の吉平、藥鑵の新介、鷹首の小兵衞、きせるのつぶれなどゝて、京にて名どりの末社十八、江戶にて口きく末社十五人、以上三十五人の末社共、大盡をとりまはし、三味線三てう、順風にこゑをあげて、うたふほどにのむほどに、せつながあいだに御つきあり、揚屋に御入りあれば亭主をはじめ、家內御むかひに出て、穢で庭をはきゝの大盡、遠いみやこから、小判をまきにお下りなされた、山吹いろをくれなゐの、そこらはずんと見ごとな儀じや、ずいぶん御ちそう申せといへば、これはかたじけありあけざくら、いづれの花をかよびませんといふ、今このさとにての全盛金山樣をおのぞみ、はやくといへば、あなたは今日も住吉屋に御出で、大盡樣は西國がたのといふを、熊大盡きこしめされ、田舍のやぼてん面白し、何ともらふてくれまいか、そちが今日の一はたらき、こりやかけ出せと黃な物十兩、ありがたのようがうや、伊勢すみよしやの酒に邪魔いれ、我等つかんで參らんと、一さんにかけ出しけるが、しばらくあつてはしりかへり、ごふもいごきのとれぬ所を、さまぐ舌にほねを折らし、こちのものにいたしまして、はや御出でといふ下より、太夫樣御來臨、そのほか名代の女郎二十五人まで、とりよせて

の大さわぎ、すゑ〴〵庭の者共までうれしがるうへに、またうれしがる物を、めつた無性にまき給へば、かたじけないを口々に八百ばかりいふて、何もとらげの猫までが、まはりぬるもおかし、熊大盡御機嫌うるはしく、今三十日ほどは、われ當地に滯留すべし、座中の女郎こと〴〵く其間はあげづめ、もし又日限のびたならば、たとへ二个月三个月、一年二年が百年でも、其間はあげづめぞと、ばつとしたせんさく、別して亭主がよろこびわらひ、中風ほどわらひ出し、此里はじまつて又ない圖、さすがはみやこの大々盡樣と、めつたのぼしにのぼすほどに、小判のふる事雨とみるまで、難波の椀久にも亦百わりもかたこす大盡、さすがはみやこ人なれや、

〇日本廻國好色修行の男

蘇卷は新野にくちなはをやしなひて、仕合心にまかせ、にはか長者となり、歸係は猫をころして、其むくひ立どころに、寵愛の一子ねこつきとなつて死せり、惣じて生ある者には、むごくあたらぬものぞと、さる寺の長老の、めづらしさふに高座をたゝき、あたまなでまはして、とかれしは古き事ながら、よく〳〵耳のそこにたもち、心を入れてきゝをくべき事ぞかし、これをわるふ心得れば只なにかからも、よろこばす事を善根なりとおもひ、揚屋末社にまきちらして、かたじけなひをきかぬ間もなく、これほどの功德はあらじ、うか〳〵とねぶつばかり申すが後生ではないと、わるずいなる田方新內、みやこの中の色ぐるひも、今はめづらしからずと、伏見の撞木、浪花の新町、千守高須柴屋町までの色をつくし、我一世の灌頂、江戶のよし原をと心ざし、鬼燈の小六、鼬の才兵衞などいふ口きゝの末社をともなひ、此間江戶にあつて、三浦の金山にうちこみ、日ごとにかよひ、是非うけ出すべきおもひたち、され共京都の身袋も、今はあきがらとなつて、借銀にてのはり物、何共其てだてなく、さま〴〵ともがきしが、鬼燈の小六が才覺にて、京の身袋をかき入れ、千五百兩の金をかり出し、金をうけ取やいな、さあしてやつたとよろこび、此きほひにあげ屋へかけ出し、いかなる金山にても、われら根引にするきざし、そこらはなんぢをたのむとあれば、亭主聞て、されば金山さま御事は西國がたのお侍衆、いかふおのぼりなされまして、きのふより請出さるゝ相

談、大方かたづきそふにといふを、皆までいふな、金づくならば百萬兩でも、只今こゝにつむ氣ざし、親かた三浦が手前へも、ずいぶん見事にさばくべし、こりや、京からとりよせた小判の口あけ、ずいぶん一はたらきしてくれと、まづ二十兩はづまるれば、亭主よろこびかけ出し、あちらこちらともがきしが、かたで風きつてはしりかへり、はやおのぞみのとをり、旦那のお金の御威光にて、西國の大盡はうは手をこされて西の海へ、さらりらちがあきまして、身請金九百兩、ちとおほめなされませいと、酒呑童子がくびとつたより、大きなかほしていへば、ひとへになんぢがはたらき、過分々々と、それより揚屋の內は上を下へとかへし、すでに一坪相すみ、太夫樣御出、その外やちよ、もろこし、はな鳥、玉の井、小むらさき、ていか、清原、せの井など、名とりの女郎一座にて、島臺に、金銀のかはらけ、高砂の尉と姥は、ふるいもやうながら、あひもかはらぬが賞翫、ころ〳〵にうたふやら、立てをざるやら、小判はむしやうにまきちらして、ちりも灰ものこらぬしかた、ようはあれほどに、分別もなふつかはるゝこととじやと、末社の才兵衞も、もらいながら

我を折りけり、かくて今日のさわぎ、めでたいごかしの大酒、大盡をはじめ、いかなるのみ手の末社共も、こと〳〵くゆきつき、前後もしらずなりたしに、千秋樂にはたみをなで、萬歲樂にはいのちをのぶ、さつさつのころに目がさめ、才兵衞あたりを見まはせば、大盡をさきとして、末社共は醉ふし、金山をはじめ、ありし女郎はひとりも見えず、いくつか立し燭臺の、火さへ消てくらやみなれば、これはわるじやれ太夫樣、玉の井樣、八千代樣、その手はくはぬといふうちに、河なみの音ごう〳〵と、富士おろしはげしく、身にしみておぼえしかば、にはかにけゃんし、何共がてんゆかず、いそぎ大盡、その外の者共をゆすりおこし、これはどうじや、夢ではないかとあきれはつる、新內をきあがり、われと酒にゆきつきて、とろ〳〵とね入りしに、金山わが枕もとに來り、われをまことの金山とおもふかや、なんぢ先年みやこにてわれを買ひとり、さま〳〵さいなまんとせしを、中浦がなさけにて、あやうきいのちをたすかりたり、さだめてわすれはせまじ、われはおかねぎつねとて、御影のもりにすんで八百年の歲霜をおくる、以前のうらみをはらさんた

め、今此江戸までつき下れり、みやこにてさま〴〵の色里にかよひ、いろ〳〵の女郎にあひしも、みなわれなりしといふ所を、なんぢにゆすりおこされたり、しかるうへは此間金山とおもひ、うか〳〵とかよひしは、みな狐めがなすわざ、無念千萬の仕合、それとても人間ならねばちからなし、それはそふと、なんぢらが酔は、何んとさめたかといへば、はて其酒からが皆ばかされたので、何をのんだやら、しれますまいといへば、まことにそふじやと、あげくのはてには笑ひになしぬ、こゝはそもどこであらふ、たしか淺草へんかと存じますといへば、此やみの夜に旅宿までかへらんは、さても難儀千萬と、おもしろい事おかしげも、みなゆめとさめはてゝ、とぼ〳〵としてかへりしが、金山を請出したのは、前後みなばかされ仕舞、あとかたもない事にて、千五百兩のかねをかりしは、判形までたしかなこと、其のこりとて一歩ひとつもあらばこそ、さてもごふよくな目にあはせおつた、

〇根引の金山ほり出しな女郎

熊大盡は、御歸京のもよほし、太夫金山をみやこへの家土産にと、八百兩の耳をそろへ、物の見事に引きぬきたまひ、道中すがらの御なぐさみ、乘物四丁を打合せ、四つのなかのへだてをとつて、内を一座敷になし、四方へ六つの棒をとをし、六尺三十六人、むかでの足のはこびをさせ、その内での酒もりは、又うへもなき榮耀、極樂の出見世かとうたがはるゝばかなり、さても田方新内は、命から〳〵、江戸を夜ぬけににげのぼりしかど、千五百兩の負せかた、早速上京して、家屋敷諸道具まで、根こぎにわたせといひしほどに、方々よりこれをきゝつけ、負せ方の者共、われも〳〵と手形をもち出、公事にせんの宮にせんのと、枝に枝がさいて、ちから及ばず身袋さらりと相渡し、手と身とになつて、今は結句心にかゝる雲もなく、雨ふつて地かたまると、へらぬ口のいひぶん、浮世の嵯峨といふところにあさましき住居、色つくりし男をやめ、惣髪にしてけづりまはし、やぶれ紙子に加賀の八徳、今椀久ともいひそふなかつこう、是皆野狐のわざなれば、わが怨みは狐にありとて、その名を田方怨狐とあらため、わびしきくらしに、秋の氣色の物あはれなるをながめ、いにしへの遍照が、われおちにきと詠せしは、釋迦堂のまへの三文字屋のすまこかや、その時代

名どりの女郎花、それに打こんで、一たびは大に仕そこなはれしよし、たしかに宗祇の說なりとかや、これをおもふに、男たるものは、出家も俗も、一度はかふした身になること惡性のおさだまり、なげくべきにあらずと、こゝろにて心にちからをそへ、きせるくわへてゝんがうなど、煙にふき出しゐるところへ、南無藥師の直庵たづね來り、まづは久しうで御意得まする、かうしたる御住居さぞ御不自由に候べし、委細はゆるりとあとよりかたり申すべし、さて我等に目をかけらるゝ旦那中浦どの儀は、かねておきゝ及びも候べし、何の御用かは存ぜねども、そこもと樣にちとお目にかゝりたきよし、拙者にたのまれ候なり、只今御大儀ながらあれへ御出下さるべし、さだめて御身の御ためあしき事は候はじ、いざ御供つかまつらんといへば、狐怨もまづ何にもせよ、よさそふなる事ならば、垣になりともとりついてと、心のうちによろこび、着かへん衣裳もなければ、紙子に八德そのまゝにて、直庵と同道し中浦かたにゆけば、熊大盡出あひ、そこもとの儀は、內々うけたまはり及びたり、江戸にての事共、つゝまず御かたりあれとの給へば、狐怨なみだをながし、今さらむかしにかへるなみ、うつけの頂上を申上んも御はづかしながら、三浦の金山にくびだけにあまりのぼりつめ、千五百兩のかねを才覺し、請出してみやこの花にと存ぜしに、皆野狐のしわざ、大分の金銀を化されとられ、今この身になつての無念、人樣につらむけもはづかしく、生き甲斐もなき仕合と、つゝまず委細をかたれば、熊大盡よこ手をうち、其野狐のことは、貴殿も覺へ候べし、我その命をたすけしゆへ、其恩を報ずるためとて、それよりしてさま〴〵と、われに幸をあたへ、おもふことながれに棹をさすがごとし、折々は立あらはれて、それがしとは、ことばをかはす時もあり、何とぞ御身の怨のほごをも、よろしくわびごとしてまいらせなば、今より御身の上に別條はあるまじく、さてその金山には、われふかく馴染み、請出してともなひのぼりし事は、さだめて聞も及ばれつらめ、是には樣子あつての事、貴殿、金山故に身をうち給ひし段々、よそながらきゝ及び、色ぐるひする身は、たれとても同じこと、今日あつて明日をもはかりがたし、身をうち給ひしは、覺悟の前にてあるべけれ共、金山を手に入れ給はざりし

事、さぞや本意なくおもはるべし、われ金山を請出せしは、一生のはなとながめん心にあらず、その節貴殿は、もはや上京のよしきゝしゆへ、都のつとにともなひかへり、そこもとへ進上して、年ごろの本望をとげさせ申さんためばかり、是皆貴殿の心の中を、推量つていたはしく、かくははからひ申したり、幸我下屋敷を一个所貴殿へおくり申すべし、金山ともろ共、その屋敷にてくらさるべし、近比慮外がましふ候へ共、今よりわが方に出入、酒伽となつてたべ、一生不自由はさせまじとあれば、狐怨はたゞ夢みしこゝち、又例の狐ではないかと、うたがはるゝばかり、さて忝し共ありがたしとも、とかふ申すは礒、たもとはなみだの淵となれり、かくて熊大盡、金山部屋に入り給ひ、右の次第をかたりて、太夫にがてんせさせ、狐怨に引合せて、まづ婚禮のまねび、千秋樂といわひおさめ、さて着類諸道具、何に事かゝぬやうにそれ〴〵に用意し、かの下屋敷へ屋うつりも相すみぬ、狐怨はおもひのほかなる仕合せ、金山まで手に入れて、それより朝夕熊大盡のかたに出入り、末社大將となつて、樣太鼓といひはやされ、よいなぐさみしての金もふけ、又あるまじきことぞかし、熊大盡のおもひたち、われ都にて大々盡とよばれながら、末代までも名の殘る大さわぎをせぬことは、いかさま無念のいたりなりと、田方狐怨、苅田六之助、蟻俣長角、南無藥師の直庵、藥鑵の新助、鉛の四郎兵衛、鴈首の小兵衛以下、末社百二十人をめしつれられ、西島かたばみ方になりこみ給ひ、三十日が間くるわ中惣あげとの仰出され、てい主藤左衛門は、あまりの事に目をまはすばかり、これは神代よりといふはおろか、須彌の四州を、とをし駕輿にてまはつてみたとも、又あるまじき圖とくるわ中のにぎわひ、其間ほかの客はたれによらず、一人にても大門より内へふみこむことかなはず、よき緣あれば大切な切手をもらふて、日ごろはきゝの大盡も、よそながら見物に入りぬ、その外中浦かたへ、緣のなき大盡は、せめてはお庭なり共ふみたい事じやと、足ずりしてもかなはず、さてもかねといふものは、けつこうなものじやと、外の大盡たち今さらおもひしられぬ、惣揚のあいだは、熊大盡屋敷より、毎日銀箱何十荷かくるわへ持はこばせて、さてもあればある物と、ずいぶん目のこへたる太夫天職たちも、ありたけ我を折

てすてられしとかや、熊大蟲もあまりにそやし立られて、おそらく金銀の威光をもつて、心にかなはざる事なし、慮外ながら天を地にし、夜を晝にし、銅を銀にせう共自由自在、何と小判のせいりきは見事な物ではないかと、よつぽど聞にくい身じまん、全盛人のねむりをさまさせしが、果はどふなられたかしらぬまで、

近代長者鑑卷之第二終

近代長者鑑卷之第三

○七十五日の長たびはこれぞ都の初もの

仲尼の聖孟軻の賢なるも、賣らねば金銀にはならず、一生道をたのしみ、德をかくし身をおさめたるばかりにて、冬さむきとて、玉子のふはくさへ、口もとへよする事もかなはず、夏あつきとて、素麪はさてをき、葛入りのところてんさへ、賣て通るを買事もかなはず、喉をさすつて堪忍ありしよし、何とやらいふ唐本に見えたり、それをおもへば、道德仁義もその身のためには、貧乏をまねくふる扇、やぶれ紙子のうらつぎにもならぬ身袋をして、今日くらせばあすのいとなみをあんじ、夫は足に草鞋をたやさず、とりあつめて百か二百が物を一荷の棒にかけて、朝から晩まで賣りまはり、女房は内にゐて鍋あらふて、初夜時分まで夕飯も得たかず、男のかへるをまちゐれば、腹はむしがかぶり、子供はまゝくわふとひとりがいへば、おれもくわふ　われもくわんと口々にせがめど、踏込の棹のはしに、かけてある米からとは、かりりちんとして北風にまふてゐるなど、さりとはせはしきくら

し、このやうな貧家の渡世、今時の賢人はよもやすきはし給はじ、とかく大切な金銀を、たつぷりとわが物にして、榮耀榮花をきはめ、住みたき所にすみ居たき所にゐて、したきことしてくひたきものをくひ、うへ見ぬ鷲のおほへいをかまへ、旦那樣大盡樣と人にあがめらるゝ事は、いかな孔子でもかなはぬ所作と、身自慢なる男は不破の關林三郎とて、かくれもなき大がねもち、四方に四滿の藏をたてゝ、四つ寶をつめをき、殊にその身さる大家につかへて、奉公に年月をおくられしが、今ははや一昔、茶の間に召つかはれしちよといふ女に、折々のたはぶれ、なさけのかずつもりて、このおなかにひとりの女の子をもふけしを、よその手前もはづかはしく、靑山へんに住し熊手の角助とて、まづしき者のかたへ、金子三十兩つけて養子につかはしをかれぬ、この角助といふ男はものにかかりの大よくもの、かのむすめの子を、十二三ばかりまでは手に入れてもむやうに、大事にかけてそだて、女房はとぎみがきにかゝらせをきて、さりとは寶子でさへ、あのやうにはないものなるに、いかいいとしがりやうじやと、むかひどなりの姥かゝも がを折てゐしに、いつの間にやらくつわへつゐ賣つてやつて、大分のかねをあたゝまりぬ、林三郎は此ことをほのかにきゝ、さま〳〵せんさくせられしほどに、角助もぬけつくゞりつ、とかふいふてみても、龜の尾に灸をすゆることゝち、ぜん〳〵にしりが熱うなつて、つゐ夜ぬけにしてうせぬ、林三郎は、どこを持ふも とらへ所もなき仕合、かんにんのむねをさすり、是非なく其ぶんにてすぎぬ、そののち仕官も苦勞なり、一生樂々とくらさんと、大守に御いとまをこひ、樂人となりてゐられしが、江戸は日本お大名の津、物ごとかしがましく、日には七たびほど、やれ火事よ本鄕かせよと、見世を仕舞ふやら穴藏かたづけるやら、さてもせはしき所、商人などの身をかせぐには、又うへのなき所なれ共、一日も遊人の住むべき所にあらずとて、身袋さらりとしまい、上方へのぼるべしとて、乘物七丁、のりかけ十五、段子、天鵞絨、唐織にくれなゐのいろをまじへ、蒲團張にはなをさかせて春の日の長たび、小諸ぶしも、耳にきゝなれてはおもしろからず、上下四百八十人此外に、成程律儀之助といふ男、一日路づゝさきへ宿わりの支配人、ひろき東海道をさゞめかし

て、五十三つぎの者どもによきかねをもふけさせ、金銀をまきちらして、いきた如來樣とよろこばせ、道中の日かず七十五日、能因法師とはうらはら、お江戸をばかすみとともに出しかど、秋川ぞふく白川ばしを越えて、七夕まつる前の日の八つ時分に都入り、江戸の小判がなりこむはとて、京中に出立を燒せ、三條通に棚のかしちんをとらせしは 町人のぶんとして みやこはじまつての初ごとなり、かねて京の只中に、大屋敷をもとめ結構に普請して、夕日にかゞやくばかりなるに、すぐにそれへ御入りあり、旦那樣々々々とみやこ人にもてはやされて、 さても金銀のいきほひほどすさまじき物はなしと、世間の人の目をうばひ、うらやましがられ給ふは、さだめて さきの世の善果によつてなるべし、

〇注文にあひ生松のくらゐの女郎

夙によはに 心の玉をみがき立て、一點もくもる所なきときは、人の心の底も見えぬき、十年のちのことまでもあり〳〵と見えとをりて、 後の世までも人のかがみとなる事なり、目あつて物をみ、手あつて用をととのへ、足あつてゆきたい所へゆき、口あつて辯舌をこねまはせば、皆十人なみとおもへど、大分高下のあるものは、たゞ智惠のひとつなり、さても不破關林三郎、あづまに住みわびて遠い上方にのぼり、みやこの秋の色にめでゝは、高雄通天の紅葉をながめ、廣澤指月の月をあいし、嵯峨野にすゞむしをたづね、春は祇園に幕をかすませ、御室の花安井の藤、かゝるあそびもめづらしからずと、 折々は色里へお成、清水五郎、作彌の久兵衞、とたんの小助、 小豆の義平、水銀の長六などゝいふ、京にて指にをらるゝ末社共、大盡をいさめ奉る、又ある時は芝居の座中をのこらずよびて、お庭の舞臺にてさま〴〵の狂言、蒲團の上に ねてゐての御見物、されば世界の内は、一切のこと、 何が心にかなはずといふ事なく、 金銀のひかりほどすさまじき物もなし、あみだのひかりのするにつけ、とかく錢ほどのいとくあれば、未來のほどがおもわるゝと、ある親仁のなげかれしもおかし、ある時 とたんの小助、ふとまいりたれば、 唐子の間の釣花生に、手づから花をいけておはしけるが、なんと小助、此中はなせ見えなんだ、なんぢにたのみたき事あり、是へとおそばへめされ、いや別儀にもあらず、かはつた趣向をお

もひたつた、たとへば京の西島浪花の新町、ちもり高須撞木にもせよ、奈良の木辻はりまの室、いづくにもせよ我のぞみの女郎あらば、根引にしたき氣ざし、まづ面躰おもながにふたかは目、鼻筋をしとをつて大躰難のない人相、ひだりの乳のうへに黒子ふたつ、右のみゝたぶらのうらに、黒子とはまぎるゝやうなる瘤あつて、年のころあひは二十ばかりなればよし、此とをりの女郎もあるか、ずいぶんちからにまかせ、色里といふいろざとをたづね、もしもたづねあたりなば、なんぢが目きゝのうへにて、金にかまはず請出すべし、これはいかふ事むづかしき大役、なんぢならでは此智慧を、もつたものはあるまじと、繪すがたの注文に、金子五千兩そへて御出し、なを〳〵金子は入用次第、いかほど成ともいひこすべしとの仰、小助はあまりの事にものも得いわず、しばらくはほんがりと、口をあいてゐたりしが、何共わたくしごとき愚鈍第一の者に、かやうなる大役仰付け下さるゝ段、身にあまりかたじけなし、此うへは命をかぎりに長崎の丸山、朝鮮熊川のいろ里までも、めぐりめぐつて尋ね出し、引ぬきまいり候はんと、お請を申して宿にかへり、まづ何がなしに、夜着引かぶつてむねに手を置、いろ〳〵と思案するに、一つも合點のゆかぬせんさく、どこから推をしてみよやら、さりとは達磨大師の今に息災でゐ給はゞ、ちと悟つてもらいたいと、墨繪のかけ物をながめてゐても埒はあかず、エヽいかさま、かねぐ〳〵にきゝ及びたる一物あり、十が十ながら、これに違ひはあらじとおもひ、それよりも打立て、西島撞木の色をみつくし、我物いらずによいなぐさみ、これよりなにはへと心ざし、越後町、東の折屋方にゆきて、扇屋の吾妻路といふ太夫、みた所注文にたがはず、年ばいもよくあひしかば、此女郎にあひそめしに、氣をつけてみれば、左りの乳のうへに黒子ふたつ、右の耳たぶらのうらにちゐさき瘤、ほのかにあらはれ出給ふ、ありがたの御事や、なをも奇特を拜まんと、いろ〳〵心をつけたりしに、赤地の金襴の肌まもり、これをみつけてよく〳〵見れば、鳥居のうちに三がひ松の紋あり〳〵と織付たり、これぞ旦那、林大藏の御紋、さてはこの女郎ぞとをしつけて、樣子をくわしくたづねしに、わたしはかふした勤めなど、するものでもござんせぬ、生國はお江戸にて、さる武家

がたのむすねなれ共、むまれをちよりして、まづしき者のもとへ、里とやらにまいりまして、それゆへくつわへうられ、幾瀬かつらいめにあひて、みやこをこえてはるゞと、此なにはまでさまよひ、今此里の色づとめ、さりとはつらいうき世、此まもり袋は、わたしがいとけなかりしころ、親のかたよりおくられしを、いのちにもかへまじと、朝ゆふ今に身にそへて、はなしまいらせずとあるを、その親御の御名は、何んとおぼえ給ふやといふ、さればとよ何の林三郎とやら、甚三郎とやらいひましたかと、おぼえましてとあるを、それこそ不破關林三郎様と申して、近年は仕官をやめ、遊人とならせ給ひ、今はみやこの御すまひ、なるほど此御紋にあひました、我等はあなたへ出入るもの、かやうの色ぐるひに、大分のかねをまくやうなものにてなし、このやうな御つとめとき丶及ばせ給ひ、世間の外聞をきのどくに、まづかうしたる御たのみ、そこらは我等智恵を出し、方々たづね申したり、いそいで身請をなしませんと、てい主伴左衞門をよびて、おやかた扇屋四郎兵衞に相談させ、何か八百兩にてあひすみ、即座に請出し、すぐにみやこへともなひのぼり、まづ我宿に入れをきて大盡かたへまいり、御注文のとをりの女郎、あづまぢ様と申しまして、難波津にてはき丶の太夫様にて候ひしを、八百兩にて請出し、ともなひかへつて候と、しのびやかに申せば、何んと注文にちがいはなきか、さん候御のぞみに兎の毛のさきでついたほども、かけたる所候はずと、かのまもり袋をさし出せば、御なみだをながされ、其方にとらするぞ、宿の妻にせよ、世間へかならず沙汰するなと、これより外は何の御ことばもなし、さすがは歴々の貴人、このおくふかさは、いかな小助も我ををりけり、

○後の名月は二千里の外千兩のひかり

さてもとたんの小助は、此たび太夫東路を請出せる發明、ずんと及ばぬかはつた所に智恵を出し、旦那林大盡のむねのうちをみすかして、人のせざるはたらき、殊に太夫あづま路を妻女に下されしうへは、林大盡ためには花聟、かれといひこれといひ、大分の褒美にもあづかり、いかふしたしき引きまはしをも、かうぶらんとおもひしに、あての槌がちがひ、其ほうびとては、古帷子一つももらわず、今までとかはつて、

念比らしき事もなし、何んとやらむだ骨をつたやうにおもひしかども、とかく智惠も金銀もたつぷりと持た大盡、おぼしめし入れこそあらめ、ながふみたがよいと心に了簡させて、うつら〳〵と日をおくるに、二年ばかりもすぐれど、是ぞと思ひあたりし事も、長月の十三夜、名にしあふのちの月見、軒端の風も音かはりて荻の葉をさはがせ、いつしか草葉にをきそむる、下屋敷の招月軒にて月見の遊興、座頭のちと市が三味線、さつまが女楠木、智惠のふかひたゝ中をかたらせ、のちには末社の作彌、小豆　水銀　淸水なんど、立ての曲おどり、のめやうたへや　一寸さきはやみの夜、たはむれてもてこい、もつて來た〳〵と銚子とらせて瀧のみ鉢のみ、秘術をつくしてのむほどにうたふほどに、餘念をわすれて極樂世界、歌舞のぼさつになつたこゝち、末社どもが輕口もんさく、後には懸祿を仕出して、我等は煎餠百枚、手をはなしてすこしもこぼさずくふて見せん、もしたべそこなふたら、この武藏野で五盃のくわたい、いや〳〵われらは其せんべいを、足の指にさしはさみ　あゆみながら、たゝみに手をさへず、ちよとうつぶいてはくひ、ちよとうつぶいてはくひ、少しもちらさずたべて見せん、いやいや拙者は饅頭百、八幡われらは豆腐を生で百丁と、興のさめたるせんさく、林大盡きこしめされ、なんと小助、此灰吹のたまり、一息にのむべしや、今こゝにてのんだらば、褒美に千兩はづむべし、もし又得のまずば、過代はこの重箱で酒五つのまさんとある、小豆のつき、われら座中の灰吹五盃でも七盃でも、其うへにたばこのすいがら、がん首のよごれ、灸のふたでも、義平、淸水五郞、水銀の長六など、千兩のこゑにとび腫物に張た膏藥でも、おのぞみ次第にたべんといふ、林大盡打わらひ、いや小助にのぞむには、此方見どころあつての事、あれはいかい奇麗ずき者、潔淨をこのむ生れつき、去によつての望みなり、かの唐の劉邕は瘡痂をこのみ、知福建院の權長孺は、人の爪をこのめり、そふしたすきなる相手に、このんでのますは兎に金棒、きらふ所を見こんでいふぞ、さあ〳〵のめとの給へば、小助もこれにはこまりしか共、よいは灰吹一つが、小判千兩、喉は鎌倉海道、やつてのけんと目をふさぎ、かほをしかめてぐつとのむ、大盡よこ手をうち給ひ、さてものんだり〳〵、是さかなぞと、木屋町

の御下屋敷を下さるゝとの御手形に、千兩のほうびをそへて出し給へば、小助は辛さもむさゝも屋敷と千兩とに打わすれ、かたじけないを、一萬百十三ほどいふて、大矢數の天下とつたほどよろこべば、外の末社はもみ手をして、ゆびのまたひろげて、待て居てもらちがあかず、扨もかたいきのしたあそびじやと、ふしよう／＼なかほつき、道理こそ、灰吹はよせ事、した心あつてのこと、小助は宿にかへつて、さりとては發明なる旦那、何ぞとふにも褒美のありそふな物を、とりしづめて二年をすごし、今此大ぶんのお取立、智惠には重々うへのあるものと、大にかんじ入りぬ、金銀あつて智惠あつて、よろづ打そろふたる　此やうな大盡は、千年も萬年も壽命にあきのない事なれど、不定のうき世、ほどなく卒中たち所にやれ醫者よ針よと、上下手にあせにぎりしが共、定業かぎりあつて、つゐにはかなくなり給ひ、一子林四郎、十八歳にて家督をつぎ、二代長者とあふがれしに、ふと色里にかよひそめ、わかげの上氣にまかせて、たいせつな金銀を土やら水やらしらぬ風情、めつたづかひにたゝきあげて、年五年たゝぬうちにしんだいからりちんと、さても見事なせんさく、咸陽宮もほろび時にはほろぶるもの、皆是時節到來と、へらず口にていはるゝもおかし、

○利生をあらたに三室戸の觀音

金銀といふものは、あれば澤山なるもの、その金がかねをよんで、中將棊の獅子のごとく、樂に居ながらもふけて、扨も重寶なるものなれど、ない段になつてからは、少々のかねは才覺しても、やけ石に水かゝつたことか、こげついて塵も灰もなふなる事は、鐵炮よりもはやし、不破闕林四郎、父のゆづりの金銀を、いつの間にやら水になして、火桶につかふ許り炭さえ買事がならず、かくなりはつるまでに、とたんの小助も舊恩をおもひ、ずいぶんと世話をかき、金をもかして色々やつかいにせしか共、かんじんの本心がくさり、鼻もちもならぬ男、異見をわるふきゝなして、後には小助ともちなみをきり、只ひとり身となつて、乃釜一つに桶一つ、やう／＼三帖敷のすまゐ、道具ひとつなふてさへ、足のばしてはねられず、此身になつても折折は、比丘尼ぐるひをたのしみに、丸太町といふ所のうら借屋をかりて、つくねの人形をして　かすかなる

世わたり、掛乞さへ見かぎつて、今ではせがみにもこず、物さびしきつれ〴〵、ふとおもひ立て、三室戸の觀音開帳を心ざし、きのふ五條から取てかへりし賣出し、三百をこしにつけ、たゞひとり大佛にさしかゝり、ながたらしい町を見つくして、伏見より宇治にとをり、三室戸にもふでゝにはかに無常ごゝろになり、われ今までの間、榮耀はしつくしつ、今よりのちは貧苦をはたくばかり、生きがひもなき浮世、はやふ𦾔をあけてこのくるしみをのがれんと、いつなひ眞實心をおこし、くわんせをんにみらいをたのみ、それより下向は舟にのりて、伏見京橋へとかへりしに、いまぞ最期と觀念し、心の中に、彌陀觀音の御名をとなへ、河へがはと飛入たり、折ふし五月雨ふりつゞき、水かさは大ぶんまさりぬ、矢をつぐごとき早瀨なるに、やれたれやらはまつたといへば、この渡し守横着もの、しれてからは事むづかしきをめいわくがり、なんでもござらぬ、皆の衆だまつてござれ、とかふいわしやると、皆の衆へも難儀がかゝる、おれらにまかしておかしやれといへば、皆々目くわせしてしづまりぬ、これも道づれのなきゆへ、ひとりたびはせぬものとは、今おもひあたりぬ、はるか河下にて株にながれかゝりしを、やれ河ながれがあるはと、所のもの共さはぎしに、煮賣屋の親仁いそぎ河へとび入り、やう〳〵と引あげて、まづ水をふみ出し、夫婦してさま〴〵看病しければ、仕合せと蘇生りぬ、煮賣屋夫婦よろこび、これ林四郎様、氣がつきましたか、わしは小助でござる、さだめて身のをき所なさに、入水なされしとおぼえたり、かうあらふとかねて存じ、さま〴〵異見を申したれば、それが氣に入りませいで、われ〳〵共ちなみをきり不通にはなされた、私もこなたゆへ身袋をからになし、今にてはこの仕合せ、かふなつた身にても、林三郎様の御恩のほどは、少しもわすれはいたさぬ、殊に女共は、はらこそかはれこなたの姉、なんの疎略におもひましよぞ、今より心を入れかへ給はゞ、われ〳〵何とぞはごくみ申し、似合しきかせぎにもありつけ申し候はんといへば、林四郎なみだをながし、さりとてははづかしや、死ぬるに死れぬいのち、今こなたにあふての面目なさ、萬事はゆるして下され、此うへはいかやう共、夫婦の衆の異見さし圖に、すこしももれはしますまいと、なみだは玉をつらぬ

けり、小助夫婦も泪にくれ、まづ一膳めしのあたゝかなるを、たかなしにふるまい、それより開帳のほどは煮賣の手傳ひさせしに、此間に林四郎工夫をめぐらし、浮世たばこ入れといふ手がはりの細工を仕出し、これより商ひにとりつきて、そろ／＼按排ようなりしが、此するゑはなんとあらふぞ、

近代長者鑑巻之第三終

近代長者鑑巻之第四

○隠居屋敷は金銀の山科仕合の峠

わけのぼるふもとの道は多けれど、おなじなさけのみねの月、太夫天職に打こんで、大分のかねをまくも絹屋の客引が、逗出の土もおちこちの、たつぷりと腋臭のある小女童と、比翼連理のちぎりをなすも、ともにみな玄宗皇帝の楊貴妃を愛せられし心、首だけのなづみは、すこしもかわりのなき物ぞかし、兎角ちぶん相應のたのしみ、やんごとなきお公家様がたは、それ相應に大内のおつぼねがたに心をかけ、歌にてくどき歌にてかへし、それは／＼花奢な事、それが定なればこそ、むかしの業平といふ色人は、二條の后をそそのかし、深草の少將は小野の小町をふづくり給ふ、されば清少納言、和泉式部、紫式部、赤ぞめの衞門、いづれかふかまのなきもなかりしよし、お大名がたは、お大名のむすめ子を手に入れ、金もつた大盡は、かねもちのむすめをむかへ、手代はこしもとゝの出合ひ、折々小宿によいゆめをむすび、久七は飯焼のたけにねんごろして、同じ鱰のせんばをもるにも、金杓子に

心をさせて、鹽のからい姝脊、是を命にたのしみ、駕籠かいてすぐる者あれば、乘りてをさする者もあり、世界はそれ〳〵に、さてもわかちのあるものなり、とかくお公家樣よりも、お大名よりも、町人にて金銀澤山なるほど、結構なるものはなし、さればみやこ名だいの分限長浦篠右衛門、果報は有德なるうへに、成仁の一子中三郞、器量よく利發に、公儀つきよく氣だてよく、百人にも稀なむまれ、しの右衛門は、諸事を中三郞にまかせをきて、山科へんに隱居所をかまへ、間口五十間に、うらゆき六十間の大屋敷、をもてつきは成程孔道に、さのみ目だゝぬ臺擁、玄關より廣間、段段にたてつゞけて、芦雁の間、雪松の間、鷄頭の間、野分の間、いく間か座敷をたてならべ、詩仙の間は、白居易、杜子美、李太白など、つく〳〵さした唐繪、さながら賢聖の障子に似たり、みな雪舟、雪村、探幽などの筆にて、今時のものにあらず、いづれの障子にも、四寸まはりほどなる眞紅の房緒をつけて、引手はさし渡し六寸はかり、懷澤瀉の內に、むすび雁金の定紋を、金のむくにかゞやかせ、違ひ棚床ぶちも、皆ゐんすに彫物させ、廊下橋はいつさもなふ、三階までもあかつたこゝち、取つきには門あつて、凌雲といふ額あり、此廊下をとをれば櫻山、紅葉山、躑躅山、唐松山など一目にながめつくして、四季の氣色をうつせり、築山をすぎ、泉水のながれにつきて、そろ〳〵奥に入れば、井戶屋形に、姝脊の井といふ額ありて、しやれ木に紺靑をちりばめ、紫檀の井筒に、黑檀のしのび車、滅金のかな物、紅と白と大白糸にて組交せの釣瓶なは、このやうな水になるは、大躰の仕合ではあるまいと、えしれぬ事までに氣をつけてゆくに、いかふ引かへて、杉の丸木柱に茅葺の小門、德に入るといふ二字を額にかけしは、大學の心にやと ひとりうなづいてゆくに、二十四疊敷の庵室あり、眞中に本尊の座をかまへて、しやれ木のうつぼを厨子となし、中に莊子のねむれるすがた、金襴の水引は皆胡蝶の織物、こゝは學問所と見えて、出し机には柳文浯法などをとりちらせり、大明一統志、萬姓統譜、三才圖繪、二十一史など、さまざまの唐本は山のごとくにうづだかく、天井の龍は縫殿とやらんの筆、いきてつかみつくやうにおもはるゝ、それより廊下をつたへば、次に歌の間あつてこれもわらぶき かはつき柱、あじにゆがんだを

物ずきに、ずんとわびたる氣色、しやれ壁のすさは、一尺あまりもやあるらん、寒竹のぬれ椽、軒に蘭をつらせて、庭には秋の野をうつし、萩薄萱花すゝきも、おのれなりなるを愛し、机には近代御會の歌をとりひろげ、浜江類句などは、本箪笥のかきつけにてしりぬ、つねにともなはるゝも、かりそめにも御所がたのまじはり、吹屋の右大臣、手振山上の無大臣、なんの大事かやれ大納言などゝいふやんごとなき人にまじはり、詩會 歌合 鞠 楊弓、あたりのもてはやしにも、生た極樂屋と名をよびて、さりとは結構なるくらし、若世の中三郎は、今の身袋わが物になつて、たれにおそるゝかたもなく、死一倍の金も、親仁いまだ息才なれ共、さらりと埒をあけて物の見ごとなこと、それから高なしに色ぐるひ、金銀ほど調法なるものはなし、そも金の躰は、西にあたつて其色黄なり、黄なるは小判の正色、四季にとつては秋とさだむ、秋は草木をからして世の中の無常をみする、死んで貴い所へまいるといふも、すなはち此道理にて、佛の躰はかねにあたり、西方におはします、すればそのとふさい所といふ極樂世界は外ならず、小判のひかりで、上品女郎を自由にこなす西島にこそと、わるずゐなさとりをして、毎日くるわに出でさせ、西方を貴翫に、揚屋町にても西側の西川屋へなりこみ、一もんじ屋の金太夫と、三つがさねの蒲團、段子の夜着のうちから、名の木のかほりをきゝ、名代の太夫達に紅の褌をさせて、七の椎まで尻つまげさせ、お寶ぼうをふらせ、末社のすつかりに、灸のうみすはすなど、大躰のかねの光りでは、いかなく／＼まねのならぬせんさくぞかし、

〇水品の障子は見え透ても底のしれぬ身袋

近年世間、いたりせんさくになりて、奥様は古金五両かさねて、指櫛にさし給へば、下女中居までが、茶繻子の帶をむなさきに太鼓むすび、久三も桐のさし下駄、手代は龍紋の小袖に、紅のかくしうら、夏は糸きびらに生絹のはをり、袖下たんきなるに、ひら打尺長のむなひもを しかもみじかふむすびあげ、茶宇平彌左衛門だちのしも袴、是ぞ両替町風とかやの一流儀、それほどいたつて來てからは、その旦那してくらす人は、ゐんきんの帶、枝珊瑚珠の杖にても、もたすまじきものにてなし、火にあたつて餅くふやうなと、これをよきたとへにいふは とつとのむかし、信長時代

まだ世間の土氣も、ふかい時のことなるべし、今ごき登りつめたるいたりからは、はるかに下に見くださるゝ、庭の築山も色なき梢となりて、松のしやれたる枝ぶり、伊吹木の地をはいしも、いつしか雪をいたゞきたる氣色、これぞ冬のながめ、春秋にもおとるまじと、隱居篠右衞門は、雪松の間に、段子唐織、紫、欝金、さま〳〵の蒲團、五つかさねさせ、まくらに寄ながら、水晶の障子の內から、降積る雪を御ながめ、座敷に四所、鬼足の火鉢に炭火をおこさせて、微塵も寒氣を內に入れず、さりとは金銀の威光、このやうな榮耀も、すればしらるゝものかとて、皆人あきれはて、喉のかけがねの、はづれし者もありしとかや、しかる所へ、お出入りの太鼓醫者、生田好牟來りて、袂の浦多三郎殿へ、明日の御光臨、かならず御かはりなく、御越しあそばされ下され候やうに、よろしく下拙をたのむよし、申しこされ候といへば、されば〳〵、兼日よりのけいやくなれば、明日は多三郎かたへ、ゆきてなぐさむべしとて、御機嫌もよろしく、其日は夜に入るまで、好牟 梅雪軒などといふ、地下の歌學者まじりに、御伽の衆七八人、當座の題にて面々の詠歌、ことばの花もにほやかに、世々のうた人のいひのこせしをひろひて、いづれかおもしろからぬもなかりき、あけの日は好牟 梅雪軒など、十人ばかりめしつれられ、多三郎方へ御來臨、爐路よりしづかに御入りあれば、亭主のよろこび、座敷庭山のてい、心のいたらぬくまゝでも、隨分氣をつけたる物ずき、さま〳〵の馳走、料理に珍味のかずをつくし、古いことばなれ共、善つくし美つくしてのもてなし、暮がたに御立あれば、てい主は今しばらくと、眞實のこもり多きかほつきなりし、次の日好牟參りて、きのふは多三郎、心をつくしてのもてなし、つねの料理も薪にて、たきたる物はめし上げられず、皆炭火を御用ひ候よし、かねてうけたまはり及ばれ、昨日さし上られし料理は、みな炭火をもつて、とゝのへ申され候ところに、あんばいよろしからず候ひしか、いづれをもめし上られず、亭主ことのほか、氣のどくがられ候ひしと申せば、篠右衞門きゝ給ひ、いや〳〵多三郎もてなし、なるほど滿足におもふなり、そこ〳〵までに氣をつけて、わが好むところをうかゞひきゝ、炭火をもつて料理をとゝのへられし事、ちかごろ祝着せしめたり、さりながら炭

火にて、料理をこしらゆるといふも、まづ炭火をよくおこしたて、一息とくとさかんなる、その火氣をぬくときは、炭火のせいよく煉れて、ものを煮るによろしきなり、それへ料理をしかくるときは、わが常にこのむところに出來れども、はじめよりしかくるときは、おのづから食物に、けむりの氣あつてくさし、されば多三郎、きのふの料理も、それほどまでに心はつけられしかども、炭火を煉らざりしゆへ、けむりの氣食物に入て、よろしからざりしとの給へば、好牛も我を折て、又多三郎かたにゆき、右の次第をかたりしかば、多三郎手をうち、さても〳〵人の身ももちあぐれば、それほどに持あげらるゝ物かとて、あきれはててしばかり、さりとはあまりいたりすぎたる事ぞかし、

〇上氣の色狂ひは女若二道の隔夜もふで

むかしの呉王は、西施とともに姑蘇臺にたわぶれ、海靈舘に玉のいさごをまかせ、青龍のふねに、錦のともづなをとらせて、あけくれふなあそびに、歡樂をきはめたまひしも、いつしか荊棘のつゆしげく、もとのあれ野となりて、梟松桂の枝になき、狐らんぎくのかげに、かくれん坊してあそびしとかや、とかく人は分限よりも、みづからへり下つて、物ごとつゝしみくらすべし、よくみのほどをしれといふ、九つのかな文字を末期の遺言にせし人もあり、それほどにこそなくとも、すこしは身のほどをかへりみて、心をつくべきことぞかし、さても長浦中三郎、西島にかよひて金太夫にうちこみ、東に出かけては、色河原の蘂子になづみ、元日から大晦日まで一日も宿にゐず、色あそびの酒にのまれて、生になりたまはぬ夜もなし、これでは其身も身袋も、つゐには内損のやまひとなつて、ぼうが灰まいたやうに、あとかたもなふ成給はんと、ふるき手代共いろ〳〵異見を申せど、そちらが諫言にいふほどの事は、よふのみこんだ男、きくに及ばぬ皆よい事ずくめ、しかし年よつてからは、ゆけといふてたゝき出しても、ゆく氣はないものぞふな、わかいが二度あらばこそとて、女若二道の隔夜もふで、又此ごろは、西島のあそびもめづらしからずと、すつかりの喜八、二くづしの庄六など、名どりの末社をめしつれられ、ちと氣をかへて難波の色ぐるひと、みじかき芦の伏見より御舟にめされ、八軒に御つき、このたびみやこの威勢を遠い難波にかゞやかして、金銀のひ

かりを、まなこのあかぬ田舍の素い客どもにおがませ、右やひだりの目をさまさせよと、ばつとした仰出され、かねて九軒の吉田屋かたに、御入りあるべきはづ、亭主喜左衞門をはじめ、太鼓女郎かぶろまじり、料理人の又兵衞、下の男共まで、御むかひにまかり出で、末社共とともに、大盡のさきへ、二行に立ちならんで、琴三味線小弓鞨皷をうちたて、笙のかはりにちやるめるをふかせ、管絃の躰相、さながら朝鮮人のみやこ入りのごとそんじたこゝち、指わたし三尺ばかりのむらさき縮緬の丸頭巾を、金の杖のさきにつけて、これを天蓋となし、まはりに一歩を瓔珞につけて、大盡にさしかくれば、二くづしの庄六は、小判を千兩ばかり金の花籠に入れて、道々花をふらす、かくて九軒の吉田かたになりこませ給へば、お先へ參てまつて居たる、醫者のすまた脉庵 藪井推作 うたらの勘七など五六人、そのまゝ御むかひに出て、さても旦那、其をそき事うるしのごとしと、さま〴〵の口あひなどいふて、それよりのみかけ、めつたぞゝりにそゝる所へ、車屋の岸部といへる、はきゝの太夫樣御來臨、今日は越後町の扇風かたに御出で、大盡は西國の客衆御こしなきを幸に、もらいましての御出で、其外名どりの女郎二十七人、いつれかいやなる風もなかりき、末社の二くづしが、今日大盡樣御道中、花をふらせましたれば、それは〳〵殊勝なこと、さあ女郎樣がたは、二十五のぼさつになつて、立てねりくやうなされませ、はやしかたの衆はまた琴三味線で、浮世管絃をはじめたまへ、又花をふらしますぞと、ねりくやうをはじめて、二くづしが立ちて小判をふらせば、うへをしたへとかへして、われ一にとあらそひとる、やり手のすぎは壁錢(ひらたぐも)のやうになつて、さても一生にない殊勝なことを拜みまして、ありがたい物をひろいますことじや、同じくは切れのない花を、よりどりにいたゞきませふと、ふところへたくしこむもおかし、二くづし十兩ばかりつかんで、これ花がふらしやりましたと、太夫岸部がひざにまけば、かぶろの袖嶋をよんで、これやるぞ、鏡の下へ、ちと入れてをきたか入れてをきやと、手にもとりたまはず、又全盛の太夫の仕出しは、よのつねの女郎のならぬ所作ぞと、いかなすつかりも我を折りけり、これより中大じんはいよ〳〵岸部にのぼりつめ、毎日あげづめにして、今

までなじみの大盡たちに、みな鼻をふかせ、近日請出すべき談合、大かた首尾したりしに、俄にきしべわづらひ出して、萬事かぎりに及びしかば、親方庄左衛門も、さま〴〵看病手をつくせしかども、日ごろの大酒がつもりて、內損吐血となり、たてなをさぬやまひ、わづか七日がうちにとりつめて、おしやあたらすがたを、つゐになきからとなして、葬禮をとりいとなみぬ、中大盡はたゞゆめのこゝちして、なみだはたもともくつるばかり、せめてもと、西生寺にて四十八夜、上町の極樂寺にて、施餓鬼の法事 河竹のながれ灌頂までして、かず〳〵の御とぶらひ、太夫樣の御かきをきとて、中大盡かたへもちきたりしを、なみだかた手に、とつてひらき見たまへば、わが身ことふとなれそめまいらせしより、かず〳〵かぎりなき御なさけにあづかり、つとめをはなれて、眞實たいせつにぞんじまし、一日あひまいらせぬさえ、千年もすぐるこゝちに、おもひまいらせ候ひしに、ながきわかれとなりまいらせん事、さりとはかなしさは、御すもじ下され度候、よしそれとてもまゝならぬいのち、そこはあきらめまいらせ候へ共、今一度御げんなりまいらせずして、かず〳〵申しましたき事を、心にのこしまいらせん事、是のみよみぢのさわり共、なりまいらせ候ところに、おもひの外なる事どもになりまひらせ候事、さりとては御殘り多さ、うみ山にもまさりまいらせ候、しかしいもと女郞小式部とは、年ごろまことの姉妹と、けいやくをなしまいらせ、身にかへても大切におもひまいらせ候へば、小式部をわが身とおぼしめされ、ねがはくは御請出しなされ、わが身にかはらず、御なさけをかけくだされば、この御恩はみらいまでも、わすれまいらせまじく候、何かいひのこしたき事は、かず〳〵おはしまし候へども、あまりむねぐるしさのまゝ、筆をとめまいらせ候、あら御なごりおしやと、よみもおはらず中大盡は、かのかき置をかほにあて、なみだはたきをながしぬ、

〇小式部の內心は元に出家のおもひたち

かくて中大盡は、太夫が遺言いかでか無にはなすべきとて、吉田かたに御こし、小式部にあひそめ給ひしに、はかなくなり給ひし太夫岸部に、心入露たがはざりければ、これぞわすれがたみなれと、岸部を其まゝみるこゝちにて、わりなくかよひ給ひけるが、遺言に

まかせ、小式部をうけ出すべき相談、亭主喜左衛門とりつくらひて、親方車屋庄左衛門とのつうくつ、首尾よふ埒があいて早速請出し給ひ、それよりみやこへともなひかへり、色ぐるひは是までにて、ふつ〳〵とて、名をお式とあらため、一年ばかりほども、わりなくなれそひたまひしに、お式はかはつた心ざし、みづからかふなりますうへは、比翼連理とこそちぎりまいらせ候へども、思ひめぐらし候に、みなこれ姉女郎のふかきがうへのなさけ、舟にもいかでつまるべき、世をはやふしたまひて、父母とても兄弟とてもなき身にて候へば、さながらの無縁、尤あとはのこるところもなふ、御とぶらひ候へども、おもへば我身ふかき恩をうけながら、其恩を報せざるは、木石に同じふして、みらいのほどもおそろしく、今までの御なさけには、わらはにいとまを下されかし、尼になりて心のままに、とぶらひまいらせたふ候なり、世に大切なる金をすてゝ、身請なし下されし、それを無にしていとまとは、何とやらん心なき申しぶんには候へども、これといふも外ならず、かの人の御ぼたいをとひまいらせ候ひて、せめてはふかき恩のほどを、少しなり共報じたくおもひたちさふらふと、泪は千しほをしぼりぬ、中大善きゝ給ひ、さて〳〵殊勝なる心ざし、殊にすぎさりし岸部がぼだいをといたいとあるを、無理にとむるはいかゞなり、此うへは心次第に發心の身となりて、なきあとをとい給へ、嵯峨龍安寺、岡崎にても、いづれのぞみにまかせ、庵をたてゝまいらせんとあれば、とても浮世をいとふ身の、何に心をとゞめてか、庵室をもとめませんと、たちまち出家受戒して、あさの衣の黒染に、ちゐさき竹の子笠をかぶり、それより住所をさだめず、西國三十三所、四國邊路國國所々、心をとむる所もなく、戀もなさけもはなれ切て、さながら木の端のするどなるすがたとなり、念佛無二の門に入り、一心不亂の大道者となりて、岸部がぼだいをとひけるとぞ、

近代長者鑑巻之第四

近代長者鑑卷之第五

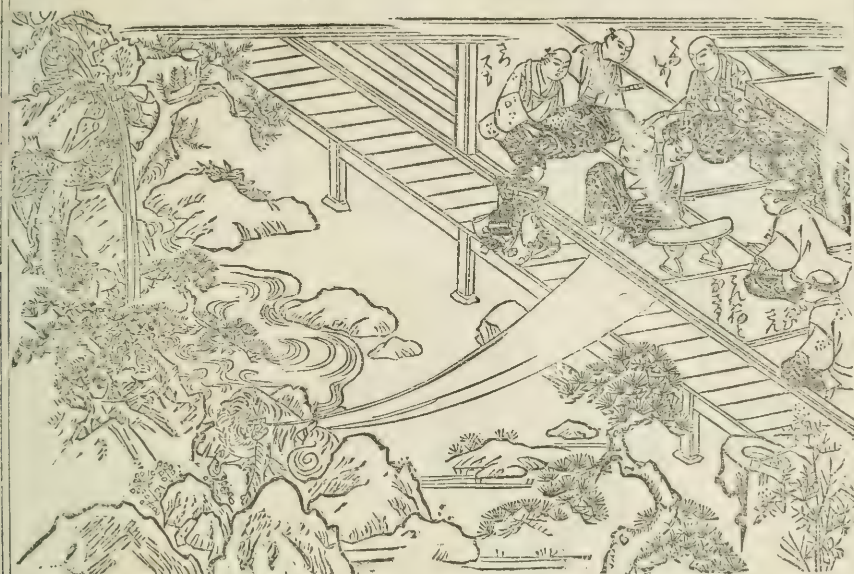
○身袋の重さ輕さは厘樣のいる寶くらべ

唐の世の王元寶といひし人は、福貴身にあまりての奢り、金銀をもつて家居をつくり、禮賢堂の花麗さ、沉香をもつて、あるいは軒とし欄干となし、碔砆とて玉に似たる石、それを甃となし、桂のはしらに錦文の石、これを礎とし、雨ふりの時分は、泥土かならずすべればとて、針銅にて錢をつなぎ、花埔の道にしきならべぬ、さるによつて、花のはる紅葉の秋、月の夜雪のゆふべ、賓客座敷にたえず、王家の富窟となづけしとぞ、これを當代、つくづくおもへば、福貴なりしもことはりかな、王元寶といひし名は無上至極の名なるべし、王は此人の姓にして、王氏のむまれ、元寶は字、元の字も寶の字も、みな白銀にある文字にて、元の字銀二つ寶、又は三つ寶四つ寶などゝて、これぞ世界のたから、今の世の王元寶と、異名を世間によばれしは、新銅白次郎、かねのなかから目を見出して、山椒よりもからい世界と、人はかなしむ時分も、我ひとりは安養淨土、死んで極樂へいたるとも、これほどにはあるまいが、上品上生より、もそつと結構な所はござるまじやと、寺の長老に相談せし男、居躰の花麗さ、金銀をちりばめ、生たまんだらをみるこゝち、庭山の氣色も物ふりて、杉のしぐろふだるかげに、金のむくにて龍をつくり、立石をまとふて首をもつたてたるが、此口より水をしかけて泉水にながし、山のすそ岩影に、ゐんすの虎のつくり物、暑氣の時分は、此口から風をはき出して、おもふまゝに座敷のうちへ吹きこます、此奇工をあやつりしは、竹田出雲が工夫、奇石怪木いづれかあだなるはなし、一とせも小見川義平といふ福人とたからくらべせられしに、蜀江の錦 呉郡の綾、罽氈 氷羅 種々のたからをもつて、座敷もてりかゞやくばかり、義平を請待せられしに、義平が出立、ゐん金の下袴を着て、おそらく白次郎も、こればかりはつゞくまじと、ちと自慢におもひしに、白次郎は子息新銅京三郎、甥の白吉、手代梅酢赤右衛門、堅炭條七わが身共に五人、みなゐんきんの下袴、一様にして出しかば、さしもの義平ぎよつとせしよし、さてそれよりも、琉璃の椀 琥珀の皿、赤玉の面々さかづ

き、水品のさかな鉢、金の銚子、ゐんすのかないろ、さまぐ〵の珍器をもつてもてなさる、かくて義平は、かねて用意し來りたる寶もの丶長びつ、金のけぼりの金物しげきを、座敷へもたせ出て、まづ露ばらひに、これをお目にかけませふと、むかし高の師直が、鹽谷がつまにおくりにし かな文のちらしがき、正筆なりととり出せば、白次郎は、平のむねもりのゆやにやられしいとまの狀、三くだり半に平の宗盛とかきて、花押あり〳〵とさせしをとり出さる、義平かさねて、唐の玄宗皇帝の、楊貴妃と共にふきたまひし尺八なりとて持出れば、白次郎は、秦の始皇の阿房宮にて、虞氏君と手なれ給ひたる三味線を出さる丶、義平もよつぽどこまりしが、おのれこれにてみせつけんと、珊瑚樹の脇息を、やがて座敷にもち出れば、白次郎は、小姓をよんで、金の鐵槌をとりよせ、かの珊瑚樹の脇息を、こみぢこはいに打くだかる、義平大におどろき、これは大事の重寶、狂氣し給ひしかといへば、白次郎さあらぬ躰、義平どのには初心なる御あいさつ、是ていの物を、重寶と申さるべきか、拙者まどい申さんと、手代の條七 赤石衛門にいひつけ、珊瑚樹の脇息の十そうばいも見ましたるを、十人前とりいださせ、其かはりには、是を返進申さんとて、直に義平に渡さる丶、義平よこ手をうつて、さりとは今世界の分限、それがしにつゞかん人は あるまじとおもひしに、非の中の蛙、大海をもしらぬ せばき心中を御目にかけ、御はづかしく候とて、もぢ〳〵としてかへりしとかや、とかく金銀の威光ほど結構なる物はなしと、みな人うらやめるばかり、

〇歌仙藏はをくのしれぬ大福長者

新銅白次郎は、か丶る福貴にほこり、今は世界一番の大かねもちとそやされ、さま〴〵の榮耀、六月に雪見をもよほして、庭山の諸木を白縮緬にてつ丶み、つき山平地は、一めんに古銀をまきしきて、さながらの雪中、あるいは師走のはてに、盆の景氣をうつさせて、ひらかけおどりが所望じやが、がてんかと、さてもわつさりとしたせんさく、松坂こえて伊勢參宮、それよりすぐに、高野吉野大和一見、大坂 堺を見物して、みやこへかへられしにも、其間道中のつかい高、二千三百兩とはしれぬ、かく白次郎、よい年をしてさへ、たいせつな金銀を、湯水のやうにつかはるれば、もとよ



り其子の京三郎、血氣さかんの若手の達者、西島にかよひ、色河原にぬめり、遣ふほどに けるほどに、又親仁とは各別世界、よろず大はゞに出て、くわつとしたる仕出し、□□このかた無類の大盡、手かけさへ四十八人、おいわ、おろく、おはや、おにし、おほど、おとよと四十八字を名につけて、いろはめかけとなづけ、番附いらずに、 ことのすむ思案、これ元親仁白次郎、屋敷のまはりにたてをかれし、內藏よりのおもひつき、これは歌仙ぐらとなづけ、三十六个所白壁ののきをならべ、一番に古金藏二个所、 乾坤の番付は、紺靑の額板に金文字をかゞやかせり、 次は新金ぐら三个所、番づけは天人地の三才、 其次は古銀藏三个所、空假中のしるし、元の字銀のくらが五个所、仁義禮智信の番づけ、二つ寶三つ寶はうちこみにして八个所、乾坤巽艮の八卦をもつてこれをわかち、 四つ寶藏十二个所、子丑寅卯辰と、 十二支をもつてこれをさだめ、つぎに錢藏二个所、雌雄をもつて番づけとす、其外手形ぐら卷物ぐら、古筆藏器財ぐら、いくつかたてつゞけて、さてもをびたゞしき事共なりしに、みな月中ごろより、夏の土用に入りしかば、みな〳〵藏共をひら

き土用干をすべし、ことしげきがゆへに、いつとてもそのまゝにて、風をあつるといへども、當年は金銀のくらどもをこと〲くあらため、つゝみ紙等もくさり、箱もくちたるもあるべければ、一通り吟味すべしと、頭手代　赤右衛門　條七にいひつけられしに、兩人まづ、古金藏よりひらき初て、金箱をあらたむるに、からりちんとして、金氣はみぢんもなく、箱ばかり留主にのこりぬ、これはと大におどろき、旦那白次郎にかくとつげ、一々あらため吟味するに、古金藏をはじめて、新金藏　元の字ぐら、二つ寶三つ寶、こと〲くからになり、四つ寶藏十二个所の内、寅の字の番づけのくら、只一个所のかねのみのこり、餘藏はかんこ鳥が鳴て、追はぎが出そうな景氣、白次郎大にきもをつぶし、これはあきれもせぬ事ども、大かたの事ならずと、段々詮議をとげられしに、尤十のものが一二ぶは白次郎奢りに長じ、つかひすてられし事もあるべけれ共、第一子息の京三郎、さま〲の惡性銀に、つかはれしにきはまり、手も足もなき仕合、さしもの白次郎もべつたりと腰をぬかし、あきれた共はてたとも、詞にかゝらぬせんさく、これが氣やみのぞもとになり、日々に氣力おとろへ、欝結してつかへとなり、胸膈利せず、食物かつてすゝまざれば、名醫のかずをつくして、あるいは　木香流氣飲、分心氣飲のたぐひ、種種の配劑、かんたんをくだくといへども、面目浮腫し、脇肋虚脹して、次第に惡性のみまさり、つゐになき名のみのこして、めいどの旅人となれり、一子京三郎、かなしみのうちに葬送をとりいとなみ、七日七日の佛事のこるところもなく、七々日もすぎしかば、月代そつて世間に出で、一禮をすまし、これからはこはいものもなし、あゝ慮外ながら、誰どのでも、ならば異見して見やじやはと、高なしの色ぐるひ、朔日やら晦日やら、夜やら晝やら打ちわすれ、有頂天のたのしみ、貧ならまごらか、人非人となつて、こもをかぶられふ下地じやと、よそのそしりもことわりなり、十目のみる所　十手のゆびさすところ、あまりちがいのないものにて、たゞさへゆきつきかゝつた身袋、財寶着類もみな質屋ぐらにをきて、十二个月切りの洪水に、つゝみがきれてぐわらりとながし、旅芝居のかねもと、富の札もと、舟の運上、新地かな山、かゝるほどの事に損をして、大分の家屋敷みな分散に出だし、よ

その花とみなして、十二月のかほつき、ひまな能には、たばこのいるが氣のごく、座頭の日だかについたやうに、さてもさだめなのうき世、

○吉光の一腰は指當つてとられたが迷惑

さても新銅京三郎は、たゞひとり身となつて、日ごろ出入しもの共も、うとみはてゝよせつけず、ましてや世間のつなはきれて、かゝらふ島もなく、沖にもつかずいそにもつかぬ、天竺浪人の身となり、雲助のかいぎやう、せめても吉光の脇指一腰、これをもちて大坂にくだり、淡路町にむかしの手代又吉といふもの、世帶もちてゐれば、これをたのみて賣りしろなし、それをもとでに出家して、何とぞ渡世をおくらんとおもひ、晝は人目もはづかしければ、初夜時分より身ごしらへ、旅用意といふてからが、やぶれあみ笠ひとつ、吉光の正銘一尺五寸ありけるを、これを命に腰にさし、助定が打たりし長刀なりな草履、諷うたひの仕舞ともいひそうな形りにて、そろ〳〵と立出、せめても祇園町の木瓜かたにゆきて、るいにあふて、この世のいとまごひをとおもひ、三條通りを東へ、大橋をわたりて繩手にかゝり、もとゆい屋のあたりまで、しよぼしよぼとゆきしかば、はや四つの太鼓、拍子木の音も所々にひゞきしに、西がわの家のはづれ、車道のかたから、いきりのつよき犬共、二三疋おごしかゝる、元來京三郎、犬は禁物、宵の夜食はあだし野のと、そらさぬかほして、鉢たゝきをかたつてみれども、犬はこれにとりあはず、滅多おごしにおごして、着物のすそへくらひつく、京三郎は大きななりにて、あれのふところをあげしもおかし、あまりのおそろしさに、たましゐは、あたまのぎり〳〵にのぼり、胸にはにはかに早鐘をついて、當惑のあまりかの吉光をぬいて、シッシ〳〵とおひはらふところへ、車道のかたから、かつくいのやうな男が、つか〳〵と出て、こりやこいつ、御法度つよき時分から脇指ざんまい、あはれ者めといひさま、かの脇ざしをひつたくる、こりやなんとする、べちにおぬしに手むかひはせず、無理なことをする人じやと、しがみかゝらんとする所に、またあとから、二三人のこゑにて、こゞといはゞ、たゝきころせよ切てすてよと、わめきながらはしり來る、京三郎はわな〳〵ふるひ、まつぴら御免下さるべし、あばれ者にては候はず、やど所もたしかな者、お慈悲でござり

ますると、いひすて、追かけぬを幸に、繩手をみなみへ、祇園町までにげゆきて、こゝにてやう〳〵、胸のおどりをしづめしが、南無三寶今の脇指は、命にかへての吉光、さてもしなしたりしてやられたりと、あたまをかけどかなわず、其場では吉光も、何もかも入た事か、命をたすかるをさいわいに、忝しとにげのびしが、今といふ今本心がつき、座頭の坊の、杖うしなふたこゝち、此うへは木瓜屋へゆきて、るいにあふ心もせずと、それより藪の下にかゝり、下河原を高臺寺のかたへ、うつら〳〵とあゆみしが、どこへといふて、當分に心あてもなし、めつたに草臥てもいらぬもの、ずいぶんはらのへらぬやうにと、始末心が出來て、又あとへとつてかへし、祇園どのゝ樓門にてその夜をあかし、むかしをおもひめぐらすれば、ようはこれほどにも、なりさがつた事じや、一歩一つか錢一貫あれば、天晴思案のしやうがあるにと、にはかに後悔すれど、いまでの分別はなにの用にもたゝず、しのゝめの烏と共にそろ〳〵と立出、せめては小粒の佐次兵衞といふ、末社がやどにたづねゆき、なにとぞ合力をもうけ、今朝のあさ飯はぜひそこにてとあてにして、姉が小路にたづねゆきしに、まだ見世もあけず、門の戸もさしてあり、さすがは末社のくらし、ゆるりとあさねをする事かな、何とおもはふかしらぬけれど、たゝき起さずばなるまいと、にぎりこぶしにて戸をたゝけど、さてもよふ寢入つたことじや、あたりへの遠慮もなしに、こんなくらしでは、得身はもつまじき男ぞと、見んごと人のうへには棹を入れて、小石で大戸をこづくところへ、となりの割松やのかゝが、たすきがけして門口に出、どなた樣でござるぞ、佐次兵衞どのは留守でといふ、扨はそふでござりますか、朝とふから、どこへゆかれましたとゝへば、いやおか樣のおふくろが此中はてられまして、其とりをきのため、在所丹波の山國へ、妻夫づれで今朝の七つにゆかれました、十日ほどもせずば、かへられますまいといふ、京三郎もちからを落し、はあかたじけなふござりますとて、西のかたへゆきすぎしが、さても物といふものは、あてにならぬうき世、手に入つた朝飯が、ぐわらりとちがふて來た事よ、此不仕合さはと、それよりひだるいはらをかゝへ、やう〳〵として、大坂にくだりつき、淡路町の又吉所へゆきて、段々やうすをかたり、

是非たのみにまゐつたといへど、又吉中々がてんせず、みなこれこなたの一心から、人のしつた事でなし、内々さま〴〵手をつくし、御異見申したはこゝでござる、もはやあいそがつきましたれば、一錢の合力も、いかな〳〵存じもよらぬ、殊にもはや師走のはて、かけがよろふやらよるまいやら、此方の手前から が、ごふならふやらしれませぬ、早々おかへりなされとて、切てはなしたやうないひぶん、又吉が女房みかねてかたはらにまねき、まづお飯あがりまして、はやうおかへりなされませ、そのうちより〳〵、何とぞがてんもせらるゝやうに、申しなしてしんぜませふ、おいとしぼや〳〵、よくせきの事でなふてはと、汁あたためて膳を出し、酒も中椀にて、とき〴〵じや、これでなりともあがりませと、鰊鯑をさかなに出し、張箱から一歩一つ出して、そつと京三郎が手にわたし、わたくしの心、一盃でござりますと、ほろりと泪をこぼせば、京三郎は十萬兩ももらふた心地、かならずなにとぞよきやうに、とりなしをたのみますと、涙を袖にてをしぬぐひ、こそ〳〵としてかへりぬ、これより又引かへし、みやこにかへつて、何をせふぞと思案せしが、指當つてせんかたなく、かの一歩をもとでに、大黒舞の中間入りして、あくる正月元日から、おふくの面にてかほをかくし、人に見しられいで、是ほど氣さんじな事はないと、みやこの町々をまはり、身すぎとて、つゐにいはぬ大黒まい、ござつた〳〵、去年の得方より大黒殿のござつたと、鶍ばかりをいふて、やうやう正月はくらされしが、二月になつては大こく舞とも出られまじ、風の神にならふか、顔を丹てぬりまはして、赤づら〳〵と出よふか、なんぞすはつた事をしたいと、寢ておきての思案、さだめなきは世の人の身上ぞかし、

〇新銅京三郎がかゝる仕合は大名の息

京三郎親 新銅白次郎代よりも、お目かけらるゝお大名關東に、京三郎零落のよしを御きゝなされ、白次郎事は身に對して、大分忠功ある者なれば、今に其事をわすれをかず、なんぞ餘所には見すつべき、取立て得さすべしとて、丁野銀左衞門といふ御近習をめされ、なんぢみやこにのぼり、京三郎ゆく衞をたづね、つれ下るべしとの仰せ、銀左衞門かしこまつて、夜を日につゐで都にのぼり、方々とたづねしに、非人なか間

にゐるよし、與次郎ともにたのみて、やう〳〵とたづね出し、行水髮月代をもむかしにかへらせ、衣服もかねて用意せしを取出して着せかへ、それより關東に同道し、殿樣に御目見え、ありがたき御ことば、かずかず下され、身が京屋敷の金藏の支配、今よりなんぢにまかするとの仰、殊に親白次郎屋敷を、買ひもどし下され、其上大分お金頂戴仕り、月よに大きな屋敷をひらふた心地、ありがたし共、とかふことばにものべられず、それより都に歸りて、本の屋敷を取もどし、ふたゝび歸り入て、昔の家來出入のともがら、又は末社の者共こと〳〵く召集め、我零落し時分、みなみな見かぎり見すてしも、我心よりの無調法、たれにか恨みを殘すべき、今より昔のごとくに出入り、いよ〳〵繁昌にとねがふ心しと、さま〳〵のもてなし、島臺に金銀をちりばめ、料理の手をつくして、すい物の數もいくつかおぼえぬばかり、呑むやらうたふやら、さても目出たいずくめ、京三郎のよろこびは、たとへんかたもなき事共、我一旦をちぶれて、大黑舞とまでなりしかども、殿樣のおかげにて又此やうな立身、これもひとへに、大こくどのゝ加護なるらん、今よりは我名をば、大黑京三郎とよぶべし、いで〳〵よろこびの大黑舞一さしまはんと座を立ちて、いはひの酒のゑひにうかれ、紫の丸頭巾に、右の手にさいづち、左の肩に風呂敷づゝみ、座敷の眞中へ踊り出、ござつた〳〵、大黑殿のござつた、大黑どのゝ能には、一に屋敷をとりもどし、二に金藏をあづかつて、三にさらりと屋うつりし、四つよい事ばかりで、五ついかい出世で、六つむかしに立還り、七つなんにもない身の、八つやくたいなしなれど、九つことしの仕合は、十でとつくと治つた、仕合まいをみまいか、大黑舞は是まで、

正德四年甲午菊月吉祥日

京都一條通

書林　茨木屋久兵衛梓行

近代長者鑑卷之第五大尾

傾城 難波みやげ目錄

卷之一

(一)急用の山ぶし
かはつた事は色里のむかしさ今さ、時々の智畧よふのみこんだ粋大將、喘しをつんでをくる伏見舟、拐のまはる金銀の勢揃

(二)無分別な丸藥
三條河原になくちどりは六十三人の妾の花、一時にちつてしまふたあさは隱居大じんのもの、其年つもつて四つばしにかくれなき朝比奈三郞

(三)狐のない國
大夫が一心ちしほの夏書、懷の内のたゝみ火燧口舌のはせ引、繪馬につなぐをさこのたましゐはおさめたる小わきざし

(四)傾城仕込刀
堺の銘物小西おしろい、しらはたは源氏がたのまつしや、髮切心巾箱入のなさけ、大じん二度のかけのをさしあなばつさしてきえた花火大じん、ぎおんの見こし洗のちやうちん、男だてもよけて通した若衆のちから、つよい事は夢に懸さつたおんな

卷之二

(一)遠目鏡のふくろ

(二)懸替の起請文
あさくさのおさめのくわんおん、大悲の弓にちゐのふかい男、おばゞのゐけんは馬の耳に風、ふかいりした大夫

(三)大佛の前の耳かき屋
家老のふんべつはおし手のちがはぬゐんばん、濟きらぬ揚屋のはらい、床さつてをいてわぼくの人質、ながれの女の身はふたしたるいはく

(四)お姿女夫
しんだいかたぶくさかづきの銘、伯父のゆづり金たゝきあげ句に思ひつき、白餅が水になるほど手づよい三谷の大夫

卷之三

(一)假に疊の表がへ
七くみのまつしやども が取もちゐのこのごしうき、ていしゆがあさばかま、きかゝつたおきやくへざしきのふしんたのみ上候

(二)南方が鼻げぬき
ゐんらうきんちやくにしうしんかけられてめいわくする

目錄終

傾城 難波みやげ卷之一

(一)急用の山ぶし

蒼(あさぎ)に明て黃にくるゝ、一日のながめ一とゝせにつきて、其さかりおとろへは、花あくた月のくもりいふもさらなり、されば昔に過て今にきたる、人のありさまぞおかしけれ、何事もうつりかはる狂言な世の中、以前の女がたは誠の女の姿を見ならひ、似るやうにとこしらへしに、今はあちらこちらになつて、町から舞臺の身ぶりをうつし、風俗をまなんで娘こしもとにいたるまで、藝子の紋所を付て、心のそこの穗にいづるもうたてし、色里もかはる事のみ、吉原にむめちやたてはじめしも、近年島原のさしかへ、新町のあづけ長持、白人の紋日、山州の請負客、野郎の出見世、いろぐるいの自由さは、借座敷に娘をそへて月切の夫婦、たのしもふなら あすばふなら 今此時ぞかし、氣のとほらぬ昔うまれよりは、大き成仕合といへば、今のわかい者程、しにくいはなしとなげきぬ、いかにとその子細をきけば、昔の親仁はまんざらの分しらず、其身に引あてゝなぐさみの高をくゝり、若い者はいづかたへ出まいものにもあらず、酒あいもしならへかしと、出がけの手引をたのまれしに、今どきの親仁かたは、一灘をよぎし色里のうちもらされてにて、四も五もおぼへて死一倍のかりちがへ、呉服を買ひがかりて質ながしの質入、不斷醫者とならんでらうがいの作り病、せぬまおとこのねだり狂言、うたぬばくちの借手がた、はた商の似せ目安まで、みなしつくして來た粹のはてなれば、通例の智略を合點する事にあらず、其網うつたごとくに、遠からをしまはして、うごきのとれぬ勘定、ありものゝめのこだてには、さりとはこまりはてぬ、こらしめの爲めの勘當とは、ちはやぶる神代のさた、當世は眞實の子でも、家業無精なれば、無理出家にして一人扶持をあてがい、性念に見すゑし僕あがりの手代に、養ひ娘を祝言して、家督をゆづることがはやりものなり、とかく藝子にしらがをぬかせ、揚屋にしゆもく杖をいたゞかせ、老てのなぐさみ、わかい內の仕末と申す、さはいへ人の心は顏のごとく、似たやうにてひとり〳〵かはるもの也、しかしいづれか名聞のはなれず、後生ねがいも男だても、正直もがまんも、皆出所は借上の二字にあらず

や、さても永代蔵をのみこんでの恪、さりとはならぬ身もちといはれて、ぜひなく心にもなきしまつして、身を窮屈にもちくらし、一代きやらたいたふところをしらず、また活人なか、ごふでも大銀持になる芽と見たてられて、術ないまで大はゞに出かけ、かなしい時は身ひとつ、歸所もなき子のある女房と、わかれ〳〵に稼ぎ、しつけぬいとなみに今日をのがれ、きのふは夢と、三番續も身のうへぞかし、いやしからぬ男ども、伏見へのぼり舟を引き、すがたは扇の繪に似て、苦勞は心にあまる、汗と夜露を袖にしぼりて、世わたりは是ばかりか、百しなを思ふに、いづれが樂なる身すぎはなし、さすが下り舟には、かた身がはりに楫まくら、陸ゆく魚荷と口まかせのにくいひ、氣にもかけず、足もとゞめず、ゆくふねのきさんじたのしみこゝにきはまりぬ、葛葉づゝみの下手にして、此ふねをよぶ人あり、道者ならん下りの酒錢にのせんとて、ふねもどしつけければ、七十有餘の翁、われ便舟を乞にあらず、なんぢらにつげしらす事あつて、まねきしなり、追付山ぶしめきし者三人、舟ちんいふまかせに出し、此舟にのらんとすべし、かならず其ものどもきたりなば、舟にのする事あるべからず、かれらはまことの人間にあらず、無性坊 酒亂坊 請込坊とて、貧乏神の末社どもなり、諸國繁花の地をねらい、ぞゞがみ風をふかせ、實なる人の心をなやまし、野傾の淵に身をしづめさせ、しすごし紙子を着せんとす、我いやしくも、王城の福の神の神勅をうけたまり、きやつらが足をためさせじとおつたつる、さるによつて都をにげて難波にわたり、池田 伊丹 鴻のいけの 酒かぶをはたかせ、猶中國九州へも入わたらんとするあいだ、かならず爰にてふせぎとゞむべし、しゐて舟にのらんとせば、この瓢字を見すべしと、藤市とあるをし手をさづけ給りて、其身はやがて川岸の草にまぎれて、たちまちきへうせ給ひける、舟頭ら、是稀代の事哉、しすごしときけば、我々が身におぼへあつて、なんとやら氣味わろし、いそいで舟をこぎいだせと、もよいし綱をとく所へ、聞しすがたの山ぶし三人、ふねまてまてとはしりきたり、急用にてくだるあいだ、ずいぶんふねをしつくべし、其はたらきによつてほうびをくれんと、いふよりはやくふねにをしのり、三人共に笈をおろし、うちくつろいでぞ坐したりけり、水主

ごも目くばせして、これ〳〵この舟にのすることはかなはず、とく〳〵あがれといへば、出家どうせんの我々、ふるけれど如渡得舟、なんの利益、をのれらあがるまいか、いやあがらぬがどうするぞ、是でもかと咒文をみすれば、三人の山ぶし身ぶるいし、あら恐ろしかなはじとにげまどい、河みづにをぼれてしづむを、水竿にてたゝきたて、ついに水屑となりにける、扨此笈のうちには、何をかいれけると、うちあけみれば、貴家と書きたる札を三千づゝ持ける、扨は此藤市の飜字なくば、きやつら心のまゝに入わたり、九千人身袋つぶし家賣もの有べし、さるにても有がたきは此飜字なりと、をの〳〵擘手しうやまいける、昔もろこしにもさるためしあり、浙江のわたしにて、蘄蒯乙の三字をさづかり疫鬼をしりぞけて、今の世まで家家の門柱に、をしゝるしてまもりとす、この藤市の二字もくに〳〵にひろめ、野傾に身をうつ人をすくはば、これ大き成功徳ならん、しかし我々すぎわいをやめ、廻國しごころにも有べからず、又かゝる奇特のまもりを、人にひろめぬもつみふかし、何とかといふ時、折ふし乘り人のうちにありし比丘尼のいふやう、

はづかしながらみづからがむかしは、難波新町にて、すがたの花を人に愛せられて、心のなさけをつとめし身なるが、さるにてもけいせいの身にしては、賣を手がらとはすれど、其内ひとりきやくのしげきかよひにつけては、あだなる座興つのりて、おほくの金銀をついやさるゝ事、いかにしても其御かたの、内證いかになりゆくならんと、せけんにしらぬ心づかいせられて、あんじすごさるゝは、もとなさけ賣る身のうへぞかし、ましてふらちなるしゆび聞時は、我身のつみにおぼへて、むくひの程もかなしかりき、かゝる思ひのいくらもありて、今は紋なしの身とはなりぬ、過し十とせのむかしより、あまたの國里をめぐり、神ほとけをもおがみ、あるは又、さま〴〵世の物がたりをきゝて、身のうへに引きくらべてよろこびなげく、折折の執行、心はむかふ所に、うつりゆくこそおかしけれ、さればこのふねは、さいわい諸國の人の乘合ひなれば、誰にかぎらず守りをさづけ給ふべし其守りさづかるみやうがのために、いづれも世の中のふるきあたらしき咄をさせ給へよ、さあらば 守りは諸國にひろまり、諸國の咄しは此ふねにとゞまりて、猶人の

善惡のかゞみともならん、みづからも此ふねにありて、其咄しを書きとゞめて、出離生死のゑんともなさんとすゝめければ、いづれも、さすが色人のはてとて、ふうりうなる物ずきこれにすぎじと、ふところ紙をとりて、芦の穗の筆もきれじなあしの人の物がたり、ことばは此ふねにつみあまるも、物ぐるはしけれ、

（二）無分別の丸藥

月も足さす火燵に見たてし四つ橋といへるは、難波の川なみ四方にわかれて、女色男色のちまた、爰ぞ遊人のとまり所ぞかし、され共ねずみとらぬねこもあり、花さかぬつち菊もあり、是ひろき世かいのうちなればなり、かくてこゝにすめる男の、さのみ大ぢからにもあらで、銀の棒をじゆふじざいにふりまはすとて、朝比奈三郎をかたどりて、みづからよしひでと名のりぬ、いづれ外のさしづよりは、此人の根城のつよきこといふもおろかや、長崎商に利をえて、朝鮮琉球の米市も中でくゝつて、算用もりあげし大銀持ち、ちかき新町の夜見世を、一代に一度見物して、是をたゞ見せるは、いかにしてもがてんゆかずと、死ぬるまで工夫しられしぞおかし、まして三町南の芝居子供のはをりすがた、ついにおがまずして、一生銀のなる木のねを、せゝられけるぞにげなし、されば此人、昔を聞くに、みやこ本能寺まへなる三代分限者の内の、僕あがりの手代なりしが、其身商の軍法にかしこく、ことに大疵なる氣質を見たてゝ、主人の仰せありて、西國へ米の買づみにくだりける、其あとにて、はうばいの三右衞門、金銀おほく取かすめ、自分商の見世を出しぬ、主人は此事を病にして、遂に三右衞門がために命をうしなひ給ひぬ、かくと西國にて聞くより、いそぎ京にのぼり、三右衞門と公事を取むすび、利と運とに乘じて三右衞門をおいうしない、主人のあたをむくひける、此手がら世上にかくれなく、日々に銀もとする人おほくして、ついに大商人となり、居住をなにはにさだめ、世の小商人にうやまはれ、ねがふ事もなふくらされけれど、一子なきことのなげかはしく、甥の川次を養子として、片身袋ゆづられける、さても殘る所なき人の果報、誰もうらやましく思ひしぞかし、されば何から人のあやまりは出來んもしれず、春ころさる人の敎へけるは、打老兒丸といへるくすり、これぞ老となりて兒にかへる妙藥、其しるしのすみや

かなること、いふにことばもつきずときくより、醫者衆へ法組を見せて談合しけるに、いづれも醫者衆一味々々かんがへて、扨もすぐれたる衆法かな、誠に此藥を用ひ給はゞ、腎水まして氣力すこやかにして、長命をたもち給はん事うたがひ有べからず、年老ての養生ぐすりこれにしかじと、そのく〳〵ありていにすゝめられける、ゐんきよ大じんゑつぼに入て、いそぎ藥種を念を入れ吟味の上、打老兒丸を調合させて朝夕服用しけるに、藥の功能あらはれて、はだへ肥あぶらつき、顏色のつやうるはしく、何事にも退屈せず、思ひの外に夜の友ほしく、たゞさびしい事をきらへり、是ぞ老をおこすはじめにて、うき世ぐるひのかへり花、お梅といへるはまだ十六にて、天滿のするゑ町なるうへ木屋の娘、今の世の美形と聞くより、小判にて親もとをしきり、老の鶯のとまり所、寢道具のあげおろしをさせける、されども藥力のめぐりつよく、中々此女ひとりにてはことたらず、妾をあまたかゝへける、次第に色にものずきありて、年たけたる女もすてがたきむまみあり、ふり袖もあどなくてめづらしく、しら齒につめ袖、いきすぎたる所ありて、これもいやにあらず、以上六十三人の女に、さびしがらせぬほどにたはぶれても、ずいぶん自慢いふ二十四五の男にもまさりて、血氣のつよきこと、ひとへにくすりのおかげ〳〵とよろこびける、こゝにあふみ町といへるに、名だかくきこえし美女あり、堺へ歸りし扇屋の若むらさきに似たるとて、をのづから　おさきと誰かは名をつけしぞ、扨は深窓にやしなふ娘にもあらし、例の銀の棒にて一こちこちなば、などかこぢはなさではと、これが爲に金銀をつみかさねて、なんなくよびとりけるに、誠に其うつくしさ、高で天人と見てをいて、其うへをほむるにことばなし、六十三人の女、いづれも美なる中を、ゑりにゑつたる艶顏なれど、おさきにくらべては、さくらがえだとしゆろぼうきとのちがひ成べし、隱居の寵愛何にたとへん、とかく田も畔も命も、なまぐさものをつけられしは科にあらず、六十一のことしまで、子だねなきをそことおもひしに、おさきいつのころよりか、嘔吐して氣をなやみ、それにきはまりて　帶の祝ひめでたく、あたる十月に平産、ことに男子にて、ゐんきよ大じんのよろこびかぎりなし、日にそひ月にしたがひ、此若大じん成人ま

しますにつけて、いつとなくゐんきよもそこ心に、實子に身躰ゆづりたく、養子の川次のわるい事を見出し聞出したふ、見る月のおたま、かぐ鼻のおらんといふ女にいひつけて、たばこのけぶりのはなから出た事までを、ゐんきよへつげ口すると、川次も人に耳をうたれて、何とぞよいちゑもあらふに、無分別に胸をかき燃して、さりとは親仁手がわるい、いかに今實子が出來たればとて、われを怨敵にめさるゝは世間の親くずといふものならめ、此うへ何を骨をつて、身躰のおさまるやうにしたりとも、どうでも我には疵をつけて追出し、ぬく〳〵と實子にこの身躰をやらるるはしれた事、そうはさせまいといふてからが、親なり子なり、あつちかたには尻のもちてがおほからん、とかく燒とでゝ、此身躰見事にはたいて、ゐんきよに鼻をあかするが上分別と思ひさだめて、日ごろをとし咄の相手にせし、陽氣者共にしめし合せて、ひたすら急に、小判をまきちらかす趣向せよとの仰せ、かしこまつて、傾城ぐるひもつねの格にてはおかしからず、まづ二十軒の揚屋を、ざらりと普請させて、いづれも座敷は丸柱につくらせ、壁代をとばらせ、疊に金箔をのべて、これを三十七人の太夫のざしきとさだめ、銀箔の疊には九十二人の天職をならべ、末の女郎には、をしなめて紅の小袖着せて、旦那の乘り給ふ花車を引せて、ひとり〳〵の大夫にさかづきもたせながら、つけざしの酒に舌をすゝぎ、天職のをの〳〵は、旦那の鬚を口にくはへて、いたまぬやうにぬき申せとの御意にて、此あそび三日して、又餘の事にかへよとて、あらゆる狂言をつくし、とかく小判の入よふにとの御このみ、そのくせ人のためにもあらず、身のなぐさみにもならず、根心しらぬ人は、まゆをひそむるも尤ぞかし、是程にない事さへ、聞て隱居がたまらふか、いそぎ川次を追はらへとて、すんほそめのぬのこひとつに着かへさせて、おも屋をたゝき出して、隱居へあとをまるめられしが、人にはかぎりあつて、隱居も其明のとしの八月、ついに六十三歲にて、かへらぬたびにをもむかれける、其あとは若大じんのものとなりけるが、是もよい事いふ手代がきらいにて、あたら身躰をむしやくしやとして、その身も腎虛銀虛ふたつにて、わか死をしてしまはれける、何事も人の行末はしれぬものなり、さはいへ善をほどこせし人



の子孫は、世にめでたくながくさかゆる事まのあたりぞかし、いかに其身の器量ありとて、天道をなんでもなふおもひ、我意にほこりし人のするのほろびぬはまれ也、

(三)狐のない國

世に了解違といふ事ありて、忠ある武士も思はずふたごゝろ出來、誠あるけいせいも、をのづから商心になるぞかし、爰に永市といへる男、越後町の太夫に人しらぬ誓紙を取かはし、互にやつるゝ戀のならひ、かぎりの太鼓とけしなく、雪にふかれ雨にぬれて夜ごとの通路、此は霜月の霜ふかく、晝のうち水は大道に氷、軒のつらゝは竹にひとしく思ひのふし〴〵、こよひはわけて ひぞりのことばおほく、ふたりが戀を格子にしがらみ、ひとへに千里のへだてに同じ、されば此道の才覺はあるものかな、太夫格子より のべ紙二束をし出し、たゝずむ男の足にしかせぬ、寒（ひえ）あがりたる下股を、心の火燵にあたゝめて、あかつきのわかれは、いつとてもなみだの川舟せし此男も、仕よしやの座敷をたてゝやり、末社にさはがせて、其身は太夫と十種香を利、酒さへ雲上のみにせし身なれど、鹽濱の

損銀にひるみ、夜も揚屋の門をゐ通らず、ゆきちがう座頭にさへ頭巾をかぶる小氣は、大臣のなれの果かや、太夫は爰を見すてず、間夫のうき名に身のひしをいとわず、男も氣根づよく通ひ來て、するゝの約束はいふにをよばず、たゞたのしみは廓を出る日、ゆびを折れば九二ねん、寄年をわすれてくれよかしとねがふは、やるせなき思ひゆへなり、其ころ京屋かたにてあひし阿波の徳善といふ男、はじめはしげからぬ御げんなりしが、福僧の伯父死れて、思はぬ跡式手に入て、急に大夫身のうへの相談、たつた二日にしゆびせしは、小判がはたらくゆへなり、旅宿に三日逗留して四日めの朝しほに、舟川ぐちを出てゆく、永市是はと引舟にうちわつて、大夫がいはく、だん／＼かうはないはづ、書のこせし文はとたづねしに、いかな一言のことづてもなし、興がさめて憎いともいはれず、本の男泣にして宿にかへり、口おしさのあまりに自害と覺悟きはめしが、畜生同前の女に命すつるも世のそしり、みらいまでの耻辱とふんべつかへて、其後は大夫が事思はじとすれど、無性に傍目にちらつき、戀ひしさ大かたならず、是新清水の觀世音に立願し、ふうふのゑんをむすび給はれと、ゑんなきふたりが無理祈を佛もにくませ給ひ、かゝる心のまよひ、せめてのことに日參し、向後大夫が事思ひわすれさせ給へと、昔にかはる願ひ、我身ながら我身あはれになりぬ、既に三月十六日より、文月三日まで百日餘の參詣、どうしても忘れられず、次第にゆかしくなる事、さりとはふしぎ千萬、今日參詣の折から、石壇にてすりちがふ女のかほをみれば大夫、これはと思はず袖と袖にまづなみだの瀧、音羽を爰にみるぞかし、やうやう大夫なみだををさへ、誓しことばいかであだになさじ、あまり戀しさにやつれ、しのびて徳善かたを逃げのぼりし心のあらまし、其折からは急なる事、文にだん／＼書つくして、たよりをもとむるに、はや此身はつながれし馬のごとく、うしや出舟の時分、夏書といつはりぬし樣への文、此佛前の繪馬にかけをきぬ、是御手にいる事、おぼつかなき事ながら、我阿波よりのぼりても御うたがひふかゝるべし、もとはじめより逃げのぼる心底、此通りとの證據にこめをきぬ、御らん下されのよし、男も是迄はふかきうらみ、あさからぬ心づかい過分と手を合せ、佛前の正面に

かけ奉る夏書の箱、うち付し繪馬、火ともしの僧に二朱ひとつ、紙にひねりてつかはし、斷のうへ繪馬をおろし、箱の釘引はなちて蓋をあくれば、忽太夫がすがた此内に入るかと、まぼろしにきへうせぬ、さりとはふしぎはれがたき思ひ 此時にいやまし、あはれかたみと 封じめひらきて見るに、いつよりもかきくどきたる長文、一々くもりなき心底、かうもわが事思ふかと、うれしくかなしく 取みだせし戀のやみ、たどりかへりて後、阿波の事 手をまわしてくわしく聞に、太夫いつぞの程より、きつねつきしとてくるひ出し、家內をあれて物を打わり、刄物を取まはして 疵のつかぬやうに人を追はしらかす、是戀の智略 色道の狂言、かはりしは此國のいはれぞかし、今の阿波讃岐伊豫土佐を、むかしは二名島と號す、人皇八代孝元天皇の御宇、此國の人民、王命にそむき國をみだす、時に天皇の御弟、籓屏將軍と申せしが、二名島に下向し給ひ、逆民を征伐あり 國をおさめ給ふ、是を伊豫の王子といへり、伊豫とは伊に與と書り、此君の子孫相つづいて、其末葉は河野氏也、然るに享祿年中、前の河野通直が妻二人となりて、同じすがたにて同じく坐せり、通直おどろき、たつとき禪僧をまねくに、本則の一棒一喝のしめしに、たちまち一人は狐となりぬ、通直これをころさへ、すでにころすにさだまりし時、俗男女四五千門前にあつまる、是は何ものぞとゝへば、四國中のきつね訴訟に參りしなり、今度不慮のこと仕りたるものは、長狐とて我々が化の師匠なり、かれころされての後は、神變の術斷絕仕る、たすけ下されよとわびにける、河野聞きて、名譽の狐をころすもふびんなり、さあらば四國中に、一狐もすむまじき證文をし、みなく舟にのり中國にわたらば、其後この長狐をたすけ、あとよりわたすべしといふ、みなかしこまつて誓紙をさゝげ、舟をかり、數艘にてわたる、是より四國にはきつねなし、しかるに此たびのきつねつきふしんもの也、いかにしてものみこまれず、よし人をだますは どのみちきつねなりと、みしりごしに、ふびんや大夫をあらなわにてしばり、大うらの枯木につりあげ、青松ばにてくすべたてける、大夫今はくるしく、命のかぎりながら、にせぎつねつきとはしられず、むねひとつにかくごきはめ、いとしい男のために、ついにくすべころされぬ、德善かたよりは、大

夫おやもとへは病死のよし、わづかにかたみの小袖、きりのとうのもん所は、なみだのたねにのこりぬ、永市委細に聞に、過しころ新清水にて見しは、まさしく大夫がゆうれいならんと、日をくりて見るに、七月三日大夫が名日、時も日もちがはず、戀ひしきたましゐのはる〳〵あわよりかよひきたりしなり、戀慕愛情のきづな、か丶る思ひに永市も、同じみちにとかくごきはめけれど、親類のゐけん心も心にまかせず、せけんを とかくやめぶんの男となりて、高野の山にぞ引こみける、

（四）傾城仕込刀

小西おしろいと名にこそたてれ、泉州堺はふるき所のはんじやう、今も其かたはしのこりて、家ゐつきづきしう、かねの利にて世をしづかにわたる人のおほし、津守の君が昔すがた、唐織の內證、小袖、酒の間を伽羅にて燃やし、さんごじゆの珠數もたぬやり手もなかりしに、世はあぢきなし、今は燒鹽のつぼをかづらたてとし、ふき髮のつやをたしなむ、女郎もときにつれ、客も折にかはりて、はながみやうじまで さもしきをつかい、らうそくの火にて 夜食くふなどをめづらしがり、京都の見世の女郎まで 名所たばこのむ事を、遊び所の人の口から、おごりのやうにいへるはいと口おし、乄の南の端に、大きなる寺をひとりして建られ、しふたつ引といひし大じんの二代めは、三得といへり、銀もつてちゑあり、しかも女にかわゆがる丶男ぶりにて 上作の大じん、其ころ嶋ばらのきり山にふかく名じみて、夜通しのはや駕籠、和こく虎右衞門、日本ひやう八 といへる手ごろの下末社をめしつれ、三十日を三日も宿にゐず、揚屋の疊寢よげにおぼゑし、若くさのかはりぶし 昆布道成寺の作者城春にしたしみ、口舌引きのしやみせんに、いかなるおてきもあわれとおもはず、此男の藝のひとつならめ、されば此法師は、神風や 伊勢のむかし望一が、ふたゝび 術を今におぼへて、善惡をうらなふにひとつとしてたがふ事なし、 さらば此里の大夫さまの御名をかくして、方角をもつてまいつて、其內證をたづねきはめんとて、三得大じんをはじめ、御目かけの揚屋ふうふ、事しりの末社どもあつまりて、法師樣へまづ申して見ませふ、是よりにしきたにあたつて、おとしは十八にならせ給ふ大夫樣の御身はいかにと申せば、ほ

うし、それは美形すぐれて、此くるわにならぶかたなき女郎なるが、亂の水性にて、かんじんの所の底がつめたく、ことに床に入てたばこのむもむづかしがり、よろづの物がたりなど ひとつも有まじ、それゆへ思ひの外にぶはんじやうなり、惣じてつとめの身は、たとへざしきにて 酒のまず物いわず、猿のかんきんといはれふども、床にてぼやくやと物いふこそ、わきから開きても、しつほりとせし枕ものがたり、いかにしてもこのもしく、其きやくになりても、心よくうちとけやすく、なんぞやりたい氣になるものなり、又ひがしみなみにあたつて、 ことし二十一になり給ふ大夫様はいかに、これはたしかに梨の木性也、其身大夫といふほどの艶顔ならねど、心のかしこさに、づいぶんはんじやうし給ふべし、成ほどあいましてござるが、梨の木性と仰せらるが、がてんまいらず、其やうすはどうでござると申せば、法師わらひて、さればこの女郎、もとかぶろにて 大夫につきしが、其大夫へ、親かたそうだんのうへ、大夫に出しては、あのきりやうにてはおぼつかなし、とかくつとめに 氣のいたまぬやうに、天職にして出すべしといひける時、かぶろこゝろに口おしく、大夫樣につきし身の、大夫にならで天職にてつとめては、いかにしても一ぶんたゝず、ひたすら大夫にして下さるべし、私心におぼへあつて、さびしいめはいたしますまいと、 はねぎつて大夫に出しが、もとよりかぶろのうちにも、目がたいものといはれしほどあつて、よろづつとめかたに心をつけ、とりわけ床の軍法をのみこみ、 もつてまいりやうに秘密あつて、たつたひとことで男の命をけづらし、身だいをちやうちんにさとつたりして、たゝみのきれるも障子のをれるもあとをかまはず、 ましてざしきの物ずきがわるいとて、 ふしんしてくれるやうな大じんは、此のち出てこぬとおほしめせ、其うへたつみは陽にて男、いぬいは陰にて女也、髮すぢほどなことをいひあがりて、大きなるくせつがたへまじ、其内春夏のもめは金剋木のだうりにて、 客のみなりちに成るべし、あきふゆのくせつは水剋火にて、女郎がかつてきやくに 借錢のねぎりをさすべし、と申されけるぞあやしけれ、かゝる所へ床にて、大夫と大じんすさまじきくせつして、たがいにくろがみ引みだれ、もうきこへた きこへぬといふまでもなし、明ばんより女郎

をかへてあへば、われらの一ぶんはたつでござるといふ、いやそうはなされたからふけれど、揚屋にもぎりがあり、大夫様がたの仲間はみなひとつなれば、なまやつうれいのことにては、外のよね様がたの御がてんなされぬこと、とかく御なじみ様のうへなれば、何ぶんにも御りやうけんねがひ奉るなり、また大夫様も、三得様御承引あそばす程の御わびごと、すこしもひけになる事にあらず、とかく男にしたがふが女のならひと　戀をふくませて、揚屋末社どもいろ〳〵取もてども、大じんかぶりをふつて、みながくわしいわけしらぬゆへに、さま〴〵せわやいて、大夫ことを取りなし申さるゝときこへた、かならずたいていのくせつにあらず、かならず取もちだてはむやうなり、久しきなじみの大夫をのくは、いはくだん〳〵あるとおもはるべし、此中にて其わけをうちあけたけれども、それにてはものがなし、なんと大夫そうではないかとあれば、大夫さいぜんよりないてばかりゐたりしが、うつくしいかほになみだこぼして、ぬしさまのおゝせのとほり、のきませねばならぬいはくがござんす、かならずこれまで、ぬしさまとのなかをせいやいて下さんしたみな様へ、此たびのいはくをかくしますは、どうやらかけごがましく うさましけれど、そこはみな様なじみだけで、聞いて下さんせんが粹さまぞや、いよ〳〵こよひから、三得様とはのきますほどに、いづれの大夫様なりと、ぬしさまのおものずきしだいに、あわしまして下さんせ、みじんわしに御ゐんりよのない事、かうしてゐますも どうやらいなもの、わしはまづかへりません、とかくいづれもさま、ねてのあさけ　文して申ません、いかいおせわ、うれしうござんすと、大夫はしほ〳〵とたつてかへられける、にはかに此ざしき花ちりて、さながら公事やどにゐる心ちして、ばけものゝはなしいたしませふと、つねは無口の、四郎といふまつしやが一代のできぐちと、大じんをはじめ、一座どつとうけとつて、やう〳〵これから酒づいて、さるにてもみちしば様、まづ近代の折紙だうぐと、たれとうござるともなく、一座のまつしやや申上る、大じんさかづきを したにをき給ひ、我かねてよりの物ずきを、なんぢらにせんをこされてむねんなれ、何とぞこよひ、此大夫をしゆびさせよ、はたらきじまんはこゝなりと、かしらをふつてぞ

の給ひける、いづれも仰せをうけ給り、さき〴〵さきへ手をすつて、はやみちしば樣の御おゆみ、御あしをとにむねをときつかせ、大じんいろづかれけるところへをしなをり給ふ、大夫樣のよそほい　ものゝいひよう、佛樣とぞおがみける、ないしよをはや、やとやからふきこみ、まつしやどももおためになるいはく、ほのかにさゝやきしゆへにや、成ほど大じんをとばさぬ御ふせいにて、さかづきもしづかに一へんまわりし折から、虎右衞門ひやう八　だんなに急に御めにかゝりたきとて、小ざしきへよびたつるを、くるしからず何事にても、これにて申せとの御意ながら、兩人申かぬるをせひにとの仰せ、みて仕りて申けるは、ただいまたしかにうけ給りしが、きり山樣事は、いなかのきやくにて身うけあそばす事、にはかにいひ出して、親かたとのつめひらき、よろづのこる事なく、うちあきて明朝くるわを御出ある、すこしもちがひなし、是をしらせ奉らんためによびたて申せしと、いひにくそふに申ける、だんななんともないかほにて、それはちかごろ　ちんてうの事、ゆる〳〵としたる事ならば、我らもはなむけにてもつかはすべきに、何を取つくらふあいだもなし、　はて殘りおほしとばかりにて、みちしばへふかく色どりて、すこしいひすごしをしらるゝ時、みちしば、かくこよひより御げんなりますに、わたくしも申しすごしながら、あくまで御いとをしく思ひこみしうへは、御しよもうにもなき、このくろがみきつてしんぜませんとて、瓜むきのかつふりの、そばにありしをさいわいに、さりとはむふんべつにきられけるぞ、すこしはすはには見へながら、大夫のつよみ、外にくらぶるしなもなし、このうへはきり山樣へ、御心ののこらぬ御せいもんきゝましたいとのぞみ、一座も取もつて、何のだんなにおゐて、きり樣へおこゝろののこらん、たとへごふおぼしめせばとて、こよひ身うけあそばし、あすはいなかへござるその女郎樣に、いかな〳〵御みれんはないはづ、だんなも　きつとしたる御せいもん御たてなされよと、まつしやどもにすゝめられて見しやれ、きり山にこころはのこらずとのせいもんをおさへて、みちしばお心にない事を、しゐていはせますもおかしからず、とくと御心底をきわめ給ひての上、御せいもんをききましたいとしみづつく時、大じんなみだをながし、

とかくきやうげんをしそこないました心底をあかしませんЛ聞いて下されてのうへ、ともかく御りようけんにあづからん、扨あるじふうふ　まつしやどもにいたるまで、此いはくをかならず聞ずてにして、外にていさゝかさたすべからず、日ごろのをんをわすれ、表裏あるにおゐては、ながくまつしやみやうがに、つくべきせいもんたてよとの、御意までもなし、何しに外にて、だんなの御事つゆちり申べきにあらずと、いづれもじつごとになつて　せいもんのうへ、大じんいはくをかたられけるは、もとそれがし母人は、新町のむかし、かぶらかゝといへるくつわの内の大夫、もろこしといひしが、おやぢふかくちなみて、つとめの内に我をくわいたいし給ふゆへ、　おやぢ請出して婦妻としられ、其うへにて我らを平産し、家めでたくおさまりて、二親ともに病死し給ひぬ、しかれども我をけいせいの子といふ事は、世上にかくれなし、されはわが身もきり山にふかくなじみ、たがいのまこと　いつはりをいくたびかためして、さらにくもりなき　大夫ごころとは見届けながら、つとめ女に心をゆるすは、籠城にかへり忠のさぶらひを置くに同じ、此春大夫、升屋かたへかしにゆきて、其ひまの入し事、いかにしてもはらがたちやまず、此くせつうわべはすんだようにて、そこの心がとけず、さるによつて此事をいぢるつていひわけにをくる、過しころ大夫がかみきり事、凡一萬八千度にをよべり、猶此かたみがてんまいらず、さらにせんさくするに、　大夫かたより成ほどわがゝみにあらず、人の買がみなり、されば此にせがみをおくるは、大き成心中なり、其わけはとゝふに、　されば、かしらよりはじめ、あしのつまさきまで、のこらずぬし様のものなり、それをわがものゝやうにおぼへて、つめばかりきり、かみばかりをきるは、心中のやうにて、一身をまかせぬといふものなり、それゆへしばらくの御心なだめに、にせがみをしんじ申たり、かみがをのぞみのときは、　いつにても御めのまへにてきり申すべし、御ゆるしのなき内は、わがかみながら、わがまゝにならず、　ぬしさまよりのあづかりものゝ内なれば、ひとすぢも大事なりと、ふかくをしむしんてい、何ともふんべつにあたはず、いろ〳〵引き見るのち、こよひをしはなして、　かみをきれといひしに、かねてより、ゆび　つめ　かみ、御のぞみしだいにきらん

用意に、ふところにかみそりをはなざすといふより、かみをもとゆひきはよりきりけるを、なかばにてをしとめ、かねてかみそりをふところにたしなむ、此しんていにて年ごろのまことあらはれたり、かうしたものを一日も、くるわにをくはわれ心中ぬす人なり、ことさらなかばきりたるかみを、おやかたほうばいに見付られては、よしなきうき名のたねなり、我妻女とするもの〻、しんていがしれざるとて、かみをきらせたるなど〻、人のひはんをうけんも未熟な事なり、又かみをきつて、其心中ゆへに女房になつたと　大夫をいわするも、ちいさいひやうばん、これいやなり、とかく人のしらぬ内に、引ぬき内へいれんとは思へど、こ〻にきのごくは、　おやちもけいせい請出して妻女とし、又むすこもかうじやといはれては、しらぬ人までに、我母のけいせいを　口のはにかけさす、是千萬口をしく、こよひねふかきくせつして、我と大夫が手をきつてしまい、いなかのきやくにて身うけすると、くるわにてひやうばんさせ、ひそかに其のち大夫にとり親して、そうをうのかたよりのゑんぐみと、せけんにいつぱいくはすつもりにて、　年ごろのやど屋ふうふ、けらいどうぜんのまつしやどもへも、ふかくこの事をつ〻みしなり、さあかういふいはくのうへは、みちしばどのへ、あだぼれは申さぬとてもしれた事、しかるにやせ小僧のかさね齋と、　みちしばどのよりも　かみをきつてくださる〻このしんてい、さるにても、かたじけなふはござれど、たゞいま申すとをり、きり山どは一をう二をうの事にあらず、　ふうふにならでははかなはぬわけ、其うへにてもきさまへ、心ざしのはこびやうもござらふけれど、　そのぶんにては御まんぞくも有るまじ、よしなきあだぼれをいたし、おこ〻ろざしをぬすみました、此かはりには、命をしんじ上申すより外になしと、　はやかくごきはめしがんしよくを見て、一座ためいきをついで、なんとももの〻いひてもなかりき、所にみちしばこゑを乙にして、わたくしが身にもいはくあり、あかしませんあいだ、いよ〱いづれも、さたなしになされ下さるべし、まづ女郎たるもの〻しよたいめんといひ、　いまだ床にも入ずして、いかにたはぶれふかくの給ふとて、髪をきるべきにあらず、わたくしもふかき男あつて、これにかみをきらいでは　ならぬいわくあれども、此男の事

は、内へもきこへて、やり手のきらふ男なり、ことにこの人にかみをきつたといはれては、つとめのじやまになる事、そこらをいとふにはあらねど、行すゑながきつとめの身、けつく男のためならぬことを思ひ、町のきやくにきりしとは名にたてられ、しんじつ心のかみは まぶにきると、心のうちにせいもんをたてて、三得様をいつはりかり名にせしなり、もつともたびかさねて、あいしきやくにきりなば、その人もまことゝおもひ、よろこばるべき事なれど、それにてはまぶの男への、心中がはつきりとたちがたし、とかく何事も戀からのいつはり、にくふ思ふてくださんすなとゝなみだながらにいひわけして、扨きり山様を、三得様身うけなさるゝといふ事は、始よりすいし申たり、其わけは、さいせん御兩人いなかのきやくにて、きうに身うけなさるゝと申されし時、三得様いかにごふあればとて、いなかとばかり聞いて、にしの國やら ひがしのくにやら、 御たづねなきは、もとお心におぼへのあるゆへなり、こんな事をさとらいで、女郎がまぶぐるひがしられふかと、 ちゑじまんももつともぞかし、いづれも此時手をうつて、おふたり様ともに、きやうげんのさし引はすんだり、いざ此うへはをし出して、きり山様のよめ入をと、はやことぶきを申せば、三得もきげんにいり、急におやかたへそうだんして、みちしばも請出し、まぶの男とふうふになし、其身はきり山を根引にして、さかいへつれかへり、ふうふめでたく世にさかへける、こんな事があらふはしに、かもじ雲の出たるもしやれておかしき、空のうわさならめ、

傾城 難波みやげ巻一 終

傾城難波みやげ巻之二

(一)遠目鏡のふくろ

炙筈のむかしはあふぎのおやぼねなり、長十郎は澤村、他人はやく上手に成ける、いゝだこはあれではてれば、源次が女房のしほは、もとのおやまになれり、けいせいと醫者とは同じことぞや、ひまをひまとみせぬが、でんじゆのひとつぞかし、よふしあんして見るほど、ならふ事ならばあそびは高いものが德也、月にひとつ買ふても、大夫のきやく也、庸醫者の藥代には氣がいたまぬとて、きかぬくすりを　べん〳〵だらりとのめば、をのづから服數にて　さん用しあげて、いせのりものいしやの、くすりかづのすくない、高いやく代にあたるぞかし、さるにてもおやまをあげて、いせ參りさするは、大ぶんのもの入にて、御前へ出されぬ銀のつかいやう、これをやみの夜の　つぶて大じんといへり、され共女郎ぐるいには、いろ〳〵のむづかしきつめびらきあつて、武士のつき合のごとく、きかぬ一言をだまらぬは　けいせい、たとへ小判でやねふいてくだされても、あげ屋もいかな〳〵、わけのわるいおきやくの、お宿申す事にあらず、買ふはまれにて、かる事を專にめさるゝきやくにても、其人の心底しだいにて、すいもの取ざかなの　くいにげにあふても、そこらにおゐて、けにくいかほをする事なし、情といふ一字を　くびにかけてする商賣、かはゆげに大鳥のさばき、はねをひろげる大じんの小判まくは、ひとへに、びんぼう神に　こしをさるゝばかりにもあらじ、されば磯大じんは、あふみのさわ山とやらのうまれにて、年ひさしくみやこに住ゐし、名にたかき柴大じんのむかしをおもふに、月ぎり、きんちやくの女にあそび、しだいに粹となつて、西島雲上のたかみにのぼり、數末社をはたもとになづけ、諸小大じんにあをがれ、いひいださるゝものずき、誰あつてかぶりふる事なし、大友の眞鳥がいきほひ、天職を鹿じやとのたまへば、たちまち十七匁にくらゐをさげ、引ふねをさるじやとあらば、かしこまつてふろ屋ものに仕る、かうはのきくといふも、其身の粹ばかりにもあらず、おさまつた大じんしゆは、世のへんをかんがへ、まづ柴大じんひとりに　うわさをさせて、あまざけ箸にさそふといはるゝを、のいてとほすべし、いきりすごさる

るうへは、なんぞかぞ、はがねのまわつたわる粋をつくさるべし、その時はをのづから、柴大じんをうとみ、女郎もまつしやも、あげ屋のいぬねこまでも、じつとしてゐる、こちとらをしたひ、いやといふても、あつちからうわかさ大じんにたてる事、遠きにあらずと、ちゑぶくろのくちをしめ給ふは、後代大じんのかゞみなるべし、され共せつちんの、おがみどほしといふものにて、柴大じん一生は、人にうちこまれず、花やつてしまはれける、これをわるふのみこんで、未熟なる礫大じん、色里をひとのみにやらふと ふんべつして、諸國のしらふとまつしやをあつめ、つきのわるい小判をまきちらして、大よせの時の 酒みかたにと、たのまれけれど、茶屋ぐるひの、 ちいさいあそびとちがひ、太夫はもちろん、づをふるひとりうりのかこい女郎も、酒のごづめするねんごろもなく、仕出したばかりにて、花火せんかうのたちぎへ、ぱつとして命も身躰も、粉にはたいてしまわれける、ひたすら女郎ぐるひは、こゝからあそこを見てとる、心の遠目がねこそ、あらまほしけれ、爰にひがしにあそぶ、松二といへる男、ふかく藝子にたはぶれて、我やどの妻は

さびしがらせ、明くれ此岸のうわさを珍重がり、わるくちを書きしあを表紙といふを、ひそかにのぞきしに、さても人のしらぬ珍說のみおほし、龜之丞と玉がしわとが、げいのひやうばんをあちらこちらに書し事を、大きにわらへり、すゑのたのもしきといふしたに、山下かるもと 大和川八十郎とをしるせり、此ふたりは、いにしへの松島半彌このかたの、わかしゆとほうびせり、やはらかにしてびたつかず、なさけぶかくして 一ぶんをみがき、かりにも女と心やすくものいはず、此たしなみ野郎のかんじんぞかし、山本かもんが引こみしは、いはふやうもなき手がら、その身大坂の出見世をはなれて、京のぶたいに久しくつとめ、けんぶつにあかれず、女中の帽子に、ほの丸のかくしもん、いくたりにもつけさせしは、せかいの男のかたきならんかし、がてんのよい當世なればこそ、ぶたいにていびこそきらね、ぎおんのみこしあらいに、かもんが出せしちやうちんには、くるまや町の男だても、みちをよけてとほしける、人界みないろなり、是をはなれきつて見ゆる とうといかほめさるゝ しゆつけしゆも、市がけのお六は、おもしろいものといへるも

科にあらず、白人の小七ひとり、ならまいりせしきよねんの手がら、ぎおん町の北がわの、さゝむすめは死んでから、しぐみをどりに出でし事、いつはりにあらず、あげはといひし女は、夢にむろ町のきやくの、ふるがけをどつてきたりしもふしぎなり、いしかけのおやまは、きつねの子をうんだといふはいつわり、まことはしら川橋の、かたり坊主がはらませしといへり、辰松幸助を加賀の掾がむこにしたは、伊豆日記のじやうるりからの思ひつき、北條のちゑをかつたといへり、けんにんじのたぬきが、をどり子のあとづめにゆきしは、氣のとほつたるばけものぞかし、藤田九八を、いばらき屋の幸齋と取ちがへて、いなかのきやくの棧敷から花やられしもをかし、片岡仁左衛門は、狂言する時より、何もいはずにぶたいにたつてゐる所が、上手じやとのひやうばん、下河原のおば樣の宮と、床入りまへに、じやうるりかたり出すたいこが引こめたいといへり、八坂のおどりと、藝子のやどへつぼ入したとは、もどつてから太儀なといへるは尤也、爰にこまかに註したる白州あり、其身はさる名ある、らう人の妻女なりしが、おつとなが〳〵のがん病をわづらひ、まげつくせしやどのさむさ、たきゞも米も矢だねつきて、むかし手がらせし鑓も、五百がものと ふるかね買のいふもむねんなれど、家うればくぎのあたいを、ひとつ釜ににてくふてしまい、今はせんかた月夜にほしをたづね、ないものあんじんよりはと ふんべつしかへ、たからはまことに身のさしあわせ、ちびもへかにもあらばこそ、おつとへはかくして身を人のものとなし、そのあたいにて、おつとをはごくみ、びやうきをいたわる、この心中おそらくは、むかしの明智が妻もなるまじき貞女といへり、されば爰のひやうばんなり、まつたくこの女貞女にあらず、其わけは、其身しつけぬつとめをして、身をけがしておつとをはごくむは、心中に似たれども、其おつとの一ぶんたゝず、女房の肉をうつて其あたいをくらふ事、ちかごろまことのさぶらひにあらず、しかればなまなか、女の心中だてをするゆへ、おつとをちくしやうのさたにのする、このとがおびたゞし、さるにても不心中ものと評せり、又右夫子にとび子を買ふてやる男あり、是いかにといふに、成ほど心中也、わきざしはおりやるよりは、わかしゆに わかしゆを買ふて

やるは、たいせつがあまつてのゆへ也、其男の身にしては、花もみぢより、わかしゆほどおもしろきものはなしと思ふから、其わがおもしろきに引くらべて、かわゆさのあまりに、わかしゆを買ふてやる、是まことの男色好也、しからば寺の大こくになるむすめと、まま母とふうふになるむすこ〻は、いづれがこう〳〵ぞとたづねしに、それはくさいものくふて、かべにいきふきかけて まじなふ遊女のごとし、はじめからせぬにしくはなしとわらへり、

（二）懸替の起請文

大は小をかなへるとは、むかし欲のふかいおやぢめがぬかしたことば也、大小はものによつてかならずよしあしあり、されば女を火ふき竹にたとへ、男をからかさにたとへたり、惣じて人の家のだうぐ、何がひとついらぬといふものなし、さは申せど、なきに事かかずと、ひぢりきつたるうへは、茶わんひとつでもすむとや、中にも持佛堂と おばゞとは、をき所がないと、たび〳〵のみ〻こすりもうたてく、よめが年よればしうとめにならふより、外にばけやうもなし、寺まゐりすればさんせんがいる、ざうりがたまらず、内にゐれば、中のよいふうふのちわごとのじやまになると、明くれよめをいぢる事を、なぐさみにめさる〻おばゞ、わが身ながら しやばふさげ、かた時もはやく、ごくらくへ參りましたいと、心やすふごくらくを手にいれたいひぶん、あた〻かにじゆふに死んで、よい身にならるべきや、佛にむかふても、口と心のぞぎつぎに、あられぬつみをつくり、世はさだめなきならひと、むじやうをくわんじながら、よめが死んだらば、とび色のしまはをれがかたみにもらふてと、けしからぬ心あて、佛もふきだすほどにおかしく、つらがにくしとて、つまはぢきしたまふをしらず、ある時はこのもしや、山も〻のさねを はり〳〵とかみわるわかいものを見て、われもむかしは、ふんでもあしのうらにつかぬ こわいめしならでは、くわざりし身なれど、今はこんにやくさへ、はぐきにすべりて、うんのみのあぢきなき世の中、いつまでながらへてもかわつた事なし、あの世にはおもしろい事も有べし、はやふすくひとらせ給はれと、しんじつじやうどをもとむるたそがれ、心ぼそふむかいたる ぶつだんの戸びらのかげより、おばゞ後ほどむかひにやるほどに、そ

れとつれだちて、ちがひなふこいよとのみこゝろにおごろき、それはあんまり、きうなおむかひでござります、いやはやふとねがふゆへに、二十五のぼさつ中へも、其とほりをふれまはし、いづれもそろはれしだいに、ゆかるゝであろふほどに、ものでもよふくふて、こしらへてゐよ、いよ〳〵それはまことでござりまするか、是はかなしや、よめもをじや、むすこもこい、まごに名ごりがをしい、もはやをれは死ますと、あめやさめとなみだのたまの、じゆずは きよねんねずみにひかれしより、いまだ氣がながふてゐ買ず、しやりもやらふといひし人のあれども、 あとで銀が入であらふと思ひ、もとめいでのこりおほしと、ぜんご取みだし、ひとへに命のをしいから、氣ちがいぞうぜんの有さま、日ごろのしんていの淺ましきこそ あらはれし、やゝあつてぶつだんのうしろより、 ば樣今のは、をれがいひました、二十ねんや三十年で、死なしやる事じやござらぬと、かくれゐたりし孫のいづれば、おはゝたちまちなみだをやめ、おのあほうめが、あつたら、きもをつぶさしをつたと、はては大わらひになつて、孫をかばふより、 いぬの子をかへとはいへども、

無性に孫のかはゆいは、子のかわゆさのあまり〳〵て、孫をほんそうするは世上のならひ、智にも愚にもよるべからず、こゝにむさしのや、廣こうぢ近かきあたりに、ばゞそだちの大じん、ひたいにけぬきあてる日より、尻に帆あげて三挺たてをとばし、お町にかよひそめ、唐も日本もまたにかけて、ながさきや平左衞門がかゝへ、をのへといへるに はじめてのぼりかゝり、ことにふみの上手に身をからまれ、夢のやうに成し折から、 此女郎を、れいがんじまの四郎といふ男、こくうにつかんで、孫大じんにはなをかませける、此むねんごふ思ひかへしても、はらがたてば、四郎めをやみうちにと思へども、 そふいふ事もさながらなりがたく、どふぞをのへにうへこす女郎を、われも請出して、此ぐわいぶんをすゝがんと、色を見たつる折から、時は極月十三日、 ふせた屋がすゝはきを祝ふて、中の町へまわつてもどる所に、小作りにはあれど、袖とめてまのなき女郎、 ふうぞくのりゝしいに心とまりて、かぶろに名をとへば、ともへ屋のかつ山といふお町の名物、今まで此君しらぬこそはぢかし、こゝにたつてござるはわるいものずき、 おまちなさるゝ

男へは、せつしやこれまでの證人に相たち、御身がはりに、たとへいつ迄も此辻にすゝんで、さき樣へつうじません、ひらさら御身のいたつき、見るもかなしきといへば、かつ山どなた樣かはしらぬが、にくふないいましたが、をとされし御かたの、たづねらるゝなら御心入、しかし人まつ身にあらず、あぢなものをひろば返ししんぜんために、さきほどよりこゝにたゝずみ、そうしたかほする人あらば、ことばをかけませんと、うかゞひますれど、さやうなる御かたなし、おまへには、わが身をいとふて下さんす御しよぞんなれば、これをわたしますほどに、今にもたずねきたる人あらば、もどして下さんせと、まもりぶくろをわたして、につたりとわらひ、ばたぐ\とした身ぶりにて、すみ町のかたへわたられける、孫大じんまもりぶくろをひらきて見るに、此さとのわけのみあまるきしやうもんなり、これはおもしろいものよと、おくを見るにあて名もなし、ちしほのはんはありながら、ぬしが名もなし、これはめつたやたらなきしやうもん、がてんのゆかぬ事に思ひしが、やうく\氣がついて、ひとりうなづき、是ぞきゝをよびし、かづぎしやうといふものならん、どの女郎にても、ぎりづめにきしやうをかき、そのちばんを押すついでに、何枚にもちばんを、をしをきにをしてをき、女郎仲間にせいしの入る時は、たがいに用にたてあふ、まことに近代のはつめい、むぞうさなしやうもん、それゆへたくさんにおもひ、をとしあるくももつともぞかし、さらば此きしやうもんからつけこんで、かつ山を手にいるゝくふうして、十二月十七日、あさくさのおさめのくわんをん、大もん日をいろく\あるじにはたらかせて、ふせたやかたにてはじめての御けんに、孫大じんきしやうもんをしたゝめ、大夫へつかはす、これはあまりなるなされかた、いかにしてもお人がらにも似合ず、ことにわたくし心底を、とくと御ぎんみもなく、うれしいやうにて、申さば御手入じまん、いかにしても、いやらしいとつきもどす、大じんいやそなたよりせんに下されしきしやうもん、われらは其へんぽうなり、そういふひだちはうたれますまいと、はなもうごかさずに申せば、大夫かほをふつて、うそもたはぶれもよいかげんがあるものぞや、ついにおまへゝ、きしやうをおくりしおぼへなし、いやこのごろ途中にて、下

されしきしやうはいかに、せつしやは戀ひにおろかにして、其きしやうをまことに存じて、たとへ書し人はたれにもせよ、下さるゝ人がぬしと存じ、命を取へぐ程に有がたく、はだ身をはなさず、朝夕まもりぶくろをいらふでばかりゐますと、過しころのまもりぶくろを、頸にかけてはだぬいでみせにける、大夫、扨は其たそがれの御かたとや、成ほどおぼへこそあれと孫大じんが手をとつて、床をとらせ、外の人のきく所にては、いはれぬほどにのぼりました、さるにても粹男よと、あたまから身をまかせ、とてもにそへぎしやうと、のぞまぬに大夫ふでとつて、あらゆるちかいを書つくし、人の見ぬ所に、此男の名を入ずみにして、ふかくたがいにいひかはしたる中、よほどうき名にうたはれ、つとめのじやまになるを、猶大夫手づよふ、外の大じんをふりつけて、ひとりにまことをつくす、男もまかせとよろづうけこみ、元日のぞうにも宿にてくふ事なし、やはらかなおばゝのゐけん、ぬかにくぎうちやつてをいては、いよ〳〵しんだいのためよろしからず、小判とせいくらべさせて、おばゝの引ぬいて下さるゝ、さりとはあいたてない事と、しよしんるいかほをしかめけるに、此女郎のりはついふもおろかや、おばゞへのこう〳〵、しよしんるいへのあたりさわり、何事もぬけめのない女なれど、孫大じんまへかどにすごせし金銀、にわかに取もどすべきちやうぎもなく、しだいびんぼうといふものにて、あたらしんだいのかぶをたやしけるぞうたでけれ、とかく何ほどはつめいにても、女のかちはきかぬものと、大わたりの商せし人のいへり、されば女は一ぺんにて、あとのふんべつのなきもの、大事のそうだんのばへは、さしいでさせぬものなり、牛の一さんといふにちがはぬ事ぞや、

（三）大佛のまへの耳かき屋

唐本の延喜式はござらぬかとたづねきたりしとて、大野木の市兵衛が、死ぬるまでのひとつばなし、しるをしるとせよ、しつた事をしらぬかほするも、こづらがにくし、ましてしらざる事を、まにあわそふとする心、いかばかりじゆつなからん、是さしがながいたらぬといふむまれつきぞかし、なりけりと、うたひのしりこゐばかりをまぎらかして、一座を六づきにくゝろめかぬる、いかにうたでくせうし千萬、ことに廓

中のうわさ、生た大夫をおがまず、あげ屋のたゝみにあがらずして、あてはめたすいりやうものがたり、いかに御はつとの外なればとて、人をかすむるくせ事、みづから筆墨のはりつけにかゝつて、ながくはぢさらすは、ふびんなりとさる人もなげかれける、中にもあげやのかわつて同じ女郎買ふ事、しかも其大夫に色いとひかせて、引ふねにうたはせて のみかけた所、なんとやらのもりのほとゝぎす、八まんたまらず、それはいかにも おもしろからんが、ざしきにうたふてゐる たいこ女郎のする事を つとむるひまな引舟を、めしつれらるゝ大夫は、どこにござるといへば、さればくるま屋の太夫殿は、つき出しのあくる日より、身じまいしてりんと高じきいにこしかけて まつてござれど、しほがないとやら、あるとやらぼやついて、一座を見世の女郎さへ、よけて下さんせといふて、よぶきやくがない、此引舟はいづかたへつけとゞけに、はしりあるかふやうもなし、又久三のあくびをうつしやつたはと、だい所にこよみをよんで、年中の大みよう日を、そらでおぼへられしもおかし、たまたまのきりうりに、大夫さま御出といへば、にわかにのべかみをやるやら、きやらの小買にはしるやら、かぶろがまへおびをうしろへまわすは、たまさかなあきない、いづれ引舟がはやりぶしを、大すみの大じんへ書てをしへけるを、せんせいの大夫の引舟が、くるわに雨がはつとにしたいとなげきけるは、大ぶんのちがいぞかし、大ぶつの正面とほりの家に、雛のはりさしゝて賣人あり、さても目のまへにこれほどちがふた事は有まじ、とかく世の中はちがふたでもつたと、氣のながい人のりやうけんもおもしろし、女郎もすゐになつてしよたいめんのきやくを、見せにおこさずに、のた〳〵とあげやへわせる大夫ありといふ、それはあまりなるわらのたきやう、松原の大夫もどうせんといへば、されば大きやうじのおさんが、はりつけにかゝつた時申したまゝにて、ねんぶつをを久しうぎんせざるが、此ごろ河はらをとほりしに、立君のありさま、もつてゐるものも同じ所につきながら、色女のよふちんふびんやと、ねんぶつごゝろになり、けらいにいひつけ、高で二十七人に、一分五つとらせて立ちかへるとき、どれやらひとりの惣嫁、これお供のしゆとよびかへす、なんじやとさが〳〵しうへんじ

してねぢむけば、たのみますぬし樣を、どこへもつれましてよつて下さんすな、かならずすぐにおやどへと、はやきやくごゝろにのみこみしは、はらすぢのよれることゝ、いづれも大わらいになりぬ、爰にみやこに、げんぶく大じんといへるあり、親大じん世をはやふすぎ給ひてのちは、からうの加淸うしろ見して、手ならひのつぎに大學ををしへ、論語も半ぶんよまれし折から、川松といふまつしやが見入て、げんぶく大じんをそゝなわかし、まづけいせいのふところのあたゝかさ、見るほどの夢によい事は、三日がうちにきたり、もしわるい夢見ても、てんじかわるがふしぎなり、扨人にもまるゝゆへ心のかどがとれて、いぶりな人といはるゝ事なし、上戸はもちろん下戸すら、酒のあいに上手をいひまわし、我よりうへの酒のみをしつけてやる、老ても人のまじわりあるは、わかき時、あげ屋の夜しよく大ぶんくいこんだゆへ也、かゝるよい事おぼゆるには、けいこさま〳〵あり、まづよいからねて朝をきする事わるし、あまりそく才なもぶふうりうなものなり、あついふろに入もの、ながせつちんせぬもの、秤めおぼへたもの、水くさいりやうりすかぬもの、きついたばこのむもの、こいらはけいせい買にきらふ事なり、とかく人の一代といふて、わらべの時と、こしのかゞむ時とを引ば、たつた二十ねんのうちぞと、是にふるくさい氣をもつて銀はたいせつなものじやと、べつしてもない事を、ふんべつらしうぬかすやつも、どこからむまれたと思ふぞ、そのみなもとをわすれて、女の事をあしさまにいふは、ひとへに神ぬしがじゆずをつまぐり、武士が刀をおもたがるに同じ、銀はつかふはづのもの也、ためて見てもおもしろきといふは、けいせいのふみ也、定家西行の手跡も、銀があればなん時でも買はるゝが、にしの大夫のくせつのわびぶみ、そのぬしの外は、いかな〳〵めでたくかしこも、所持する事なし、とかくくすりにつながれぬ命、一月もあそんだが德と、いづれも、本意にそむきしことばをつくして、むまがらせければ、大じんこれにくいつき、でかける心にはなれども、何いふてもかんじんの銀を、からうの加淸がまゝにさせず、とりもちがなふては、鳥もさゝれず、是をくつたくするを、川松かしこまつて口入にかたらい、火の車といふ一日おどりの大じん、銀をきも入りけるに、大

かた銀衆ものみこみ、明後日はわたる手はづにて、此きほひに、大ひやうしなるあげ屋へ御とも仕り、はきの大夫三人までざしきにそなへて、天職の女郎七人、いづれも座持といひしにちがはず、大じんまだな事を申さるれども、わきからとつてすくひ、是はよいのじやと、ごふもいへぬづくめにして御きげんをとり、そゝりあがる所へ、からうの加清御むかひにまいりしとて、あんないなしにざしきへとほり、あたりをねめつけ、大じんをひつたてゝ宿にかへり、印判御あづけなされよとひつこくつてとり、目のまへにてみへよへにつゝみ、ふうじめにわがゐんばんをして、すぐにわがゐんばんをだんなへあづけ、だんなの判印はわがふところにおさめける、扨もていねいなる男かな、日ごろ軍書すいて見るゆへ、人質のぬけをやりをつたと、大じんうなづかれける、扨とゝのいかゝりし大じん銀も、ゐんばんなくては、さま樣にがてんせず、何ほどごとばふとおもふても、はねがなければばらちあかず、ついにうちねずみとなつて、はじめのごとく、論語の素よみして氣をつかされける、川松は精功かいてすゝめ入し事、無になるのみならず、あげ屋の仕はらいをわがおもふは、ねがしよしんにして、心のさばけぬゆへ也、そうじてあげた女郎を、名じみのきやくにかすこと、これ又をのれが、人の買ふた時かるべいために りやうけんして、其あいださびしいめをしながら、よそのまつりのわたつたる事を、しつてゐながら しらぬかほをするは、しつかいきやくも女郎どうぜんにつとめするに同じ、是はんのあそびといふものにあらず、正月十五日の人ぎやう見世をやたらにぎやうさんにいふが、こゝの名月のしまだい、女郎からきやくへのをくり物、三十兩よりやすいはなし、是きやくが大ぶんにものをやるゆへなり、ことに此ごろは、上方にねんのあいた女郎の、しやくせんなしてやつて内へいれるを、請出したやうにひやうばんさせ、まさかしんだいのをちめの時は、あの女郎ゆへにと、だうりをつけさすまへをき、あづまものゝめからは、しつかいけいあんと見ゆる、なんと京しゆ、くちがあかれまいといへば、一々御もつともなる仰せ、さりながら、京の手がらは大夫がおほし、よしはらには高君がすくなし、よの事はしらずといふ、いやおほいが手がらとはいはれまじ、すでに弟子あまた

もちし、なんの師匠も、一大事のごくゐは、ひとりふたりにならでをしゑず、身に引かぶり、たび〳〵のさいそくにめいわくして、京を夜ぬけにしてあきの宮じまへくだり、たびしばゐの大夫本をたのみ、ついに手代になつてくらしけると也、

(四)おすがた女夫

箒木のこけるをみても、おかしがりしむすめの子も、ちよろりといつのまにか、子もちすがたとなり、貸とつて灸するゐたわるさむすこも、背ののびる〳〵と思ふ内に、當世しゆざやがゝりのほそびんとなつて、きり屋市左衞門かたのつけ松だけ、さらにおかしからず、今ごろいびひろげるまつしやどもは、ぶんこもつて、よいかるくち うけにこいと、お町たてよこ十もんじがみこに、きんらんの火うち所せくして、これ高ふあたるはおりならぬさかいで、いやなとおしやる八たんがけの八丈じま、しよしんに見へても金つばさんこじゆのすたらぬで がつてんせよと、せかいのものずきをきんちやくにつけて、けいせいのむねの内を見すかした男ども、京學の手代大じんをなぶり、扨もせゝこましき島ばらのさた、きやくが女郎をこなすすべをしらぬゆへ、又してもまけぐちになんごめしの事をいふ、女郎もこれさのみめいわくがるまじき事とおもへど、ふしぎに是をきゝづらふ、其うへ京の女郎買は、銀つかはぬを粋いやうにおぼゆる、これ大き成のみこみちがい也、高でけいせい町へは、だまされにゆくがなぐさみ也、惣じてうそほどおもしろきものはなし、まことゝいふものは、さしてかわつたものにあらず、そのかわつた事を聞ふなりさせふなりとて、色里にあそぶにてあらずや、あづまのものは大氣なるゆへ、うそもつきやうがよければ、何事にてもくふてやる也、京のものはゆきさゞかぬくせに、女郎の身のうへをそしる、其いひぶんひとつもだうりにかなはず、高でどうなりかうなり、世をわたるものゝむすめを、けいせいにうるものにあらず、しかれば大夫の母が、髮のをち買にあるき、馬のくつつくるおやぢのあるは、いはねぢしれた事也、是をたとへていはゞ、小便にて作りしものを、貴人高位もきこしめすに同じ、只めのまへの美形ふうりうを愛して、女郎のないせうをみゝふさぐが、まことの粋ぞかし、又女郎がこづかい錢をきらし、鏡までしちにをき、相合

櫛つかふなどは、そのきやくどもが銀やらぬゆへなり、をのれらがしわい事を、我とはぢをふれあるくに似たり、酒もていばかりをつけて、錢のいらぬさかなをうれしがり、事ともすれば、べしてもないさかづきに、いかめしい名をつけて、あそびごころへじさんして、是で花をやるものずき、みなちいさい心からの借上ぞかし、過しころも、相撲さかづきといふをこしらへ、これに銘を書て、友大じんへをくれば、又その銘に對して、さかづきをつくらせ、返報してまけかちをつけて珍重がる、しかるにさる大じんよりをくられしさかづきの銘の中に、さき樣の賓名の文字をきつて、中に盡といふ文字あり、是大盡の、盡の字にてつくしあぐるといふ心なれば、もつての外にさき樣のきげんにさわり、此いひわけをぐつゝき、しゆびなりし大夫の身うけまで、このもめにてさわりとなり、しやくせんだけつとめしとや、こんな事も、ないちゑをふるいたがる京大じんの、ていじまんのくせなりと、大きに京をうちこまれて、すごすごと手だい大じんは京へのぼりける、いかさま江戸のめからは、京のあそびをちやちに見るもむりにあらず、所はんじやうの地なれば、どらうつても又しかへす事、其人の氣がさによつて、間のある事にあらず、こゝに小田原町ちかきあたりに、有和桃牛といふ法經いしやのむすこ、いつのころよりびやうにんに氣をつかし、出町にくすりの匙子をなげて、みうらの大夫に肺肝をくるしめ、うわきの風を引こみ、戀のねつ氣すさまじく、くわんくわつのたわごとやむ事なく、ついに親の命にそむき、ごふもなる身を心から、素紙子にかたをやつれ、くはぬ目おほき腹ぢからに、ちぎれ帶を引しめ、ふか川へんのしるべにたより、相住のあらしするごき此宿も、ずいぶんふじゆうなる人の身のうへ、わが身の前非をくやみ、一かせぎとふんべつして、りやうじを賣て見れども、人はまだ此人の醫術をがてんせず、藥のまふとはいはぬにはこまりはてける、されどもいかな氣をめいらせず、夏ふゆともに、あかはぶたへのひとへばおり、すこしむかしののこりたるも花なれや、ぼたんつきのむなひもむすびもあへず、江戸中をとばかわしあるき、どこそこのかんばんをどらんじたか、手跡は見事なれど、かながちがふたの、何門のやねが高いのひくひのと、ひまにまかせてせ

かいを苦にして、目ふたつでねあまる秋の夜、しあんしすまし、家でんの外に、朝起丸といへるを賣ひろめける、そも〳〵この藥方をきくに、ほの〴〵とあかしの浦の歌三べん、今まいりのもとゆい五すぢ、入むこの耳のあかすこし、しばゐのゑびすだい このばちかたし、右四いろをくろやきにして、ぐわんじ合せ三りうづゝ 空腹にもちゆるに、たしかに朝をきして奉公人は主にほめられ、悴はおやぢによろこばせて、世の重寶となれり、たゞしたいこもちと、そばきり屋とはさし合なり、此くすりのはやる事、本町の藥王丸、なべ町のみがき砂にも責がちけり、是より桃牛よい身となり、父法橋にわびざるに、かんどうをゆるされ、親子むづまじく家とゝのひ、めでたく二代の法橋をもうし、このよろこびに諸病人を引きうけ、藥代をとらず、かへつてまづしきものには、りやうぢのあいだは八木をとらせ、いかなるけがれをもいとはず、くすりをほどこしける、是何よりのくどく、ほむるにことばなし、さてもびやう人といふものもおほくくるものかな、往し年、日本づゝみのけんくわのそばづへにあたり、まつこうをうちわられ、さつそく上手のげくわにかゝり、きづは愈けれ共、かならず土用入せんには、夜ばんを見るとづつうがいたすといふもあり、又みづからは十一より、さるおやしきのおくずまゐに、ことし二十五になれど、男のしたおびにさわりし事なし、おすがたとてさいくにんの思ひ入にて、もとするのいきかたを、こしらへしものにて、やう〳〵ねざめをまじなふ、しかしこれにも、其あい手〳〵がきはまりあつて、おすがためうとゝ名づけ、殊の外あれどもこれとて、じだらくになぐさむ事ならず、たがいに まことのふうふのごとくりんきして、女同士ながら なをしつとぶかし、しかるにみづからがあい手の女中は、しゆびよく御いとまをいたゞき給ひ、ほんの人を男にもち給ひ、夜毎にかわさるゝまくら物がたり、さぞかしと思ひやるより、いよ〳〵わがねやのさびしさに、心ぐるしく思ひみだれて、雨けになればすりこぎを見て、めまいがきますといふもあり、その外奉加帳をさし出されて、ちうぶのおこつたせんもん、よめかゞみのきやうげん見て、血のみちわづらふお內儀、にせ小判もらふて、むしくいばやむ やり手、てかけの所へ供にゆきて、りんびやうのおこつた下男、

ま男おさへたはなしきいて、はらいたやむざさうの女房、しうげんの所へつかいにゆきはづれて、こしけわづらふ めしたき、やねがもるさ かし屋にわめかれて、こむらがへりした家ぬし、たいこに羽織もらはれて、しびりきらした大じん、うなぎ屋の門で、はやけんべきのおこつたぼん樣、ゐんろうもらふ やくそくがちがふて、さかむけのできたわかしゆ、雨乞のたいこたゝいて、かくをわづらふせつた屋、日陽水のんで風ひいた新屋、さりとはむぐうの病人、まいにちつどひきたる、お江戸のひろい事を是でしるべし、

傾城難波みやげ卷之二 終

傾城難波みやげ卷之三

（一）俄に疊の表がへ

あしのかればに風わたる なにはの春のむかし、ゐちぜん大すみさいへる ふたりの美君、すがたの花をよし野にゆづり、なさけのてくだを あづまにをしゐし世のまれもの、おもへばするゐに出まいさは、さりさはきつし〳〵、されば梅さくらのいろかをどちらさおもはせ、ゆゝしきお家のからふしよくも ゐせいをあらそひ、お主のおためをわするゝたぐひあれば、をろかなる女心の人をねたむは、しかるにはたらざれど、このふたりの大夫をさなしからず、さかくにすみつきあしく、ふみでなりさ 酒でなりさ、しかたふ〳〵さ、日ごろたがいにぜんせいをあらそふ、ゐちぜんが大じんに、ひこの半九さいふ見ごさ出かけの男、いばらき屋の幸齋が たつのすけさいふた時、座しきをふしんして下され、しかも新宅のきやくには、なんぢへ我より外に、ふかくめをかけらるゝ人を しやうだいして、ざしきのかいげんをたのめさの仰せ、是はあまり御けつかうなる御事、げにや大鳥大じんの、はねさ

ばきはかくべつなりと、ものもらはぬまつしやどもまで、ほめぬはなかりき、これをあるじがかしこまつて、だんなの外に、いづれのおきやくをかいげんにたのまんや、そふはどふでもいたされぬ事、とかくにみやうがのために、だんなはじめて御入下されと、たつてねがひ奉る、爰をしつかふいふも、どふやらいなものと、ゐのこの日をゐちぜんもやくそくして、御出有がたく、あるじもあさばかまにしかへ、母もをきわたして、ひがしぐちの門に、半九樣のおかごをまちかけたり、所へ大すみが大じん、びぜんのかたな屋といへるはのきく男、あまたのましつやにかこまれ、けふはうわきぎやくといふものずきにて、九けんのよしだ屋へも、ないせうを大かたにつうじて、いづれのあげやにても、ふりがゝりにあそび給はん、是もくるわのさほうに、少はもまれたる事ながら、此かたな屋樣の御事は、かさねのあつい大じん、あげ屋も女郎もまつしやまでも、せつきのつばぎわにて、見事なもの下さるゝ、氣のきれたおさばき、何事もごきげんしだいにまはらねばならず、さいわゐどうじがもとには、長もちも見へず、さしあふきやくはないぞ、八まん是はとやにわに新ざしきへわめきいる、雪酒のまんと大せいわめけば、かみするをなど、まつしやの金八をよびたてゝようすをかたり、何ぶん半九樣の御出なき内に、少もはやく、ざしきをかへて下さんせといふところに氣をもつて、此ざしきうちこぼつて、けふ中にこちのだんなに、たてゝもらふてやろふと、つねのだうけに、かわつた五ゐんにくたびれ、さりとは、よふないひぶんと、あなたこなたとからこふことば、大じんのみゝに入りて、これはなんぢらがさはいわるし、時めくあげ屋に、けふのゐのこのもん日、ふしぎや女郎の長もち一さほも見へぬは、半九大じんへのちそうに、外のきやくをせぬと見へたり、とかく爰にはゐられまいと 大じんお立に、つゞいてまつしやどもゝ御とも仕り、すぐにいつものよしだ屋に御入り、めづらしからぬといふは、ひつきやう こちの手のまはらぬ故なり、われも半九がやうに、みふるばしたるざしきをたてなほして やつてあそぶならば、千年同じあげやへまいつても、氣のかはらぬといふ事あらじ、きうにあるじをよび出し、ざしきぶしん仕れと、このみのさしづを仰せわたさるゝ時、大夫樣が見へました

と、大すみざしきにをちつかぬ内に、けふのうわ氣あそびにつきて、いばらぎ屋にて大きなひけを御取なされしやうす、はやくるわぢうにてのひやうばん、わが身にしてのきのどく大かたならず、日頃すれあふゐちせんどの丶、きやくにつけでのいはくなれば、女郎なかまからもあしくいひたてられ、そつぢなる御かたと、下々の口にかけさせますむねんさと、たん氣のなみだをこぼされける、かたな大じんきいて、いかにもわれら一たんのそこつにて、半九をもふけのざしきともしらず、しばらくきうそくせしが、そのやうすをきいて、あやまつて立ちかへりしを、なんとちうしやくをつけて、そなたの心にさわる程にいふことぞ、やうすによつて、半九へわびことせまいものにもあらず、又出やうのしなにて、あやまらぬにもなるべし、まづいばらき屋がかたへ、まつしやごもをつかはし、半九ももはや來てゐるべし、一とほりのとゞけ、申してまいれの御意かしこまつて、げくわの九郎左衞門といふよふ物いふをとこが、いばらき屋へきたり、あるじにくだんの口上を申すに、少もお心いためらる丶事にあらず、半九樣こんにち御出のはづにきわめしところに、おくにもとより御用申してまいり、御ひま入にて御出なきなり、かたな樣御事、ふしぎにおこしかけられ、是も有がたき仕合といふ、扨はべちぎのない事と、立歸りていさいに申上る時、大すみ、いや　さにあらず、けふのざしきかいげんのやめになつたことを、しあんして御らんなされよ、其上ゐちせんどの丶さしづにて、たゝみをのこらずあらためらる丶、なんと是れが一ぶんのたつ事か、わしがあふかたな樣を、のちのゐのこに餅つく人のやうに、けがらはしうあしらふ、それゆへくるわぢうにていなさたして、せつたが入なら、いばらき屋へいふてやれとぬけの句つくりながら、是をゐかはぬ人はあるまじ、此ぐわいぶんのすゝぎやうを、ごふふんべつしてぞとはらをたてらる丶、かたな大じんしばらくしあんして、されば半九が、何とぞ氣をもつしかたあらば、われかんにんする事にあらず、心はともかくも、國もとより用事申きたり、そのひま入にて來ぬといふそのうへを、こなたよりやうすをたゞすは、むりに事をこのむにあたれり、又たゝみをしかへるといふは、女郎がきやくへのちそうなれば、是らをとなげなくと

がめられず、扱手のびなせんざくなれど、此よしだやがざしきをふしんしてつかはし、其しんたくに、われていしゆとなり、半九をきやくにまねかん、それにては半九も、いわふ所も有るまじ、あいかたの太夫、何ほどじやくはいな事をたくまるゝとも、をのづからはぢ入て、をとなしくさばかるべし、猶その折からに、ゐちぜんと大すみとの中をもとくとなをすべし、此あいさつ、わが身取もつも、どふやら大すみにたのまれたるやうにて、ゐちぜんあしくのみこみ、わぼくしながらそこごゝろに、大すみを見くだすことあるべし、それにてはわぼくのかいはなく、やがて又はり合、いつまでも中あしかるべし、是は西南にはびこる七くみのまつしやどもが、取もちてしかるべしとの仰せ、大すみ、いかにもわが身のひけぬあつかいならば、成ほどうちとけたる中となるべし、同じ日に出て、いづれがあね女郎にもあらず、ぜんせいまさりをとらず、されどもけいせいは、いぢひとつにてもつたもの、何事もひくふ見られては物がないと、どふでもほどけぬねごゝろながら、七くみのまつしやどもがあつかいにて、よしだ屋のしんたくぶるまいの時、ゐちぜん大すみの中なほり、ぶしのいきぢどうぜんと、のちのちまでもかたりつたへり、

(二)南方が鼻げぬき

嵯峨の鮎くいに、のぼれあづまのみやこ鳥、すみだ川の花火興あるけんぶつ、是れを珍重がりだけ ふしみにうつして、中書島の七兵衛が車火、めぐる月夜おかしからず、やみの夜のひやうたんのつる、瓜にはならぬなすびの、ひとくちくいつきてあぢしるものは、けいせいぐるいぞかし、されどもわがまゝばかりいふ大じんには、頭をふるまつしやはかしこまらず、ひざぎりのはおり大じんとて、取いでより大はゞに ばつと露ちるおぎ野に、戀風つよくふきたてられ、よろづのさばきまへかどなれば、女郎これをよろこばず、さのみ身のために、なるとも ならぬともしれぬ程の男をたいせつにする事、爰らにおゐては、色ざとのいきかたはかくべつなり、 はおり大じんいちがいにのみこみ、酒のうへとはいひながら、鳥羽屋のざしきへ茸ぶくろぢさんして、見だけの小判を 手づから五兩七兩、あたりしだいに下されける、是をいたゞきながら、かへつてをなごもりやうり人まで、だい所にて

たか〳〵とわらひける、さりとはまだなる大じんかな、くるわはきやくの銀つかふ所にきはまつたれば、さのみ銀めづらしいとおもふものなし、げにはたゞいま、大じんのきれめゆへ、銀もらふていたゞくも口おし、過しころ、まつしやあそびのきやうげんをおかしがるはしんじつか、是がよかろがとたんばの大じん、小判を大道へまかれけるに、いづれかひとり、此小判をひろふものなし、ふみつけおし合、まつしやの盡すもんさくをけんぶつせし事、くるわの手がらにて、今にいきがたをこのめる人は、女郎ぐるひをたのしみ、喰ひ物にのどをならす男は茶國にあそぶ、今のはおり様も、茶屋ぐるひなされなば、あまねく人が思ひつくべし、是いつこくをおさむるきりやうと、天下をしろ大將とのちがい、いづれまつしやといふもの、なくてはかなはぬものぞや、おばの十兵衛か、喜入かにもみこまれさせ給はゞ、人に有がたがらす銀のやりやうをおぼゑ給はんに、あたら物を手ばなしながら、又とろかと もんさくでしかけらるゝは、むねんなる事いふも恐ろし、野郎ぐるひもなをゆだんのならぬものぞや、らう人やくしやの、たいこもちにそだてあげられ、棧敷へげいこをかるあとより、つゞいて馬のあとあしどもが、いくたりともなくつけこんで、ちかづきならぬにむりに見しつたかほして、だんなはこれよりのおちつかせ所、いづかたときゝさだめて、りやうり申付たるざしきへすいさん仕り、大じんは一ぶ子を買に、たいこは白じんをつゞけにしてあそぶ、是ぞかし屋かしておも屋をうらするびんぼう神、取つかれたるがさいごぞかし、惣じて百兩どりうへのやくしやとねんごろにかたり、折ふし向上なるゐんしんしても、さのみしんきのいたむことにあらず、せんしやうしたき人中にて、あみがさをとつてじぎしてくれるか、又いろざとへのぐわいぶんにどう〳〵しても、大じんの人がらすさまじう見へるものなり、やすやくしやには、ちかづきになるとはやはおりをもらいかけられ、なじむにしたがいとゞこほりたる家ちんのそせう、米屋の書出し、ながれきはの質ふだ、めにさしつけてのむしん、ひくにひかれぬ緒じめきんちやくにしうしんかけられ、わきざしこしらへるものずきのだんこう、是もだんなのさいくやく、仰付られ下されと、禮もいはずに、其代銀の事

は、夢にもしらぬ顔して、人のぞうさにて食悦しながら、をのれらがりやうりを好み、大事の一ぶ小判を、あれにもこれにも やれ〳〵と氣まゝにさばき、大じんのをちめには、やさがむまれぬさきのしる人のやうにして見かけもせず、よその大じんに、銀もらふたはなしせずに けふ一日つとめなば、げんぎんに一ぶやるべしと、粋男のあつらへられしは さる事ぞかし、ひとりばみのならぬ大じんの、名代のとほる本まつしやを、こうけんにめしつれらるゝは 外からも見よげなり、まつしやも大じんのうしろ見しながら、じぶんのいろをかせぎ、無性に大酒するは、らう人やくしやのたいこもちにもをとれり、このまへ あげ屋のさしづ仕りたるてんしよくの女郎に、さる大じん、大さかづきをおさへられけるとき、あるじが、それはだんなごむり、わたくしのおすけ申さんあいだ、ごしやめんと申しもあへず、のみほして三ばいのおさて、座中にいわれぬさきに、ずいぶん見事にこなしける、是大じんのごふしんあさからず、 さしづしたる女郎といひ、いたまぬさきに大さかづきをすけてやること、しかもたのまぬ酒の身がはり、をのれが三ばいまで。

かづいたもいなもの、さだめて此女郎とあるじめは、かねててれんしてゐると見へたり、さあれば われにまかせて、をのれらが戀をたのしむ手くだ、さりとは銀出しながら たわけにしらるゝ、事によつてかんにんのなるしゆびもあれど、色ごにおゐては、めがふさがれず、あそびものといへばいふ物、買一日は我妻どうぜんなれば、まおとこしるゝ鼻げぬき、なんぼうでも かんにんならずといぞられける、事しりの本まつしやが、大じんをいさめて申には、是まつたくていしゆめが てれんするあい手にあらず、もつとも さしづ仕るうへは、ひいきな女郎にはきわまつた事、さればいづれのあげ屋にも ひいきする女郎あり、又それ程に思ふてやらぬ女郎もあり、女郎も又、あげやをひくとひかぬとがあり、爰はくんでをちたる事、其しさいを申さば、どちらもしらぬ相撲とりに、かたせたいがあり、まけさせたいがあるやうなものにて、よくとくならぬひいきは、いづれにかぎらぬ 人の心のつねなり、扨女郎をいとふて、あるじが大さかづきをすけたるは、大ぶんだんなへたいしてのちそうなり、其こころは、此ざしきにてたれが 何ほどおかしいかろく

ちもんさくつくしても、つまる所は女郎が花のもとなり、其花を酒にいきつかせては、をのづから一座のにほひうせて、さびしうなる事きのどくゆへ、あるじが爰をのみこんで、のみがたきすけ三ばいを仕りぬ、女郎をたすくるは、女郎のためにあらず、だんなへのほうこうなり、又てれんしてゐる女郎なれば、あんなものにあらず、成ほど酒をのませて そのゑひにかこつけ、床入をさせずにしまい、大じんかへらせられたるあとにて、をのれがむまい事する巧みさま〴〵あり、女郎をすめんにしてをくは、大じんのお心まかせに、何事もつとめさせせんためなり、つゆちりくもらぬあるじがしんていなりと申すにつけては、大じんもうたがひをはれたまい、なをおもしろきしゆびに成ける、是事しりのまつしやのさばき故、人のあだ名もたゝず、大じんもきげんをなをりぬ、はおり大じんもこんな本まつしやをつれらるゝならば、ふかくな色まけはあるまいに、よしなきあつめだいこをならさるゝゆへ、よい事をしらずに しんだいを、はたいてしまわれけるぞせうしなれ、

(三) 太夫諸國へ廻文

其ぬしならぬ他のふみは見ても詮なし、さるにても書事の有まじきとおもへど、そのいろにはまりたる心からは、どふでもいひのこることのは、あかつきのわかれをかこち、まつくれのをそきよすがをうらむ、爰にいたみの男、扇屋の太夫をふかく名じみしのち、請出すだんこう、何事も残らぬしゆびにつけとゞけして、此太夫を親かたに三十日あづけをきて、しんぞうのころよりあい見しきやくのかたへ、のこらずいとまごひの、ふみをかゝせてをくらしける、ことさらちかきころ迄、御げんなりし男のかたよりきたりしふみどもを、ひとり〴〵の國々へをくりかへしぬ、是請出す大じんの、心のわるびれぬしるし、上々吉の粋男とは、此人をこそいわめ、太夫もぬし様よりゆるしありてのうへなれば、成ほどふみに名ごりを書つくしぬ、男もつ身なれば、人にしたはるゝ事このむにはあらねど、いづれか思はぬ女郎ならでは、ひとくちもくはぬものなり、ましてふみのとりやりする程のなじみもあさからず、大かたはわが女ぼうにしたる心もち、いづれの男にも、水をのませて白状させたし、うけ出す事いやなるはなし、されどもわが思ふほど

に、女郎が思ひつかぬか、又は親の手まへ、何かにつまらぬいわくのさきを見きつて、したい事をかんにんするも世のならひ、まだなる男は、請出したる女郎を、いかにわがものとしたればとて、あまたの男のをくりぶみをさがしとつて、あんだらつくせしぶんしやうを、わらひぐさになぐさむは、その女郎の氣にしても、あまりうれしからぬものなり、女郎を手にいるるとて、むりやりにせちがひ、まぶぐるひをぎんみしても、中々けいせいのちゑにはをよばず、つてせふとてをいても、ぬす人のひまはなきものなり、たとへふかまのある女郎にても、こなたよりあぢにもつてまいれば、をのづからさまへのふかまをのきて、こちをふかまにするものなり、粹はこゝをのみこんで、ふかまのある女郎を、手にいるゝことを手がらとするなり、ふかまのなき女郎を手にいるゝは、しらうとげいにて、見じゆくな男のする事ぞや、是ひとへに、ふたごころあるさぶらひを、それとがてんして、名將はそのふたごゝろを一途の忠信に、心をもちなをさする樣に、しぜんとつかいこなすに似たり、愚將と不粹は、まことある人を無性にうたがひ、はだ刀さしたるやうにあしろふゆへ、氣をつかしていつはり、うらがへりするものなり、高でしらうとむすめをわが女ぼうにしても、つゆちりゆだんするものにはあらず、ましてけいせいなどを手にいれたりとて、をちつきすごせば、猿にくはれた程なだまされめが見ゆるもの、いかにもしんていにはゆだんなく、うわべはずいぶんうちとけてみすべしと、古き粹の申されしは ちがはぬ事ぞや、けいせいの身あがりしながら、けふはきやくが見ゑませぬとて、半粹をふみしてよびよせ、ゆるゆると身をまかせて、其うへによいきやらくるゝ事、さてもよい事のうわもりなり、是がだましのいろはにて、是にくいつく男は、ちゑのほどがしれて、うちの戸だなのかぎを、女郎にあづけをくやうなものなり、粹めは爰にてさん用して、見へぬきやくならば、こんにちは われらがあげぶんに仕らん、そのきやくのかたへは、にわかにいなかきやくにて うりつけました、ぬし樣のおせわにあらず、かさねて御いとまの折から 御出下さるべしと、 ふみしてしらせられよ、來ぬ日をあげてをいた、きやくの心にしてははらの

たゝぬ事、ひとつはき様のごぜんせいにもなりませふと、かうでゝくる男には、女郎もひと手うへをゆかずばなるまいと、はやむづかしう思ふなり、男のうちかぶとを見らるゝから、女郎にだまさるゝ也、ちかきころせちがしこき、男の心を見すかし、女郎より金子五兩あづけをきて、ないせうきやくに思ひますと、うちとけさせて、くるわのあきんどの物は、大かたご存じにもあらん、ことの外たかくしかけますゆへ、わしらがやくせんの大ぶんつもり、歸しなにはめいわくすることゝ、いづれの女郎樣もおなじことなり、少のものはそのまゝ、取つけたるあきんどのかたへ申つかはすべし、銀匁のものは、ぬし樣せわしてくださんせと、やさしいこゑしてたのみ、小袖がひとつこしらへたし、いつぞやの小判は、そうしてをいて、これでとゝのへてくださんせと、又五兩ふところからふところへいれて、わたりの花いろじゆすをのぞみしに、心へて此男せわをやき、いろ／＼くめんして下直にあつらへ、太夫かたへつかはしける、其のちは是がつけいりといふものになりて、ごふくやへもこまもの屋も、みな男のかたより引つけ、折ふしには金子を、いわぬうちにさいかくしてをくり、ある時はならぬいはくを、ていねいに何べんもいわるゝにもをよばず、苦しからぬこうけこませて、さしをかさねて男にしをくりさせて、とふ／＼のこつき所が、八貫三百廿八匁、是を男が、けいせいとくじにもならず、かづいてしまいけるこそおろかなれ、でんごはれて、是程の銀を女郎にやつたならば、すさまじうをんにもきすべし、せけんも見事のさばきと、せんしやうにもなるべきに、水の中でへのじなりにつかふたかね、人にいふもぐわいぶんあしく、かへつてその身からかくす、はぢかいてのくほどのいつはり、半粋をだます、ちかきころのしだしぐんほう、この手で城ををとされし男、いくたりといふかづをしれず、れき／＼ちゑがほをしたまへど、女郎のしかけにはをよばぬことぞや、

(四)ふた心ある太鼓持

女郎の買ろんをしよしんな事とは、ちかごろもんもうなるいひぶん、爰ぞいきぢをみがき砂ばの、水ぐるまといへる大じんを、竹のやきさがらかしにて、つきころしたるためし、是や武道のこんげん、なさけのか

がみ、かみ田屋のつぼね女郎、かはゆい男のけんくわのすけだち、かみそりかぢの弟子の鼻のあなへ、きせるをつきこんで、血をたらさせて、ふまれし男のあだをむくひし女のわざには、さりとはつよし〳〵、爰に大坂屋の太夫に、同じころよりのなじみの大じん、南清東又とて二人の美男、物ずきいづれもをとらず、太夫がしんてい見付しだいに、根引の花の春のあした月の暮はつとりたばこの、けぶりの吹やうまで、女郎の心には、どちらをいやらしいとも思はず、身をふたつに、わけも同じ程づゝ、たつはふしぎのゑにし、心をあかすせいもんにも、おふたり樣の外はと、まくらもかくべつにこしらへて、なさけもうらみも兩手の思ひ、行するはいづもの神樣しだいに、よるせもさのみいづれにわけぬ、つとめの身にも、かゝるおなさけのめいわく、これもうきふし竹ならで、わられぬしんていをうたがはれて、たがいにむやくのいぢあそび、いかに金銀にことかゝぬ身なればとて、うへをしてとるさばき、つまる所はあげ屋の福の神、下の男どもまで又樣づき、きよ樣づきとて、かたをあてあふ、是もぎりをしつたる、なさけの里そだち、にくふない事ぞや、又樣におめをふかくもらい奉る、まつしやのかん八といふ男が、きよ大じんのはおりがみじかすぎると、太夫まへにていひけるを、又大じん是をよろこばず、さりとはなんぢは、いやふうなるものかな、清がふうぞくのひなんを、太夫にきかせがましく、そちがわれへの、ついしやうにいふとはしらず、われがなんぢにいひつけて、いわせたるかと、太夫の思はれん所、いかにしてもめんぼくなし、もつとも清にうへこすものずきをしだし、太夫の心をかたむけんとするは、わがしんていに有りながら、清がわるい事を見出して、太夫につげてあいそつかさせ、太夫をわれに思ひつかせんとするは、ちかごろみれんのいたりなり、清ゝずいぶんの雲上ものなれど、それよりはなを又がすぐれたりと、思はれてこそほんもうなれ、ひなんのある人にかつては、さら〳〵うれしからず、なんぢしんていいかにしてもさもしければ、きやうこうわれらがざしきへは、むよう〳〵との仰せにて、かん八はお鼻をついて、けいこもせぬたいこがあがりける、是をいづれもがきのどくがり、つきもの仲間申あわして、いろ〳〵又大じんへ御ねがい申上れども、いか

な〱御取あげなく、御きげんのなをるべきていと
も見へず、此だんかん八にいひきかし、よく〱のお
にくしみなればこそ、いづれもごをんにき奉らんと、
ごそせう申せど、御ゆるしなきうへは、たつて申上、
われ〱もごきげんそんじては せなかにはら、かわ
つたふんべつして、ごそせう申せと、いづれも口をそ
ろへていひきかせければ、かん八もなみだをながし、
まことに花もみもある大じんの、お心にちがひしは、
われまつしやめうがにつきたといふ物なり、此うへ
のごほうこうには、われきよ大じんのまつしやとな
り、ずいぶん氣にいつてそばぢかふめしいだされ、其
うへにてなんぞ、よい物ずきいひいたさるゝならば、
何なりかなり、われらが、さんをつけてむようにさす
べし、萬一ふものずきを申さるゝならば、是はごふも
いゑませぬと、そゝりあげて、とふ〱むふんべつ大
じんにしたつべし、しかればをのづからだんなの物
ずき、うへこして見へて太夫樣もおぼしめしかたむ
かせられん、きよ大じんにはさゐわい、わけよくのみ
こみたるまつしやなし、一兩人のことしりあれども、
これらはちかきころのつきものにて、そいらがいふ
事は、まへ〱よりめしつれらるゝ、まつしやどもが
をのれがちゑじまんしてうけつけず、われらはりよ
ぐわいながら、さとのわけしりぶんにて、あつちのま
つしやどもゝ大事のだんかうには、よび出すにはき
わまつたこと、其時は今いふとほりにもつてまいり、
だいてこかするふんべつ、是をばだんなへの ごほう
こうに仕らん、かならずまことの心にて、きよ大じん
まつしやとはならぬせうこに、かさねてたつてくれ
よ、日ごろぐちな物も、くいあふたは爰じやぞと、な
みだをながして、たのむまでもてなし、是はいかにも
おもしろいふんべつ、しからば、今よりはきよ大じん
のまつしやとなり、ずいぶんその手でやつてのけよ、
かならずぬかるな がつてんじやと、わかれてのちは
かん八きよ、大じんのひざもとに取入、まんまと心を
ゆるさせ、よろづの物ずきだんこうには、ぜひまかり
いでゝ、くだんのごとく、よい事にはじやまをいれ、
むふんべつな事にはてうしをとつて、なんなくきよ
大じんを、きよろさくにしてたてける、それゆへ太夫
あいそをつかし、淸大じんの手をきり、又大じんの御
手に入ける、さてもせんしうばんせい、申おさまつて

のち、かん八が手だてのぎを、又大じんへ申上、ごかんごうごめんのねがひを、せうこにたちしまつしやども、よろしく、いくたびか申せども、いかなくごめんなく、ながくごかんどうなり、さようなるいつはりものは、われとてもゆだんがならず、かりにもだんなと奉り、ものもらいくく、むふんべつをわざとすゝむるまつしやは、粋大じんのつれるものにあらず、かさねてこいつが事をいひ出す者も、かんどうとの仰せ、もつての外ごりつぷくのうへは、誰もかまはず、いかさま、名粋のことばのごとく、いかやうにもかげながら、ほうこうのしかたは有べきに、人をそこなふやぶれだいこ、をとなしからぬしんてい、どちらもこちらも取はづして、中にぶらりとなりさがりて、はてはごふなつたもしれず、

傾城難波みやげ卷之三終

傾城難波みやげ卷之四

(一)世を宇治組の鮓

物好のうへからは、冬のかさね袷十七、袖ぐちをいろいろに、わざとちがへて着て見よと、あげ屋のあるじに浦山しがらせ給ひける、大じんの雲上風、さながら綿入がなさにとは、いかなく存じ奉る事にあらず、されどもあんまり取の吉兵衞が、さんごじゆよりは、蜻蛉玉がほしいとは人に似合ず。女郎は惣じて心よわきを上ものとし、大じんはものにきよとつかぬがよし、是大將の片氣ぞかし、粋も不粋も酒のむ時はそのけぢめ見へず、一口說仕出したるうへにては、ありたけのお智惠があらはるゝぞや、さもなき女郎の松とよばれ、誰もにくがらぬ君の、二疊じきのつり格子にもめんぎる物着た人に、まくらをかわさるゝにて世の中はしれたり、一國手に入かぬると、天下をおさむるむねの內とのちがい、藥賣のからくり人形も、茶づけくふやうにはしかけられず、大佛の堂建る人とても、さのみ手が二人まへもあらず、是を思ふに、たゞ人は少の所に高下は有ものならめ、過にしころ、さる

太夫にふかくいひかわして、うらなき中のへだてもなかりし大じん、あづまにくだり給ひ、難波のよしあしはまつしやどもを、太夫が横めにと、仰せを承りし男共、ずいぶん太夫様のまぶぐるひを見出して、あづまへ注進仕らんと、朝夕うかゞふ所に、此太夫むふんべつなるやり手にこしをされて、かくあづま大じんの手をきつて、ひとりだちに身請の相談、いづれへのおきやくへも、たのんで御覧せ、いやとかぶりふる方は有まいと、おとさきしらずにすゝむるに、太夫も心かたむき、かゞの大じんへ文して申まいらせ、さつまのきやくへも談合して見らるれども、いかな〳〵がてんせられず、かへつて此事あづま大じんへもれん事、きのどく大方ならず、とてもいひ出したる身請だんがう、此まゝにてすてをきては、けいせいの一ぶんたゝず、木の葉大じんをかりあつめて、一くせつして見て、運をきわめんとしらふとまつしやをあつめ、あづま大じんへ、むりをもつてまいる、くせつのだんがうあると、きくより横めまつしやをどろき、いさいに文にしたゝめ、あづまに飛脚をつかはすに、大じん其日はさんやの大よせにて、しぐみ踊のあとにやつし、能のもよほし、是をきいては肝をつぶし、其日の興行はやめになるべき所に、すこしもさわぎ給はず、しらぬかほにて何事も、大よせのさわぎべつぎなく、はてゝ、すぐにその夜に、太夫がむりくせつのしかけぎんみせよ、いよ〳〵悪性にきわまらば、太夫をあづまにつれくだれ、其うへにて我りやうけんある事と、いさいの仰せを承り、御ひざもとまつしや数十人、なにはをさしてのぼりける、とかく太夫のむふんべつ、是は大じんへ御わびごとなされて、まづ當分の御難儀を、御のがれあつてしかるべし、いづれも此たび能登る粹まつしやどもが、たいていのしかけをのみこむ者共にあらず、太夫様のみかたのまつしやどもは、久々くるわの酒に絕て、心は何ほどに存じても、多せいに無勢、ついにはしつけられん事、十が九つまでなり、其内じせつをうかゞひ、手くだのしかけやうも有べしと、のまぬさきから大さかづきの、具足ぶるひするまつしやどももおほかりぬ、爰に此たびの寄まつしやの内に、打帶の左七といふ男、此たびのくせつに、あづままつしやをなにはに引うけては、味方いひかつべき道理をおぼへず、拙者に少々やり手かぶろを

つけて、みやこにのぼせたまへ、宇治勢多のあいだにまちうけ、あれにてひと酒もりして、ずいぶん上手をいひまはし、みなかたづけん手おぼへあり、そのいわくは、宇治丸の鮓をさかなに出し、勢多蜆のすいものいづれも酒の醉の來るしかけやうありと、くぜつのこんたんを申す、是尤成に太夫運のつきにや、是をがてんせず、とかく出張の酒軍、不吉のためしおほしととつてもつかぬ、賴政が平等院にこもりし時、田原又太郎に先陣しられて軍をやぶられ、其のち木曾義仲も、さゝ木の四郎高つなにわたされて、ほう〳〵なめにあいし、とかくはなにはに諸末社をそろへて、たてこもり、あづままつしやを引請て、くぜつするにはしかじと、さりとはいちがいにいひつのりて、よいふんべつを消てのけられける、是ゆへあづままつしやなにはへ入こみ、ついに太夫のめつぼうになる所を、いろ〳〵あつかい申し、あづま大じんのけつこう、さばかれける、

（二）酒樽の關所

女郎を請出して、野邊の下屋しきにかこひをき、其ままくるわの躰にて、あるかぎりの餘情をつくし、本妻のまくらはちりにうづもれて、夏の鶯ふるくさく思ひなさるゝ夫の心をうらみわびて、あまたのこしもと女にしめし合されけるに、いばらぎ村より年きりて、ちかき比より奉公仕るおさんといへる女、ずいぶんさかしきものにて、奥樣のおうらみの心をくんで、お下屋敷へかよふ酒樽を止て、旦那樣に手をつかせません、是はなんでもよいふんべつ、何とぞ伊丹ぐちにこしもとの女勢をくばりて、酒樽の通路をよぎらば、お下屋敷のなぐさみ絕て、終におく樣へ、だんなの御入なさるゝにはちがはず、さあ一刻もはやく、手くばりしてと、おさんを時の大將として、伊丹ぐちに關を居て、酒の通路の道をきりける、下屋敷にはかくともしらず、酒は伊丹より何程も取よせる事なれば、いかな〳〵事欠にあらずと、いさゝか仕末の心もなく、あまたの浪人まつしやをかりあつめて、晝夜のみだれ酒に、ある程の酒樽をこかしてしまいぬ、其うへおく樣御もちゐなさるゝ、三年酒十樽、此春下屋敷の藏へ入をき申たり、是御かへしあるべしと、急におさんが催促して取かへしければ、いよ〳〵下屋しきには酒の用意つきはて、おかしからぬ遊び所に成ぬ、是

前後のぶんべつなく、無性に酒をのみちらして俄に手づまり、寄る末社どもは夜ぬけにして、をのづから奥様がたになりて、下屋しきはをなごどもばかりにて、をどるにも諷ふにも、只拍子ぬけして、とかくおく様へおわびを申して、だんなのあそびを。ながうするにはしかじと、いろ〳〵手をすりて、くれ〳〵むふんべつな思ひたちは致すまじきと、なが〴〵とした る誓紙をしたゝめて送り給ふを、其判もとおぼつかなしとて、おさん下屋敷へまいりて、だんなの判もと見とゞける、此時もいまだ下屋敷かたには、底ごゝろうちとけず、おさんに無理酒をのませ、男の中に取こめて、わやくをするつもり、かた〴〵いひ合せて、所所のつまりにりやうり人どもをかくしをき、すわといはゞ早煮酒をしかけ、すいものゝ味噌すつて待かゝける、おさんその日は若衆出たちにて、きく田八丈の羽織に馬のりをあげて、さめざやの大わきざし、銀座かゝりにさすまゝに、うすがきのくつ足袋、ずいぶんやつこに名古屋帯、房をやぐらにむすんだり、扨懐中にはけんぽの梨子、蛇莚の陰干、是酔のさむる藥をたしなみ、座しきに入よりたゞだんなへ目をつけ、びくともせばとびかゝり、さしづめのさかづき勝負をせんと、前後に心をくばり、ゆだんをせざるふるまい中々あたりへちかよりがたく、いづれも間合を見る所に、おさんだんなへ誓紙をさしあげ、御判なされよといふ、心得たりと指のさきを針にてつきやぶり、判をし給ふを、おさんかぶりをふつて針にて血を取り、判ををすは女のするわざなり、ことさらけいせい野郎に、つかわさるゝ起請にてはなし、誠の御夫婦中の誓紙の血判、いびさきの血にてはなまぬるし、ひたいぐちより血をとつて、うらなき御心底をみせ給へと、ぎつとしたるいひぶん、だんなもけなげにおぼしめし、汝がやうなものを、我も金銀にかへてもほしき事かな、いまだ年ゆかぬ身といひ、女のちゑには又有まじきふるまい、行するたのもしき若もの、我なんぢがりきみにをそれて、のぞみにまかするにあらず、いで と思はゞ、たとへ其方いかほどの上戸にても、大せいの呑手をかけて、ひつつゝんでむり酒をのまし、ちどりあしにする事は、網に入たる魚、籠の鳥をころすよりはやすし、されどもあまり利發なる酒ぶり、是を賞翫のあまりに、いひたい事をいわせ、其うへこのみの

とほりにひたいより血をとつて、判をするをよく見よと、おさんが申すにまかせ給ふは、だんなのつよい所、おさんが酒にはるかにまさるべしと、いづれも心ある人はかんじ入ける、其うへおさんへ一大事のつかい、太儀千萬とて、こうりん蒔繪の伽羅箱を下され有がたしとてざしきをたちける、そのく女のふるまいにはでかしたりとほめぬ人はなかりき、此時おさんが心ゆるみけるにや、又は塲うてしけるにや、わちくとふるい、爰にておさん、御酒ひとつたべませんとのぞみければ、心得たりと、五はい入の大さかづきを出して、のんでしんぜとて、新八といふ男、見事に引うけ、さらりとほしておさんにさせば、おさんもだぶくとうけもち、なかばほしたる時、だんなの仰せにて、おさんにふかく酒をのますべからず、たいせつ成使にきたりしものなり、おさんも心おもしろきほど呑んでかへれとの御意は、まことに粋大じんの御ことば、のこる事なき御めぐみ有がたく、おさん御酒をたべだちに、みな様おさらばゑ、

(三)上々吉の娌入

神代の娌入も今のやうなものか、うへくの事はいふもさら也、下々の祝言にも、一代一度の紫小袖、身相應にこしらへ、娌の持参銀にて諸親類存といからかしめ、聟の方にも無用の普請、壁の上ぬりして身躰をかざる事、今の世のすがたぞかし、過しころの口ずさみ、あづまからくる花よめ見しに、當りうの花車道具の入し長持ばかりを三十さほ、やりつゞけし小袖簞笥五十、其外いふに及ばぬ上々吉の嫁入、此うへは又あるまじき事、男女のよろこびは爰にきわまつて、祝言といへば婚姻と、思ふもいふも無理にあらじ、されば女の身ほど、うたてしきはなし、一たび親の家を出て、夫の方へきたりてわが世を經ながら、こゝろのやすき事露程もなし、ふうふの中むつまじからず、あるは女郎ぐるひ野郎をたのしみ、身躰を見だすはまだしも、内義のわゝしからぬゆへ、ていしゆ有たきままの色あそびに、あのざまとにくからぬおつとを、わらはすはきのどくなれど、さのみ内義の科とはいわず、爰に十九といへる大じん、初夜も四つもわかちなく、色里に身をはめて大酒をこのみ、其あげくはおそろしき劔難、おさまらぬ身躰をくやみながら、いさむることばを聞入たまわず、扨も妻の身にしてはうき

事の數々親里にもれて、さやうのおつとには一代そわれまじ、たとへ尼法師になりても、せめてわざめの心やすきこそ、世にたてるかいぞかし、いかにも一たび、二世とちかひしおつとにて、のきさりするはこのまぬ事なれど、とてもわが女房を、有ともないとも思はず、短氣は損、氣ちがい同前のふるまい、命にさわりあるもしれず、とかくふびんのむすめ、取もどしてと、親の心にしては若に思ふも尤なり、され共此むすめ、親のおぼしめし入は有がたけれども、又世の義理を思へばさにもあらず、御存じのうへはつゝむにかひなし、成程つれなき夫の心、あまりにおもへば此身のゐんぐわにて、かゝる人とふうふに成けるかと、いとゞあぢきなく、世を紋なしの小袖に着かへて、うき事きかぬ耳塚邊の、尼の弟子に成べき心、いくたびかおさめて、女ながらしあん致しまいらするに、みづからおつとの方へのみやげ銀、五百兩は大かたみな、色ぐるひに無し給ふと見へたり、たとへさなきにしても、みづからいとまを取にしては、敷銀ももどさるべきが、的と此銀にゆきあたり給ひ、口をしく男心の義理にせまり、ことさら日ごろの短氣にまかせ、自害し給はん事、きわまつてかゞみにかけまくも、かたじけなき親のお心にそむきながらも、おつとの身命のはつる事を思へば、いかにしてもりべつは成がたく、うつら〳〵と一日ぐらしに、おつとの心のなをりやせんと、たとへにいふごとく、雨夜の星をまもり、天道にねがひを申して、扨もかなはぬ女心に、なみだこぼさでねぬ夜はなし、とかく女の親は、まけるが世のならひ、聟にさま〴〵ゐけんして、金子千兩取かへ、是にて心を入かへ商に精を出し、よろしき店おろしを見せらるゝうへは、此金子取べき心底にあらず、心だてなをらず、放埒成身持ならば、急度取返す爲に證文致さるべしとて、手形をかゝせて取ぬ、是舅の恩、まことの親も、是程の慈悲は有まじ、身躰ひだりまへなるゆへ、とかくに我やどのおもしろからず、捨ぶちうつてのり出す、心の駒をひかへたまへと、見事なゐけんの仕方、唐はしらず日本には又有まじき、箔のついた舅にも、見はなさるゝ此大じんの性念、いひがいなくも有にまかせて、小判を逆手にもつて、あげ屋の座しきに仁王だちに、あうんのいきもつかず、見たか見たかとまきちらして、借上の有かぎり、かしこいやつ

らが口びやうしにのせられ、見事なお羽織舅様からのおしぎせ、よごれぬやうにあそばせと氣をもたすれば、なんの此羽織、いくらも同じ島にて、仕立をかせし、のぞみならばとつて着よとの、おことばをまちかねしと、はや袖もとほさぬゐるいを、目たゝくまにはがれてしまい、舅の光りのきへぬ内に、急にとれといひ合せて、あげ屋のくわしやが御訴訟、ていしゆにかくして、來春伊勢參から西國三十三番めぐりましたい、此道中銀すくなふつもつても十五兩、やり手もついでに申上ます、今の男より、まへのていしゆがむすこ、小商人につとめてゐませしに、おきゝなされて下されませ、茶屋ぐるいに親方の銀を、一貫三百目引負、親請人へあづけられ、こゝに父親は纖しく、水くさい事申さるゝもきゝづらしく、己が心からとは申ながら、しほ〳〵してゐますを見まして、母の身でいかばかりのかなしさ、いろ〳〵親かたへわびを申せど、銀がなふてはいひわけたゝずと、申さるゝもむりにあらず、され共半ぶんでは大かた、かんにんの躰と見へますれば、申あげかねながら、十兩の御合力、まことに人間を一人御たすけと、扨もまことしやかに、あとかたもなきつくりなみだ、よふはこぼさるゝぞかし、扨座頭は官金料理人は包丁一通、こしらへたきとのねがひ、飯たきはお懷のもめを申したて、下男は在所の親の年貢の濟ぬ難儀を願ふ、ずいぶん何なりといひたてゝ、鳥の毛むしるといふは、礒ぶねで追はぎするごとく、大ぜいに取たてられ、千兩の小判は粉にはたいて、豆のためにもならず、身のなぐさみともおぼへず、夢にばら〳〵とまいてしまい、口なめづりしてゐるは能々の放埓者、この上は、急度すぎる程なめにあわせよと、慈悲が仇敵となつて、十九大盡の身躰を、もみつぶしてのけられける、舅殿は尤ぞや、

（四）大夫の初陣

人の身躰を見たつるには、色里にてよくしるゝものなりと、あづまの利發ものがことば、いかにしても尤也、さる大じん大夫へたび〳〵伽羅をおくられける、昔の傾城は、大じんへ御無心申すに、伽羅ほしきといへば、心得て伽羅代とて、小判を進上申ける、其時代にてさへ、いかにそふいへばとて、伽羅をおくる人は氣のとほらぬ大じんに札を付置ける、まして今の世は、伽羅代ともつてまわらずに、金銀をつかはす事な

るに、此大じんのしかた、とかくにがてんまいらず、傾城は買がゝりよき物也、金銀手ばなさぬ大じんは、見かけばかり、躰たらくを高ふとまりて、內證のやくにたゝぬもの、是を毛猫大じんといへり、鼠とらぬくせに、ぬすみぐひかしこく、大じんも横をきりたがるばかりにて、たのむ紋日にへらをつかひ、死れて七年忌になる母じや人を、其まゝ生かしてをいて、ことの外機嫌あしく出る事ならずと、しつてゐる人もあるに、女郎をだますは、むかしに變つたすがたぞかし、傾城もかゝる人の、金銀をとらふとする事、たいていのちゑにてはゆかぬ義なれば、あたらしいうそのつきやうをこしらへ、ぬし樣より外に、思ふ人なき證據には、金子百兩のかり手形致ししんずべし、わが身にあやまりある時は、此手がたを公儀へもつて御出なされ、きびしくさいそくなさるべし、さあれば、此身のなんぎ、何よりかなしき事なり、たとへいつはり申たき心に成ても、金子百兩に思ひかへて、ふらちは致さじと、戀をはなれて欲づくをもつてまいり、大じんの心を、をちつかせてはだをゆるさせ、其うへにて、金子百兩の內ごりの心にて、十兩くださるべしとしら化にて取事、是おろかなる男かな、何とてけいせいが百兩の金子ありて、きやくにあづけをくべきぞ、目ばり博奕の負金か、いかにしてもがてんがゆかずと、公儀にておさばきの時は、どふいふ返答申上べきぞ、ひろくせけんへたわけをふれあるくに似たれど、さすが女郎にあふては、男のちゑのくらむものぞや、高でうつくしいといふ所に心まよひて、前後のわきまへなく、むふんべつな事をおもしろがるは、さのみそしるべきにもあらず、只むかふ人に氣をのまるゝゆへに、よろづの仕損じもある事とや、むかしもれきれきの侍茶堂坊主と口論して、坊主扇をもつて、侍のあたまをたゝきけれど、手むかひせず、其まゝにゆるしをかれける、是を見し人おほく、何とやらすまぬ取さたして、まづ湯の粉好の侍とそしりける、はたして此さぶらひの手がら、一方の大將と成て、此鑓さきにむかふものなく、手ひどいはたらき萬人にすぐれける、是相手によつて、まけてもくるしからず、かたいでならぬ時にはかくの如しと、廣言もさる事ぞかし、

傾城難波みやげ卷之四終

傾城 難波みやげ卷之五

（一）天王寺表座しき

貧しき人のとし子産もうたてく、ふうふの枕ならべながら、ひとつのたのしみをたしなみ、扨も如來樣こそ證據なれ、人のしらぬ物思ひに、氣をつかしてあたら年をよらしぬ、咲ぬ間の花をかこち、つもる雪を興ずることそ、とても此世にすめるかい、命をのぶる色里の酒も、名所の魚鳥に舌うちして、うれしがるものをしげもなふ人にやれば、何ほどの文言も、世かいよりゆるして、をとし咄しのふるくさいも、是はごふもいへませぬと、どちらへこけても、だんな〳〵とうやまふ、盃で地震をさせて、下から雨がふらされふかといへば、それもごふぞ成そふな物と、しかも酒氣のない時、まつしやどもの申しけるは、今思へばさるにてもをそろし、とかく紬の着物のきらるゝ時、分別はあるべき事と、よいかげんに大夫が手をきつて、五つになる悴に世をゆづりて、しかとしたる手代をうしろ見につけて、難波の居宅の、ひろきを仕きりて半ぶん人へかしても、一年五十兩の宿代商も小がまへにさせて、其身は若法躰して九齋と名をあらため、伏見の雨がへ町にて、搨脊にて十軒ぐちの家をもとめ、百兩にてさらりとした普請して、爰をゐんきよといふ、名はつけたばかり、其まゝ難波の本宅にて、内證より商のさし引、ゆだんなく申付て、世上の借上をやめけるうへは、一向もふけ取の此家、次第に手廻しよく、人に非をいれられぬ内に、もとのごとくに身躰しなをして、悴十七の時、まことの身躰をゆづり、千八百貫目の現銀相違これなく候、此人こそ、近代のまれもの色里にも其まゝ名をいひ出されて、後ののちまでも、だんなといはぬまつしやもなかりき、是ぞ楠が、うつの宮のきんつなに逃てみせたる軍法、けいせい買のやめじぶんには、野郎に氣をかへて、なんとなふ圖をぬくこと、あちな氣にならんしたといはるゝ所にて、大じん此陣引たまふべきに、又野郎のむらさき帽子にくゝられては、同じどらうち仲間ぞや、むかし駿河の色町にて、あまねく女郎に粋とゆるされながら、しせんと色道やめぶんにて、高野にのぼりて、ひとつわきざしの、金鍔、乗道がかをにぎる、左さいふ男、難波取出の大じんよりいろ〳〵たのまれて、ふたゝび女

郎ぐるいのしこなし、扨も面白きいきかた、此粋に此大じんもみこまれ給はゞ、何程のやぼてんにても、不覺に有まじきものを、よしなきまつしやが付添て、此左は女郎に内通して、大じんをはめる事もやさ、人をゑ見ぬもんもうから、わる氣を𢌞してよろづの談合に、かぶりをふつてのみこます、されども左は爰をいきどほらず、とかく一たん、頼むとの大じんのおことばもだしがたし、斯るおろかなる大じんに、たのみかけられて、我畏まりしと約束せしは、しぜんと色道の冥加につきはてたり、此身いかで二心をはさんで、女郎に心を合せ、大じんを取たをさんや、とかく此大じんの色ぐるひ、中々粋の名はゑ取給ふまじ、我はよいじぶんに酒ののみ死と、覺悟極めて、惣躰の手くだ事には構わず、身一ぶんの粋を立て、手がらをあらはし、天王寺の花見酒に、よい相手を取て、のみ死にしけるは、扨も惜き事かな、又行衞なく落うせて、高野にて衆道事にて死だともいへり、

（二）おふろ樣早合點

揚屋のさし引のこらず、今倶生神に鐵札をもつてしかけられても、つゆほどもおそろしき事なく、つかいし金銀は人のものにあらず、わがものをばたいてしまふたは、氣味のよい事と思へど、さながらこむさい形にては、くるわへはゆかれず、さはいへやめがたき色道、一日もこのたのしみなふてはおかしからず、男ぶりも女のきらはぬを取ゑに、三馬といふ男さゐ大じんのおふくろ樣、若後家にて、しかも色里の直打にしては、慮外ながら七十四匁がもの、是にいろ〳〵と上手をしかけて、あなたからふびんがらせ給ふやうにしこなしけるは、戀を外にして、けふを安樂に暮す爲也、されども此大じんのこわがらせ給ふあづまの伯父樣、若世のしかた、よろづ氣に入ぬとて、たびたびの御異見狀此たびはもつての外の御腹立にて、長手代の市左衞門あづまにくだりて、いろ〳〵おわび申せどさらに御聞入なく、市右衞門も精をつかして、あづまの手代中へ相談をしかけ、何とぞ大だんなの、御立腹をやめ申す事を、おさしづあづかりたきと申すにつけて、あづまの手代中、是はさしづと申すにはあらず、第一おふくろ樣の身もちあしきゆへ、わがだんなの惡性を、とくと御るけんなされがたし、それゆへ大だんなの御りつぷくつよし、わかだんなは申し

てもおわかい事、たとへけいせい野郎ぐるいし給ふとても、さのみ科とは申すにたらず、おふくろ樣の事は、一家をおさむるうしろ見をなされながら、放埒なるお身もち言語同斷、大だんなの腹立は尤のやうに存ずる也、是と申すも、あまりに御たいせつにおぼしめすのうへなれば、いくへにもあしくおぼしめさるまじき事也、扨我々存ずるには、とかくなにはにておふくろ樣、誰こわいものなく、ありたきまゝにて、御身もちのなをるべきにあらず、たとへ當分お身もちのなをりたりとても、又放埒なるお心に成給はん事遠かるまじ、とかくおふくろ樣をあづまにくだし、大だんなのそばちかくござるにおゐては、ふだんお心のたしなみふかく、いかほど心におぼしめしても、をのづから、かたきお身持と成給ふべし、此だん貴樣のねがひぶんにて、大だんなへ申上られなば、大だんなも尤の事におぼしめし、御腹立もなをるべしと、內證をうけ給り、市右衞門、是は仰せのとほり、一々至極仕りしと、さつそく此だん、よろしく御取つぎたのむと申うへは、いづれも大だんなへ申上て、おふくろ樣を、吾妻にくだし申す筈に極て、市右衞門はなにはに歸り、此段を申せば、先おふくろ樣きげんあしく、三馬にわかれて、はる〴〵あづまに下りて、なんの樂みあらんや、老ても若ふても、是ひとつの思ひ入、みづからは、あづまに下る事は、いやじやとわか大じんへ申きり給ひ、市右衞門が心底、いかにしてもがてんゆかずと、是より市右衞門をねめ出して、さま〴〵の非難を付て家を追出し、かのてれん男をはだに入て、誰こわいものなく、花をやつてのうき世ぐるい、ついに親子してしんだいを、棒にふつてしまわれける、とかしなむべき事ぞや、又後家をたぶらかく若後家のたして、金銀を貪り其身一人の榮耀にかへて、大事の人の身上をつぶす、此科は何にたとへん朝ぼらけ、漕行船の跡のしらかみ、ちかごろもつたいなき事ぞや、

(三)二代つゞかぬ長者

身から油出した銀でなければと親仁のことば、いづれ懷手してもふけたる分限の、二代つゞきしは物のふしぎぞかし、世にさかふる人の家を見るに、其親の善根のはへきたるさいわい、子孫にはびこり、一門軒をならぶ、めでたき時津世の中に、瓢箪屋といへる人のむかしを聞くに、主人のあだをむくひて、其功には

こり、主人の子息れき〳〵とあるを、守たつる心底にみせて內心におごりをきわめ、すこしのあやまりを、ぎやうさんといひふらし、世けんの人にうとませ、其身は似賢人となりて、大ぶんの金銀を取かすめ、一代榮花にほこりて、其子に家督をゆづるといへ共、もと惡心をたくはへし、血氣をうけて生れたる子なれば、親にをとりし大だわけにて、大酒をこのみ色にをぼれ、短氣にして學文をきらひ、人の善惡をもしらず、其うへ分に應せぬ大欲にて、前後のかんがへにうとく、商人の身として、地算さへ直におぼへぬは、是親のよこしま、子にむくひて家をほろぼす、天の責おそるべしつゝしむべし、あまたの手代共親は惡人とはおもへども、ずいぶんかしこき商人ゆへ、金銀をもふける、其手がらにせひなく付したがひ、うわべは奉公するやうにて、心底には家のほろびる事をかまはず、果して親仁目をふさがれて、若だんなの世となりては、ひとり〳〵の心ちがひ、身がまへせぬ手代はなかりき、是金銀のいきほひ、時の權威にて手代共を服つかい、すこしもなさけをかけざるゆへ、まさかの時の用にたつものなし、其身のきりやうすぐれたる惡人には、人かならず歸伏するにはあらねど、せひなく成しだいに、世をへつらふものぞや、され共其人の死したるあとにては、日ごろなさけなきうらみをいひ出して、我も〳〵とあだがたきになるもおほし、爰に難波新町に木村屋又次郎とて、女郎屋の惣年寄あり、いやしき身のほどをわすれ、お大名もならざる數十人の相撲とりをかゝへ、是をなぐさむさへあるに、能やくしやを扶持して、やしきの內に常舞臺をしつらい、春はよしの山をうつして、水打の作り花をざしきにかざらせ、秋はをばすてさらしなをもくろみ、春日野より鹿を取よせてなかせ、朝夕も伽をまねきて、膳部にはつものをあぢわひ、夜服は、御法度の唐織まで身にまとひ、あらゆるおごりをしつくし、すでにお上のとがめにあいぬ、此時又次郎が惡事を、くるわ中として言上仕りぬ、大夫に三匁、天職に二匁、鹿戀に一匁のうわまへをとれり、是又次郎が年寄役にて、殘の女郎屋は、はがいじたのもの共なれば、いかほどの無理を申すとても、是非なく時のいきほひにをそれて、誰頭取ていひ出る者なかりしに、上よりのお咎めに逢しうへは、年頃の怨をはらさんために、いづれも一同

に私欲のおもむきを訴へける、いかに又次郎榮耀者なればとて、我金銀の無なる事、かなしまぬ筈はあるまじ、我ものにあらずして、手下を貪り取金銀ゆへ、をのづから大切にも思はず、をしげなふ驕に仕果しける、大方せけんにすぐれて驕る人は、只とる所の金銀ゆへぞかし、いかで我金銀ならば、惜まぬといふ事あらじ、ついに又次郎は、私欲の科によつて、お仕置に仰付られ、見ごりにして諸人驕りをつゝしむ、有難きまつりごとぞかし、今におゐて、なには新町の大夫六十三匁、天職卅匁、かこい十七匁は、又次郎が取しうわまへ共にて、女郎屋の德になりけるとかや、

(四)つきぬ君が代

はやせ萬歳、八橋のかきつばたと、ふるきすがたもかわらぬ御代にすめる人、身相應のたのしみ、町人ながら茶香鞠鼓の遊藝、これぞ戸ざゝぬ時津風、傾城野郎に身躰つぶすも、靜謐のあまりにほこるゆへぞかし、太平記じぶんの人、いづれかたわけをつくした咄しをきかず、宮寺の寄進も名聞さいへばいふもの、亂世の比は、いかな〳〵後生も讃上も及ぶものにあらず、ぬす人も國の道具とはいへど、君が代のゆたかさには、夜ふけて通る女にも手をさす人なし、是相應なる色所あつて、氣をいたむる程の事にあらず、されば人の身躰を潰す、そのみなもとによつて、をとろへたる後も氣質の善悪はあるものぞかし、銅山にて倒れし人は、是心かしこすぎて、どかもふけすべきと、大欲にまなこくらみて、ものにいきほひがちにて、のちまでも人をふづくるつもりして、もめん羽織に緞子のゑりかけてとびまわるもおかし、博奕にてしそんじたる男は、大かたが闇女(くらおんな)をかゝへて、ゐげんくさう世をわたるを、さのみ口をしともみづからは覺へず、不目利にて道具かづき、損したる者は、をのれがおろかなるに、人も同じやうにおぼへて、似せものに氣をつくして立身もせず、ついにはてれんものになつて淺ましく成はつる者おほし、愛におゐて有がたきは、傾城買のをちめ、中々悪のをこるものにあらず、是けいせいぐるいは、義理をおもてにして、内證のせつなきをかくし、借上いひあるくからは、きたなびれた小無心を人にゑいはず、風俗の見にくふ成ては、昔の友だちにもかくれて住所さへしらず、朝夕もなり次第に、いかな〳〵人の太鞁に成者は、千人の内に、ひと

りのゑりくず、此心なる人はいせん花をやりし時を、見ねどもしれたり、りうもんの羽織に木綿をいれて、人めをつゝみ、つぎのあたつたる紅うらのした着、紋日つとめてやりながら、その銀のすむまでは、揚屋にものを思はせ、女郎も色の外に、大じんの身のうへにきのどくな事いくたびかきかせて、此人ならで外に賣人はないかと、扨ち世にしらぬ心のやるせなさ、むかしとちがふ今の色里のすがた、やり手もまつしやも、大じんをのぼらす事のみ明くれだんこうせしに、いつしかきうに出かくる大じんには、四の五のいふて女郎に隙をいれさせ、まづおきやくのしんだいをきゝつくろふ事、過しころの緣ぐみよりは、ねそつと念を入る事ぞや、爰にあづまの千箱といへる大じんは、生ながらの粋男にて、女郎も手をおいてまへかごなるしかけをゑいはず、しかもうちとけたるそひねの物がたりに、大夫身のためになる御ゐけん、おやかたも是程がてんのゆくやうに申さずと、金銀にかへられぬおことばを蒙ひ、身をうちもたれ、おせわを外にして、せめて御恩にみやづかへ致したしと、しんじつの涙をこぼさせ給ふは、昔にもきかぬ、當世の御粋様揚屋ち欲をはなれて御馳走申し、外の大じんのやりくり迄を、ひそかに此大じんへ語りて、御ふんべつを借申す、まつしやもくだされし酒が、毒となりません、だんな御用とあらば、一命を差上申す心底、いつはりにあらず、ならぬ證據には、ものくださるゝ外の大じんの座敷をつとめず、この大じんに付したがふ事、草の風に靡くがごとし、是重寶成る金銀よりはおなさけといふ物有難く、しぜんの御用には我たゝん、人にはおくれじと、誠名將の士卒をなづけ給ふにちがわず、大夫樣の身請を、なには大じんとはり合給ふ時、いづれもかねての御恩を忘ず、千箱大じんのおみかた申して、なには大じんにすつとさせて、過しさ月闇、晴れぬ雲間の空ながら、思召しの儘に大夫樣を御手に入させ給ひ、高き粋大じんのほまれを、あまねくかゞやかし給ふは、さてもめでたき色里の賑い、猶かずつきぬ君が代や、板元千秋萬歳萬々歳、

寶永七庚寅歲七月吉祥日

傾城難波みやげ卷之五終

美景蒔繪松序

色道の諸分に放氣口たゝくを、梵天國の下地と頭觸をふり、舌出して障子破た穴を、のぞひた印と脂茶をいふ、此愚さで女房持てば、痩らるゝも斷り、定なき浮世をめつたに狹ふ見るゆへに、おかしき咳が出て、いな顏に成り給ふと、二たびこちの物には成がたし、氣が朽たらほうじ直すが命の洗濯、されば京に島原と云ふ流、お江戸の吉原難波の入江、皆それにこしらへたせんたく場也、色酒に亂れて千とせの齡ひをたもちしは久米の仙人と云色好み分里の一睡に、五十年の榮花を究しは盧生と云ふ譯知り、久米は女の內股の白きを悅び、盧生はふたり寢の枕を愛す、かゝるためしにあいの山はいにしへ神の御代より、戀を商ひ情を買、今に古市の色茶屋といへり、是三个の津に續てのはんじやう、四季折々の詠も盡ず、手くだ口舌も傾國に劣らねば、替つた諸分ヶ面白き仕かけ功者があれば虛氣も有て、風流を込たる物語の有ざるにもあらねど、誰筆に殘す族もなく、それ成けりに朽果、七十五日の後はむかし、縱へば二見が浦の蒔繪の松を岳山の峠より遠目金にて見おろし、すぐれたる地景を知らざるに等しければしかいふ、

寶永四年ひのとの亥の夏日　市中軒

凡例

二見が浦の片葉の蘆、天然と有がふしぎ、難波と伊勢の萩薄替る名は同じけれど、女郎と艶女の味はかわらず、肌のよしあし床の品、かんじんの所はいよ〳〵のことなれ共、女郎といへば花奢にやさしく、艶女とよべば珍らかにしほらし、又同じ事を色茶屋にて花者といへば能うつるを、嗅と云は常にしておかしからぬが、此折のならはせ、婆と名を付、袋と呼ぶは、艶女のもりする中居女、見渡りは下女ながら、たすきかけず手拭さげず、木綿の不斷着に、絹帶の二つ割、廓にての遣手に似て、やり手にあらねば、艶女もさのみ强からねど、客は艶女の中に立て諸事世話な女、歷々方の前をも憚からぬ故、婆とは名付たるとみへたり、又袋といへる故事は、客を取込しめく〳〵りをするゆへに、内より名付たるかと思へば、さにはあらず、家家の大夫殿に添て、座を能く持ものなれば、袋持じやといふ客の惡口よりいひ初て、ふくろとはとつとむかしより名付來りぬ、かく替りたる品々の初諸分、西うらの床ばなれに、皷が岳の朝あらしのおかしきも、東うらのきぬ〴〵に、岳山の嗐の風流氣も、逢て見ねば知ぬ事、茶屋の嗅には添ふて見よ、艶女には乘て見よと、世話焼たるも家暮のむかし、

美景蒔繪の松目錄

目録終

美景蒔繪の松一之卷

○萬籠石一時千金の千話 古市艶女の因緣記

常世の浪の音のどか成神風や、伊勢の宮川より坤に當りて、遙に見ゆる高山を、鞁ヶ岳といへり、いか成ゆへ名付となれば、前に五百鈴川の流をはり、うしろに宮川の掛りたれば、かくいふとかや、御存の間の山も、內外の宮ゐの隔たゝせ賜ふ、中々なれや此里も、すてられぬ遊里、所が替ればまた氣もかはり、諸方よりの參宮人、乘物駕籠のたゆる時なく、先春は顔見せに兩芝居の威勢あらそひ、持よりの上るり操、小芝居の鬼子、いつも同じ事ながら、姿は卅二相のかたちといかめしく云ばおかしく、本誓寺のひがん櫻、大蓮寺の糸櫻、寂照寺の名花の盛、いそがぬも面白し、夏は西うらのほとゝぎす、田はたの螢見、楠邊の涼見、秋は踊り見、御岩の月見、冬は岳山の曙よしと、はつたりとした、かんをさせての床ばなれ、此ほけのさめぬ內にと、尾邊山を鼻うたにて、戻るがあれば行もありて、此土もんにこけ込む事、かしこきも愚成もいつかな魂の歸りばをしらず、無上極々うまひ事あれば成

べし、むかし鴨の長明といへる粋自慢の法師、柏屋といふ茶屋に腰をかけ、きさといふ女が湯上りの艶顔に生肝をとられ、腰ばさみ一ッぱいのおもわくにて、是は此所始て一見の僧にてと云ふを趣向にして呑かけ、酌取女にさゝやき、名代の女郎達かり參らせたき思わく、亭主も此里にて、鶯二九と云銘跡者にて、安き御事、それに揃へた茶屋女と、おきさおはつふたりを酒あひに出し、我身も割ひざ三ッ指にて、此所はじめて御通り成に、など馴子舞はなされず候やとゐんぎんにのぼすれば、長明も無理に嗜まされ、南無三大きなはまり、腰ばさみに平包を添へて却合でからが、分の立ぬしかけと、よいはづみを見て智慧袋の底より、短冊一枚取出し、硯引よせ歌一首はやし崎、まはではいかゞ通るべき、鞍の嶽を打ながめつゝと、さら〳〵と書いて亭主にはづめば、是は忝じけありま山、いなといわれぬ御作迄、まづ〳〵爰はばし近なればと奥座敷へ伴ひ、うけごゝろに獨活をあしらひたる吸物、あんにやぐるみに鼻が出ての酒事、おさへませふと云事をちよつとあまへませふと、盃を返すもおもしろく、隣へあひを頼みませふといへば、わしをかとうごにたのまさんすかと、いひたるも猶おかし、長明鼻が粋成を見て、なんと此茶屋に限り、あんにやと云は、いかにとゝへば、かゝがいわく、されば若き女をあんにやと呼ぶ事は、宮川より五百鈴川迄の内にて申事也、近き比迄は神代よりの、古風を學び、女はすべて髮をからわにわげ、繻子金襴の切れにて、からわを包み、まつたく唐繪の下官などを見るやうに御ざんしたげな、さればそれを悪口な御衆が、冠着たる女じやと云ふいわくにて、安女と名付そめたるよし、神代の風儀今に殘ましてと語れば、何事のおはしますとはしられね共、忝けなさに長明は、古風の殘りたるをかんじ、此國の女の風を見るに、姿たをやかに生立よく、艶顔に情をふくみていわれぬうまひ移り有とて、文字を艶女と書あらため、艶女々々ともてはやせしは此時分の事也、されば彼長明柏屋に取らせたる、鞍が岳の名歌をうつたる短冊世の重寶と成て、山田或家の寶とはなれり、是を思へば、むかしはとろいせんさく、今歴とした願人坊が腰かけて小判のうらへ歌かひてはづんだり共、うさみやの鼻やばゞが槌で庭も掃まじ、上むらやのくわしやじやあろふと、鼻

であしらふて居やらふ是丈が時世々々、此柏屋の鷲二九と云宿屋も、京大坂江戸迄隠のない色茶屋、家居もくわつとして、諸事大びらな勝手、風呂も此家より外にはなく、鞠の掛り爐路構へ、或時雨芝居の歌舞妓子廿一人揃への大會に、杉焼の銘々火鉢百人前ならべたるには料理の十左もあきれ、長持より紫のふとん段子の夜着、廿人前出して床をとらせ、太皷の鷲と云男にさゝやき、最おひとりに外へ無心いふも氣のどく、おまへはこちとが常住夜着にてゆるし給へと、おし鳥番ひ染入たる、絹の夜着ふとんにて間を合せ、こととり共せぬ内證、あたゝかな所は鼻が才覺、されば色茶屋の身躰は、惣じて鼻が立た物そふな、終此かゝ、爺を置ざりにし、とうとひ所へ長旅、跡にすてられし爺が藝には蕎麥切の早喰と、客の相伴串て座敷から手扣くが能、分別くさい顔はしても、目安の返答書もならねば、おのづから内證の操か遊ひ、惜しや此町開山の色茶屋、今は名斗り殘りぬ、今此里の最中が坂の上り口朝熊屋のあたりから、野村屋迄の間が繁昌の峠なれ共、廿年跡の全盛にくらべては、古きむかしがしたはるゝと、或家の大艶女が今は賄をして居やつての咄し是計り噓は有まい、其比の艶女達は、はりもつよく打寄つての咄しが古歌の吟味、折々は芥子人形のかけ双六、大臣の噂は祐成と虎が息込をふくませ、定紋の仕着くらべ花見凉見の全盛おのづからそなわつての太夫、大盡も物ごと大ていにて實ふかく、さばきよければ宿屋も打くつろぎて、かりそめにも下卑たるわけのなかりき、むかしの色と今の惡摺をくらべ物にしては、山吹と菜種の色の同じきに似て、又各別な所有がごとし、そふかと思へば、宿屋ばかり摺たにてもなく、大盡も惡じやれにしやれ、十露盤入ての遊びうるさし、艶女にふかうのぼつた顔しても、胸算用の秤目せらるなど、色遊びにはおかしうない事、それゆへ宿屋にも心の駒の手綱を扣へて油斷をせねば、艶女も客の氣を取、しかけを第一として、かりにもはりをいわず、あちらむけおふ、こちらむけおふ、客に成ても氣のつまるせんさく、おくれたる末の世とて、一に旅二に河崎と替つて、指折に乘てからが、ぶしやれが変るゆへ惡口云ふ計りが粋顔、目が肥て居ると云ふ下心が、猶いやに存る、所々の花なれば、よし野で見るは吉野の花、初瀬の花も山

櫻、いづれ詠こ氣のたんのうする所は同じ事、大きな顏をめさるゝ程有て、是は見事にはまづるゝと、釜が氣をはれば、つまむに覺へのない二朱一歩、頂戴てから納所にきのごくして、迚もの事に紙を添てと云ば、中の悪ふならぬ兇かといわるゝもおかし、されば落しやすい物でと口の内にていふは、ちいさいと云すぐばけ、是はまだしも結構な事、二朱は扨置、むかしの一首も出ぬと、ひだ屋の釜が茶の間にての寐言、思ひねの夢も現のそしりなれば、奥の間の客の噴鼻も尤、されど共神は正直のお陰にて、隨が過よい所、人のうやまふに依て、すたれ行く古跡も興立し、人は神の德に依て茶屋をする、葛籠石の名所、この里第一の遊山場、また神石の感德、生るがごとくなれば、遠近の詣絶る事なく、出口に立ならぶ駕籠乘物菅笠は是へ置てござりませいと、聲かくる三品や、むかしはない圖な事なるに、世の堅きにつれて物每の自由さ、入江の大芝居もこうから／＼と、矢櫓太鼓の音に聞へし寂照寺の境內、寺の櫻でやねふひてもらふ、家居の侘たるも、猶目に立ておくゆかし、いか様內證には、花も實もありそふに思はれて、好しき匂ひは鰻燒かざ、其火を一つこ火繩なげ付れば、それ／＼とあはてゝあい／＼と立さはぐは御屋敷方の衆か、又は地下の年寄衆か、扨は大上大臣かと、たうふたく男にとへば、さればあれ御覽じませ、五人が一やうの出立姿、黑羽織に三雁金の白紋付、淺ぎ裏に平打の胸紐迄同じ色、よこ八丈の袷に、帶は千種の二つ割、しゆすの髮つけはけ長に、天窓つきなら風俗なら、けんくわ買ひそふな大脇指、あれが爰らの文七組、大坂の雁金を眞似て、めつたむしやうにあばれ出、此里へ通ふ大盡を駕籠からおろして追はしらせ、けんくわしかけては、またらをくゝらせて堪忍のならぬ仕かたなれど、除て通る人心に、おのづから錙とがめの障りもなく、大に和ぐ長袖の集り、城下ならばなおと、齒ぎしみすれ共、聲高にも得いわぬは、是四の浪靜なる御代のしるし、爰に上方のぬけ參と見へて、ふうのよき女中加賀笠の所付もなく、淺黃のくけ紐むらさきの帽子も常ならず、としは廿に半も過て、嗜のゆかたが御陰の看板に目だゝぬ常盤染の黑小袖、八文字の蹴出しに、むらりと紅の裏ふくは、男迷はす山道の仕出し、腰本ははでを盡くして一對のゆかた、御機嫌取のびくに、召

つれ：下女迄いやしからぬ嗜、これに男の供はみへず、御岩のおなひはおばたのかごかき、野がけ火にてたばこ喰さへにくきに、謂ざる御岩のゆらい物語を聞けば、あれは此所の淺間樣、前成流れが垢離取場、こちらな茂みが御幣上げと、耳取て鼻かむやうな咄し、道通る人もつらのはげてゆく程まぶりて、腹をかかへる中に、例の五人間とがめ、扨もいふたりぬかしたり、おごれ道者をたぶらかし、嘘でかためた護魔の灰組前な谷へ踏込と、御岩道に立ならび、けんくわ買ふしかけ、かごの者は是をみて、鍮鉐色に成、蛭に鹽と云はおろか、女中の跡にうす〱是にもかまわぬは、さすが都の太鞁びくに、おめた顔もなふつか〱と近寄、申々こなさん方がしつてゐやんしよ、此御葛籠石に付てたんと由緒が有げに御ざんす、私が頼んだ御方へ、ちよつと聞て下さんせと、しやつちな物いひ、餘りなめ過たがにくさに、イへなんにもしらぬでござんす、あゝ慮外ながら存ませぬと、すねた返事が彼女中の耳にかゝつて、うつすりとした上氣、ほんに一けんの御乗樣方へ、あのもんもうな事計りと、かい取小づまのふしやく姿、見かわす目もとに魂をとられ、ごと〱おごる胸をおさへ、されば此つゞら石に付て、さま〲いわれも多き中に、先は倭姫の御舊跡あら〱物語を申ませふ、此倭姫と申奉るは、かけまくもかしこき、垂仁帝の皇女にて、御鎭座を五百鈴川に移させ給ひ、朝熊の麓鏡の宮に止まりまし〱、とりわけ此あいの山のうまひ所をみそなはし、御心に誓ひ給ふは、此所遊里となり、色茶や永く繁榮せば、此葛籠いわほとなれと、綾のおよつ錦の蒲團、ふさ付枕を葛籠にこめ、此山に埋給ふ、されば皇女の誓ひのごとく、色茶や日々に盛んにして、今の世までも不退轉、一角仙人も通をうしなふ床ばなれ、巖も葛籠のかたちにて、苔のむすまで、御岩とも葛籠石共崇まする と、口へ出るまかせのてんぼ、女中は此物語になづみ入、初溜息をつく〲と、扨々か程ふかいわけの御ざんしたもの、ついしらずにいなふとした、ほんに粋な御神躰で御ざんす、戀の願ひは思ふやうに叶へさんすであらふと、もたれかゝつた返事、何が扨夫婦男女のかたらひを守らんと誓ひ給ふ、密夫の信ずる神なれば、此町の艶女達、日々に詣での歩み絶ず、あれあれ今も參りの艶女と、下向の艶女行あひての道草は

なし、何やらわけの有りそふなは、大かたこちに呑込んだ、あちらなは多田屋の君、舞もよつぽどまはれます、六方の息込も、ふり〳〵ふつてふり付て、客のこなしがよいときく、さだめてふかまと口舌して、中なをりたき願ひをかけ、それで御岩を頼まるゝ、又こちらなは平野屋の、澤邊の螢身をこがす、戀の願ひはござりませふ、人のふり見て我がふりなをせと、わたふみても痩てごこやら物思、底の心は岩様の、呑込でしも俄な戀が出來、神へ御世話をかけそふなと、尻目つかへば笑かゑし、世にはよふ似た事が有、わしが願ひとおまへのが、いふたら對でありそふな、あゝほに山が高ひげな、されば高いが朝熊山、むかし持統天皇此御岩へ行幸まし〳〵、うき草に、かくれの池の埋れ水と、詠じ給ひし名所は、則御岩の前成る清水、西行が、春風の岩根の櫻と詠しは、御岩を覆ふ山櫻、吉田の黛好鴨の長明、惣じてむかしの粹に爰へ來ぬはないげに御ざんす、おまへも見れば切た髮を島田わげ、男の肝をすふやうな磁石と云粹さまと、御手をしむればにつこ笑ひ、謂を聞けば我ながら、有難いやら嬉しやら、しんぞ御器量といひ御發明、あい〳〵しうていとしらしい、御まへは常の御かたでは有るまい、此此おかげの不思議が多い、いか様神さまの出さんして、わしが心を引てかな、見さんすそふな、拜みます拜みますと、いひ〳〵もしめ返さるゝ手の內、男はほつと溜息つき、こちから云をおまへから、あちらこちらへはねきせられ、何と返事が成ませふ、これだけが下界の物、おまへはどうでも天人の影向、おつふりに花のないは、後家ゆへの至り、せめては羽衣の御はだへに、慮外ながらと手をさし入れ、御乳をいらへばあしんきやと、わけもなふ取亂したる人目の關、脇から見たら法界の種と、うしろを見れば、それ〳〵の思はく、腰本が手を握れば、またそんな事はしらぬ〳〵と、にげありくを、うれしがるわろもあり、下女がうしろからだき付き、どこやらへ手をやれば、あらつらやと鼻すゝりする所も有り、比丘尼相手に茶盃おさへたとやら、付盃とやら、もうせんかぶりて百足のまね、足の四本見ゆるもあり、西を見ても、東を見ても、あゝ〳〵と云て目を見合たるした心、內證のうまひ所は、とろゝでせんだくするやうにあらふと、脇からの法界も尤、此男は器量もおとらぬ半粹の頭取なれ

ば、爰らで味をまひおさめ、さらりと出口へ送つて出て、友達共躰よく別れ、好色の術をつくして、今宵はうまひ御茶をのむであらふと、しやれ中間が見て唾を引所に、悲しや戀のくゝりをしらず、最早鍋へいれた鳥、どのやうにも喰るゝと、呑こんだ所はよつぽどな素人、いざ是から觀音堂の暮をながめ、西の景を御らうじませ、ついど客屋のうら座敷、又替りて面白いとお先に進めば、はてどふなりとおの樣次第、さあ皆こふおじやと、どか〳〵と打まじつて、腰本のあどなしが、よんべもなふと云出すを、先をいはせずに、寢たれどなふとまぎらかすは、太鼓びくにが才覺、いたづら女の太鼓には、堅い比丘尼の先達も尤、

○觀音堂坂迄見ゆる裏座敷（雨町釜の四天王略縁起）

抑當寺の觀音は在原の朝臣業平の御自作にして、藤原の繼蔭が女伊勢といへる女房の守本尊、子細有てむかしは長峯かくれの岡に立せ給ひしを、此御岩の奥にうつし改め、諸人戀知りの觀音とあふぐもたかし、高みより西を見渡せば、音じめ面白い撥おと、こりやどち風が持て來ると、立とまりて見れば 紀伊國やの座敷、芝居あがりのさわぎとみへて、ぶたいがゝりの三味線、道理でおじめが風俗にうつりて、大びらなばちをと、あのじたらくな所を御らうせ、どうやら心中を仕そふな艶女顏で、人を見ぬやうに見る濡色がくせ物、こちらな柱にもたれ懸り、盃にもがりそふな艶女がおらく、舌つきな物いひが爰迄は聞へねど、目つきのしほらしい所は見へまする、あれ〳〵大盡は生醉に成て、言葉しがらむから糸の、百日曾我の道行を聞き、寢入の高鼾、にくやおらくがひざまくら、じゆくしくさひ香さが、爰へ迄吹て來る、是計りはゆるせと鼻ふさぐ内にも、さりとはひざが重そふなと、こちから世話やくは、おもながなこと、彼女中間とがめ、むつと氣に成て、いや〳〵女郎達の身の上は、陰でいとしがつてやらんすが實、それがあなたへ通じれば、たんとこなたをいとしがる、是なぜしめらんしたと、はや色に出る法界心、あれ〳〵見さんせ今出やつたが、囃者そふな、どれ、あの廊下のしじら島か、あれは中居女のよしといふ釜、かまながら大躰では御ざんせぬ、雨町の内で指折に成、四天王のひとり、其四人のまれ者は、先中野やのさんさ時雨、あさま屋のかつら川、うさみ尾のかやが軒端、紀の國屋よし野山

とて、唾をひかぬ客もなし、口說ぬ客もなけれど、ならずの森のほとぎす、聲を聞た斗にて、手に入れた人がすくなそうな、あの落着た酒あいを聞んせ、無理をむりながら、客を嘲戲(ちやか)す事の上手め、銚子の變りめやら、間鍋持て立迄が惡い、あれ〳〵こちらがひだ屋の座敷、坊主客そふなが、鼻付合て賞翫めさるゝは、なんであらふ、されば珍しさふな顔じや程に、蚫か蛸の大煎でも御ざらふか、はれやれ勿躰ない和尙達と見へて、金らんの袈裟、あなた方がまいりなら、鰯汁か玉子のふわ〳〵、扨は鮒の燒びたし、一夜漬の鮓でもあらふかと、谷峯ひゞく高笑ひ、こちらを見や、うまひ圖な所が有、あれは西河屋の風呂や座敷さんない艶女達の湯上り姿、ひつたりとみへすく滿ゆかたが好もしい、あのやうにも透る物か、縁がはなはおくめ、こちらにうしろむいてゐるは喜代勝さうな、やあやあ腹帶して居る、扨も珍しや玉子がはろだ、最早七月あらはに見ゆる、遠目金が爰へほしいとつぶやくを、太鞁びくにの妙林が聞とがめ、遠目金を何にさんす、さればはらんだ女のつくばふたはよふ出して居るものじや、扨も惡性なお人さんじや、遠目がねは爰にござんすと、遠目金の仕込杖、跡先をぬいて渡すいたづら比丘尼、さりとてはよい御嗜、是は〳〵どちらの奥のゐんから拜ふやら、扨も有難い御內陣のうまひ所と、尻もちつくを押のけ、どれ〳〵こちにも見せい、それ〳〵いしやの藥でも祈念でもおりなんだかして、にくい腹形、なむさん紅の戶帳が下りた、それでも手前をさげると、御內證はすぐに見ゆる、ほんになあ、ゆでたかまぼこを見るやうな、さあ〳〵替ろといふ内に、艶女は奥へ入たりけり、大座敷は田舍大盡野郎柄も握るとみへて、小太郎と吉彌が夕飯の相伴、手引皿は河鰌のさしみ、扨も照たり〳〵、杉本屋に小梅おかるが、高べい越に拾ふ艶女は、小らんさうな、こいつもつわりかしらぬまで、はれやくたいもない、こちへおこせいとせりあふもおかし、ほゝう隱居にうつ〳〵蕎麥切を打か、はて最前から、喰事ばつかり云男じや、艶女が鞁で、大盡の仕舞、さりとはむつとする、其大盡の紋を見て置け、されば紅ちりめんの袷を廣袖にして、紋所はないが、天鼓のからくり人形に似た男は誰であらふ、いやこちばかり見る筈はない、おまへ方も御らうじませと女中へ渡せば、こなさん

方はおかしさふなが、こちらはつんとさばけませぬ、先隠居といふ家に、隠居屋と云でござんすか、尤な御不審の、吉右と云筈を、人毎に呑込で、隠居々々と申まする、したが此吉右が名の高い事を聞んせ、此色里へ通ふ程の人に、隠居と云て合點せぬは御ざんせぬ、されば太閤様と云は、關白のから名なれど、なべて秀吉の事じやと思ふて居るやうな物、それと同じたとへには、慮外ながら此隠居へ様か御の字の付かぬが殘り多ひ、あゝおつしやりますな、御の字を付ても、様といふても大事ござらぬ、惣じて此色茶屋の艶女は、一軒にふたりづゝが御定り、娘分と云があれば、直から銜出しの艶女もあり、或は勤の内に大盡に引かゝれ、世躰持が有れば奥様にならつしやるも有、もはや勤も此さし切と、心ぼそふ成行共、つかみ出す敵がなければ、本のふるすへ歸らるゝ艶女もあり、勤の内に水を遣ひほして、此里から葬禮にあはるゝも有、天竺牢人と云艶女達も澤山成に、御仕合は此隠居の君達、どれも〳〵おとらぬ大盡をかための釘付、女は氏なふてかみさま、持丸長者の隠居じやからは、御の字に毛も髭もはへませふ、まあの緣側に釣た籠を見さんせ、遠音はさゝね共鶯そふに御ざんす、さああれが袖が香といふ鶯にて、お三木がてうあひに逢た名鳥、今は音が入つたかしらぬが、ほゝうみきほしとさへづりました、扨もうそらしい事いわんす、是がうそなら二たび舞臺ふまぬ法もあれ、みぢんも虚は申ませぬ、何時でござつたか、あの鶯がはなれ、此觀音堂迄飛んで來り、爰な櫻の枝にとまりてつう〳〵つうお三木は、秘藏の悲しさに、人目もかまはず、此下の谷へかけ下り、鳥の跡を追ふて來りたるに、松坂屋の平右が女房ふきのとう尋に、此岨へ下りて行あひ、是は〳〵お三木様、召つれもなくしどけない姿して、まあどこへ御ざんすとどがめられ、されば鶯を迯しまして尋に行歩ますわいの、私はまた心中かと思ふてと、互に笑へば、さすが手飼のやさしさは、お三木が笑ひ聲に、おゝみきほしといふ高音、お三木嬉しく日ごろの付聲を合せ、ひだりの袂をうくれば、かの鶯袖口より飛び入、あたゝかな所へかゞんだげな、それより袖が香と名付てのてうあひ、是も今はむかしながら、其折ふし松坂屋に腰かけて居たるはやぶさ、此鳥を追かけて隠居の裏迄迯たげなが、何事があつた

やら、平右が女房もしらねば、おふたりの御内證もしれず、今あの鶯に問ふたら知れませふか、はて過た秋の事をわけもないお人じや、あれ〳〵杉の丸太柱に左り字の歌、どなたの御しゆせきかしらぬが、やゑもくらべふあさま山と、思ひ入たるは心にくい、御覧の通の艶女にて、手跡も拙なからぬゆへ、右も左も成過て、酒の一座を罷こなし、情あまりて實ふかく、思ひ出してからが、願の雫で口へいらぬ君、御名は家の通り名にて、お八といへるが書捨て、跡でも人を迷はする、すしな艶女が難レ計と、こちらを見れば下女はしたびくにが大將に成て押あひ、是は〳〵爰な二階座敷、晝中火疾事をしをるは、慮性な顔な男じやと、尻をいぢ〳〵摺あへば、腰もとは追ばれか〳〵り、ありやうつむいたは、そりや天窓が上たはと、たわいのない笑ひ、奥様もけふがさめて、けふ計はどんな事いふてもくるしうないが、さりとは皆たしなみや、よもやあんな男と晝中、でれんつかふ女郎も有まい、是々遠目金やらふと覗かせて見れば、鏡とぐ親仁じやと、どつと笑ふて腹筋をよる折ふし、坂を走り上つて中々と、氣疎い呼聲は、篭屋の小女なに事にやと見かへれば、

大小に取袴の使者三指にて畏り、拙者は山田の御師何某がもの、津の國の女中さまへ太夫申遣しまするは、此度御忍びのぬけ參、御下向を待請、御馳走の酒迎ひ、太夫茶屋にて開き奉るとの口上、則出口の御駕籠を同道、それ〳〵と下知すればくわら〳〵と云息杖の音が、さらばとの別れにて、殘多いは大躰な事、いにしへより色に負る男伊達はあれど、男達にまける色はなしといへり、五人はもろひ却合を喰て、ぎやふんとしたる顔、けんくわをせふはづみもなければ、ねぢをいはふ相手もなく、狐の若衆に成て、月夜に尻をまくられたごとく、めつたに顔をしかめたる計り、畢竟の詰りが小俣の駕籠かきの仕合、

○三品茶屋二階は人に見られ自慢　聞咎たる詞くせは過し昔語

至つて興あらんと思ふ事は必違ふ習ひ、そば切の上に西爪喰ふたよりも、心あひがわろく、五人共に猿がひへもんだ顔、口の内でのぶつくさも、拍子がぬければ物がなく、兎角此やうな趣躰には歸たがよい、それもそふじやさあうてとこそいへ、しやん〳〵と手を打てどつと歸るやけ心に、扇屋の二階を見上たれば、どこの君とはしらず、喰べて來た大盡を、なぐさめと

見への酒事、椽側へ出しやばつてのさわぎは、見られ自慢そふな、是計りは打込さ、神鳴をまねる男が、雲行のわるひ顔して、白眼つめてたてば、こくゐがいものあらだつ顔、さあ又けんくわを買ひかゝつたさ、あたりの茶屋には腰かけを仕廻へば、隣には蓙をおろしてのさわぎ中にも文七をもまねびそうな男が進出、まちや〳〵、最前の女郎のいわれたが爰じや、艶女達に咎はない、又艶女の最負口、とかく知れぬが心にくい、まづこちらに花色じゆす紅うらを見せかけたは、粋でも一盃喰ひそうな艶女の手がらには當て見や、されば面躰うす皮にて、つくろひのない君、すこししやくつてうまそふに、舌つきな物ごしは、なんの苦もなふ呑こんだ、さりとは細かに當たりけり、あちらはちご髷、若衆撫に釣蟬髩入むらさきのさつさか、先は素人の好く風俗、御面相は大躰より渡りがながくうつくしさは、硝子の陶をさかさまにしたやうな顔、よし何にもせよ、古市の君ではないぞ、さればされば產社が違ふて居る、艶女のぼうしの澤山なは、此中の地藏のはやり物、先我らにいわせて見よ、河崎屋のしまん六方、小松屋の觀音めぐり、森田屋の十八丁、いづみやの琴の音、多田屋の舞扇、やれまて皆迄いふな、其内に物が有、あの帽子がいづみ屋の琴の音よ、叙序でながら御引合申ませふ、こちらは慮外ながら、中の地藏での折紙道具、命成けりさよの君、本阿彌の左七が究て置て、きれ味がよいと云さた、それゆへ御勿躰が過て、位をとるがにくいと專らの是ざた、ちさたしなまんせ、おもかげのつもらでとしの積れかしさ、小町も後に悔まれた、根が賣物じやと吹上れば、間靠て下を覗き、もうしざれ事もよいかげんがよう御ざんす、まあござなさんじや顔上げさんせ、是はしたり中文さま、いつぞはわしが、いはりよ〳〵と思ふて居ました、こりやめいわく、ほめまするに、それそれ大事の所がまさもにこちへすけまする、はてわけもないといひ〳〵も、居ずまひを直す女心、是はこれは奥の院迄御開帳か、こなたもどこのかみ様にならしやろもしれず、何時どのやうな世躰めされふもしれぬが、めつたにおがませてよい物かと濡ぶかひ悪口に、顔赤ふしてあゝつらさ、あちらむひた所はたしかに折紙、一角が物は古かね買に當てもある、奥なは朝寮大盡かして、高なしの借上山田でない、證據は中

村の畠賣でも、五十や百はけふの内に、小判の耳を揃へて出すといふのせ、それを點頭太鼓坊主も坊主、天窓につりばけが見へて、かびたんの羽織は例の醫者じや、何にもせよしこなしだて、あたぶのわるいやつじやと、下から吹込もしらずに、大盡のすつとん〳〵おけ〳〵と打込ば、覗きに出る大勢の足音、やれ覗かんすなかまはんすなと取付てさゞむるは、艶女達の世話宿の下女が是を見て、氣疎い聲して、是は〳〵此中も麁相な客様が、其様側から落さんして、水よ氣付よと大さわぎ、或人がひやうたんの黑燒がよいと云た程に、顔うちへぬりくり、つい黑ン坊にして果しました、是が地のお客なら、御一分が立ものか、とつと川むかいの大庄屋でさへ、耻しそふにござんした、仕損ひがあれば私がしかられます、なつのこちへ入ましやと、ばたくさするに腹筋をよつて、こんなとろい事聞て居ても、くれかゝつた日が暮ずにはおるまひ、わつと云て押込と、どか〳〵と廻て腰をかくれば、山出しの小女がかな切た聲に味を付て、少御上りなされませ、下の間か明て居まする、成程上るに時宜はないが、三品やと云は物喰ふて酒のんで寢さする事かといへば、あのおしやんすなら茶にかばやきを添て、酒を上まするど、眞顔に成ていふもおかしく、さりとは氣がはらひでよいなぐさみ、枕して雲見て、腹ばひしてごゝろふんで、手たゝけばあい〳〵と、盃持て出るをみれば、むつちりとよふ肥へた下女、こりやなんにも馳走は入らぬ、こちや錢なしの市立、したが二階のさがりはいやじや、あのおしやんす惡口と、物まがしい返事、氣を付る程立まわり、客のこなし、三品屋にはあまつて見ゆれば、そちはどふやら見しつたやうな、いな事の、そのいな事がなほらぬ、さればわしがいな事も詞くせじやが、おまへの惡口も、今にやみませぬ、是はならぬぞ、其ならぬぞを久しぶりで聞まするど、涙ぐみての昔語、わしは並木屋に居ましたがといふに、心にはそれと合點してそれはそふよ、昔をいへば心がいな物になる、なんと二階のもや〳〵は靜まつたか、さればおまへがたの聲を聞いて、さたなしに迯て行んしたと、云を肴にして呑出し、けん〳〵わ下地の文七踊り、ふかま文七氣がたんりよにて、やゝともすれば男ごし、なんと男ごし、呑だ斗りにてはうつらぬ、表の艶女たちを、二人許りかりましたいが、

取よせてくれまいか、さればどふぞさはいませふが、早速はならぬで御ざんせふ、其ならぬも面白ひ、さつてもにくやと立て行釜をとらへ、そちに尋る事がある、けふの女中をしつたか、さつてもよしの節から、天のぞくやうな事いわんするお人じや、けふの女中が百や二百では有まい、成程是はあやまつた、津の國衆のゆかた染、皆迄いわんすな、かのだてくさい後家婆、駕籠が一日つかれたと、ぶつくさいふた女中じやあろ、それよ〳〵、其女中なら根元を上下の者に聞ましたが、大坂より三里脇、酒のたんと出る所の、酒やの後家で御ざんすげな、いざ御吸物上ませふと立て行を引留め、して〳〵末はどうじや〳〵、あゝつら、其奥さまのいにしへは、大坂の新町にて、茨木屋の太夫樣、御ぜんせいの最中を、明樽とやら、空樽とやら、いふ大盡が廓の勤を根引にして、奥樣にして物さんして、御子が出來てのあげくに、大臣樣がしなんして、今は後家でぬしがないに依て、あのやうに自由なせんさく、殊に大きな奸女ゆへ、御影でぬけて出さんした物じや、今宵の泊りは新茶屋の秋田屋、是に違ひはみぢんもござんせぬと、眞星をくらわせば、五人は一同に溜息をつきて、座中ひつそと靜りけり、中にも一人の短氣者生付のむしがつゝぱり、さあこらへられぬ、其水ひとつ汲でくれと、身拵して行下地、四人はあきれてこりやなんとするどうじや〳〵、あの咄しが開捨にして居らるゝか、いづれも爰に遊びや、身は新茶屋へと立て行を、こりやあんだか、光明寺の鐘突たは、一ときまへ小俣迄行たら夜が明ふ、ひらにひらにとゞむるを、なんの其小便突がねまだ宵じやとふり切て、出て行し跡は又酒事、

美景蒔繪の松一之卷終

美景蒔繪の松二之巻

○御岩の町幽に燃る金輪の火 是沙汰に乗る 丑の時参り

人氣のせく時は上性して、腰より下の御留守成がゆへに、思ひよらぬ怪我もあり、夜陰には我足音も追はゆるやうに覺ゆるは常也、例の男友達の振り切り出るを、とゞめたるをもかまはず、獨り出ることは出たが、扨も闇の夜やといひ〳〵腰かけにぐわつたり、したゝか向ずねをこすり、おかしさを膝の皿にかこつけ、しばしうづくまりて揉で居れば、なんとなふすごく成り、鼻のさきをつまむやう成る折ふし、御岩道のほの闇き所より、怪き火影のちら〳〵は、こりやなんであらふ、行燈の光りではなし、續松(たいまつ)よりはぬるし、ム丶よめた〳〵、爰らあたりの曲者坊主の妾が御針が娘、紙燭で酒屋へ行のであらふ、爰はなんとぞ一おどし、おどしかけ物見せふと、羽織かぶりて背高坊、ちよこ〳〵あゆみのさし足にて、ぬつと覗ばあゝ悲しや、金輪の足に火を燈し、さばき髪に白ゆかた、あつと云より魂がちり丶んと成を、じつとおさへ、はて扨丑の時參り、根は女じやと思ふより、又一物がむくむくと、あたま上るに氣をはりてすかして見れば、まだ二十に足たらず、しかも其うつくしさ、供はつれず障りはなし、戀ははやひが賞翫じやと、そろ〳〵跡をしたひゆけば、きぶね詣の道行に打て付た物、爰らを辰松に遣はせたらあんな事では有まひと、拍子に懸りてうかれ男、金輪の光りに我が影の、はしればはしる、あれ〳〵またとまればとまるとあほう口、觀音堂迄したひゆけば、女はかねの緒をおしいたゞき、鰐口をならさぬが秘密、祈事のわけは聞へねども、泣つくどひつする心は、何れふかひ思はく、しばし有て階を下り、傍ら成櫻に釘うつを、此男そつと寄てうしろより懐きとめ、なぜ此さくらへ釘うたんす、此木は元觀音へ寄進に植た我が櫻、枯ればわしは死にまするとじつとしむれば、この女、ぎよつとしてあゝこわやなふとふり返り、顔見合せて溜息をつぎ、どなさんじやか存じませぬが、情なや こよひ七日の結願をあだになしてのけさんしたと、むくの袂を顔にあて、うらめしそふになく姿、しどけないかゝへ帶は、芝居の女方のしこなしが有りて、うまひ所計り、是々ふかふなかつしやるな、こなた程の器量を持て、人を咒ふはよく

よくの事、したが、忘らるゝ身をば思はずちかひてし、人の命のとかばいしは、一重うへの心中、こふ來かゝるもふしぎの縁、我らば祈りころされて、しにたい事じやと手をとれば、女は顔をまつかにして、御恥しう御ざんすと、 口の内でくどくを聞けば、 悪性な男の事、是皆迄いわんすな、悋氣が餘つて釘など打つはどこしも多い事なれど、それは近比不粋な事、此廣い世界に、男日照りは行まいに、お町に住む程もない堅い心、是捨る神があればひろふ神が有と、もたせた詞に乗て來る女心、其御詞に僞りがないなら、打割て咄しませふ、私事は是より上り、曖簾に、もみぢの付た水茶屋のひとり娘、名はおてふと申まする、しらんす通客屋とは各別な違ひにて、往來の御腰をかけられ、御幣箱組案内中間、 酒迎の出合衆に晝夜もまるゝ茶屋女、むいきをなだめ生酔をすかし、茶碗を眞綿で請るやうな、勤の内にも戀は又、 八ン〱の物好にて、里こそ替れ名は宇治の、梅八殿の御内衆、九一さまといふ御方と、かわ切よりなじみを重ね、ひだりのかいなの入ぼくろ、子も二つ迄水となし、中のよいのは人しらぬ、朽木のきやらの伽羅男、替らじと云起請迄握ら



せて置てから、此跡の月赤福とやら、青福とやらいふあたゝかな餅屋へ聟にはいりくさつて、内の娘とちんち小六、思ひ出せば是胸がくら〳〵ともへますと手を取て、ふところの内が是ほどあついから、まんざら虚でも御ざるまいが、したが其やうな惡性者に心中を立ふより、かわいがる男に乘かへたがまし、なんぼこなたが思ふても、入聟すれば緣がないじや、是さらりと此丑の時をやめ、一言おふとおしやつたなら、御氣にはいらずと所帶女房、今におかさまといわすると、木に餅の成やうにくどけば、女も色にはひかるるならひ、扨も氣のよい御人じや、こなさんも切々見まするに、白衣で參宮さつしやつた事もないからは、輕い御方共存ませぬ、所詮百迄は生ぬ世の中、まゝよといふがくづれ口、終觀音堂の緣の上、いたゞいた金輪は下の谷へころり、一重帶のしどけないは、根がいたづらの下地、順風に帆を上て、舟で播磨灘を通るより心安ふ埒が明て、跡はふたりの溜息ばかり、觀音も友に觸ゆるぎをなされそふな味、東雲ほのかに木ずへのおやも別れ行ば互に名殘を惜み、又逢迄の形見と、男はもうるのたばこ入を、折ながらさし出せば、女はわしはかた見とて、何もしんじませふ物もなしと、ふところをもぢ〳〵して紅の二幅を引はづし、互に取かわすかた見に、戀の移り香をつゝみ込、手を引あひて歸る比は、鳥もしらけた音を出し、泊り客の戻りかごのおと、宵に譫言つくした扇やの内も鼾聲、向ずね打つた腰かけも、思へばこちのむすぶの神と、道草に千話をつくし、ごふした事の緣じややらと、芝居の出口迄出れば、氣疎い犬めがほへかゝるに、此女驚き、きやつといふよりふるひ出るを、是々なんのおそるゝ事が有、何國迄もおれが送つて行といだきよせるをふり切、ひよいと飛んで逃る所へ、四人づれの戻り客、そりや釣者よと取廻はせば、抱帶程な尾を出して、のぼりの方へくわい〳〵、扨は音に聞惣安寺の萬日狐と、あきれて居る所へ、彼男跡より四人の中へ割て入、男のつれた女をとらへ、さま〴〵の惡口堪忍ならぬと切刄廻すを飛びしさり、透して見れば宵に別れた組友達、是はと互に打寄て、ごふじや〳〵と樣子をきけば、されば宵に扇屋を出、新茶屋へと心ざし、一みちんにはしる程に、宮河の渡しに付、船のさきに行當りて、向ふずねをしたゝかにこすり、是はと

しばしもみさすりてゐたりを見れば、やつぱり三品屋のまへ成腰かけ、是に氣をとられ、どふやらぞんぞとこわふ思ふ所へ、御岩の下道よりうつくしい女の丑の時參り、是にくどきかゝり、かう〳〵の首尾にて、面白い目に逢ひ、此女の情捨てがたく、今迄て出て此仕合先見屆て歸ふと、はしり出るを引とゞめ、さりとはやくたいなし、今のは慥狐が女に化そこなふて、尾を出して逃たのじや、鳴聲迄がくわい〳〵じやと、口口に笑へば、此男興を覺まし、それで犬の聲に氣疎い肝をつぶしたかと、漸々本性に成た顏、四人もあきれて、とかく沙汰なし〳〵、文七組が狐にちやかされたといふては、一分が立たぬと打つれて歸れば、彼男正氣の付に隨ひ、いや〳〵さたなしではつまらぬ事が有、もうるのたばこ入をしてやられたと、又狂ひ出るをそりや、逃すなと取廻し、こりや〳〵そちは本性でないか、それ程の事は大事ない、ちつともくるしうないと手を揃へてしはれば、然らば惣々か合點か、がてん共〳〵そんならうて、しやん〳〵それで正氣に成た物じや、我はもうるのたばこ入には、例の中間金が入てあつた、それを知ずに遣り、我もおれじやが、取るやつもやつじや、指引なしにゆるせと云に、四人はあきれて明た口をふさがす、扨も盡くされたり、かりそめにも小判五兩の遊び、天竺にも有まひ、稻荷どのゝ花聟となぶる內に、それ〳〵何やらふところからさかなを引出して見れば、やれそれは彼女が、形見にくれた緋ぢりめんの二幅、形見なれば中間の物じやと、幸ひ藤田屋に燈が見ゆれば樣先へ持行、戶の明りよりすかして見て、慥にきやふはきやふなれど、腥い香がする、そりやしれた事とどや〳〵いふに、そりや生醉がと、藤田屋には表の戶をはつたり、にくいどらめが仕かたと、釜をしかつてからが夜明の事、とかく此二幅は五人して分けまいか、金一兩に一尺四寸四方、後の咄しの種にもと、引ひろげ見る所に、ふいと吹上る朝嵐にもまれ、東のかたへちらり〳〵、五人はあきれて眉毛をぬらし、さあこち迄が化さるゝ、とかく向後あばれを止め、男だての珠數を切れと、五人一同に金ちやうしさらりとまれば其沙汰もなく、尾邊山の道も廣く、大に和ぐ神垣の中、

○二見の名所は戀の內海家暮も目をやる天の羽衣

運はあたまにあり、妖は行跡に勝ずといへり、しかし

其當座の出來心にて、崩れ初れば人の身躰計り、ぬい上は成がたし、こゝに勢州度會川山田が原に神さゃまりまし〳〵、此所の榮へ、宮も町家もはてしなき賑ひ、立續く通り町の中程に、丁子屋といへる兩替見世、山田に隱れもない分限にて、打身よりは內證慥成、居屋敷の外に支配の屋敷が卅八表、田畑が百廿个所、年中に五十貫目宛は內藏に納り、金銀藏の內にうめけ共、是沙汰に乘る客坊にて、一生遊山と云事をしらず、家居は漸二間半口に並瓦のそゝくり屋根、店は古疊に天秤を出して、往來へ錢商賣、その間々はきせるの鴈首を集、金槌にて打つぶし、百の中へつなぎ入るゝが仕事、いせに澤山な名吉と云さかなが、一本二分しても料理といふ事なければ、おのづから朝夕の飯も一盃減して、三人口にては年中に米二表のきほひと、爪に火とぼす丁子油、溜ればたまる物ぞかし、比は卯月の始御衣祭りの御祓、此客坊も二見へ垢離かきに行べしにて、布のかた首に掛て久年母ほど成る燒飯ふたつを、行戾りのたのしみと懷におさめ、道を急げば、腹のへるとはき物の損るに氣を付、一日懸る積り、漸二見の立石に付て、代垢離といふ子供が、

跡に付も耳に入ず、足ばやに潮かきて仕廻、はや胸算用にそろばんを入て、是より江むらへ廻り、內海の山岨を通りぬれば遊澤山に有よし、幸ひに取歸り、しめじが原のさしもぐさ、買はずに濟す算用、伊勢順禮の札所、一番の觀音もふしおがみ、江村と光むらのあいを、そろ〳〵廻れば、龜が森、鷺が森、此名所を見るもけふの德分と、上の山をきつと見れば、蒔繪の松と名に聞たる一本の松の下枝に、何とはしらねども、紅の衣の懸り風にもまるゝ粧ひ、むかしも天人の羽衣、三保が崎の松に懸りしと羽衣のうたひを思ひ出し、今とても有まい物にてもなしと、はるかに峠を心ざしのぼれば、紅ちりめんの二幅燒餅程成きわづきの三所に付て有を、ふしんさふに顏をしかめ、此三星の紋所が有からは、天人の風呂敷、先は麁相にする物にあらずと、內ぶところにしこだめて宿に歸り、召使の小女郞にもしらせず、ゑびす店の奧にふかく納、思ひ切て小半合酒、內儀のふしん立らるゝも尤、けふと云けふ酒の味を呑初ての寢酒、小半合の醉がそろ〳〵覺て、つく〴〵無常を觀じけるに、定命七十已來まれ也、我ぞやつと生れてより此かた、色狂ひと云事をし

らず、女房の外に古市の艶女は、肌があたゝかなやらつめたいやら、撫て見たこともなければ、色茶屋の酒は、すいやらあまいやら、呑で見た事もなし、此總成る浮世に、身をくるしめて通ふ、よく〳〵の因果、死ねばさいみのかたびらに 錢六文の境界、なんの大事かまゝよ〳〵といふ寢ごといふを、女房に起されて、それよりつねなき口舌、夜が明るとはや楊枝くわへて、四十年もみがゝぬ歯をみがき〳〵、髪結の床に行き、我が髪へも、雷丸の油を付て、光るもとゆひにてゆふてくれと頼むもおかしく、びん付といふ事を此時に習ひぬ、され共此男悪所の友達とてもなく、日參茶屋の噂より外に、色茶屋に近付もなければ、どこを當所に行方も覺束なく、何とした物であらふと、兩手を組での思案に思ひ付たるは、根た切の九郎助、今は妙見町にうら店かりて、あまり物の根元々々と太鼓たゝいて、今一色大湊に通ひ、夜るは宿に歸る男、今こそはかすか成世渡りすれ、其根元々々は、上の町にて廿間口の表やしき、親の腹からの大盡、うはきの玉子がかい劑親の借銀にふくりんかけて、諸道具其外を色遊びに費すて、せんせいはりのあほう遣に、或家の艶女をひつかき、家やしき泛塵も灰もなふ、今は古き給に、かへらぬ昔悲しく、根た切り大臣といひし馴のはて、其むかし質借の近付なれば、こいつを伴ひて太皷たゝかせんと、すぐに妙見町清水の世古へ行、案内こへば九郎助立出、不審そふな顔ながら、扨も〳〵お久しや、先以御さかんさふで、命があればふしぎの御たいめん御耻しやと腰かゞめるを、是は迷惑、人の身の上は七ころび八おき、戀ゆへなんの惜事があらふ、なんと〳〵、ひがしに替つた趣向はないかといふに、九郎助あきれ、先は旦那の御出立、常と替つて毛ごろめんの羽織、はみ出しの御はかせ、天晴大盡と見しはひがめか、頭から京屋へ御供申、お市が義太夫ぶしは何と〳〵、いや〳〵悪所へはこよひが始、色狂ひのいろはも上ずに、京やは眞でむつかしからふ、最少かなな所にせまいか、しからば連飛からうつらふか、あゝいやゝ〳〵、其うつるが氣のどくさに太皷をたのむ、うつらぬ所へつれていでたも、是はしたり、まんざらの無垢じやと背中をたゝけば、むく〳〵と嬉しがるも猶おかしく、其氣でなければ遊ばれぬと、御供申て尾上坂を越せば、何が引やらうたふやら、のぼり詰

たる穩の峠、朝熊屋へ御入なされませい、よかろ〳〵といふやいなや、のぼればさつさと鳴込ば、中居のかつがどなさんじや、是は九郎様鼻が光る、こよひ光らいでいつ光る物じや是々嗅、頃は治承の夏の頃、よしなき御むほんをすゝめ申、是はいかな事九郎様のきつい浮やう、されば〳〵、名も高倉の大盡を御供申、友に白旗をなびかす圖じやと味な手つき、先大座敷へと燭臺の光りすさまじく、臺所に眞那板のぐわたつく音、丁子大臣といふ名のかうばしきゆへ也、かつが常よりの笑ひ顔をぼんやりと、けふはよい風が吹たやら、珍しい御客様が見へさんした、是も九郎様のなじみがふかいからで御ざんすと、菓子盆持て出て、千年もなじみたる顔つきは、すべて此里のならひながら、じつらしい所が上手、追付艶女様も是へといふが盃のはじまり、さらりと一ぺん廻る所へ、おげんがくつこりとした足をと、しばし位を取てつゝと通り、しどけない居ずまいをかまはず、につこりとした艶顔はいかなやぼてんもころり、是より酒事がおもしろふ成、おかしうなり、二上り三下りの三味線に、大盡の涎ながさるゝ折ふし、艶女さま二階からちよと

かりましよといふを聞て、大盡の顔色のいなものに成は、艶女にいきついたしるし、艶女も大盡にのぼりた顔して、はあてよいわいのせわしないと、座敷に居すはつたは大盡の滿足、所へ嗅が馳走ぶりは、艶女とかわる仕かけなれど、そぶりも見せず、さつてもこんみりとした座敷、此盃はぬしがないそふな、根からわしが拾ひませふと、艶女への目づかひが秘密、おつ取て九郎助が大盡へ引合の盃、あなたは山田にかくれもない、丁子頭の光る源さま、けふからにつと日の出大臣、以後は切々御出であらふ、其御盃遣はされませふと、たんぶりと請させ、是々嗅當座の花じやと、黄な物一ぱい見事なはづみ、嗅何哉と三味線を本調子に直せば、九郎助がいけぬ義太夫ぶし、男そろへの中程に、三の糸の切れたが幸ひ、御吸物上げませふと、膳出すが大かた此所の定り、初對面から艶女が相伴を好むは大盡の手がら、それにおめぬしこなしは、さすがおげん様じやと、九郎助が尻もちつきおさめ、初床からおげんがもみ込み、うまい所をしめし入て、まんまと本粋の正中と成、輕口の咄もさばけかねず、一歩で嗅がつらはるしこなし、女房が異見は尻に聞せ、

後は兩町一遍上人居つゞけの二夜三日はおろか、備前やのおみきと、たんだふたりしたい事しての七夜待、名を水樣々々とよばれしは、二見で拾ふた福から發た事、

○色を離て西裏のざんげ咄 酒に成すました大盡の來臨

夕部の嵐朝の雲、まだ上つた日和ではないわいと、嵐朝軒が遣ばなしのあくび、さつても、じやうがこわいと雨戸に顏しかむる所へ、括頭巾の助次、鬼綟の六、重六などゝいふ末社が入來り、親仁の痂氣はと云があれば、夕のもや〳〵はと向ふもあり、此の庭の傘は誰じや、早先陣が有ぞと上れば、御岩の世古の青戸かげ、岳道のはんめう、扨もよふ寢て居ると、物は類を以て集るならい、四方山の咄がいつとなくざんげ咄し、嵐朝は寢てゐる、酒樽を迚す療治がないと、ひとり無念がるを鬼綟聞て、酒は五匁高直でも、我人おかげて飮か、賴まぬに我々が家へ迄、節季と云ふ奴がうせくさつて、山の神にせがまるゝつらさ、懸乞の顏を見れば、名代の男達よりおそろしいと云ふを、重六つく〳〵聞て、さりとは不了簡、其節季と云が來ればこそ、大盡達よりの付屆けもあれ、それさへ小判一兩と當て居る大盡から、かさ高に見せかけ、鳥目二百〳〵、是もいつそ器用に二角下さるれば、錢で四百のかんが立ぬに、今時大盡と云ても油斷がならずと、人の間も構はぬ高咄し、嵐朝せいて、皆迄いやるな、當に樋がはづれたは　我が屋根ふいてもらふ約束、けふのやう成雨の日、或大盡の見廻れしに、雨のもりあつる最中、小桶たらいはつゞかず、擂鉢重箱七つ入子迄當るを見て、此大盡ふびんがられ、嵐朝の屋ねも、ならべ死にしたらよからふ、追付身が死屋へ申付て葺てやらふと有ゆへ、もらはぬ先から禮の八百も云て、嬉しやと思ふから、隣邊りへも借上の山をいひ廻り、細待に待て居るに、聞けば此比旦那所にて、ころりとおちへ參られたげな、屋根の事は腸へ成て、矢代の取かへが二百十六文、川口屋のけんざんが六人前、これだけおれが引まへなれど、なんのまゝよと遣ばなしの盃前、さりとは氣の詰るせんさく、いざ中間にして一本取にやり、わつさりとせいと云所へ、是は〳〵水樣の御來臨、御つれは京のいせ屋の手代衆、雨の趣向が承たいと、太鼓共が車座に畏まるも金銀のゐせい、扨もあつくろしう一所へかたまり、笠句哉あんじて居た

そふな、見れば揃たはきゝ共が、病上り程青い顏して、こりやごふした座敷ぞとあれば、あゝ奥へ御ざりまするな、座敷は雨がふります、おもてからはしげ込ますする、先しぶ紙の上へござりませふ、樽も德利も寢て居られます、それ嗅起しましやといふもおかしく、さつと酒に成すました、大盡仰出さるゝは、けふ此巢へ出かけたは、樣子有ての事、遊興の外に汝らが智惠を借に來たとあれば、旦那皆迄仰らるゝな、口舌々々我々が承るからは、どの艶女樣でも、手へいれてもまする事、いや〳〵そふした事にはあらずと、諸溜息の八百もつかるゝに、何も不審を立ふがいのない御方ならば、盆前の拂金の難儀かと推をせふければ、旦那の事なればと大笑ひ、然らばいわくを語らふが、我夜前上むきの大盡に出合ひ、三人づれにて多田やにうかれ、よつぽご座敷もおかしく成て、酒も能いきげんなれば、お雪に戀のある三輪といふ大盡を、太皷ぐるみに殘し、我は首尾能のがれ出て、髭が門迄來りし時、それいまは岳道に引籠で居る、桃のさねの忠兵へといふ金剛頭に行逢たり、こりやごこへとゞがめたれば、急用にて内宮迄參りますと云捨にして行を、又呼戻して、何と替つたお若衆はないかと尋たれば、今日相役關左衞門が咄しに、明石島之助と申若衆、今朝大坂より此町へ參つたと申ました、所は大芝居から四五軒奥じやとやら、宿は存じませぬが、御食の太郎兵衞に尋さしやつたならしれませふと、別し跡にて大坂屋へゆく折ふし、太郎兵衞は念佛講より歸り、是は逢たり叶ふたりと、此事を尋ねしかば、私も一寸見ましたが、まだ十五六の新部子、旦那の御相手には不足ながら、御供申ませふと彼の家へ行ければ、太夫樣は今晩紀の國屋へといふに、是非もない事、そんなら歸れと立出るを、申水樣と聲かくるはごふやら聞いた聲と、ふり歸つてみれば、添やに居たる霰釜のとらといふた釜、是非に御酒一つとしいられ、奥へ通りて見るに、廊下づたひにて座敷も耻しからぬ越障子、今迄此家を知らぬもふしぎと、釜が出るを見れば、左の手にたばこ盆、右に菓子盆、是は不都合な家と見劣り、これの家名はとゝへば、惡口と心へてやら、されば何屋で御ざんすといふを、ふかふもとわず、京から抱へた艶女らしき、おぬいといへるが盃の相手に出、下地呑で居る上に、また聞召た程に、過た機嫌に床へ

入て、とろ〳〵夢を見るかと思へば、次の間のふすま障子がどろ〳〵〳〵、是におどろき目を明て見れば、色青ざめたる女の幽霊、枕もとに立て哀れ成聲して、あゝねたましや、はらたちやといふこゑの胸にこたへ、目ふさぐ内に、燈もかい消て重ね〴〵のこわさ、艶女はかいがいしく相手になり、しばし有て又どろどろと家鳴して消失せぬ、その時おぬい手を扣き燈が消たといふに、勝手よりともし來る氣味の悪さ、艶女にいか成ゆへぞとゝへば、此家に勤給ひし艶女、しさい有て押籠られましますが、ぬし様のふかまかと思ふ生霊泊り客さへあれば、あの通りに執心が通ひますと語る、いつも此ごとくかといへば、時として出られますといふに、あたら夢をひよんな事に覺されたり、とかく長居はおそれあり、茶代はらふて歸らんと、鼻紙袋のねぢぶくさを明るに、廿許りも有たるが一分もなし、金入を見るに儲覺の有小判が一枚もなし、扨はさいぜんのゆうれいめにしてやられたるよと思へど、證據なければ吟味する方便もなかりしゆへ、袋をよんで茶代の斷を立て歸りたり、汝らを頼むは爰也、尤金子には七両二分なれど、水標共いわるゝ我が、うまふ一盃喰ふた所が口惜ひ、何とぞ見事な智恵を出して取返したら、金子はそちへとらするといへば、太皷共はあきれはて、去迚は案の外なりと思案顔に成時、くゝり頭巾着をかたげ、御咄しを承れば此艶女もゆうれいとなる、今宵是へ呼に遣はされ、惣々か寄て責ませふ、それに落ずは水責か天秤か、何と旦那此智恵はと頭をふれば鬼紙子開て、いや〳〵是より手短に、おめしの太郎兵衛に案内させ、此一座がどつと押込、夜前の幽霊を出せと詰かけ、是非出さずば年寄へ斷りませふ、其上はなんとしやる、仕廻は宇治へまいろ、はれやくたいもないと、嵐朝がちゑ袋の口を明て、旦那はいかゞ思召、おぼこな大臣をこしらへ、其家に泊らせ、又ゆうれいの出た所をとらへる思案は何と〳〵、それよ〳〵さあ其大臣は誰がよかろ、されば山田の内でおぼこな大臣は、はあ御ざる〳〵、御差あひかしらぬが、きんかの六藏殿を頼ませふ、はてつがもない、幽霊が出たら裸て迯てわせるであらふと、一座がどつと笑ふ中に、青戸かけ這出て、爰に宇田杉之進と申牢人、近き比久世戸に借宅して移り、我らと他事なふ咄しますが、中々物に心得殊更好色に

かしこく、口舌を分け手くだをさとり、いにしへはむさし野にて、よしはら雀と呼れた仁、此人を召よせられ御相談はいかゞといふ、いやこりや智恵じや、とかくものがなふては談合がおれぬ、其牢人をふづくれと大臣の喜悦、太郎兵衞おぬし行きやれ、心えたほゝと足ばやに飛んでゆき、早速牢人を同道申せば、さらりと初對面のあいさつ濟で、幽靈の始終を語り、何とぞ御自分の智恵を以て、はまらせて給はれとあれば、杉之進聞屆、是程な淺い事に、分別もひやうたんも入事にあらず、しかし盜人に負とやらにて、金が一角入ませふか、大盡聞給ひ、早速のりやうぢやう先は忝なし、金子の所は何程にても、自分の御まかせと、さげ物共にうけ取て宿にかへり、僕を一人こしらへ木綿島のふとん一つ、手拭にて中をからげてかたにかけさせ、前に紋付の皮ざいふ、すげ笠二かい其身も旅姿にて、かるさんにらしやの柄袋かけた一こし、尾張か北いせの旅客とは、目の黑い釜が見ても紛のない風俗、暮がた彼の家の門に至り、內を覗は、折ふし戶を明て嗅ぐるみの涼見、楠邊より土產とみへて、盤に茶碗のくゝみ水をふかるゝ、艷女が貌をさしのぞき、日光から今朝來たに上れ、やれ〳〵よふ來た、茶たばこ酒のめとはおしやらいで、いやらひでと、足拍子を踏ば、彼艷女打笑ひ誰も女郞樣顏をする物もないに、惡口いわんすと、にくからぬあいさつ、されば艷女達の御口から、水もらふて呑むは虫ながらも果報なやつと、あんまりけなりさに立よりました、そのたばこ盆がかりましたいと、椽先に腰をかくれば嗅はたび客と心得、御上りなされませいと勝手へ入ぬ、艷女達是でもくるしうないかと、かるさんを扣けば、それやでござんす物と、脊中たゝくは痛ふないもの、それより僕にむかひ、おのれは妙見町の宿に歸り、夜ふけて迎に來よと奧へ通れば、彼艷女がざしきへ出て、手に入りたるしこなし、名はなんと申とへば、私が名かゑ、名は心中の森といふで推さしやんせ、そんならそねがさきか、其內で御ざんすと、しらにいわぬは家によつて有ならひ、酒もたらふく呑で、御定りの吸物にかさ食も仕廻釜を呼で、なんと迎ひの者が來る迄床を取てくれまいかといへば、始ての御客なれば、直に御歸りも殘多ふ存ました、成程ゆるりと御休なされませと、床を取る前にてさげ物をはづし、ぐわらりと

一歩をうつしかけて、是々茶代も拂ふて置ふ、きつふ酒にいきついてたわいがないと、しか〳〵さげ物の口もしめず、ねちぶくさを半分出しかけて、とろりとろりとねむり行ば正躰のない事、艶女は寢卷に一重帶して、十八九成かほよ花と、口くせの上るり、もうしなせろくに寢やんせぬと、頭なぶるに目を覺して見れば、どふやらうまそふな尻つき、そなた膳をすはらずに置は、あんまりこくろもないせんさく、なんのまゝよとやせ牢人の酢好み、すう〳〵といふ内に埒が明て、其上は無性に草臥高いびきかく最中、あんのごとく次の間から、ぞろ〳〵〳〵、扨はと心にがてんして驚いた顏をして見れば、艶女もしつぽりと汗をかいて、恨とねたみの問答、灯の消るも斷り成るは、突たる杖の先にて、とうしんをかい消すおかしき、枕もとにしよぼりとつくばふをうかゞへば、はや提物に手を懸るを、巾着共にしつかと握り、いとしやこなたは迷はれたさふな、跡をねん比にとふてやらふと、むくと起ての羽がひ付、いごきがとれねば消て行事もならず、艶女に灯をともさせて來れと身拵すれば、あいとこたへて手を扣く〳〵迯れぬ首尾、杉之進は彼

女の胸づくしを取り、是々迷途をしそこなふて、しやばへかけ落のゆうれい殿、まつすぐに樣子をいわれよ、少にてもうろたへた事が有と、焰魔王へ付屆けをいたし、死出の山の入口へ獄門に懸さするといへば、此女につと笑ひ、はてごふなりとしたいやうになされませ、わしは女の事といひ、殊にくゝつて迄おかんして胸づくしをとらんすは、れつきとした御器量には似合ませぬ、あんまりで御ざんすと　ちつ共しほれぬ顏つき、此男肝をつぶし、さりとはふとい女、道理であらぬ姿して、人の金銀をはづし取も斷り、したがその分では濟ぬ事、命が惜くばつゝまずあかせ、品に依てあわれみをかけまい物にてもなしといへば、されば私も腹からの幽靈でも御ざんせぬ、此上はつゝまずざんげ致しませふ、元は大坂の生にて、所はしあん橋行懸の町はづれ、不埒院の門前成、こまの灰屋がひとり娘、名はおよくと申者、わたしが母が申ましたが、夫婦の中に子のなきことを悲しみ、庚申へ申子をして、ある夜はさみを一挺のむと見て孩をもうけたと、かね〴〵咄しおかれましたが、それゆへかめつたむしやうに人の物がほしく、むたいは欲ゆへに此所

へかたられて參りました、生れ付た病ひと云で、艶女に成ても若衆の雪踏をかくし、傍輩のさし櫛を盜み、後々は客樣方のさげ物、紙入羽織頭巾迄をくろめますゆへ、次第々々に惡名が付て、今は此家の伯母女郎といわれ、味噌部屋の次に押込められ居ます、なれ共まだ止ませぬは欲の病ひ、折々能い客樣と見ますれば、こふした手くだで金銀を盜み、今宵あらはれましたも因果、時節と思へば百年め、なんの命が惜ふ御ざんせふと、泣出すを見て涙もろき男、はあて、なきやるな〳〵、つめりも扣きもするにこそ、か樣に語りあはすもゑんじや、我が今宵たくんで來たも、夕部の客の紙入からおこつた事、何とぞ七兩二歩は手前に有か、成程々々夕部の客樣の金は手も付ずに持て居まする、其上今迄溜置ました、一歩が二百、ふくさ斗りも三百餘り、たいまいのさし櫛が卅六枚、伽羅が菓子袋に一盃、其外の小道具は挾箱に二はい程御ざんす、かふあかしますも かた樣の御器量を見屆ての事、殘らずおまへに上まして、私はさらりと髮をおろし、一心不亂と出る心底、是で腹ゐて下さんせと、戀でまろめた涙の玉、折々見返す二かわ目に、憎いがしんじつかわゆふ成、あのこなたがびくにんに成たとて人がなしては置まい、こなたの年はいくつでござる、わしかゑ、私はことし卅七、戌のとしで御ざんす、すれば我は四十五、七つ違ひは相生いまだ定まる女房もなし、何と女夫に成るまいか、そりやじつかゑともたれかゝるおんりやう姿、艶女は床から手を打てくつくつと吹出し、是は〳〵媒なしに替つた圖なころびあひ、むすぶの神はおれさまじや、先其繩をほどかんせ、ほんにさふじやと、羽がひ付のふんどしを解すてて、其跡をふきさすれば是でしばられたも、ふかひゑんじやと、下帶をとらまへての大笑ひ、大事にならふかと、こつて居たる臺所にも是を聞て、やれお目出たやとどや〳〵と賑ひ、銚子よくわへよとひしめけば、蚫は祝言にいむ物じや、肴にするめを出せ、やれ一束一本の紙がそろわぬは、是にせいと小杉一束、是では末廣に負けた、さいわひ客さまにもろふた、そろま扇是で見やすいと、袖扇を一本添へて聟引出物、家内が座敷へ出て、三々九度の盃はおろか、惣々が生酔に成りて、よい機嫌なへたばん杉之進、此はづみを見すまし、長居は障ありと女を伴ひ座敷をたてば、それ〳〵

道具の間がぬける、直に跡からひつそふてと、挾箱一對は、二人の釜が一つ宛、葛籠かたしは駕籠の三八、さつても重いとかたげ兼るを、道で肩を替やると念つかふもおかし、艶女達も門送りして、まだ蠟燭は一ちやう半じや、祝ふて三度はおよくさま、二つで仕廻て寢さんせさま／＼の悪口、こちも嫁入をとむらふて、ごふやら心がもだ／＼する、なぐれ客でもかゝれかし、天と横のだんじやかと笑ふて這入ば、勝手には鬼に瘤をとられたと鹽灰捲いての呪なひ、杉之進は瘦小僧が齋に逢たは殘な事、久しう喰ぬ生肴の賞翫、はやらぬ醫者の牢人を止て、夫婦世帯の友談合、古市の表側、芝居の近所に家を求め、一字田と云髮付見世、是も水大盡の御陰じやと新宅へ申入る有增、彼太皷一座を相伴にて振廻へば、大盡の家見として菱川が浮世繪、床入の最中へ產女が出て、興覺したる寢姿を、屏風に畫せての音物もおかし、太皷中間よりは油見世の暖簾、花色の染入に大欲軒といふ大文字、さつても隠れのない幽靈屋と、大笑ひしてすましぬ、

美景蒔繪の松二之卷終

美景蒔繪の松三之卷

○粹も及ばぬ天竺の趣向　惟當は末社の智恵くらべ

御鎭座より以來、長袖のすむ末の、ながれを潔き色河にて水心のなきと、兩町の酒の味ひもしらぬも無下に口惜し、されば家暮は金銀を愛して、五色の外に物の見事成色あるをしらず、粹は小判に憎まれて、因果の中に巾着の輕を恨む、過不及の輩は孔子もとらざる所也、まして吝き心から、延の鼻紙へも袋かけて入る癖に、借上のいひぶりして　紋ちりめんの京みやげをねちられ、とまらぬ虛幅にいやといわれず、どれ紋所はなんじや、割菊の二寸八歩か成程呑込だ、追付いせ屋からといひちらして、宿へ歸る內入の不機嫌、留守事に女房が、鰯買て煮てくふたが曲事とて、其鍋を打くだき、火ふき竹のむね打喰す男があれば、其氣違に添て年子うむ女房も有、それも浮世、是もしやば、人は一代名は末代と云しは、いにしへ伊勢の三郎が打死したる時代の事、今短氣な世界、よい事も七十五日はいわず、まして悪い事共は一座限、殊更山田の町と云ふ所、他國とは替り家居も美々敷、物每大びらな

しこなし、是諸方よりの參詣人を馳走のため也、此大埒な捌きを武臂者坊が見て、惣じて此所は人毎に補ふ我位よりは容吹て、くびだけの借錢を持ながら、苦にする顏もせず、我が身躰の入用年中に何程入やらしらず、節季々々の掛乞にも、旦那殿は對面せず、萬事は只手代まかせ、一生人目憚からず、我儘に活計歡樂な遊山をめさるゝと、うらやむを聞て打込、扨もいかひあほう、似たりと云事をしらぬ眼では、口のゆがむ薬かな盛おろふ、問屋は金持に似たれど人の寶、御師は長者に似て、臺所はどんどんと鳴共、酢に引者に引ての跡は、挑燈ほどな穴が明いて、內證はからくり骨我、其癖に大磯狂ひをやめぬ男に似て、古市通ひのはんじやう、とかく百年迄は生ぬ命、婬酒のふたつにもみ破るとも、さして惜む事にあらず、幸ひけふの花曇、いざ散らぬ先にと我がちの有増、辨當が走れば野がけの藥鑵も飛ありく中に、世を藥麿といふ大盡、我が氣に乘た機嫌取を前後左右に伴ひ、先出がけに前田のさくら、光明寺の鐘に花ぞ散けるを見よふよりはと、すの子橋の上から遠山を見はらし、前成死屋に松葉ふすぶる煙もおかしく、うしろには妙見の山高

ふして、しかも道のしほらしきに、新墓の五輪によきよきあたま出していな所の車座、しねばあれじやさ傍通る女中をいやがらせ、水くむ女をなぶる所へ、そりや葬禮が來るはと、どつと崩れて妙見のしあん坂、常明寺の櫻に茶辨當を開き、花見る女中を花になして、與市が太平記の講釋、さりとはもろなをといふ粹自慢、高氏の太皷を持程にも御ざらぬ、鹽谷判官が女房に戀を仕かけ、我つまらぬと打込れたは、よつぽどしこなしやうがあらふ事と、いわれざる粹がほ、楠の前方な事、慮ぐわいながら、我にさせたらば、どふぞ木が湊川にて心中したるも、四十二歳の役のどしさ、聞れざるあほう口、彥七の瓢簞ものが勝れた顏して、あの楠木は源氏で御ざるのと、つがものふいひ出すに、一座がどつと笑へば、さふじやないがほんに違ふた、我がいふは甲斐の信玄の事じやと、まだぬからぬ顏のおかしく腹の皮をよつて、いざ是から本誓寺の庭へと、橫ぎれの細道跡から彥七がおかしうない顏して、旦那のけふの御趣向はごふじやとうらさへば、しゆかうを聞てなんとする、いや步行やうが違ひます、申てもけふは一日千金の日和、野も山も人で御ざ

ります、それに茶斗りの至りせんさく、悉皆夏草を繪に書て、生の螢を放したやうなもの、景氣斗りでうつりませぬと、額にしわよせるも尤、さればけふは替つた圖な思ひ付、天狗も推のならぬ所、汝らが智恵だめしに、さあ〳〵眞星を當て見よとの仰、されば替つた御趣向はなんであらふと、道々頭かたげる中に、例のはや合點かねを打て、しれた〳〵、先出がけに寺さがしは、風が出ぬ間の櫻花、けふの御本陣はうさみや、日和は上々吉々なれば、順風に旗を上て、お梶さまを自由になされ、二階から烏賊のぼりの御趣向、是を見ると 上むらやにもまけまいとはづみをくれ、嵐朝が作の唐人旗、桔梗の切ぬき紋のあざやか成を、艶女達が上かくれば、三郎右が屋敷からも、おきよ樣の天狗はたされ〳〵も、内股のぐわいの違ふも構わず、やれしやくらんせ ひかんせと、緋ぢり而の内衣のちらちらを肴にして、風呂座敷の梶枕、なんと當らふか〳〵と、香込んだ鼻の先を扇にて喰はされ、晝つの事では御ざりませぬといひ直すが猶大笑ひ、いかな仕組で置ても、其やうにうまふはいかぬ、慮外ながら我らの推し參らするは、浮名江由に御陣を召れ、雨畑道に關をすへて野郎狩の御趣向、定て大蓮寺と謀し合、西うらの出張も惣は御ざりますまい、然らば地藏詣の歌舞妓子、艶女も鼻も釜も袋ももらさず、引留ての御酒ゑん、酒はうしろに泉屋をかゝへ、生肴は川崎屋からすぐ付、御食は太郎兵衛が仕出しに仰付られたでござりませふと、又あたまを振る粋顔、跡にさがりて山寺をうたふて來る惣九郎盛長が開て、扨もいふたり、旦那の野郎狩ならば、両芝居を一日止させてなさるる、それは内證の輕ひ御禰宜樣、浮氣な坊主中間が仕そふな事、我等が思ひ付は各別、替つた趣向とおつしやるからは、日比御嫌ひな事と存る、邪推かは存ませぬが、此頃御宿で見ますれば、伽羅の煎じ汁にもぐさをひたし、中ゐの杉がしぼり上てほしますするを、それは何にしやると申たれば、むろの八島にあられ共、身をやく煙と申ましたが、今合點が參ました、けふは暦もいらぬ日和、棧敷から芝居見て、灸をなさるゝ御趣向は、なんと星で御ざらふかときほひ懸つて申せば、いや〳〵其やうな事にはあらず、けふは汝らがしらぬ所へ出かけ、仕たい事してさわぐ趣向、さあ〳〵是は及ばぬは、そりやどこで御ざります、天竺で南無さ

ん惣々か喰はされたと、天窓かくが御機嫌に入て、さあ是からすぐにおせ〳〵、ごつこいと、本誓寺の花をそこ〳〵に見すて、岳道へ出れば、是も花に酔て氣を替に出ると見へて、當流の風俗、小人島の名主ともいひそふ成蝙蝠羽織、紐を胸高にしめ付たる二人連、茶香助にきせり筒持せ、道すがらの芝居評判、跡をしたふて聞けば、今年口の芝居の立物は岩倉萬右衛門、顔見せの狂言に丹前を振て、二日めから止たといふ評判、二の替りひがん櫻の狂言に、夜番久助となり、女郎とのぬれごとごふやら癢い所へ手のとゞかぬやうなが氣のごく、尤相手がちよつぽりの寄合ゆへ、でけぬも斷りながら、藝に實がなふて、立物には不足、金子重郎左衛門が牢人彌太夫、さりとは當りました、風俗顔付、其儘の牢人、妹がころされたと聞、實にせぬおもひ入よし、しがいを見て肝つぶしたゐ躰、何をさせてもよい〳〵といふ評判、山名增右衛門が若殿百太郎と成、付舞臺より酒の酔の出は、各別うつりがよふ御ざる、あい手松本和州と仕組で、實によい中じやと聞けば、一しほ狂言もでけませふ、親の勘當請て、けいせい買のやつし、糸鬢が烏帽子着たやうにて、し

つくりとは參らぬ、權七が七ばけは、第一本間が成と見へて、扇の手、舞の所作は、日吉彌右衛門もはだしで迯ふが、公家姿になつての彥惣踊は止させたい、なんぼ自慢仕やつても、やり踊はにくふない拍子きく、コノうんとこながおかしいとて、上は段子の夜着の内、下はかごかきがかた替るにも、コノうんとこな、談義說和尚の高座へ上らるゝにも、サアゑいとこなと、村山がまねをするは手がら〳〵、竹島瀧三郎が八瀨の柴うり、此以前ひんとこなの小女郎の格、おとなげない顔して、ようも小短いふり袖着て當られたが御上手、座本なれば一しほ精を入らるゝと見へて、近年覺へぬ古市の大當り、芝居はんじやうは、卅七年此かたの時花と、天竺迄評判が通つたげな、去年中の地藏の芝居が當つたは、因幡の松の狂言に、櫻山四郎三郎が白酒賣のやつし、松本しげまきがおけいせいのなまり、神代以來終にない、中の地藏の大入、定てしげまぎが一世一代で御ざらふ、去年古市へは山下半左衛門と云名代ものを天狗がつかんで來たと、顔見世を待兼しとは違ひ、案に相違の不出來、何れ役者程幸不幸の有物はなし、此以前岡田左馬之助、大坂より

京へ上り元服して、名を三左衛門と改め、ごつ共いわぬ立役成しに、此中の地藏に來り、改て若女方の一枚かんばん、岡田左馬之助ともてはやせしを思へば、惜しや山下平左衛門も、また才三と改て、若女方に出たらば名代で一盃は喰ふ物と、去年中の評判、前車の覆るを見て、後車のいましめを以て參つての瀧三が當り、又今年中の地藏、立物は岡野傳九郎、金澤彥五郎、追付櫻山四郎三郎が大坂より下るといへば、先は器量芝居、若女方は淺尾林之助と、日參する親仁が寄ても、古市より直打が有と云評判、當の槌がはづれ、以の外成ぶ繁昌、此頃櫻山が下り、おなつ清十郎五十年忌の切狂言、櫻山が清十郎と成切幕よりぬつと出たる所、手代めきて落付たる藝ぶり、林之助がおなつと成て、それはそのゝ美しさ、清十郎と濡の思ひ入、兩芝居に二人とないやうに思へど、此狂言も當らねばせひがない、それについて專ら兩町の噂しを聞ば、櫻山と金澤が、御岩の觀音へ立願を掛しに、櫻山は二階から落て、でんがく喰ふといふ夢想を見る、金澤は階子引て二階で、河豚汁喰ふといふ夢想を見た、扨も有がたい御告と兩人悅び、則御禮參りの歸りに、寂生寺の和尙樣へ尋ければ、不吉の夢こそ悲しけれ、先四郎三郎が二階から落た夢は、大坂からいせへ下つたが落たであらふす、でんがく喰ふた夢は不吉じや、味噌を付けぬやうにめされ、又彥五郎がふぐ汁喰た夢、當ると義はよいが、是も當らぬ筈がみへた、はしご引て二階で喰ふは、煤をいやがるたくみじや、此下心の程が惡ひからは、煤の入らぬふぐ汁は當らぬといふ告でおじやろと、仰られたといふ評判はうそのない噂しと、兩芝居を一口に呑込んだうはさ、跡から聞に我がをれ、扨も三尺八寸の男じやほどに、一尺九寸の魂じやあらふがと、ごつと笑ふに ねぢ歸る顏を見れば、山田にかくれもない、二朱ぐみの頭取 伊四郎といふ男、先なるは素足の山ンろといへる日の出大臣、是はゝと打まじり、迚も芝居趣向ならば一所々々、宿は中の屋と定ながら、鹽屋道より又うかれ大臣、

○念佛は趣向の外の喧嘩 惜しや敷居に芥子人形の打死

今の世界に化ものと下戸はなし、世のふしぎといへる事も、罰と利生は凡慮の外、因果の道理は各別の沙汰、此外にふしぎのあらふ筈はなし、過し夏の夕暮、古市歌舞妓芝居のむかふに見ゆる松の梢より、ふし

ぎ成煙立のぼり、或は輪に成、竿と成て、しばしの內に消うするといふ評判止ず、しるもしらぬも煙見にさて、思ひの外成夜るの賑ひ、詰る所は、色茶屋の錢也、後に聞けば、此松の梢に大き成空洞(うつろ)ありて、暮方暮方に蚊の多く出るが煙のごとくみへたるよし、是にさへ氣を付る物は各別にて、ちきりやの二階から、蚊の朝がへりを見たる物の咄しを聞けば、蚊も家々の蚊によつて違ひ、瘦たもあれば肥たもあり、うさみやの蚊は伽羅で燕らるゝやら、得ならぬ匂ひを留て戾り、三郎右が蚊は料理喰て歸るやら、したゝか天水桶の水を喰ふ、中の屋の蚊が生醉に成てよい機嫌なに、上むら屋の蚊は口舌したやら、ぶつくさいふて歸るもおかし、隱居の蚊が至り顏なるに、桑名屋の蚊がそゝろ過、つれぶしの天神づくし、のぼりの方から來る蚊をみれば、行燈にとまつて居たやら、どれも／＼油くさい中に艶女達を、したゝか喰ふた蚊と見へて、腰のぶらつくやつが、蜘の井に懸つたもきさんじ、それに隣の山田屋から、間夫ふといふて出た蚊は、憔に横と思はれて、おかしかつたといふには、腹をかゝへて大笑ひの折ふし、終に見なれぬ釜がたばこ盆と、氈(せん)をたがへ、こちの棧敷はどこじやしらぬと、札場のあたりうろ／＼するを、それ爰へと招けば、うしろねぢ返りてひんとした顏は、まだ此ごろからの山出しの女、芝居からよいきげんで出る男を見れば、鹽屋迫に借り座敷して居る俳諧師の友齋、この女を見て、こりやそこな南側へ橋懸から三軒目今押へて置た、呑ぬ盃はいやじやともがる、其筋むかひが宇佐美屋の棧敷と、跡も先もなふ云捨て出るは、こりや友齋晝中夜食の圖かと御詞を懸られて、はつと肝をつぶした顏を持て參り、是は替つた御遊山、重印に珍重々々、御本陣を取ふと もみ手に成ての持顏、なんとしばいは繁昌か、はんじやうのだんでは御ざりませぬ、只今つづきの三番目、棧敷は殘らず賣て漸々ぶたい棧敷一軒明て見へますと、云には物がなく、さらば本陣へとさはぎ出れば、木戸口には大こゑ揚て、これが間の山の大芝居と、辰巳上りに呼る最中、岳道に二子產んだが、男の子と女の子が腹の內から仕組で出たと、珍らさふに人がはしる、それは所相應、生立て小芝居の見せ物にしやれ、生れ落から金じやと、どつと笑ふて中の屋に上り、尻餅ついてさわぐ折節、御奉行様の御

參宮、今御通りといふにはしばし靜れり、程有て跡より戸板に人の寢姿、おもたさふに釣て通れば、料理の源七といふ、もんもう無事成男、手に持たる眞那箸をからりと捨、扨ももろひ命や、世は定なきと、よし田屋の爺が書置、かうした時におもひしれと云事か、南無といふて阿の字に涙押へ、彌の字に鼻をかむ時、杉がこらへ兼て、是源七どの、こなた何を泣ぞと笑へば、されば我も人も一度は死る命ながら、今の戸板は哀やとまた泣出すを、是はいかな事、死人でも生酔でもない、あれは御影でぬけて、てんがうかいて、ぬけぬのじやわいなといへば、源七大きに肝をつぶし、そんなら見よふ物と、天窓をかくに腹をかゝへ、さりとはしゆしやうにござると、大笑もまだ止ぬ所に、何とやら表に人が立はなんじやと座中の不審を、おりつと云戀の卵が、皆様達はきかんせぬか、朝熊が岳のこくう藏さまが、江戸へよめり仕て行んすとて、たんだいま表を、簞笥長持が通りましたと云に、是は目出たい事の、こくう藏樣もてんほの皮切、初物を參るじやあらふ、何いわんす、佛さまがそんな事が御ざんせふか、是はしたり、あらいたの不動といふが有が、知たか、そりや岳の明王院に御ざんす、さあそれが此以前よめりをなされて、床の内から逃げて歸らしやつたさかいで、あらいたの不動といひますは、なんとあらたな事か、かんまへて逃まへぞとなぶつても、うてぬ顏は、さすが御家の玉子、それを盃に押へますと、かんなべ持て畏るもにくふない仕出し、さあこぼれぬ程つげと、云ての跡が亂れ酒、蟒の龍に成はしれた事、此子が追付太夫樣に成は今の事と、一座の賞翫にあいながら、左の手にこぼるゝ程、四角な菓子を握りて、臺所へ歸れば、おぬいは酒にいき付て勝手へ逃て歸る、おつなさま二階からかりませふと、いひきらぬ先にがてん〳〵、早大盡の御出か、御ざれ〳〵かり物は實にならぬとかさを懸られて、うぢ〳〵してゐるを、はていかんせのと云、おとはがすぐばけをはりあひに立て行は、常にいひ合せては置まいが、いかにしても上手め、こいつをへたほんに仕てやらふと惣々か自ませす、所へ、太夫さまの御出なされましたと、中居のさんがしさいらしき口上、さあ一座がわかやいで來たと、寢て居る者も起なをるは、まだ初たいめんのしるし、與市はあばれにいきついて生酔に成り、

ゑんがわの敷居に內ごし懸て、暮かゝる空をとほんとながめ、日比すきの歌念佛、火入も灰吹も打明て、からかねのたばこ盆を、きせるにてたゝきて、めつたむしやうの歌念佛、此拍子にかゝつて座中がうかされ、口をそろへてせめ念佛、くわんゐしくどくは、若衆の心に懸り、居合腰に成、各々樣には御じんたいに似合ぬひけふ成御心入、尤私いやしきものとは申ながら、酒の御相手に召寄らるゝ上は、一座の花にもなさるゝ箸を、盃をもさしずてになされ、口を揃へての念佛、身にこたへ口おしう存る、あたまから念佛講にてよばるゝとしれば、中々御座敷へは參らぬと、眞似目に成ての口上、本より思ひがけもなければ、誰返事する物もなく、一座しらけての不首尾、所へ何心なくあいさつに出し鼻をさらへ、私が今晚の御客樣はどなたで御ざんす、さればわしは存じませぬといへば、いよ／＼腹立聲高に成、大臣をしらずに若衆呼ばつしやるが、伊勢の客屋の作法かとさん／＼の氣色、與市かんにん仕かね、是太夫殿、夢々此方にたくみ有ての念佛にあらず、近比ふけう成座はい、利はつが餘りせうしに存る、身もいにしへは瘦かづらをも小鬢にかけ、金剛の一疋もつれた者、そふしたざはいしらぬでもない、揉合入札引合鬮、天狗だのもし念佛かう、大盡しれずの太鼓、若衆すりかへ横取、無理所望、さま／＼替つた品はあれど、胸三寸の糸加減、舌三寸のあやつりにて、笑ふて濟すが上手、終に若衆の敵役したと、女が立て居て小便したるためしはないと、一こなしにこなし懸るを、彥七のそさう物が、與市まちやまちや、爰は我等にまかせよと、割ひざにて畏り、いとしなげに若衆をとらへ、がてんのいかぬ御年にもあらずと云はいかひさし合、しらにいへば、なぶりでの有親仁といわぬ計じやと、いふ程の事が此若衆の心に懸り、最早かんにんならず、年のいた替はりには御相手になり、先爰な芋虫からと、一腰をぬきはなせば、どつこいといふかけ聲には似ず、廊下をさして逃出れば、一座がくづれて散々に臺所へ逃るやら、袋だなへかゞむやら、やくたいもない大さはぎ、若衆もつづいてかけ出、やれ此與もの、がく屋へはゐるかといひしは、さわぎの中にてもおかし、それに彥七が二階から首出して、蟹めが穴に似せて甲をほると、小聲にていふが猶おかしく、家内が腹をかゝへてどつと笑

へば、若衆は脇ざしをさやに納、足びやうしふんで歸りしは、兩町はじまつての奴若衆、諸事は沙汰なしに賴奉ると、金剛が詫も尤、跡は噂も艶女も打寄つて、扨も短氣な若衆、芝居子の脂茶いふたは、今夜が見初めじやと、取々うはさする中に、噂が氣の付所は各別にて、今のざさくさに何も怪我はなかつたかと吟味すれば、音羽といふ艶女、中居のさんに手しよくを燈させ、そこらあたりを見廻り、惜や今の髭若衆に、あたら三味線一挺迄ふみおられたと、さんがけうとい聲するを、はあてよいはひの、我は二ちやうのさみせんはおしうないが、かなしや敷居に芥子人形が、十四五程ふみころされて、扨もかわひものやと、涙こぼさぬ計り、この心をかんじて、さすがこの家の太夫じやと、座敷も臺所も大笑、是を肴に最一芝居のめと、又亂酒に成た程に、夜が明ふと人の聞くも構はず、かごの相かたが高調子成咄し、うつら〳〵と居ねぶりしての閨寢入、いつとなく丸辻へかごたて丶、中々と夢驚かされ欠(あくび)をすぐに太儀々々、

〇明方の裏道出やうたり中の能い鶴龜世に成迄無疵な太鼓女

花と佛は盗がちと　大將にすましたは、とつと以前嵯峨の釋迦を、天竺から唐へ盗、唐から日本へちよろまかして、わせた時代の事、是もしゆらい負にまけて、まんざらのたゞでもなかつたやら、今に赤栴檀といふ嘘でない事、今盗んで咎にならぬは、十三夜のさや豆、扨は古市の艶女といふを言觸、中間より聞耳立ちて、はや神託と觸ありくもおかし、粹が是を聞ては、黠頭てのふくみ笑ひ、やぼが聞ては、顏をしかめ、古市の噂は腹立るもおかし、しかし世が半粹の人心、當流の浮世氣からは、引かいて來るを聞ゆるし、扨も盗む事じやと笑ふて濟せば、血氣盛んの若鳥、盗德と思ふも斷り、いかに兩町の艶女が　めつたに盗出さる丶とて、大躰な密夫未熟な大盡の分にて、むしやうにつかみ出す事は掘てもならぬこと、惣じて艶女をつかむといふ事、歴々方と下劣にはなし、大方中通りの仁也、尤色は遊山の上もりにて、歴々の氣びなれば、上下へだつるわかちもなく、氏なふて玉の乘物にのる、艶女が此里よりあまた出給へ共、大身は宿屋の滿足する程金とらせて、世上へ沙汰なしの根引、すぐに下屋敷の花となして、折々のながめは一入の御なぐさみ、どこやらに色里の移りが殘れば、是が本の根引の

櫻、此根元は神代の昔、白髮の姫宮を、二見の浦へ勸請ありしより事始りて、それより今に絶せず勸請申さる事也、惣じて艶女を引かき本妻にしての面白さ、世帶を任せての始末もおかしけれど、穴の明く段に成ては、算用聞るもうるさく、又は勤の內に逢たる客と顔見合などする折ふしの心惡さ、よからぬ事も多し、され共彼里にて、さのみどつ共いわぬ艶女と、地女の隨分よいといわるゝを、一所へ寄せて御らふせ、又(此間に半枚落丁あり)……るひ聲付はどふやら聞た聲、よし何にもせよ、あの蚊屋がなければかんじんの所を見る事じやにと、前後を忘れてながめ入たる折しも、是も山田にての粹分、ひな鶴といへる男、御岩の磯をせゝりて、陶酒(とつくり)のふたり機嫌、下地が大盡かおふ、太鼓かおふといふ剽輕なれば、西うらへ廻はるも心當が有て、鹽目のよい釜が通らば、立ながらも喰ふがてん、どうがめが尻もつ立て覗くを見付、男やら女やらしらずに、うしろからめつたにだきつけば、はあて誰じや、おもひは〳〵と突のくるとて、何やら手にさわる物を握り、是は先なんじや、尺八か鼻ねぢと顔を見れば鄙鶴、是は洞龜か、扨もはまつたり、こりや帆ばしらを立て居たのじや、ゆるせ〳〵と笑ふ口へ手を當て、先あのうまひ所を覗け、どれ〳〵と覗かるゝと、はや涎を玉つばきの枝に流しかけて、すうすうといふが聞へたやら、蚊屋の內からふとつたる男が、足かたし出して雨戶をはつたり、扨も憎いやつと、いわれぬ所にて腹たつ折ふし、勝手の中戶の簾をかゝげ、染ゆかたの尻をまくりかけてしたゝか成る小便、扨も鳴は瀧の水と はやすも構はず、迚の事に御顔が見たいといへば、なんぼ成と見ませふと、こちらむくを見れば、山田に隱れもない、まゝよといふ女太鼓、道理でみつちやめか、遠慮もなふこきおるといへば、腹たてゝひつくり返す目迄がひがら、扨も無疵なもの、其年迄まだ生物を通さぬも尤じやと、大笑ひして立退き、敵が太鼓で、ふとつた大盡は誰であらふ、しれた〳〵、本通り町しもく橋、烏帽子の突ぬけ、それよそれよ艶女はどこの君であらふ、それも大かたはと見とゞけた、先立姿が延過、物ごしがにやけて內へはゐつた、跡迄が酒くさかつた、皆までいふな、上むら屋のおふさ、扨も粹めよふ當た、はあて雨町一番の醉圖、色茶屋括枕にも鹽のない酒麩、うまひ計で跡が

水くさいと、献立の部に入て居た、それは鄙鶴あんまりな悪口、あれも上村屋にては御大夫、其上追付我等があたりへ、なんの苦もなふ引かく事じや、どこへどこへ、それがあのいわるゝものか、見やれ上向の大盡と、又一もめもめる事じやと、けんによもない事しつて居る、粋は又各別な物、なんと洞鑷ごふやらかへりはぐれに成たではないか、又次郎が戸を扣いて朝込にしかけ、大坂屋のあん焼を取寄て、茶をもめさせふといへば、おきや／＼、宵からの冷酒が今切て出て、あん焼所ではない、扨今宵はおかしい酒を呑だ、迚の事に喘ふ、宵に若手の大盡にさそわれ、備前屋で呑かけ、おみきがもがりて、あい計を七たび、おけんが無理で五盃、もふはたまらぬとかけ出し、よい機嫌な顔吹るゝがおかしく、のぼり向て行程に、めつた行に中の地藏のはづれ迄行、かうやく賣の文五郎が、屋根の虎をみて、南無三牛谷じやと、それからそろ／＼戻りすがら、盆のみゝず踊を思ひ出し、道中を踊りて通る所へ、美しい艶女が物忍ぶ躰して、我を見ると片陰へよける、こりやしれ物とすかしてみれば、明石のかすり島に、うらは淺黄の袷かたびら、たいまいのさし櫛に、何やら蒔繪もしほらしく、よし何にもせよ此うつくしさ、喰付かれたらそれ迄と、ひんだかへて顔を見れば、古市でも名代の艶女、是はしたりお艶殿ではないか、こなたひとりどこへゆくぞ、但しはしるのかはしるのかとしなだれかゝれば、アゝ申おがみます、やはり通して下さんせと、例のしたゝるい二かは目に涙をうかべ、手を合すれば、いかな鬼でもむごふもならず、それならちよつと口すふてやらふと、とんとだきしめた時の心地よさ、ごふやら埒が明さふにあつたが、頬がまちをしたゝかに扣きついと逃て行く、さつた所へ厚鬚な男の、髪先の長いわろが咳切つて來る、是が今の御つれか、色の生白ひ、髪先の長いは御禰宜樣のやうな顔な男そうな、憎さもにくしとむなづくし取りて、是御禰宜樣のやうな男味て御ざる、爰へちつと邪魔入ふとじり／＼跡へ突きもどせば、あきれた顔してものもいわれず、是もちよつと口すふかと、顔さし寄れば、いやそふにして漸々ともきはなし、逃られたおかしさ、なぶりたい程なぶりはする、道々小便でてんがうかいて、盗まれた家の軒に立、内を覗けば、勝手も座敷もごさくさ、紋挑燈を立ならべ

手分の最中、嘩に朝熊へ八卦見にゆけと、平右夫婦が茶漬喰て支度する所へ、下の關ぶしではいれば、誰じや〳〵どなさんじや、扨もきさんじなこがめ、お艶が事なら、遠い朝熊へ行ずと、我にとやれ、扨も嬉しや、早ふ云ふて下んせと、惣々が取つくを、扨もたくさんそふに、口も濡さずいわるゝかとぎしませば、嗅がいつせぬもみ手をして、もうし是で御ざんすと、手を合したるはよく〳〵の事、嗅いわせたくは馳走をしやれ、こちとはいつ來ても、馳走仕やらぬによつて、知て居てからがいわぬ氣じや、やれ先奥の間へつれましてゆけ、あい〳〵と艶女達が取廻して、大座敷へ手車、なんと兩町始つて、艶女の手車に乘て、座敷へ釣こんだは是が始りじやあらふが、鄙鶴横手を打て、扨も鬼じや、鬼とは悪人じや、悪人とは先聞け、世には似た事が有る物じや、我らもこよひ岩淵向の雀中間と桑名屋へさそはれ、風呂は兼日よりの催しあがつた上でさらりとした夜會、汁はうす味噌にて、水鷄平茸のつまに、うばをあしらい、先が大ちよくにからし蚫、はあてせんしやうらしいと打込れて、さあ其からし蚫に當られ、腹こなしに出た、是をいわふ計じや、

内々御岩の町に、替つた巣がある、それへと心當して仕かけたれば、早先陣をしたやつが有て、軍の最中、扨も無念と後陣に扣へて、笹屋の軒に立て居れば、何やら内がもや〳〵〳〵、是はと耳をすまして聞けば、素い大盡が艶女を盗そこなふたと聞へ、泣聲にてぶつくさいふは小はつ、扨もかなしや あれが發明さでは、仕損ひてふた物ではないがと、猶聞耳立て居る所へ、棒ついた男女が、二三人取廻し、そりや爰に御くるはと兩方より棒を入て逃さしやるは御ひけふ、先はいらんせと引ずり込れた、臺所には手しよく立て、御顏なりと見てやろと、ねちくさい聲付、そりや見よと顏を上れば、惣々が肝をつぶし、扨もそうな事、ゆるしやつて下されと家内が詫口、なんのあほらし、盗人同前の棒つゞめに逢て、其通で濟かともがり口をいへば、御尤々々、先二階へ御供してゆけと、釜が金あんどうぐわたつかす折ふし、大座敷のさわぎを見れば、勝手のござくにも、遠慮なう二上りの三味線、大盡の聲にて、お七ざいもんの直し、皆小はつへの當句のもんさく、何共よめぬあほう、あれは何者じやと樣子を聞けば、あれはいかのぼりの味さまで御ざん

す、あなたの惡心ゆへに、今夜のもめも出來ましたと云に、始終をくわしく語らせて聞けば、此盜かけた大臣は、山田にて歷々な親に掛り、また部屋住居の若手大盡、當分首尾よう盜出してからが、御前さまに備へる事もならぬゆへ、遠からぬ家來の內に、預け置談合に究た所に、因果とその家來の者の娘が、いかのぼりの味が妾にて、寐物語に此たくみをくわしく咄した、能々きけば笹屋にて、折々おのれがあふ艶女、殊に日比せんせいはりにはまけて、小腹は立、幸ひ疫病の神で敵取心地して、心がけて居る最中、夢にもしらず、盜かゝりしは生身の素人、邪魔入た惡人もまんざらの家暮天、先粹などはせまい事、中々味とはいわれぬといへば、それで切みじかに、味とはいひませぬ、味無と申まするといふに、大わらひして歸つた、其方は手車に乘りやる、我らは棒のこしに乘つたが、そちがやうな惡人ではないと、減らず口に夜が明てば、達の茶のみ時、こりやならぬ、さらば〳〵と、鶴が一飛びに飛んでかへれば、跡から洞龜がじだんだ、

美景蒔繪の松三之卷終

美景蒔繪の松四之卷

○龍王へ玉を奪ふたが盜の根元〔裸で座敷へ出るは噂が一代の上分別〕書を懷にして字彙を袂に入るゝは、學者の常也、僕に聞書の朱硯を持せ、親の前は學文をだしに遣ひ、勸學の會所に集る袴ごかし、類を以ての浮氣中間、心愛にあらざれば見へず聞へず、崑崙山には石なく、玉を以て鳥を打つ、彭蠡の濱には薪なく、魚を以て飯を炊くといふを、扨もあほらしと打込、しらぬ唐土迄もない事、間の山にては小判を以て露を打つ、はりがつのりては、伽羅を以て燗鍋をたく、さあ出せ〳〵と、勿論を八百もいふ四方髮に袴ぬがせて、彼里へとぞめき行ば、こくうもないせんさく、尤遊君も國の榮へ、男たる者一通りは、遊んで見まい物にもあらねど、人每に其本を亂して、色遊びを所作となして、家業をなぐさみとする、無分別よりしんだいを長刀となして、ねだ切とよばるゝ大盡が多し、此間の山の色茶屋も、以前にくらべては各別な違ひ、はんじやうするに隨ひ、物ごと花麗に成り、今は都にも劣らず、したが、能い事はふたつなし、むかし莚戶に緣取の時代迄は、一人の

娘に同じ連の男が、二人も三人も逢て、互に祭りの濟を待合せて歸りし、其比迄は根が賣物と心得、間夫といふ事もなく、つかんで來るなどゝいふは、いかな氣もない事、それゆへ戀にあらずといふ心にて、悲戀といへり、客も正直にて、茶代のかけに成と云事もなく、嚊も律義な心から、腹一ぱいの馳走が、けた切のこちの吸物、酌取女もおぼこにて、めつたにいとしがつて下んせといふ時宜がいかひ事、いつの比よりか娘分と云事を仕出し、勿躰を付けさせ、一角に定しより次第に上算、中比は津松坂の脇々より、七八十四五の娘苗を買あつめ、輕石のあらみがきより、小麥包の上磨をかけ、小飼の内は座敷の酒の酌をとらせて水にもぬさせ、よいかげんに成と、念比な客に水上を賴み、まんまともみ込でもろふて、跡を一角といふに定ぬ、近比は山田のかいわい、船鄕河崎大湊邊、地ばへの娘の、しぶ皮のはげたるをゑらみ、手かけ肝煎の夜鷹が分一の外に、飯櫃形な物をにぎつて、見立に廻り、目利はまゝよのおばが本阿彌よりましに究り、いかふむづかしきは、高砂の姥を賴み、語り入させて娘にもらひ、本の娘ともてなすより、天窓といふ事が始り、仕着といふ事も出來てくわつとした遊び、是より歌をも讀ならひ、源氏伊勢物語に心をうつし、密夫の情も始まれば よい中の口舌もおこり、さそひ出るやまめ男が、ひとり盜出しつかみ出し、今は盜がちの艶女、本娘分と名付しより事發れり、抑ゝぬすんだ根元をいわふなら、唐より渡りし面向不背の玉を、ちくらが沖にて龍宮へとられ、古市にては與惣次が玉を、山石が淵へ盜まれしが始り也、されば此與惣次が玉と申は、面向は娘分にて、出生は船鄕といふ所の娘成るによつて、面向船鄕の玉と申候、されば山石が淵の龍王、此玉に望をかけ、いかにして此淵の寶になさんと數のけんぞくを御前に召れ、いかにもして汝らが智惠を出し、玉を我が手に入よとの御諚、時にしやちほこと云惡魚すゝみ出、何れもいかゞ思召す、いにしへ萬庫が不背の玉、龍宮の手に入りしは、美女とへんじて萬庫をちやかし、よつほど痛ひめに逢て、あまの事にて手に入りたり、萬庫にまさる與惣次、かく備へを堅くし、客をゑらみ、盜むべきやうさらになし、今は其手をひつくりかへし、龍王蒔手の大盡と成、我々は末社と現じ、上村屋に大寄せし、鷄さはぎにくわつく

わつさ鼻をちやかす程ならば、心安く彼玉を取得ん事は知定也さ、侫人得手に帆を上れば、御出入の太鼓末社、さあ御家老のゆるしが出た、此いきほひに押せ押せさ、中宿に出張して、皆衣裳のゑもんつくろい、あやしめらる面々さ上むら屋になり込、是々鼻、今宵八十八夜の大日待、御宿にて障りがあれば、此方にてなさるゝ也、それ〳〵さ云所へ、伊丹二挺を四人鈞、すぐに大座敷へかき居、鏡打ぬき柄杓をそへ、五盃入の大さかづき、取肴は黃な物を杉なりにつみかさね、鼻ぐるみ爺まじり、艶女殘らず打まじつて、前代未聞の猩々講、鼻も生身の生酔に成て、武太夫樣を八百もいへば、律義な爺が口三味線、太鼓の小ばやしが放氣出し、ゐかう赤ひ内衣をさがし出し、せきぞろの手びやうし、勝手からは醫者のいるかゞ、緞子の小夜着きて出て、大黑舞の笑ひ顏、飯櫃形な肴いたゞいて、勝手へはしり込しもおかし、大臣輿に乘じ給ひ、何さぞ替つた智惠を出し、鼻をこまらせたいさの御諚、蛸の入道はい出、大臣の御耳へしばし口をさしよせ、かうした趣向が御ざりますが、さりとはよかろ、汝是を仕おゝせたらば、内々望みのさげ物、こりや丸口はづむは、是は忝けなつきり兵助、すいさせふさ、臺所へかけ出、是々鼻ちつさわりない御望が出來た、たのまれてもらふか、これはいかふあらたまりました、御氣にさへ入ることなら、何事成さおつしやりませ、いやいやめつたに詞に出して、そりや成ませぬさいわれては、我ら一ぶんが立ぬ、なんさ〳〵、はあて先いわんせ、ごふなりさいたしませふ、然らば惣々の艶女を裸にして、ゆぐばかりで座敷へかりたい、我々も皆丸はたかで無禮講の圖じや、是は凡慮の外な事、先思ふても見さんせ、何さして子供らが裸であの御座敷へ、しやほにむごい事おつしやります、それで最初より申さぬ事か、いやさいわるゝさ我らが立ぬさ、のつ引ならぬ口面ごかし、そんなら座敷へ御ざりませ、出すか〳〵、はあて是非が御ざんせぬさ、思ふやうにしこなし、さあ〳〵爰へ艶女が、皆内衣斗で出られます、是はうまひ事さ、一座が唾を引て待てば、しばし有て勝手から、しさ〳〵さ歩來る、そりや先陣は誰じやさ尻もちをつく所へ、鼻がひさり丸裸にてぬつさ出で、さりさは わしさへ爰へ出かねました、惣々の艶女が名代、是でゆるして下んせさいふには、尤さ思はれ、

さりとは嗅が一代の手柄、序があらば唐天竺の色町迄も、斯る大だんな、くわしやが有としらせたしと、座中は興に入て、いざ嗅を愛宕参りさせふと云を聞て逃げてかへりしは、また酒にいきつかぬと見へた、さあ最一蒸むせと、座敷も勝手も、一つに成ての沙鉢のみ、こりやこりや艶女、臍の下には毛がいく筋、どこにほくろがいくつ、其毛はこわい和らかなといふ迄しつて居るこちに、なんの遠慮が有つて、嗅を裸の名代に立た、其替りが重箱じやと、無理酒にいきつかせ、家内はころり〳〵と我しらずのいびき、客がいつ歸るやら踊るやらしらず、釜も茶の間に尻出して寐てゐるを、火吹竹にてかんじんの所を吹もかまはず、嗅が鼻の先をつまんでしらねば、総玉を盗取、兼てたくみし事なれば乘物に抑込、跡をば構はず迯たりけり、古市のならひに朝寐をすれば、あたりに戸の明たる家もなし、漸々四つ下りに嗅が目を覺し、そこらを見廻せば娘らがまたぐらへは、盗人がはいつたやら、道具の出し入をした跡の付たもしらず、こちらを見れば、爺が夜見せ出して店も仕廻ます、ころりとこけてゐやる、是に氣が付て、扨も不埒な事と、家内を起してあたまの數を見れば、南無三玉が見へぬは、さあさあ大事出來と、上下打返してせんさくすれ共しれず、扨は謀にのせられ、岩が淵へ取れたと、足拍子ふんで跡てからが、龍宮へ飛込れもせず、やう〳〵まけいしゆら王が扱に入て、龍宮よりかねを出し、山河靜に納りぬ、是いにしへ俵藤太の例と聞へし、それはつりがね是は金耳をそろへて、小判八拾八兩貳歩は、艶女一年の物成、一日を金一角にして、三百五十四粒の積り也、もろこしの龐居士は金を山に捨、玉は淵になぐべしといひし、其心に叶ひたりとて、聖人のために引し大盡、其比の人心、前代未聞のためしに評判して、あの龍宮こそ、仙臺といふ寶の山に、金銀のなる木があればこそなれ、かりにも凡夫のまねする事なかれと、惡性な息子への引き事にさへいわれしは時代時代、近年はかりそめにも、五百兩三百兩といふ金を出して引かいてさへ、さのみ珍敷事にも思はず、惣じて艶女を根引きにするも盗出すも、すこしのはりあひにて、其身に成て見ねばしれぬ事、しかし其内に誠のない大盡が、無益の殺生をなさるゝが多し、末の通らぬ事なされふより、只當座の花にして、いつわりと惡

白(ざれ)は、かいもくやめてもらひましたい、大きなつとめのさわりじやと、或あんにやがざんげばなし、せいもんで聞たに嘘はあるまいかとぞんずる、

○手くだの水に移たり浦田の月（粋が粋なはめる牢人すがた）なにごとも其道になれたるのみぞしたはしき、いかに色茶やなればとて、現銀に艶女買ふと呼つて歩行いてからが、こちに賣ふと呼込む家もあるまじ、なれ共馴たるにひかれては、燒もち茶屋にて遊ぶがあれば、連飛屋へはゐるもあり中之地藏へ通るがあれば、古市にとゞまるもあつて、心々の噪(さわ)ぎ、其身相應の遊山は、天もとがめ給はずとかや、されば古市と中の地藏の茶屋、同じ格な遊びにして各別な違ひ、古市は物毎大やうにて萬事こせらず、艶女のそだち尋常に、衣裳も時々のはやりゐしやう、仕出しまでが違ふて水際の立風俗、寐道具は表なればいふに及ばず、內のもてなし、料理膳分のきれいさ、菓子も並ぐわしは遣はず、氣を付てみれば、らうそく迄がふさいかと思はるる、中の地藏は第一産社が違ふて居るやら、世智過て、天窓から客にそろばんを入て、當座切に德損を見るもてなし、さりとは萬事こせつて氣の詰まる遊び、艶女達も心入には、情も器量もはりも有かしらねど、おのづからゐじけて見ゆるは天然の道理か、されば表具もふるびたるを構はず、袖つまなどにきわつきの見ゆるもうるさし、會席も板木で押たやうに、吸物にかさ食ひ、或はつむら屋の饂飩に、うけどゝろ一種で奉るが多し、かくいへば惡口に似たれど、みぢんも嘘は申さぬ、このごろも常明寺町の釜宿に腰かけて、松原の青物賣が、河崎の肴やに咄すを聞けば、此よふ馴た大きな西瓜は、古市で買つて仕廻ふ生駒でもちいさいが、中の地藏へは向くといひしは、商ひ功者なやつ、然れば未熟なが、中の地藏へは行事じやさいへば、のぼりへ通ふ大盡が聞て、拟も至らぬ心から、せばい事をさへづる、我人色里へ行ば、戀でこそ通ふた物なれ、箸柄の善惡をいふは、第一さもしいこんじやう、馳走するが悅に入るの、もてなしの惡いがおかしいのなどゝいふは、いかふ前方な事じやと、利口そふに打込ば、拟も延過た大盡、都と田舍程の違ひの有を脇へなして、さばけぬ粹立、鼻の先へ兩手を出して、そこへつぎしてくれと、いわぬ計りの延助、うたていた大盡が多し、したが一槪にいわれず、古市にて歷々な

家に、御茶引て居るがあれば、中の地藏には、どれどれも爪のたゝぬ程の客を取込て、七夕位の客へは、もふ座敷が御ざんせぬと、鼻でひん〳〵あしらふてやるも多し、然れば戀で遊ぶといふが尤か、何れ艶女達の內證に、うまひ所があるでがなあらふ、兎角色は分別の外也、迷ふ段に成ては、目のみへぬ物なれば、艶女の手くだに落し入られ、思ひの外成根引が有まい物にてもなし、森田屋の古今が全盛の時代は、息込に情をふくみ、はりに成ては歷々な大盡も、あたまからこなしかけ、酒あひの詰びらきには、名代の末社も爪くわへるゆへ、なんだのきんとはいへり、此君を手いけにしたるは、山田にて松の葉といふ大盡、宇治には浦田の作右衛門と替名したる大盡、兩方がもみ込で、互にはりがつのり、いづれ負け勝はつかね共、松の葉が引ぬくと云これざた、或夜床上りの草臥に、うつゝなき寐姿、おぎんが寐言に、あいたい〳〵といふが、大盡の耳に入て、扨も水くさい下心、是には逢手をいわする秘みつが有と、よぎの袖より顏を出し、誰に〳〵と問かくれば、團子の喰さしにと云、さもしさにあいそつかし、俄にいや氣に成て、首尾能く外の艶女に乘かへたい分別なれ共、取かはしたる七枚つぎの起請、此釘付をはなるゝ思案に枕を割らし、彼里の通ひをふつ〳〵止て、戀しさとせめくる文の返しさへせず、一二个月も程過て破れあみ笠に丸ごし、茶せん髮をそのまゝに、引さきがみのやつれ姿、暮をかんがへて森田屋にゆけば、一家おどろき是はまあ〳〵どふした御形、おどけもよいかげんにおかんせと、釜があいさつ花をもたせ、先おくへと伴ひ行しは、日比さばきのよきゆへ也、常にはなんだ辨慶の君も、一盃はまいつてしほ〳〵と座敷へ出、是は替つた御姿、なぜ打あけては下んせぬと、はや泣かゝるが曾根崎がかり、松の葉もいつ〳〵よりしつぽと酒事を濟し、それがほとびて身の上咄し、扨も人といふ物はしれぬもの、偕老同穴も緣がつきれど、今我が身の上にせまり、親の勘當をうけてかうした首尾、其に付て、そなたに賴たい事が有て來たが、何と聞てたもるまいか、おぎんしく〳〵涙をとゞめ、こりや又あらたな事、わしが心の奧のおく、臍の下迄を知つて居さんしてと、又泣かゝる道理々々、こりやおれがあやまつた、聞てたもれば我もまん足、そなたのためにもあしからぬ

事、御身を浦田大盡の方へ片付たいと思ふが、定てかういふたなら、さりとは聞へませぬ、あなたとは勤て逢ます、おまへとは勤をさつての誠で逢ますに、去とては情ない、たとへ死ぬると一所にといやるであらふが、中〻そこ所ではない、我は近日江戸へゆく心當り、五年居るであらふやら、十年で歸らふやら、先で死ふやらしれぬ、それに御身をうか〳〵と、そりやいかい殺生じや、此一通りを聞わけて、さあおふと云てたもれ、又爰で泣であらふ、それ〳〵又なきやる、泣所ではないと、この手柏といふ問かけに、艶女もほうど我を折、さつてもわしがいはふと思ふ事を、そちから皆いふてのけさんした、はあて此上はごふ成と致しませふ、是はさつそく忝ない、何事も我次第、是かう〳〵した手くだ、今にも浦田が見へ次第と、粋もの み込ぐめんごかし、三國一じやと、機嫌直しの酒盛がしゆんださい中、おさんさまかりませふ、いや〳〵天竺からかりに來ても、やることはならぬと、遠矢からうらごへば、浦田樣で御ざんす、そりや噓な、今の明暮涙を忘やるな、ぬかる事じや御ざんせぬと、常よりも衣裳をはんなりと出立、二階のはしごを氣疎上りて、座敷の位をもとらず、直に大盡の膝元に、しよんぼりとつくばい、ほろりと涙をこぼして押かくす風情、大盡は見とがめ不審そふな顏、おぎんはわざとさらぬ躰して、三味線おつ取ての一ふし、常よりは聲にひゞりがあつて、ごふやら仕廻のふるひ聲、大盡さほをしつかりと握り、是艶女三味線所ではない筈じやが、なぜふかふ隱しやる、さればおまへに逢まするも今宵かぎり、あすよりお顏をも見まいかと思へば、いとゞ涙がこぼれましてと、人目も耻ず取亂し、内〻おまへも御存の、松の葉に引かゝれ、あすは山田へ參る筈、浮世がまゝにならぬゆへ、思ふにわかれ思わぬにそふうき勤、いつその事御手に懸られ、ころして成と下んせと袂をひたす、明ばん涙とまらぬも斷り、是に咳て來ぬ大盡があらふか、有頂天迄のぼり助四郎、いかに汝ら、何とぞおぎんを此方へ、奪ふしあんは有まいか、然らば先亭主を召れ、松の葉大盡を素引いて見て、もらひがなれば珍重、ならぬ時は我〻が智惠袋の底をたゝき、何の苦もなふ奪取べしと、めつたむしやうに手をたゝけば、釜はあとれてあい〳〵と、梯子から落るやら、唐紙障子にだき付やら、燭臺をこがすや

ら、ぐわた〱とさわぎ立ば、そりや〱大事出來さ、爺が出て様子を聞、先御咳なされますな、かやうの事は有ならひ、もらいの咸まい物にもあらずさ、大座敷へはしるやら、二階座敷へ上るやら、彼是六ヶ敷詰びらき、首尾能く蒲田大盡のもらひに究り、松の葉がさしづにて、内へものつしりと頂戴、おぎんは直から家務様に備るけいやく、萬一不縁にてかへすになれば、暇金に百はいと、慥成る手形に七枚續の起請迄相添て、行末のかためは裏を返したる釘付、是松の葉が心より出て、正眞の懐ごかし、此町始つてくら事の序びらき也、今時の艶女は世智成心から、勤の内より見立て、かすがいと云起請を、ふたりの大盡へ一枚づつ握らせ、どちらにても一人は物にする仕かけ、是中むら屋のおふりといふ艶女が智惠より發りて、今も此二枚起請は、當ると云是ぞた、其外備前屋のお三木が、柴つなぎといふ手くだ、是は小栗殿が鬼鹿毛と云馬を、乘しづめ給ふ仕かけにてぐんにやりと成て、涎をながす手くだ、殊に金持の家慕程はよふ乘入らるると也、桑名屋のおはやがさんげ咄し、是も世上に人の喰ふ仕かけなれ共、こうじ〱ては跡先もなふつかみ出すが尤、はせ屋のおいさが二度の勤、下心の程をしらぬ者は、惡ふいわふかしらぬが、女の誠の誠といふは、この艶女はなれにくい塲を、よふも思ひ切たはじつから發つた心中、人しらぬ底心、ふかひ淺ひは汲で見て知たし、其上おさとゝ名を替へて、如在のない勤、皆かわひがつてやらんせ、とかく此上も止まい物は、戀の盜にやぼの鼻うた、

〇指櫛の折たがいたづらの始　仕合は女の好む甘草男

何國の色里にても、間夫をせかれて糺明に逢は、目あてゝ見られぬ責同前、今はない事かしらぬが、此里にても艶女が裸身を賽まのきにして、夏の夜を草叢に捨をき、或雪霜の夜丸はだかにて、裏の生垣にしばり、寒ざらしにするなど、聞も哀におそろしければ、すこしはこりそふな物なれど、猶戀しさのまさる物かは、間夫狂ひのやむと云事はなし、されば此兩町の内より、古今名代の艶女あまた出られし中に、密夫の浮名を四方にながせしは、山本屋の娘、名をおすてと呼し艶女、此町始まつての間夫の開山、いたづらの序びらき、嚊が現在の姪ながら、本の娘ともてなし、曾て遊女の風俗なく、智惠かしこくて器量よければ、嚊がた

めには麝香の臍、われ物にさわるやうに、夜るは女夫の中に寐させて、生身の懐子、され其根が白れた中にすめば、名ごや山三とかづらきが、ふかひ息込になづみ入、此道行をかたり覺へて折ふしの口吟、われもふかひ男があらばさ、座敷へ酒のあいに出ては、客の心の奥をさぐるいたづら女、爰に山田より此里へ通ふ若手の内に、三代男と名をよばれて、世の介がながれを汲み、晝夜色道の諸わけにはまり、色里の猫を見ても、汝は果報ものと撫でさする心から、銀ためるすべは すつきり祐成と、虎が息込を嬉しがる男、あたりほとりの小娘に、疵付ぬはひとりもなく、一度でこりず、二度でやまらず、三度迄牢人して歸參から、また色狂ひにそまれ、山本屋より棧敷とらせての芝居見物、其日は茶壷の四郎が頭取にて、蘭の桃といふ田舍客に、問屋の息子まじり、何れも浮氣に庇おろしたやうな寛濶者、なじみの若衆を棧敷へ取寄てのさわぎ、三代はかいもくの若衆嫌ひなれば、此あばれおかしからず、そゝつ氣をはなれて、彼娘とふたりしめやかに、實の酒事、互に打込だ程にこくうにのぼつて、誓紙かゝぬ計り、一座は三代が濟した顔が見にくい、さわぎかけて珠數きらせ、こちの宗旨へ引入よと、芝居からもくろみ、宿へ歸つての亂酒、天窓から大盃にて呑かけ、田舍大盡の押へられた盃を、三代へあいを賴、是非なく請兼て見ゆるを、彼娘つくぐ詠めて、あなたはあがらぬそふな、其上酒にいきついて、せつながらんす物を、いとしなげにおかんせ、是非しゐさんすなら、わしが爰はすけませふといふを、田舍大盡の盃を、すけたいとあるは替つたこじり、すけられた開て、いやこりや艶女がいな物ずき、身が賴んだあいら其上が、三盃とねぢかくれば、一座が口をそろへ、由女が其ひいきからは、三代は酒責と覺しめせともがるを、娘は中へ入て、はあて私がいひかゝりましたがゐんぐわ、各々の御相手にはわしか成ますと、請てある盃をあらためて、まんまと一座をわかやがせ、ねぢくさい大盡に一ぱいすゝらせて、一座が氣の付ぬ最中を見合、三代さまちよつと勝手迄かりましたいと、次の小座敷へ伴ひしは、人の氣の付ぬ事、三代は廿にひとつ餘りたる血氣盛、娘は十四の水揚人しらぬてんほの皮切に、たいまひのさし櫛がぽつきりと折れた音が仕廻、是より三代も心より發らぬ野郎買

と成て、あふ瀬を越ゆる手くだとなし、或はぞめきの紛れ小座敷でだき付、椽側でちよこり、庭の植込のいぶせきをいとはず、鴛鴦の契りは礙な事、十四十五の二とせを、物の見事にもみ込んで、人のしらぬが花なれど、どふやら手足へ實が入て、めつきりと油が乘て來れば、尻つきも目に懸りぶしやれ中間からの惡口も尤、内にもそろ〱氣を付、兎角世間の口にはあてどがないと、十五の暮に水揚の相談もおかし、されど世間はひろし、娘も位をもつためじやと、としま成御名代樣が水揚を請合、内へ卅盃むすめびろうとの仕着、もみの裏をふかせ、羽二三十盃娘へ抱への艶女三人へ加賀一疋づゝ、釜へ一ぱい、料理人へ二角、下する女へ一角づゝ山も見ずに見事なはづみ、まんまと物にはなつたが、翌日は舌皷が八百も出よふと、内はからの惡口、案のごとく、後朝の別れの不機嫌も尤、娘はそれにても構はず、三代が方への屆けの文、太皷の梶原が、木に餅のなるやうな、上手ごかしにおとし入られ、しと〱金をとられたる涎大盡、今宵水あげとのもやくや、我ながらおかしく、はらは抱へながら　さのみむごふも成がたく、あちまゝに身をまかせ候へば、あかしの浦にて人丸が歌あんじらるゝ顏つき、おかしき事は逢てかしくと、筆ばやにしたゝめ、ねむたがる駕籠の三五郎を無理に賴て、朝がけに山田へ遣はす發明さ、晝に成て、嗅がつのゝはへそふな顏をして、家内の者をおどしたり、すかしたりのせんさく、始は顏まつかにして、口の內でのぶつくさ、是には構はず、小飼のしなをゐぐりわるふ、腰もとへ引付てのせつかん、惡事千里をはしれば、三代が耳へも入て、とうわくはしながらも、智惠第一の舍利佛を賴み、其夜うさ見屋へ仕かけ、さわぎの紛に、椽がわへ出やねをつたふて山本屋の座敷をのぞけば、折ふし立まはす雨戶、もしやと咳ばらひするに、とがむる者はなけれど、娘が耳にはがてんして、是も椽がわに出て手水鉢をふまへての咳ばらひ、是々首尾はどうじや、さればわしは身から出たさびなれば、いか程うき目に逢ましても苦しう御ざんせぬが、とかくかわいはおしな、物をもゐたへずしめくゝり、わしが身の上の惡性を、つゝまずあかせとせめられます、それでもなんにもわしは存じませぬと、いわずに居るにこゝろ餘り、かわゆさに夕部もかくして赤福のあん燒をや

りました、中々内よりはあかさねど、外からうす〳〵しれて來て、おまへじやといふ事は嗅も大方推してゐる、はあて高が死ぬるよりこわい事は御ざんせぬ、あすから必御ざんせとおちついた返事、それより男もはりに成て、間夫と知れながらに、しやうも氣根に通へば、しやうも氣根に横をきかし、たゞは返事さぬ發明、天竺から唐へ渡りても此やうな憶な事はなし、され共内のあしらひに、不の字が付て、同じ銀つかひながら、嬉しからぬ遊びもおかしからず、娘もあてられ、ふり付られ、ふすべらるゝつらさ、とかくふたりが死ぬるに究て、或夜ひそかに忍び出、御衣が池へ身をなげにゆき、手に手を取組すほんとはまらんとせしが、待んせや此池は、上部樣の非ごと、底がつゞひて居るげな、もしもあらぬかたちが、あなたの非土へながれゆかば、恥の上の恥じや、御ざんすまいかと、娘が能い所へ氣を付れば、爰が大事のしあんばし、底のふかひ思ひ入が有まい物にもあらずと、其夜は心中をやめぶんにて歸りしは上分別、それよりうきをしのぎ、つらきをこらへ、終に八十七、盆の踊まぎれに、なんの苦もなふ盜出し、女夫があらわな世帶すがた、此一亂がそれ成けりには濟ず、親もとより已に訴に及んで、山田露顯の大もめ、され共二人が實あらわれ、理分に究ての女夫、是より摑出すはしと成て、めつたに盜むやらはしるやら、間夫狂ひも盛に成て、思はぬ艶女の身請、もとは二人のいたづらより發りて、兩町を騒がすと、憎む者があれば、いや〳〵此里始ての密夫の根元、手がら物じやと譽る、浮氣者も多し、しかし何事も時代々々、今兩町のあんにや、名もけいせいの名にまがへての至りなれば、追付夕ぎり高はし、よし野などゝいふあんにやが、出來そふにおもはるゝ、摑にかゝつて、あちらからつかまれ給ふな、末世の衆生、

美景蒔繪の松四之卷終

美景蒔繪の松五之巻

○艶女の內證は見ぬが佛知ぬが花（粹が見立て粹へいふ無心）

二六時中の鉦の調子は、越坂の寺町に限り、二上り三下の三味の聲は、古市の色町にてさゞむ、なれ共殊勝に御ざる、越坂の寺町でも香やが通つた跡は、生ぐさふて煩惱が發り、浮氣でまろめた、古市の色町でも、葬禮の通つた跡は、抹香くさふて無常が發る、なれば所にはよらぬ物にて、人の心は緣によつてうつり、又緣に依て替る、是を思へば、なんぼふかまな客であらふと、色里の艶女のじだらくな內證を見することとなかれ、すべて女の化粧部屋は、唐の楊貴妃の翠帳紅閨も、班女が閨の內でも、じだらくな所に替ることはなし、まして艶女達の相合の櫛道具べにとおしろいにまぶれたる手拭を、唾にてぬらし、おしろいのべたくたをとうぶんにならして、肩の廻りをぬりこべに光らせ、はげた所は鍋炭でちやかし、鏡ぶたにはすきぐしの垢をこそげたやら、髮の落の丸けたやら、煤はきにも、さうじはめされぬと見へて、天然と鼠色に成た壺打の楊枝、御はぐろのしみ付いたもとりませて、むさくろしい中にも、芥子人形の一つ二つこけてゐるは、憎ふない物、又常住の食時分きやしやな顏して食まいるを覗けば、いやそふに見ゆるも尤、惣じて女の集まる所は、內裏女郎も、傾國の君も、飮食に替る事なく、つまみ喰ひが面白そふな、此里にても家によつて、朝夕を盤にすわり、中居女に給仕させて、押付盛をまいるもあり、內のおばゝが杓子取して、白眼で居ての給仕、おのづから腹が一ぱいに成て、たらぬ勝なも有そふ也、釜と相はの惡ひ艶女は、杓子で意趣をはらされ、むね打くはさるゝよりは、つらいも有、殊に湯のこげも、うすひ所をのむ氣のどくさに、艶女は釜が機嫌を取るゝげな、なんと噓かと、或艶女をなぶれば、成ほどそふで御ざんす、其上釜が遣ひをせねば、第一買喰がならぬと打あけての返事、さりとはしらで面白し、殊にむかしに替り今の艶女達は、人しらぬ借銀があつて、勤の外に世話やかるれど、素い大盡は是をしらず、內へはのつしりと花をふらせ、釜へははづまるれど、艶女へ銀くれる氣の付かぬきのどくさ、艶女も無心いふ程の器量もなく、果は借銀と成て、勤

のねんが明ても禮奉公とやらいふて、勤らるゝが多し、すしな艶女は、内證によき傳を求、大盡へ打あけて打あけて拂ふてもらはるゝもあり、帶ふたの、油もとゆい、鼻紙迄、宿屋より出せば、外に借銀の出來ふ筈はなし、奢からゐような買喰をめさるゝかと、むくの家募助は思ふべけれど、中々内證を聞けば哀れに、尤もたばこ好は、梟服部を内證にて買懸り、床の烟となしてうきをしのぎ、たばこ入も、我が持料の外に客へ送るも多く、とらるゝも有りて、年中には繻子段子、金入のたばこ入、二百三百、汗手拭の、百二百は内ばに積ての入用、或は親兄弟の忌日に當れば、志の供養に、大蓮寺惣安寺へ布施も上げたく、奉加帳が廻れば、人並に寄進も入たし、嗅さまの姪子のよめ入、爺さまの甥子疱瘡、目ふさいでも居られねば、御所ぶんこ買ふやら、箱入の人形調べるやら、湯殿山の行人、お姥のくわんじん、月々の代待、何から何迄銀の入事斗りなれど、ない袖はふられず、大盡を質に入て、小判一兩に付て、二匁宛の高利足、是にても金本がありて、其艶女のぜんせいを見て相應の用に立る也、過し年の暮、うさみ屋にて、或大臣拂ひをなさるゝ折ふし、のんやほと云艶女が座敷へ出て、歷々の中にて彼大盡へむかひ、もうし大盡さま、わしに金を六兩二歩下されませと押付たる無心、成程やらふが何にしやることがあられ、内證の買懸が拂ひたふ御ざんすと、器用な返事して押いたゞき、さあ是で正月が御ざつたといひしは、さすが宇佐美屋の艶女じや、こいつは宿屋の嗅になして、世帶させて見たいと粹の目からにらんだに違はず、今戸羽屋の嗅と成ての世帶姿、艶女の時よりは三割半も能い、扨も美しいと後に唾を引もおかし、じたい鳥は林から、魚は水からにて、其住む所の風に移るならひ、此家の艶女におそめといへる稀ものありて、又なきぜんせい、道通る人も、すだれ越の目づかひにうつゝをぬかし、風俗に一流有て、しよていなしのだきまへ、見かゝりはすねた物なれど、取入てはよき事多く、座はい賑に床の內しめやかにして、逢人每に思ひを殘させ、別るゝより又逢までを、待兼させる上手なれば、何とぞ外の情をとゞめ、我手に入れんと念かける君、とくにも根引に成そふな物が、今に引かゝれぬはふしぎ、いか樣親方が若ひゆへ、宿の女房となして、追付嗅といわするはしれ

た事と、客の悪推も是沙汰も、今はよしなき夢と成て、惜しや一日も世帯するおかさま姿を見せずに、此里から葬禮せられしは口をしき次第、下地が好ゆへに、陰去火動にて果られたかと思へば、又さにてもない事は、或大盡と床の口舌に、おまへのいわんす事なれど、客様ごつと御氣に入ては、身が立ませぬと、しらな名言いわれしは、尤と思はれておかし、第一此大盡は山田にても指折に乗る銘物、くらがりから牛をひきいだすはまへかたな事、ぬるひといふてからは、唐人の若衆あがりを見るやうなふうぞくにて、髪に油を付た事がなければ、毛才六のぼんのくぼを、風が吹やうなあたま付、年中に一度も、歯を磨かねば、西瓜のさねを見るやうなぶ嗜、それに念が入て、御持道具の寸が延過、溝いたちの耳切た程成、すてん歴助、それゆへに替名を歴さまと名付て、色里にてのちやかし物、艶女達のいやがるも尤ぞかし、され共調法は、ゐんつう源山に蒔いて、扇の地紙に桐のとうの定紋が光り渡れば、嗅やていしゆは機嫌取て、歴様々々ともてはやせば、戸羽屋のそめを手に入るゝ望が叶ひ、一座がわつさりとうるほふ折ふし、座敷から艶女さまかりませふといふ使、おそめは聞かぬ顔して、中歴様、今の盃は御手もとを見ませなんだ、わしには無理に呑さんして、こりやごふで御ざんすと、ひつたりといき付た顔、つれの大盡是を見て、去迚はそめをしこなした、此耳のぴくはあゆかり物じやと、抜る程引けば尺八ほどな涎ながしてゐへゝ〱、其筈じや、どれちつといろふて見よと、懐から手を入るれば、扨も猿が小竹筒だかへたやうにして居る、是々立像の作佛、御ぐし計り拜ませますと、悪ざれの最中、ちつとの間ゐて參りませふと、艶女が座を立て行ば、どこしも多い事、潜蓮と云ふ太鼓坊主、跡から付て見れば、下座敷へ行ては、待て居る客はひつたりとだき付、こなさんはわしに逢ずに歸らふといわんすげな、なぜそんなら御ざんしたと、立ながらの溜息は、はや横を取らすと見へたり、いづれこふなふてはならぬ勤、歴ははや床へ入て、なんでも今宵は本もうをと、持筒のさやをはづしかけ、あたまから帶といて、丸裸にてふんぞり返り、夜着から首出して居る所へ、おそめは宵よりの衣裳より、一際すぐれて花やかに出立、帶も嵩よりしやんとしめ付、ふとん上につつくりと畏るを、

こりや艷女、床もあたゝめて待て居る、帶もといて遣ふとむく〳〵起て、手をかくるをふりはなし、なんで御ざんす、いかに賤しい私じやと云て、惣家ばし買んしたやうに、無躰に帶へ手を掛さんすはむごいと、是を口舌のたねに取て、たばこ盆引よせ、煙に味の品をつくし、輪を吹てゐて構はねば、歷は色々機嫌取て、さばけぬ輕口に言葉質をとられ、物の見ごとに寐付られ、別れにはまた、やかれて戻るが家暮のくせ、今度は善惡と思ふて、又ふられて歸り、後の夜は不首尾で戻り、つゞけて七つ迄ふつた程に、いかな狐でも退きそふなものじや、しつこふしみ付てはなれぬ生靈には、お染もほうとあぐみ、じたひは此大盡が病と成て、氣を煩ふて死んだには噓のない事、いかに男嫌ひをするといふて、死ぬる程いやなはよく〳〵の因果、是も疵のつかぬ心中死成べし、それにも氣の付かぬは歷がたらぬ心から、お染が別れをなげき、夜るはよもすがら反魂丹を燒て、煙の中になき人を待て共、丸藥の香ざばかりして面影もうつらず、せめては聲成と聞まほしさ、山田にての神子の上手、おとらと云ふ梓みこが、家に忍び行て、あゝ聖靈の向事、何ごとを口によつたやら、取亂してながれたと云是ざたもおかし、連衆も哀を弔ひ、大蓮寺にて出し合の一挺切、連衆の諷誦が十一通、何れも戶羽屋より申遣し、俄に佛だんを莊嚴しての念佛も殊勝也、定て此連衆の中には、おそめが横切た大盡もあらふが、內證でちやかした客も御ざらふ、太皷ごかしぐめんごかし、何れひとりもぬけ目は有まいと、和尙も此諷誦に、屈託してゐられますと、西裏の庵坊主が噺し、追付法談過に、わつさりと戶羽屋にての料理事、藏おろしの膳分、濡香の退きませぬが御馳走と、ていしゆが麻の上下で出ての口上、顏見せの初日を見るやうなと、一座が大わらひして果たせば、兎角死ぬるが果の世の中、

○芝居の名殘菖蒲かたびら　碇かついだ跡が喧嘩

世に物の時花出る事、あながち人の巧むわざにもあらず、唯自然の道理にして、その時の花にうつろふ人心、陰に落ては必ず空成所へ邪氣が移り、心にあらぬ死に趣く族多く、一とせ心中々々といひはやらせ、いな病ひに命を取られ、めつたやたらの情死、其心中の苗代は、大坂の蜆川、天滿屋のはつがなさけに、平野屋の手代が身を曾禰崎の森にはてしより、あそこも

爰も心中の書、天滿橋より登りぶねにて都にうつり、島原に落付、それより四條のかわら賀茂がわら、黑谷の墓原迄かけ廻り、後は伊せへぬけ參り、心中神のちよつと腰かけられたおかげに、古市にても山田屋のおるひと云艶女が、たびやの息子と哀れ成る情死、とかく心中とさへいへば、町も寺方も浦も山家も、打寄つてのそれ咄し、祭文をいふ山伏も、高き御山はあたごさん、むかふの二階は何屋ともと、早心中の道行に取ちがへ、普門品讀賞の願人坊主、妙法蓮花經迄はしゆせうにやると思へば、ふもんぼん箒からそしり出し、廿五歲の役のとしと、曾禰崎にうつす末の世、釋迦も我を折給ふべし、比は五月菖蒲の節句、けふを限の田舍芝居、賑も一しほにて、晴上る雨間のそよ〳〵とまだうそ寒き日和に、うさみ屋の釜がちくさのかたびら、裾には大きな碇のちらし、もうせんをかたにかけて、胸高な帶をだかへ行は、棧敷取に行と見へたり、爰に山田屋から芝居見物に行旅客と見て、色黑く鼻高く、一義に達者そふな男、召連れし太皷は、親舟のせんどう、けふとひ物ごし、芝居へ艶女をよこしやれと表からよばつて、たばこ盆さげて行袋と、道々のしやらつき彼田舍大盡、うさみ屋の柏がかたびらを見て、ほんにけふはしやうぶ帷子、爰へもひとり節句が見へた、扨も物ずきな拾いかり、是はぬしがないといふ判字物か、又は乘手がないと云事か、但しは客をつなぎとめて、よそへやらぬもやうかと、呼かけての惡口、女は跡を見返し、私が事で御ざんすか、そんな味なちらしじや御ざんせぬ、是は質にやつた時、流さぬため、碇を付けて置た物と、ちりも灰もつかぬ返事に、小桶ほどな口を明て、あたりに人はなきかと、ねめ付ての苦笑ひ、所へしゞら島の袷に、ふか編笠、帶にくわんぜよりのしきわ□□は、富士垢離に入た精進のしるし、丸腰の男が通り合せ、扨もかつがれたり、此碇はおもからふと、片頰で笑ふて過るを聞きとがめ、やいそこな二歲め、せつた直しのやうな形をひろいで、いらざるたわこと、こちが何をかついだときめ付れば、いや〳〵何もかつがれはせぬが、今の女が打込んだ所は、さすが名代の袋程有て、御家の一流およぶ物ではないといへば、なんじや打込んだとは、何をどこへ打込だ、扨もまんざらむくのつくつん、大きないかりをかついでも打込れても、それと知らぬや

ぼてんに、たれが相手にならふと、行過るを引とめ、なんじやこちをやぼてんと見る、おのれが粋顔がおかしい、我を何者じやと思ふ、戸羽に隠れも波切屋のていしゆ、女郎はあちから手へ入れて、もますしこなし、背に苔のはへてゐるこちを、至らぬ口からこなしかゝり、牛房ほどな尾を出すなと、自慢らしい顔にむつとして、扨は島浦の磯くさいわろが、常住走りがねや、伽やらふをしこなした風を持て出て、此町ではぐわひが違ひ、さや鳴がせふといへば、いや推參な山案子づら、さや鳴りがするか見よと、一腰に手をかくれば、そりやけんくわよとさはぐ所へ、おるひも跡より來りかゝり、あれ〱こちの客さんじや、むかふの相手は誰ぞと見れば、おるひが間夫おとこ、ありや唐木樣ではないかひと、いふよりはつとむねふさがり、やれ待んせ、あなたは五月精進で、丸ごしで居やんすお人へ、そり打んすが御手がらか、又おまへにも此月は、大事の月じやと知つてゐて、精進に入らんす物が、けんくわさんすがしんじつか、けがゞ有てよいかひの、浮氣で珠數もかけさんすかと、影に成ふたに成り、女ひとり世話やけば、戸羽の客是を見て、尤々おるひこちへよりや、きやつはしやうじんのねだんもの、ねちをかけて金どろふじや、やいそこなげぢげぢめ、ちと磯くさいこなしを見よ、おるひは根から引ぬいて、戸羽で咲花のありてながめ、つい明年はやうませ、御禮參りの三枚がた、駕籠をならべてどんどんと、大々神樂にさんせよ味噌つけ、打て見せふといへば、此男せいて來て、是はあらたなやつがある、いやその艶女を根引にか、おんでもない、今宵の内にわけを立、あすは戸羽への道行じや、こりやあんまりよかろわい、島はさかなが澤山也、磯部七郷の涙米、食は白ひをまいらふず、馳走はしられ、よいめにはあふて、しかも艶女が仕合は、鼻迄が大きいと當付けたるわるごう、おるひはじやり〱齒をかみて、あゝはづかしい世の中じや、人の心の奥も見ず、蹴人もける人じやが、おろす人もおろす人、たとへ此まゝ死ねばとて、なんの因果な島渡り、しやほんにおかしいと、尻目ににらむ間夫男、實を涙でしらするも尤、戸羽大盡是を聞、あの編笠にそやされて、死ると島へは行まいとや、よめた〱、扨は此頃にほわせた、山田の唐木がくされ木か、よしぢんにもせよ伽羅にもせよ、つ

らはぢかヽせ腹ゐんと、はた〳〵と取りつくを、おるひすがり、先待んせ、やれ迯さんせ、皆様しづめて下んせと世話をつけば、近所其外立合、どちぐじやにして仕廻ひけり、戸羽の客は上るり芝居、北側の三軒目にあがり、御簾を半まき上げて、また呑かくるむかひ酒、東西々々といふには、棧敷も下の賑ひも靜り、簾のはづれより、八丈島の詰袖もほのかに、笑ひ顔のしたるひ所、傍顔のすんとした所は、山田屋の君と諸見物が、目をやらぬ物もなし、淨瑠理は曾禰崎の觀音廻りが過て、ありや德さまではないかいなといふ所にて、おるひ芝居は見ずに、ひたもの下成る見物への目づかひ、此つけは誰であらふもしれず、爰に中正面の柱ぎはに、髮は茶せんに取あげ、編笠を圓座に、ひざがしらを盃臺にして、提重にある小梅の礫、思ふ圖へは當らずして、傍にゐる小坊主が仕合、ひろふて賞翫するもおかし、され共念力の小梅、棧敷を通して、彼男がひとつ請た盃の中へどんぶり、是に氣が付てねぢむいた顔は、互に見合た思ひ入、それより折々の目づかひに物をいわせ、互の思はくをしらせたるは人のしらぬ所、芝居はおはつが德兵衛を、沓ぬぎ迄忍ばせ、上り口に腰かけ居て、どこやらをいろわするうまい最中、諸見物はうつヽをぬかし、女中は顔を赤ふして、尻をいぢ〳〵半疊へずり付て、下のぬるヽもしらぬ折ふし、おるひは何となく棧敷を立て、用事とヽのへに出る風情、彼の男とくと見すまし、御免々々と人中を通り、棧敷の下に待合、互に鼻を付合せての咄しは、泣やら 口説やら わけも聞へず、さりとは棧敷のうつじんは、とろいせんさくと、脇からも邪魔入、心に小便瓶の風下に居れば、持溜を打まけらるヽに、鼻が宿替すると、惡口いふがあれば、人形の眞似を見よふより、生の曾禰崎を見やと云も構はず、おるひは涙をとゞめかね、先何からいわふやら、こなさんは富士詣でとやらなさるヽとて、文下んしたがぢやうかゑ、内にはわしとこなさんの、ふかひ中を引わけて、あの戸羽のうつそりが、女房じややら抱じややらさんと仕切て遣らるヽ由、わたしは氣が氣では御ざんせぬ、けふは死ふか、あすはなんとせふかと、とつおいつのしあん、此事がさだちてから、文はやられず便りはなし、けふ迄はしく〳〵泣て斗りゐましたと、人目もかまはぬうらみ泣、此男もとふわくの、顔はうろ〳〵

涙にて、さりとはさふとはしらず、我は便りのなきをうらみ、御身のしがを聞んため、芝居見がてらけふの首尾、此上は生くる共死る共、とかく御身の心底次第と、急な所の指切、おるひなく〳〵指を折、けふは六日七日八日はうつそりが歸るといへば、日あひもなし、是がやう〳〵にと耳に口よせ吹込ば、唐木はうなづき、成程々々こちの事はきづかいなく、身じまひをよきやうに、御藥師の日を忘りやるな、なんの八日を忘れませふ、さらばへさらばと堅めあひ、棧敷へ上りしは、おちついたゐきかた、半疊賣の三五郎が見て、あなたはたしか山田の町、本伊勢たび屋と云かんばんじやと、跡も先もなふいひしが、一日二日は夢と暮て、八日は常明寺の會式、たそがれ時の賑は參り、下向の引もちぎらす、唐木は夕月の入を待て、三留島の絹うらの袷、黑りうもんの帶に、村正の一腰をよこたへ、山田屋の表に立てば、おるひは中戸に打もたれ、人待女物やみのふれんの間より、ちらと見付、釜と相圖の客さばき、明日戸羽へ立んずれば、今宵一夜の泊り客、なんの座敷へ通らんと、定りの酒事も濟し、一角仙人の通力にて、内にも餘念夏の夜の、短いを知つて居れば、ぐわた〳〵と仕廻て、寐た跡はおるひと唐木が心次第、裏の枝折戸そつとぬけて、死に行身の思ひ出、手に手を取て二世三世、約束かたき御岩の奥、觀音堂のうしろの山にて、いさぎよく相果し、男は生年廿五歳、女は十九の役のとし、是も心中神の業成べし、此心中が苗代と成て、白刄に磨く心中くらべ、指折に乘る伊勢の色町、

○人崩れが緣に成松尾寺の開帳 しよてい姿は我がちのれり供養

心中には生出の麥を荒し、開帳には靑麥を刈捨る世界のついへ、是を思へば下りそうな米がさがらぬとて、めつたに米屋をしからふ筈はなし、此は寶永三つの春の尤豐（もつふくら）、松尾寺の觀音一七日開帳と、東は尾上山の入口より、小田の橋詰札の辻、筋向橋六地藏、宮川の渡り場迄高札を建廻はれば、こりや珍らしいはさいふ程こそあれ、其近邊は野も山も、商見世の繩ばり、片側は生木に持たせて、風流成る水茶屋をたつれば、葭簀に苦ふきの楊弓小屋、でんがく賣がすだれやね、櫻あめのからかさ、名物の太皷餅を始、おらんだのちやんばら練迄、門前に市をなしての賑、抑此松尾寺と申は、久志本靑蓮院の開基として、鹿海山につゝ

きたる、末の松山、古市の色里よりは、丑寅に當りて、さつさ三六十八町の岡道、靈現あらた成馬頭觀音と、音にはきけ共開帳は、今が始、何が觀音の御ざり所はよし地景は勝るゝ、時節は陽氣の最中なれば、茶屋の口鼻も艶女も、事哉笛による鹿の、海山珍しく、愛を晴と出立ての詣で、山田の町の内儀娘も、見られ自慢の衣裳くらべ、男の事も親の事も、打忘て我がちのしよていに、姿の山なしてのねり供養、いづれ廿五の菩薩といふてからが、外には有まじき御來迎、かゝる中にても上物はすくなし、表具がよければ彩色が惡るし、餘りはで過たも好女らしく、ぐすんだと思へば疱瘡があり、しほらしいと見れば口が廣しと、奉加場の役を勤ながらも、氣を付る色好は各別、此男は當寺松尾寺に籠居し給ふ、西國牢人豐前久保之進の小姓上り、源三といへる誰男也、此度開帳を幸に、戀を見立るが、ゐいやつとの爲言、かゝる折節、女とは見へて、若衆仕立の折かけしまだ、むらさきの帽子もはんなりと、笑顔に情をふくみ、ねずみちりめんに津輕ぼたんの白紋、腰より下は明ぼのに、うら菊のすそもやう、何屋の誰と知る人も、しらぬも跡へねぢ返り、目をやらぬ人もなし、此男もむらさきのぼうし姿にはとんとなづみ、何とぞいひよる品もやと、見れ共一座は物がたひ、坊主まじり、麻上下のきつとした、形ではそゝつて出られもせず、きよろ〳〵きよろつく折から、何が緣にならふもしれぬは人込の中、喧嘩よといふ人崩に、彼娘も友なし千鳥、あゝこわやなふと源三郎が袴のすそに取付けば、戀にはと屋ではやぶさにて、それ〳〵うしろは拔刀、あぶない事じやとおき上て、人なき幕のうしろへかくし、ちつ共きづかひなさるゝな、御供がなくば御宿迄、負てなり共送ります、かふ近付も淺からぬ、御緣といふて手を握れば、どなたかは存じませぬが、かたじけない御しんの程、しんじつかゐとしめ返す、手のうつくしさ和らかさ、ぞつとして來る七のづの、ちりげもと迄びり付て、先こなさんはどこの君、御名はととへば、わしかへわしはいわずと知れたもの、おまへの御名が聞ましたい、尤々あやまつた、私は此寺に所緣有て懸り居たまふ、豐前久保之進が家來、源三郎と云若黨、もとより牢人の摺切なれば、参宮のふし、色町を通るより外、一日も寺内を出る身ならねば、色をも香をも知る人も、も

たぬ田舍のやぼ天神、成程々々御咄しを聞けばしるべもあるわいな、わし事は多田屋のおつま、御主人の豐さまとは、さいつころ逢なれて、折々の御通ひ、ふかう隱して居やんすが、じつな顏して御ざるかへ、わしや豐さまよりかたさまに仕替てあふてもらひたいと、とんとだきつくあいぼれに、生肝もひつくり返り、さりとは旦那の逢るゝを、しらずに居るもおそきや、此上はまんざらの他人でもないから、御情次第ともたせぶり、わしや命でもしんじます、そんならちよつと盃の替りに、口をしめ切て、うまひ事をして仕廻へば、けんくわもはてゝ首尾もよく、嗅樣こゝにと打まじり、奉加湯への禮もおかし、されば主人久保之進、懸るわけとは夢にもしらず、此開帳のどさくさにて、夜るも賑ふ料理茶屋、ひじり行燈立ならべ、晝よりはなをこんみりと、酒事じややら千話じややら、戀の先立賑ひに、とほんとひとり寐ちや居られず、いつそお妻を取よせて、心能くたのしまんと、僕にあらましいひ付て、多田屋へやればさし合なく、成程今宵門前よりかごを返して御部屋は、しのびまいらせ候かしくの返事、かゝる折ふし、むさしの紋ぢやうちんをともし、國本よりの飛脚到來見れば角內、是はなんと、されば御國より伯父御樣の御參宮、今宵山田に御一宿に付、仰上るゝ義これあるよし、御迎に參上申との使、俄に持病も發されねば、いやといはれぬ首尾に成て、留主に源三ひとりを殘し、ふせうぶの御見舞、是が寸善尺魔の障り、源三は御部屋にたんだひとり、寐られぬまゝに繁卷が、女なまりの聲づかひ、せりふをまねて居たりしが、漸人音も靜り庫裡の時計も四つの比、女の聲にて部屋の戸をほつ／＼扣いて申々、源三ははつと驚き、扨はしれもの、たゞ一太刀にと身づくろひ、そろ／＼と近付しが、いや／＼とかく留守を遣ふも一しあん、誰じや こよひ旦那は御留主じやと云聲を聞とがめ、そふおつしやるは源樣ではないか、はあて化ものといふ物は、めいよな名迄をしつてゐると眉毛をぬらし、たれといへば、はて先戸を明さんせ、こわいわいなといふ聲は、どふやら聞た聲なれど、いや／＼めつたには明られぬ、はあて源樣お妻じやわいなあ、是は夢か なんの夢で御ざんせふ、わしが來るを知つて居て、待つてゐさんすそふな物、よふも立せて置んした、どうよくなも事による、

あのうそこきがと涙ぐむ、目もとなら口もとなら、こなたならなんのこわふて留守つかはふ、旦那は晝より古市の惡所へゆかれ、大酒でたわいがないといふて來る、部屋へ御床は取たれど、どふで今宵は歸られまじと、うたゝね枕をおこされて、こふしたしゆびも縁であらふ、縁共々觀音の御引合のふかきゐん、わしは過ぎし別れより、御事のみを思ひ寐に、とろ〳〵ねぶる此夕暮、夢のやうに御ざんした、此御寺の觀音樣、しゆせうなこわひ顏さんして、戀しき男に逢たくば、今宵主人の部屋へ來よと、正夢の告にまかせ、有がたひやらうれしいやら、內へは旦那の呼ばるゝと、首尾を合せて來た時雨、とうそにもうまひうそいふは、根がしんじつの心也、幸ひ床は取てあり、さあ寐やんせぬかといふた跡は、二人が汗をかいた計り、源三も今はほとび過、何とぞ御身を手に入て、死なばならくの底迄も、女夫に成るしあんはないか、そりや皆迄いわんすな、豐樣を手くだに落し、あなたとつれて退いたなら、しれた時は扱ひにて、金出さんすりや濟まする、其うへにてかたさまと、女夫に成は期しての事で、手短に埒明ふと、互にかためのせいしには、血をも惜ぬ指の腹、互に吸ふたり吸われたり、鷹殿留守の濡仕事、ほんのりと夜の明たに驚き、また逢迄の別れと立ながらのさらば口、はやわざの盃とは是成べし、舌はこれ禍の根也、久保之進は翌日山田より寺に歸り、伯父が異見も尤ながら、いかに牢人なればとて、惡所へゆかずに居らるゝ物か、あゝ氣がつきたと晝寐の床、とろり〳〵と寐入られしが、ふと目をさましかつばと起、惡所へ通ふ忍笠、刀はやめて大脇指、紙子羽織の肩打にて、粹は見てとる久保之進、御岩口より出たりしが、芝居の角にておつまを見付、扨は客にさそわれて、棧敷へ行と覺へたり、花なき宿へ行てから、面白い事もなしと、小松やから芝居をとらせ、ひとり行もおかしうない、棧敷の酒あひに、艶女をかしてくれまいか、成程御伽にしんじませふと、南側の六軒目、おきよおさつを花になしての酒事、多田屋のお妻はかく共しらず、五軒目に居たりしが、久保之進の聲を聞、隣よりさし覗き、くわつとあからむ顏の色、其儘西の棧敷へ來り、申豐さまお久しや、先は替らず御さかんで、濡に隙なき御身なれば、御とわせのなき

は尤ながら、さりとはつらやどうよくや、過し暮にはよふもよふわしをばうまふふつくつて、うつくしう返さんした、待がつらひか別れがういか、あわで歸るはどふ御ざんせふと、ないつくどいつさま〴〵かこてば、兩側の棧敷からは、艶女の聲して、ちとたしなまんせ、爰は棧敷じやといふもおかし、久保之進は、尤の涙にくれて返じもなく、互に涙の枝折とは此事、しばし有て久保之進、成程うらみは尤ながら、浮氣でなしたる事ではない、是かう〳〵のしゆび成はと、耳に口よせ吹込給へば、お妻おどろきけふさめ顏、はあてそふした事ならば、是かう〳〵さしやんせと吹込だは、一座もしらぬ事、それより後はみつ〳〵にて、何事といふわけも聞へず、かくて芝居も果て、お妻は内へ歸りても、うき〳〵とした顏もせず、しばし有て嚊へ近付、けふ芝居にて豊さまにあひましたが、どうやらがてんのゆかぬ御顏、今に爰へ御ざんせふが、わしや逢事はいやで御ざんす、かならず合せてくだんすなと、しみ〴〵と語る所へ、それ〳〵豊樣の御出じやとさはぐ、嚊は立出、よふ御出なされました、奥へ御通りなされませ、それ御腰の物あづかりやといへば、はあて是はあたらしい、きづかいならば預れと、脇指を拔て渡し、ちよつとお妻に合せてくれ、されば妻樣は旅客とつれ立て、餘所へ遊びにゆかんして、只今は御留守で御ざんす、成程それも呑込だが、きづかひならば家内が出て、まん中にお妻を置、盃させてくれまいか、逢ずに歸るもほいないひと、賴まんすは御客樣、いやがらんすは艶女樣、嚊はなんとせふやらと、勝手へ入ての談合、しばし有て嚊はお妻をつれて出れば、傍へは釜が畏て、飛車角のならんだやうに、お妻をかこひ押へには、横へすふわりとした艶女、酒のしやく取る小美女迄が、居合腰に構へ、さりとは氣の詰る盃、酒も半に大盞、なんとお妻、久しう鼓を聞ぬが、御身鼓をうちやるまいか、舞を一番舞ふとあれば、よふ御ざりませふ、二階な鼓取ておじや、序に扇もかりたい、畏りましたと、釜は取て來り、兩方へ渡せば、お妻は鼓の調子を取、大臣はつゝと立て、江口を一番舞おさめ、扨も久しう聞ぬ間に、鼓をいかふ仕上たと、大盞輿に乘じ給ひ、嚊さらばよふなぐさめてたもつた、おつままめに勤めやと立せ給へば、さりとは最少し御遊びなされませと、そこ〳〵成造り留、お

妻はほつと息をつき、扨もこはやと云ふ所へ、そりや又歸らんしたといふ聲に、お妻は奥へ迯て入る、大諸は立歸り、腰の物を忘れてゆく、ほんに御失念申ました、侍のあらふ事か、さたなしに賴むぞや、なんのおまへ御大名でも有ならひと、渡しての跡は大笑ひ、久保之進は兼て相圖の事なれば、すぐに御岩のくわんをんに行、坂より下を見おろして、いかゞと待て居る所へ、お妻はひどんすの䌫衣裳をかつぎ、あられぬ姿して跡より追付、扨も嬉しや首尾はよし、さあはよふ落さんせ、成程是より裏道なれば、さして人もしるまいが、御身は內をどうして出た、追手のかゝる首尾ならば、しばらく山に身をかくし、夜に入て立退まいか、されぱおまへの戻らんしたに、驚く顏しておくへ迯、部やの上よりうらへぬけ、此衣かづひて出ましたれば、あれはなんじやといふも有、替つた姿な物が行と、いふた計りでわしじやとは、誰も氣のつく人もなし、是此衣裳は、おまへから下んした緋段子じやが、ほんになお思へばむかし楊貴妃以來と、手に取んとし給へば、ちり〳〵と縮りて、ひぢりめんの二幅と成、こくうはるかに吹行もふしぎ、久保之進心をしづめ、そのまゝ女を取ておさへ、おのれ侍を見損じにか、正躰あらはせと、心もとを二刀さすと思へば、夢さめて、うたゝ寐枕の晝寐の床、はつと驚きあたりを見れば、拔刀に血つたひ、遍身汗を流したり、扨は夢か、よし夢にもせよ、是迄と、血刀を取直し、妻手に突立うんと云かけ聲、源三おどろきかけ付、先御刀をもぎ取、樣子を尋奉れば、夢の始終をあらまし語り、死なねば武士の道たゝず、介惜を致せとある、源三暫く思案して、是には子細も候へば、はやまつて御自害急がせ給ふ事ならずと、寺中騷動する所へ、色町の使重り、酢の蒟蒻のと云折ふし、源二郎部屋に入、身ごしらへして使に逢ひ、主人夢中の妄想ながら、尤逢手が死たる上は、論ふに所なし、併此義、主人の巧たる事にあらず、實はお妻と菜、非道の戀暮より事發り、耻しながら自業自得果、證據は是にと、女が起請を取出し、連座の中へ抛出し、菜相手に成る上は、主人には御搆ひあらじと、おし肌ぬけば一座おどろき、腰の物をうばひ取、いや〳〵御さわぎなさるゝな、最早覺悟は此通りと、肌に卷たる腹帶とけば、臓腑さつと捌出、うんと計りに息絕たり、是より雙方おんびんの沙

汰と成、それなりけりのさたなし心中、あたら命の咎は、不義より發るといへ共、根元は此里にて戀に朽たる男女の執心、此緋ちりめんの內衣にしづみつき、時として緣にふれ、かゝる業をなしぬるもふしぎ、されば彼內衣の、ふけゆく折から、柏屋のおはつといふ艶女が見付、あれあれ赤ひ雲が、楠邊の方へ飛んでゆく、扨もふしぎと氣踈ふいへども、傍に居るものゝ目には見へず、口でもあれが見へぬかといひしが、果して楠邊のない大臣、米といふ男と、田ばたの地藏にての心中もふしぎ、傳へ聞むかしの仙人ははぎの白きを見て通を失ひ、古市の色町にては、きやふの赤きを見て命をうしなふ、是も所の繁昌につれて、京を眞似る至り心より、かく口吟にも、あいの山の色茶屋、

美景蒔繪の松五之巻終

附錄

古市色茶屋名よせ

宇佐美や五郎左衛門

娘おもん、同おかん、同おそめ、艶女おかち、同おむめ

山本屋三郎右衛門

娘おきよ、艶女おつま

中野や金右衛門

娘おりつ、同おへん、艶女おつな、同おぬい

上むらや與平次

娘おつや、同しめ、艶女おふさ、同おたま

かごや佐兵衛

艶女おてふ、同おとよ

朝熊や文四郎

艶女おげん、同おふり

戸羽や門四郎

娘小けん、同おちか、艶女おそめ、同おしろ

備前や小三郎

娘お三木、同おげん、艶女おさい、同お霜

玉のや

娘おさよ、艶女おいさ、同おまき　駿河や武左衛門
娘おしも、同おしけ、艶女おしめ、同おしも　やうだや四郎兵衛
娘おつね、同おさよ、艶女おぬい、同おぎん　山もとや甚内
娘おみつ、艶女お市、同おさん　山口や久五郎
娘おきん、艶女おはや、同おかる　かしわや彦左衛門
娘おひさ、同おつま、艶女おとよ　口はいの藤右衛門
娘もしほ、艶女おせん　藤屋市右衛門
娘おさの、艶女おつけ　京屋作左衛門
娘お市、艶女おせき　川口屋嘉七
娘おとよ、艶女おむめ、同おむら　松屋所次兵衛

娘お妻、艶女おせき、同おみよ　菊や平六
艶女おぬい、同おさよ　松坂や四平
艶女おしほ、同小しま　扇や庄右衛門
艶女おきく、同おはつ　布袋や善兵衛
艶女おかる、　千切や長十郎
艶女おさき、同おそめ

寒風色茶屋名よせ

娘おみほ、同おかつ、同おいさ　桑名や清左衛門
艶女おまん、同おきさ　湊屋兵三郎
娘おまつ、同おさと、艶女おふち、同おきん　野むらや傳左衛門

ゐんきよ

娘お市、同お八、艶女お三木、同おやつ
中村や林兵衛

艶女おふり、同おすか
はせや加右衛門

娘おさと、同おさよ、艶女おつや、同おさわ
龜屋加左衛門

艶女おゆり、同おしげ
山田屋次郎兵衛

娘小かん、同おけん、艶女おそめ、同おるひ
杉もとや彦左衛門

娘おとよ、艶女おまつ、同おてふ
くわなや源兵衛

娘おふさ、同おてふ、艶女おしゆん、同おきん
口のてや喜右衛門

艶女おとこ、同おきさ
並木や八平

艶女こせん
龜田や彌三郎

艶女およし
江戸や七左衛門

艶女おしげ

中之地藏色茶屋名よせ

多田や伊左衛門

娘お霜、同おとよ、同おたま、艶女おふさ、同お
しま、同おつま
泉や市郎右衛門

娘おみね、同おひさ、艶女おさよ、同小さよ
きの國や安右衛門

娘おてふ、同おらく、艶女おしめ、同おふじ
平野や清兵衛

娘おでん、同おそね、艶女おさわ、同おたか
森田屋善兵衛

娘おろく、同小ざらし、同いくよ、艶女おとよ、
同小ぎん、同小さん
さゝや喜兵衛

娘おそめ、同小はつ、艶女おきさ、同おちよ
藤田や忠左衛門

娘おかん、同お市、艶女およし、同おてふ
河崎や作左衛門

娘おみや、同おそめ、艶女おきさ、同おしげ
美野や清左衛門

艶女おろく、同おしち
大文字や平左衛門

艶女おしげ
柏や安左衛門

娘おはつ、艶女おかつ、同おげん
小松や金右衛門

娘おさつ、同おてふ、艶女おきよ、同おさよ
川崎や利兵衛

娘おきよ、同おさき、艶女おかん、同こせき
錢や庄右衛門

娘おふり
九屋又右衛門

艶女□□□
西川屋多次右衛門

艶女おくめ、同喜代かつ
大和や杢左衛門

艶女おひさ、同おとめ
住吉や七郎兵衛

艶女おきん、同おはや
松本や彌五兵衛

娘小げん、艶女おてふ、同小てふ
まつらや三五太夫

艶女おさつ、同おくに
井筒や八兵衛

娘おてふ、同大くら
ひたや長十郎

艶女おはな、同おそめ

古市色茶屋廿四軒
寒風色茶屋十四軒
中之地藏茶屋廿四軒
合六十軒

寶永五戊子
晩春吉辰

京寺町
菊屋七郎兵衛
伊勢山田

風俗傾性野群談

（序）四季色の山

花飛蝶驚ども人愁ず、水殿雲樓春をおくけう日、粧ひをなす千人の傾城、好色粋中間の色をまじへ、土も留伽羅の梅が香の天職太夫、そこしへに花を見せたる色町や、いま此時にあふみの國、當世樣の色仕出し、むかし男のなり平の、孫が彦根のはへぬき大臣、戀あり色あり、金銀は澤山と名によばれ、君によばれて玉しゐは、うつゝしやうねも切もぐさ、ゑやはいぶきをたゞひとり、わけまよひ行戀の山、猶おくふかく行所に、ふしぎや日比有とも見へざりし、四方明りの小座鋪に、色に糅し紙子仙人、輪袈裟かけたる若僧相手に碁盤をすへ、花さき若紫、かもん萬菊林彌が通ふ共、目はやらましの碁の勝負、枯木の枝に長わきざし、おとがいもたせ見とるゝ我もろともに、助言に罪を作りつゝ、澤山なふ〳〵仙人物申さふ、町屋をはなれて碁盤をすてず、野傾酒の三つに仕あげて碁の勝負、色めく事も候か、仙人碁盤と見ればごばんにて、碁石と見るはこいしなり、廓のたてよこ野郎町、惡所をもつて碁盤とす、常上の三味線こゝにあり、都の四條も、島原一廓のやす傾城まで、爰より見るになぜ見えまい、碁石は三百六十日一もくもおさぬ日ぞなきながれの身、フウおしやつたり、天地一つたいのたのしみにふたりむかふは何事ぞ、ハテ陰陽ふたつあらざれば、曉にも床入する事なし、ホウ少女はいかに、ハテ傾城の種は禿にあらざるや、ヲゝいきぢのさけ、うけておさへてあひをして、與屋は花のみだれごや、飛行駕籠かき、むかひのやりてにたとへしも、素人玄人に夜晝もわかでありくに緒太の雪踏、おのづからにや切れぬべし、仙人かさねて、アレ〳〵追付江戸より和東内といふ大盡來つて、島原でつかふときゝ、只今掃除のまつ最中、傾城町や野郎町目前に見すべしと、のたまふ聲も色風に、やりての聲ぞひゞきける、澤山はつとおどろきげに〳〵爰は彦根より、朝夕見たる伊吹山、見わたす方は都の西、柳櫻の植込に、錦着ならぶくるわあり、のどかにくらす紋日のかげ、月中眞ておいたるは、江戸といふ太氣をあらはし、和東内に買はれじまんのお傾城、いはれぞそれと闇敷、鐵橋釜鉾、やり

ては大肌脱で、大壷(たいこ)らよつて亂拍子、鳥の胴空捨るさも、ほりす方なき料理の間、實春めきてのどかなり、夏は都のすゞみこそ、四條五條は加茂川のながれにさける花あやめ、ひたいに匂ふ舞臺子の、まゆは八字の弓張や、月見の舟はなには江の、姿の花の新町に、銀燭秋光舉屋の數、二十五軒は夜月にたんず、鴈の便に武藏野の、あれよし原の雪のあけぼの、せつなに四季の有樣に、此腕指もくちぬべし、粋になれ〳〵春がすみ、晴ゆくかたはおもしろや、太夫の道中、

享保二 酉の春　八文字 自笑

風俗 傾性野群談目錄

(三)月かげは當世顏の丸山
唐音のあいの山、のぼり詰たる和國の風流
追風のかほちや、うまく一盃杓杷子圓

三之卷
(一)色遊の一時は千兩の金にやうく
其名は廓に高尾の紅葉、根引にするや江戸鬼灯
紅白の下紐ほどく所が、たがひの心中床の誠

(二)飛行の魂は日本傾國
藪醫者も思ひのたけを問藥、あふも不思議あはぬもふしぎ
うらなひはうその山ぶし、鈴錫杖はしやぐはんく

(三)浪人の浮舟流にとゞまる吉原
春の野のふせ芝、花はさかりのふり袖
太鼓がたくみは大佛、むれの内こそ工面もの

四之卷
(一)神はちはや古市よい中の地藏顏
野傾の二ばしら金つかいを、大じんと云は天照かうもあらふ
僞と誠は柄付の鏡にあらはす、くもりのない若衆の心底

(二)木辻の門立女郎の揚錢は南部鳴川
しゆ行者の黒羽二重、そのふにかくれぬ紅の二布
雪をつゝむ川竹の、とらやあく

(三)片思ひは今道成寺銀のない撞木町
花清宮もおよばぬ、城南の廓に女郎の氣病
引込んで居るくつわの内を、出替りにおきまどはせる下男

五之卷
(一)大名の御意は金鐵よりおもくしい大夫風
川御座のけつかうは、引舟いらず算用帳
義理と情につ引させぬ、太鼓の手拍子打込だ大寄

(二)欲にはなるゝ漁は是日本風
鹽風にもまれてお色の、くろい若衆あんばいのよいはまぐりの吸物に小づけ、神は正直のかうべに顯す紫ぼうし

(三)金銀を蒔ちらすはお江戸風
難波九軒山新町寺、好色一切の施行場
間夫男には合力望次第、若衆好には金銀を野郎々々

目錄終

風俗 傾城野群談卷之一

(一)父は唐土といふ太夫職の子種

廓の大門口が極樂の東門にあたると、祭文の半六といふ太鼓がいひけるが、彼岸初午御影供の大紋日は、諸人一入參詣の此信心さ、我も內の山の神にあぐみて、色道の二の替り、傾城事に宗旨かへて、颯破璃と雨のあがりの月に村雲、花に風のけからにあはず、色里の口切、佐野の渡りにあらで殘りし雪の夕ぐれ、さしかけ笠の下道、右八文字のうけあゆみの出かけすがた、咲そろふた菊合にひとしき花を、すきにまかせてみどりにする氣散じ、これや男の生れた德のかたじけなさ、母じや人の帶の下を日にいく度もおがむべき事ぞや、國の名も打とけて近江と聞さへたのもしいに、穴村といふ在所に金糞の五三平、むすこの五四郎めがあたやかましゐ六十六部とやらを宿かして、代官殿をちよらかすために、こしらへた座敷をふさげて、油火をつゐやすと、よいかげんな年でつぶやくに、むすこは無常迅速の世界と、ごふ古い了簡付て、與四郎折敷もあたらしいが馳走と、干蕪秋田蕨も麹味噌こつちりと、緣にふれゝば唐の芋と、ずいきの淚こぼしてしん〴〵がほ、若いがきごくにのゝ字がおちてきのごくは、今から佛法がましう氣がめいりては、やがてらうがいしたぢと、物になれた人がいひしも尤、修行者は月影さやけきを見て、千金にもかへぬ此宵を、只ひとりねたら、あたら目がぐちにならふ、といふてあほうが男待やうに起てもゐられまいと寢ごしらへするに、五四郎は惣じておの〳〵がたは宿々にて笈の御本尊に燈明とぼいてしゆせうなつとめ、聽聞今やと待てゐますといへば、何つとめをせいとや、我等が本尊は灯明はきらひで、くらがりの粹もすい、つとめもあしかけ五年の春夏に秋まいらせて、身請の大臣と、今此男に身をまかせけるが、おしまぬはながらへ、おしめ共とゞめぬ命、去年の春風に花とつれてちられました、五四郎淚をこぼし、しかればその菩提のため諸國修行がおいとしや、いや〳〵さやうなぐちな事でない、下拙元來江戶の者、十露盤しらず分銅みず、春は上野の櫻狩、淺草金龍山の花にゑひ、秋は深川隈田川の月にねず、目黑金杉芝の遊山を駿河臺の下屋敷に、晝の夢見て二挺立の小舟を三

谷にとばせ、分里の色酒に游ぎ、花清宮の畚をなせ共、おなじ所に同じ顔、松島象潟の風景も三度とはおもしろからず、諸國の分里命かぎりと思ひたちて、傾國六十六部粋な女郎にめぐりあひ、うはきの有たけ大に盡すといへば、五四郎けふもおすもさめ、はれやれさほどなまぐさい人としらいで、親仁に呵られまはつて宿かした、そんな人に一夜はさてをき片時もならぬ、はやう出てお行やれと、さん〳〵機嫌そこね、とがもない猫の膝へ來るまで、とつてなげ腰ぬかしけるが、人くらひ馬にも相口指て、おやぢは地下の寄合より歸られしが、まいら戸に立聞して、傾城の噂このもしく、そろ〳〵にじり出、さい前の詞とは打てかへて、碁盤もあちへなをせ、いかに旅のお人じやさて、此菓子盆見ぐるしいと、むすこをしかる聲は高蒔繪のたばこ盆銀のきせる、濱千鳥といふ名酒を瑠璃硝子の銚子盃、女郎買は目はづかし、是も他生の遠州行燈蠟燭にしかへさせ、こりや五四郎、いくつになつても躾をしらぬ、お宿申もふかい御緣、むすびの神の御内證に叶ふたといふもの、やれ孫作が伊勢講に、鮫のくはぬ咒四十八願記がはじまつた、はやうゆけとむすこをまへも惡性の種ぞかし、跡では大きな酒に成て、五三平は酬鍋の銚子高にとりのぼし、拙者も六條參りとうそつゐて、やばせをわたる柴屋町に、若い時のゆかり有もへぐゐに火のつきあいもなく、ひとりたのしみ我世に我物つかひながら、人にかくして替小袖の中宿有、いざ〳〵伴ひ申さん、昔殿のさかやき目にたつほどにはなけれ共、旅路に顔の色さへうとくなる、それ〳〵髮ゆいすべ、行水の洗粉のとそゝり出す、江戸者かぶり打ふつて、都ちかくにござつて、身上も誰しらかべ作り、藏ぐらの鑰の穴から天をのぞくちいさゐ御心、ま一足で島原のあるに、柴屋町とは出がしよしんな、惣じて色づかをにぎるもの、男は髮かたち何の役にたゝぬ事に、女のくさつたやうに二つ鏡、鬢質を西屋敷のざうり取がやうに、鬠奈良樽ほどまきたて、曲めにあぶない釘打て、さま〴〵の物ごのみ、紅のかくしうらを見せ顔に、衣裳小道具に無用の物入して見せるは、女郎におもひつかるゝ斗のたくみ、下心のはづかしい事ならずや、女郎買活計第一の骨髓といふは、大座敷の大臣柱に、ゆう〳〵くわん〳〵と打もたれ、みちのく山にはあらねど、こが

ねの花をさかせ、銀燭夜の錦とかゞやかし、大名の火にくばつたる伽羅の香にむしあげられてこそ、此道の大慶といへ、まづ高で女郎にほれられたいといふ事、是雪隱藝といふて、錢なしの小間物賣か、針立などのたのしむ事、大臣せまじき事、尤傾城も色ある男にはあすの命もおしまず、うは氣第一戀のふかい事、地女にまされる物なれど、それはやくはんぼれといふ物にて、さめやすい事すいふろのごとし、とかく女郎買の軍法は、親の金藏を自由にして、金銀の丈夫なるをかんもんとさへすれば、戀も色も情も心中も、是にかたづきたるは、かしまの神の金石うごく事はない物、その外士農工商も氣の廣きとせばきとで、おなじほねおりながらばくたいのちがい有べけれど、それはしらず我等はたゞ、傾城一通りの分知りと打笑へば、五三平明た口をふさぎもせず、ぶをん〳〵あなかしこ、下拙今年四十五に成て、傾城一道の奥儀をしらず、貯へ置し金銀愚癡な藏にきうくつな目をさせ、色けを見せぬ殘念、我ながらかねの手前も面目なし、誤て改るにはゞかる事なければ、今から心を入替、そこもとのおしへをうけて、色道の師匠に賴上る、弟子入の祝義と大形五百兩指出せば、江戸者打笑ひ、笈の中より一歩小判打あけて、手まへの金さへおもたうて苦になるに、いやゝの〳〵、

（二）母は日本にもない女護の島原育

歌よむ人のうれしがるは、浦のとまやの秋の夕ぐれ、あるひは鴫たつ澤などゝ、いひのべたる心ばへは、唐天竺にもない風景とおもはれたであらふに、かなしいかなやその時分にはなかつた事か、此島原の夕氣色を一見させたら、いかな歌人も古今集の卷頭にのせらるべきものを、二階の高欄に腰打かけ、そなたの空とみかへるうしろ姿、夕ぐれなゐの二布の内まで、神は見通し東に祇園清水、大佛の釋迦も木で作つた身でなくば、通り道の町はゞをこぼたせて、出かけたふおぼしめさん、殊更此さとの名も花ばなしき、三五奥州花さきがおもかげ、見るにまばゆき夕日に、西は法輪嵯峨の御寺、まはればまはる盃に、松尾の明神も手作の一樽さげてお見舞申たからふ、けふの御客は月鉾の町に有明といふ日の出の大臣、ふたりのつれは浪人がましく、大皷とも見へず不斷はなさず、勘當箱につばさを付飛來りて爰に居ながれ末社はさくよ

り伺公なんど〳〵、たのしみのきゆをひらくといふ所が、高で金なら六七兩の地みちな遊び、世間の見立の身上では、五年や七年でたじろくべき共おもはねば、あげやもたのもしう思ふて、心一ばいの馳走尤な儀、奥座敷に江州五三平江戸者同道して、しら酒のみて居しが、名取の太皷共初ての大臣様、あつぱれゆゝしゐ太夫さまをつかんで來ふさ、天狗の彌八かけ出るを、こりや〳〵しづめてせい、身どもは江戸石町の和東内といふ者、此里けふがはじめ、ない圖な事を樂しむ男、昔豐臣公くはん樂のあまりに、女のあぢはひと米の飯とを、下々にたのしまするがおしいと仰られしが、てうど其ごとく、あいざしきにはあの名とりの太夫達、都は色のつかさ、はしたがねつかふもの共の手に入るは、いかにしても本意なし、身どもが物好には、あはれあちゝの花をこちの座敷へ、刹那に取込方便はないか、こりやそこらに武藏野の大氣千兩いつてもとらやあ〳〵ほまれある末社ならば、智惠をふるうて女郎をこちのものにしてみせぬか、則是成は柴將軍と云大盡、ちと口過しておいたぞ分別してみよ、つゐなる事じやにがてんがゆかぬか、都の太皷ほどにもないちゑがまへかたな、それでも見事口過するかとせりかくれば、近年小判にとぼしゐ末社共、是さへしおゝすれば手織島の夜着蒲團を川口屋の籠舍ゆるさせて、女房子共に夜のめもとつけりとねさすべし、かた腕おとされてなりとも金銀にかゆる事とおもへど、伯母に化べき方便もなく、金銀のつなにもはづれやせん、おもへばあちらも今迄の女郎をのいて、あいにくゐ所をやう〳〵こよひ手に入、たのしみのまつ最中、太夫の顔をしろ〳〵と目をはなさず、追付床入してといきほひ鼻にあらはれゐる所、たいていでもらふなんどゝはおよびなし、何としてこちの物にならふぞと、三人の末社ども、目安の返答を談合するよりも顔しかめける、通辭の孫右衛門といふ思案者、分別袋の口明から終る迄、二人が耳に鼻つき付てさゝやけば、おつと萬事をのみこみじまん、から尻の半立は大臣様のお伽申せ、兩八は出口の茶やにて、しかくしまつを、物の見事に夢の間に埓明ると飛出る、となり座敷はいせ海老の忠兵衛、おがくずの喜右衛門は大盡、有明のひざもとに月更る迄提り、おさだまりの一歩の花をとりはづすまい、もしむかふに失

念有ても、取にやられぬ商賣なれば、愛を大事のもんさくの片手にも、たれときをつけ芸ごもが一角備人の眞似は、一歩じまんじやの、さみせんは三ツづゝがよいのと、盃のまはる度を待居けるが、にはかにそゝくさと勝手や次の間へ立たりゐたりして、一座しまぬ所へ、大盡の手代あはたゞしく參りて、只今通辭の孫右衛門とやら申者內かたへまいり、私に島原口の中宿、こなたの若旦那私娘にお子をはらませ、おろし藥をもつて一昨夜相果ました、私も一人のかゝり子にはなれ難義に及とてかさ高に申に、親旦那は跡よりせんぎをとげてやらふと仰らるれば、是非只今埒明よと惡口だらく\申うへに、手むかひいたし旦那をいさめ申に、早々おかへりと申せば、有明けうさめ、はてさて孫右衛門めは金貳兩二歩迄にあつかはせて、明日は渡す筈なるに、むすめをしんだとはきけど、宮川町に陰間人をしておるげな、それはともあれおやぢ様へりよぐはいのみか、手ざしゝおるはたゞ事ではあるまい、それはやかごいひ付よと飛出るを、おなじ相圖の太鼓ら左右にすがり、扨々おせうしさまや、お座敷も濕慕理とあそびに油ののつた所を、し

かれ共おやご様のあやまち何ぶんにもお氣づかひ、お歸りなされませいではならぬ所、こよひ大分のお物入は、おく座敷に田舍客見ゆれば、かれらにこつぼりとぬり付、旦那に一厘も出さしますまい、それが日比おめくださるゝ我等が忠義じや、但しそのまゝ買分にしてお歸りの跡で、じゆうにまぶの男にあはせますも後生かと氣をもたすやうにいへば、有明も急な所の分別がほ、尤とめ置て金銀出すはいとはねど、こちのかねで、まぶめにあはすはつらにくい事、どうぞ兩人はからひて、もさ共にぶづくれ、そこらを賴むとかね入あけ、二人に又貳歩づゝの花のえだ打錫のあきなひ、どうしても、取が太鼓の役ながら、かつは此斷をしたと糺さねば、手管仲間のたくんだくめんがしまらぬ是大事の一言なり、有明は羽織のゑりも折ず急で歸る、跡は惣々しぐみの事、やるのもらふのといふは詞でこそあれ、奥から口をふすまはづして、一間にぐはらりと燭臺月にゐいじ、銘酒のかほり伽羅にまじへ、上座をしめる和東內、生れつゐての大盡男、作りかざらぬしぜんの勿躰、おてきと定る三五も、琥珀に塵の吸ついたごとく、和東內にいき

つきがほ、初對面に色外へ出さじと、是女郎のしんぼうぞかし、太鼓らもんさく口をたゝけど、和東内うきうきともせねば、座敷は根來折敷のやうにすみきつてさびしければ、引舟の最上深山つれびきの半太夫ぶし、和東内は馳走なら三味線をやめて、そよ〳〵風に服部たばこ二三人のみ立られよ、身は爰にてたばこの香をきくが好じやと、かりにもせちならぬ物このみ、扨もいたり〳〵、

(三)親は三界の纒糸による操言

後生を願ひおほせて、佛になりすましたといふ所が、油歩々とした蓮花のうへに、常作衆伎樂とやらいふて、しやうひちりきにあたやかましうものいふ事も聞えず、菩薩天人の舞あそぶとも、こゝで見飽いたかぶきの音樂おどりほどにはあるまい、今や日本の極樂といふは爰の事、生ながら成佛の心なればとて古歌にも女郎買人に雨夜の月なれや雲はれね共西へこそゆけ〳〵と五三平和東内は、夜の編笠莹の挑灯、おごりをきはめて揚屋入、三五花さきさくより待かけ出むかふは、ひとへに芙蓉のありくがごとし、太鼓ども何がな御馳走にといろ〳〵の藝者、唐のけだ物天竺の鳥よびよせ、見せ奉るなどゝあがまゆる中に、あみ笠きたる男一人、ひろえんに腰かけゐるは、祭文かたりかと、から尻の半兵衛たちより、是々折角思ひよりてわせられたほどに、一ふし金一歩に買てやらふ、まけにみじかふ〳〵、去ながらお目通りで笠は慮外じや、かんだでも、はなそげでもなくば、ひらにぬいでと手をかくれば、おもひの外に五三平のむすこ五四郎、ゑんまの抹香くふた顔を和東内のみこまず、扨はおやおぢのをむかひにか、さあ〳〵是へおあがりあそばせといふ間をまたず、五三平目に角立て、やい五四郎め、さだめて無用あつて來たであらふが、家來もあまたないにこそ、かふした所へおのれが來るは、おやのはぢをあらはす氣かと、さん〴〵しかりとばせど五四郎はゞからず、おやおぢ様できませぬ、子に見あらはさるゝ耻をもつやうな身もちをなぜなさるるぞ、私がたとへ惡性致とも、勘當の追出すのとしからしやるが道といふ物よ、こなたの形が親たる者の身持かと、くろくすぼりたてゝしかれども、少しにても道理をいふに、子ながらもあたまへしになりにくゝ、やい五四郎ちか比はづかしうおじやる、おてま

へも今迄は、よろづ孝行に親の身にしてなんぼううれしかつた、今思へば過行し惣領の五六八が戀しい、不孝な子はよそにあるを見てももどかしい、一座にれき〳〵聞てござる、此五三平は世間の付合出入、萬端無理非道がきらひでござる、やい五四郎め、かういふがむりと思はゞ、心底の一通りいふてみよ、口ごたへはゆるす、道理につまつたら此あそびやめふといへば、五四郎ほろりと涙こぼして、忝やおやのおじひに口ごたへをゆるすとのお詞ゆへ、申上るも慮外なれど、不孝者との御一言が、身にこたへてかなしさに申ます、尤此所にて少々のおあそび、さまでの事は有まじけれど、身をうしなひ家をうしなふためしは數かぎりなければ、財寶にはなれて老のくれにあさましいなり姿見るやうでかなしさに、此御ゐんけんは孝行と存て申に、不孝と思し召は御了簡ちがいとふせうがほにみゆれば、やれそちが親をしてくふものが、それをしるまいか、身共は我をふびんさに此遊びをする、その故は、親骨折て子は長者、孫は乞食するのはいくたりも見及ぶ所、既に世間の世話にも、長者三代なしといふ、身どもとてもいつ迄いきる命ぞ、有

あまる金銀人にまふけさすも一生の施ほろばかし、此善根又おてまへが代に、蒔た種がはへて繁昌せまいか、此道理は數年寺道場へ參つて、父母恩重經の道理をとくしんしてする事、とをいたとへながら、和歌浦はになく鶴も子にまよはぬはないぞ、をのれがかはいさゆへに、今ごろははみだし指て、寺の奉加の頭取するじぶんに、是を見よ三本木の羽二重を、素梅松茶の四つがさね、瀬田の橋ほどな幅廣帶、與四郎象眼の七所拵、かしらは親父、胴は役者、裾はひめごぜ、おのれゆへになみだこぼいて泣聲はぬえじやと人がいはふぞい、もはや世話にやきあいた、行義わるい親をもつてうれしうも有まい、二十一迄そだてゝやつた、人間と生れたおもひ出には、親の手はなれて江戸へ成とも行て、ひとりはみもしたがよい、先その膓指はゐんせう助定、親にもことはらずさす事は不屆、こちへおこせ、親子のふびんに裸でもゆかれまい、そのわんぼはどうする、ムヽなんじや、道理につまつてなくか、がてんがいたか、そんなら心とり直して、おやと同じ様にどれなと目に入た太夫をよべ、それ〳〵孫右衛門そこらで〳〵といへば、仰までもない事、なふ

若旦那忝ないと思召ませ、大がい此里へ來る衆中、ないかねを才覺の世話、錢なしの市立さ、口きく太夫様に、くびだけの借錢のふち川へ身をなげるか、つまる所は富士の山見る、ふたつひさつのしあんのくるしみ、そんなけもなく、内の首尾は直に親ごの御意で、天井のぬけた座敷一ぱいのお大じん様、女郎様も一しほ身をまかせ顏に、あれ〱御らうじませさ、かりにやつたやう江戸ざくらのほころびわたるやうに、ちらりはらりさ出かけるを、五四郎つく〲見て、東近江で名取りのきりう、赤野井のおすて、さりわき戀にして文の使をたのみし、八日市の大庄屋の娘、長濱まつりに乘物の隙よりちよつさ見たは、もう日本には有まいさ思ふたに、此女郎にくらべては、水晶さかき餠さほごちがふ、親仁も此うつくしいにまよふてあほうをつくしながら、うその有たけを誠らしう子に向てのてれん詞、爰は分別所、是に誠をもつて參ておやぢの氣にちがふていらぬもの、あやまりすまして先あのうつくしい女郎のふさころへ、すつぽりはいつてねよふなら、これこそ見ぬよの菩薩界さ俄に分別替りやすきは人心、一もんじやの新造をよびはじめける、是ほど氣を通しても、親と子ひとつ座敷は天井から毛虫が落ふもしれぬ、はだはゆるされぬ、

風俗傾性野群談卷之一終

風俗傾性野群談卷之二

（一）下船は眞鞆に走智惠な大盡

雲の上人は橘の香を愛し給へど、我らはたゞ女郎の懷のにほひこそ好しけれと、和東内五三平は島原の一方口、戀の袋につゝまれしが、春雨晴てかぶろ共二の替が見たいといひたて、、三日前から萬太夫さじき、初日から後日へうつる日をつゞけて二日、三間づつ極め置、芝居の果に、ぼんと町の大座敷にて夕飯、暮方に成ばかぶろ共をかごにて里へ送らせ、兩人しばしは此川風にもまれて、野州のお色の白さ黑さを詠めんと、仰を待ず青侍海坊、時ならぬ菖蒲杜若のさかりをお目にかければ、和東内は江戸紫より、都の紫帽子の色あひ、女郎遊びとちがひ萬しやんとして、砂川に水行こゝち、とかく好色の流わたりと、二十日餘り居つゞけ、いざ氣晴しに、宇治の花ぞの若鮎くみ酒肴にせん、五三平是よからふ、折からけふは御影供若道の元祖弘法大師へ御禮申さんと、藝子あまたかご十丁立させ、東寺をふしおがみすぐに西九條を跡に見るも、とかく浮世は金銀のからくり竹田かい道をよこ車にゆがみすぢりて藤の森の田樂の治兵衛が一代に數千貫兩の出來分限と、口にもほうばる程なあんばいよしの豆腐も、下地は大豆じやと口ぎたなき陸荷も、一ぱいは仕てやる大かめ谷より六地藏、小和田の里に馬はあれど稲の用捨にかごにこそのれと、口ざんばくに黃檗の隱元寺惣門の額に、第一義と有は、床入におこないすませとの悟りもやと、手を打笑へば蓮池に浮おどる鯉があらずば、浮世もあられもなき難字の額堂搭にかけならべ、左右の聯に何やら氣上ばつたかき看板、いか樣きやらの油やと禪寺は、喰ずに居ても見世つきを大事にするといふが、其段では內佛だん幅天蓋、衆僧の所作からいふにもたらず、和東内つく／＼思ふに人としてどひやうしな氣の通らぬを唐人々々と、唐はすて物のやうにいひなすに、江戸京の名高き知行寺、何ほどしやうごん珠をみがきても、是に及ばず、唐土は四百餘州大國のいたり、是を思へばあちの傾城さぞ風流ならん一會出て見たやと思へど入唐も成がたし、長崎は唐人につきあへば、唐の風俗移りあらんと、金にやう／＼次第

で、俄に長崎へおもむく談合、宇治よりすぐに子共は京へ戻り駕籠十丁目は歸りがけの廻向にと、撞木町を見捨る淀の川舟、大坂へも上らず、八軒屋からすぐに尼ヶ崎へ舟、借り賃拂ふ、大和の浦につき、是々茶やの亭主此所はよほどな町作り色町はないか、御意でござります、當地は都近く遊女ならで叶ぬ所、ないと申に因縁有、私先祖岸田の長とてかくれもない女郎屋であつたげでござりますが、朝ご見の格子さきへ弘法大師とつこのやうな躰をして、例の朝躰にまはらせられ、女郎を躰に入れよと仰られしに、長は邪見者にて女郎はござらぬと、けんどんにそばでも笑止なくらゐにあつたげな、弘法大きにわかさせ給ひて、頭陀袋から五鈷取出して、中戸を三鈷やたらにたゝき、萬劫ふるとも此所の遊女錢になるなと、かたう封じさせたまひしより、五百餘人の遊君のつぶり、誰剃ねどみな坊主に成まして、それゆへ尼がさきと申よし、今ではとり貝ならではござりませぬと、丁寧に語るにぞ、二人は見へずにしほのひるこのうら傳、住吉神戸過て、兵庫には浪にたゞよふ磯の町といふに、四つにごりといふ少しいろある、所のものにとへば、爰かきうくつな所で、遊女の有ともいふ、ない共どちぐちするゆへ四つにごりといふよし、それよりあかしの人丸塚に五三平ぬさ奉れば、和東見てそれは公家の所作、此方歌人ではなし、大蕭の似合たやうに、はやう行て室の女郎と寢て花やらんと、湯屋の惣兵衛方に二三日逗留して、遊君殘らずよび集め、晝夜の酒宴得てに帆を上備後舟の追風よろしく、立鳥跡をにごさぬわけしり、水主楫取にもうれしがる物おほくとらせ、おもかぢ取かぢの拍子鞆の川口に程なく碇をおろし、此所の大問屋關町の大坂や平作方より、手代らしき男一兩人むかひに來り、しさいがましうことぶきをのべ、おとも申さんと案内貌に先へすすむをしばしと招き、舟中すがら承るに、當地は市とかや申て殊なる賑ひの時節のよし、我等東國生れ西國おもて不案内、とりわけ色所にはいわくもありそ町とやら、すぐに手引して奇麗成揚やもあらば、引付くれられよといへば、成程おやすい御事御同道申さんと、上方見た目からは餘程さげやといふべき家作りなれ共、泉水山の見越夕日の浪を洗ふ氣色にもおとらぬ宮島や治右衛門が座敷へ通り、是は關東兵衛

共にて候が、此里の名をゆかしみ推参致せし也、ねがわくはなさけふかきよね様達を、一両輩御かり下されと初心顔にたのめば、花車笑がほして、扨々有がたい御こと葉、宿屋もおほきにかゝる赤土垣へ御尋くださるゝ段、忝き御事、名は先達て西國筋へ武藏の和東様五三平様と申大粋さまがおくだりのよし、遊女所の福神様と、丁字頭のたつ夜は沖の方をながめぬ夜もござりませぬが、申お聞あそばせ、かうした里ははりやいでなければ立ませぬ。さぬきの鹽飽様と申大盡が、此所へお舟をよせられ東より和東内といふもののぼり、上方の野傾をはじめとし、國々へくだり金銀をまきちらし、大庭なる慰をするよし傳へ聞、われ此所へ着しこそ幸なれ、此所の傾城を殘らず七日より二十二日迄、祇園會の市の間を買づめにし、かの和東様五三平様とやらに自由させまじき御たくみ、何とつもりもなき御事、たま〳〵の御出に御座候へ共、何ほどはたらきましても、右の仕合ゆへもらひもかないませず、きの毒に存まするを語れば、兩人かほ見合、是は鹽飽の腹立が尤、大坂にて我等も聞及しが、なか〳〵其和東五三平が評判かくれなし、いか様當地へくだりなば一本するは必定我々殘念ながら先づ今日はもどるべし、近々にゆる〳〵參り御世話にあづからんと、花車に三兩治右衛門五兩、些少ながらといひ捨て、問屋平作方に立歸り、五三平和東内にむかひ、なんとひろいやうでせばい了簡をする者が世間には有、聞ば市がけに大坂より野郎おほく祇園に居るよし、是を呼よせ遊ぶべしと、早速人をつかはせしに、是も殘らず鹽飽入道が蛸壺の中へ封じこめしよし、扨々きめこまかに買こんだり、但上りを見てもうける所存ではないかと笑ぬ、和東内分別ぶくろをひらき、さりとは外聞かた〳〵ぬかぬ太刀の高名誠や秦の始皇の連衡のはかりごと、しぎはまぐりの草摺引に等し、此返報に何にても目をおどろかすほどの事を思案せよ、名をかくしたる上なれば、さすがの我々が聞おぢしたるなどと後日のあざけりも口惜此所の市のしばゐ晝はいそがしく迚見物出ず、日くれから始るよし、我等了簡には、今より十五日が間、夜の外に晝しばゐをはじめ、二日めづつに狂言をかへさせ、ありそ町の傾城かぶろをはじめ、其外市立の者共迄に札錢とらず報謝に見物いたさせんと、大き成

くはだて、則座本に札錢棧敷迄いさゐ算用して殘らず渡し、問屋、大坂や平作は大木戸の吟味役と定め、其身は名とげて身しりぞくと、わらんづのしめくゝり、問屋にいとま乞して、西の方へ行衞もしらぬ諸見物、臍の緒きりてよりおがまぬ歌舞伎を見たると、今に鹽ひく島もりまでうわさは七十五日、

（二）雪ならで床の凍き露下の關

栴檀は二葉よりかうばしく比丘尼は二町さきよりなりふり見へすきて、和東内五三平是も女の切と見たはひがら目にしほのこぼるゝ赤穗びくに、くろい帽子に額際をつくるは繻子のびんざさら聲はり上て、こなたは濱の御奉行かの鹽風にもまれてお色がくろみませうぞへ長々しいはまづたひをかごにもめさで、おひろいなされたらいたみませう、おあしはいやよたゞとに角な物を是ちとくはんすとすがりよれば、和東少しは口あひして、何じやそち達は丸太の身を挊角物をほしいとは、月の丸顏にあふたやうに、まん丸な錢をやらふといへば、一人のびくにけらくと打笑ひ、せひく丸いを下さんすなら、そこらをちつと飯櫃形黃色な物をとのぞめば、よいはごふでつかひ捨る金と一兩づつとらせ、身共らは浮世を水にわたりゆく流の女若衆を濟度方便の六十六部頭陀修行の身にもあらず、名所古跡は勿論いろあるかたを念比にをしへてと、袂ひかへてたのめば丸太共打笑ひ、是はまあかはつたる回國、又わたしらは、おやかたがかり、身に着る外は笠ざうり帶手ぬぐひ、はなみたばこべにおしろいのあたひ迄、皆此口から諷出さねば濟ませず、せめてもあたまが丸ければこそ、當世の女衆は水し糸つむぐ迄、すきとをりの玳瑁櫛幅びろの笄常紋のかんざし水牛のつとあげ、はりがね入のはねもとゆひ、つぶりのうへに米なら一石五斗のあたいをいたゞいて、ようもおもたうない事ぞや、わしらはそれがいらいでさへ、よつぼどの小づかひをまふけにあるけば、これから西はあかねさす、周防長門の網ひくうらや小路までも、中におぼへてをりまする、お案内申ませふ、まづ向ひに見へまするは安藝の宮島、六月十四日より來月七日迄市有て、大坂から竹田のからくりいつくしま八景をとけいざいく、此間は大もん日、それ過ては上の關下の關、爰の女郎は能やかぶきをするとげなく、吹上島田のかみ筋に、

千石舟を引ますする、大ざはやかな色所、其外愛にもかしこにも、戀の海色の山情のみなと、あげてかぞへがたしとかたれば、兩人輿に乘じ、おもしろの人達や、たびは道づれ世はいたづら辿の事に磯づたひ、おきまでははせる下の關の手引してもらはん、是かりそめのゐんのはし居に笑をおろせば、玉柏や亭主花車表に出かうべを砂へつき込、御兩所樣當地へおくだり、只昨夜夫婦時もかはらずふしぎの靈夢をかうぶり、只今早友の明神樣へ禮參りの下向道、みち〳〵かくとお手合もきはめ、和東樣には鞆やの今川樣五三平樣には堺やの花ぎり樣に致して置ました、それおひかひつかはしませと何の事もいわさずひとりしてしやべりしはふしぎとも奇妙共、少しは小氣味わるけれど、かうした所を根どひするのも愚癡のいたりと奥へ大やうに通れば程もなく、女郎二人、所からなる衣裳つきにて、ゆふ〳〵と立出るを、うしろから今川樣ちよつと丶、さ丶やく音して立歸たる風情、追付かはりといふべき貌して、是もおとらぬよね正座になをり、花車樣のはなしで、くはしう承りました、さぞここらのけしきは不都合でおかしうござりませふすれども、國に入ては國にしたがへとやらと、しさいらしげ成に儒者のむすめにもや、所風の物ごしも捨がたく、いなかにけうといたしなみ藝、琴さみせんはさだまつた事、歌はいかい茶湯仕舞殊に手はふたりともにつたなからず、しかも上代風俗ならあいさつならと、五三平は面白かれ共、和東内は今川が顏出し丶てはづしたるはいか樣ふしんと、一夜切に女郎替て、來るほどのよねに尋れ共かたらず、是はきゝやうの有べき事と、惣くるわ中の座頭末社をあつめ、我々此所に長逗留、其方たちの心づかひゆへ思はぬ日數を送りし也、なれどもするゐはるかなるたびのそら、近々發足いたさんと思ふゆへ、いとま乞のため皆々を召寄たり、それに付我等此かたへつくと亭主夫婦あいかたは今川に極たりとの物がたり、其上今川も此座敷迄來て、座敷つきを見廻し歸りしは、いか樣いわくなうてはかなはぬ所、眞すぐに白狀せよと、百兩包一つ切ほどき、菓子盆に高く積上早ふ〳〵とのたまへば、はい鷹の九郎介といふ末社す丶み出、君はしらずや今くるわの大評判、とかく耳のうすいものはせひもなし、我君此里へお出なき先より亭主が指圖にて今

川様との定めなりしより、是迄御出有し所へ、向の揚屋三原やと申よりなじみの御客、泉州堺の京丸様と申が見へまして、知らせに參りしを、としやおそしとかしにゆかれしに、其翌夜おつれの大盡急病ゆへ、おもはず長崎へおくだり、いつも此里に三十日づつは御逗留なるに、早速出船、たいせつな旦那は見うら様へかたづく、尾くはふも頭くはうも頭痛打て、こよひもお茶ひきわぶつてござりますといへば、それはいかにしてもお笑止な事、殊に大粋と聞た今川へ橋かけよ、みうらは初會斗で、なじみの女郎定まらずとあれば、はい鷹承て飛で行、萬首尾して御來臨、東内は働と有て九郎介に大形一兩なげ出し、扨此百兩の金子にて、いづれもに百鳴事を申させん、我一生不自由といふ事をしらねば、まして始終と云はいかやうの事ぞや夢にだもみず、隨分ちから一つぱいあはれな事を申さば、一兩づつほどこさんとあれば、一座の諸末社我おさらじと、かなしいことあはれなこと、ふびんな事いぢらしい事、いかさまぬけめもなき事ぞろへ、西のかわらの子共らが地藏に取つく風情にて、高百兩の乾の字もすでに二兩ぞ殘りける、亭主氣を付

座頭の損都は宵よりも無口ゆへか、片すみにねぶりこけて、あれほどかなしい身の上を、さんげ物がたりもいひ出さず、外の衆はうそ八百ある事ない事おひげのちりつもつて十兩二十兩づつもうけしに、是がほんの口おしい共殘念ともと、つぶやき／＼和東内にむかひ、さて／＼めづらしき御慰、それにつきあれに寢むれる座頭諸藝功者に候へども、旦那様がたへ御あいさつもよういたさず、御きげん取事も不調法、それゆへ無口の損都とて、此所に年久しく貧乏中間のけんぎやうしてゐられます、今日の趣向も皆打うるほひにぎはゐまするに、たからの山に入ながら手もぬらさぬとはあはれな儀、旦那への御訴訟に殘二兩を拙者にくだされかし、かれにとらせたく候と泪ながらに語れば、扨々不便の次第かな然らばいかやう共はからはれよと有ければ、損都を稀有とふたたき起し、こりや旦那よりと何角をいわずいたゝかせば、はつと斗に消入て、しばしは詞もなかりしが、ふしぎや神氣のごとくにしやべり出し、我此里に年月を送る事六七十年古來まれ成大盡様にめぐりあひ逢がたき一座につらなり、受がたき小判のひかりに

てらされ、借錢なしの苦をまぬがる、又我兄も此廓に按摩とりしてくらせしに、出雲の蛇介樣と申お客、兄弟へ一步二つくだされしに、二つ共に似せ一步、それを氣病にして三年前に相果しが、惡趣にひかるゝ因緣にや、今江戸深川の邊の馬借の家に、生れながらの座頭と成て、かの一步を左の手ににぎり出、二歲の春西の方にむかひ、じやの助〳〵と申て手をひらきしとや、是御覽候へ我もらいし一步山形の朱印是を證據に尋給ひ、我跡とへと申てたべと返す詞もなき世がたり淡吹て死にたるは、ふしぎともてんかんとも、又ときたいの急病か、是を見るにとかく一升入袋は、一生貧乏の仕死、されど二兩の光明にさそはれて死びかり、ちりりんぐはらりんドヲン、

（三）月影は當世顏の丸山

動ときは淸風を出し、靜なる時は丸山の女郎町を唐團かざし、毛唐人交りのぞめき歌ちやるめるのねとりを吹て色どる有樣、和東內兩人は揚屋木屋の半七方へ入れば、大譃樣の御座の間と臘虎の皮の敷蒲團、紫檀の脇息かまへて、ちんたの酒に孔雀の吸物鳳凰の燒鳥琥珀の菓子盆には天門冬佛手柑、まるめろ高くとつみあげ、いかさま唐土めいて楊貴妃やうの女郎禿にうすもの丶唐團扇もたせ、衣裳つきの結構さ、上着も中着も、吳服商賣の家に生れながら何といふ渡り物共、目はじまつてつゐに見ず、紋がらは山海經に有やうな鳥けだ物、祇園鉾の見送りのごとき織物、されども帶は蜀紅の錦まがひ、さしもの和東內我をおらぬ顏はすれど、下心にはおどろき入て、所かはればふしかはる、いづくへ行ても一しな二品かはつた圖、それでこそたのしみあかぬ色道なれ、たいこ指心得て藝女郎をや呼けん、七筋の琴伽羅の胡弓に南京人のつくりし唐音のあひの山ぶし、廓は勿論遠近人の口ずさみ立子はふ子も諷はやらすよしとて頻迦の聲してうたふをきけば、

鎌倉の御所なん御前に十七小女郎が靴酌合の手從
野邊彼方之朋逆は血脉一袋珠數一連ノムヲミタウフ〳〵、

と諷へば唐子由の禿ども振鼓もつておどる、そのしなかたち又なき興に重酒になれば和東內はたいこの傳內をまねき、身共らは此所昨今者とかく何なりとかはつた事見せてくれよ、傳內かしこまりそれこそ

幸旦那のお買ゐそばせし八雲様は、かぼちやと申國の商唐人圭貨賓と申者、先月より買そめても、女郎様のきらはせられ、つゐに枕をかはされぬよし、それゆへ此ほども先約といつはり旦那へお身をまかせらる、かの唐人是をきゝつけ、ぜひにもらふてくれよとたのみまする、ならずはお客に直にあふてもらふて見たいとて、ロの二階におりまする、どうぞ對面あそばして、あちの物いひ風俗御らんなされ一興ならんと存ます、東内聞てこりや智恵ものめ、至極の慰みはやう〳〵といらち給へば傳内でかし顔して二階座敷へ行、首尾よくいひてつれ出る、けらいと見へし毛唐人、長さ五尺も有べき金銀の瓔珞かけしゆらいといふ物吹音は麥わら笛のやうで、おもしろいとも見へねど、あの國の仁義禮ちかづき成と、粧を作りだをし、長七尺にはたらず、おとがひのひげは足利衆の鑓印のやうに、赤びかりして一尺ものび、ねりぬきの組笠、裝束はびらうどにゐんすのぼたん付緋緞子の一幅半のひろ袖、鱗鳳龜龍の紋付し上のきぬ、髭よりつたふ水鼻を白ぬめ切てぬぐひ捨るも所の風俗、傳内通辭功者なれば、東内に指さして、まからんげれゑんといへば、唐人かたぬいで、かむしや〳〵といふを、女郎かぶろ一座のもの共、くつ〳〵と吹出すをもかまはず、しんてんげれつちやばかすとんぴんころばくう〳〵きんなんとんらん、じやばきんそつとんばらん〳〵と、珊瑚珠の珠數にておがみ、四つばいにはへば、傳内あれ〳〵只今の詞は、此君にのぼりつめしに、あらゑびすとてきらはるゝ、日本は神國とて加程の美人が有を、自由に御手に入ば、神か佛かとおがみまする、もはや唐土へ歸ります、どふぞこよいもらいたいといふ事と申せば、和東内おかしけれどじつとこらへ、戀のせつないはいづくも同じ事あのぎやうぎやうしい形をして、あんだら大師をつくすで此丸山も立てゆく、やいそこなはい唐人、けいせいが買たくばその髭そつて笠ぬいでありまのゆに一廻りもつかつて、身内の鹽出して、ばらもんのやうなどたまを梅花のあぶらですき入て、厚鬢は似合まい、糸びんやつこにそりさげて、黒羽二重と云かけたら、隙な女郎はあひもせふが、その見事な鼻で、床入は跡で外科のりやうぢがゐるであらふ、目はぎろ〳〵と山猿、人間とは思はれぬと有ければ、唐人手をつきかうべをさ

げ、傳内にむかひあれは何とおつしやる事ぞどうやら御きげんよさそふな、もらいがなるかはやうきかせてとあせれば、傳内眞性な顔して、只今仰られた旦那の御意は、汝遠き國より來りて、戀のやつこと成て君をくどく段神妙甚痛しい、去ながら此君とは買そめてより二十餘年、まことに一むかしの過るは夢の中なれや、壽永の秋のは四方も嵐にちる夕ぐれ迄、つゐに帶といた事がない、それゆへこよいは〳〵と思召てお買なさるゝ、なんとどうよくな女郎ではおりないか、お唐人の戀、おもひやつではあれど、此月一つぱいは此方の買つゞけ、來月朔日ならでは得しんせぬとのみことのりと、出ほうだいにあほうぐちたたけば、唐人黄なる涙をこぼし、日本は大和國とて人の心もやはらかな御所存かんじ入まするど禮義だらだらなくなみだ、ひげにつたふて頴川の牛の尿するごとくなり、毛唐人發起して、先此度は唐土へ歸り追付來朝いたし御意得ませふと、一尺斗の蛇貝の箱取出し、是は大明太宗皇帝の勅方黄精枸杞子圓とて、齡を若くなして壽命萬歳の藥、お心入の忝き御禮に進上と、しみ〴〵申て主賓は長崎を出船跡にて五三平和東内は女郎狂ひの德にはいろ〳〵の慰、扨々唐のやつらはちゑがうとい、さま〴〵なぶり物にして遊ぶをかたじけながり、またその禮とてけつかうな藥をくれた、年よらず若ざかりて好色せば、此世のたのしみ外になしと、かの藥を竹のへらに付てなめければ、其味甘露にしてにほひふん〳〵あたりをはらひぬ、とりわき色里にゐるものは若いて持た顔かたち、女郎からやりてかぶろはいふに及ばず、其座に有あふ太皷迄殘らず所望してのみけるが、二三日過ると此藥のたゝりゆへか、五三平和東内床入すれば挑灯でもちつくごとくに成、女郎はふさんかいへもひびくやうなおならをこき紅ゐの脚布をやぶり、やりては物わすれして質札を人中に取落し、禿はうたゝねに小便たれ藝女郎は股ぐらからりんの玉の落るをしらず、もんさくいふ太皷はおしに成、家内殘らずきたいのなんぎにあひにける、千里萬里を股にかけて來る唐人が日本の詞をしるまいとはふかく〳〵大ふかく、

風俗傾性野群談卷之二終

風俗傾性野群談巻之三

（一）色遊びの一時は千両の金にやう〳〵

柴舟といふ伽羅はたかぬさきよりにほひこがれ鮂(うしのした)といふ魚は腐らぬ先より嗅く、めん〳〵もつて生れた精なれば、煮てもやいてもかはらず、和東内もしせんと前生にて、好種まいておいたる果によつて、金銀に事欠ず、いづくへ行ても頭を疊へつけてあい〳〵の詞、人と生れての大慶至極、その比長崎に和東内の親、松浦五藤左衛門貨物店の番頭、小西七郎左衛門袴着して伺公し、若旦那に御目見へとて禮義くづさず、両手をつゐていひけるは、此度この所へ御來臨とは夢々ぞんせず、夜前三度飛脚に本石町手代方より書狀到來にて承り、驚入さつそく參上仕りました、我々ためには大事の御主人神もつておろそかにぞんじませぬ所に、私方へ御越もなき段ちかごろもつて御めいわくと、ほうばいどもなどとも申まする、扨此度江戸おもて手代勘左衛門方よりわか旦那御私金、大名借し返納七千五百両預り置申由、則下拙方へかはせ相渡し申せとの事につき、只今持參致候、當所の拂方諸々御用筋私ども相まかない申べきまゝ、いよ〳〵もつて御遊興ゆる〳〵あそばすやうにといんぎんに相述ける、およそ面(おも)手代などは主人の子に傾城沙汰はさておき、白い歯もみせぬが世間大法なるに、大まはしの身體あづかるものなど、その樣なせちべんな事はしらず、大がかりに心をもつこそ、玄々大道、せばい目から見るとはかくべつなり、和東内國方の便をうれしく、七郎左衛門にもあいさつねんごろに、おもひよつて過分のいたり、身どももいまだ當地に遊興するがてんながら、此中唐人に付あひ、無用のなぐさみに身のうへ少しあやまれる事ありと段々はなして、惣じて唐を異國といふは、異なるかはつた儀ある故ぞや、人間の身に希有なる事ほどよからぬはなしとひたすら思ふ心出來て、此所に逗留いやとおもふては片時もゐられず、さるによつて俄に江戸へ歸りたくおもふ、幸そちに尋たきは、當地に人形からくりの細工人さま〴〵有中に、銘人といふをよびよせたしとあれば、南蠻細工の又九郎と申こそ、天地にあらゆる事を作り、四百餘州に古今の細工師が致せし事、

何にても致さぬ事なし、それ〳〵とよびよすれば、せいは四尺にたらぬ男の、しかもちんばにてありける、和東内又九郎にちかづきよびよせ申事餘の義にあらず、むかし唐に飛鳥翁といふ者、鶴をつくりてのりけるよし、さやう成細工なるべきやといへば、又九郎承り、なるほどそれはしやすい事、十ヶ年以前に、飛行の馬をこしらへ、出來たつとそのまゝ夫婦打乘、東へ向てこくうをとばせ、その日のくれがたにひゐの山を下に見申せば、是迄およそ二百六七十里と、又中にて西へたづなを引もどせば、其夜寅の刻に當所にかへり、ほの〴〵あけに宿へおり申せしと語ければ、和東内聞てそれこそ望所、金銀は入次第、連錢芦毛の二寶荒神かの稱徳の帝の、和氣の淸麿が上るりを鼻歌にて、萬里を足下に見おろしなばよきなぐさみならんと、いそぎ取よせあたひ數百兩わたし、五三平諸共かの馬に打乘七郎左衞門さらば〳〵と、あぶみにむちを打くれて、二階のゑんよりかけ出せば、翌日晝の九つに品川につきけるが、人のあやしみをいかゞとかたはらの麥ばたけへふうわりとおりければ、馬はこくうに飛かへる、あつたら物をおしゐ共思はず、出



駕籠かりてすぐに三谷堤をとばせ、よし原のあげやに入ば、是は〳〵と槌で庭はく下男迄、此里のはんじやうと悦の聲やりてかぶろの耳に入來り、和東さん扨も久しの牛太夫ぶし、たいこの四五九が一調子高にかたり出せば、東内はこりや此御かたは、汝らが初てあふみの五三殿と云、すさまじいおし手じや、花紫をもらふてくれとの御意、承て幸むらさきさま、ゑびや方にござりますが、けふのおてきさまは御内用有て御出なされぬげな、此段申入て追付御來臨なさせませふと立て行しが、首尾して其まゝお供、そのけだかさ中々はゞなき男の初會は物いわるゝけしきでなし、大門口の勘兵衛來りいざ先酒と茶わんがけの双六、四五九にたでつけられてむし三番、しかも石むしなれば天目に以上七はい、是は御座にたまらぬとにげ行しが、くはしや來りて皆様閑事ではござりませぬぞ、こちの人をあのやうにつぶさんすといふ事が有物か、歸られますとやくたいはござりませぬとはいへど、正しく奥座敷に大音にて、下戸の立たる藏もなしと、おどるは勘兵衛なるに、さりとは口があがりました、昔は山口やの清はらとて花をやりし身の、淺黄惣がのこも引かへ、前だれがけの内儀すがた、ヨウ勘兵衛様のおくさまと、取々わめき又是でのめるはヤレこつちにものめやうたへ、大いその道は七もごり、ゑれつのまはらぬ大酒、科なくて配所の月とは、むかし人の不物好、月も花も雪も螢も、本調子の二階座敷にまはりしだいの盃でこそ見られた物ぞかし、若い時つかひしが、年の行程おしうなると老人たちのうわさ、是皆一二貫目の小さいきな遊び、しかもわけしらで、一生茶やぐるひせし人のいふ事也、五千兩七千兩の身代を打こみしわろの、おしい事したとはつゐにいわず、自然と遊びのうまみを覺しゆへなるべし、遊びは手ばるをもつて慰とす、たとへば太夫をしびつてみる大盞、天職にかゝりゐれば氣樂なるべし、天職にさはたつてゐる客、鹿戀か端をかふ程ならば、よもやへらをつかふまじ、それよりは段々におざり子を比丘尼、白人を茶呂に仕かへ、契短（けんたん）を辻君と思ひかへさば、勘當せらるゝ息子もなく、請人へ預らるる手代も有まじに、只身の不自由なるをたのしみ、せつなきをおもしろきと、天地ひらけはじまりしより覺へぬるこそせひなけれ、かるがゆへに狂ふとはい

ふなめり、今時もふけにくい金銀を瓦石のごとく蒔ちらし、ゐけんいふ手代なく、隙有金有何に不足なき和東内が相かた高尾は、しらせを聞とひとしく、酒にみだれし座敷を、客へ付屆もなしに立やぶつて、帶さへしどけなきを、つくろひなしにつか〳〵と來て、東内がひざの上にひつたりと腰かけて、人は何になれとて、なが〳〵長崎三がいへゆかんして、せんしゆの傳受に入唐が腹が立ども物いふてやると、もたれ姿のかわゆさが身にしみ込で、女郎買はじまつてうれしいと思ふたが今といふ今と、大盡の打とけ顏が一時千金道具と、太鼓等はやし立て、傾國修行の旦那に、今のお詞お聞あそばす太夫樣、おそらく唐天竺にはない、和國の高尾樣斗とそやし立れば、太夫は一言物いわず、腹立る共見へずつんとした顏つき、一座の末社御きげんいかゞとこほり切て手にあせにぎるは、六月に氷室のけしき、和東内はふしんはれず、氣あひでもわるいかと、そばなる藪醫者竹庵に脈見よとあれば、私はいしやはいたしますれど、ねんもない事脉などは存ぜぬ義、藥箱にもとうがらしこせうの粉、甘い酒にはふつてたべます、目まい立ぐらみはいきふとしなふと、諸行無常氣もなく、是生滅法かいに療治せずに、聊爾ばかりいたせど、しなぬものは斑猫のましてもしなず、敗毒散やつて本復する病人にかかりあわせた時は、竹庵樣は名人じやと申も、天道人をころさぬは、いしやの手がらでもござりませぬ、私はかう打あけて申ますが、れき〳〵のちりめん羽織が、物しりがほにちんぷんかんと申も、みな私らと同じ事、浮世にいしやはぬす人と同前、それじやによつて太夫樣も脉躰の事は棚へあげて、私まへかた鮫がはしでうらかたをいたしたが、少し存じよりは太夫樣の卦躰今月は遊魂と申にあたる、ゆこんはあしなへとよむといへ共、それは道理よからず、そのまゝ物、たましゐはぬけ出て、お身の內にはおるすと見へるといへば、和東内おどろき、是はきもがつぶる〳〵、そのまゝ置ては女郎買の一分たゝぬと、江戸中の寺社佛閣驗者山伏をたのみ、祈念祈禱占やさん迄かねの取あき、

(二)飛行の魂は日本傾國

九職の窓の前、十疊のうら店のほとりに、ゆがりの法

水にたべゑひ、三百の質をながす所に、案内申さんとはいか成者ぞ、此度は錫杖迄質にやつて、いづかたへも能出ず候所に、是は八貫町のさぶ樣なんとしての御出、先々御無事でめでたい、定めて〳〵内々の錢の事でござりましよ、こなた樣の事は、祖父の代より三代の御念比に、その恩もしらず、たいせつな錢をかりまして、べん〳〵と面目はいふきを打こぼして、借錢のいひわけすればさぶはかぶりふつて、いや〳〵その事には來らず、今夜來たのは大分よい事、みじかふいふ所がそなたのかねもふけ、しらでさつそくきほはせふ、小判二兩のぬしにしてやると、つゝみながらなげいだす、ちやんとなるをとに、山伏ゆめかうつゝか南無妙法蓮華經と、佛にさへ門ちがへして禮いふもおかし、さぶは座敷にねりあがりそなたも内々しつてゐらるゝ、駿河町の東内殿、ふかまの太夫がせんきがおこつたとやら、使はんでしれぬが、祈禱とて山伏百五十人にたのまるゝ、身共も旦那山伏があれども、そなたをひいきに、着到早く付さしたといへば、能こそ〳〵と女房にさゝやき、大屋殿へいてこいと、いふ迄もなく行と戻るが一度と思へば、その尻につゐて角前髪の僕が、福藏院樣の戶口せばい事じやと、蓋のない牛がへ、おもたそうに顏しかめてかたげこむ、かげんのわるうならぬ内にとゝり出せば、食つぎ手をやく程あつく、料理なべに、七りんそへて、甘鯛のこくしやう、はまちの煮酒鰆の小串、さかなは貝燒す牛房、品川海苔の吸物までこしらへて、僅か七十八文が物、やすうてはやうてこの自由さを江戶から見れば、京大坂は田舍ぞかし、酒も大分過して、さぶは十分一の口錢に、前の取かへ利をそへて請取過分にござる、おか樣芝居見にちとござれといへば、成ほど參りませふ、先々お影かたじけなしと、禮は舌のさゝるゝ程いふて戻し、山伏跡で思ふは、日比そさうなさぶどの、よもやけいせいの疝氣寸白はおこるまい、懷胎であらふと、俄に子やすの觀音を本尊に、そんりやうがりして、泰產の法をかさだかにおこなひける、このごとく方々にてさま〴〵祈禱のしるしにや、太夫が氣色もとの如く物いひ出せば悅ばんと思ひし東内にが〳〵しい顏して物もいはぬを、あげや一家心得ずどうした事とうかゞへば、太夫が心底きこへぬは、身共が買ふ時は、やまひじや物のけじやのと、一言の

いらへもせぬに、きけば此中も西國衆にあげられ、うつぱな口舌をしたと、是この太鼓黒主の茂七が一座したとの證據人、うそとはいはせぬ、三つ鐵輪で吟味いたさふと、むつかしういひかゝる、太夫ゐがほしておたづねなうても一通り申ませいでならぬ事、ぬし樣となじみそめて、いとしいお方は外にない、つとめはなれて誠を立る心底、晝夜わするゝ間とてはなし、色回國あそばすにも、大事のお身なれば何とぞ付そひおために成たふ思ふから、わしは午の年淺草の觀音樣へ願をかけ、一心にいのりまどろみしかば、過ゆかんしたあね女郎通路さんが枕神に立んして、かわひの妹女郎や、公界の内は諸事につけ心にまかせぬくるしさ、身につまされて覺へ有、わが身くるわにゐる内から、針でが少しきゝし其德で、ふだらくせんの觀音の淨土へ、お物師してゐる身なれど、觀音さんをひたすらのたのみ、聞捨にならぬと有て、いもと女郎の事じやほどに、わしに行ねがひをかなへてやるやうにとの、觀音樣の仰をうけて來た事じや、そなたのたましいは東内さんに、付そひあるき給へ、からだはおれが玉しゐを入て、つとめをかゝさず、親かたの手まへは間を渡すべしと、夢中の告有がたく、それより玉しゐおまへにつゐてあるきし也、くぜつのせりふもみぢんわしはしらぬ、皆あね女郎のめいごから、外の客をつとめて下んしたものでござんせふと、なみだこぼしての物がたり、和東内少しもがてんせず、まか〳〵しい事ばかり、それは五十年も以前から、堺町や木挽町でかぶきにして、客をだますはいかにしてもふるい事、今少しあんじて狂言を仕なをされよと、そらうそふいてきかぬ氣の、通らぬきせるのがん首も、はな聲にあしらへば、高尾こらゐかねたぶさを取て引たをし、わるじやれ斗いわしやるか、かぶきにせふがせまいが、いつわりなきそのしるしをいふてきかせませふ、島原にて女郎がねたまに、上するおさだと云おなごを、湯殿の口でふるひ〳〵くどかしやんせぬか、尼ヶ崎で色町がないとて、長い夜をさびしいと、あらふ事か十三になる宿のむすめを、夜半時分にやれころすはと、一町中をさはがせ外聞わるい事ばかり、その外下の關の今川は古今のしやれ女、戀しりの情しりなれど、首筋に粟粒程な物が三つ四つ出來てあつたによつて、大事のお身にわるき病うつして

はいかゞと、その女郎に又ぞやわしがしやうね入かはりて、わざとふらせました、さあうそならしるしには回國中の事何なりとゝふてみやんせ、長崎からからくり師又九郎が細工の馬にのり、お江戸品川まで一日一夜に飛行してもごらんしたも、尤細工のはたらきでこくうを行事もあるべきが、いかにしてもあぶない事、それゆへわしが玉しい馬へ入、おふたりをのせまして來た事なれば、そのくたびれが出ましてか、此中内は諸事を覺ずくらせし也、是もひとへに馬頭觀音さまの御方便、男の心は淺草の罰やあたらせ給はんと、涙うかめて申にぞ、和東内も道理を聞てはおされずし、しほ〳〵と蛤の吸物を、うつぶいて吸さてよいかげんの、

(三)浪人の浮舟流にとゞまる吉原

世の事ぐさにも、江戸は吾妻とてゑびすのやうにおもひ、江戸僕の江戸兵衛のともの あら〳〵敷いひなすが、京の者こそ井の內の蛙なれ、式部が歎にも紫のひともとゆへに武藏野の、草は居ながら哀とぞ見ると、よみし所緣の色、今に江戸紫とて世上にすがたの花をさかせ、重寶するは風流の根本、色と情のお江戸ならずや、すでに前方中村七三といふ色男、京上りの春都の花に色つくれる艶女、町方屋敷御所方迄、いくたりか七三戀しやと、見る戀みぬ戀おもひ死の有しは、江戸こそ色の都なれ、近年江戸土産とて半太夫ぶしの色上るり、聲ふし幽玄にして京大坂は勿論、諸國の分里色とり音曲、是にうへこす事もなし、とりわき淺妻髮すきなどの戀をふくませし一ふし面白の折から、彌生半花見る酒に雲ゑゝりと一盃きげんに、和東內おそばさらずの大勢を供につれ、芝の大ぼとけ見事のお鼻と惡口の所へ、十八九と見へしが袖はつめながら、まだ白歯にて扱もけふの花ながめにあかぬはと、和東內跡へなりさきへまはり、世に又あんな娘も有に、今迄時節いたらずや、遂に見ざりし殘念とうか〳〵と見へければ、出頭の竹庵さじ取直し申けるは、おそらく旦那の御目にとまりたる者、のがすべきやうなければ、たとへいか成武士方の懷むすめ成共、みやづかへさせませいではと申せば、和東內喜悅のまゆをうなだれ、いしくもいふたりでかしたり、さてもの事にあれをあのまゝ傾城にして抱てねようものならば、眞實卽身成佛の六はら密にのりの舟、光智法

印よりはおがみてがおほからふ、かの唐の虞氏西施貴妃、理不盡のさばきをせずと、貴殿の口さきで行ならば、ほう美は望次第とあれば、腰付の兵右衛門我しりがほに、あれこそ四谷の裏棚にゐる、北國浪人むかしの系圖をいひたてに、それは〳〵空借上はいて、りくつものゝねだりもの、けいせいなどには土にかぶりつく共賣そうには見へませぬ、去年も横須賀の家中五百石取の方へ緣邊仲人しかけゝるに、聟の方なりあがりなる者とて腹を立けるよし、それは〳〵にてもやいてもたべらるゝやつではないと申せば、太鼓中間に鷲の喜右衛門罷出、旦那への御奉公なら下拙智恵にてさつそく傾城にしてお目にかけふと請あへば、東内聞、尤喜右衛門は諸事の工面ふづくり事、のみこんでからはつゐに仕そんじたる事なけれど、是斗はのみこまぬ、見ずしらずの人の娘をけいせいにうらせうとは、是はあまりであらふ、兄弟同前にするもの身上つまり切たをみても、子を遊女にせぬかとはいひにくそふなものなるに、まして事むつかしい浪人にそんな事はいはれはせまいぞ、喜右衛門承りそこが工面ごかし、惣てけいせい町にはきもいりといふ者、所々方々とかけまはり、よい娘とへあれば、ねだりものであろが、りくつ者であろが、一目にらむがさいご、ぜひに遊女にさせねば置ませぬ、とかくは我等が先へ行ての云かた所作を御目にかけたいといへば、東内うなづき、しからば何もなぐさみそちと同道して始終が聞たいそれこそのぞむ所と東内の御供申て、兵右衛門がをしへし四つ谷のうら店に尋てゆけば、八疊敷の片はへなる入口に、下河邊外記宿と、大橋やうに筆ぶとに宿札からねだりくさく、東内見るよりいや〳〵身共は歸らふとあれば、みぢんもおきづかひな義はないと、表口より物とひませふといふに、四方髪の敵役のやうな大男、おさだまりの紙子に前帶、朱鞘の大だらさして、なんでおじやる、はいらずと用があらばそれからおいやれと押柄さ、いか様世にある時は一疋もつながせし馬の木ではなこくるやうにいへば、わざとおそるゝ顔して、私は博勞町のそばや善右衛門と申まして、諸大名方御用金の口入、家座敷賣買養子緣組の仲人御奉公人は千石取より若黨足輕、女中はお手懸中居はしたのきもいり、諸事仕ますが、御自分の義も去方で承り、御出世の談

合致に參りましたれども、内へ御入なされぬに、そこからわめくもいかゞなれば、ぜひなくおいとま申ませずば成まいといへば、ていしゆは望所のくろぼしやれ〳〵おはいりなされと詞をなをすから、もはやこちの物と兩人うそせばい内へねりあがれば、くだんの娘はせんたくもの丶、しきしあて丶ゐたりける、喜右衛門小聲になつて、貴公の事感狀たゞしゐ事お聞なされて、西國大名お名は申さぬゆけばしれる、先知は何程か存ぜねども、當分はな紙代に八百石などはつかはされうと存る、是もひつきやう緣の物、則今日御目見させませふ、申まではなけれ共、定紋の熨斗目に上下、大小も隨分りつぱにして、若黨二人鑓一筋、挾箱ざうり取乘馬等は拙者才覺いたしませふといへば、浪人悅ぶ片手に涙をおさへ、扨口おしう御座ります、氏系圖共におそらく誰に耻かしうも存知ませねど、十八年の浪人何を申ても、身のまはりとては此儘、中々お目見への衣裝才覺致すべき金銀は一錢もたくはへず、今日の只今から立身いたすべき身の、寶の山に入ながら、手もちからもない仕合、兎角花實も先立て自害いたし、娘は若木の花の事、ふたゝび親の名を顯はせ、南無あみだ佛と一腰をすらりとぬけば、喜右衛門おしとめハレ短慮也お侍、死は安して生はかたし、加程の事は申さず共うゐたへ給はん仁とは見へず、何とぞ命を全して、御奉公にさへ出給へば、さらりと埒の濟談合おもひ付ましたきかしやるか、あのむすめ子を旗本衆へ七年斗御奉公につかはされば、腰もとぶんの手形にて、給金七八兩はかられませう、なれども是にも少々の仕拵も入ます有はいやなりおもふはならず、先此思案も取置てと、めつたにあたまをかたむくれば、女房指出、御覽のごとく親仁はせいてゐられます、此上ながら親子三人の者がうかみ上る御思案、御慈悲にたのみ上まする、何とぞきのまゝにてゆく奉公ならば、私成とも御遠慮なふと賴めば、しからばもひとつ申て見ませふ、年切の定にてきの儘の奉公も、口はなんぼもござれども、ちと所がおもはしうない、外でもござらぬ吉原の傾城やなれどもまつたくつとめくがいの奉公にはあらず、此内のかぶろに手習給仕をおしへたり、又は女郎衆の小袖の出し入、其外小づかひ帳のうけはらひ、ひつきやう娘同前、いふても至り所じやによつて、しせん

と下には古服たいでもきせますがといへば、二親聞とゞけ、なるほど吉原とてもつとめせずば、此度の事なればくるしうはない事、いかにも奉公させませふ、給金は何程くれませふぞとゝへば、されば七八年切て二三兩斗はかしませふ、又つとめをすれば百兩はなんでもない事といへば、浪人分別する程欲が出來て、つとめをせいでも傾城町の奉公といへば、おなじ事、今一口に百兩といふかねがはいれば、重代の太刀かたな作の鞍あぶみ、大坂陣に手がらせられし祖父の着られた緋緘の金札、質に置しを請ては先祖へ孝といふもの、奥も地なし惣鹿子の小袖が請たかろ、その外のつぴきならぬ借錢もあり、おやぢの三十三年も來月也、奉公目見へも衣裳大小りつぱなれば有付も早し、奥はなんとおもはるゝといへば、金銀に心くれぬものはなく、成程知行にありつく事ならば、それもましでござらふ、孝行なむすめといひ、武士一道には見事なしんてい、◎おやのためならいやとはいふまいと、たしなますればなつとくして、まんまとやる思案にかたづきければ、喜右衛門仕すませしと、あつぱれ武士の姫ごぜ、賢女と申は此お方とそやし立、しからば女郎屋に見せませふと、三浦の四郎左衛門方へ人遣しければ、早速來て見分し、四五十兩から付て六十五兩迄に買取、物の見事につき出し女郎、和東內思ひの儘に水上から四五度賞翫して、跡はどうなつたもしら浪の、ながれの身はかうした事、

風俗傾性野群談卷之三終

風俗 傾性野群談巻之四

(二)神はちはや古市よい中の地藏顔

鶯の旅寝梅の木づたひに、うらゝをはこび、風雪をけ
し雨花をさそふ、和東内は花よりも高尾が紅葉の色
姿、眞を盡す心の駒色道をかけりて、千里のこくうを
二十四時飛脚よりはやく來りしは、かの大礒の虎に
もまさりし心中者と稱して、太夫が姿を一筆書の墨
繪にうつし、傾國修行の笈の本尊とし、みづから戀慕
大師號付て、猶戀の四妙をささらんため、伊勢參宮
し、太々神樂あげ宮めぐりしたまふて、中の地藏古市
の芝居太鼓たうから〳〵と打たゝく、此所に茶やあ
れば和東内うき出し、いざ〳〵立より一つ見せばき
座敷なりとも、結緣せまじやといへば、五三平かぶり
ふり、なんの爰らの茶屋もんざい女郎買の仁躰がそ
こねるといへば、いや〳〵色道修行といふからは、西
海の流の身、うきしづみの座配見つくし、越前の三國
敦賀迄殘さず廻りし此身、契知宿も見捨ては通られ
ず、其上爰はむかし齋宮の女御ましませしゆかり、表
向はひそかなれ共、內證に替つた義の有まい物でな
しと、一軒々々ぞめけ共、いかな事はいらんせと一こ
といわず、焔摩のまつごのやうにしてゐらるゝはど
うした事と、赤前だれの女よびよせ、旅の者じやが、
きれいな座敷があらば遊びたいがと尋れば、何には
しやんす、爰らはしらぬお人を客にいたしませぬ、ご
こをあるかしやんしてもむだ足〳〵、ムゝおくきか
ふより口きけじや、ふりがゝりの客せぬ所先はいた
りあり、此場をさらりと立歸り御師の手代の新介と
いふものに案內させ、色駕籠かりて古市一番宇佐美
屋へかきこませ、ようお出なされま、舌ばやに大勢の
聲しづまりおくへ通れば、ふすま障子は紫地のむか
し金襴所出し蒔繪の黑ぶち、紗のあかり障子に古法
眼のゑもいわれぬ、なげしのうへのほり物飛驒の匠
もはだしでにげぬべし、女郎なよやかに出かけたる
ありさま、先高でうつくしい事、新介所びいき鼻いか
らかして、爰の女郎外と替りてよいはづの道理は、當
地大照太神の威德によつて日本國中から持はこぶ金
銀の高、幾阿僧祇、那由陀、恒河砂といふ員數をしら
ず、太夫殿の中にも三方樂といへるは、久保倉幸福三

日市などゝて、二十四人は神代より相つゞきて、いづれも物成十萬石にあたらぬはないと思召、是におとらぬを月行事衆とて高向岩手老沼金谷など八十餘人、その外かるきとてもお師と名のつくほどの家に、上下三十人よりすくなうくらすはなし、都合千五百軒にあまるお師方に、恭道者にとりこむ金銀の置所、人の歡樂は此道よりほかになければ、みな此色所にとゞまる、さるによつて我一と此所へ抱る女郎は、京中を吟味するに都のならひとて、身上くらしかねぬ商人職人、よいむすめをもてば大名方をのぞみて、下地うつくしいを色品つくりたて、藝能つけて西國東國御用屋敷より抱に來るを、あげらほんと待てゐる内に娘は年たけてふようの丞がほもうつろひ、わかいかほさせて、三十になつても十六七の形をつくれども、手かけ女かゝへに來る御國方の目利者は、それ斗を役目にして御扶持を取ゆへ、よく見ぬいて中々手くろはくはず、それに付て家賃も來月切と銀借し本から案内する商賣方のやりくり、高利の銀借りて、一腰の親重代のわきざしも錨のつまる切羽をはなさねば、身躰の尾の見ゆるはいなり大明神のちからにも及ばず、思案中ばへ百二百兩の山吹色を見せかければ、娘の親は先手ぢかい金を取はなさじと、大かた此所へ取て參る事、すでに此前も京米やの心中おはつ庄兵、此あんにやへ取るいきかたゆへの事、至りときやしやとをまなび、都の水でそだてあげ取よせる色種、金銀まく大盡は、神職は三位四位うづだかふ仕かけ着られぬやうになつて、夜の物はから織厚板などゝひからせ、蚊帳は生絹に禰絹の鎮付て、酒肴の立派さ、膳部まはりはいふ迄もなき肴所料理所、外の色所とちがふて太皷はいくたりつれても外にしゆらいはいらず、あげせんを金一歩とはかへすくも下直なもの、此中にも名ある家五六軒には、一指彝て一きはすぐれたるを、一人づゝ太夫と名付、おなじあげ代ながら初對面斗を金一兩づゝにさだめよい客が付ては一年中を買切、或は三年五年もあげづめさきがね渡す事、餘所にない圖な事、此繁昌をみては、町人のひとつ買なとするもの、中々のぞかるゝ事ではなし、やゝもすれば松坂の三井伊豆藏角屋中川、又は射和にては富山家城、桑名四日市名古屋の大がね持の二番むすこなど、一度出かけても三百や五百兩はつ

いはいる所と、一歩自慢顔で申せば、東内五三はて長事御太儀、所すゞめ樣指圖たのむと、此所の名代の色を手に替、毎日のさはぎ旅がけの一德と思へば、伊勢は内外の社陰陽の二柱とそれより中の地藏へ宗旨を改め此里のはやり子、五十鈴川齋宮といふ太夫子、兼日より約束にて、芝居過より酢川やの中二階にて酒事はじまり、ろま、せさい、おさへ、手もとゝてうし高なる最中に、金剛の紋兵衞あはたゞしく、太夫樣ちよと御目にかゝりませふと、次の間へいざなひよろこばしやんせ、ねてもさめても戀しがらんした尾張の七さま、公用に付て長崎へおくだりあそばす、おまへにあはふ斗の御參宮、別して內々の身請の談合かたまれば追付妙顯町で兩替店出させふとの おうはさ、日比あいたい見たいの立願日親樣のおかげと思召、そこの座敷をまゐて、はやうこちらへお出有て、隨分あぢよふあしらはんせ、わしらにも十兩や二十兩はくだんすと、髭口よりあいたてない、くはしやが云やうな口上、齋宮はどこにぞいのとする〳〵と立出、なふ七さまか、あいたかつたに、ようこそ來て下さんした、唐ちかくへゆかんして、いつあはふぞいのと、七が肩へ手を打かけ、目に淚もたせしとらすれば、七も相思ひのふかい中、太夫がせつ成詞によねんなく、かんじんの物語は床の內でといふ所へ、新介が聲で齋宮殿々々々、初會のざしきを捨てどこへぞいのと腹立顏、くはしやそれはやうよびましやさ、間を合さんと引三味線も、次第に調子高に聞へれば、齋宮はなふ七樣、おく座敷は初ての旅の客、御師の手代が付て來てなれば、手くだもならぬと云所へ、上する女サアいつきさんおくへお出とむかひに來る、七はぶきげんにて、たとへばいかやうな客なり共、ふり捨て來る心底でこそうれしけれ、面白ふない念比も是迄といへば、いつききのぞくがり、あらゆる神かけ、わしが心はかはらぬに、どうよくなお詞、初對面といひ旅のお人、やりばなしにしたとてそのむきなれ共、男色はそこらに誠のいきぢがなうては、衆道一道に花も實もない、客に何のあやまりもないに座敷へ出ず、我まゝいふては、此いつきが立ませぬ、さきの男も粹と見た、座配のわるいは、さすがいなか若衆とあざけられては、此所の名おれ、わしを笑はせおまへが嬉しうは有まい事、先こよひはおかへりといへば、七はなを

なをわかして、どう成とそちがすきにしたがよい、其やうなりつぱをみがく野郎にあはいで叶ぬ事でなし、身請の談合もさらりとやめるからは、花桐平七になりとも色かへてみる氣ざしと、中々おこりちらける有様を、一座にありあふ影子まできみわるく、桃尻になりてもさすがに座も立かねてゐたりける、いつきは聲ふるはして、それは七様不粋じやはあいさつきらるゝがかなしいとて衆道一通りにそむいた、いきぢのわるい事は、紫帽子をかけぬ法もあれ、ゑいたしませぬ、わしをおもふとは皆うそじや、せつない戀ならば、どふいふがにくい、かういふがきこへぬと、少しの事にはらを立、あいさつをきらふなどゝ仰らるゝ筈はない、左様なお方に請出され身まゝに成てからがむつまじう、兄様か弟よなどゝはおつしやるまい、念比切たくばおこゝろしだいと、いきぢを立て道理をいふにぞ、七ゝ誠ある心ざしに心はづかしく成て納得し、その心底聞てたのもしい、語つた同前隨分息才でつとめられよ、急用なれば滯留もなりにくゐ、追付長崎よりもどり次第身まゝにさせて、ゆるりとかたらふ、コリヤ弟と手を取ば、いつき悦びにつこりと、兄様無事でもごらんせ、待てゐるぞへヲ、さらばいとま乞の盃と、口舌たがひにいだきしめ、おくへいきやれ、御ゆるし忝ないと、おく座敷へ出、ちとわけ有ておそなはりました、いざ酒にと盃取上、東内にさせば、最前からの始終は、有まい事ながら立聞して我を折た、我らも去夏四條のすゞみに藝子を集め、川の上の床酒のみこんだ男、三ヶの津の口聞太夫子にせんじていたゞかせたい心底、そのふかい中を引わけては、衆道冥加につきる事、なじみのお方へしつぽりといとま乞致されといふ聲を、七も初會とはきけど、いかやうな客ぞとうたがひの心で立聞し、此一言を聞て嬉しさに身をわすれ、覺へずふすまをさらりとあけ、一禮いわんと立出れば、江戸の和東內、やあそちはなごやへ養子に行しいとこの七左でないか、身は國廻りして久敷便り聞ざりしに、よい所であふたとは勝手づく成あいさつ、七も急用の長崎下り作病おこし、二三日逗留して、一座の大さわぎ、衆道の情人油斷めさるゝな、屏風のきりん鳳凰が飛出よふもしれまい、

(二)木辻の門立女郎の揚錢は南部成川

女若二道は義理の源、情の根本、たのしみの至極たれかかぶりをふる事ならず、東内に天性米こい虫、これます事あたりも神の如し、陰陽二柱を思ひて、此間しばらく藝子遊び、それより鳥羽安乗的矢四日市、一身田迄さがしつゝ、酒にうかれてはねつおどりつ、松坂こへて六軒茶や、道中のはたごやの出女迄、あまさずもらさず色修行、閻の地藏で晝休み、五三平云には、古郷忘じがたし、しばらく近江へ歸り悴五四郎が粹に成たるか見て來たし、貴所も一まづ江州へお立より、それよりしが比良横川の花からすぐに都の花一見にくうは有まいといへば、和東内聞て傾國一遍上人、西行ざくらのにしの花先達て詠ぬれば、とかく二度とは賞翫いたさず、以前京より長崎へ急に思ひ立て西海へおよぎ、いまだ奈良伏見新見の大湊を殘し置ぬれば、是より伊賀越に參るといへば、五三はその心底からおして共申されず、難波でよしあし共にお目にかゝらふと、小盃に半分うけてつゝとほし、此たし重て〳〵とわかれて行ば、東内は名張の城下に一夜のやどり、色も香もなくせめては夢に廓をくはんじやうせばやと、笈をひらき見れば、何千兩共數しれざりし一歩小判みなになり、人めばかりの念佛に鈴虫といふ鉦皷より外に、金氣はいかな事二朱一つもなかりけり、こよひの宿挑もなくて修行者といふ德には詞さげて報謝に宿かしてといへば、おこせ共いわず、かたじけなうござるにしてそこを立出、なら坂や兒手柏のふたおもて、あつ皮づらなもてんほの皮やみらみつちやのくらがり峠と心ざし、行成次第の三界坊と、奈良の町を足にまかせて行に、小倉樣かりませふ、はやしよびましや〳〵いのと、花車のつかむやうな聲す、和東内爰は何といふ所ぞと問へば、門はく男そなたは唐の人か、日本人ならば木辻のけいせい町しらぬ事はあるまいと笑へば、和東内しんから底からゆげのたつ涙こぼし、六十餘州のけいせいを殘すまじきと思ふ身が、きのふにかはる有樣、うき世に金のなき程かなしい物はないは、けふと成て女郎の事思ひ出さぬ心に成たは口惜い、され共しせんとけいせい町へ行あたるは、是色道にかなひ、好色かよふ神の捨はて給はぬ事と、氣をむりにしなせず、取直しても我とかた身すぼり、女郎の道中するにも笠かたぶけて行ちがへば、大橋さごろも琴浦さゝやきあ

ひて、あれ見やんせ廻國のきぬいしやうはおもひ付たり、扨もよいきりやうの、めもと口もとかはいらしいおとこやと三人目もはなさず見とれゐる、それと聞よりあげや山形やの傳三郎、袴着して土べにあたまうづめ、承り及ました江戸の和東様御來臨は、古き都のさかゆべき瑞相、朝も晩も毎日お出を待かねました、あげやもおほきに下拙方へ御越くださる丶段、冥加至極もない〳〵お噂申た太盡様、それ久助おせなかの笈をしづかに奥へ御供と、いさむ程うき〳〵せず、とうやくのんだ貌つき、是ではおかしからずと、太鼓まじくら手ぐるまにのせて、むりやりに座敷の上座になをし此里にかくれなきみちのくにかしらせんじから、けふりもちかのしほがま、ながめもあかぬ、傾色にて、その名をとほる様と異名して、萬々年もなじんだ程、みちのく様ののぼりやう、てんと柏槙(びやくしん)伊ぶきもぐさのあつきもかまはず、火の中へもぬし様となら ア、しんき、きのどく山のよほんほ、ほれたとはひらたい事ヲ、それはたれゆへみだれそめにし我では有まい、なになふいつはりとはにくい男め、是でうたがひはれくされと、黑かみたけ永ながらにざん切の、神こそしらめうそか誠か、是でたらずば指は小ゆびか大ゆびか、おすき次第に切てやりてがしかるをも、かまはぬ氣に成は、女郎の眞にくからず、十日のつゞけ買けふはやよひの晦日雨そぼふりいとどしめやかに、名所の酒もけふある中へ、ていしゆ傳三は和東様に少御意得ませふと次の間へ立て、三ケの津の名酒のお遊びなされたお口へ爰らのにごり酒よもやと、存もよらぬ御機嫌、外聞かた〴〵添ふて有がたふて、今も今とて女共とも申ました、扨此比中のお遊び何か合て七十兩今夜は女郎やの拂日、何とぞ金子御つかはしくださる丶やうにと申せば、東内そしらぬ顔して、此度はつかひ切て一兩もなしといふに、ていしゆ色を變じ、實におつしやるか座けうか、くるわはたはふれ所ながら、金銀づくにおよんでは實事、やつし事はなされますな、イヤまつたく一錢も手にはない國方からおこさふ、それ迄其方請合てたもれと有ば、きよつとして、此山がたやは弓矢八幡かたられは致さぬ、覺もないにつゞけ買、とらねばおかぬと疊のくぼむ程座を打てわめけば、悪事千里と此里の太鼓ども、もらいためし紙花壇塚ほど持來り、よ

の目もねぬのみか、どこの牛やら馬やらしらぬ人を、旦那々々ともてなすも、客にはいわぬ金にいふ、客はかまはぬ目あては傳三殿、かさねても例に成一厘もかるめなしに、只今亭主お渡しあれと口々にせりかかる、次第に聲高に成ば、木辻成川うへを下へとさはぎたり、亭主はみけんに火ゑんを出し、わめいてもないものは瓢簞から駒も出よう筈もなし、さりとはよわみをみせては後日のため所のひけ、よいは〳〵古い格に百貫に編笠一かい、笯の内には何がなく共丸はたかにして、兩町の門をしめて、ちみどろにぶちたたけと談合一圖にきはまり、和東内もはや是迄、きやつらにゆびでもさへられ、生て何のせんなしと、引窓のほそびき首にまとふを、みちのくかけつけおしとめ、お氣づかひあそばすな、人はしらず木辻のみちのくが、一夜でも枕かはした男に、こぶしもあてさせはいたしませぬ、なんの七十兩や百兩はちりほこり共存せぬ、今年中にくがいをしまふを、年切そへて金子を立ます、大やうにしてござんせと、和東内にひつそふて、三味線引てさはがぬ躰、ていしゆ傳三は合點せず、是みちのく樣ゑしれぬやつにかた持て、ごまのはいと一所か、かねづくと女郎の口舌とはちがいます、やれ男共はげ〳〵と云付れば、みちのく臺所の庖丁ひつさげ、是傳三郎殿舌長な、年切そへて金子を立ふと云からは、あそびはなれて此みちのくが當座の夫、首尾によつたら二世迄そふまいものでもなし、かねを渡すといふにうろたへた一言、けいせいこそすれ、以前は二字をも名のりしものゝ娘あなたに手をさしたら、たれとはいはさぬ庖丁を切こむと、血眼に成ていへば、道理につまつて手ざしもせず、大勢うろつきゐる、心すへたるみちのくおやかたをよびにやつて、樣子のみこませ、何やら私語ければ、亭主得心の色目にて、扨々いづれも御苦勞と、皆納得し立歸り、此場の難儀をすくいたる、みちのくが謀を、內證から聞ば、女郎の持まじきものを、たくさんにためておかれたとの取沙汰、大坂の扇やの三千年と此人斗、かゝる時をや貞女郞といわん、和東内はふしぎの命をひろい世の中、

（三）片思ひは今道成寺銀のない撞木町

傾城といふ文字は、正しく伏見の色里撞木町より出たりと覺へぬ、いにしへの城かたぶきて桃の木原と

なれば、今も明石屋の裏城の跡と見ゆ、笹屋次郎左衛門が二階から、ゑいざんあたご東寺靈山清水、目前に手がとゞく、京にもない風景とて、所に島原有ながら、三里の道をやれいそげと、三枚肩の早駕籠中にとばせて、若手はいふに及ばず、年寄も杖にすがりてしもく町〳〵となりこむあり樣、近年めつきりと伏見かい道の地がひくうなりける、名取の女郎かめやのあはぢ、客は都に身は爰に、ひるねの夢もさめぬを、あんまりな事と、やりてかぶろたちかゝり、なぜおきさんせぬ、何におくたびれあそばして、夜着は隣座敷へふみぬいで、かたもふともゝも、それ〳〵今でもひよつと平樣が見へたら、あいそもこそもつきませふと、いへ共馬の耳に風、家ざくらを吹込春の名殘の、日もなが〳〵しい時分はたれも皆あれじやと、小袖打きせ歸りし跡にて、枕もたげて見れば下男の仁介ぞうきん持て敷居鴨居をふきゐる、あはぢよびよせ手をとらへて、ことの外腹がいたむ、ちつとおさへてたもいのといふをふりはなし、私は不調法、御氣色あしくばおゐしや樣をといへばコレ高聲しやるな、氣あいはうそじや、たれもこぬまに夜着の內へちやつとはいつてたもいの、仁介けふさめ、あられもないあはぢ樣と、にぐるたぶさを取て引たをし、下着もゆぐもばら〳〵に、久米のお仙が通うしないし所の出るもかまはず、のつかゝりかみつゐて、にくゐ男づらめと身をもやす、仁介顏ふり上あゝいたやのあはぢ樣、何の御不足が有て、此樣にてうちやくを爲されます、御意にちがふ慮外があらば、主人へおつしやつて理づめになされたがよい、あはぢぶきげんしてアゝいやるなおぬしは人の心ざしを無にして、よんべも人に腹立さする樣に、太皷女郎の一文字やの成瀬が付ざしを、ありがたそふにようい たゞきやつた、ほんにつゝむ事なれ共打あける、あの京の平樣もはや三十日餘りお通ひいろ〳〵のお情もくださるゝ、又みやる通りお器量にも不足はなし、毎夜々々のたはふれを、夕部迄も帶とかぬは、平樣の氣に成てみや、お腹が立まいか、こちを人にしてもかんにんはならぬ所、是程に迄心をつくすに、そなたは聞へぬ、おもへばおいとしひは平樣、思ふて下さるればこそ出にくゐ內を早追のやうに、駕籠にくるしみをして、買に來てくださるお方をよそにして、傾城みやうがをしらぬ程

に、そなたのかわひいもすぐせのゐんぐは、それになんとも思ふてくれぬは、どうよくものと、恨みなげゝば、仁介けうさめ顔して、いふてもしもく町ではゆび折にのるお女郎が、わしらふぜいの下おとこに、さうした事があらふ筈がない、ちか比よいなぶり物と思召か、色の情のなどゝいふはゑような衆に有事、揚屋の奉公といふ物は、おかしうないにも高笑し、庭では水くみ味噌をすつたり、あいには座敷で酒の相、女郎衆と打交猫に鰹でひいたりちよつかい、二あがり三さがり調子の替め、まひとつのめとむり酒にいたみて、どこともしらず臺所にころりとこけるとおもへば、連子窓はあかりさす、目をすり〳〵門はきせどはき水打て、ほんにぬれきげん所でない、人が見るとふしんがたつにはなしてくだされませといへば、仁介たしなみや、そりや聞へぬ、客にかはるゝ時こそ賣物の身だしなみ、そなたに心かけあいたいといふは内證、誠の戀、けいせいにはあらず、とりもなをさず町の女同前、あはぢ様もへちまもいらぬ、ちよつと〳〵とはなさねば、いや〳〵なんぼおつしやつても、いやといふに、すいには似合ませぬ、あはぢ赤面して、いやるな〳〵同じくるはの水のむ身が、是程いふにいやならば、たんのふする返事もあらふに、今の詞は外の女郎といひかはしたに極た、有やうにいやつたら埒のあかぬをくど〳〵と思はぬは、つとめせし一徳、そこらを思ひ切事はりつぱなあはぢが生れつき、ひらに打明いふてたも、仁介かぶり振て、給銀をからぬ法もあれ、せいもん惡性がましい義ござりませぬ、私もまんざら女郎のいきぢをしらぬ奴でもないから、かやうの奉公も致します、しかれ共賣物のおまへ眞實の戀なれば、しらの女同前、地女房は生れついてのきらい物、かりそめにも大事のお女郎に、地女のまなびさせましてはお名がけがるゝ、なんの事はござりませぬ、かた次第にてあす分限にならふもしれず、その時見事に買まして、お心ざしのお禮を申ませふ、あはぢ聞とゞけみゝさては傾城のいきかたみがく心底にて、只あふ事もいや、只あへばきらひ物のしら女、聞へたすればあげせん衣裳こちからとゝのへ、大臣に仕立てあはふ、いや〳〵人に金もらふは太鼓持と同じ事、それは猶いや〳〵の〳〵、あはぢはかへす詞なく、世間の客は死一倍のせつない銀を、かりにも女郎

の悦ぶこと斗と、せつき〳〵の仕舞がね、文やる度に物日も心得たとの返事、また折々は小袖迄して下さるゝお客にさへ、打とけてはあふもまれ也、けがの拍子にせなかをぴつしやりとたゝけば、そのうれしがりやう顔つきがちがふて、外の女郎や太皷の間がしのやうにはなして、悦ぶは男のならひ、是にくらぶれば仁介はゐような人やと、あまりの事におかしうも思へど、いとしゐといふゐんぐはに色にも出さずゐる所へ、出口の浄るり太夫いせ島吟竹、上京の平様おなりといひ來るに、仁介かけ出るを、あはぢは引とめ大事ない、暫ζ云所へ、平は來りて、あはぢどの見事でござるといへば、なんのいの手にそげが立てぬいてもらいますと、そしらぬ顔すれば、成ほど何もかもぬいてもらふたがよいと云ながら、かほいろつねならねば、吟竹きのどくがりこりや仁介、なんぼりちぎ一ぺんにても女郎様方にちか寄は不遠慮な、こちがせわにして此内へおこしたものなれば、そさう有ては身どもがたゝぬ、甚兵衛が何やら用が有げな、おれが内へちとの間いておじやとちらさすればあはぢせき面して吟竹どのきこへませぬ、わしはけいせいの事なれは、女房むすめのやうに男達へ遠慮はしませぬ、わけも有やうにいわれてはあはぢが立ませぬといへば、平はよいは〳〵めん〳〵の身持を、こちから指圖もならぬ事、かまはずに酒にせいといふ所に、病の重兵衛といふおろせあはたゞしく、江戸よりの御狀とほり出す、平は封じめくひ切よみてみて、吟竹身はいなねばならぬ、是みや今程江戸に疱瘡はやりて、ひぢりめんより本紅中もみ殘らず買あげ、ねだんは三双倍になつたと、日付は三日前、中村平右衛門殿へ浦上惣左衛門、是はそれがし江戸につとめてゐた所の面手代、此わろのかげで身どもらも大分金まうけをする事じや、いそぎ京中の絹屋を買ほし江戸へやらねばならぬ、沙汰なし〳〵といへば、仁介尻からげ手ぬぐひ腰にはさみながら、平右衛門が上座に押なをり、扨はわれは鐵炮洲の長藏かといへば、平右衛門不審ながら、すいさんな下﨟め、むかしは昔、今此遊興所で大盡といわるゝ身に、今の詞は何事じやとけしきちがへば、やい慮外者身をたれとおもふ、そちが江戸での主人和東内見わすれたか、はあ御意でござります、見ますれば御主人様、何故に其御すがたと、

いひさま跡へとびしさり、はれやれ御もつたいない、それ家來共宿もとへはやう行て、旦那御召のお小袖持參いたせといひ付、私義は伯父が跡目なきとてよびのぼし、十ヶ年先に京へ參り、此仕合、おまへの有樣何共がてん參りませぬ、金銀の御用は何程成共拙者に仰付らるべし、和東内居なをりヲ、滿足々々、定て沙汰にも聞たであらふ、身は色修行に傾國を廻り、一たん江戸へ中もどりし、それより北國の色里を見つくし、いせへ出大々うつて色めぐり、南を打とめにと奈良へおもむく道にて、笈開いてみれば、露がねもなし、ぜひなう手ぶり坊で木辻へ來りしに、道のくといふ女郎に逢ひ、揚錢につまりて迷惑、男の疵つけられてはと女郎の來るを見かけて、おとしの爲に首くくりのまね、まとのほそ引取を、道のくが心中立て仕はらひした、先此金七十兩、外に百兩道のくへ禮金添て早々やつてくれよ、扨それからの思ひ付、今迄金にせかして女郎廻してのなぐさみはひつきやう貢物誠なし、是からはやつし姿、女郎の方から思ひ付るゝ、本懸といふ物を仕てみたさに、金銀取に狀やらず、かねなしに撞木町へ此形て下男、波のあはちに島かくれたる間夫の體、心の底の深さを見んと、是迄情に貢らぬ、コレお女郎樣御心底萬々忝いが、身は通り一遍上人、爰らを平に頼む、そちは妻子有やいなや、伯父が娘と子中なし、男の口から見事な女房さへましした、其面影が此あはち、子は三歳に成まする、扨こそけふの說法是迄、只今廻向の金千兩、あはぢを身請諸事の入用、平が宿の妻となす、則某親分、主の御意じやがじやがア、何よりの重寳申請た、都の櫻よりも伏見の桃、花やか成し身うけ、おのりもので見事な義、

風俗傾性野群談卷之四終

風俗傾性野群談卷之五

（一）大名の御意は金鐵よりおも〳〵しい太夫風

七珍萬寶のお頭といふは光次公、戀も情もあなたの息がかゝるとその自由さ、黄なるかな色なるかな、新金のいせゐ元とは一倍まし、光りかゞやく川御座、舟つきに盛砂行列ぼつたて、跡おさへ白髪まじりの御家老馬より飛おり、サテ久しや〳〵和東内殿、去年は御親父方へ主人の用金無心申處に、早速相調へられし段機嫌なゝめならず、折を以て對面と申されし、幸伏見泊也、いざ本陣へ同道いたさふと手を取に、一國の大老の詞もだしがたく、和東内は上下を改め殿へお見へ御相伴仰付られ御馳走の上、直の御詞くだされ、其方大坂へくだると聞、よき次で身が川舟に乘下るべしと、御意畏て首尾能御前を立て、御水主三十八櫓拍子取て舟寄、五千兩の御用金のひかり、翌日大坂群集し、大名の川御座西横堀へうたひ込事、仁德天皇以來聞も及ばずと、高き家の棟迄のぼり、其見物のおびたゞしさ、見付ぬ目にはきよつとする、大佛屋の濱に舟をつけ、すぐに九軒の井筒屋へ鳴込ば、ていしゆも音に聞和東内樣、内々承た、千里一飛のお江戸風、大躰ではお氣に參るまいと、名取の太鼓拍子を揃手をつくし品をかへ、御機嫌うかゞへ共、ふしぎな事つゐに女郎よべとの御意出ず、只あけくれ藝女郎四五人よんで、うたはせ舞せ、誰さまをと名ざしなければ渡りなみの客のやうに、よつてかゝつてすゝめる事も仕にくゝ、さしもの粹ども大盡の心入がてんゆかず、東口の觀音算、西口の住吉算、見通しの占も、とけぬなぞと思案顏せぬ日もなし、お氣に入の庄九郎あはたゞしう、今日はよしのやのあげ卷樣ふしぎに内に、皆迄いふな其あげ卷よべ、そりや蛤の口が明た、是から鳴のかんぎんやめて飛で行しが、程なく太夫樣お出、引舟かぶろ座敷の位を取て座につけば、和東は杉浦といふ勾當相手に、將棊さしながら太夫どのお出なされた、指かゝつた將棊くづしませふといへば、引舟さしづめに成て、なんのいのやはりあそばせませ、そんならいたしませふと、何案ずるやら半時斗でやう〳〵しまひ、太夫下心には、我こそ今くるわで一二をあらそふせんせいなれど、旅のお客はそれをしらず、渡りなみの女郎が際で來たやうに思はれて

や餘りうれしからぬあしらいとおもへど、さのみいひたてもない事に、それにござんせとつゐ立ても戻られず、今くるわではがねならず太夫が、つとめ始ての氣くばり、和東は何げもないかほで、初對面の盃事濟で、お定りの床入、太夫しばし有てしとやかに、二つふとんの上にねすがた、此身を買れたが定よ、賈たは定、ふるなど〵は初心の沙汰と、心よくあひけり、夜明ければ太鼓の庄九郎お枕もとにつくばふて、棧敷は西の五六七を三軒申付ましたといふ、上する女はお風呂がようござりますといふに、和東ずつと出て庄九郎尻につゐて南へ行しや、夜半過に醉見だれて夢現、末社共に手を引れやう〳〵非筒屋へもどり、座敷にころりとねると高いびき、太夫も三日の上づめなれば、おかしからぬそひぶししけれど、明る日迄しやうねもつかず、やう〳〵暮がたにおきて、又將棊にさしかゝつたがさいご、べん〳〵だらりと夜食はすへながら氷をはらせ、かぶろにけんびきを三時もたゝかせ、引舟に目まひのくるほどたばこ吸つけさせ、あげらほんぼに太夫も氣をつかし、椽がはへ立出る、末社共つゞゐて、あげ卷樣ごきげんがそこねたさふな、座敷を破て御立姿、御心の底を承り、龍宮迄も我々がおわび申とお袖にすがれば、太夫につこりともせず、いづれも粹仲間の評判にかけて見よう、田舍國中を廻て、かるい女郎をこなした同前にあしらはれてうれしからふと思はしやるか、こなた衆も客の氣に入がよいで、うか〳〵見てゐさしやるそうなが聞えませぬ、太鼓もつも客斗の氣に入たとて、女郎を皮にして太鼓とは、いわれますまい、そこらに目かりがなうてはなんとやら心がひけふに見へます、是皆わしがいふではない、めん〳〵の心に有ふ事と、さんざんわかせば、こりや太夫樣の御道理、私共も如在ないは、あのお客一人の氣に入しとて、おまへの大勢の御客樣がたを取はづしては、今日の私共がたちませねば、毛頭太夫樣にかぎりおろそかに存ませふやうはない、なれ共それだけは田舍衆といふ所にめんじ我々共に御かんにんあそばし、ひらに座敷へ御出くだされませ、此まゝおまへをかへしましては、我々も今日切此里の土ふまず、紙くず買でもいたさねばならぬ、大勢のものがたちまちなんぎいたします、せひにおひざをだきまするとよぎなくいへば、情ぶかき

女郎のむごうもゑいわず、しからばいづれもの詞にほだされ、了簡のしにくい場なれど、こよひはかんにんしてつとめてやりませふといふに、皆々手を合せける、いかさま和東内樣の此度のしだら、いかにしても合點參らずと、庄九郎ひそかに樣子を尋、太夫樣腹立の段々咄しければ、是は太夫殿尤とも〳〵、秦の始皇の御狩此かたの尤、誓文我ら、遠い東のはてより聞及びて、當地へつくとひとしく、何とぞ稀の御げんもあらばと神々への心願をこめて、凡三十日あまり每日每夜お隙をうかゞひし折から、ふしぎのゑにしなし申たる事、是ひとへに汝が勤ばかりにあらず、氏の明神神田のおめがねのちがはぬ、守り目のとうとく、少しは初對面とておそろしい程に思ひし所に、爰をきゝや、太夫どのゝ初會から持て來よう、殊に當地は松の位も餘國よりもおほく、繁花の津、大盡も是に相應に全盛日を增す大湊、一二といわるゝ太夫殿の、かう迄はないはづ、此格ならばもつと前かどから借て近付にも成り貰ても早速に埒せふ物を、山もみへぬ前書さ、今度ないちゑを深入せし悔さ、よもや太夫の事では有まいとは思へ共、あまりこちにも腹の立ぬてんがうと思ひ、わざとせかぬ貌してあしらいしは、ゑやうに金柑の皮をむくつけ男とさみするであらふと笑へば、庄九郎ひざ立なをし、いかさま旦那の御意のごとく、がてんの參らぬ御事と、頰杖のひぢ尻もくさる斗の思案貌、和東內打笑ひ、なんぼ出しても根にない智惠は文珠菩薩の黑燒をのみたり共、などかひまづひやし〳〵、我等生れついたるくせで、かやうのこと打明さねば夜食がくゑず、あげ卷殿を是へ呼引ふね花車ぐるめ四ッ鐵輪で聞んといへば、是は御尤でござりますれ共、又太夫樣にもおかくしなされたいわけもござりませふ程に、下拙參りて委細承りませふといふ所へあげ卷ゆう〳〵と立出、なんにもかもとなりから聞ておりました、さすが名におふ和東內樣ほどござります、あぢな所に御ふしんが立ました、成程つゝみませうやうはござりませぬ、聞てくださんせ、おまへのお名は先だつて色里廻國とのきこへ、お江戶のお客さへいへば、すはやそれかと心づくしのまつかひありて、よねたちもおほきに、枕を並べましたも能々の御緣でがなござりませう、とはもたれがましうござりまするが、爰をはなさねばなら

ぬ所、私を請出して下さりませ、年と申てもはや四月にはたりませぬ、月二十五ならしにて親方の手前は埒があきまする、借錢もはづかしながらつね〳〵人にもにくまれませなんだゆへ、かいまつべつかひ物何かともに、二貫匁ではうつくしう濟まする、此里にゐては、深ふいひかはしました男の方へ、此度かへりませねばごふも義の理たゝぬ事、男も又死なねばならぬわけでござります、おまへ樣を男と見立、ことに情ふかい大盡樣と思へばこそ、女のあるまいむたひな事、かたりにあふたとあきらめて望みをかなへてくださんせ、これを申そふ斗にあられもない初對面からと良に入しほの色ちがへしてかたるにぞ、和東內もふしんはれず、いかにも引はいたすまい、其男の名所樣子をこまかにかたられよといへば、樣子はかさねて夫がきつと御宿所へ銀子を持參いたし、御禮に參るゝでござりませふ又くどうお問なされますれば、わたくしも爰で死まするとの返事に、和東もびつくりして、是はほんの藪から帽子と鉢卷談合いたそといへば、死ると云、拙者が一期のふちん此時と思へど、顙かけられていやと云ば江戶風をさみせらるるも口惜、よもや名題の太夫殿のかたりはなされまじ、いか樣身請した程には有まい、舞おさめを見るためと、親かたへ四貫七百匁、其外挪方へ二貫匁餘と、大かたにつもり黃成物百兩、外宮で又大々神樂打たとあきらめればすむと、時分がらほしがる物をわたされければ、三々が九たび斗いたゞき、忝いとは口にも盡がたし、追付急度御禮申に參りませふと、次の間へたち、急に和東內樣の身請との沙汰、早速埒明首尾よしはら町から門札を出させ、やり手かぶろも送り坂迎ざゝんざをうたひ、さらばゑ〳〵和東內樣の此度の御報謝功德いか程の善根でござりませふと、旦那寺の老和尙樣に花車尋られければ、しばらく目をふさぎ、凡佛說因果經にも未だ是程の善果は見へず、來世は慥におたけ百兩のあみだ佛にはうたがひなし、現世にても因果と申て、能たねを蒔ばよき果がはゆると申と、眞貌に成てほめられたげなが、手くだかしらぬが佛、つゐに音信もなきよし、こちとにくれ給はば、ずいぶんかせいではなをさかさうにサテ、

(二)欲にはなるゝ漁は是日本風

古き都や難波がた、ふるき都といへど二十二社めぐ

り、三十三所高津生玉、天王寺ならでは幕の打揚もなき程、繁昌の里は西方女郎町、北方にござんせ〳〵の茶屋、南に呂白のかりましよの聲かまびすし、御津と書て三津寺の邊より巽は、まんざらの素人屋と見へぬ程の、遊里野白の油見なぎる道頓堀は、咸陽のむかしにことならず、此川水を呑、鯒鯊のあたまがちにびこつくも尤こそはりぞかし、和東内も打つゞく曲輪の大よせ、今日は心ばらしと庄九郎孫太郎同道にて、太左衞門橋貝塚や半兵衞方より舟遊び、相方の太夫其外名代の太夫子一兩輩、しそくの半四郎福松、料理人の作兵衞が鍋釜入ずの早喫物と、出かし良は猿ばしに宗十郎が追出し太鼓庄九郎しかつべらしう此方のしばゐの果の人を御覽なされませとは、ひいきへんば良が大きな事をいひ出したと、是を御機嫌はじめさかく色にはめのつく前垂島の端にて、しき海老をねぎりもあへず三ばい、籠から明させなんと旦那當地の名物でござりまする間、ゐんまのお尋の時分御返答もいかゞなれば、少々お慰に棹をおろされましてはといへば、いかにも〳〵能なぐさみならん、去ながら假にも色道修行と名をよばれし我に殺生戒はと宜へば、その貝の字こそ曲ものなれ、けふは所もかわり品も替りし水あそび、ぜひお慰にと針に餌つけて指出せば、是は箸取てくゝめる仕方、あたら目を囚人の番するやうにもしてくらされまいとの、お笑ひ草にもと孫太郎が又四郎ぶしに舟中浮たち、舟端たたいてさはがしく、怪我にも鰤のはの字もかゝらず、ぎゐんなをしに一ぱい呑やうたへや、一寸さきはやみの夜には、角大師共取ちがへべき角前髮、褌ぎり汐にひたし蛤ふむおかしさ、和東内さみせんからりとすて、扨々世の中はせばいやうでひろく、ひろいやうで又せばいもの也、此なにはの浦にて何仕たり共、口すぎのあるべき中に生れて、しかもほね組たくましき、牛頭馬頭のした働も成さうな風で、けさからの仕事漸桶に蛤が三四升、九々十文づゝに賣ても四十が物はあるまじ、是を思へばこちどが大切な月日を、あだにくらすさへあまりあるに、金銀をつかひ捨る事こそもつたいないと、悟りの色目見へければ、庄九郎くちがしこく、それは三つ子も存知てゐる事、皆前生よりの約束、あの蛤めがこんなめにあいたいと六十餘州の神佛へはだし參り仕たればとて、濱なみひと

つの冥慮もなく、又旦那があのまねを一日物好になされて見たいと思召ても、御一家中から御得心はないはづ、とかく過去からの下拙は太鼓持とあきらめれば是三無差別何にもいふことはござりませぬ、銚子なをしませふと立てば、是はでかした幸あの蛤も、ついに色酒くみたる事も有まい、爰へよんでひとつのませて、一生のおもひでさすべしと、こりや〳〵前髪酒ひとつ振舞とよべば、忝ふござれ共、こなた方のまねしては、明日がくらされませぬと、ちりもはいもつかぬ返事、なれども晩迄精出してから、錢百が物はよもとれまじ、そこらは此方へうけこむ事、氣づかひするな一ぱいせよと、むりやりに足ぬぐはせ、艫の間に引ずりあげ、何がなしに行がゝりに、天目に三ばいずつとほし、扨も結構な御酒かな、かやうな酒は久しうくだされませぬ、何じやひさしうくだされんとは、どうやら體な事をいふ物じや、在所はいづく名は何といふぞ、蛤と鴫の口すふたも見ぬが汝も若衆のきれと、太夫まじくらにどつと笑へば、蛤口をひらき、是はお詞共おぼへぬ、お若衆樣其外歴々樣もござりますが、さやうにおろさぬ物でござります、おとろふをいやしむなと、寺で習ふた謠にもござります、わたくしも出在家の長松と申せば、堺の高洲では、餘程知られたおとこ、ひたいに鑷もあてる物に、御仁體にも似合ませぬと、一ぱいきげん血眼に成てむつかしく、庄九郎すゝみ出、餘りごりやうがきつい〳〵、當世はその手ではいかぬ、酒をのまれ一座の興をやぶられ、たかでたゝいてやろにもはだか身、水練はお家、ひとつも德のないもの、細長ふおなぐさみなされませと、庄九郎しかつべらしう、我々はけふははせ釣所存なれども、少しもくわず、五六十が餠、魚立ヘ施行いたしたが、なんと喰そふな所があらば、教て給はれとあれば、賣詞にかい口もやはらぎ、かやうに風のある日は、どふでかゝりませぬ、鬼の雪隱がよふくう所でござりますが、それよ雪隱にも大御座一艘、てうどかやうなお若衆も五六人、乘た油の酒ごとの最中、和東内うき立、こりやおもしろからふ、鬼の後架とやら湯殿とやらへ舟をやれといへば、舟頭ふしよぶしやうにまらかいとりなをし、どこへいても同じ事じやとふつやく、長松さし心得われらもさいてやりませうと、とぶがごとく鬼が城の舟より見付、七二郎樣かアイ

わしも貝塚やから來たと、たがひのちかづきがほ、和東内もよきなぐさみ、先の大盡も粋ならば、舟を打込大さはぎにしよまいか、いかにもといふより早く、跡さきかまはぬ野郎子共、隣の舟へ飛こへはねこへ鼓太鼓とさはぎければ、亭主和東内にむかひ、是は餘りと申せば不遠慮、あなたのお客樣へ御案内もなくては、卒爾千萬と申せば、和東内うなづき、實も〳〵と庄九郎にさゝやきければ、委細承り候と、隣の舟へ手をつき、ちと旦那樣へたのんだ物から使に參ました、御ゆるされませと障子明れば是は五四樣、扨々お久しう御意得ませぬ、此間高島やにて今川樣にお葬申ましたれば、南島に斗り御座なさるゝとの御物語あまりいそがしうて、跡は承りませなんだが、ふしぎの雪隱でおめにかゝりました、下拙今日お供申ました旦那和東内から、ちよく使に立ましたと、いわせもはてずそれはお江戶の和東殿か、いかにもの返事より先へ、扨々久しや〳〵、五三が子の五四じや〳〵、おやぢが伊勢地より貴所とわかれ立歸り、大坂で出あふ筈にしておゐたが、大かたそちもちゑが付たであらふ、名代に汝くだりて色道の悟道せよと、呑さしの小盃給はり、親の御意で是へくだり、廻國すがたの大盡は見へぬかと、尋々てくるはにも十四五日、高島やにて滯留し、行衛を尋れ共、六十六部の女郎買は、天滿から今の新町へひけてからきかずといふ、それゆへ此程は南へ立越、役者子供衆に繪圖迄かいてたのんでおいた、しれぬこそ道理、かやうな海中にてあふとは、龍神の引合ならではと手を打ば、和東内成程尤じや、伏見より廻國すがた是にも段々いわく有そ海、はまの眞砂はつくる共、伊勢地はなれてよりのうきくらう、咄したき事斗也、是よりすぐに傾國へ同道して、親仁が至りの小盃でのみあかし、ゆる〳〵つもる物語いたさん、はやう〳〵といらちければ、舟頭共舟を綴合、すでに棹さゝんとすれば、はまぐりやつゝ立あがり、われらはおいとま申さん、今は何をかつゝむべき、我此うらにむかしより住なれたれば、住よしの大海童子と申者、兩人心中の願望ゆへ明神あはれみをたれ給ひ、我に引合得させとの、神勅まさにうたがふなく、いふ浪の汀なる通ぶねに打乘て、沖の方へ出にけりや、桶のはまぐりと見へしは、吹たての新銀びかぴか、

(三)金銀を蒔ちらすはお江戸風

曾我の五郎十郎が神と祝はれて、敵打者をまもる事、其しるしたなごゝろをさすがごとしとや、そのおろかさではびんぼうしたも道理、我ならば傾城の間夫男を守らふにさて、五四開、おろかな和東内殿、好色一道の衆生をすくふは矢よりはやい、金銀の開帳して、貧な大盡色事にくるしむ者共の願ひを聞て、のぞみをかなへてはなんと、是は色道の上分別、我ら奈良にてのめいわく身に覺てつらかりしと、くるわの西口東口へ高札を立ける、

當所九軒山新町寺井筒院におゐて
陰陽濟渡の生佛開帳幷靈寶目錄

一黄金判付の大判　一刀三禮
一色好古金駿河小判　一字千禮
一同元の字名號　同
一同乾金の御影　同
一同大形の尊像　御たけ一歩
一上金御堂の寸白光次公の御影　二朱渇摩作
一半金色の如來
右の靈寶功德廣大にして色道一通りの願事叶はずといふ事なし、間夫男は往さ來さのくるしみをのがれ、或は金づまりの心中、おやの勘當、主人を欠落なごする輩早速來らるべし、開屆所願を相叶ふべき者也、

好色山傾性野大金の
目代江戸和東内
年號月日　同五三平一子 五四郎

と書しるしければ、あそこからも爰からも、開付來る事、門前に市をなしける、中にもあはれなは二十四五の男、布子も羽織もまつくろ〳〵、鳶仲間の日用ゑい、所は天滿夫大神をおもひ初て二十五日のおまむきおやぢが命にもかへぬをぬすみ、手もとにあつた斧一丁そへて、割木問屋へ二束三文に賣はなし、銀おこすかと思へば、親仁に前の殘銀百目有、それさし引といふに、おどろき、こまかに割て開しても、ねんもない事くれませぬ、おやの内もおひ出され方々借錢ひつぱりだこの、手と身とに成まして、しなふとおもふて夜前北はまへ行ふとすれば、犬がほゑて通られませぬと、男なきに泣て、おじひ〳〵といへば、兩人打笑ひ天滿の敷地に有ながら、氏神のゑんりよもなく、太夫でもある事か、天神にのぼつたばちじや、命たすけ

て女郎にあはせてやらふ、是を人にとられなと、大形一兩とらせける、跡より二十斗の坊主、私は去大名の祈禱寺、宗旨は眞言弘法のながれを汲ゑて野郎地若衆にわづかの寺領つかひあげ、いひかはしたこと葉もあだに成がかなしさに、佛をいのるおんあびら、雲絹緣の護摩の壇を枕にして、夢のつげ有がたく、寺から里へかけ付ました、我等がやうな衆道ずきに、金銀を野郎々々とおつしやるげな、忝いとかしこまれば和東内打うなづき、こなたの宗旨は現世の福德をおもてとする、金胎兩歩の文字も、一歩小判を表したれば、貧乏にはない筈なれど、參錢奉加のたまり銀、若衆ぐるひに尻へぬける、ちとたしなましやれ、みついではしんじやうが、此金をさいはいに、風呂白人とだきあふて、聖天のおこなひ事は、かならず無用と笑ひける、其外仕過しの內大盡共、からぞめきに着物のすそびんばうの合力と、私は淡路町のせと物や、われらはいたちぼりの點者、其外宮川町の骨柳屋、江戸町の鉛屋、立賣町の切屋、おまへ町のらうそくや、戸屋町の瘡醫者、過書町の油土器や、釣鐘町の挑灯屋、砂場のこんにやく屋、周防町のあかねや、八まん筋の弓や、馬屋町の太鼓打まで、我も〳〵とけいせい野郎にそまりて、身の上のあはれなはなし、ひとりもおろかなるはなし、內證はいわねど大かた十八が十五人迄も、たゝぬがち成世の中、かやうな事あてにして、かさねては算用も粟津の六兩づゝ殘らずやれば、皆々おしいたゞき、是にこりませふ、ふと梅わかげのしぞこないと、よろこび皆々歸りける、跡より二十五六の男、十八九の女手を引あふて、私どもしゞみ川の石灰屋でござりますが、しやうばいかたのしゞみがらを、おもひはむねの火にやかれ、あふ事かたい石灰とうき身をなしてかなしさを、あはれ銀子二〆匁くだされかしとねがへば、五四郎聞、此方に銀はなし、二〆匁ならば三十兩とらそふかといへば、それはあまつてもたゝいても、戀路のまよひ、やはり銀で二〆匁申請ましたい、ハレむつかしいもらいやうと兩替させ、西口の渡海屋包にさせて渡せばア、忝ないと三度いたゞき、誠はひらのや德兵衞天まやはつ、せつないやうすは町中樣御存なれば申はくだ、是を主人へ渡して、亡執の雲はれまするヽと、冥途から迄無心に來て、うれしや今こそ親方の帳面けすがごとくにうせけれ

ば、是はふしぎと横手を現ともなく夢ともなくあげ屋と見へしは峨々たるいはほ、柱々は杉檜の木の、もとのすがたと枝しげり、釘かくしは松ふくりと、みどりさかゑて春風さつと、山路の木立と成にける、紙子仙人一番の碁を漸々と打しまひ、いかに客人目擊一瞬にみゆれ共、坂東坂西遊里六十六ヶ所也、かゝる奇特を眼前にみるも語るも、他生の緣あればこそ金銀の通力自在天神かこひ端女郎まで、ときはの松の色品をあらそひ、化も情もかりの浮世にかりの身を持、かりにも契短遊びにこま銀をつかひて、分知顏は非の内のかわず、わざはやか成事はみぢんしらず、それさへあるに、昔とは違て今は傾錢ぐるひじやの、イヤ地ごくの沙汰も錢もたずのいちはなかけて、さもしい噂は至らぬから色道はその本躰をもとゝせずんばおかしからず、只過不及を第一と心得、あきなひの手談にかけ目なく、身上の點を入、金銀の地濱をかため、慰む所が黑白の粹、我は好色世傳仙人、予は變男美面法印、住家はちりの浮世ぞと、ほこりをばつと吹立て、虛空に見へず成にけり、澤山大盡かんじ入、傾專野の奥儀をさとり、それより彥根に立歸り、九つの家藏子息に渡し、いぬゐの角に目を持て若隱居し、和東內五三平とも尋あひ知音むつましく、今に和國の三大盡と、つきせぬ花の梅さくら松、榮行春ぞ久しき、

風俗傾性野群談五之巻終

傾城太々神樂

序

江口神崎室八島よりこと起りて、當世うかれめのなさけにほだされ、戀の奴となるは性の惡ひうわきからといふは、無垢色里のわけしらぬ人なり、朝に金をまふけて夕に捨とも可也と、椀久が家の集に書しは、もと色道所分拔萃の本に見えたり、さるからさぞともうちかたらはゞ、命の根つぎとおもへどげには少かこつかたのありて、かゝが留守のま親仁が碁打とき、書出しくばりにあるく折ふしなんどぞちよつとものになる、又世渡に辛氣をこらし、あるひは手代かしかればまゝならぬ世のうきふしもわすれ草、物のあわれもこれよりの、戀のたねまき置し梓のいたにちりばめ、六卷となして大臣の神慮をすゞしめ、色里に引なびける傾城太々神樂、穴面しろや、

寶永二つ榔床とりのとし暮の紋日

傾城太々神樂目錄

目錄終

傾城太々神樂卷之一

第一　行當の延助

鶉なく里をば、かれずとふべかりけるといひし、むかし男の袖鏡といふ色道の艶書、よみ習ふ事は門徒宗のおふみよりもたふとがりて、終に染川の色にうつるならひゆへ、うつの皮助も袖下たんきを何處でやらつゐおとしてすいのわけしり、友よぶこどりあかつきつぐる八ころの、島や嘉兵衛がしりをもつからはきづかいなしにおじやといゐば、もとより誘ふ水あらばのくされあい二三人寄合て、そんなら今宵はごふかこふかといふ內にはや錢四十文つないで腰に付るもあり、山吹色のかどらしい又はしろいものなどとりませてねぢぶくさ取ておし込む巾着、是みや此比もとめたが印傳じや、よいかわの印籠は春正おじめはちさけれど珊瑚珠だまの盃底ある男、とりが引手になびき候へといゐば、それもそうとて打つれてゆく三河のかきつばた二つわり渡せる橋をふみとどろかし西をさして、入は月かかげかといふもおかし、さて揚屋の繁昌格子の慰ひまごとに和國隨一の色里、善つくし華つくせり、いつぞ今夜はぞめいて通りもの、どこへとたゝく扇子のゐしやくなしにつかまゆれば、ありしむかしの神ぐらの庄左衞門、さてもめづらしや何としてげぢの地獄にはおちたぞといえば、さればいせん此難波津の色里へも盛くばりに來て、又よしの川の錦を身にまとい、故鄕で花をやつたれば此やうな事でおれらがやうなもの八人一度に京地をせばめられ、それより此津にくだりあたま剃たらば京も難波もよからふかとおもひ切てそりはそつたが付たくせはやまぬ、兎角しつたこぬか商ひ又かうした事、とても京で盡はてた不運の身じやほどに、名について今は京運じやが、顏の皮が一入あつうなつて太皷がよふなる、彼鳥も猶うかれ出て、それはそなたの此里に戀かといえば、いかにも戀じや、せんじ茶のこいがのみたさにかうして働といふてわかる、とりはそれから友だちどもわかれ〳〵の局入、天のいわ戸を押立るかやうの折にぞしらるゝ分限のよしあしちから草も、根引の大臣北濱の登といふ客、いばら木やの半太夫に命かけたる中、こよひも千代をかさねてあい染川の水に一ふでかきつばた、三昧を枕

の糸鬢、當世やうの風流、太夫もさすがいわけなくしんからしみ〴〵との咄し、しよは染のうわ着脱て、ぬし樣にと目くわせするを、しりたり顏についたつ禿のしこなし、どこからどこ迄叉あるものではない、京運も太鼓じまんなり、まわつてあぶらのせる一座の持樣は田舍人にて、此里はじめてものごと空らしうあしほしらしなど禿がそゝやくも、我ことのやうに引うけ〳〵酒のむばかりは上手めいて、顏はむくつげくあい相もない筑紫なまり、いづみやの見よし野も勤の業とて揚られたれど、めつたにたばこの煙くゆらせて此やうな繪があるものといえば、かの空もしらず、まして京運は外方がない、はてゐのかいた瓶風にの煙をふいて猿の子をのせ、きせるのやうなものかたげてこわい顏じやがの、おふこわといふ尻目づかいも我身ながらきのどくそうに見ゆれば、客もむつと氣になつて、京やのたかま茨木やの若くらあふぎやのみやまそれ〳〵つかんでこい、大さわぎにとぞめくにぞ、京運もあきれ、歌ざいもんのはじくれ所々しごがなければ、分は京へものぼつてくる、そうじて廓といつぱ、内外清淨地清淨天しよく松のくらいにつかせ給ひしにより、ちつかの文をかきあつめ、ふるての親仁をよびいれて、毎月三十日の紙屑ばらい、一身三觀の柏手に、氏神あいぜんまもり佛、しんしんこがすあるじの紙はくせつかしく、日につきのかきぞこない、客の返しのもしほ草、くされ〳〵かわらぬ中揚やのかみはすこし匂ふ、ひやうぶきやう神ばらいよりもましとやら、ことに女郎は戀と情とうらみとおもひふりと姿の六根清淨、まつた道中揚やのけ込まで、そふしてこふしてものとして、顏は懷の



內へもはいりそふないづくまい、戀のまことは色道の三神、色里三種の寶藏こゝにさかへてながいもみじかいもひげをぬかせてたつた一ねぶり、鳥も此事立聞て面白事におもひつのり、此里に入こんで色とさいもんに身を捨小ぶね、さしも大分のもとでをみなになし財寶は分散、たとへ町衆がたゝりをなすとも別義はないと、錫杖おつとりかけ出て、いく玉の蓮池にかけ作り、京歌ざいもんのかき付して、毎日べろべん〳〵の口すぎ、かれを見これをきく時は、一いろなりともならふておくがよい、

第二　戀のうき橋

傾城の胸はうそのいれものとかや、又客のまへでこぼすなみだは獨蔘湯のごとし、一雫もよほどの金目ぞかし、このやうにいひもてゆけば、世界の罪は女郎の身ひとつにつゞまりぬ、さるよねしうかゝる事どもをおもひつゞけて、うまれぬさきの科のしらまほしいといひしもげにさる事なり、未通上の春より、十年花見ぬ里にくらし、歯朶うる音によろづの世話をとりあつめ、もとでなしの面々世帯に、客の手をまぶつてゐるは、これほどあぶない事もなし、されぱかぶろは人間の種ならぬぞいぢらしき、さりながら神佛に盲者も聾者もなければ、心だにまことにもつぞならば、祥のあるまいともいはれず、まことや大さかやのやしほ、まだ火のあがらぬゆふまぐれ、茨木屋の端居に只一人、煙草のけぶりをものすぎに吹なして、おもふ人のあたりの空とながめやる所へ、廿五六の美男、どうもいはれぬ風にてする〳〵と立より、これ申太夫さま、いはずとも見給へふかいおもひの色をとじつとしむれば一めもしらぬお人の、なれ〳〵しいしかたはいやらしいぞえ、よしたれにもせよ、さうした事はなりませぬと、素としたかほつきに、かのおとこ正眸になつて、いかにもあやまりました、ゑりつきになびく君じやものを、なさけごかしは愚者のむかし、月やあらぬの時代の事と、立のくもすご〳〵と東むいてゆくを、申々と呼もどし、いかにしても今のことばはきゝ所、かうしたつとめの身なればとて、賤しきかたにばかりひかるゝものでなし、身はうれど心はうらぬ品もあり、よしや一度にうき名はたゝじ、いかにしてもなづましいおとこよと、おもひよつたも何ぞの罰といふしりごゑも、鼻息にまじるはやわざ、

太夫職には、ためしまれなる思ひをはらさせければ、か[illegible]おとこおさめたることはつきにて、汝はまことの情しりぞかし、此うへからはしあはせめでたくまもるべし、我は業平が遠き世の、むかしおとこといふかと見ればたちまちきえうせけり、ふしぎなやらこわいやら、又なりひらといふたればなつかしいやら、心ひとつにおもひみだれて、其四五日は氣色もすぐれざりしに、俄に身うけの沙汰きはまりて、東口の門をけふといふ今日出て、稲荷へまいりてから、かのなりひらの守るべしとのたまびし事、おもひ出してありがたかりしとや、廓に女郎おほい中に業平の此女郎を見たてられし事は、日比心ばせのやさしかりしゆへ也、いまだかぶろのむかし、雪の日、鐺本又兵衛が門をとをるとて、

　雪餅やきゆるぞすいのなさけしり

此句をながめてより歌道に心をよせ、敷島のみちにわけいらんの心ざしふかくなるにしたがひ、なさけの道もあさからざりしに、新艘の比よりなじみをかさねたるおのこ、世をはやうなりぬるを、ともなはれぬみちとふかくなげき、せめては水むけるばかりの心ざしにとて、禿を寺へ代參りさせて、その歸るを待かねて墓の分野つど〳〵に詣て、石塔は青石でござんすといふにぞ、又もなみだのこぼれけるまゝに

　なき人のしるしの石のあさみどり
　　きくもなみだのたねとこそなれ

となん、すべてやさしきことの葉どもおほかり、或時女郎をながれの身といふ事は、いづれの歌書に出たことばぞとたづねければ、ふるき書にては見あたり侍らず、只是は客よりの內證見まひの心あてちがふた節季には、當分いらぬわたくし道具どもを、西口の質屋へもたしてやるが、をくとさいごにながれの身こそかなしけれと申事ぞや、

第三　心中兩手繩

砂長爲巖之頌、洋々滿耳御代に、斗米三錢の値は、むべ瑞穗の國の德をあらはし、快樂の眉壽をたもつ萬民夙にをきて京の方をおがみ、夜にふして江戸の方をあとにせず、いよ〳〵冥加あるべし、春のみやこの町くだり、わきて長閑なる人の風俗、地主の櫻より、安井の藤にうつる花見幕に、春時鳥きくおかしさ、あるひは祇園の野弓にたのしみ、靈山の稽古能にあそ

ぶなんど、おのれ〳〵が物ずき身體相應のたのしみに事かゝぬは、餘所の國にない事、天下の美容色道もこゝをうつせば、末々の情もいやしからぬわけ、美所贔屓にてはなけれどもと、おろせの權兵衛が鼻口か、鰐口をすぼめてかたる所へ、源樣今日は御逗留の筈にて追付是へ御こし也、此文かたばみや迄はやうはやうと、蛸藥師の七六はまだ二月の初汗ながしてかけ來りつゝ、とんで歸れば、又無理いひの大將樣の御なりと、鼻口は文とゞけにはしりぬ、此御敵衆大坂屋の花崎さまは、室町の助樣にてけふより三月廿一日の御影供まで、二文字屋にござる筈、かの客にかぎつて女郎をもらかす人にあらず、又源樣つね〳〵あの客をせかせらるれば、日比のよこぐるまおさせ給ふは見へすいた事、さりながら、一もめもざくつたあとは、中なをりの大會、どちらへこけても宿やに損のゆかぬ事、當分すこしのせわやくぶんと、中づもりする所へ、源樣來現、御こしづけの佐右衛門、けふの樣子はやくもうけ給はりたり、それ太夫さまつかみにゆけ、二文字座敷をけたて〳〵てはや御出と申せ、客をさばする事鞠のごとし、そのかはりは此旦那千增倍の御つとめ、われらたちまち請合奉ると、血氣天井をつきぬくあり樣に、かたばみ一家も千人力のうしろだてとせい出せども、さきのあい手も口きくおとこ、埒のあかぬ首尾となりくだれば、こなたの腹立大かたならず、さきもおとこの意地なれば、女郎くれぬもことはりなり、とかく助が歸るさを、本國寺の門前にて微塵にせねば堪忍ならぬぞ、佐右衛門智惠を出せとりきめば、げに一ゆすりゆすつて御らんも一興なるべしと、車中間のおとこだて、名にふれたるものをあつめよと、おろせの權兵衛承て、二十六人同道仕れば、佐右衛門ははかまのもゝだち高く取、ゑんのはなに立出、おとこだての假名實名、一々次第に尋けり、先一番に、紺の布子に天鵞絨の半襟釘抜の眞鍮紋の、ひかりのどけき春の日に、しづ心なくちる花か、雪かあらぬか鮫鞘の、三尺八寸候ひしを、おとしざしにさいたるはいかなる人ぞ、さん候それがしは、梵天の長右衛門とて、年つもつて三十一、喧嘩にあふ事六十度、一度もふかくの名を取ず、此度の先陣也、土足御めんと座敷に通り、床のわきにぞなをりける、扨二番

に肌には鎖帷子、うへにはあれたる駒の中がた小もん、だてのうすぎや只一つ、帶のむすびめ角たかく、熊の毛雪駄はいたるはいかに〳〵、これは癖疾の久右衞門、去年三條の橋御普請の砌、大間の柱株六本からげて、麻をふるよりかろ〳〵と打かたげ、洛中をあるきし事紫宸殿まで御沙汰のありし男と、よこにひずんで通りけり、第三番に額に三寸六分の刀疵、見るからつよひ人さうなり、さん候臼の傳七かくれもない、うすをひけさの彥惣とも、京わらんべのうたひしは、身どもが事でごわります、其外犬の七兵衞不動の喜兵衞、闢の太郞作蚢の仁兵衞、肝墮の德左衞門、蝦の吉兵衞、唐の文右衞門夜食の傳六、つけめの次郞兵衞鬼の金八、施餓鬼の五郞兵衞坊主の四郞兵衞春駒の善七など、いづれも馬鹿の骨張、あるひは立髮せみをれ後家しまだ、抱鬢いとびん手先さがり、大ばり小ばり唐犬びたい、二十六人くるま座にならべば先おちつきに、蕎切百桶、諸白七斗、ものゝ見事にせしめけり、此事二文字かたにはやく通じければ、とかく無分別でかためたおとこに、相手になるがうつけと、たいこの玄庵丁簡にて、花崎さま今日ばかりは進上と申來れば、ぬかぬ太刀の高名、これといふもいづれもわかい衆の力風の威德と、うれしがる事をいへば、歷歷のものどもが、ふところ手してもござるもほいなし、何にてもすさまじき事して旦那に見せ申さんといへば、梵天の長右衞門は座敷の柱をかたはしから引ぬいておめにかけうといふ、犬の七兵衞は前栽の飛石をほりおこして、しなだま取ておめにかけうといふ、蚢の仁兵衞は猯をいきながらくふて見せふといふ、夜食の傳吉はちつとの間にほりぬきの井戶を五つほつて見せうといふ、其外おもひ〳〵のちからせんさくに、佐右衞門ははらすぢをよらして、さりとはすさまじいせんぎ、去ながらこちの旦那にも又すさまじい事させておの〳〵に見せ申さんと、小判五十兩づつ土器にもつて、二十六人に一つ宛氣をはりけるは、すさまじいとも見事とも、

第四　風流の目利

女郞はうそのかたまりといへども、其中に實三つ有、一には借錢のある事、二には茶づけくふ事、三にはしぬといふ事也、まことに此しぬるとはいかなる事ぞや、三界の有情すべて此道をまぬかるゝ事なし、はか

なき物にていはゞ、蜉蝣のゆふべをまち、夏の蟬の春秋を知ぬもあり、久しき物にていはゞ、ちとせの松は薪にくだかれ、よろづよの竹は田樂串にけづらるゝ事、目のまへの無常ぞかし、されば朝顏の花のもろきを見ては命門の脉をうかゞひ、烏鳴のわるきをきいては、となりのお婆をあはれむべし、ことし寳永二年春の比より、瘡疹(はしか)といふものはやりて、人おほくなやみしが、そのはてさま〴〵の病となつて大分しにうせけり、とりわき七月にはおびたゞしくしゝけるにや、道頓堀の墓には千二百人灰になしけるとぞ、算用して見れば一日に四十人づゝなり、難波津の墓所爰のみにもあらず、小泊瀨、飛田、野枝、曾根崎、梅田、葭原など、こゝらにをくる人も又かぞへしりがたし、これを見れば始末もいらぬ物也、むすこの夜あるきも折ふしは見ぬかほしてゐたがよし、家賃もまけてやり、むまいものくふて見たい所見て相應にたのしむがよいはづ也、身の後の寳は、生前一盃の酒にしかずとぞ、たれも〳〵分別すべき所ぞかし、是も無常のかずとかや、なにはの色里に松の位のよねしう、かの瘡疹にて水無月十八日に世をはやうなりけるが、色をにくむ人なければ是をおしまぬもなし、されどもうきふしの身のよるべさだまるよすがもなく、曾我曾我したる野邊をくり、切燈挑燈二つを、內の丁稚とそば切屋のむすこがもてば、備駕籠は久三郎と作介がかいてゆく、おいとしや此お女郎の長持をあげやへまはしたも此ほどの事なるに、それに引かへたるこよひのありさま、さりとはさだめなき世のすがたと、かたびらの袖をぬらしぬ、此外あげや亭主五人、たいこもち二人、座當三人やりて一人、紙うりの八兵衞やきもちやの又兵衞、これらならでは葬禮の供する人もなし、あはれなるものは女郎の終焉のゆふべぞかし、太夫にてさへかゝるありさま、ましてやよこ町のよねたちおもひやるべし、さて道頓堀につきけるが、火屋のうちはさら也、外の燒場も大分の死人にてところせきを、漸々かたはらにて茶毘しつゝ、灰よせは明六つとさだめてかへりぬ、其夜八つ半の比より白雨れいならず、杵のやうなる雨のあし瓦葺もつきぬくばかり、雷公大地をうごかし電まばゆく、いかな公平も應時得消散ととなふべし、漸々夜あけがたにしづまれば、灰よせの時分ぞと燒場にゆきて尋ぬれ

ども、夜の雨にてそこらの灰ひとつにながれかたまつて、いづれとわくべきやうもなくきのごくなる所へ、陰坊は骨佛五六十ばかり𤗼にのせて持參し、夜前の往生人は骨を此方にあげてをきました、ごらうじませとさし出せば、扨も氣の付た仕やう、いつとても大雨の砌はかくこそあるべけれ、さりながらどの骨佛やら目利がならぬといへば、惣別骨佛と申ものは、其人の、平生の所作のすがたをしてゐるものなれば、そこに氣を付て見給へといふ、げにさる事聞およびたりとせんさくすれば、への字なりに居ずまひして、ふところへ顏をすこし引いれたる骨佛あり、まがひもないこれじやと取出せば、陰坊うなづいて、廓の女郎衆でござりますかといへば、いづれもきもをつぶして、そのわざとてよくも見おぼへられし事よといへば、うまれぬさきから此汁にてそだちたる身なれば、少も見ちがへはいたさぬ、ついでにこゝらの骨佛も申てきけませう、此片膝立て雨の手をさし出したるのは醫者の骨佛、つねに脉を取し時のすがた也、腕まくりしてゐるのはおとこだての骨佛、尻をからげてゐるのは濾酌のこつぼとけ、うつぶいてゐるのはおやにしかられたる人の骨佛、其外後家のこつぼとけ、とりあげばゝのこつぼとけ、鳥さしのこつぼとけ、いろ〳〵さま〴〵あれども、すこしづゝのちがひありて見わける事でござります、さりながら松茸うりのこつぼとけと、はりかたやのこつぼとけがまぎれもの也、

第五　堀出しの煩惱

俵の九郎がいひけんやうに、かけをちの身ならずして隅田川の月見る人は果報なる事ぞかし、京大坂のれき〳〵、二十八口は百年居喰にしても氣づかひのなき身躰を、一流の色代についやして、年寄五人組にやつかいかけて、質に入たる下屋敷はいつのむかし、居宅までもながれては歸らぬ水のあはれなる躰となる時にぞ、たいこもちにさらしたる物もをしや、過し年のくれに太夫に送りし百兩の小判と二重の小袖があるなら、それを元手に何なりとも一かせぎして見たい事と、惠方むいて泣ども、年德神もつんぼになられたやら一切埒があかねば、業平のあとをひして、むさしのゝかたにおもむく事、いくたりといふ數をしらねども、大かたは江戸にあしをとめて、どうやらか

うやら歳旦の發句めでたうするやうの年とる事となりぬるは、まことに寸土寸金の繁花のちまた、店さきの大道に圓座一まい敷て、番椒うるものも、月に一歩の地子を出し、三つ目錐一本持て、火吹竹の穴あけても、親子三人はらくにすぎる事、是にて推量すべし、日本橋に鑓が三筋と、通り町に髭面が三十人とたゆる間もなし、一日に鐘七つ宛うれるてふ、明州の津も、こゝにくらべては影もない事、されども萬物の群勢動ずる故に火事しげく、これのみぞきのごとくなるや、上野のもみぢちり過て淺草の風景もあらしになかめがたく、士峯は雪ぐもりにかたちをうしなひ、兩國橋に手ぐりこぐ身も顏のうるむころ、ある日の夜半過に手あやまちよ、下谷のかたなり、寺も二个寺やけたりといふ、何ぞの紙駒山都留天寺はこちの旦那寺也、又段々のせわこそ出來たれど、有馬宗味は粥たいて久七にゝなはせ、車屋休甫能登屋の永心松やの五郎介山本道圓抔、題目講の衆中十七人さそひあはして寺に見まへば、同宿四五人、春のやけのゝ土筆のごとく、ふすぼりあたまをかたぶけ、土かきわけて何やらたづぬるけしきなり、何と〳〵扨も不慮なる事笑止千萬といへば、さればでござります、ねいりばなの事なれば、竿にかけたるふんどしまですつぺりとせぬといふ、長老樣はいづかたへござつたぞとたづぬれば、今朝御齋にまいられましたといふ、さりとはゆるりくわんとしたる坊主かな、此時節に齋參り所ではあるまいとわめけば、納所坊主の說道なみだをはら〳〵とながして、只今までは隨分とかくしましたれ共、最早かうなる上からは各樣へ何をかつゝみ申さん、きいてくださりませばこれの長老の惡性を、せめて野郎ぐるひと申さばいひわけもあるべし、三浦屋の高尾と申女郎に、くびたて衣の上までのぼりつめ、三日にあげずのさわぎ、夜前もきゝやうや久左衞門かたにとまつて居られし、其留主にかゝる首尾なれば、それよりすぐにかけをちと見へたり、貧僧の分にすぎたる太夫ぐるひに城がつゞかねば、切々の奉加に各樣の金銀を大分にむさぼり、さらば本堂の瓦一まいふきかゆる事か、釋迦多寶のあたまのうへに雨のもりるもかまはず、布施を一包手にためず、みな三浦やが飯米代にげぢかれました、その佛罰にて

かうしためにあはれた、主は身にかゝつた事なるが、そばづへにあたつたるわれらがざまをごらうじませいと、はぎりしてはらたつれば、いづれも興をさましてあいた口をふさがず、さて當寺の靈寳、祖師の曼荼羅と、傳敎の作の四天王はのけられたか、いかな〳〵まんだらは去年質にをき、四天王は夜前一番がけにやけてしまひました、さりながら三國傳來の佛舍利、是は火にもやけぬものなるゆへ、もし焦土の下にもやあるらんと今朝より尋まするど、あそこ爰鍬もてさがす所に、やけ死の下より挾箱一つほり出したるが、少もそこねずまあたらしなれば、各きもをつぶして靈佛靈寳さへのこらずやけたるに、此ちよろいはさん箱一つのこりたるは前代未聞のふしぎ、とかくあけて見よと蓋をとれば、高尾がとゞけの文をつめ置たり、是じやといふてもやけぬはふしぎといへば、新發意まかり出て、なるほどやけぬが尤也、みなぬれの文でござりますものを、

傾城太々神樂卷之一終

傾城太々神樂卷之二

第一　智恵の玉取

七ころび八おきは、二つながらの人の肩にあるものからよき事のみもつゞかず、又わるい事ばかりもないもの、されば智者は不定世界と觀じ、歌人はあすか川とながめて、あすの事さへさだめられぬ世に、來年の事を案ずるは惠方棚のつりをきぞかし、ことになかれの身のうきしづみ猶はかりがたし、をしたて太夫道具とおやかたもおもひ、あげ屋もうけあへば、それにしたけれど、算用ちがふて買手のないにつきつけうりもならず、正直なる氣ちがひの座敷牢にゐるがごとく、きのふもけふも格子にくらせば、禿はいつもまへおびにしてゐるを、うらぬ證據と粹のめきゝもはづかし、ひきふね女郎はのいたお客の名をいふて、今のさき東の方へゆかんしたといへば、どれ〳〵と目のゆくだけはながめやり、あの客ばかりはのくはづの事ではなかつたに、つれ衆のわかさにとうらめしさうにいはるゝ所へ、初對面の客にてよびに來れば、けふの紋日になじみの女郎がさしあふゆへ、一

日切の陽氣する男なるべしと、推量は黑星にあてながら、おやかたの手まへきのごくさに、客を見せにやるにもをよばず、そこへゆきませうと返事すれば、慇懃な女郎じや、何時よびにやつてもかしこまりましたといはるゝと、客のわる口もつらし、隙な日もかぶろに髮ゆはせてをくは、煮賣屋に蛸の用意と同じ事にて、かうした不慮の首尾もあればなり、長持の鑰が見へぬと俄に尋るも外聞わるし、あの太夫の端へをりるは間のない事、其時に買たが德じやと、しわい男がわるい事いひあてゝ、あんのごとく夜見世に入くづれのするつぼねをのぞけばかの太夫樣也、惣じて女郎位のさがるたび〳〵に名をかゆれば、さやうの女郎を鮓と申とかや、さい〳〵御名のかわるゆへぞかし、あるひは又見せの女郎が格子にあがり、風呂屋のぬれ衆がこの里の太夫になることは前世にてよいたねをまき置しなるべし、糠買が三千貫目の身躰となつたもおなじためし也、貧乏神をまつりたるかはしらず、世間なみのゑびす大こくをあがめたるぶんにては、中々糠買一代に三千貫目の分限とはなるまいものなれども、時節到來は釋迦の了簡にもおよばぬ所、されども天然しわくうまれついたるは、糠の昔も內福の今もかはらず、只朝夕に始末をかんがへ、鼻紙を火燵のあけにてかはかし、滋柑子の革足袋一足にて十六年こらへ、むまいものは毒也と、干鰺のやき物と小便桒の醬油がけより外のものをくはず、爰百日の間酒と煙草を斷けるもしまつのうち也、虱の皮の何がしと名にふれども、座敷つきは身躰十匁あがりの今の世なれば、町ぶるまひにても床わきになをり、此中の雨は麥によござらう、白猫はよごれめが見えて損なれども、黑猫は毛がよはからうと存ずるなどのはなしの外にはものゝいらぬ念佛申ばかり、それもこゑ高に申されぬは、はらのへらぬ用心也、かゝる身にも子はかわゆく、姉娘に敷銀百貫目と、家一ヶ所付るよし、仲人嗅が手帳にかくれなければ、嫁にもらひたがる人山のごとくなれども、六具しめたるおやぢ中々卒爾に合點せず、そのあたりにて身躰の樣子たづぬれば薩摩問屋なるが、居宅十五間口の角屋敷、うはぬりあたらしきは、よめとりまへの風袋、梭櫚竹岳一町ほどあり、妙國寺のより見事なる蘇鐵三本と五十三にならるゝおふくろ一人あり、銀のある

ないはしらぬといへば、問屋は同心ござらぬと外をきゝあはせば、少づゝのおもひどはいづれにも有、其内に筋目よく、身躰おちついたる人を心がける所に、ねがひの通りの聟をとりぬ、十路盤のつもりさへよければ、萬年暦の相性も見ず、丙午の代に敷銀十貫目ませば、一言の申分なくゑんぐみする事、命より銀を大事のものとおもふもおろかの世や、さりながら百貫目の敷銀の利にては、年中の色あそび自由なれば、たとへ女房はかんだにてもちんばにてもくるしからずと胸算用せしに、此むすめの美容、いばらきやのよしのにいきうつしなるは此男の仕合、太夫をあげづめの樂しみ、よびましやの聲きかぬまたねの床に、起請かゝせねどもうたがひのないわけたつる事、あまりよい事ぞろへの冥加のほどもおそろしと、あふたびごとに一歩一つ宛錢箱に入て、是を揚錢の心もちとのけてをき、其年の大晦日のひめおさめに、件の一歩をかぞへ見れば、四百六十三あり、女房よびし日よりけふまで、わづか百七十日になりぬるに大分のとりすごし、さりながら此一歩代六貫九百四十五匁は、ひんずの延銀ぞかしと、いよ〳〵めでたくうれしがるほどに、あけの春より脾腎兩虚の病にかゝり、此地の大醫手をつくしけれどしるしなくて、京にのぼり御典藥の御くすりたよりをもとめてもらひつゝ、からうじて命をたすかり、三年ぶりに大形もとの物になりぬ、その間藥代萬事の入用、二十四貫五百目也、かずとりの一歩に三増倍のつりをいだしけるは、どうでも色事に銀のいらぬ事はないものなり、

第二　幸のやま伏

觀世與左衛門の太鼓には馬が出ておどり、常是が針口の音には白鼠が中がへりし、櫟水が小うたには味噌がくさり、巫が屁こけば、なべや町へきこゆるためし、善惡ともに神の感通には非情のものをうごかす、ましてや有情をや、海老の文藏が色道通變の占も、其妙うたがふべからず、いでや文藏が先祖はもろこし看經山のふもと揚子の里にて、わづかのうけ酒あきなひしが、親に孝ある陽報にて、猩々のへそくり銀を大分しこため、中華一番の酒屋となり、劉伯倫陶淵明などの詩人中間へもかよひ樽置てまはり、玄宗皇帝の御前酒も此家より奉りぬ、其庶子いづれの時にかありけん我朝に來り、筑紫にてねり酒といふものを

つくりはじめける、今に至て博多の名酒是也、それより十三代の耳孫、伊勢の津に住して久敷家さかへけるに、さるべき時節や來りけん、多田の銀山にかゝりて大分の損したるあげくに、江戸まはしの酒つみたる船五艘まで打くだき、手もあしもない仕合になり、わづかに殘る道具を沽却し、もろこしより傳來の錦袋子をあはせて渡世の便とすれど、ちよろいせんさく、ことに六人の子供に水をのましてもたまらねば、夫婦分別をきはめ、惣領の市は水口の葛籠屋へ奉公にやり、二男の文藏は器量よくうまれ付たれば、旦那寺の長老にのぞまれて小姓に遣しぬ、そのいもとおふくは餅屋の下女につかはし、およつは江戸のよしわらへ奉公にやり、五郎松は七十年を六匁五分に賣て、阿蘭陀流の外科の所へやる末子のお六もみやこのしまばらへ賣てやり、三界の枷はみなかたづけたりと、夫婦はあたまこそげて諸國行脚の身となりぬ、文藏が旦那寺には、もろこし長安城より飛來らせ給ふ靈驗不測の文珠ましまして、遠近の老若あゆみをはこぶ招提たり、文藏もつねに此ぼさつを信じ、何にても一藝に名を得させてたまはれと丹心年月をへたりけるに、いつともなしに占の道に長じ、五音を聞てうらなふ事わきて妙なり、さるほどに廿三の春長老にいとま申て寺を出、伊勢は古郷なるゆへに、其ゆかりにと名字を海老とあらため、江戸さかい町にて通變の占と看板出して三年ゐたるうちに、金子二百兩たまれば、それを元手にてみやこにのぼり、二條寺町上る町に四年住、そのゝちなにはにくだり、色里近き順慶町といふ所におちつきぬ、いかなる戸ざしにも心ほどのあそびして居明す事也、京屋かたには最眞の客六人、かねての趣向にてこよひは女郎をまぜず、座敷を清淨に月待ばかりの殊勝構賴母が上るりに對して繪かきの眞雪が唖もおかしき所へ、海老の文藏御見まひ申ますといふ、それこなたへ、扨早速の一興におもひよりの女郎の身のうへを、通變の占にあはせてきくべしと、をのくの車座にならべば、こなたから其位其星の三世相、其客の吉凶まで、兎の毛のさきほどもちがへず申べしといふ、さあらばまづ新町の南側に御座なさるゝ女郎の事きゝたいといへば、文藏うなづいて、只今御尋ありしはいまだわかき太夫の御事なるべし、此君の前世は、阿波の國にて松葉

たばこを賣し人、其ゑんによつて只今太夫とはなり給へり、北斗の天帝より米六十三石と客八人とうけ得て生れ、星は足趁星にあたり給ふ、さるによつて此女郎におあひなさるゝ客は足を假瑕なさるゝ事有べし、其つゝしみ第一といへば、まづぴつしやりとあひました、此女郎の北の御客、一昨日こたつの火がはぜて左の足をやけどなされ、其夜のかへるさに西口の門にてけつまづき、右の足のおやゆびを打みしやぎ給たり、さりとは通變の見通し硝子のごとしと、おしげは肝をつぶし、ついでにそのあたりの女郎さまの事承たしといへば、只今御尋有しは天神の女郎、當年廿一歳なり、此君の前世は、丹波の篠山の牛にてあり、其ゑんにひかれて此世にて天神とならせられし也、北斗の天帝より大豆三十石と八丈島のきる物二重うけ得て生れ、星は梅核星にあたる、さるにより此女郎の客、いづれも陰嚢がちいさうなりませうといへば、是もあひました、此女郎の南の御客いつぞの比よりきんたまがちいさうなつて、只今は甲州梅のさねほどあるげな、又高島やにておあひなさるゝ客のもちいさうなりしを、其御內儀樣大ぶんきのごくがらせ給ひ、播磨の大山寺の藥師へ千日參りの願立られける其利生にて、此ほどは少大きになりましたと申ます、扨ゑちご町の南がわの女郎樣の事きゝましたいといへば、只今御尋あるはかこひの女郎なるべし、此君の前世は春日の鹿にてあり、朝暮明神につかへ奉りし功力によつて人間に生をうけ、かこひの女郎となり給へり、北斗の天帝より小豆十七石と長持一つうけ得て生れ、星は藥鑵星にあたる、かるが故に此女郎にあふ人は、必あたまがはげませうといへば、なるほどあひました、此女郎の東の御客、年はまだ廿か廿一にならんするに、あたまのまん中よりそろそろとはげて、此夏も蠅がたんとすべつておちました、又大八樣といふ客は、地躰からそりさげたるつむりつき、いつともなしにすつきりとはげて、をのづからの法躰の身となり、此中も十德きていばらきやへござんしたげな、扨阿波座の北側の女郎の御事きゝたしといへば、是ははじめは天神にて只今は見世へをり給ひし女郎なるべし、此君の前世は京のしまばらにておゑせの八兵衛が女房也、そのゑんにて此世にても格子からおろしまいらせし也、北斗の天帝より

麥廿三石と、茶づけ三ばいくふて生れ給へりといふ、さて又よしはらの中ほどの女郎を尋ければ、是は五分ごりなるべし、此よね衆前世にては男子にてありけるが、四十一の前厄に蕎切と西瓜とくひあはせて死だり、そのゐんにひかれて此世にて五分ごりになり、錢では四十一文の君ぞかし、北斗の天帝より白酒小半と消炭一升うけ得て生れ、星は巴形星に當るゆへ、やきもちが嗜なりといふ、さて又新町の南がはにてさる女郎樣の事きゝたしといへば、是は分散星にあたるゆへ、此女郎にあふ人はかならず身躰を棒にふり、其はては紙子一まいになるべしといへば、それは氣味のわるいせんさく、かまへて其女郎にあふ事は無用ぞや、耳ふさぎに酒の間とわめけば、文藏輕顏にて、皆樣の粹がたりませぬ、どの女郎にあふても仕すごしすれば、家も道具も西の海へさらり、

第三　節季の念佛

定りてうらねばならぬ文日といふもの、よその國とはかはりて此難波にはおびたゝしく、暦をひらきて元日より年のくれ迄の文日に碁石を置てしるしをするに、三百六十日の石、わづか二十五のこれり、まづ正月は三ヶ日より廿日まであだなる日もなし、二月は初午、十五日の涅槃、廿二日の聖禮などつゞく〳〵にいふにおよばず、此外に旦那どのゝ一周忌、むすこどのゝ誕生日、やりてが藪入、かぶろがつとめはじめ、かぶらかゝの命日、五人組に目安の付たまでを文日にして、女郎うれ〳〵とせがむ事也、此やうにてはくつわが銀の置所もあるまいとおもへども、文日をかかさずつとめる女郎がなければ、いでのあがる事もなく、あるひは女郎を質に入、又はあげ屋を請人に立て銀かる事となりぬ、かゝる家の女郎は、白縮綿にぬい紋の小袖を淺黃にそめなをし、其次を空色、其跡をあゐみるちやにやきかへす事おさだまり也、又は京ぞめの犬八丈此比のはやり物也、おなじ宿屋へ三日ゆけば、初日の衣裳と二日めとはかはれども、三日めには又初日の模樣をめさるゝ事一座の女郎のまへもはづかしく、客は兎居が際のおもひなをしもあるべきに、つれのおもはん事もきのどくなり、かやうの事に付ても女郎の氣漸々に乙入つゝ、あきなひ根性きたなく、義理もしつてしらぬかほする事、隣の客もねとるを手柄にして、あたまからしつぼりとおもはせ、

なじみの女郎をのかするやうにしかけ、あくる日は奉書二枚になが〳〵としめしまいらせ、目の見らるつれはいふにおよばず、たいこ座當迄にも文にて申まいらすれば、戀のあさいおのこは封じめもとかずに、念比する鼻紙袋屋にとらし、あるひはたばこいれにするもあり、又世智なるおのこ算用は、奉書一枚が五文づゝなれば五々廿五文、美濃の封じ紙一枚代二文、しめて廿七文のつけとゞけぞや、是に付ても俄雨の折節は、宿屋の笠をかるべし、粋のたらぬおのこは女郎が笠しんぜませいとかぶろにいひ付るを、御無用ともいはねば、かぶろはかきつけのない笠、綿々とかりにゆくを待て居る間に、雨は大かたあがれども、かの笠かすほどの情をうれしがり、八まんぬれの里にてぬれすがたかたじけなみだに袖をしぼると、ふるい秀句いふて笠かりてかへる輩は、ちよつとかる笠代四分といふ事をしらぬ野父なり、百に二文づゝ利のくふ日借の錢を、觀音經よむ坊主にとらせ、燕買て放たり、荒神ばらひの山伏に八卦見させては、十二燈の錢をつゝみ、口のわるい日はわたくしに茶をこしらへてきこしめしたり、何やかや目に見へぬ小づかひとおもへども、霧がつもれば山時鳥、ないてもわらふても、なさねばすまぬことはりに、年を切増ておやかたとわけにつとめをするもあり、又年あけば茶屋風呂屋のぬれ衆とよばれ、前銀取て此里の身ぬけするもあり、又氣のよはい女郎は、借錢を苦にして氣のかたわづらふて此里にてしぬるもあり、そのしぬに付ておもひ出したり、過し彼岸の中日に妙法寺とやらんに、みやこより上人くだらせ給て說法の砌、さる女郎の身まかりし三十五日にあたりぬるとて、やりての龜が諷誦あげたる其文にいはく

敬(つゝしみ)うやまつてさゝげ奉る、諷文一通十方の佛陀愛愍をたれ、三世の菩薩納受し給へ、唱へ奉る提婆品壽量品をの〳〵百卷、首題十萬遍、右こゝろざしの意趣は施主のためにはたのしみ人也、戒名を袖香院妙髮日情と名づく、今日時正の中日、まさに中陰七々日にあたるを以て、一篇の野章つゞり、滿座の廻向をあふぐもの也、つら〳〵おもんみるに、六塵の樂欲は皆厭離しつべし、只男女愛着のやめがたきのみぞ、生としいけるもの爰になやめり、鴛鴦のおもひ羽鹿(はしか)の妻こひ、連理の枝相生の松、鳥獸これをたのしみ草木これを

しる、いはんや人間におゐてをや、これに心をゆだねて家をうしなひ身をほろぼす種、善をくだき悪をもよほす媒となれり、殊にあさましきは川竹のながれの女にとゞまりぬ、久かたの光りのどけき春の日にも、しづ心なきいつはりに身をまかせ、有明の影さやかなる秋の月にも、大ぬさのあだしおもひに泪をこぼす、されば釋尊も遊女に實なしと説給ひ、椀久も傾城はだますものと悟りぬ、しかれ共妙樂大師の御釋に、女郎は寶引繩のごとし、客十人あれば九人は素繩をひかせ、只一人にこそ物はありけれとぞ、ありがたいかな智識の金言、その一人に心とめるありさまこそ又あはれなれ、あさごみの床のうちには明わたる鳥のこゑをかこち、又のあふせを待くらし、夜見せの燈のもとにはふけゆく鐘の音をうらみ、こよひは見へぬ首尾かとうしろめだく、心はあふさきるさにおもひみだれ、身はとなりかくなりならばなれと、しづみはてぬる戀の海、かはくまもなき涙の淵、とり〳〵のうさつらさ也、今此聖靈もありし世には、松の位のいみじく、花の客のうるはしく、もろこしにいはゞ華清の貴妃か、やまとにたとへば桐壺の更衣か、見ぬ世の美女をうつし繪のものいふよそほひなりしに、いにし師走のするより、かりそめに痼病の床にふして、ことし正月のはじめつかた、つゐに黄泉の旅におもむきぬ、生涯わづかに十九歳、嗚呼をしむべしかなしむべし、無常の嵐はいまだつぼみの花をちらし、涅槃の雲はわづかに宵の月をかくす、東黛の夕の煙にたちまち紅顔をうしなひ、北邙の朝の露に只白骨のみのこれり、死出の山路はくらけれども定紋の提燈もあらず、みつせ川は水まされどともなふ引船もなし、鴛鴦の衾のうちにかはせし情はしばしのゆめのたぶれ、獄卒の杖のしたにおつる涙はながき世のくるしみ、かはむいたるつけざしは熱鐵と成て胸をこがし、はねばしゝたる茶づけは火焔にもえて眼にさへぎり、血をしぼられ爪をはなさるゝは、佛神をあだにちかひし起請の罸、皮をやぶられ膚をさかるゝは、延紙をめつたにつかひし床入の罸、おもへば魂きへきけば身をふるはせり、されども諸經中王の大乘妙典の功力には、八萬恒沙の衆罪もすみやかに滅し、千尋須彌の高樂をながく生ずる事、うたがふべからず、此ゆへに今演說の場にまうでゝ、丹誠の掌をあはせ白

潔の首をかたぶけて、出離生死頓證菩提をいのるもの也、しからば靈魂此功德にこたへて、たちまち變成男子のすがたをあらはし、はやく即就佛身のさとりをひらかんのみ、仍願札くだんのごとし、寶永二年三月二日、施主、亡魂のやりて、がんくびの龜うやまつて申す、
となん上人よみあげ給へば、參詣の老若今の世の誦文と耳をそばだてけるにぞ、龜は一しほ袖をしぼり居るを、うしろからせなかをたゝくものあり、誰ぞと見かへればごふく屋の長介也、只今の諷誦はそなたのあげられたか、あれは何のためになる事ぞと尋れば、龜はなみだをおさへて、上人樣の御よみなされたとをりが、すぐにあの世へとゞきて太夫樣のたしかにうけさらんす事じやといへば、それならわれらも太夫どのに呉服代のこりがあるが、此かき出しを上人によんでもらうたらば、あの世へとゞいて銀のすむ事もあらうかの、

第四　邯鄲の枕

誰も〳〵爰に永日をしみぬる、難波寺の櫻木も、凩の夕には、きりくべて燒柴の枯枝にちがふた事もなく、深山の秋に、つまこふ聲のにくからざりし小雄鹿も、霜さきのくすりぐひとなるうき世のすがたはいふもさら也、此以前このむらのなにがしといひし太夫、全盛くるわに並宿もなく、客おほければはりつよく、氣まゝをいへども賣が手柄なれば、おやかたもさまの字つけるくらゐ、くれなゐの床のうちに、れき〴〵の大臣をおとこ泣になかせ、北濱の住人に俄道心おこさせたり、いつも日の出の光まばゆき御ありさまなりしが、つねなき世のならはしにおとろへつゝ、けふもさびしき茶ひき草、駒もすさめぬ身となり、段々さがりの納屋したの、水邊ちかき葭原に、日午も螢火見るやうなうそくらい局のうち、隅ちがへにねても足のつかへる窮屈さ、かゝる時にぞむかし戀しく、住吉やの二階から立賣堀の川づらも今一度見たく、吉田屋の茶漬の味もわすれたりと、身をしる雨に布子の袖をぬらし、消炭もさむき火桶を伽にして味噌氣すくなき肌のつめたさと、みじかい冬の日に晝寢しければ、夢の中に六十あまりの法師、すはだに紙子の袷、やぶれたる十德にあさぎの頭巾よこさまにかづき、さもひだるさうな音にていかに汝、をんな心のあ

さましく、あられぬ事をなげくものかな、をよそ此里の女郎、高いもひくいもかはる事なし、そのゆへは、あるひはあぶらやの槌打の娘、臼のぬきりのむすめ、貧乏な水くみのむすめあけてもくれても増水の、お葉うちからしたる浪人のむすめなど、家賃なさねば宿をかへとせがまれ、米薪みそしほまでの買懸に、何くふまいとまゝな身躰となれば、くちおしながらも地獄のみちびきといふ口鼻をたのんで、此さとへうられてきたかむすめの子、兩親も泣の泪ながら、身をすつる藪はないものぞかし、是をおもふた時は、四十六匁出して繻子の褥に伽羅をくゆらすちぎりも、錢で四十一文つきならべ、中のやぶれた丹波御座しいて、なさけをかはし、くるわにはすめども文日しらぬ女郎もその出所を穿鑿すれば、いづれもひんならまごらの御息女也、さりながらおなじ泥の中から出ても、太夫は蓮のごとく、天神は劇草のごとく、又三匁取二匁どりは鰯のごとし、いやしきに似ていやしからず、をり〳〵は貴人のおくちへもいるぞかし一匁どりは鱧のごとし、中間鑓もち茶船さしのむすこ、鍛治屋の三藏ぐらひの、あたまがちなるものゝくふ物にきはまりぬ、おなじ泥の中からは出れども、蓮とすつぽんとは各別のちがひあり、かくいふそれがしを何ものとかおもふ、わかい時には四の二といふて、山口屋にて汝を正月のはつがひより九月の廿二日まであげづめにして、外の男に褌をしめさせし身のなれのはてなり、そなたについてゐたやりてのよしめにも、常是寳といふものを大ぶんとらせしゆへ、その比はくるわ中のやりてがしらの身躰よしといはれしが、もらふた物は根がつゞかず、今はよしめもさん〴〵おちぶれて、とりあげばゝの代脉にあるくぞと、かたるとおもへば炭團うりのこゑにゆめはさめたり、

傾城太々神樂卷之二終

傾城太々神樂卷之三

第一　運氣の巡合

麗山宮には二月中旬はじめて瓜を進とかや、吾朝にもそれほどにこそなけれ、桃の花ちる比には、初白瓜一寸五分ほどあるを三匁七分といひしが、六七月の比には、うら借屋にあひずみの婆も、摑瓜の料理は鼻につくと申す、されば何事もすくない時が花也けり、山本與次兵衞が三百兩で吾妻をうけだし、土佐の船頭が松島半彌に指をきり、奈良やのまんが生玉の心中、これらを其時分には、前代未聞のやうにめづらしがり、長老さまも高座の上にて、引言にいはるゝほどなりしが、此比はゆびきりの心中のといふ事は木抓であつめるほどあれば、繪草紙屋もふるくさいとて板行せず、ことに女郎うけだす事は、難波の色里などには、とりわけめづらしからず、千兩の二千兩のいふても肝もつぶさず、銀もつたらうけださいでは、人間五十年、金の鎖でつないでも、高のしれた浮世に、始末して苦をこしらへ、一生たのしまずに目をふさげば、跡式の公事の種をまきのこし、公儀の腰懸に町衆を退屈させ、白砂の上にて疝氣おこして戻る事、これみな客ものゝそば杖にあたるもいとしや、我物つかふに誰がなんといはふぞと、無分別に氣勢を出す男、さる宿衆を根引にする談合歷都が才覺にて、萬事五百七十兩につもりあげて、十の物が十六までもその筈にきはまれば、此女郎のしあはせ、姉女郎も、あやかりものとて指櫛を無理にもらひ、妹女郎は身の將來のながきつとめをなげきぬ、され共かの女郎は、此おのこの手にいる事を一切よろこばず、何とぞして此事きはまらぬやうにと、愛染樣へ百日精進の願をたて、扨かの男にあふたびには、いやらしい事をたくみて、あかれるしかけ、床にいれば、そら寐入して牙鳴をしたり、手を吹て屁のまねしたり、食指で鼾せゝつたり、小便にさい〳〵たつふり見せたり、夜食をくひ過て腹がすぢばるといふたり、品々に戀をさましかたに、かの男もおもひ入を無にして、廓に女郎旱魃のゆかぬ間に此陣ひけと、翌日から、さるかたの宿に色をあらためけるを、かの女郎は是本望とよろこびしは、外にふかいおとこといひかはした事のありしゆへぞかし、されども欠と人の情とはうつりやす

きためし、此君思いれのおとこ、いつぞの比より地女ともざくりてあひおもひの縁ぐみしければ、かの君の事は絶々といふも愚よ、娑婆で見た彌四郎ぶしうたふてかまはぬ顔つき、さりとは憎いといはふか、つもられたと申さうか、身うけしてくれる客までを捨て、あの男めに心中たてた口惜さと、身をもやせども公事沙汰にもならぬ寐ものがたりの詮なき月日を送れば、限の年も過たれど、おちつくかたもなく、ことに身あがり萬事の借錢十二貫目ばかりあれば、いよいよ埒のあかぬせんさくを、鰐足の吉と談合して、耻をいはねば理のきこへぬ、內證底扣といふ文六十六通かきしたゝめ、むかしよりあひ見し客の方へ、無心いふてやる、中にも京の源さま、和歌山の重さま、長崎のわるさま、仙臺の八さま、池田の法師樣、淺草の吟水さま、下の關の伊しう樣、これらは慥成御かた也、されども此文を人やとひしてやるも造作のかゝる事としあんして、龍松院の供して諸國奉加にまはる、律義の與一郞といふおやぢに、此狀どもそこそこへとゞけて給はれとたのみければ、與一郞心ゑてうけあひ、所書をちがへず、たづねたづねて屆ければ、さすが色のゆかりは憎からで、六十六人の客より、合力銀しめて十三貫目七分五厘あつまりぬ、與一郞元來正直ものゝ後生ねがひ、我心に引あてゝ扨も殊勝な女郎かな、此度多賀の奉加に付たふはあれど、手前に銀はなし、さるによつて方々の客をたのんで、寄進せらるゝぞとのみこんで、かの十三貫目の銀を、永代常とうめうに付ておたがへおさめ、のこる七分五厘をかの女郎にわたしけり、大きな算用ちがひ、

第二　頓作の俳諧

つたへきく和歌の道は延喜天曆の比に盛なりしとかや、されども當世の俳諧ほどにはあるまいと、見ぬ古を高でくゝつたも尤也、紙屑買も懷紙の書ぞこなひを撰出して手本とし、後の亥子に餅つく人も、いでしら川のせきだなをさんと、文字數あはするありさま、誠におさまる君が代のしるし也、爰に難波の色燈かかげぬ晝見世といふには、客もはやくしまひければ、目二つにては寐あまる冬の夜、高島やかたに口きゝの女郎十五六人、こよひほどはなしのしづんだ事もなければ、すぐに居ながれて朝込もおかしかるべしと、約束のない女郎も、身あがり一つ損するぶんと、

集錢出しの鍋燒に卵のふは〳〵、客の見ぬ時に湛とくふてをくがてん、去ながら是ばかりでも夜はあかしがたしと、大坂屋の武藏が智惠にて、歌仙俳諧の趣向をはじめ、扨執筆には藤屋の陸奥さまをたのみますといへば、いや江口さまにとゆづり、浮船さまにといふて埒があかねば、梅野が作にて、竹綠に醉伏たる與茂介をせゝり起してつれて來り、是はそい目をさまして執筆さんせと、文臺あてがへば、八まん是は至也、さりながらむかしは遊女に歌人、あまたありて、代々の撰集にいりしとかや、皆さまたちも隨分勢御出しと、眞顔になつていふ時に、さる天神女郎申さるるは、うきふしの身ながらも、客のゐぬ間は、其日のつまの留主なれば、女郎ばかりの座敷に與茂介どのをおきますも三句の氣味わるければ、ものは談合、今爰でぼんさまにならんせんか、法師は人のゆるしあれば此のちとても、かうしたつきあひに遠慮がなうてよからうといへば、與茂介それはねがふ所也、金銀出して門跡さまの御剃刀いたゞくも、今君の御手にふれらるゝも、道理はおなじ事、けつくかたじけなき正味は、こちらにあると、側にありし茶瓶のせんじ茶にて髪もんで西向になをり、座取うけて、さあ只今只今とせがめば、此女郎も大膽もの、傾城と公事はならぬものとのみこんで、鎌舛のかみそりあはしすまして、すつへりと逆剃にしたりければ、與茂介あたまを撫て見て、これよ〳〵、どうもいへずの森のほとゝぎす、泣妻もたぬ身の樂さ、迚の事に君の御さしづにて名もかへたしといへば、天窓をそろう〳〵といはんしたほどに、素路さまといふたがましよといへば、いづれも是はよいのが出ましたとどよみつゝ、おもひおもひに法躰の祝儀當座につかはしぬ、よしのやの了角、

さてもよいつむりじや露の白うるり

となん挨拶すれば、かたじけなしと自筆にかゝせて懷中し、さて是はこれよ、まづはじめての與行の事なれば、どなたなりとも初春の御發句あそばすべしといふにぞ、いばらきやの半太夫、

ほんのりと春見せさんす朝げしき

しやほになんとかこふかき初　大坂や　住のへ

あれわいの手鞠取手の閑雅(しとやか)に　車や　おうしう

いつものくせの客のあさきき　あふぎやしきぶ

ものく\で揚やの月はどこよりも　木屋ゑちせん
丹波やの村雨、文臺わきにゐたるが、今の萩の花はをもてには無用也、蒲團餅は釋教でござんすといへば、素露おかしがりて、是はあたらしい式目いかにも尤也、御傘などの掟はふるめかし、此ついでに當流の式目を申べし、指切心中は夏也、褌をくは九月の季、文月にゑうらぬ女郎は雜也、ならちやは夜分かの丶おゆりは朝時分、卒都婆うへもの、兀頂(はげあたま)は山類、文彌ふうの上るりは無常、張形は生類、のべ紙は戀也、鼠の糞はふりもの、一匁取の女郎は天象、あくびは聳(そびき)もの、食燒は水邊、髮さきのながい男は神祇、小便擔子は居所也、借錢乞は述懷なるべしといへば、それはちがひ也、借錢こはる丶身こそじゆつくわいなれど、一座同音にいへば、いづれも身におぼへのある事に、貧乏口がそろふたとおかしがりぬ、さてあげや町に鯖賣が付合也、禿に發(やきうち)もよし、熊手に鑓手は五句去也、只金はうちこしにもきらはず、見わたしに一萬兩まではくるしからず、但錢がしの八兵衞には折きらふべし、

第三　兵法戀の卷

無學の人はさら也、學文したる人も物のあはれしりすごして、おほくは色にまよふ事也、戀の山には孔子のたはふれ、情の海には弘誓の船も械(かひ)がまはらず、武藏坊辨慶は、一代に只一度女にあふたといふは大きな迂詐のかは、小野の小町は穴がなかつたといふもいつはり、筑摩のまつりに、まだよめいりせぬ娘が、鍋を三枚かついだと聞しはまことなるべし、此比はながい羽織は初心に見へ、大きなる鍔をこのみ、振舞にかならず茶づけをくふ事も、時々の人の氣かはりやすきものなれど、色このむ事のみぞ、むかしも今も替る事なきぞ、尤天地の道なればなり、よろづ事か丶ぬ津に住て、女郎の名さへしらずにくらし、揚屋の酒に醉た事もなき身は、何をたのしみに灸すへて命を大事がる事ぞやと、遠い田舍からゆびざし丶てわらふおのこ、金子三千兩ありたけつかふてあそぶはづにきはめ、御出入の源五兵衞左五右衞門李太夫忠介以上四人を同道にて、國元は有馬へ湯治とて船を出し、夏の日和ののりよくて、三百七十里の海上を、わづか三日に難波の川口につけば、年來荷物問屋のおも手代、三里の灸を潮にひたす磯ぎはまで御むかひに伺公申も、銀のひかりにあたりもまばゆく、蛤とる賤も

目をおどろかせり、さて翌日は道頓堀の遊興、芝居のはてを網代屋にやすみ、山下宇源太上村吉彌山下菊三郎佐野川花妻津川萬太夫など、江南の花を座敷にさかせ、額のとよ藥師のあや扇子のゆか、柳のことも入込の呂衆に、舞子の辨がむかしおとこの出立も大事なく、琴ひく御前も爰のはをかしきに、ながき夏の日も鐵眼堂の入逢つげわたれば、これよりすぐにみつぐりの中をちに、非筒やの名水をひいやりときこしめせと、問屋の手代共かたはらからそゝり出せば、さすが田舍そだちは、應往にて、東口迄の駕籠かゝせ、わつと云てむれいり女郎の献立をわたし、此君たち御ひまのは中におよばず、さしあひのあるも、どうぞもらうて來たられいと、手代の喜兵衛がしこなしがほ、やがて旦那に損かけさうなもきのごくながら、此大臣爰に逗留の間はきづかいなしと、あのさやのぬけた中ぐゝり、なるほどかしこまつて、うてなさほ川若紫八重霧村雨みふねおこと吉野を揃へけるは、夷にまれなる風流、よしや萬貫目の分限にて田舍にあらんより紙屑買して難波にすみたやと言けるは、實からの詞ぞかし、此うち大臣の御目に入たる女郎を床に入て、其外はゑにしく\のまくらをかはしぬ、初對面には、男からさきへ寢てまつものとさだめたるもおかし、しばらくありて、をくの床より茶をよぶ手の音すれば、かぶろがはこぶを、手代の喜兵衛がまねきて、太夫樣はまだ寢てござるかとヘば、もはやをきてゐさんすといふほどに、さては帶とかなんだものときのどくがり、太夫さまにちよと御めにかゝりたいと屛風のこなたへよび、あの客はわたくし方の一旦那、大いんつう有にて、當年中はこゝに逗留いたされますゆへ、そなたさまにあはせまするは、御ひいきにぞんじての事也、粹どしの中にくらい事はなし、隨分のぼらして手に入るやうにはなされいで、今宵はふりすがたと見へました、それはふるい御しかた、太夫樣ほどにもない素人かなとさゝやけば、喜兵衛樣は何いはんすやら、それはこなたにものみこんでゐますゆへ、二つまであひまして、あすあさての事も約束いたしましたといへば、さてもぬからぬ事と跡はわらふてしまひけり、よろづにおろかなる人も、此道ばかりはいなぶねの、おさねどのぼる戀風の、凉しさとめてながれ出る、水のあはれもふかくなる、非

筒や〳〵と足がむくほどに、此津につきしより一日も外にあそばぬ田舍氣は、あまり一筋にて野父らしや、夏は夕ぐれと書しにたがはぬ揚屋のけしき、蠅はいづくへ寢にゆくぞ、柏の鋸屑くゆらせば、蚊のもちつくはやぶれけり、手水鉢の水なぶり、雫にそだつ石竹のもとより、墓がのたのたとはひ出れば、かぶろはひやし物の田烏子取てなげつけるもあどなく、石燈籠のかげなる螢は、きのふ江戸又がはなしたるのなるべし、山のはのかの夕月を、のびあがつておがむもよし、おがまぬも粹らしく、とかく女郎のするほどの事がおかしく見ゆるも、客の鼻毛のながいゆへなり、今宵は寐よかるべしと涼しさをたのしむ所へ、彌次兵衞さまとやらんが、御めにかゝりましたいとて御出あるといへば、それは國元の手代なるが、何の用にてのぼりたるぞ、心もとなしといそぎ樣子尋れば、殿樣よりの御用にて御むかへに參りたり、事急なれば今晚御船にめさるべしといふにぞ、みな〳〵肝をつぶし、足もとから龍ののぼるやうなせんさく、さりながら一國の下は此やうなる事が大事なれば、とかくくだらねばならぬ、それ脇指おこせといそげば、女郎はむなぐら取て是たしなまんせ、いかにいそぐ用なればとて、三百里四百里ある所へいぬるいとまごひもせぬといふ事があるものかと、はらたてるめもとに泪一雫うかめば、いかにも〳〵そなたのいやるとをり也、さりながら用事しまい次第にのぼるべし、それまでは隨分わづらはぬやうにつとめられい、なま中なじみをかさねて、けふのわかれの心ぼそさやと、おにのやうな顏してあはれなる事いふにぞ、女郎も爰はなかねばならぬ所と、おもひ切て泣出せば、道理道理とせなかをさすりおろし、彌次兵衞をまねいてさゝやけば、かしこまつて杉原に一歩をほうばるほど包てさし出せば、これ〳〵太夫、是は此ほどの信や ら置みやげやら也、わけもない事いふてなき給ふな、やがてのぼりてあふべしと立出れば、女郎は猶顏もあけずに泣居たるも、狂言にしてしまふた格なれどあはれに見へたり、井筒や一家も是はおもひがけもなき御事と、まが〳〵しくなごりをしめば、かたはしから一歩の雨を、わかれの泪とふらしつゝ、門口まで出けるが、今一言太夫にいひたい事があると立もどり座敷へゆけば、女郎は泣たやうな顏もせず、かの一

歩をかぞへてゐられける、

第四　悋氣の榮花

よろづにはらたてぬ人は天生の果報ぞかし、悋れ子世にはゞかるほどの富になるとはいへど、笑ふ門に福來るこそめでたけれ、されどもゝ色のまよひには、いさゝかの事にもいきどをり、一寸さきは闇の夜にあたまから火のつくもしらず、打ころしてしまいたいとおもふはたれが身にもある事とや、元日の屠蘇の土器もまだひぬに、桃の酒もる節句になれば、大宮人は御溝の水に盃をうかべては、千鳥足にてみどりの草をふむもけふの風流、君がため生藥とる蓬餅に腹をふくらかす民は、住吉の汐干にあそぶ一興、駕籠かりて淡路にのるべく、平砂渺々として龍宮の瓦葺もあらはれ、沖の澪標に幕はりて、海の底をくぼめて茶釜をすへ、假の臺所なるもおかしく、下女が足の大きなも、蛤にじるためには究竟の事とそこらあたりをあさりありけば、去年のけふ誰がおとしたりけん指櫛や、燗鍋の蓋餅喰盆、挾箱の錠小刀の柄水呑おつぼ煙盃の吸口など、あられぬものをにじり出す所に、玉川の萩をかきたる梨地の文箱を、ほそき針金にてからみたるをほり出たり、是はいかさまわけあるものゝしわざとふたをひらけば、廿ばかりの女繪、むらさきのきるものに鳳蝶の紋つけて、髮は廓の風にかきたるが、身うちに針を五十四本さしとをしたり、まさしく嫉妬にて人を咒詛女心のあさましきたくみと見るもおそろし、そのをくに女筆にて、此傾城ぬしある男をたぶらかし、大分の金銀をつかはせ、剰へ子まである中のそれがしを離別させんとたくみ申事、おもへばく胸のほむらにわきかへる提子の水はものかは、すぐに此身ももゆるばかりの怨念を、海龍王に告奉る所也、正直の首をてらし給はゞ、三日が間に此女の命をとり給ひ、夫の悪性をひるがへし、我うらみをはらしたまへとかたるこそすさましき悋氣なれ、無殘や是はいづかたの女郎ぞや、龍神に申こんだるいのりはそのしるしすみやか也ときけば、もはや玉の緒も絶はてゝ、あつちものとなられけんぞいとしき、外面似菩薩内心如夜叉のありさま、何事も人にはいはで、心ひとつに悔々とおもひつめたるあげくには、丑の時まいりに身をこらし神木に釘をうち、米の粉にて男根をつくりて屋の棟を逆手に投こし、あるひ

は閨にふしながら、魂は嫐の家にかよひて、咽喉にくひつきたるためしもすくなからず、是みな夫をたいせつに思ふあまりのしわざ、氣のせばいからおこる事也、世の中の男の性、女一人をまふつて居るものにてもなければ、大かたに了簡してすますがよいはづ也、女郎にも粋とおもはるゝ男をもちたるは其身の外聞なるに、素人女はそれ迄はゆきたらぬ智惠にて、閾ふみ出せば、もはや惡性をするものゝやうに心得、夫の友をそしり、夜ふけて歸れば、かみつくばかりのすがた、あるひは天目を打わり、又は鏡を取てなげたり、一つも德のつく事はせず、さるものに酒のかゝりたるをわめき、袖口がほころびれば、どこの女とたわけつくしたるぞと、供にゆきたる丁稚をせちがひ、其一日二日は詞のはしにあて言いふが文盲女のおさだまり也、たまたま氣のしやれたる娘ありて、紫式部が筆のあとにいにしへの戀をしのび、歌舞妓のしぐみに當代のわけを見ならひて、此身もよめりしたらば、ふたつならぶるまくらの私言、人のわらはぬ夫婦あひに、ものゑんじのかけひきを、一門中の御内儀たちにうらやましがらせんとおもひしに、三五の十八とあてのちがふたる素人男、十五日がへりのひとりねをきのどくがり、晝は終日女房のはなのさきにへばつて居、夜は火ともすそのまゝ床に入て、通宵きつねが眞桑瓜たがへたるやうにして、晝過におきあがり少の事も女房の機嫌そこなはぬやうに立まはり、そのくせ一代に地黃丸のいらぬつよざう、外にあそぶ色なければ、いかな御内儀も色わろく痩おとろへ、不斷はちまきをほどかず、年子うむも外聞はづかしければ、すまたにてわけたてるもおかし、かやうの男は大かた女房の方から一本しられてをきざりにあふもの也、さりながらわれ鍋にとぢふたとや、鬼の女房には鬼神がなるたとへのごとく、どちらも數寄ごしがよりあふもあり、ふたりながら腎虛してあとさきに葬禮するもあり、密夫して繪草紙になるもあり、扇子のわかれして乳母に出るもあり、女房を惣嫁に出して男が牛夫につくも世のすがた也、煙草うりの久七が女房は、はせ川といひし女郎なるが、北濱の米手代に身請しられ、うき世小路にしばし住けるが、緣はあぢなものにて、今は久七が妻となりぬ、此おのこ天性肴のわるいものにて、內には提燈ほどな火が降て、

朝夕のけぶりもたてぬ事おほけれど、それを苦にもせず、きざみたばこの内より、わづかもうける錢は毎日の酒代に打こみ、髪ゆひの來ぬ日はあれど酒のまぬ日はなく、醉ては肴に女房をたゝけば、ならぬ身躰に是はよからぬ事、そなたの咽にはどのやうな酒石があるぞと、家主は輿をさまし、只いとしきは御内儀、縁なればこそあのやうな男に添て居て、しかも辛棒しらるゝ事と、相店のものもふびんがり、とかく此ちろりと盃がめにかゝるゆへに、又してはのみたうなりて夫婦いさかひが絶ず、所詮酒の道具はうづんですてよと、隣の五介が分別にて、藪垣のもとをほりける所に、鍬の下より西瓜ほどなるもの出ければ、何ぞとあらふて見るに銀の尿瓶なり、五介は感涙をながして、さりとはありがたの御事や、むかしの郭巨はおやに孝行なりしゆへに、金の釜をほり出し、久七の內儀はおとこに孝行なるゆへに、銀の尿瓶をほり出されけり、

傾城太々神樂卷之三終

傾城太々神樂卷之四

第一　傾國土產

馬の屁嗅の伊右衛門が自讃のはなしに、それがし生國は西の國松平何がし樣の御家中にて成長し、日本六十余州をのこらず廻國して、おかしい事もつらい事もあまねく見およびたる事、おそらく今の代に我等がやうなるものはあらじとぞ思ふ、名所々々ものこらず尋ねし中にもやさしき名の所々は、まづ山を申さば不二はさら也、小夜の中山妹脊山、待兼山更科山、吉野の山衣かせ山、袖ふる山わすれず山、床の山末の松山倶山抔は人ならばだいて寐たい名ぞかし、川は色川細谷川、音無川なみだ川、冬卷川むかし川、あすか川隅田川、玉島川戀瀨川などもかわいらし、關は不破の關清見が關、霞の關鶯の關、衣の關なこその關、白川の關すまの關、下紐の關見ぬめの關もにくからず、其外神社佛閣はいふにおよばず、めづらしき國國の風俗、元日に石花菜くふ島も有、人がしぬれば萬にまいて川へながしちかき親類は鰹節かぶつて泣村もあり、子が生れば膝のしたにてねぢころす國もあ

り、ふるまひのあげくに我女房を客人にとらする里もあり、朝夕に芋をくふ山家、石を薪にする在所、蛇を餅にする國もあり、さまざまのならはし、遠き國ほど存の外なる事のみ也、山城は吾すべらぎの聖闕、今さら申もかたじけなしや、武藏は四海鎭護の君が金城、爰も詞にのべがたし、此外には津の國の難波の津ほどめでたき所はあらず、よろづ求に應じ心にかなはぬといふ事なく、佛の御國喜見城の全盛も爰にはまさらじ、名月に椿の花をながめ、重陽に水仙を賣、惣じて春のものは秋より食初、冬のものは夏にもとぼしからず、花を見んとては吉野の櫻をねこしてうへ、鹿のこゑをきかんとては、春日より取よせ、晝を夜にせんとては雨戸さいて大蠟燭とぼして遊ぶ事、何にても金次第にてならぬ事なし、江戸の歌舞妓は追出し芝居にてさはがしく、京の芝居は女形も若衆形も、直にむらさき帽子の額つきもすまぬもの也、只なにはの道頓堀にしく物はなし、扨色里の品さだめ、まづ江戸の葭原と申は、女郎の風奴めきてなさけおとれり、ちよつと借と云事もならず、それもなじみのあるおのこは湯殿のわきなる婆が寐所にしのびて、せわしき御げんに枕もとらず帶もほどかずに胸へをしあげ、○のさがりは跡へはづして置、其間にも女郎ともにかさね切にやあふべきと、正身の密夫よりあやうきせんさくぞかし、晝夜二つに切て賣も氣づまり也、散茶の女郎に戀はないもの、釣髭のある鑓代がくつわの二階に床とるもむくつけし、京町にのみ口きく女郎ありて、其外炭町伏見町などにはよろしきものなしあげやわづか八軒有、爰の難波にては、端の女郎も汐影月などやさしくいふに、葭原にては二寸三寸四寸五寸といふこそいやしけれ、されども高雄がはつねの屏風、よしのが添寐の杜鵑花など、よきものはいづくにてもよし、扨島原は境地さびしき在所すまゐ、菜大根の小便くさきに打かこまれ、糞擔子のかざ、冬葱の追風に鼻をふさがねば堪忍ならず、太夫に逢おとこ天神買おとこ、きつぱりと水際が立て見ゆるもうるさし、鹿君の女郎はかぶろつかはぬも不自由也、大門のあくまでは出口の茶屋からうすべり借て、門前にて酒のむ事何に似たるものぞや、棚さがしに柚みそをちよつとねぶるもさもし、紋日すくなきは地躰のさびしきゆへ也、葛籠の寐道具入はいや

らしけれど、女郎の風はさすがみやことて心の色もはしたなからず、床しき所のあるぞかし、扨難波の色里は、まづ往來繁花のちまた、やかましからずしてにぎやか也、諸事せわしき事みぢんもなく、夜見世の風流は三國無雙の事也、太夫三十人にあまり天神八十人、惣て女郎の數千五十八人とは過し元祿六年の宗旨あらための時にしりぬ、あげ屋廿四軒茶や四十五軒、まづ是にてはんじやうなる事を知るべし、寐道具を長持に入るもよし、端の女郎も口きく身は小袖着たるかぶろをつかふ事、よその天神よりも見事也、東西の入口に商店のにぎやかさ、此外一つ〳〵いふにおよばず、粹はなるほど合點して居る事也、さればほむるもそしるも我物にてはなし、みな普天卒土のうちの事なれば、恩にきる事も遠慮する事もなし、いつの比にか有けん肥後の熊本の大臣、吉田屋が客にて見事なるさばきかくれなかりけるが、國元への土産に、吉田やが庭の土を一荷所望しけるを、是はかはつた御のぞみ、何にあそばす事と尋ければ、田舍に生れし子供の胞衣を、此里の土にうづめば、其子が粹になるとぞ申ける、

第二　器用の商買

竹島林之丞は頰髭を撫て見て、二歩にはたかいものじやといひけるとや、いづれも野郎はかくぞ有べきに、すがた見の鏡にむかふても、節分の大豆の數にもおごろかず、買手さへあれば四十二の厄までも客つとめる事、妾子共のおもはん所もはづかしからぬかは、大躰を申さば、はみ出しの合口さいて旦那寺の奉加のきもいりしても大事ない年して、印籠の芥人形をほしがり、十數して耳をひくありさまを、戀のない目から見れば老萊子が酔狂するやうにぞ思はるゝ、中山小夜之介といふおやぢが、子共にだかれて寐るもうき世や、それさへあるにくるわの女郎を廿六七になれば、いかふふるいものゝやうにいふは了簡ちがひと、九吉が小歌の半兵衞させりあふもおかし、縞くふて命をうしなふたる侍の跡のたゝぬと、女郎にしすごしたる町人の家を棒にふるとは、おなじたわけなれど、一口には沙汰しられぬ所有と、京の八がいふたるも又おかし、女郎買たると雪のふりつもりたるとは當座はおもしろうて、跡のわるいもの也と、江戶の善がことのは尤也、平野町にて廿八間口の家

の一子と生れ、十九の年兩親死去の砌、現銀五百九十貫目ありし事は書置に判形したる五人組も知て居る事、其上大津の祖父の所務わけ二千兩もらひし事かくれもなく、中より上の身躰銀わしりしても三十人はゆるりとすごすべきを、一門もなき身の心やすさに世をはゞからぬ野風俗の友をあつめ、鷄飯のあばれぐひ勢のつよひまかせに、いにし扇屋の荻野にさわぎ夜を晝のたのしみ、あまりきやうがる事とおも手代の久右衞門が異見も、われをたいせつにおもへばこそと、向後女郎ぐるひをやめ申候、若そむき申にをゐてはと、誓紙書て久右衞門にわたせば、御心入がなをつたとよろこびぬ、それより男色におもむき玉澤鳴野に打こみ、三十日に一度月次の判形いたしにもどるばかりの外は、我宿は不通と心得、長町の下屋敷に居て、天王寺の鐘の入逢も芝居の太皷のしのゝめも、いづれとわかたぬみだれあそび、さりとは申てもく笑止千萬なる御身もちと、久右衞門なみだをこぼして諫言すれば、女郎ぐるひ無用といはるゝほどに、野郎ぐるひ仕るに此方の無理はあるまい、いらざる世話やかずとも、身共が留守には火の用心をいひつけられい、それが氣にあはずば主從のゑんも是まで、ともかくもそなたの分別次第と、ちりもはいもつかぬやうにいへば、久右衞門も愛相つかして、なるほど御ひま申て在所へ引こみ、しぬるを待まではもとの百姓仕る心ざし也、此後は御邪魔になるものもなく、心まゝの御あそびこそめでたからん、あさましや追付路頭に御立なさるゝを見るやうに、ござるとも子胥がいにしへをおもひ出たる忠言はいかなく耳にいらず、それよりすぐに隙を出し、疫病の神をはらふたと、又酒にしておかしがり、其夜さそふ友ありてみやこにのぼり、大坂屋かづらきにあひそめかけてかよへや岩橋のかたい起請までかゝせ、いけだや又右衞門かたに三月朔日より八月十五夜の月見るまで、一日も外へ出ず、それより又氣をかへてあづまの戀のびたつかぬ風俗ゆかしと江戸にくだり、千住口の茂庵が所に宿とりて、三浦屋のこむらさきにそまりて、かはらぬ色をちぎりて爰に年をとり、あくる二月になにはにかへれば、手代共其日に身躰勘定してわたし、皆御いとま給はるべしといふ、やいなや返事もきかずに出てゆくは何にたとへんかたなし、算

用のこりの有物は、牧溪の虎の繪、無準の一行物、定家の古今、此三色は家に傳りし道具、其外茶碗茶入に銀目につもらば十七八貫目が物有、いまだ居宅も質にいれず、戸棚に有銀廿三貫四百目かれこれ取あつめて見れば、まだふる川に水たへぬをぬれの元手に、又ふしみやのよしのにかよひ、それをやめてふぢやのよしたにあふほどに、右のありものすつぺりと底をたゝけば、此難波にもあられず、伏見にしるべの方を頼てそこにかくまはれ、桃の木の下に膝入るばかりの庵をむすび、郭公に耳をあづけて有髮の僧にてくらしけるが、爰にも撞木町にかよふ男にともなはれて樣子を見るに、ありし難波にて太夫に目の肥たる癖うせねば、中々おかしさもあらず、かくまでなりはてたる身には耻もあらばこそと、又大坂にくだれば、むかしの友念比にいたはり、男一人つかはして一代やしなひころすべしと云ものいくたりもあれど、それはこなたのこのまぬ所也、親のゆづり家財かけて千貫目の身躰をわづか三年にならぬ間にみなまきちらしたるは第一の達磨どの、許由が耳をあらひしためしぞかし、されども此津の色里の事いづくにありてもわすられねば、此くるわの片隅に、あるかなきかの店かりて、そこに只一人すませてたまはるべし、それとても飯米家賃の御世話はかならず申うけぬなり、それほどの事はそれがし自分にかせぎ申といへば、それこそともかくもと九軒の溝のうへに二間口の所をかりて、鍋一つ茶碗三つ、此外にたくはゆるものもなし、扨おもてにいとなみの品々を板にしるして出しけり、

一色道增精丸　代六文
一除蚊散　代一分
一闇の夜案内　代三文
一あしだの緒　代二文
一きせる通し　代一文

むかしから一藝に名あれば用ひらるゝと云ためし、まことにそなたは身すぎにかしこひ人じや、さぞむつかしい事どもにこそといへば、いや心やすいこと、まづ除蚊散はかやのおが屑蚊をふすぶるに妙なり、增精丸は粒こせう、闇夜の案内は竹杖、きせる通しはさゝら竹じや、朝の間にうれふかとおもふ、

第三　月夜の時鳥

身躰十八並の町人は、女子の生れし時、それが嫁入の造用の心あてに、銀子三貫目のけてをけば、十五六歳にて緣につける時のこしらへもの丶見事になるつもりぞかし、男子のうまれし時、それが成人の後惡所のつかひ銀とて百貫目のけてをいたりとも、それはつもりのしれぬ事也、太夫より天神はこ丶ろやすく、鹿君より端の女郎はやすいものなれど、二匁にて石臼一つ買ば、曾孫の代まで澤山につかふ事をおもへば、色遊はみな費也、智は萬代の寶也と、吳竹の窓のまへに書をくりひろげ、露を滴て朱をすり、夜學案灯の油煙に顏をふすぼらし、温公が圓木の枕もとらず、孫敬が梁の繩に身を懲し、龍門の土に骨はうづむとも名はうづもれぬ後の世の鏡にもならばやとおもふほどの人は、三谷施彈の歌吹海に二日醉のさめぬ事をうるさくおもひ、只夜の雨の軒の玉水に自然の調をたのしみ、花晨月夕のおもひを詩歌にことはり、門を出ずして萬里にあゆむ心の駒の手繩はゆるすとも、揚屋のあたりへはいかな〳〵足をむけず、主一不適の覺悟に一期をはたす身のおこなひは、申さんかたもなき事なれど、色このむ目からにらんだ時は、無色界

の虛男とはこれなりけりと、友加がはなしも冬の夜の伽、ある事ない事まだうけ給らんと席をす丶むれば、過し秋新作といふ大臣此世をはかなふならせられし時、あふぎやのやりてがよみける追善の歌、

やりたしなたのめし人はこけの下

露うちこしのわけのさかづき

御公儀と神無月の時雨とのみいつはりのなき物にして、其外はみなうその世界、或寺の靈寶に善光寺の如來より聖德太子へつかはされし御狀、すなはち阿彌陀の自筆といふものを拜見つかまつりければ、近衞樣の腰越狀なり、閻魔王の判也とておがまするものをみれば、饅頭屋の能登が菓子袋の朱印也、かやうの佛の事にさへまことはなき世なるに、さるかたの引船の女郎は、毎年嬰子を誕生なさる丶事いかにしても合點のゆかぬ事也、女郎には鐵醬つけたるいわゐ、わきつめたるいわゐといふ事こそあれ、帶のいわゐとは、

かきつばた花に子の咲里はやれ

晏平仲が久しくして敬すといふはさる事なれ共、色のまじはりは、なじむにつけて打とけるこそかたじ

けなけれ、遠くてちかきもの男女の中と淸少納言がかけるは尤也、客の前にては箸をとらぬものと、鯉の刺肉も鶴の汁も、はるかに目もやらぬ女郎なれども、なじみをかさねては、たまごのふわ〳〵を口から口へく丶めるほどになるは、どうもいはれぬむまいせんさくなり、

山の木を櫻よ花よもなじみから

女郎は大やうにして何事も立いりてしらぬこそよけれといへば、さる女郞かたるを見給ひて、扨もちいさい繪馬じやとのたまひしは、あまりあとないやうに見せかけたるも顏憎し、小判は鬢水入の底やら、一歩は瓔珞のちぎれたるのやらしらぬかほして居らる丶女郎も、節季には坪目をせ丶り、錢のしかけしてはらひたまふを、人がしるまいかとおもはる丶は素人也、萬の物も相場もなるほどよく御そんじの筈なり、

節季ぞろに和中散をやたづぬらん

はなしの耳にいらぬかぶろは、つぎの間に火わたしするもあり、打とけて寐たるも夜のふけゆくけしきなるに、いづくの葬所に人の骸やく嗅ぞ、透間の風にさそはれ來れば、友加もはなしをやめて俄に無常を觀ずるかほつき、げにや如夢幻の世にけふは人の身のうへ、あすは我身の死出の旅立かもしらず、是をおもへば酒がのまれぬといふを、そばなる女郞きこしめして、友加樣あまりあはれがらんすな、只今のは火葬の嗅にはあらず、わたくしの袂から紙屑が火燵へおちてこげるにほひぞや、

第四　秋の名殘

神送りの風吹あれて住吉の松原すさまじく、見わたす海づらには白き浪より外に漁船もなく、うそのなき神無月のけしき、明神樣は御留主なれども、か丶る時に參詣することそ浮氣もまじらずありがたやと、二位どのより相傳の拍子打て再拜おはり、神宮寺の門前なる出茶屋にこしかけて、久七に酒はないかと尋れば、最早今宮にてみなになりましたといふほどに、山上金太夫かたへ酒肴取につかはせば、こなたへ御こしといへども、爰も一景也とてつかひの丁稚が色のしろいを花にして、おやは他國へ身はしまばらの鼻紙によ丶とのむほどに、さむさもまぎらかさる丶物かなと、酒のせいにて駕籠にものらず、安倍野をさしてあゆめば、穴師の風に時雨をさそへば、そこなる

屏のかげに立よれども、よこしぶきに臂笠もせんなくて難義なる折ふし、しほり戸のうちよりこなたへ御入ありて御しのぎあれと云をうれしくてはいり、すぐに前栽より座敷に通り、雨戸あけかけたる桁緣にこしかけてそこら見まはすに、いかさまよしある人の下屋敷なるべくおぼへて、萩柴の垣さゝやかに山吹のかへり花三つ四つふたつひらきたるに、寒菊はまだつぼみ也、石にはふたる酸漿かれて、藜蘆ばかりたくましく、其外には高き木もうへず、おのれなりなるやうにすみなしたり、書院の上にいにしへはといふ五文字を女筆にてかきたる額あり、かゝるものずきなるあるじの心ゆかしくて、障子をそつとあけてのぞけば、間中の床に遊女のすがた繪のかけもの、其わきに圓窓あり、此内持佛堂なるにや、燈のかげかすかに名の木の匂ひほのかにして、物の音なきけはい、何所ともなしに殊勝なり、猶そのをくの見まほしくてさしのぞけば、無地の戸襖のわきにかけたる暖簾の下より、三斑の小猫の珠數をそばへてかけ出たるを、なれがあがくもせわじやととらへて出る尼を見れば、妻崎といひし太鼓女郎也、弓矢八まんおもひがけなきありさま、心得がたしと尋れば、されば〱おひさしや、まづそなたさまにはかはらぬ御ありさまにて御一段ぞや、扨わたくしが躰をごらうじませい、これにはいかふはなしの有事也、御ぞんじのごとく太夫さまは北の御客の方へ御ゆかせのゝち、ほどなく世をはやうおなりなされければ、そのかた御なげきのあまりに、せめては太夫樣のゆかりにとわたくしをうけ出し、此下屋敷におかせられしを、わたくしも子供の時よりつきそひまいらせし太夫さまの事わすれがたくて、過し八月に髪をおろし此すがたとなりまいらせ、あけくれの仕事には花つむと經よむよりの事もあらず、一人つかふ女童は茶湯わかすと羨たく役ばかり、さりとはすてはてし此身とはおぼしめさずやとものがたり時うつれば、法論味噌にかける酒鹽の餘景ありと德利取出し、甲州梅のさかなにてひとつまいれとすゝめ、われもむかしをおもひ出の一ふし、懺悔のためとや申さんと、佛壇の下より三線とりいだし、これは太夫さまの手なれ給ひしのなるが、主はむなしくなりぬれど、こゝろなきものとてかはらずあるも結句わびしきと、泪を袖にしのび

ごまかけて、ありし昔の朝込のけしきを、竹本風にかたりしが、をかしき文句なればはな紙に書て歸りしとて、其おとこのかたりし、

傾城太々神樂卷之四終

傾城太々神樂卷之五

第一　麗山の玉手箱

鷄の空音をはかりて函谷關を出しは孟嘗君が智恵、空腹切て城をおとしは忠信がはかりごと、地黄煎を箸に付て、錢箱の銀をぬすみしはむすこの才覺、火燵の簀櫃をあけてしのびしは娘のいたづら、女郎を呉服屋の挾箱に入て廓の門を出しは、橘市が分別ぞかし、むかしは女郎の町へ出る事自由にて、ちかきあたりの宮寺へは、つねに詣ける中にも、天滿の天神へは參るものおほかりければ、今もその餘波にて、月毎の廿五日を紋日にする事とぞ、其後廓を出る事かなはぬより、かの里もさびしくなりもて來れりとふるき人のかたりき、されど今も宿屋としめしあはせ、鑓代に合點さすれば、金次第にてどのやうにも出らるゝ事なれども、萬一不首尾になれば宿屋も商の害になり、女郎は課代に年を切增事となれば、地獄の上の一足とび、是ほどあぶない事はなけれども、大膽なる女郎は人にもしられず、只一人ものゝまぎれに門をしのび出ても、何の浪風たゝずにしまふ事、甲ほどの穴

を出る事也、文月朔日より晦日まで、道頓ぼりの墓所には石塔ごとに燈籠をとぼし、念佛申こゑ題目となふる音、千里の外へもきこへつべく、毎夜の群集山をうごかせり、此時節に何とぞかの寺に詣てさき立し兩親のぼだいをとぶらひ、あさましき身の後世をもいのりたやとおもひをこめし女郎、朋輩の中にも物に心得たるみつねと談合して、さらしのかたびらに黑繻子の中幅帶、ぬり笠をわざとあふのけてかづき、とろめん足袋に奈良草履淺黄の手おほひに金地の扇迄に氣をつけ、髮も身ぶりも町風に出立十四日の黄昏、かけごひの往來もつねよりはしげきに打まぎれて、東の門をしのび出、よつ橋をこゆれば心齋橋とかや、山口屋にてあふ客は此あたりの酒やならんと、心づかひせられてゆくほどに、嵐三右衞門が芝居はかぶろの時に見たる事、おもひ出られてゆかしくながめやりてあゆめば、法善寺につきぬ、聞及し燈籠は、四廓の夜見世よりおびたゞしく、名におふ石井の清水を口にふくめば、さながらに心のにごりも涼しきやうにおもはれ、本堂の御佛をしばしふしおがむは、きのふもとめし珠數の未通(みづ)あげもおかし、身まかりしおさなき子供の弄物おさむる地藏堂とやらんは是かとよ、かぞいろはいかになしとおもふらん、まことや古墳おほくは少年の人なるもさだめなき世のすがたと、眞實の泪おさめがたし、そこなる新敷石塔見ればば薩摩の國の何がしとしるせり、いとしや遠き國よりはるばると爰に來て、なじまぬ里の士となられし事、さぞやふるさとの御内儀さまのなげきの程も、をしはかられてあはれなれば、逆緣ながら念佛申てたむくるに、又ふるき卒都婆の苔にうづもれて文字も見へぬは、あとゝふ人もなきゆへにや、樒さすべき筒もくだけて、只叢の虫のこゑのみ事とふよすがにて、さす月影もものがなしく、まことにかゝる所の秋也けりと、つきぬあはれは女心のくせにて、かの里のつとめ氣もうせて、中將姬の胸のうちかくぞありけんと、我ながらたうとし、道ふみなれぬ身のつかれに、あたりなる水茶やにこしかけてしばしやすむ所に、うしろから扨も久しやといふものあれば、はつとおもひしが、笠の內より見かへれば、過し比かみやにてあひし重といふおのこ也、見つけられしうへはもはやつゝむ所でなしと、こよひの首尾をかたり、さてそ

なた様には長崎とやらんへ御下りのよしうけ給はりけれど、たよりもあらで文さへしんぜませぬおこたり、今あひましてことのはもない仕合、さりながらそれをなじみだけに御ゆるしあれかし、かうした所にて御めにかゝります事も、つきせぬゑにしかといへば、なるほどそなたの御ぞんじのとをり、われ事も久敷長崎にありしが、きのふ癸元へのぼりしゆへ、いまだその里へもまいらなんだに、思ひかけぬ所にてのたいめん、けつく氣がかはりてをかし、さだめし十五日十六日のやくそくはあるべけれど、何とぞさしかへて紙もとへ御出あるべし、こよひはもはや太皷まへぞや、おそくてはしゆびもいかゞなれば、われらおくりまいらすべしと、すぐに紙屋にともなへば、是はめづらしき御出と、まんがけうといこゑも久しぶりなり、もはや此まゝにて朝込と、長崎にて酒をしあげたる手柄ばなし、丸山のうはさ、南京の小歌、漢浦塞(かはちや)のおどり、阿蘭陀の錢よむまねなどするうちに、まだ初秋のながからぬ夜はしら〳〵とあけにけり、公事宿に居る一時は三年ほどにおもはれ、色里にあそぶ終日は、茶一ぷくのむ間ほどにもおもはぬは、みな氣のまへぞかし、十五日の日もあかぬ物がたりにくれ行ば、聖靈をくるとてかたはしから鉦たゝき立て、麻骨の門火をもやし、明年の〳〵といふこゑにおどろき、われらもいなねばならぬと、あはたゞしく床を出れば、内かたの首尾よろしうなされて、明日もはやく待ますといへば、おのこ泪をはら〳〵とながして、今は何をかつゝまん、それがしは去年九月に食傷にて身まかりたり、今年は荒尊聖なりとて古郷に我魂をまつるゆへ、きのふ冥途より來る道にて、不慮にそなたにあふてゆるりと物がたりいたし、妄執のおもひをはらしてうれしや、さりながら幽靈の事なれば、何もやる物はないほどに、けふあすのあげせんも、そなたのはまりにして給はれと、かきけすやうにうせにけり、

第二　所分の落武者

茄子の一荷になふて大坂中かけまはり、すゞしき陰に汗さへしのがずかせげども、一日に錢五十儲かぬるものも有に、よい酒のんで阿房口たゝき、指のまたひろげれば、一歩の二つや三つは心やすくせしめるたいこもちも有、蜆一升買とて一日ねぎるおやぢ

も有に、一時ばかりのなぐさみに、六十三匁出してほこりともおもはぬむすこも有、松囃興行するものは、年内よりたのみにあるき、扨年玉に扇箱、筆、金杓子やうの物を持參し、其後大杉原にふれ狀書てまはし、拍子しまへば五里程ある所へも袴きて禮にゆくは、僅か二匁の銀ゆへ也、女郎買目から見れば、供の者一人の夜食ぞかし、人に物もらふは大かたの事にてはならぬに、女郎はさのみほしいともいはねど、こちらからやりたがる氣になり、すくなければはづかしく、又おほいとても、女郎がうれしがる顏もせぬもの也、惣じて惡所に金つかふ者は、世間の義理を欠事、あちらこちらのちがひとおもへば、其身の了簡には、女郎の手まへをわけわるふはならず其上に世間の義理をもつとめては、針を藏に積でもたまらぬといふは、さりとは大だわけの幡がしら也、絹布を買て質にをいて女郎ぐるひするものもあり、又銀をにぎりすくめて、一生くらす者もあるこそさま〴〵のうき世や、和吉が富は、家賃と銀の利ばかり、一日に五百目ならしに取こむつもり、世諦には三貫目いらぬほどの始末、そのくせ惣領むすこは近隣にかくれなき虚介、其母夢中に茗荷子をくふと見て懷胎したる子なれば、鈍なるもことはり也、すでに十八の秋風も身にしむ比なれや、陰嚢の芋も味のつく時分、女と寐て見たいとおもふ心ざしはあれど、人にともなはん事もはづかしくて、播磨の三木より這出の丁稚をめしつれ、新町の西の口より東のはづれまで、つぼねごとに立のぞけ共、此筋は端の女郎も勿躰ありて、燈もかゞやけば外薄〳〵しきに便なくて、そこを南によぎるとて、木屋河内やひのやなどいふ茶やを箔よりかいま見ければ、夜食の菜たくかざに、鼻をひこ〳〵として打過、葭原の北向にかゝれば、はいらんせはいり給へとよぶにぞ、いもせのゑにしとよろこび、丁稚を戻して身はそこにあがり、是ぞ一代の戀はじめ、そのはづかしさいはんかたなく、わり膝にかしこまり、わな〳〵ふるうを、女郎もきのどくがり、ろくに○さんせといへば、心得ましたとうつぶけに○る、○とかんせと云ば○をとく、したの○もとかんせ、こちらへござんせ、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○さんせと、ひとつ〳〵いはねばはたらかぬ虚介、やう〳〵と埒があけば、食焼とふたせの鍵代、はたのかけたる天

目に、水のやうなる茶を汲で來るを、女郎さまそれへまいりませぬかと時宜を申ておしいたゞき、がぶとのみしまひ、此傾城さまの直段は何ほどぞとゝへば、五分といふにぞ、ふところより一歩一つ取出し、是が五分あるかゝけて見やれとわたせば、此鑓代一歩といふもの見た事がなければ、さらに合點せず、是はわるがねさうにござります、いつも箱やの八さまの持てござるやうな、しろいまるまこい銀が能ござりますといへば、今宵はその黄なる金より外には何ももたず、それにて堪忍しられいといへば、中々うけとらず、からりころりとつめびらき埒があかねば、是はならぬと虛介どのは、草履もはかずにはしりいだし、越後町を西へにげてゆくを、染物やの太兵衛が見付て、何事ぞやまづこなたへと折屋へつれてはいれば、おりふし座敷には、京屋の御幸いばらきやの半太夫木屋のさど、つちやの高田など一座にありけるが、あなた樣はいかふ人におわへられさんした顔つきぞや、子供よ水をあげませいといへば、おかまいなされますなくるしうござりませぬと、しばらく胸をさすりおろして居る所へ、最前の鑓代跡をしたふてたづね來り、戾元へ角眥の若衆樣は見へませぬかと尋れば、なるほど是にござるが、何の用ぞやとゝへば、さきほど私方の女郎さまに客にならんしたが、一歩といふものを一つおかせ給ひし、そのつりの錢一貫二百八文持て參りました、是をとゞけて給はれとおり屋のあがり口に置てかへりぬ、いづれもしぬるほどおかしがり、おくの女郎樣たちに此事はなしてわらはしませうと、只今の若衆さまに、いづかたの鑓代衆やら御めにかゝりたいとてまいられましてとはなしいだせば、そのさきもきかずに、南無さんぼう戾迄おつかけて來るかと肝をつぶし、次の間へ立て疊一帖まくり、ほこりおとしのあなより身をなげて死てんげり、虛介が最後のありさま目をおどろかすあとの世がたり、

傾城太々神樂卷之五終

傾城太々神樂卷之六

第一　耻辱のかきぞめ

好色は人の根元二ばしらの神のむかし、穴こゝろよやとの給ひし天のうき橋の下紐、むすびそめしがふかいゑんばしらのねせおこし、ふんどししめてもこらへられぬは此道と、こぞの折には無分別が出て色里のゆかしければ、又してもく廓の事ならではゆふづけどりのおもしろさに、筆とりてかけどもつきぬは風前の落葉、かたれどもつきせぬは傾國のうわさ、過し六月廿五日に、さる女郎燈をそむけたる綺のすそ蚊帳より、しろい○をいだして屁をすつと放て引こみけるを、阿牛といふもの襖のひまより見付て、そのちかやうくの事を、見ましたとさゝやきければ、女郎大分きのどくがり、かならず人にさたなしにたのみますとて、黑はぶたへのひとへ羽織を送り、まだその上によい事をさしけるとぞ、又さる方の太夫、いよ屋がおもてにて、古い花色の布子きたるおのことしみくさしたるものがたり、久しくして立わかれけるを、柏庄といふおのこ、むかひの隅に立かくれて見てけるが、內々間夫のおのこ有と聞けるを、よもやさやうの事はあらじとおもひしに、こよひこそたしかに見つけたれと、さしむかふていひいだせば、みしやり白癡ゆめくない事、もつともさきほどものいふたおぼへはあれども、あれは少わけある人にて、間夫の男といふやうなものではござんせぬといへ共、一切のみこまず、それをもめつのりてつゐに其女郎をのきけるが、後にきけば其夜の男は女郎の兄也、銀のむしんいひに來りしを、外聞よろしからぬ事なれば、さすがそれともあかしていはざりけるは、いかにしても殊勝なる心入あはれに思はれて、又其女郎に中なをりてあひけるとや、又さる家の女郎、牛の角もじすぐなもじを書事もならず、とゞけの文は人だのみしてすましけるとや、此たぐひの女郎は今もすくなからず、外の事とちがふて不自由なるべしと、笑止にこそおもひやらるれ、餘所につとめて居給ふ折ふし、客の方より文して申こす時は、さらくとよむふりしてわきの一間へ立給ふを、かぶろが心得てひそかによむ事也、あるひは宿やの亭主がよみてまいらするもあり、いつの比にかありけん、平德といふおの

こが、あひし女郎無筆なりけるに、いさゝかの事をいひつのりて、それがいつはりならずは、起請をかけといふ事になりぬれば、なるほど明日こなたから書てやりませうといふを、いや〳〵內證にてはさきの男と談合してかくもしれず、又はつとめの事なればもつたいなくも起請をかきはいたしましたれど、是は反古でござりますと、筆にて消まねしてまじなふ事も有ときけば、とかくめのまへにてかくべしと硯あてがへば、さすがゑかゝぬといふもはづかしく、又かく事はおもひもよらず、一期のきのどく此時にきはまりけるを、やう〳〵と思案して起請かく迄もなし、うそのない證據には是見給へと、小指を切てなげつくれば、平德しぬるほどおかしがり、そもじの無筆のかなしさに、いたい指をきられし事のいとしさよ、是にておもひしり、今から手習めされよ、此方にもかやうの不器用なるゆびはいりませぬと、小便擔子へ捨て歸りけるとかや、此女郎ものかゝぬ事をつねにくやみ、何とぞ付る藥もやあるべきかと、醫者にたづねられければ、そのやうなるには、土筆をくすりぐひにし給へとぞ申けるとなん、

第二　白うるり

誹仙堂伴自は、みづから紀貫之の後胤といへども僞りかもしらず、武州長井の產にて、少かりしより風雅に心をよせ、とりわき誹諧の嗜者(すきもの)なるが、廿五歲にて世をのがれ、滑稽執行の行李、髮はそらねど身は風雲の僧よりかろく、夏は冬の貯せず、秋は春のあんじ置もせず、油箪ひとつを茵にして、山にものぼる里にもくだる、足くたびれねば夜もとまらず、目がさめねば晝もおきず、世をはゞからぬ曲者なれど、やさしき心ざしに友ありて、江戸におもむけば、其角一晶立志などが許にくらし、都にのぼれば言水似船我黑が誹堂に足をやすめ、此ほどは難波に來て來山才麿由平が詞席にまねかれ、此のち猶西國におもむくねがひなれど、此津の人の角のなきつきあひに住よくて、今は米や町といふ所に居をしめ、俳諧の點して味噌鹽の堪忍をもとめくらしぬれども、心ほどにはゆかぬ世の中にて、二个月分の家賃滯けるを、家守の八兵衞が飾臘敷せがむに、是非なくて三寸四方の箱を一つ持參し、是は某重代の物なれども、先當分の質に御うけとりなされて、そなたの旦那どのに御めにかけら

れよ、御自分の御らうじては埒の明くものにあらずといへば、八兵衞かたい男にて合點せず、さやうの子細なる道具むづかし、只めのこ算用に銀子をわたされいといふを、ひらに此箱を御預りたまはれ、御損のまいるものにてはなしと得心さすれば、八兵衞は其あしにて旦那の方にゆき、くだんの樣子をかたりて箱をひらけば、鉋屑一枚と蛙の干物一つ有、是は用に立ものにあらずと、伴自をよびよせ子細を尋れば、なるほど御不審は尤也、むかし古曾部の能因法師加久夜の節信と出合し時の、長柄の橋の鋸屑と井手の蛙の干物也、名譽の歌人のたしなみ道具、それがしが家に傳りしを、此以前幡本の御大名より金子五百兩に御付ありけれど、はなし申さぬ重寶なれども、當分家賃せがまる難義さに、實は身のさしあはせと存かやうのわけとかたれば、家主な丶めならず感じ、さりとは道に心掛ある人のたしなみ殊勝にこそあれ、そなたをさやうの人ともしらで疎遠に過し殘念さ、今日よりは家賃も堪忍してまいらすべし、明暮こなたにおきふしてはなし給へと懇意のあいさつけつくいたみ入仕合也、家主は河内やの何がしとて内福人、酒は手のものにて山海の吸物、國土の滿鉢大盃にてしいられ、跡は枕して遠慮なき好色物がたり、亭主も粹自慢、そなたの井手の蛙にまけぬ物あり、色里に心をはこぶもの丶たしなみを見せ申さんと、料紙箱より一つ一つ取いだしける、淺黃うらの頭巾に戀ぞつもりてふちとなりけるの歌かきたるはいにし吉田が筆也、黃八丈の帛は江戸の金吾が小袖のきれ、延鏡は京の浮船が手なれし物、伏見の薄雲がかくし髢、長崎の出羽が紅皿、松かはびしに櫻の紋かきたるは井筒がさしぐし、松の丸かきたるは小太夫が十種香箇、又此竹の笄子は村雨がおやぢの細工也、椀久が印籠、かつらぎが夜のけぬき、おのへが鐵漿つけ楊枝、小里が新艘の時用ひし伊勢粉、夕霧が十七年忌のもりもの丶饅頭、波江が腹帶、いづみが身あがりの伽の曾我物語、以上十五色一つ〳〵袋にいれて大事がるもおかし、此ものがたりに無分別をつのり、十二月の廿五日はおそろしいものにもあらず、借錢さへせねば心やすしと、鸞栖御ともにて、すぐにさかいやに朝込の長持まはせば、すでに夜半の鐘なりて、寒き例ならぬに雨戸あけてのぞけば、近年めづらしき雪七八寸つもりぬ、發

句の趣向を天よりふらしたまふを、寐て居るも心なしや、殊に此さとのねざめいかにしてもにくからぬ夜なれば、曉まで只一人あるかねば堪忍ならず、誹諧袋の寒ざらしせんと、作自は下駄はいて九軒の軒づたひにうそぶきつゝ、阿波座をかみへあがり新町を西へさがる所に、むかふより白妙のうごきて見ゆるは人也けり、笠には無影の月をかたぶけ、柴には不香の花をおるは由入の雪にふらるゝけしきとや、光る源氏の常陸の宮にとまらせ給しあかつきの庭の雪もさこそや花待やどの心ゆかしにつもるもおかしといふは、やさしき女聲のほそけれど四方のしづかなればよくきこゆるに、鸞栖も例のすきもの、ちよこ〳〵とはしりより、かゝる雪の夜にまだふり袖のよねすがた、しかもちいさいかぶろ一人の御供にて、物こわがりもせであるかせ給ふは、あさごみに御ゆかせの躰とも見へず、なげぶしの寒ごゑつかはせ給ふにやといへば、さやうの事にもあらず、めづらしきこよひの雪を、よそにながめば心なしとや人のわらはんもくちをしさに、ひよつとかうした事といふにぞ、大かたならぬやさしさ、くどかば物になるべき事とおもひ、われもさやうの心ざしにてかうしてものとして、さて其のちにかくて又、つら〳〵おもんみれば、そもそもあはれ也など、こと葉をならべてくどきよれば、さすがつれなくもあらで、雪をれしたるありさま、是はしてやつたものとうれしくて、こなたへ同道せんといへば、人めがましき方はゆるしたまへ、しる人にあふては、いひわけがないといふもことはりなれば、瓢箪小路のゆきあたりなる松が母の所にともなひ、戸たゝいて少爰がかりたいといへば、此里にすむものには、粋の妙ありて寐覺にもとぼけず、なるほどこなたへ御はいりといへば、ありあけの燈もとぼさねば、其くらさ天の磐戸のむかしもかくや有けん、あがり口で足をうたせられな、そちらの方には水壺がある、こなたの壁のきはにはたばこ盆がある、むかふは佛垣ぞやあたまの用心とおしゆるもおかし、火燵に火もありゆるりとおよれ、わたくしは娘が所へとまりにまいると氣を通しぬ、ゆくりなきまくらにしばしむねのときめきやまず、かぶろは夜着の裾にねさせ、たがひのつめたさは身と身とにてぬくめつゝものするほどに、雪よりしらむ曉は東窓にしられて、隣

の子が目さまして泣こゑすれば、祖母が南無阿みだと申も夜あけのけしきなれば、あけはなれぬうちに御いとまといふを、誠にこよひはふしぎのゑにしにてありがたき御なさけ、いつの世にかわすれ申さん、是をいもせのはじめにてゆくさきあだならぬやうにたのみます、扨御すみかはいづかたのよね樣ぞやと尋れば、はづかしながらわたくしは誠の女郎にはあらず、かやうの夜はあらはれ出る雪女と申ものぞや。とて、かきけすやうにうせければ、かぶろも霰でござんすとてころりと消にけり、

寶永二乙酉年十二月吉日

書林難波津　伊丹屋茂兵衛

傾城太々神樂卷之六終

風流源氏物語序

むかしの戀しり俊成、定家、紫の紐を解靑表紙を披て、源氏不レ見歌讀は無下の事なりと此君等の悦をうけ適彼卷に望ながら、敎なければ謡曲になづみ、只唯蓬生の宿に住で一露の雫に口を雪ぎ、湖月の陰に嘯、或は河海に船を寄、泯江八楚の底を探る、しかはあれど道ふみ分ざれば難レ知、をのづから花鳥の音に鳴ねはりするもの不レ少それを僕歎きの餘り、もとより窓の螢をむつびて、枝の雪をならさゞれば、淺見寡くきける呼を耻といへども田舍生立の振袖に似せ紫の下染をしらせ、藤咲く門の口をやはらげ、關雎螽斯の德を咄て、恪氣深い奥樣を懲し、かくれたるよりあらはなるが增じやとおもふ阿賴耶から、好色淫風のよこしまなる筋を捨て、密夫狂する助平をいましめ、また日本中華を兼て物の情をしらむ、誠にみなもとふかき水は汲ども更に盡る事なく、金玉は磨ほど猶光をます、我朝の重寶此物語に過たるはなし、いかなる家暮頽運盡も、一もとゆひのゆかりにうつり、式部が味を咶て見ば、甘も酸もしらるべし、とは申せども我ながら、くらはし川の晴き心に、天の橋立便りなく、みるめも疎き摩訶虛の光を盥の水に移に等く、兎毛の先で石山を動んとはあゝ慮外千萬、

未の春京もいなかも餅喰時に

都の錦

風流源氏物語目録

卷一

桐壺　禁中御殿の名也、みかど御寵愛の更衣（女官の名也）此つぼねに住しゆへ、則桐壺の更衣といふ、此卷にはかの更衣の事を專ら書すに依て此名有り、

卷二

桐つぼ　此名一のまきにくわし、此卷の中にも又七丁目にその說あり、引合せみ給へ、

卷三

きりつぼ　あるひは壺前栽ともいふ、此卷の九丁目にみへたり、

卷四

帚木　歌のことばをもつて名とす、源氏の君中河のやどにおはしましたるに、空蟬つれなくて逢たてまつらざりしかば、帚木の心もしらで

の歌あり六の卷にみへたりたゞし其本歌は坂上の是則が歌に、そのはらやふせやに生るはゝきゞのありとは見へてあはぬ君かなとよめり、さて帚木とは美濃しなのゝ兩國のさかひに、そのはら伏やといふ所にある木なり、とをくみれば帚をたてたるやうにて、ちかくてみればそれに似たる木もなし、しかればありとはみへてあはぬ心にたとへ侍り、此一卷の名なれども、此物がたり五十四帖の惣躰の心也、其子細は、先此物語は作り事にてなき事かとおもへば、又むかしありし事をおもかげにしてかけり、さては五十四帖みなことぐくある物かとみればなく、なき物かとすればあり、しかれば有にあらず無にあらず、中にもあらず是一にあらず、一心三觀一念三千一諦三諦萬法至極の妙理を談ずる物語なれば、安居院の法印と聞へし人も言語をたへて、是天台の正觀明靜より書あらはしたる不思議不可得の道をこめし物語、愚僧が領解にあたはずと禮拜ありしより、このものがたり世に名たかしといひつたへ侍る、さればかの式部水月の道場に座をしめ、實相須磨のうら風に無明の眠をさますとみしは、夢のうきはしわたり過して、忘想の浪とみへしも本の法水濁るは隨緣の淵よ硯石山にたなびく雲はむらさきの、名にしおふ女は救世の化身か、又その筆をかみやわらげて、當世の枕詞にうつす、都の錦は女三の宮に愛がられし、猫の生れ替と笑ながら、鼠の髭をそへぬ、

浪花の　散人　書

光君元服　左大臣ゑぼし親の事　あふひの上祝言の事

色の發明　頭中將御見舞の事　千話文をあらそふ事

戀の評判　女のよしあしの事　すへつむ花の事

卷五

はゝ木々

雨夜品定　あかしの上の事　花ちる里の事

目錄終

風流源氏物語卷一

それ戀路のみなもとは、久かたの天（あめ）にして浮橋のうれし言より始まり、あらがねの地（つち）にしては八重垣の一ふしにおこり、花に巣作る鶯、紅葉ふみわけ鳴鹿の妻よぶ聲を聞からは、いきとしいけるものいづれか戀をしらざりける、戀路はあまた品ありて、見る戀聞戀しのぶ戀、逢戀、待戀わかれの戀、年はふれどもあはぬ戀、千とせをかけて契戀、旅寢あだなる袖引ば、なびくやさゝの一夜妻、あねにいもうとかはるもあり、人たがへつゝちぎるもあり、物のけしきのかよふもあり、又露霜にしほたれて、所さだめずまどひあり、親のいさめ世のそしりを、つゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思みだれ、二世とちぎるはふるき中、二河の流に身をたつる、遊女に實はなけれども、つとめはつとめ戀は戀、いかうわけある言の葉の情つもりて命をすて、心中するも戀の山、高きいやしきへだてなく、智あるもをろかなるもまよひやすきは此道ぞと、みづからいましめておそるべくつゝしむべし、こゝに人王六十代醍醐天皇と申は（世に延喜のみかどゝ申す、）

宇多天皇第一の御子にて、聰明叡智におはしまし、もろこし二帝三王の道をかね、わが朝仁德顯宗の跡をしたはせ給ひければ、世に賢王と稱しつゝ、五日の風梅が枝をいとひ、十日の雨千草を濕す、今もや鳳凰飛來り左近櫻に羽をやすめ、麒麟忽出現し、右近の木陰に晝寢するかとあやまたる、受禪の宮をば寬明親王と申奉り、右大臣の御むすめ弘徽殿女御の御腹、後に朱雀院と申は此御子の御事也、されば日月明らかならんとする時は、よこ雲これがために覆ひ、人君正しからんとすれば、寵妾これを亂る事、唐も日本もむかしより、そのためしすくなからず、夜となくひるとなく、御傍にかしづく女御（女御とは后の次なり數はさだまらぬなり）更衣、（數十二人みかどの御服をあつかふ女官なり）あまたさふらひ給ふ中に、いとやんごとなき位ならねど按察大納言のむすめ、桐壺の更衣と申は、すぐれて時めく花のかほ二八の春の明ぼのや、霞は黛おのづから、その身に薰せざれども色もにほひもほのめきて、風にしなへる柳ごし、膚さながら瘦もせず、肥あぶらつきたをやかに、驪山の雪のふりわけがみ、うちかたぶけるけはひには、琵琶引ながらとろとろと、馬眠りせしもろこしの、器量自慢も爪を嚙、牛の角もじ引たてゝ、草刈笛に音を泣し、長者が姬も是にはと、をごろくばかり目もあやに、みかども今はよねんなく御心をうつされ、晝は終日諸ともに、玉のさかづきそこはかと、褥の上に醉機嫌夜の錦のむつごとは、枕の外にしるものなし、かゝれば御傍につきしたがふ攝家淸花のむすめたち、いづれも一つにより合て、美女は惡女の敵ぞち、をのれ／＼が身を高ぶり、胸のほふらを日に千度、燃して桐に燒付るその一念は初から、われこそ御側に宿直して、紅の褥を穢すべき所にさはなくて、しなくだりたる桐壺を、めし上らるゝのみならず、餘には女もないやうに、朝夕ともにくされつき、夜の御殿の出入を、かれ一人にまかせつゝ、生したゝるき龍眼に、泪の低（たる）ほどうれしがり、淸涼の夏の日は、膝を枕にうたゝねの、奈良扇團にてあふぎたて、凮めにみへぬ秋の夜の、長（たく）きも今はみじかくて、夢ばかりなる春の宵は、日の高るまで御寢なり、朝政おこたらせたまへば、はてわけもない御事ぞと、女御更衣をはじめ、命婦（朝夕御膳などをつかさどり給仕する女官也あまた有）內侍（つねにみかどの御そばに居て仰を聞て人に傳る女官也）にいたるまで、目さむるこゝちにあきれはて、法界悋氣の絕間なく、是あのお山が

所爲なりと、散々にそねみつゝ、ことがなあれかしみをとさんと、外面は菩薩のわらひがほ、內證修羅のをそろしや、釵の枝のたわむまで、いかになりゆくこのみぞと、下地內氣にむまれつき、遠慮がちなる桐つぼは、人のうらみのうたてさに、身もなよ〳〵となよ竹のふしてはゆめにものおもひ、さめてもいとゞうつつなく、おきなやみ給ひければ、ある時みかどへ申上げ此ほどみづからかりそめに、風のこゝちのつねならずおもきなやみにさうらへば、あはれ御いとま給はりて里え下りゆる〳〵と、心まかせに養生を仕りたく候と、うちしほれてねがひ給へば、主上（みかどの御事也）の御心におぼしめすは、此ものつね〴〵心よはく、事なき時にも人の氣をかね、世間のそしりをひたすらに、堪忍びたる生れつきなるに、ことさら朕が寵愛すれば、あまたの恨を身にうけて、いやましのおもひ草葉末の露の心よはく、違例がちなるそのけしきいはねど色にをしはかり、いとゞあはれに今はなを、御衣になみだのやるせなく、しばしも其方にわかれては、うき身は何とならざかや、此手を握りそろ〳〵と、大事の所をなで盡し、さりとてはまたそのやまふ、さのみ重しとみへもせず、さとへ退ん出づるとおもひ、此まゝ爰にとゞまりていかやうとも有たきまゝ、腹一ぱいに養生せよと、結構なる御意をもつて、和氣丹波の兩醫をめされ、金の藥鍋に瑠璃の茶碗、朝鮮人參下されしだいに療治する事、身にあまりありがたき御情と、花靑の池に浴せし貴妃がむかしも思はれて、雲の上人面々に目口をしかめきのごくがり、わが君のやうに色におぼれ安房を盡させ給ひては、日々月々にまつりごと自然とおとろへをもはずも、天下の亂となるべき事掌をさすがごとし、さればそのかみ聖武天皇の御時に當て、もろこしのみかど玄宗皇帝と申せしは、儉約を本として衣冠より馬車にいたるまで有るにしたがひ用ひつゝ、金銀珠玉のかざりをやめ、下の奢りをいましめんため、綾や錦を積かされ、皆ことごとくやきうしなひ、姚宗、宋璟といへる二人を用て大臣としまつり事をとりおこなふ、是みな民を愛し君をうやまひ忠信をつくす、さてまた勸政樓、務本閣といふ宮殿を作る、（勸政樓とは政をおこたらずつとむるといふ心にて公事をさばく所也務本閣とは仁義の木をつとめんといふ心君子務ν本本立而道生といへる論語のをしへを取て名付る也）又此時に至て、大聖孔子を諡して文宣王とあがめ、毎年春と秋と兩度づ

つ大なるまつりをおこなひ、幷老子を玄元皇帝と號し、太公望をも武成王と謚してこれをまつる、かやうに上には政道たゞしく、下に忠ある諫臣あれば、君の百姓をめぐむ事父母の子を愛するがごとし、かるがゆへに民君を敬ひ其德になつく事、親をのぞむがごとくなり、しかるによつて開元といふ年號三十年ばかりの間は、上下やはらぎむつましく、四海浪風しづまりまことにもろこしの元祖、太宗の治世にもおとらぬほどの政道、貞觀政要をうらやみ玄宗みづから孝經の序を作り給ふ、御註の孝經とて今の世までも殘りける、さて開元の次の年號をば天寶といふ時に、李林甫と申もの大臣の位に成て、玄宗の御氣に入り肩で風切る山頭、飛鳥も水に落、魚木にのぼる勢つよく、唐も大和もむかしより出頭人の曲として、もとより此もの無道なれば、上をあざむき下をあなどり、おのれが氣にくわぬものをばいかなる賢人君子をもさんく\にいひおとし、そねみ疾のはなはだしく、心にかなふ野人をばめつたやたらに贔屓して、御爲者ととりなし過分の知行をあたへける、さるによつて忠臣そむきはなれ、そろく\上下みだれたり、その上みかど楊貴妃といふ美女をもとめ給ひしより、すでに玄宗まつり事を怠たり給ふ、これ亂世のもとなり、そのゆへいかにといふに、ひたすら好色におぼれ楊貴妃がのぞみなれば、熱さかまはず燒金(きせる)をあて、そなたかはるな朕かはらじと、互に指の血をしぼり、そらおそろしき起請文橫に輦引かけて、上陽の春のあしたには、花の下にて附酒のみ、芙蓉の秋のゆふべには錦のふとんに唾を流す、それ楊貴妃は弘農といふ所にて、つくりだをれの瘦百姓楊玄琰がむすめなり、げにや女は氏なふして三枚肩で步行とかや、楊貴妃がむまれつき、たぐひなき美女なれば、人ごとに戀したひのぞむといへども、父さらにこれをゆるさず、下心にはいかなる高家大臣の筵敷にもたてまつり、親一門までらくく\と、榮花の春に逢ん事をねがうをりから、玄宗の弟壽王よりたづねありて、いつく\の日はむかへとりたまふべきやくそくにて、支度銀までうけとりける所に、兄玄宗かの女のぬれ物のよしきゝおよび給ひて、しきりにめされけれども、最早壽王に先約ありとて勅諚にしたがはず、玄宗重てのたまはく、しからばたゞ二三日禁中にとゞめ、そのまゝ後に

はかへすべき間しばらくの内かしまいらせよと、再三勅命そむきがたく、むすめを内裏へ出しければ、玄宗みるよりぞつとして、魂たちまち貴妃が袖に欠落するかとおもはれ、かゝるまれなる珍物を人手にかけんも本意なしと、その夜より側に寢せまだ水揚のうゐ／＼しく、どうやらこふやらよい事を、しつぼりびつたりつゐすまし、それより朝夕なれ／＼て、たゞ貴妃ばかり御用をきゝ外の女中は御側によらず、惣じてもろこしのならひにて、本の后をば專夜の寵といふ、その心はたゞ一人して一夜を專につとめ御そばに寵（かしづく）ゆへなり、其外の女中は一夜を一人してはつとめざるなり、すべて三千人の女中の奉行あり、それを阿監といふ、此阿監が三千人の女の中にて、こよひは尊丈某に御參りあれとはからふて、十人ばかりゑらびいだす、君これを御らんじてこよひはそれをとどめよとの給ひて、御心にそみたるをとゞめ給ふ、しかれどもこれらは、終夜はつとめずして半夜にして退くなり、たゞ本后ばかり宵から夜あけまでつとめ給ふ、しかるにようきひは本后ならねども、晝は終日酒宴舞樂にてくらし、夜はよもすがら千話まじくら、表うらなき紅の夜着たゞふたり寢の長枕、金屛さらさら引まわし、しきりにあらき風の音、峰の嵐か木の葉のしぐれ、それにはあらで息づかひ、閨に氣味よくこゝ地よく專寵愛かぎりなし、これによつてようきひが兄の楊國忠といふもの、かの大臣李林甫にかはりてまつりごとをとりおこなふ、ならびにきひが姉三人あり、號國夫人秦國夫人、翰國夫人と名づけていづれも大國を給はる、ようごくちうはもとより愚惡不道のものなれば、一旦の權にほこりてさま／＼のひが事をなせり、しかれども玄宗何事をもかれにうちまかせらるゆへに、まつりごと日々におとろへ天下の人みなうらみいきどほる事かぎりなし、さて玄宗はつねにあなたこなたに行幸有て、ようきひに舞樂をさせ鼻毛をのばし給ふ外さらに他事なし、此時に安祿山といへる大名有、北方のおさへとなりて、大國あまた申うけ、あくまでみかどの御恩をあつくかうぶりたれども、謀反のこゝろざしあるよしを人みな訴へ、かやうのものをばはやく誅罰せられずんばいかゞと告來るに、みかどいかゞはせんと思案し給ふをりから、祿山おそろしきたくみをなし、ようきひ

に音信物をさゝげ氣に入るやうにしかけ、內證を申込、つゐに貴妃が養子分に成て禁中へ出仕すれば、玄宗みぢんもうたがひたまふけしきなく御こゝろをゆるし、結句安祿山に戎のおこるを退治せよとて、遠國へ討手にさし向られければ、何の手もなくたゝかひまけて迯さりぬ、惣じてもろこしの法にて敗軍の大將をば、生害する掟なれば、軍勢これをよきついでとおもひ、皆こぞつて祿山を申うけ、ころすべきよしねがひけれども、みかど御承引なくかへつてこれは、大將の科にはあらず士卒のあやまり也とゆるし給ふ、もとこれ何ゆへぞや、ようきひに性根をぬかしうつそりとなりて、色におぼれしいはれなり、又ある時きん中に、あまたの女こゐたかく、どつとわらひの聞へけり、こは何事ぞとたづぬれば、皇子御誕生ありしゆへか樣にさゞめき申とて、わかき女房あつまり、天鵞絨の襁褓を手に懸けて、あんろく山をはだかになし、むつきの上にのせ、手打々々口鳴々々頭天々々おもしろがり、四十餘りの髭男が安房をつくすおかしさに、腹を抱てどよめくなり、あまり寵愛過てのちにはようきひとあんろく山、密通あるよし、ばつと沙汰せり、かやうのしな〴〵を忠臣賢人いとにくみて、しきりにいさめけれども帝さらに用ひたまはず、さて安祿山が下心には內々楊國忠その身いやしき土民なれども、いもうとの寵愛によつて、にはかに大臣にへあがり權柄をふるまふ事、惡し〳〵とおもへども、さながら色にあらはさず、時節をうかゞひ居たりけり、かかる所に吐蕃の戎起て王位をかたぶけんとするよし告來れば、すなはち楊國忠を大將として討手にさしむけらる、およそ大將といふは士卒とこゝろざしを同じくし、一盃の酒をすゝめて諸人にこと〴〵く飮するに、不足時は其酒を川へうち入れ流してのましむ、冬も暖着をする事なく、夏も扇をつかはず、雨ふれども笠をかぶらず、これみな軍兵と大將とたのしびをひとしくうれひをともにする、かやうのふるまひをまことの良將といひ、戰場におゐてもその功あるべし、然るに楊國忠は、よるひる酒宴遊興に長じ、傾城をつかみよせて觀樂を專らにす、さるによつて大將の風にならひ、士卒ともに軍に怠りければ、かたきの勢は二十萬騎、みかたは五十萬騎なれども一戰にもおよばず、さん〴〵に追ちらされ皆逃てかへる

動してくづるゝよし、明皇雜錄にくわしくしるし、

時、ようこくちうおもふやう、このまゝにてかへりなば、手もちぶさたのはぢをうけ、みかどの御前がめいわくさに、みかたの勢の中に馬にも得のらず、甲斐甲斐しからぬへろ〳〵武者一萬人の首を切り、これぞかたきがゑびすが首とて、内裏の庭にならべをき上覽にそなへたてまつれば、玄宗こゝち能氣にわらひ給ひ、國忠にかず〳〵の褒美を下され、ゆるりと休息いたすべしと空氣たる御意をうけ、よろこんで家にかへる、しかるにかの一萬人の罪なふして殺されたる、親子兄弟伯父從弟、幾千萬といふかずをしらず有けるが、此いきどほりを散ぜんとのゝしる所に、あんろく山これぞよきさいはいと軍兵をもよふし、國忠をうちほろぼし、扨王位をかたぶけんとおもひ、そのよしを披露するに、右の一萬人の親類、疫病の神でかたきをとる心地して皆々よろこび、ろくさんにこゝろをあはせ都へおしよせ所々の合戰にうちかち、あんろく山つゐに天下をうばひ取て、すなはち大燕皇帝と我れと王號をつぎ、一夜檢校の心ちして御座へあがり、ひだり扇をつかひながら小歌をうたひ、足拍子をつよくふみければ、みかどのましますまの床震

風流源氏物語卷一終

風流源氏物語巻二

かくてあんろく山むほんのをりから、玄宗は花清宮へ御幸ありて、ようきひと霓裳羽衣の曲といふ、當世のはやり歌をうたはせ、そこらでしめろあふさて合點著と、間ぬけおごりをはじめて見物し給ふ最中に、軍勢鯨波を作かけさん〴〵にうちやぶりければ、音耳に水の入るごとく取物もとりあへず、此所にとゞまり防べきちからなければ、玄宗ようきひもろとも破れ車にとり乗て、蜀の國へ夜ぬけにし給ふ、路すがら馬嵬と云所にて御供の人々車をとゞめていはく、そも〳〵此亂のはじめはそれなるようきひを愛し給ふよりことおこり、それにつき楊國忠がわがまゝをふるまふによつて、諸人うらみをふくみいきどほりて、かゝるうき目をみたまふにあらずや、たゞ此兩人をころさずんば天下おさまりがたしとて、にがり切て奏聞し、そのまゝ國忠をつかまへ、兩方より引張蛸繪のごとくにさいなみけり、さてようきひをば玄宗なごりを惜み給ふといへども、供奉の人々達ていさめ申、つゐに車より引ずりおろしくきやかにしろじろと、雪のはだへに氷の刀をもつて情なく突ころす、みかどは夢のこゝちにてなく〳〵蜀の國へ落たまへば、御子肅宗道より取て歸し、官軍をもよふしあんろく山をうちほろぼし、そのゝち玄宗還幸成て御代を肅宗にゆづり、御身は內裏の西に當てかすかなる庵をむすび、頭は削ねど心ばかりは出家にして、上皇と名をかへ隱居し給ふといへども、明くれ貴妃を戀こがれ馬嵬の露のしほれ草、いかんぞ不二淚垂一時うつり事さり、たのしびつきかなしび來る、そのうらみ長くやむことなき所をおもひつゞけて、世智賢白樂天三盃機嫌に筆をとり、長恨歌をあらはし、唐の帝の安房をしらせ、好色のいましめとせり、げにあぢきなや日の本の、今のみかども中々に、此桐つぼにほだされて、世の中のそしりをも、ゑはゞからせたまはねば、すゑの世にかたり傳へ長恨歌のためしにもなりぬべきほどのもてなしぞと、公卿殿上人をしなべて、愛なきこゝちにきのごくがる、さてきりつぼの更衣は、父按察大納言におくれ、老母一人のかしづきにてたれうしろみする人もなく、よろづ心ぼそくおはしけれど、わけてみかどの御てうあひかたじけなき御心ば

への、無二なきをたのみにてみやづかへし給へば、くわつと時めく大臣のむすめ、親兄弟をならべつゝ威勢をふるふかた〴〵に、少もおとるけしきなし、とはいひながらおもてむき晴なる事のある時は、談合すべき相手なく、をりにふれてはきのどくの、山々高き君と、われいかなる事をちぎりけん、夜食のかたまりいつとなく御股藏より出給ふ、とりあげみれば世の中に、またたぐひなくかゞやける、玉のやうなる男子なり、未七夜も立ざるに血忌をいとふこゝろもなく、みかどいそぎ産やに入らせ給ひ御ふところにいだきとり、餘念もなくうれしがり、目口のしほらしさは母更衣にそのまゝ、大きく打開て鼻筋の通りたるは、よくも〳〵朕に似たりとわらはせ給ひぬ、すでに七夜の御祝儀とて御一門の宮がたをはじめ、攝家大臣、大中納言、參議少將四位五位にいたるまで、殿上にめしあつめ二三の膳の御料理、君がちとせを鶴の汁、常盤の松茸妻にして、あら目出鯛の御膾、二見の浦の貝燒に、戀を鴫のとりざかな、花橘の薫りある上諸白は呑しだい、造酒正たちいでゝ、かゝるめでたきをりなれば、いづれも御免さふらふぞ、けふばかりは器量を出し、たらふく醉てやすみたまへと、勅のおもむきうけ給はり、下地は好なり御意はよし、面々得手に帆をあげて、このうら舟の一ふしに、老のなみだの泣上戸、月もろともに寢上戸、遠くなるをの起上戸、引かけ引かけ呑ほどに、あゝめんどうじやと冠をぬぎ、烏帽子はづして大わらは、笏をたゝいておもはずも、上るり說經物まね小歌、をの〳〵持料の秘曲をつくし、まづはつ春は梅の酒とよ三千年に、なるてふ桃の酒くめば、そのよしあしをあやめの酒、夏はすゞしき鴻の池、淸水江川のあはもりのんで、燒酒過なば伊丹とな ら酒、桑酒くわへて美淋酒下戸のためにきく酒、そのまゝ色にもみぢ酒、さめてはかほの白酒、人の心は濁り酒、かの樂天が林澗に、あたゝめ酒をのみながら、冬はふる〳〵みぞれ酒、あられ木のはのさかづきに、下戸も上戸もおしなべて、天窓へ上る新酒杉の林の立ならび、內裏に商なけれども、紫宸殿の廣庭に、八百屋見世出す公家もあり、すでに御祝儀相すみ、わが君の御名を光源氏と名づけ給ひ、父みかどより七夜の御接(うぶやしない)あり て(うぶやへかず〳〵のをくり物ある事也)先御子の御前へそなへ物には榎の木の小臺盤銀の笥(宮の事也)馬頭盤(はしをすゆる物)うち

き小袖なり絹綿布、碁手錢五十貫あるひは三十貫仙家をまねび碁をうつ也ならびにいぬはりこ犬のかたちをしたる箱なり童子にもちゆる道具なりうぶぎぬ先此犬にきせはじめてその〻ち子に着する箱の中へは守札又はうぶやにて用る白粉疊紙まゆはきなどを入るなり此犬はりこはならの法華寺といふあまでらの内より天下へ出すなり俗に子どもを愛して犬子やゝといひ又は子どもの夜る道をゆくにひたいに犬の字をかくもかゝる縁によりてする事にやなどおくり給ふ、その外付々の女中に、小袖一かさね、襁褓かさねづゝ下され、乳母へはうぶきぬ一かさね、襁褓をそへてをくり給ふ、此儀式藏人所より頭辨宣旨を承りてあておこなひ侍る、一の宮寛明親王も弘徽殿の御はら此御子源氏の事也むまれ給ふてのちは、陰なきやうにありけるにぞ、わるうしたらば御位を、源氏の君にやゆづり給ふべきかと、右大臣をはじめ弘徽殿の女御はうたがひ給へり、みかどにも御寵愛のあまり、下心には源氏を世つぎにたてばやと叡慮をめぐらされけれども、こうきでんの物妬をぞなをわづらはしく、こゝろくるしうおもひ聞へ給ふ、かくてきりつぼの更衣若君たんじやうのゝちは、ひたすらこゝろづよく、すへのたのみをおもひながら、いとゞ外ざまのりんきつよく、中々なるものおもひをぞし給ふ、しかるに更衣のすみたまふ桐つぼの御つぼねは、夜の御殿より北

の方にあたりて、あまたならびつぼねの奥なり、あるひはかのつぼねの名を淑景舍(しけいしや)ともいへり、庭に桐の木を植られし故に桐つぼ(きりつぼ)と名づく、按察大納言のむすめに此所をつぼねに給りしゆへすなはち所の名をよんできりつぼの更衣と云されば にや桐つぼの更衣、朝夕の行かよひにほうばいの上廊たち、にくみそねみのあまり、かのつぼねへゆきかよふ、廊下つゞきの切れたる所に、內階とて板をわたしてかよひける、その板を引はづして更衣の通り道をふさぎ、あるひはこゝかしこのかよひ道に、魚の腸剩水の泥などをまきちらして、更衣をはじめ御供のかぶろまで、上衣下着の裾を穢させ、尾籠なる事どもあり、またある時はわかき女中をの〳〵いひ合て、わき道のならぬ所の戸を跡さきよりさしこめ、通さゞるやうにして桐つぼをめいわくがらせければ、よろづにつけてかずしれず、くるしきことのみ多けれど、みぢんもその事色にも出さず、心の内につゝみしを、みかどあはれとおぼしめし、後涼殿と申て、御座の間ちかきつぼねに、今まですみし更衣を追出し、そのつぼねを桐つぼに下されければ、はじめより此所にすみなれし更衣、もつての外に腹をたち、無理な事ぞとおもへども、勅命なれ

ばちからなく、うらみながらも月日をおくる、さても光源氏三歳にならせたまふ時、御袴着あるべしとて儀式いといみじく、御納戸の御服御藏の金銀山のごとくにつみかさね、上は大臣大將より下は六位にいたるまで、それ〴〵の引出物御祝儀のよそほひ、その結構は中々に一の宮の袴着も、此君ほどにはあらざりき、それにつけても世のそしり、人のうらみも多かりけり、その年の夏のころ、桐つぼ更衣うか〳〵と、はかなき心ちにわづらひて、日々におもやせ給ひければ、老母のきりつぼのはゝなり方より奏聞して、里へ引こり養生仕たきとのねがひもだしがたく、さすが名殘のおしければすてゝもやられず、とめれば病おもくなる、せんかたなみだにくれながら、更衣のつぼねに入らせ給ひ、あるかなきかに消入りて、何とぞして桐つぼのやまひをすくひ得させたやと、千々に叡慮をなやまして、さま〴〵おぼしめしまどひ、きりつぼの手をにぎり、かならずかならず物ごとを、苦勞にせずしてゆる〳〵と、こゝろながく養生せよと、なく〳〵ちぎりの給ひければ、目の上などもおもくみへ、いとたゆげになよ〳〵と、うつゝなきけしきにて、

更衣
かぎりとてわかるゝみちのかなしきに（きみにはなれたてまつる事の心ぼそければ）
いかまほしきはいのちなりけり（生のびたきとねがひたるなり）

ときこへけるに、みかどはあまりに御心のやるせなく、おぼしまよはせ給ひければ、御返歌もあらず、さてしもあるべき事ならねば御いとまをたまはり、御ゆるしなればとて輦に乘て（牛にかけずに手にてもつ輿を手ぐるまといふ）里へ下り給ふ、其夜より內裏には、六十人の貴僧をめして、大般若經をよましめ給ひけるに、僧ども黑けぶりをたてゝしるしあらはさんと祈り、その上稻荷祇園加茂下上、吉田松尾へ奉幣使をもつて、桐つぼ病氣ほんぶくのねがひをたてらる、さて更衣の里へは、御みまひの使ゆきかふ事櫛の齒をひくがごとし、やうすをきこしめさるゝに、今朝ほどは割の粥二匁五分、四つ時に重湯盃に一つ、晝の內氣をうしなう事六たび、御典藥いづれも抄子をすてゝ迯られ候、今は獨人湯をのみ便りにいたし、脉はすつきり御留主になり、はやすふ〳〵とかた息ばかり、たゞ念佛をすゝめ申、あなた參りにをち付たりと奏聞すれば、御むねのみつとふたがりて、つゆまどろまれずあかしかねさせたまふ所へ●夜なかうち過るほどに又御使あはたゞしく

かへり來りて、はや事切れさふらふよし泣さはげば、みかど聞しめす御心まどひ、何事もおぼしめしわかず、引こもりおはします、源氏の君はまだいとけなき事なれば、物のあやめもわきまへず、人々の泣まどひ、なみだひまなくながるゝを、おかしさうににこにこわらひ給ふを、みるにつけてもいとゞしく、ましてあはれにいふかひなし、さて桐つぼの死骸を愛宕といふところにおくりければ、老母はゆめのこゝちして、をなじけぶりにも消のぼりなんとなきこがれ給ふて、むなしき人の面かげをみるなを世におはするものとおもふがいとかひなければ、灰になりなんをみて、今は此世になき人ぞとひたすら思ひきり、なげきをとゞむべしと、よそめにはかひぐしくみへ給へど、心の内はぐつたりと、露にしほれし老の身の、實斷りと聞へけり、かゝる所へみかどより、亡者へ三位のくらゐをおくり給よし、勅使中納言來りて宣命をひらき 宣命とは勅のおもむきを書しるしたる文也それを死人にむかひいきたる人のごとくにみかどのおゝせなさみきかせよみ聞する事なり よみ聞する其文にいはく、

みかどの御ことばまへに更衣のよみ給ひし歌の心をとりてかぎりとてわかるゝ道の一ふしに朕がこゝろのみだれがみ、ながき闇路やうば玉の、よるのにしきのおきふしに、ゆめさへつらき世の中を、これやかぎりとしらまゆみ、引かへしたるむかしの袖、君と寝るには枕もいらぬ、たがひちがひのその手枕に、かたりつくすとおもふも今の、わかれになればのこることのは、そもやくそもじの命あるうちに、女御とさへいはせずして、むなしく過し本意なさよ、せめてあなたの土産にしやと、ふそくながら三のくらゐをおくりたりく、此世はかりの宿なれば、われもほどなくみまかりて、をなじはちすのうてなの上に、半座をわけてしつぽりと、弘誓の舟に付びたし、こゝろ一ぱい濡てみん、かまひてくむつ言を、朕も無にせじそもじもまた、わすれをきたまふなと、をつるはなみだしぼるは袖、なをくどふは一七日の御げんとひかへたりくとし、

勅のおもむきよみきかせ給ふにぞ、かなしさまさりて覺へ侍る、これにつけてもうき世の中、戸のたてられぬ人の口、口々にいふやうは、あの桐つぼには何やらにかくれし玉のありけるか、または吸附蛸のいぼ足のはたらき上手なるか、上から蔭法師うつる時、は

たをる虫の音を出すか、いかさまさり得のあればこそ、生てのちぎりふるき事、阿波の鳴戸に鞺の洄るまでとかため、死てもまた焼場へ勅使をたてられ、迷途へのぬれ文、さりとはしたるき御ふるまひ、弓削の道鏡にみせたらば、安房のゆるしをうけさせ給はん、物恠な事じやとにくみ申す、中にも粋なる米たちはきりつぼのさまかたち、廣い都にたぐひなく、心ばせのしほらしく、衣通姫のなさけをくみ、伊勢の大輔が色見へて、うつらふものは世の中の、人の心の花のかほ、小町が歌のすがたにて、つよからずよは〳〵と、柳の眉のたをやかに、梅のにほひをふくみたまへば、露にくむべき人ならず、たゞわが君のさまあしき、御もてなしゆへにこそ、すげなふそねみをうけ給ふ、これはその身の不仕合、孔子のやうな人がらさへ、列子莊子は藁をたく、衆のにくむ所をも、是を察してある時は、ありのすさみにくかりき、なくてぞ人は戀しかりけりと、よめるはかゝる折にやと思ひ合され、物おもひしり給ふ局たちは、桐つぼの身の上を愛しがり給ひぬ、はかなく日數たちて、七々日の御とぶらひなどこまやかにとりをこなひ、ほどふるまゝにせんかたなう、夜の御殿も露けくて、をりから秋の物かなしく、御衣の袖のみひぢまさり、ながき夜すがらほのぼのと、あかしかねさせ給ふを、かたはらにて見たてまつる人さへ、もらひなきしてあはれなるに、弘徽殿の御方にはきりつぼのみまかりしを、大によろこび人しれず、內證にて御神酒を上げていはふもうるさし、みかどは一の宮をみ給ふにつけて、源氏の御戀しさのみおぼし出つゝ、せめてはかたみの玉の男子、いかになりゆくこの身ぞと、したしき女房御乳母などを、里へつかはし、もてあそびの芥子人形を伽羅香合に入れさせ給ひ、木の葉のあられ落雁・東山の輕燒なんどとりしたゝめ、源氏の方へをくらせ給ふ、かやうに御氣をくばらるゝ事たび〳〵の事なりし、ある時野分だちて秋のころふく風を野分といへりかさね着するほど肌さむく、紅葉を焼て酒の燗、うさをわするゝわが友と、御そばちかき老女を相手に二つ三つ汲かわし、ありしむかしの雲の上、みし玉だれの內股へ、手を入れながらぐつ〳〵と分酒のみたるその人の、今は此世になきのみか、そこらで請よとひとり言、酒を手向のつく〴〵と入相の鐘こゝろぼそく、つねよりもおぼしいづる

事おほくて、靫負の命婦といふ女官を御使として、源
氏のよはひ延命酒一樽、千とせも老木の松茸十本、め
ぐみのふかき水菜をそへ、忌中の御見まいに里へつ
かはす、夕附夜のおもしろきころ出したてさせたま
ひて、あゝまゝならば御みづからおなじくともなひ
てたまひたき、御けしきあらはに見へて、命婦がゆく
かたをしのび〳〵にみをくりたまひぬ、すてし世な
らばかやうにものさびしきをり〳〵は、とばり帳を
［すだれのやうなる物にて女の居るあたりにかけておくもの也］たれこめて［さしおろして也］脇息によ
りかゝり、本よりきりつぼ音楽は上手にて、心琴なる
爪音は、清原の俊蔭がせた風の秘曲に、御殿のかはら
をくだき、水無月に雪をふらしけるも、これほどには
とけをさるゝほど妙にして、掻手のしらべそよ〳〵
と、峯の松風かよふらし、糸すぢわたる三つ指は、そ
らに鳴音の鶯鳥が梢をあゆむごとくにて、そのおも
しろさ感にたへ、おぼろのふり袖引切て、六尺屛風も
たちまちおどり越べき心ちして、今やうらうゑいと
り〳〵に、うたふもまふも法の聲、今は此世になき陰
の夢のうつり香のこり寝の、やみのうつゝに猶おと
りけりと、かれこれおぼし出さるゝにも、先だつ物は
御なみだぞや、さてしも命婦は老母の里に引入れて、
車の下すだれをあげて、内のていをうかゞひみるに、
やもめ住なれど桐つぼの御はんじやうによつて、家
居美しく作たて、めやすきほどにてくらしたまひつ
るが、此ごろのうれひにふししづみ給へるほどに、庭
の掃除もおろそかに、草は顔子のちまたより高く、い
とゞ野分にすさみたるこゝちして、月かげばかりは
八重葎にも［つたかつらなどのいくへにもおひしげりたるなり］さはらずさし入たる、
みなみをもてに車をおろして、

風流源氏物語巻二終

風流源氏物語巻三

南おもての簾半まきあげたるより尋ね入りければ、母君命婦に目を見合そのまゝ物もの給はず、やゝ有てなみだを押へ、おもひきや君がこゝろにそれぞとて、よもぎがもとをきつゝみんとは、今までのこりとどまり侍に老の身のうとましきを、かゝる御使のよもぎふの露わけ入り給ふにつけてもいと耻かしく、かりそめの旅の名殘さへ、家をたちいづればかなしきならひなるを、いはんやたゞひとり月花とたのみおきし人を、ゆめにもみぬくらきやみ路におくりむかひ、ながき世のわかれとなり、かなしびのなみだまなこにさへぎり、おもひのけぶりむねにみつ、きのふまでは人の上と、聞こしものを死手の山けふはわが子の道にまよひて、千草の花にふりまがふほど、なみだは袖にあらそひ、むなしき床をうちはらひ、みるにおもひのますかゞみ、なれにしかげの寢てたゆめ、さめてはうつゝたれとても、さまりはつべき身ならねど、先だつ人ぞかなしきと、たへがたくなき給へば、命婦はともにたもとをしぼり、あるはなくなきはかずそふ世の中に、いとゞあはれのしのばれて、過にしころにや內侍の典侍（女官の名也）御とぶらひにまいりし時、御なげきのやるかたなさをみうけまいらせ、かへりては心さもゝつぶるゝやうに奏し給ひしを、げに道理やとをしはかりさふらひしに、聞とみるとはいやましに、忍ぶる事のよはりはて、聲をふるふてなくなみだに、仕立をろしの緋のはかま、きてみるからに色かはり、露ぞこぼるゝおみなへし、そめてくやしき黄うこんの、たもとをかほにおほひつゝ、しばしはいらへもなかりしが、延紙あてゝ目を拭ひ、やゝためらひてみかどより、勅のおもむき申出す　會者定離とはいひながら、あらぬつらさもあふ事の、さなきは人のわすれがたく、いかなる宿世のゑにしにや、みとのまぐはひ（夫婦の和合の事なり）めづらしく、かたらふほどにふけゆく鐘、あけゆく鳥のこゑきけば、何物かはとむつ言も、まだつきなくにあかつきの、月もろともにかくれにし、そのなきかげにこゝちまどひ、しばしはゆめかとのみたどられしを、よう〱おもひしづまるにつけて、さむべきかたなくたへがたきは、いかにはらすべきことにかとも、身ひとりの思案におちず、そばち

かくめしつかふ女子どもは、皆桐つぼにうらみあれば、よろづ遠慮がちにその事かの事とひあはすべき人さへなし、あはれ老母に人しらずしのびて内裏へ來り給へ、源氏の上も心もとなく、かく草ふかき所に養給ふもきのどくなれば、とくつれまして參内したまへと、御口上もはかぐ〵しからず、一口二口の給ひては、そのまゝ御涙にむせかへらせ給ふを、さりとは御心よはき御事ぞと、人目のつもりも笑止さに、皆まで御意をかけ給はりもはてずに、これまでまいり候とて、みかどよりの御文をまいらすれば、老母三度おしいたゞき、つねさへいとゞ老の身の、目も直にみへわかぬに、ましてか樣のうれひにあひ、夜晝となきなげきにや、霞かゝりてはつきりと、人の面もおぼろおぼろとして、是非をわかぬけしきなれども、いともかしこき御位さまのひかりをたよりにとて、ひらきみ給ふ、

御文のことば

こひしき人にわかれてのち、ほどへばすこしうちまぎるゝこともやと、まち過す月日にそへて、なをしのびがたくわすれやらぬは、さりともきもじに思ひたゆ〵、いとけなきもののはなにのあやめもしらで、きげんよくたはぶれあそびけるにや、をりから秋風身にしみて、夜寒に雁の鳴渡るにつけ、もしや風にても引けるか、それかあらぬかどふかこふかとそばにめなれぬおぼつかなさ、朕がこゝろをおしはかり給はるべし、今はさりともなげきてもかへらぬむかし、花をみれば風にちり、月をながむれば雲にかくさるゝ老少不定のさかひなれば、親にさきだち子にをくれ、妻にもわかれ君にもはなるゝ人多し、佛さへ此道をまぬかれ給はず、ましていはんや人の命のあだなる事、朝の露のごとく宵のいなづまのごとし、おくれさきだつほどこそあれ、つゐにはたれかのこるべき、いまはなを更衣のかたみになぞらへて、おさなきものをそだて物し給へと書せたまひて、

禁中をさしていふなみだをそへていへり
宮ぎの〵露ふきむすぶ風の音に
子をそへていふ源氏の事也
こはぎがもとをおもひこそやれ

かやうにかゝせ給へども、そのあはれさのかずそひて、かしくのとめまでみもはてず、老のなみだのよりくるや、この下かげのおちばかく、なるまでいのちな

がらへて、松のおもはん事さへはづかしうおもひ侍る、かく御ねんもじの御つたへなれど、百敷に（きん中の事なり）ゆきかよひさふらはん事、いとはゞかりをゝく候へば、かたじけなき勅命をたび〳〵うけたまはり候へども、あゝくわんたいながらみづからは、得こそ仰にしたがふまじく候、いとけなき宮は（源氏の事也）何の戀しさにか、朝夕大内々々とねだり言ばか仰つて、お少泣（むつかり）ましますも、きん中のにぎ〳〵しき所であそびなれ給ふゆへにや、ことはりにかなしふみたてまつり侍るよし、御かへり候て内證にて申上させ給へ、かくいまいましき身に侍れば、久しふ里におはしますも、いかうきのごくにさふらふと、遠慮がちなることのはを聞て、其時命ぶさらばちよとわか宮の御わらひがほをみまいらせ、かへりて父みかどへ御うはさ申上んとおもへど、源氏おほとのごもりければ（寢入給ふ事をいふ也）御目さむるをまちうけては夜更侍るべし、みかどはさだめてわらはが歸るを待わびさせたまふらんとて、いそぎかへらんとするを老母しばしとゞめ、夜さむに候へば酒一つ盛たてまつらんとて、君よりをくりたまはりし、松茸を吸物にして色つくほどすゝめ、

まことに御身ははじめより人おゝき中にも、桐つぼとはわけて念比にかたりあひたまひ、むすめはんじやうのをりからも、宿下のつゐでには立よらせたまひしものを、今は日比に引かへて、いまはしき御せうそこにて（せうそこは文をもいふこゝはゆきかよふつかひの事也）御げんに入りまいらする事、かへす〴〵つれなきいのちながらへ侍るゆへにやとかたりて、つきせずなく〳〵夜いたうふけぬれば、こよひの内に返事申上んと、いとまごひしてたち出る、月は入がたの空きよくすみわたるに、風いとすゞしく吹て、萑にすだくむしの音はあはれをそふるよすがとなり、かりそめにたづね來てみるさへこころぼそき淺茅が露蓬が宿のうきすまひ、いかにしのびてすみはてぬらん、おもひつゞけて

命婦　今の松虫也いつのころにや松虫と鈴虫ととりちがへたるとぞ

すゞ虫のこゑのかぎりをつくしても（すゞといふゑんをとりて）
ながき夜あかずふるなみだかな

老母門までみをくりて

老母返し

いとゞしく虫の音しげきあさぢふに（草のはへしげりたるをいふ也）
露をきそふる雲の上人（涙をかけていふ　命ぶのことをさしていふ也）

（きん中をくもの上といひみかどにつかふまつる人を雲の上人と云）

さてきりつぼの御かたみにとて、著なれ給ひしうへのきぬ一くだりならびに御櫛上の調度女の手道具なり今のくしなどのたぐひなりをそへて命婦におくり給ふ、此調度をばみかどへたてまつりたきとの下心にや、直にさしつけてはおそれあればなるべし、とやかくする内にはや九つの鐘がなる、いつまで居ても名殘はつきせじといとま申て歸る、かくてゐんぎのみかどは夜の御殿に引こもり、桐つぼのすがたをかけ繪にうつし、花をたて香をもり、此香のけぶりとも、いつかまた消べきとうき世の中をうちうらみ、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者、唯戒布施不放逸、今世後世爲伴侶と大集經の文なり此心はさいしをはじめもろ〳〵のたからみかどの御くらゐにいたるまで命のおはりにのぞむときは身にしたがはずたゞ戒と布施とのみ今世後世の友なりとさきたまへる也となへさせ給ひて鐘うちならし夜もすがら、なく〳〵御ゐかうなされける、これやむかしの面かげを、甘泉宮にうつし書の、九花帳のあやにしきにてかざりたる几帳をいふなり内にして、反魂香を薰給ふ、其かなしびを詩に作り、是邪非邪姍々其來遲かりしと、調子にあはせうたひたる、武帝のもろこしのみかどなりおもひにまさりてみゆ、時しも秋の草づくし、御前の壺前裁のきん中の御庭也此ことばによつて桐つぼのまきをつぼせんざいとも申すいとおもしろきさかりなるに、御目をうつさせ給ひ、しのびやかに眞體なる、年長の女房四五人御伽にめしよせられ、こしかたゆくすゑの事、よろづうつりかはるありさまなど、しつぽりと御ものがたりせさせ給ふ、此ごろ明くれ、長恨歌の御繪を御らんずるにつけて、楊貴妃のわかれなどおぼしめし出さる、此長恨歌の御繪は、帝の御父亭子院の宇多天皇御いんきよの名也みづからかゝせ給ひ、伊勢の大輔、大和守繼蔭がむすめなり紀貫之に紀望行の子也歌をよませてそへたまへる、そのことのはのあはれさに、此書をのみもてあそばせ給ふ、時に御使の命婦かへり參りて、里のありさまこま〴〵申あげ、老母の御返事たてまつる、御らんずれば

いともかしこき御つたへは、おきどころなきほど身にあまり、かたじけなふおぼへたてまつり候、かゝる仰につけても、御返事かきくらす、みだれごゝろ、ものぐるをしくて

老母歌
あらき風ふせぎしかげのかれしより桐つぼにたとへて云子にあたる風をふせぎしと也きりつぼうせにし事をいふ也
こはぎがうへぞしづこゝろなき源氏をさしていふ しづかなる心なくそだてけりと也

もとより老のこしをれうた、そこはかとなき筆の

すさみ、わけのほどは御らんじゆるさせ給へかしこ

御返事をまきかへし御らんずるにつけて、よろづ過にしかたをおぼしつゞけられ、さればきりつぼ存生の時、一夜とまりの藪入におくり、少の間もはなるゝさへうとましくおもひしに、今またながきわかれして能も月日はへにけりと、御身ながらもふしぎにおぼしめさる、さてかの命婦へのかたみの内、御櫛上の調度をとり出し、御目にかくれば、なき人の手なれし物ぞと今更あはれにやるかたなきは、かのもろこしの玄宗帝御殿の燈挑たてゝ、寢酒呑でも眠られず、長き夜すがら泣あかし、あかつきの明星の、西へ陰さし東より、しらみわたりてほの〴〵と、軒の瓦に霜落て、翡翠の衾寒に、たれとゝもにかく悠々たる魂魄かつて夢にもみへず、こゝに通幽といへる仙術のもの、天地陰陽の氣に馭て、自由自在に空をかけるよし聞しめされ、玄宗めし出して貴妃の行衞をたづねもとむ、通幽こゝろやすくうけ負、霞をわけてこくうをたづね、下は龍宮城に入て探りもとむといへども、魂の有所をしらず、こゝに海上に一つの島あり蓬が島と名付、此所へいたりてみればたちまち一つの宮殿あり、おもてに玉妃太眞院といふ額をかけたり、うたがひもなくこゝこそ貴妃のまします所ならんと、門を扣て案内すれば、内より洞の扉をひらき、禿たち出ごなたで御ざんす、是は唐のみかどの御使なり、玄宗ようきひの事を戀したはせ給ふにより、御ゆくゑたづね申せとの勅をうけ、通幽といふ方士（仙術をおこなふものを方士と云なり）これまでまいりてさふらふ、此よし申させ給へといふ、かぶろ咲るかほばせにて、はる〴〵の所をよふこそおたづね候、先これへ入らせ給ひ御休息ましませ、そのよし申あげませうと内へ入りぬ、やゝ有て衣被香のにほひ紛々として、玉のすだれをまきあげ、ようきひの夢魂あらはれ出、むかしに替らぬ雪のはだへ、うちかたぶけるなみだの露、梨花一枝雨をふくめるごとくにて、方士にむかひ玄宗のありさまをたづね、世にありし時の事などかたりいだし、其方古郷にかへりつゝ、われにあふたるしるしにはこれをみかどへたてまつるべしと、龜甲のさし櫛金の釵（今のかうがいなり）を取てあたへ給へば、方士かしこまりて、此二色は女中がたのつねに用るものなれば、もちかへりてもわが

君へ憧成しるしと申がたし、たゞ人しれず何にてもきみとちかひしことのはを、うけたまはらんと申時、げにもつともと夕ぐれの、天寶十年輦に乗て、帝と丶もに驪山宮にいたり、秋七月七日牽牛織女御げんの夜、すゞしの蚊帳の中にして、ひそかに指の血をしぼり、とりかわしたる誓紙あり、これ〳〵これをとり戻り、君のうたがひはらすべしと、又類なきしるしを給はり、いとま申てたち歸る、そのもろこしの運盡は、方士といへる粋をたのみ、魂のありかをたづねしゆへ、せめてはなぐさむかたあれど、朕は何ともならざかや、此手道具を見るばかり、直のことばをきかざれば、玄宗にはおとれりと、くひ〳〵くやませ給ひて

みかど
たづねゆくまぼろしもがなつてにても　もろこしの方士の事をいふ
たまのありかをそことしるべく　魂のあり所をいふ也　そこぞと確かにしらるべきと也

かの長恨歌の御繪を御らんずるにつけて、ようきひのかたちは上手の繪師といへども、筆かぎりありければいとにほひすぐれし、大掖の芙蓉は面のごとく　もろこし大掖といふ池の芙蓉のうす紫に咲たるはようきひのかほ色のごとしと也　未央の柳は眉に似たり　未央は玄宗の御殿の名なり青柳のみどりにしてうちなびかれきたるはようきひのまゆのごとしとたとへていへり

これおもひくらぶるに、桐つぼのうつくしさは、花鳥の色にも音にもたとふべきかたぞなき、朝夕のむつごとに、天にあらば比翼の鳥と作り、地に有ては連理の枝とならんとちぎりおかせ給ひしに、かぎりある命のほどぞいまはうらめしかりき、風の音むしのねにつけても物かなしふおぼさるゝに、弘徽殿の女御は此ごろうちたへて、みかどの御そばへもまいりたまはず、上のうれひもはゞからで、月すみわたるおもしろさに、夜ふくるまで歌をうたひ、琴三味線の音高く、おどり拍子のかしましさ、みかどをはじめ御そばに、お伽申せし女房たち、眉をひそめてさりとては、遠慮なき御仕方、かたはらいたしと聞ゐたるに、月もほどなく入りぬ

みかど
雲の上もなみだにくるゝ秋の月　大内をそへていへり
いかですむらんあさぢふのやど　まへにありきりつぼの里の事を思ひやらるゝと也

かの老母の宿をおぼしめしやられ、ともし火をかきたてつゝおはしますありさま、玄宗にいきうつしなれば、式部が書し此まきをば、日本長恨歌と名付ても惡ふはあるまい、すでにうしみつ過る比なれば　夜る八つ過也

人めをおぼしめし、夜のおとゞに入らせ給ひて、純子の夜着を引かづき給ひながら、猶まどろませ給ふ事かたく、霧をはらふて起給なれども、あさまつりごとはおこたらせ給ひぬ、御物おもひのつもりにや、御むねもふたがり、朝餉をも聞しめさず、（朝がれいとはみかどのあさ御膳の事）御膳をすへたてまつる御給仕の女中など御ふしぎをみまいらせ、こゝろぐるしふおもひなげく、さればきりつぼの更衣とは、先の世にいかなる事をかちぎりをき給ひけん、うせ給ひてのちまでそのことのみわすれたまはず、世の中のそしりうらみをもはゞからせ給ふ事なく、桐つぼの御身にかゝりたる事をば、理を非にまげて聞しめし入れ横に車の御扱、さりとはきのどく千萬と、心ある殿上人など打より、玄宗のためしまで引出しつゝなげきあへり、月日へて母の御忌も明ければ、源氏の君大内へ入らせ給ふ、みかど久しぶりにて御らんずるにつけて、きりつぼのおもかげによふ似させ給ひて、御年のほどよりはおとなしやかに、愛らしくみへさせ給ふ、すでに年くれあらたまの、春の節會の御つゐでに、弘徽殿の御はら一の宮寛明親王春宮にたゝせ給ふ、（みかどの御世つぎにさだまり給ふ御子を春宮といふ也）

かね〴〵みかどの御心には、源氏の君を御世つぎにさだめまほしくおぼしめせども、攝家大臣などの承引せまじく、ことに源氏方にはたしかなる後見もなければ、とてもおぼしめすとをりにはなるべからずと粹し給ひ、その事色にもいださせ給はず、弘徽殿の女御は此時はじめて御心おちつき、よろこびの眉をひらき給ひぬ、こゝに源氏の御おば（祖母の事をいふ也桐つぼのためには母也）かりそめに風のこゝちとの給ひしが、日比物おもひのつもりにやありけん、典藥飢子をくだけどもそのしるしみへず、しだひによはる老の波、血死期につれて失給ぬれば、みかど又是をかなしび、御なげきのかずいとゞやるせなかりき、その時は源氏六才になり給ふ年なれば、物ごゝろつかせ給ひ、御おばの事おもひしりて、ひたもの戀したひたまふ、それより里へおはします事もなく、つねに内裏にのみさふらひ、帝の御傍にて養立給ひき、七つになり給へば手習物よみなどし給ふに、よの兒にすぐれて、さとうかしこくおはすれば、一を聞て十をしる顔子の生れがはりかと、みかどをはじめ公家大臣、をの〳〵舌をふるひけり、をり〳〵は弘徽殿の御かたへもまいり給ふに、日ご

ろは御母きりつぼを仇敵のごとくにくみ給ひしが、今は此世になき人なれば胸の炎もしづまり、ことに源氏の愛らしき生れつきをみて、いとしがりたまひ、やがて御簾の中に入れ愛し給へり、こうきでんの御むすめ子たち、二人おはしましけるが、何れも源氏に相生の御年ごろなれば、常にあそび伽になりてまゝ事に限らず、和歌糸竹の道に長じ、廉承武が（もろこしにて琵琶の上手）秘曲をつたへ、殘樂の（琴の大事）しらべには峯の松風かよふらし、いづれ劣れる所作もなし、その比高麗よりかしこき相人きたれるよし（相人とはうらなひをするものなり）みかど聞しめして、幸ひ源氏の御身の上をうらなはせたまひたき御ねがひなれど、もろこしの人を直に内裏へめされん事は御父宇多帝より御いましめなれば、今さらその掟をそむかせ給ふ事もならず、さるによつて源氏をひそかにしのばせて高麗人の旅宿へつかはし、御うしろみにそへ給ふ右大辨の子のやうにおもはせて出たゝせ給へり、相人みるよりおどろきかしこまりて、ひた物首をかたぶけ、離坤兌乾を（八卦のかず也）かぞへたて、三元男をくりはじめ、初八を越るにおよばずして、當年七歲戌の年、大海の水性なれば、まん〳〵たる〇水たつぷりと、かの事にかゝはりては、〇の物するごとくはなれがたき生れつきなり、さて仕合は天子の位にものぼるべき人なり、さもなければ攝政大臣となりて天下の政道をとりおこなふ相たがふべからずといへり、御うしろみに參りたる右大辨も發明なる人にて、相人と詩などつくりかはし、源氏も即席におもしろき句を作り給へば、相人大に膽をつぶし、後生畏るべし〳〵とかぎりなく感じたてまつりて、めづらしき唐本あまた唐織の帙に入れて若君にまいらする、源氏の方よりは銀子百枚樽肴をそへておくり給はり、そのゝち相人もろこしへ歸る、みかどもうらかたの樣子とくと考へさせ給ひて、するたのもしくおぼしめしつゝ、いよ〳〵おこたらずよるひる學文をおしへさせたまふ、年月うつりゆくにつけて、きりつぼの御事をおぼしわするゝ時なし、御近習につとめ給ふ上達部（公家衆也）など心をつけまいらせ、せめて御物おもひのなぐさむかたもやと、十五より二十才までの風流なる米を取よせ、御直宿にたてまつりけれど、みかど御心にかなふ事なく、御ことばをもかけられねば、御そばの公家たちきのごくがり、あなたこな

たを聞つくろひ、きりつぼのおもかげに似たる女もあれかしと、みたてけるこそ戀草のつきせぬ色こそおかしけれ、こゝにみかどの御めのと、内侍のすけのきもいりにて、宮方の御娘藤壺と申せしは、形からふりからそのまゝに、源氏の母にいきうつしなれば、みかど是におもひつき御てうあい淺からず、此ふじつぼと申は宮がたのおとし種、ことさら御兄兵部卿親王をはじめ、其外歴々の御一門立ならんで御うしろみをし給へば、弘徽殿の女御などもそしり給ふ事ならず、此時に源氏十二才まだいとけなくましませば、帝と藤つぼと、千話むつごとの座敷へも御ゑんりよなしに出たまふ、御母きりつぼには、三才の時はなれ給へば、おもかげさへおぼへたまはぬを、此藤つぼの御すがたとりもなをさず母君に、そのまゝ似させたまへると、めのとの內侍が物がたりを小耳に聞てなつかしく、つねに御そばをはなれ給はず、又藤つぼもわか君の、かはゆらしきにほだされて、實子のごとくもてなし、あらい風にもあてまい樣に遣か〱と甘い物、すゝめまいらせ給ふにぞ、はかなきおさなごゝろにも、花紅葉月雪の、朝な夕なにまことをつくし、ふぢつぼの御心にしたがひ給へば、みかどにも、ことに御よろこびのけしき、たゞならぬ事とぞ、

風流源氏物語巻三終

風流源氏物語卷四

源氏の君十二歳の冬御元服あるべしとて（ひたいをそり髪を切りはじめてかんぶりをめさせ給ふ事を元服といふなりいせものがたりにうゐかうぶりといへるに同じと俗の元服とは相違也）その儀式美々しく、よろづ結構にいとなみ給ふ、一とせ一の宮の御元服の時のざしきも是ほどにはなかりき、内藏寮（金銀ごふくなどをおさむる所也）穀倉院（米をおさむる所）よりいろ〳〵のたから物をとり出し（人々へ引出ものに下さるべきため也）さて清涼殿の東むきに椅子立て（人の居る臺なり）源氏の御座とさだめ、かたはらに引入の大臣の御座（是はげんぷく親也かんぶりを取てきせまいらする人なり俗にゑぼしおやといふにおなじ）をかまへ、ひる七つ時に源氏の君出て椅子になをり給ふ、玉の膚のつや〳〵と蘭蕙の氣香しく、蓮の眸あざやかに、丹菓の唇いつくしく、歯は水精のごとくにて、周のみかどの腰を抜たる玆童がむかしも物かはに、生た如來と名をつけし、もろこしの薛調、宋の希逸が若衆自慢も此君にはおよばじと、秋の月を塗砥にかけみがき入れたるかほつき、ひかりかゝれるわらは髪、柳の糸の娜（たをやか）に紅のはかまふみしたき、樞（かいとり）姿（すがた）のしほらしく、女かとみればわか衆、なり平の初冠をおもひ合され、かくやんごとなき御かたちに疵を付るはおしげなり、扨御髪をば大内藏卿削たてまつる（長きかみをはさみみぢかくするなり）みかどは御簾の内にて之を御らんじ、母きりつぼながらへて此ありさまを見るならば、さぞや嬉しく思ふらんにまゝならぬ世のはかなさと、そゞろに御なみだもよふしけれど、人めをはぢおぼしめして、心づよくねんじかへさせ給ふ、時に源氏冠を着そめ、やがてみかどの御前にまいり給ふに、かぶりなをしの御よそひなをうつくしくみへたまへば、みかど御よろこびかぎりなし、しかるにその折から引入の大臣（左大臣なり）の御むすめ葵上と申は、今年十六才になり給ひ御器量なみ〳〵ならねば、春宮より（一の宮なり）たび〳〵御たづねありて御添臥になされたきよし、御たのみありけれども、葵の父左大臣承引せずしてうち過けるは、この源氏の君に奉らんと内々下心ありけるゆへなり、みかどにもその下心をおしはかり給ひ、さいはい源氏に御うしろみする物なければ、さらば此つゐでに葵上を源氏にいひ名付て、左大臣はゑぼしおやなれば、すゑ〴〵のうしろだてにもせばやと、たのもしくおぼしめし、さて元服の御祝ひに、のめやうたへやよろこべと、汲どもつきぬ菊水を、ふ

くめばかんろもかくやあらんと、心もはれやかにとびたつばかりあり明の夜るひるつゞいて大酒、さすかた手には天窓でたゝき、おさゆる手には肴をはさみ、献々の盃を千秋樂といはひおさめければ、みかどより内侍宣旨をうけ給はり、左大臣を御まへちかくめし出され廣蓋に載て、白無垢一かさね上着一つそへて、御さかづきを下されしついでに

みかど
いときなきはつもとゆひ（げんぶくの事を云）にながき世を（いく久しくと祝いたる心）
ちぎる心はむすびこめつや（つるやといふてには也）
（下心に葵上を源氏にめあはせよと也）

下心にあふひの上の事をふくみてよませ給へば、左大臣畏て

（源氏とあふひとゑんをむすび申と也）
むすびつるこゝろもふかきもとゆひに（かみをゆふもの也げんじのことをたとへていへり）
（もとゆひをばこくといふ故にそへて云りげんぶくの時のもとゆひはむらさきに染るゆへかく云り）
こき紫の色しあせずは
（色さへかはらずばといふ心也）

と御返歌を申てよろこびのあまり、清涼殿より紫宸殿へ通る長階（らうかなり）より下りて扇をひらき舞給ひぬ、みかども御感のあまり、左馬寮の御馬、藏人所の鷹一居（もと）左大臣に給はり、その外の衆中へもそれ〴〵に引出物下さる、その日御前へ出たる蒸籠の饅頭竹包の羊羹箱入の求肥、高麗煎餅もろこし餅、栃煎千鳥浪の花、折に入れたる赤飯など、山の如くにつみかさね、さしもに廣き千疊敷所せきまでとりちらしたるを、鍋取公家ども拜領して、をの〳〵宿へ土産にする、かくてその夜左大臣のやかたへ源氏の君入らせ給ふ、御祝言の作法よにめづらしくおもひ聞へたり、葵上は年をへて二八の春の花ざかり色ごのみの最中、源氏の君はおぼこにて、まだ里なれぬうぐひすの、音もあいらしうみへ給へば、似合しからぬ新枕、あね女郎ははづかしう、抱力なき床の上、戀のいろはそおかしけれ、さればあふひの御母は、みかどのためにはゆかりある宮方にておはしませば、世間の聞へもめでたくよろづにつけておも〳〵しきに、今又源氏と御縁をむすばせ給へばいとゞ御家はんじやうして、東宮の御父右大臣のいきほひも、此威勢にはけをされ給へり、あふひの上の御兄をば頭中將と申て、右大臣の御むすめ（こうきでんの御いもうと也）四の君と申を妻にさだめたまへども、此中將色ごのみにてましませば、四の君の不器

量ゆへ中々こゝろにそまず、夫婦の間もむつまじからでさりとてはうとましけれど、何のいひたてもなきに椀皿あらふごとく、三行半もさすがにて、世のおもはくをかんがへ、うらみながらも月日を送る、さても因果な縁じやとおもふ、されば戀路の手ならひは師匠いらずに上るとかや、たゞかりそめに筆をそめ、色の一字をひねるにぞ、一夜の中に發明してつゐ粹方となり給ふ、源氏は前に替りなく未物心は得しらじと、帝の御心に疑ひ給はず、つねに御そばへめされつゝ、おはなし伽にならざかや此手近くにたちよりて、ふりよし形よし木つきよき、松になりたや彼藤つぼにまかれて寢たきおもひのみ、夢の中にもそのおもかげの、あゝまゝならばこの君に命をとられてみたい物じやと、小心ながら生ものに、油斷のならぬ世の中の、およばぬ戀に身をやつし、あふひの上の御方は、はや秋風のそよ〳〵と、ほに出てまねく花薄、いはねど色にみへけるが、いつとなくみかごにも御遠慮がちになりて、今は早御簾の中にも入れ給はず、せんかたなみだのおり〳〵は、琴笛の音をしるべにて、藤つぼの爪音をほのかに聞て物おもひ、たゞ大内のゆかしさに、三十日を二十日ほどは殿上にとゞまり、あふひの上の御かたへはたへ〳〵に訪づれ給へば、舅の大臣きのどくがり、いかなる人の中言か、色ます花のうつり氣か、それかあらぬかどふかこうかと、源氏の心のはなれ駒、つなぎとむべきためにとて、新敷御殿を作り六條の院と云築山泉水おもしろく、千草萬木植ならべ、新に開く草芙蓉、濁りにしまぬこゝろながら、かゝる所にわがおもふ、雲の上なるかの人と、しつぽとあそんでみたい物じやと、明ても暮てもゆかりある、そのむらさきのふぢつぼを、戀し〳〵となくばかりなり是までは本書きりつぼの卷なり此すへよりすなはちはゝ木々さしるべしかすみたち木のめも春の明ぼのや、光源氏今ははや十六歳になり給ふ、しだいに智惠のますかゞみ、色事にのみこゝろをよせ、人目の關路しのぶ山、おもひ入るにもさはりある、戶のたてられぬ、惡口に性惡樣と名のたつを、きのごくたんと世をはゞかり、上面に實をたてながら、下に染出す色小袖、當世はやる吉岡に大紋付て淺黄うら、繻子の返しの二重帶、鬢付とろりとはけ長に、こきもとゆひの茶筅髮、しやんとしたるき目もとには、亡者の衣服をはぎとりし、迷途の姥も

腰をぬかし、哀でやぶらずと毛詩にほめたる上﨟も、此君に出合ては、涎をながさせ給はんかと、うたがふ程の女ころし、いにしへの色自慢かたの丶少將とても、此君にはおよぶまじと聞につけてもおぼつかなく、あふひの上の御方には、少しりんきのさし出て、しのぶもぢずりたれゆへに、みだれ心のうたがひも、げにことはりときこへけり、されば源氏の生れつき好色の方において、うちつけにべつたりと向方から仕懸の戀風に、糸よりかゝる青柳の、なびきやすきはきらひにて、たゞなりそふでならざかや、此手をくだき氣をつくし、日をへて物にする事を、よろこび給ふ御くせなり、げにや色事おもひやる常盤の山のほとゝぎす、から紅のふりいでゝ、はれ間もみへぬ五月雨に、けふもくれぬと入相の、かねつく／＼とものおもふをりから、內裏にはうちつゞき、みかどの御ゆめみあしきとて、御物忌の中なれば、靜觀僧正をめされ、南殿の御階において、一七日仁王經をおこなはる、源氏の君も此間は晝夜御殿に直宿し給ふ、かゝる所へ御舅左大臣殿より、此ほどの御つとめさぞ御退屈にあるべしとて御心をつけられ、提重一組めづらしく取あはせ、御子頭中將を御使として、源氏の御休所へ御みまひにつかはされける、本より此中將は源氏の爲には小舅にて內外心やすく、和歌糸竹の道々をも一所にまなび給へり、つれ／＼とふりくらして、しめやかなる、宵の雨に、御とのゐ所もつねよりはさびしき心ちするに、源氏の君ともし火をちかくよせて、文選のあはれなる卷々をくりひろげ給ふつゐでに、かたはらなる簞子の中より色よくそめなしたるうすやうに、ちらしかきたる千話文をとり出し、その事かの事おもひ出し、たゞひとりおかしがり給ふ所へ、頭中將せきばらひして、しさいらしくみへ來れば、あはててかの文をふところの中へとりかくし給ふ、中將粹してもし是よい手が見へまする、今はなんで御ざります、ちとみせ給へとゆかしがれば、源氏めいわくながら、さあらば大事ない文計みせん、さはりある艶書はひらく事ならぬとゆるし給はねば、中將むつごけなかほつきして、ちか頃それは聞へませぬ、日ごろ御まへとは心やすく、一口の物をも喰合ほどにいたしますに、いかほど大事の文なればとてかくし給ふべきかは、さて／＼曲もない御こゝろ入、われらも隨

分悪性をつくし、ぬれの意氣地におゐては、酢も甘もよくなめて見ましたによつて、かりそめに書ちらしたる文はみてもおかしふおもひませぬ、そのうちとけてさはりある、起情まがひの艶書こそ見所ありてゆかしけれ、おしなべて大躰の文は數ならぬそれがしも、時おりふしに書かはし侍るに、たゞ色事は、おのがまゝ心のそこをうちふるひ、うらみも戀ものこりつゝ、おもふうたがひはれはらし、君まちがほに夕ぐれの、空になく音はみなうそながら、うすくもこくも長々と、書ながしたる水莖こそ、見所あらめといひければ源氏何がさてそちにかくすべき事あらん、さらばのこらずさらへて見せんと、簞司を開き上の引出しに入置たる、あまたの文をみせ給へば、中將さねて、いかにも大切なる文をば、かほど大ごみなる箱におさめ、取ちらしをき給ふべくもあらず、さだめて秘藏の文をばふかくかくし給ひぬべし、次の引出しこそ心にくけれとて、なをうたがひながらかたはしづゝひらきみるに、相手かはれど主かはらず、此ほどは打たへて、その音づれもなぎさこぐ、海士のおぶねと書そめて、かしこの末に源樣參る下にはより〳〵

身と許あり、中將粋の骨長にて手の筋をみしりごし、當推量に女の名を、それかかれかと指す中に、天然といひ當るもあり、又突氣もない人をおもひよせて、たしかに是ぞとうたがふを、源氏おかしくおぼしめせどあらそふべくもあらず、言葉すくなにとやかくまぎらはしつゝ、文どもとりおさめ給ひ、そのゝち中將持參の提重をひらき、杉楊枝にて笹粽時の物とて、茄子餅心をつけてこまやかに、小串の肴はさみあひ、三つ二つ四つ酒をのみ、酔ふた機嫌に光君、なふいかに中將殿、わが文ばかり探さずとそなたの文をも取出し、もようのかはりをみせ給へ、しからばこちにも懇難な、秘藏の文を出してみせんとさいそくし給へば、中將卑下して、われらにおくる文などは中々いやしきしづの女の、文字さへ直にみへわかず、ましてことばのつたなさを、君の御げんに入ん事、はづかしく候へば、そこらは御めんあるべしと、いふもかたるも若いどち、足もたせつゝ文枕、たばこのけぶり吹ながら、むだ口たゝいてよもすがら、是でなければ夜があけぬと、色のしな〳〵かぞへたて、はなしけるこそおかしけれ、時に中將寢ころび居、扇ひらいて蚊を追な

がら、それ天地に孕れ人として色このまざらんはいとさう〳〵しく、玉のさかづきに酒なき心ちぞする、さあれば男も女もやめまじきは色の道、戀なければうき世もあらじ、娘のいたづらは親の見ぬふり、息子の惡性は親仁が氣を通すが當風のこゝろ持なり、されば女の生れつきに、是はしたりとさびあがり、命を質に遣るほどに、どこもかしこもうちそろひ、金になりよき米たちは澤山にはありがたし、げに世をわたるさゝがにの、何のくもなきふるまひと、かねてしりつゝ戀託し、そとをり姫の色ざかり、ぬればや人々袖引て、雪の降夜にがた〳〵と、車の陰に丸寢せし、かの少將のおもひ人、小町がすがたもみねばしらず、たゞまのあたり目にふれし、今の米衆をかぞふるに、難のつかぬはまれに候、此人は戀しりめ情しりじやとおもふほど、たゞうわべにて實どかし、文にて人をころすもあり、さてをりふしのすてことば、かたじけなさになみだをこぼし、どふもいはれぬうまひ所あれど、さり入てみれば水くさい事おほく、たゞ一分をたてたがりておのれが器量を高ぶり、外には女もない物かなんぞのやうに、性のわるい女房多し、親にかかりて居るむすめなどは、卒時に人にもみせじと奥ふかくおしかくし、月見花見のありきさへ、乘物にてのゆきかよひなれば、外より目利のならぬ事なり、たま〳〵人つでにて尊丈それのむすめ子は、品かたちをばいふに及ばず、繪かき文かき花結び、よろづにつけてくらからずと、たゞかたはしをよそにのみ、みずしてこゝろをうごかすを聞戀とは申なり、こゝにある宮がたの御むすめ、末摘花と聞へしは、かたちはさのみすぐれねど、なんとなさけのそこふかく、男おもひのしやれものぞと、仲人姥がとりなしも、あはねばしれぬ世の中の、女ごゝろやたのみなく、わづかの藝を鼻にかけ、惡い事をばおしかくし、人間のよいやうに、つくろひだすことなれば、そらにはいかゞさだむべき、惣じて女の身の上を、實あるかとみもてゆくに、つゐにはみおとりせられて、葉の出ぬといふことなしと、おかしげにかたりけるを、源氏の御心にもおもひあはする事ありてうちわらはせ給ひ、さてその中にも又まれに、うちそろふてきりやうよく、心ばせの誠ある女もあらんかとたづね給へば、中將げにや疵なき出來物に、千枚道具の折紙あり、中々それは切れ

物にてたちまち男の命をとる、さればつく〴〵かんがふるに、いたりて上年の女と、寸度下作の女はまれに、たゞ中の上下の上の生れおゝく候、先は位たかき人のむすめは、うば腰元にかしづかれ、よい事ばかりみならひ、少つゞのわるい事はかくるゝ事もおほく、とりなしがよければおのづからふるまひもよろしく聞へ侍る、たゞ中より下のむまれにこそ、女の心々をのがまゝしなしのよしあし、さま〴〵にわかるべき事なり、又下々の生れになりては、さのみとりあげていふにおよばず、はじめからいやしきはづじやと人ごとに了簡すれば、目にもれ耳にたつ事も、そのとをりにてすまし候と、色事のさばきにおゐて、くもりなきやうにみへけるもおく床しくて、源氏さて上中下三段にむまれ出たる女のしな、わけはさま〴〵ありはらの、われなり平にあらねども、色にはあかでたちなげく、けふのこよひにいにしへの、しづのおだまきくりかへし、むかしを今の物語、さあ〳〵たづね申べし、元より位やんごとなく、品たかく生れながらいやしき人の妻になり、手鍋提つゝ朝夕に雌水喰もあまたあり、又はつたなき海士衣褥をむすびし人々も、俄に品よくなりあがり、大きな顔してほのめかす、その遠目をばいかゞ分べきとと給ふ所へ、左馬頭、藤式部の丞といへる好色の友達二人御みまひに來る、源氏よろこび給ひて、よい所へまいられたり、先酒のんで咄しやれと、聞に氣味よき色ごろも、とりかさねつつかたるもおかし、

此末のまきより雨夜の品さだめ十八問答なり源氏一部の大意なれば心をつけてみ給へ文のつたなきは今の作者の科とおもひて

風流源氏物語卷四終

風流源氏物語巻五

（是より十八問答のはじめ左馬頭のことば也）

いやしきしづの女氏なふして俄かにのぼる玉の輿、むらさき蒲團を敷寢にし、伽羅のけぶりでふすべても、かくあらざる立まはり、いやといはれぬ物ごしにごふでも藥の出るものぞ、さてやんごとなきすぢなれど、時にあはねばせんかたなく、貧な男につれあひて破れ布子の取形にも、どこやら小判のはしがみへ、そのふにうへてかくれなき、げに紅の顔ばせにやさしき所おほくある、今の軒端の荻など（女の名）はなりけしうは（げびぬ生れ也）あらぬ中位さてとよ中にも上下あり、明石の上の（はりまの國あかし入道のむすめ也）生れつき、田舍にそだちたまへども、いやしからぬふうぞくにて、たちふるまひのやさしきは、いとさつぱりと家の內、ゆたかにくらし給ふゆへ、都そだちの上郎にみぢんもはぢぬけはひなり、又みやづかへに出たちておもひかけぬ仕合にて、裾のはしを穢し夜食のかたまりなど出來ては、一家一門うかみあがり、世のおぼへはなやかなる女もおほし、これらをや中の上とさだむべきといへば、（二段源氏）さておもしろき事かなとあたまをたゝいてわらひたまへば、頭中將かほをしかめさても笑止やこゝろへず、他人のやうに仰やります、そのみやづかへに出たつと馬の頭がものがたりせしは、御母きりつぼの御身の上では御座らぬか、それが何んのおかしひ事ぞと氣をつけられて、げにもつとも（三段馬頭）女三の宮などは時世のおぼへうちそろひ、何に不足もましまさねど、少し御器量おとりてみゆ、薄雲の女院はすぐれて時めきたまへども、さのみとり得てほめがたし、これらは上の中ならん、其外さま〴〵宮がたに名の聞へしはありながら、われらが口でうへ〳〵のみぬ玉だれはさたにおよばず、いでさらば此上はいたりせんさくさらりとやめ、中から下をばはなしましよ、世をすてゝ引こもり、人に名をさへしられず、あばらやにただひとりすみわびし女もあり（此女は夕がほの上の事也）又親仁はかたくなに爪の先にて火をとぼし、（是は藤式部がいもうとの事）兄はもとより家暮てんにてそのいもうとはたゞひとり戀しりの盛なるに、緣にもつけずいたづらに、おしこめをきたるなどあはれにおぼへ、大かたはかゝる人こそ癆痎などをやむものなり、をしやあつたらきりやうぞと藤式部

が方をみやれば（四段）式部はわがいもうとゞものよきむまれつきなるを聞いだして、かくはそびやかすにやと下心にはおかしく思ひながらあいさつもせず、きかぬふりしてねぶり居たりけるに、源氏はしろき直衣（しやうぞくの事也）をしどけなく着なし、引しごき帯一重にて寝ころび給へる御よそほひ、燈火のかげにうつりて、光る君の御かたちをそのまゝ女にして見たらば、公家大臣のその中に心中する物おほからん、此君の相手には宮がたの女廊を撰りに撰りても不足なるべし、（五段馬頭）およそ世間をうかゞふに人づてにきゝ、たゞかりそめに些とみて是はとおどろくばかりの女も、わが手に入てなれしたしび、所帯などをうちまかせてからは、はじめ見聞と大にちがひかしこきといひしもおろかに、かたちのよきもみ悪く、よろづにつけて飽目のみゆるものなり、すべて女に限らず、男にもまた公につかうまつり、世のまつり事をもかしこくとりさばき、人のたすけにもなるべききりやうは希なる物に候、しかれども上にたちて政道をおこなふ人は、たとひ氣のつかぬ事ありても、下からそれ〳〵に心をつけ、下は上になびき上は下にたすけられて、よろづとゞこほる事なし、さるによつてことひろしといへども、何のくろうもなく埒あき侍る、たゞせばき家のうちの、留主居にさだむべき人をいかにとおもひめぐらすに、少もたらはぬ事ありては不埒なる事どもおゝく出來さふらふ、つら〳〵あんじ候に、夫婦の中よきは女のこゝろなるべし、もとよりそれもおつとの心によるべきことなれば一がいにはさだめがたし、されどもおつとはいかにわが女とおもひいやしめ、あるひはありたきまゝの不義をおこなひ、又はさかへおとろふるの二つにしたがふといへども、うらみはらたつことなく、おつとの心にそむかじとしたがひ、さてそのうらめしき事をば、をりにふれて千話むつごとのつゐでに、いつ〳〵はかうしたことを仰りましたが、それは此わけじやによつて、こなたのが無理で御ざんす、わしがこゝろにはかうおもひます、なんとそうでは御ざんせぬかと、にこやかにいひきかせなば、いかほどざんよくいたづらなおのこもよだれをながさすといふ事あらじ、（伊勢みやす所の事）かたちさつはりと伊達な仕出しにて、よろづきれいにもてなし、たゞかりそめのことのはにちりもつかじと身を高ぶり、

文をかけども大やうに、さら〳〵とうちなぐり、そこには物のあるやうに、皆人ごとに氣をもたせ、あふてこま〴〵ものいふに、十に一つのかへり事口の中にてつぶやけば、それぞとわけも白糸のなびきやすき木がらしの女也女とみれば、あまりなさけに引おとされて、こゝろよはきは父なし子とやら、とりじまりなきもきのごく、是ぞ女の第一の疵なるべし、指くひの女のこと又かたちはおとりながら心だてすなほに、わが家の佛とふとしとかやにて、男ひとりの手をまぶり、よそめに氣違とみへてもかまはぬ氣になりて、髪をもろくはとりあげず、眉の跡青々と燕脂黑齒は元朝につけそめたるばかりにて、白粉箱には蜘の菲を張るといへども、さら〳〵それにはかまはず、たゞ所帶方の事にのみ心をくばり、夫の出入につけてかりそめにも世話をやき、世の人のうわさなどとりあつめてかたり出し、事にさし出はらあしく、わが物がほに家の內むらさきの上の事とりさがすもめんどうにおぼゆ、只女は心入やさしくよろづ遠慮がちにおぼこめきたる人こそおもしろからん、ものごと人まかせなればことたらぬところをば、ひきつくろひていひおしへ、おしなをすこともこゝろまゝなり、花ちるさとの事つねはすこし大やうにて物にかまはぬ女の、おりふしにつけて出ばへさし出る事也するに、よろしき事もおほくありける、今はたゞ品かたちにもよるべからず、心さへなさけふかくよろづ夫にしたがひ、身もちやさしくさざれ石の、岩ほとなりてこけのむすまでさかへひさしく、ふたばの松のすゑ〴〵まで、貞節の道をまもり候はんこそよき女とは申べけれ、さればなり、平朝臣さる女もちぎりかはし二心もあらですみなし侍りしに、此女のむまれつきうはべにはうつくしく人がらをたしなみ、うらみいふべき事をもおしかくし、心の中にはおもひあまり、折ふしにつけてむねのほふらをもやす事のみおほく侍りしに、あるとき女少の事をこらへかねて、なり平の家をうしとおもひ、うたをよみおきてつゐにはしり出けり、

なり平の家を
出ていなばこゝろかろしといひやせん
二人の中にうらみある事なば人はしろまじき也
世のありさまを人はしらねば

此男なり平也かきをきのうたをみてさま〴〵思案すれど、我心におぼへぬ事なるを、事によりてか家出しぬら

んとこゝろもとなく、あそこゝとたづねもとむこといへども行衛さだかにしれず、ある時人づてにきけば、頭おろして尼になりぬるよしさたするも、かなしくおもひなげきければ、（なりひらの）めしつかひの女などかのあまの所へたづね入りてたいめんし、旦那様（なりひら也）の心は如在なくましますにそこほどもかへりみたまはず、いかにとしてかあたら御身をいたづらに、かくはさまかへたまふらんといふに、その時こそ過し世の戀しくなりて、みづからあたまをかきさぐりて、くやしき事おほく、短氣は損氣と思ひしり足ずりをしてなけどもかひなし、されば一たび尼になり、佛の道にも入にしものゝ、又ぞやむかしを戀したひ、煩惱のきづなはなれにくきありさま、佛も中々こゝろきたなしさみ給ふらん、にごりにしまぬ心をもつて、露ばかりのうらみをいひつのり、わか氣にまかせかろ〴〵しく、一たん家出してのちこゝろのしづまるにつけて、さりし夫の事ゆかしけれど、今は後悔先にたゝず、きのどくの山々ものおもひする女もおほく侍る、すべて（むらさきの上にあたる）よろづの事なだらかに、うらむべき事をば何となく

ほのめかし、又うらむまじき事をもにくからずとりなさば、それにつけていとしさもまさり、をのづから男の心もおさまりぬべし、あまりはしたなくうちもたれ、こゝろやすだてにみゆるは、よそめにはうらやましきやうなれど、立かへりみればうるさくて、つながぬ舟の浪にうきたるごとく、とりしまりなきものに侍る、何んとさうはあるまいかといへば、六段中將うなづく、（七段頭中將）さし當りて おもしろくもあはれにもみゆる人の、とり入てたのもしげなきこそほいなかるべけれ、さは云ながら男のこゝろながくみゆるしなば、その家もおさまり夫婦の間ふし〴〵もあらじ、とにもかくにも世の中に、二つながらそろひたる事なければ、大かたのふそくをば大やうに扱てこそすむべかりけり、わがいもうとは（あふひの上なり） 此定めにかなひ侍るかといへば、源氏の君狸寢入して聞入給はぬを、左馬の頭は品定の頭取になりて、好色一道の事は何んでもあぢよくとりさばかんと思ふきしよくにて、打ぬきの扇ひらめかし居たり、中將ははじめからそのことはりを聞はてんと起なをりてさいそくする、（八段馬頭）さらば女の品を、たとへを引てかたり聞せん、先木の

道のたくみの職人大工の事也よろづの細工を心にまかせてこしらへ、外の智恵におよばぬ七堂伽藍、五重の塔などを何の苦もなくつくりいだす、その外人々のこのみに任せいかやうなうつはもの、彫物すかしのたぐひ、何がならぬと云事なし、其中にも上下ありてなをもの丶上手は手際各別にみへわかれ侍る、又繪かきの上手おほけれど、彩色繪に至りてはまぎる丶事ありて、かりそめにまさりおとりはみへわかれず、たゞ墨繪におよんでその遠目はつきりとあらはれ侍る、されども誰もみた事のないしゆみせんの圖龍宮のけしき、天ぢくの金翅鳥もろこしのけだもの、目にみへぬ鬼のかほなどおそろしきさまに書なし、人の目をおどろかす、これは實らしき事にあらねば、そのよしを強てあらそふものなし、とにかくつねにみなれし山のすがた水のながれ、人の家居などをさら〳〵と書なして難なきをこそ上手とはいはめ、すべて墨繪のかすり筆は下手のおよばぬ事なり、又手を書にもふかき習はなくて、筆勢などあらはに、何の點かのてんとてちんぷんかんの似せをつかひ、ひんしやんとはねちらしたるは、一風めづらしくみへたれど、それよりはなを律儀に筆拍子なく、つゞまやかに書出したるこそまことの能書とおもはる、されば はかなき藝能さへ、おもてをかざりつくろひたるは、みざめするこ丶ちなるに、まして人の心の花染にうつろひやすきあだ情、うはべの色はおもしろけれど、千とせの松のすへかけて、ふかきちぎりはむすびがたく、よろづにつけてたのみすくなくこそ侍れ、さらばそろ〳〵はじめのたとへをとりてかたりきかせ申さんと、源氏のそばへちかく居よれば、君は右のはなしの內より、とろ〳〵うちねぶり給ふを、小撚を捻りて御かほをなでまわしければ、びつくりと御目をさましあくびしながら、さあ〳〵聞ふと起直りたまへば、頭中將頰杖つき、藤式部膝をたて丶むかひ居たり、時に馬の頭九段それがしまへに下官にてまかりし時しのびあひたる女あり、さのみ形はすぐれねども頭に血のあるさかりなれば、松の木のふし穴もつんざくほどのいきほひにて、風かの女にのぼりつめ、ちよろりと夫婦のやくそくして、內へよび入れ所帶をさするに、のち〳〵は秋風たちて、事がなあれかし笛吹んと調子をみあわせ侍りしに、此女りんきつよくわれらたま

たま夜ばなしなどに出て、すこしをそくかへれば、密女ぐるひもするやうに廻り根性を出し、さま〳〵うたがひけるにぞ、いとゞうるさくおもひながら、この女つねに所帶を大事にかけ、味噌鹽の切れ目にもわれらに世話をやかせず、かれが智惠にて才學し糸くり綿つむ價にて小遣にまかなひ、大かた半分は女房が影でやしなはれければ、さながら暇も遣り惡く、さりとて又相ずみする事しだいにいやらしく、とやせんかくやとおもひめぐらすに、女そのけしきをみてとり、にはかにしなかたちを作り、朝むく起から小麥のからにてすりみがき、串柹に粉をふりたるごとく、べつたりと彩色して、日には百度も腰の皺をのばし、むりに氣に入るやうにもたせ懸るほどに、猶うとましくをもはれ、ごふかなしてかれに飽れんと思案をめぐらし、ひたもの夜歩行して先々にとまりて戻りければ、女房例のりんきをおこし、鍋釜のめげる程わめき出し、なふそこなうんつくどの、内には水が付かなんぞのやうに三界をめぐりあるき、女とさへいへば茶臼に目鼻が付てもびろ〳〵と引てみたがり、さもしやつまみ喰ばかりして、それで所帶がさばけるものか、ちとたしなまんせ性惡々々と、かさ高にのゝしる程に、あたりほとりの外聞つかみたてるやうにきのごとくなれば、それがし炎魔顏して、やいそこな鬼死人目があるぞ先だまれ、そもや男のかたじけなさは、おれ一人にかぎらず皆人ごとに心まゝ、したい事してあそぶ筈じや、わが身貧なればこそおもふやうにもならね、世にある人は女房のある上に妾足かけ莚なをし、腰元茶間中居などゝて、花のやうなる色ぐるひ、ありたいまゝにふるまへども、本妻さらにりんきせず、しかるにわれらたまさかに、友なひかたらふ夜あそびを、事がましくせいたうして、りんきだてするおかしさよ、そのふくれ顏見度もない、けふまではとやかくと不便をくわへきゝのがし、むねをさすつてこらへたり、かさねてかゝるふるまひせばわが家にはかなふまじ、かまへて已後をたしなめと、あらけなくいひおどし侍りしに、女房いよ〳〵たけりかゝりなんぼ大きな顏しても、そなたの恩はみぢんもうけず、此年月のうきすまひ、手なべ提たるかた手間に、すゝぎせんたくさつぱりと、はぢなきやうにこしらへたて、此身は色紙たんざくの擠をむすんでかた

にかけ、麻うみ糸くりわたつみて、賎が手業の錢もふけ、わが喰分は有あまり、一年の日を百日は大かたこちから養ひしも、貧な男のかはゆさに、めんどうみてまいらする寺から里へのこゝろざしを、うれしきともおもはずして、出るまかせなる安房口、さりとはむごひ仕かたぞや、男畜生性悪めあゝ口をしやうかうかと、けふまでたらされつきそひて、あつたらむだ骨犬もくわぬと、うろ／＼なみだでとびかゝり、われらが小指を引よせてたゞ一口に喰切 是よりかの女を指くひの女といふ さい夫婦の縁も是迄と、跡をもみずしてかけ出るを、それがしたもとをひかへ、

馬頭 指を喰れし事をそへて 此年月あひなれし事を
　手をおりて あひみしことをかぞふれば
　　りんきせしことの一つばかりは女の疵じやと疎ましく思ふと也
　これひとつやは君がうきふし

女返し 君がうきふしといふをうけて
　うきふしをこゝろひとつにかぞへきて
　　これや也 今此時ふんつきて男の手をはなるべき時節ぞと也
　こや君が手をわかるべきをり

とよみかはして家出しにけり、つく／＼おもひめぐらすに、さすが年月あひなれたる事なれば、をりふしごとにおもひいだし、ふびんにもありければ、かのりんもじさへやみなばよびもどして、二たびそはばやと思ふ心もありながら、日数ふるまでおとづれもせざりしに、ある夜みぞれふりてさびしきころ、内裏よりかへるさに、指くひの女が事をおもひつけて、いかにしてくらしけるにや、さだめてはや他人にそひより侍らん物をとおしはかりながら、様子見がてら雪をうちはらひつゝ、かの女の家路にたどりつき垣の間よりのぞきみれば、ともし火壁にそむけてわが女房にはあらで、みなれぬ女どもうちより穴鏈に足さし入れて鼻歌などうたひ居けり、ひそかに内の女をまねき出して、かの指くひの様子をくわしくたづぬれば、いまだ縁にもつかず、われらがことのみおもひつゞけて、過し世をのみくやみけるよしなるが、こよひは親の家へみまひに参りて、われ／＼をるすにたのみおかれ侍るとこたふにぞ、扨はかの女のこゝろもしづまりけるにや、むかしのかたみをわすれざりけるこそしほらしけれと、思ひやりてかへりける道すがら、相なれし年月をかぞへ、つねにかの女がなさけつよく、わがことのみ大切におもひをきける心づ

くし、女ながらもかしこくたのもしきことおほけれど、たゞりんきばかりが疵じやとおもふに、それもあまり男をかはゆさゆへにこそと、かさねて慕こひごろも、絹をたちぬふてわざの又たぐひなく、龍田姫といはんもはづかしからず、織姫の手にもおとるまじきこと一つ〳〵いひ出すに、よろづのこりおほきことばかりとおもひあたり候よとなみだぐみてかたる、

風流源氏物語巻五終

風流源氏物語巻六

十段中將聞てさて〳〵本意なき事かな、貴様の若氣故にあつたら女房にわかれ給ふ、すべて打そろひたる女は、金の草鞋履て女護島を尋ても、たやすくもとめがたきものなれば、大かたの疵は不足してをの〳〵やわれらはたゞ所帶がたを大切にする女房が德じやとわらひながら、其外おかしき事はなきかといへば、

十一段馬頭 さてかの指喰を去てのちに、又外の色にうつり人の家にしのびてかよひ侍りしが、此たびの女ははるかにきりやうすぐれ、親もれき〳〵なればそだちいやしからず、名を木枯と申けるがこゝろばせやさしく、仕出しぼつとりとしておもくにみへ、歌よみ物かき琴三味にいたるまで、一通りづゝならひおぼへ、男の方より手をおくほどに見へ侍る、まへの指くひの女にむかひてのあいさつとはかくべつちがひてむづかしく、卒爾に文盲な事などはいひ出し悪く、諸事心おかれてちぎりかわしけるに、此女おもてむきうちとけたるやうにみへて、下心にはたのもしげなき所あらはれ、もしや密夫狂ひなどするものかとわる

粋をまわし、心をつけてねらひ侍りしに、神無月のころ月いとさへわたりたる夜、内裡より退出かへるついでに、木枯が家に立よりければ、若き殿上人狩衣にゑぼし引かけて内へ入りぬ、さればこそ隠し男の有けるはとあれたる壁のくづれよりさしのぞき居たるに、かのしのび男縁に腰うちかけて木の間漏月をながめ、菊の花いとおもしろくうつろひて、もみぢの亂れなんどあはれげに見へたり、その男ふところより横笛をとり出てふきならしければ、簾の中より木がらしの女爪音高く和琴をしらべ、（和琴はつれの琴に似て糸六すじ有柱は皮付の楓の木の二またなる小枝をすぐに用て上を矢はづのやうにして糸をかけつれの琴の柱をならぶるやうにしてびわの撥のやうなる木のへらなんかきならす也）物やはらかにかきならし、簾の追風ほのめくこゑもやさしく開なして、をとこぞゞろにうかれ出、庭の菊の一莖折て簾の中へなげ入れ、

殿上人

ことの音もきくもえならぬ宿ながら（菊をそへていへり）
つれなき人をひきやとめける（ことのゑんを取て）

女いたうこゑつくろひて

こがらしにふきあはすめるふえの音を（琴をかけて）
ひきとゞむべきことのはぞなき

となましたゝるきあひさつするに、わが見入たるをもしらで女みすの内より出て、男の手をとり奥へ引入れければ、すはや事こそおこれと心悪ふなるほどに、しきりに息づかひあら〳〵しくなれば手に汗握り、身をもだへつゝうかゞひみれど、かな聾の立聞にて内と外との事なるに、耳垢を剷出し壁に小鬢をおしつけ足を翹て聞居れば、ゑならぬ泣聲ひゞきわたり、温茶五六服のむほど間ありて、ばたくさと身づくろひするやうに聞へ、男外へいでゝ手洗つかふもおかしかりし、是をみてより淺ましくなり、それよりかの女に中絶侍る、されば、前の指くひの女と此木枯が事を思ひ合するにわかき時の色ごのみにはさま〴〵おかしく、あはれに耻かしく心悪き事などかず〳〵さふらへど、とにもかくにも女の下心ほどおそろしくたのみすくなき物はあらじ、源氏の君もわかき御心まかせに、おらばおちぬべき萩の露、ひろはゞきへなんとする玉篠のあられなんどのやうに、こぼれかかる戀草をのみ好もしくおぼしめさるべきが、あたまからぬれかゝる女はまことすくなく、一たびは男をすつぼりとぬくものにて候、今はおぼしめしわけ

も有まじ、御年も長て三十にもなり給はゞ、その燒手をばかならずおもひあたり給ふべし、かまへて〳〵女には心をおかせ給へ、ふか入してはめられ給ふなといましめければ、十二段 源氏にこ〳〵笑ひおはす、十三段 頭中將もみ手して、さらばわが身の上におもひあたる事を、あら〳〵はなして聞せませう、それがしやもめずみにて侍りしころ、しのびてみそめたりし女あり、何とぞして手に入れたやと、千々のいろ〳〵氣をくだき、ほに出てまねく花すゝきなびきよりたるうれしさに、人目の關をもりそめてかよひなれにし年月のうつるにそへてかはゆさは、寢てもさめてもわすれかね、心一ぱい實をたてかはるまいとの起請文、二世のちぎりをむすびをきたへて、音信なきとても露うらめしきけしきもなく、その身ははかなき芝の戸の軒に、雨もるあばらやにひとり住して、よろづにつけ事たらぬがちなれど、みぢんもそれをいとひもせず、つゐに鼻紙一枚も無心いはずにくらす事、さりとは見事な心底ぞと末たのもしくおもひ寢の、夜ごとにかよふしるしにや、娘をひとりもふけつゝ、ふたりが中の寵愛は、月にも花にも是ばかり、むぐらの宿にそだてをき、終のたのみとおもひしに、父母の了簡にてそれがし合點もせぬうちに、右大臣の四の君に緣組をいひ合せ、往生ずくめに祝言させ、心にそまぬ新枕、うたて物うくおもへども、さながら親の命なれば、力およばずうか〳〵と、なげきながらも月日を送る、され共かの女わが緣組を恨みもせず、ありしままなる心中は、哀而不傷と毛詩にほめし上﨟に、おとらぬほどのふるまひぞと、いとゞあはれにみ過しがたく侍りしが、ある時久しく音信ざりしに、女の方より文にそへてなでしこの花を折て おこせたりしを、今もわすれずかなしきぞとて、うちなみだぐみて居たるを、源氏さてその文のことばはとひ給へば、中將わけてことなることはなくて、

女

山がつのかきほあるともをり〳〵に
（へだてたる心也）（かきは物をへだつるものなればよそへて云り）

あはれはかけよなでしこの露
（むすめの事也おさなき子なばなでさするものなればなでしこそへて云）

おもひいでゝあはれにおぼへ、その夜女の方へみまひたりしかば、いと物おもひがほにて、あれたる家の露しげきを打ながめ、むしの音に心をうつして、う

ちかたぶけるけしきしほらしくて

頭中將　母とむすめとおもひくらべて

さきまじるいろはいづれとわかねども

なでしこの事を云り母よりは娘の事を分て憐れに思ふと也

なをとこなつにしく物ぞなき

女　なみだをそへていへり

うちはらふ袖も露けきとこなつに

少はうらみたる心中將の心に秋のきて外の色にうつり給へばむすめの事も心もとなしと也

あらし吹そふ秋も來にけり

と心ぼそくいひなして、實からうらめしきさまもみへず、うろ〳〵なみだをおとしていとはづかしげに、なげきの色をわれにみせじと、をしかくしまぎらはしけるこそ心よはくみへ侍りしが、いつとなく風のこゝちと聞てつゐにはかなくなりけるにぞ、それのみ今とてもわすれかね候とて、やがて袖をしぼりぬ、十四段やゝ有て源氏藤式部にむかひて、そちが身の上にこそあたらしき物語多からん、少しかたはしを咄せ聞んと仰ければ十五段式部承り、かずならぬわれら如き何のおかしき事かさふらはん、申ても下つかたの品品、御耳にとまる事有まじくこそとて辭退すれば、頭中將さし出て、いかなる下輩(げび)た事にてもくるしからず、御なぐさみの爲なれば遠慮なしにはなされよ、さあ〳〵おそしとせめ給へば、式部思案がほにて、さらば何事をか申上んと聲づくりして、十六段それがし四五年已前に、すぐれてかしこき女になれそめ侍り、かの馬頭のはなし給へる木がらしの女のやうに、諸藝うちそろふて器用に、なま〳〵の博士も爪をくわへる程才智ありける、かれが父もとより和漢の文に達し侍りしかば、それがしをり〳〵行かよひ物よみならひ、講釋なんどうけ給はりしつゐでに、かの父われらをねんごろにおもひ入れて、何となくむすめと盃事させ、さかなに小歌などうたはせなどしてもてなしけるにぞ、何んでも仕て取た物じやと下心にうれしくおもひながら、親の心をはゞかりて、さすがになれなれしくも物いひかはす事なく、古文眞寶にかまへて、ひた物詩文などをまなび侍りしに、そのむすめ詩作る事上手にて、その道をくはしくわれらにをしへけるまゝ、のちはこゝろやすくうちとけて手をしめながら平側を合せ、千話のかず〳〵いひかたらひけれど、かの女身を高ぶり藝に自慢の色みへて、われらを下目にみこなしけるにぞ、あらめんごうやさおも

ひ切てその丶ちいひよる事もなく打過侍る、とかく女の才智すぐれて藝に達せしものは、男を尻に敷やうにおもはれ心にくき物に候、君もよく〳〵聞しめされ、あまり發明なる女には御心をゆるさせ給ふなといへば、其時源氏それはかりではすまぬ今のはなしの跡があらふ、是非々々殘りをはなせ〳〵とせめられ、藤の式部鼻のあたりおごめきて、さてかの家へ久しくまいらざりしが、ある時もの丶便りにおとづれけるに、をりから水無月の夕つかた、あつさしのぎがたく、扇つかふて汗を入れ葛水など呑で、かの女今もや出るかとまち居たるにさはなくて、下女を出していんぎんにもてなし、へだてたるやうなあいさつ、われをふすぶるかとおこがましくおもひなして、なを様子をうかゞひみるに、下女がいふやうはむすめ事此間霍亂氣にさふらひ、土用の入りなればとてけさほどようじやうのために、草藥を（にんにくの事也今も土用の入ににんにくをのむ事ありむかしよりのならはしか）のみて、いと臭にほひのいたし候へば、直に御げんに入りまいらする事きのごくに候ゆへひかへ侍るといふに、あいさつのすべきやうなく、たゞ御尤とばかりいふて立出ければ、あまりさうざうしくや覺へけん、かの女障子越に高々と、このにほひこよひの内にはうせ侍らん、あすの晝ほど來らせ給へ、たいめんいたすべきといふもうるさくて、

藤式部 （くもの事也くもの振舞兼てしるしもと詠る古歌を取てひるほど來れといふをうけて）
さゝがにのふるまひしるき夕ぐれに
ひるますぐせといふがあやなき
（にんにくをばひるといへばそへていふ也）

女
あふことのよを（やすめ字）しへたてぬ中ならば
ひるまもなにかまばゆからまし（くるしかるまじと也）

まことに口かしこき女もきのごくにおぼへ、さて又いかに藥なればとて、か丶ることやうなる物を女のもちゆべき物かはと淺ましくおもひければ、それより中絕侍るとしとやかにかたれば、（十七段）源氏興がるかほにて、その物語は中々方便にこそあらんとうち笑ひ、たとひ誠にもせよかし、あからさまに女のはぢをばいはぬ物ぞ、今すこしよろしからん事を申せとせめ給へば、式部これより外にめづらしき事はさふらはずとていひやみぬ、（十八段）すべて男も女もその身のあやまりを殘りなくとりさがしいひたてんこそきのごくならめ、又女の三史（史記前漢書後漢書）五經（書經詩經易經禮記春秋をいふ也）のみちみ

ちをあきらかに學びさとり、口かしこきとてにくみきらふべきにあらず、されどもなま物じり川へはまるとかやいへば、その道々を心におさめおきて、みだりに口にいふべからず、なまじゐにわれこそ眞名しりだてにかな文の中へ、よめにくき難字などを書入て先をこまらする事は、よき人のせぬ事也、うたよむとおもへる人の、一風やり過してゑならぬことのはをねぢけがましくいひ出るも、つきなくすさまじくこそみへ侍る、すべて心によくおぼへし事もおもてへあらはさずしてしらずがほにもてなし、十ほどいはんとおもふことをば二つ三つのこしてこそばすくなにあらんこそ上﨟のよき品ぞといふにつけても、源氏は藤つぼの御ありさまを心の內におもひつゞけ給ふ、此藤つぼは出ずいらずいはずかたらぬ御むまれつき、女の上においては此外にあらじとほめぬものこそなかりけり、かくてをの〳〵どさくさと色のはなしに鳥がなく、なみだの雨も晴ければ、三人のかたゞ〵いとま申てかへりけり、すでに翌日みかどの御ものいみも明ぬれば、源氏の君此間久しく里へ下り給はず、ことには夕部の禮ながら、御舅左大臣の方へ入らせ給へば、いづれもたち出御たいめんあり、此ほど大内にての御心づくし、さぞ御退屈にあるべしとて、さま〴〵御なぐさみなどもよふし給ふ、その日雨あがりにてことの外むせかへり、あつさしのぎがたきに、紀伊守とて伊與の助が子也源氏にしたしくつかうまつる人の中川といふ所に住居けるが、かれが家居うちはれ此頃池に水せき入れて涼しさかぎりなきよし聞および給ひ、さらば暑氣をはらさん爲とて、源氏その家にいたり給へば、紀伊守にはかごとにてあはてふためき座敷の掃除もそこはかとなくとりした〵めける、池水の心ばへなどおもしろく、田舍めきたる芝垣して前栽など心を付て植たり、風すゞしく吹みだれ、むしのこゑ〴〵賑々しく、ほたるしげくとびまがひてけしきいと見所をゝし、あるじとりあへず、御盃を出してよも山の物がたりのつゐでに、夕部雨夜の品定に馬頭が取いでゝ、中の品にさだめをきたる女は、此紀伊守がまゝ母の空蟬いよの助がのちぞひの女房なりにやと心にくゝおもひ、透間あらばみまほしと心をつけてかなたこなためぐり給ふに、西面にわかき女のこゑはのかに、しのびてわらひなどするけしきゆかしけれ

ば、一間の障子を細目にあけたりけるに、きの守さし出て又さしふさぎければ、ともし火のすきかげにしやうじの紙にうつりて女のすがたみへたるが、それかあらぬかと心ときめきすれども、人目しげゝればうかがふひまなく、源氏の君しばし物音を聞ゐたるに、ひそ〳〵とさゝやく事何事ぞとおもへば、源氏の御身の上をかたるなりけり、いまだ源様御年もゆかせ給はで悪性におはしまし、あなたこなたを色ごのみしてありかせ給ふ事、君には似合ぬ御仕かたぞというをきけば、もし藤つぼにこゝろを懸し事などを人のいひもらしけるにやと、先むねつぶれけれど、さのみその噂ともおぼへねば、聞さして引こもり給ふ、きのかみ出て御夜食などすゝめ申す、こよひはこゝに御滞留あるべきよしにて御供の人を歸され蚊帳の内に入らせ給ふ、こゝに小君とて(うつせみの弟なり)十二三ばかりなるわらは、源氏の御給仕に行かよひ侍りしが、北の障子のあなたに女の聲するを、もしやうつせみのふしたる所ならんかと、心もとなく起てたち聞し給へば、うたがひもなくその女とおぼしく小君をよびて、源氏の君はいづくにおはしますぞ、もはややすみ給ひぬるかいかにとゝひけるに、小君さん候君は廂のひさしにぞ御寢なり侍るとこたふ、うつせみひるならばのぞきて見たてまつりたやとねぶたげにいひて、蚊帳に引籠りたるようすなり、源氏は心にくゝおぼして、一間へだてたる戸の懸金を心みに引はづし給ひければ、内からはさゝざりけり、仕すましたりとうれしくて、そろ〳〵さぐり足にて内へ入り、几帳の外より火のくらきにのぞきみ給へば、空蟬たゞひとりすや〳〵と寢入るていなり、源氏おづ〳〵そばへより上にかけたる袷かたびらをそつとをしやるまで、うつせみの心にはわが夫いよのすけぞと思ひ、よふ御ざんしたといふに、源氏いかにもと仰らるゝ御聲のつねならねば、うつせみいかにともおもひわかず、物におそはるゝこゝちして、やあとおびゆれど顔にかたびらのかゝりておとにもたてず、時に源氏女の手をとり、くるしからぬものぞおどろき給ふな、うちつけにはしたなき心のほどゝみ給ふらんもはづかしけれど、日ごろおもひのやるせなくこがれ〳〵てあまを舟、とまりさだめて今よひしも、風にほのめくあはじ島、あはの鳴戸に身は沈むとも、君ゆへならばとおも

ひ入るそこの心をくみわけて、あさくはあらじと思ひわけ給へど、いとやはらかなる物ごしには、いかなる鬼神もたちまち腰をぬかしそふに思はる、うつせみ思ひの外なればさしあたりていらへもなく、やゝ有て人たがへにこそ侍らめ、かずならぬ身に何んのそうした事がとかすかにこたふ、源氏いかにとしてか色ごろもきて見るからにうすからぬ、情によれる戀のつな、君に引かれてしのびよるせいもんくされ實からと、おもはずじつとしめよする時、かのうつせみのおもひ人いよの介勝手の方より忍び來り、いかにいかにといふほどこそあれ、源氏しつぽと汗をかき、几帳のかげにすくみ居給ふ、いよのすけばたくさといふ音をあやしくおもひ、ともし火かきたてゝみれば南無三寶源氏の君、帶ときひろげてふつゝかにさしうつぶひておはします、いよのすけにがわらひして、是は先はしたなく、どうした事の人たがひ、あれに伏したる腰元がお望ならば、とくより內證おしやりませいで大事ない事じやに、性悪々々といひまぎらかすも面目なく、そのまゝ障子をあけて迯出給ひぬ、いよのすけも戀しりにて情ふかく、女の科にもおもひきはめず、かへつて源氏の御物おもひをいとしがり、氣を通じてそのまゝおのが寢やに立かへる、その音を聞て、まへにも懲ず光君いかにもしても本意なしと、又かの床にしのび入り、ないつくどいつなよ竹のふしくれ立し下口に、揚り膳をすゝめたやさ、千千に身をもがき給ふ內に、はや明なんと鳥がなき、御むかひの人々御車を引入よなんどいへば、寶の山に入ながら、手もちぶさたに立歸るとて、

源　つれなさをうらみもはてぬしのゝめに
　　とりあへぬまでおどろかすらん

恨みをいひ盡さぬ內に夜の明しと也
鳥をそへていへり

うつせみ　身のうさをなげくにあかで明る夜は
　　とりかさねてぞ音もなかれける

ぬしのある身なれば
いよの介の心と源氏の思ひとをとり重ねて歎くと也
とりをそへていふ也

すでに四方赤くなれば、源氏は御裝束なんど着替給ひて立出るに、たゞうしろ神の引やうにあとに心のとまりて、いひかけたることのはの、醫者坊なる事をのこりをゝくおぼしめし、かの人のおもかげ身にしむばかり、月はあり明にてひかりおさまりながらかげさやかにみへて、中々おもしろき明ぼのなり、それ

より源氏は御舅左大臣の方にとゞまり、さてかの紀伊守が方にてみなれ給ふ小君をめして御使として、うつせみの方へ文をおくらせ給へり、女人目もきのどくながらひそかにひらきみれば、

源　過し夜の事也
みしゆめをあふ夜ありやとなげくまに　いひかけしことのはのかなふ事もありやとなげく内に也
めさへあはでぞころもへにける　日ごろ也

うつせみの心にいよの介の手前をはゞかり給ふにより、そのまゝ御返し申事もなかりしかば、明の日小君をもつて御返事をさいそくし給へども、つや〳〵御請を申さねば、源氏少しせかせ給ひて、さらば直にたいめんして心のをくをたづねんと、夕ぐれのすゞしきころ、物詣のかへるさに紀伊守が家に入らせ給へば、あるじよろこびさま〴〵もてなし奉る、うつせみは君の御入りをきのどくがり、例の所にやすらひなば、又ぞやはづかしき目をみる事もやとおもひ、その夜は寢間をかへて伏し給ひぬ、夜更て源氏小君を御使にて御文を遣はされけるに、つねの寢間にみへ給はねば、あそこ爰よとさもとめけれど居所しれず、ようようにしてたらふか傳ひに行あひ御文奉る、

源　うつせみによそへて云り　前にくわしく記し侍る
はゝ木々の心をしらでそのうらの　まへにあり
みちにあやなくまどひぬるかな　わけなく也

女もさすがに捨てもおかれず、墨うすく打なぐりて、

うつせみ
かずならぬふやせにおふるなのうさに　まへにあり四の卷のはじめかんがうべし
あるにもあらずきゆるはゝ木々　はかなき心也

ときこへて、その夜もつれなくあひたてまつらず、源氏は思ひのむねをこがしすご〳〵と歸り給ふとぞ、

風流源氏物語卷六終

空蟬二卷　夕顔二卷　若紫二卷　跡より板行

元祿十六癸未年孟春吉日

洛陽五條通
河勝五郎右衛門
書　房　　板
東武日本橋南一丁目
升屋五郎右衛門

近世文藝叢書第五終

神戸龍治
田口重男　校
文傳正與

明治四十四年五月廿五日印刷
明治四十四年五月三十日發行

（近世文藝叢書第五與附）

非賣品



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
早川純三郎

印刷者　東京市芝區櫻田和泉町七番地
高宗啓藏

印刷所　東京市芝區櫻田和泉町七番地
國書刊行會第二工場

發行所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02977 1706